

矢那川ダム埋蔵文化財調査報告書 2

— 木更津市久野遺跡 —

平成11年 3 月

千 葉 県 土 木 部

財団法人 千葉県文化財センター

矢那川ダム埋蔵文化財調査報告書 2

— 木更津市久野遺跡 —



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第366集として、千葉県土木部の矢那川ダム開発事業に伴って実施した木更津市久野遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代の石鏃製作跡や奈良・平安時代の寺院跡が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また教育資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成11年3月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 中村 好成

凡 例

- 1 本書は、千葉県による矢那川ダム建設に伴う埋蔵文化財の発掘報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県木更津市矢那ほかに所在する久野遺跡（遺跡コード206-007）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、第2章・第2節・2，第5節・7を調査室長 小林清隆が、第2章・第1節，第2節・2・3，第3章・第1節，第2節を技師 吉野健一が、第2章・第2節・3を主任技師 新田浩三が、それ以外の全てを主任技師 糸原 清が担当した。
- 6 発掘調査から報告書刊行に至るまで、下記の諸機関、諸氏から多くの御指導、御協力を頂いた。
千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県矢那川・片倉ダム建設事務所、木更津市教育委員会、
笹生 衛（敬称略）
- 7 本書で使用した地図は、下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行 1/50,000地形図「木更津・姉崎・富津・大多喜」

第2図 柏書房発行 明治期関東平野地誌図集成 1/2,5000地形図「上総横田」

第8図 木更津市役所発行 1/2,500都市計画図「39」

- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、全て座標北である。
- 10 本書で呼称した遺跡の名称、番号は編集の都合上、調査時の名称、番号と一部異なる。
- 11 本文中で使用した記号・スクリーントーンは、次のとおりである。

1. 住居跡，土坑，製鉄跡（S I・S K）

△ 炉内滓 * 鉄塊系遺物 □ 鉄製品 ・ 土器 ○ 礫 △ 黒曜石 * 瓦

2. 基壇建物跡（S B）

（1）鉄製品分布図

△ 鉄滓 ● 釘 ○ かすがい・平釘 * 金具・刀装具

（2）瓦分布図

□ 釘 △ 丸瓦 ● 平瓦 ○ 丸・平不明 △ 炉内滓 ● 羽口

（3）土器分布図

● 土師器杯 ○ 土師器甕 ■ 須恵器甕 □ 油煙土器 * 瓶類 ○ 仏具

3. スクリーントーン

 焼土  炭  酸化  還元

 黄白色砂質土  カマドの部分・粘土

この他のものについては、図中において例示してある。

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	調査の経緯と経過	1
2	調査の方法と概要	1
第2節	遺跡の位置と環境	4
第3節	層序区分	7
第2章	発見された遺構と遺物	14
第1節	旧石器時代	14
第2節	縄文時代	14
1	遺構	14
(1)	竪穴住居	14
(2)	土坑・集石土坑・炉穴・陥穴	15
2	遺物	48
(1)	遺構出土遺物	48
(2)	包含層出土の遺物	52
1)	縄文時代草創期の遺物	52
2)	縄文土器	53
3)	石器	105
3	礫群	146
(1)	分布状況	146
(2)	礫の被熱，破損状況	173
第3節	弥生時代	174
第4節	古墳時代	175
1	竪穴住居跡	175
2	グリッド出土遺物	175
第5節	奈良・平安時代	177
1	基壇建物跡・掘立柱建物跡	177
2	竪穴住居跡	208
3	竪穴状遺構	253
4	鍛冶関連遺構・焼土遺構	259
5	井戸・火葬墓・方形周溝状遺構・溝	276
6	土坑・炭窯	280
7	グリッド出土遺物	293
第3章	まとめ	304

第1節 旧石器時代	304
第2節 縄文時代	304
1 縄文時代草創期	304
2 縄文時代早期～中期	304
(1) 礫群・集石土坑の礫について	304
(2) 石器製作跡について	305
第3節 弥生時代・古墳時代	305
第4節 奈良・平安時代	305
1 遺構の年代と変遷	305
2 墨書土器	306
3 仏具・土器・陶器の出土状況	309
4 製鉄遺物の出土状況	313
5 瓦の出土状況	317
6 遺跡の性格	322
報告書抄録	巻末

挿 図 目 次

第1章 はじめに	第13図 S I - 55	15
第1図 遺跡位置図 (1)	第14図 III区縄文時代土坑群遺構配置図	16
第2図 遺跡位置図 (2)	第15図 III区縄文時代土坑 (1)	17
第3図 調査範囲図	第16図 III区縄文時代土坑 (2)	18
第4図 上層確認調査トレンチ配置図	第17図 III区縄文時代土坑 (3)	22
第5図 上層本調査年度図	第18図 IV区縄文時代土坑 (1)	26
第6図 下層確認調査グリッド配置図	第19図 IV区縄文時代土坑 (2)	28
第7図 基本土層柱状図	第20図 V区縄文時代土坑 (1)	30
第8図 全測図	第21図 V区縄文時代土坑 (2)	31
第9図 III区遺構配置図	第22図 VI区縄文時代土坑群遺構配置図	33
第10図 IV区遺構配置図	第23図 VI区縄文時代土坑 (1)	34
第11図 V区遺構配置図	第24図 VI区縄文時代土坑 (2)	36
	第25図 VI区縄文時代土坑 (3)	40
第2章	第26図 VI区縄文時代土坑 (4)	44
第1節 旧石器時代	第27図 VI区縄文時代土坑 (5)	46
第12図 旧石器時代出土石器	第28図 遺構出土縄文土器 (1)	49
	第29図 遺構出土縄文土器 (2)	50
第2節 縄文時代	第30図 遺構出土縄文土器 (3)	51

第31図	縄文時代草創期石器	52	78
第32図	第1群・第1類縄文土器(1)	55	79
第33図	第1群・第1類縄文土器(2)	57	81
第34図	第1群・第1類縄文土器(3)	58	82
第35図	第1群・第1類縄文土器(4)	59	83
第36図	第1群・第1類縄文土器(5)	60	85
第37図	第1群・第1, 2類縄文土器	61	85
第38図	第1群・第1類縄文土器分布図(I区)	63	85
第39図	第1群・第1類縄文土器分布図(III区)	63	86
第40図	第1群・第1類縄文土器分布図(IV区)	64	86
第41図	第1群・第1類縄文土器分布図(V区)	64	87
第42図	第1群・第1類縄文土器分布図(VI区)	65	89
第43図	第1群・第3類縄文土器(1)	66	89
第44図	第1群・第3類縄文土器(2)	67	89
第45図	第1群・第3類縄文土器分布図(III区)	68	91
第46図	第1群・第3類縄文土器分布図(IV区)	68	92
第47図	第1群・第3類縄文土器分布図(VI区)	69	94
第48図	第2群・第1類縄文土器(1)	70	95
第49図	第2群・第1類縄文土器(2)	71	95
第50図	第2群・第2類縄文土器(1)	73	97
第51図	第2群・第2類縄文土器(2)	74	98
第52図	第2群・第2類縄文土器(3)	76	99
第53図	第2群・第1, 2類縄文土器分布図(III区)	77	100
第54図	第2群・第1, 2類縄文土器分布図(IV区)	77	101
第55図	第2群・第1, 2類縄文土器分布図(V区)	78	103
第56図	第2群・第1, 2類縄文土器分布図(VI区)	78	104
第57図	第2群・第3類縄文土器(1)	79	104
第58図	第2群・第3類縄文土器(2)	81	105
第59図	第2群・第3類縄文土器(3)	82	107
第60図	第2群・第3類縄文土器(4)	83	107
第61図	第2群・第3類縄文土器分布図(III区)	85	107
第62図	第2群・第3類縄文土器分布図(IV区)	85	108
第63図	第2群・第3類縄文土器分布図(V区)	86	109
第64図	第2群・第3類縄文土器分布図(VI区)	86	110
第65図	第3群縄文土器(1)	87	
第66図	第3群縄文土器(2)	88	
第67図	第3群縄文土器分布図(IV区)	89	
第68図	第3群縄文土器分布図(VI区)	89	
第69図	第5群・第1, 2類縄文土器	91	
第70図	第5群・第2類縄文土器	92	
第71図	第5群・第1, 2, 3類縄文土器	94	
第72図	第4群, 第5群・第3類縄文土器	95	
第73図	第5群・第3類縄文土器	97	
第74図	第5群縄文土器分布図(I区)	98	
第75図	第5群縄文土器分布図(III区)	98	
第76図	第5群縄文土器分布図(IV区)	99	
第77図	第5群縄文土器分布図(V区)	100	
第78図	第6群・第1類縄文土器	101	
第79図	第6群・第2類, 第7群縄文土器	103	
第80図	第6群縄文土器分布図(III区)	104	
第81図	第6群縄文土器分布図(IV区)	104	
第82図	第6群縄文土器分布図(V区)	105	
第83図	I・II区出土石器	107	
第84図	II区出土石器	107	
第85図	III区出土石器(1)	107	
第86図	III区出土石器(2)	108	
第87図	IVaブロック出土石器(1)	109	
第88図	IVaブロック出土石器(2)	110	

第89図	IV a ブロック出土石器 (3)	111	第125図	I 区遺物出土状況	147
第90図	IV a ブロック出土石器 (4)	112	第126図	II 区礫グリッド別重量分布図	148
第91図	IV a ブロック出土石器 (5)	113	第127図	III 区礫グリッド別重量分布図	150
第92図	IV a ブロック出土石器 (6)	114	第128図	III 区西側遺物出土状況	151
第93図	IV a ブロック出土石器 (7)	115	第129図	III 区東側遺物出土状況	152
第94図	IV a ブロック出土石器 (8)	116	第130図	IV 区礫グリッド別重量分布図	154
第95図	IV a ブロック出土石器 (9)	117	第131図	IV 区南側遺物出土状況	155
第96図	IV a ブロック出土石器 (10)	118	第132図	IV 区北側遺物出土状況	156
第97図	IV a ブロック出土石器 (11)	119	第133図	IV 区東側遺物出土状況	158
第98図	IV a ブロック出土石器 (12)	120	第134図	IV a ブロック器種別分布図 (1)	159
第99図	IV a ブロック出土石器 (13)	121	第135図	IV a ブロック器種別分布図 (2)	160
第100図	IV a ブロック出土石器 (14)	122	第136図	IV g ブロック器種別分布図	161
第101図	IV a ブロック出土石器 (15)	123	第137図	IV a ブロック石鏃・石鏃未製品分布図	162
第102図	IV a ブロック出土石器 (16)	124	第138図	IV a ・IV g ブロック三角形素材剥片 分布図	162
第103図	IV a ブロック出土石器 (17)	125	第139図	IV a ・IV g ブロック二次加工のある 剥片・剥片・石核分布図	163
第104図	IV a ブロック出土石器 (18)	126	第140図	IV a ・IV g ブロック碎片分布図	163
第105図	IV a ブロック出土石器 (19)	127	第141図	V 区礫グリッド別重量分布図	164
第106図	IV a ブロック出土石器 (20)	128	第142図	V 区遺物出土状況	165
第107図	IV a ブロック出土石器 (21)	129	第143図	V 区南側遺物出土状況	166
第108図	IV a ブロック出土石器 (22)	130	第144図	V 区北側遺物出土状況	167
第109図	IV a ブロック出土石器 (23)	131	第145図	VI 区礫グリッド別重量分布図	168
第110図	IV a ブロック出土石器 (24)	132	第146図	VI 区遺物出土状況	171
第111図	IV b ・IV d ・IV e ブロック ・単独出土石器	133	第147図	VI 区黒曜石器種別分布図	172
第112図	IV g ブロック出土石器	134	第 3 節	弥生時代	
第113図	IV b ブロック・単独出土石器	135	第148図	弥生土器	174
第114図	V 区出土石器 (1)	136	第 4 節	古墳時代	
第115図	V 区出土石器 (2)	137	第149図	S I -14 遺構図・出土遺物	176
第116図	V 区出土石器 (3)	138	第150図	古墳時代前期グリッド出土遺物	177
第117図	VI 区出土石器 (1)	139	第 5 節	奈良・平安時代	
第118図	VI 区出土石器 (2)	140	第151図	II 区基壇建物跡群周辺地形測量図	178
第119図	VI 区出土石器 (3)	141	第152図	S B - 1 遺構図	179
第120図	VI 区出土石器 (4)	142			
第121図	VI 区出土石器 (5)	143			
第122図	礫石斧の分布	145			
第123図	礫の分布	146			
第124図	I 区グリッド別礫重量分布図	147			

第153図	S B - 1・3・4 出土遺物	180	第189図	S I - 23遺構図・出土遺物(1)	220
第154図	S B - 2 遺構図	181	第190図	S I - 23出土遺物(2)	221
第155図	S B - 2 瓦出土分布図(1)	182	第191図	S I - 34遺構図・出土遺物	222
第156図	S B - 2 瓦出土分布図(2)	183	第192図	S I - 42遺構図・出土遺物	224
第157図	S B - 2 出土遺物(1)	184	第193図	S I - 43遺構図・出土遺物	225
第158図	S B - 2 出土遺物(2)	185	第194図	S I - 45遺構図・出土遺物	227
第159図	S B - 2 出土瓦(1)	186	第195図	S I - 46遺構図・出土遺物	228
第160図	S B - 2 出土瓦(2)	187	第196図	S I - 48遺構図	229
第161図	S B - 2 出土瓦(3)	188	第197図	S I - 48出土遺物(1)	231
第162図	S B - 2 出土瓦(4)	189	第198図	S I - 48出土遺物(2)	232
第163図	S B - 2 出土瓦(5)	190	第199図	S I - 49遺構図	233
第164図	S B - 3 遺構図	191	第200図	S I - 50遺構図・出土遺物	234
第165図	S B - 4 遺構図	193	第201図	S I - 52遺構図・出土遺物	235
第166図	I 5 - 14・15瓦出土集中地点出土瓦	194	第202図	S I - 54遺構図・出土遺物	236
第167図	II区グリッド出土瓦	195	第203図	S I - 57遺構図・出土遺物	238
第168図	S B - 6 a・S B - 6 b 遺構図	196	第204図	S I - 17遺構図	239
第169図	S B - 6 c 遺構図	197	第205図	S I - 17出土遺物	240
第170図	S B - 6 出土遺物	198	第206図	S I - 33遺構図・出土遺物	241
第171図	S I - 51遺構図	199	第207図	S I - 35遺構図・出土遺物	243
第172図	S B - 5 a 遺構図	200	第208図	S I - 37遺構図・出土遺物	244
第173図	S B - 5 c・S B 5 d 遺構図	201	第209図	S I - 16遺構図・出土遺物	244
第174図	S B - 5 d・S B - 5 e ・S D - 5 遺構図	202	第210図	S I - 22遺構図・出土遺物	245
第175図	S B - 5 出土遺物	203	第211図	S I - 24遺構図	247
第176図	S I - 25遺構図	205	第212図	S I - 24出土遺物	248
第177図	S I - 25出土遺物	206	第213図	S I - 26遺構図・出土遺物	249
第178図	S X - 2 遺物出土状況図	206	第214図	S I - 28遺構図・出土遺物	250
第179図	S X - 2 出土瓦(1)	206	第215図	S I - 31遺構図・出土遺物	251
第180図	S X - 2 出土瓦(2)	207	第216図	S I - 32遺構図	252
第181図	S I - 1 遺構図・出土遺物	208	第217図	S I - 9 遺構図・出土遺物	253
第182図	S I - 2 遺構図・出土遺物	209	第218図	S I - 41・S I - 44遺構図	254
第183図	S I - 3 遺構図・出土遺物	211	第219図	S I - 7 遺構図・出土遺物	255
第184図	S I - 4 遺構図・出土遺物	213	第220図	S I - 10遺構図・出土遺物	255
第185図	S I - 5 遺構図	214	第221図	S I - 18遺構図・出土遺物	256
第186図	S I - 5 出土遺物	215	第222図	S I - 19遺構図・出土遺物	257
第187図	S I - 6 遺構図・出土遺物	217	第223図	S I - 36遺構図・出土遺物	257
第188図	S I - 15遺構図・出土遺物	218	第224図	O 6 - 66・67 竪穴状遺構遺構図	258
			第225図	S I - 30遺構図・出土遺物	259

第226図	S X - 4 遺物出土状況図・出土遺物	260	第256図	II区グリッド出土奈良・平安時代 出土遺物(2)	296
第227図	S I - 38遺構図・出土遺物	260	第257図	III区グリッド出土奈良・平安時代 出土遺物(1)	297
第228図	S I - 39遺構図・出土遺物	261	第258図	III区グリッド出土奈良・平安時代 出土遺物(2)	299
第229図	S I - 40遺構図・出土遺物	262	第259図	III区グリッド出土奈良・平安時代 出土遺物(3)	300
第230図	S I - 47遺構図・出土遺物	264	第260図	IV区グリッド出土奈良・平安時代 出土遺物	301
第231図	S I - 53遺構図・出土遺物	265	第261図	V区グリッド出土奈良・平安時代 出土遺物	302
第232図	III区焼土遺構遺構図・出土遺物	265	第262図	遺跡一括奈良・平安時代 出土遺物	303
第233図	S K - 166遺構図	266	第263図	I区奈良・平安時代 器種別土器分布図	307
第234図	S K - 166出土遺物	267	第264図	II区奈良・平安時代 器種別土器分布図	308
第235図	S I - 12遺構図(1)	270	第265図	III区奈良・平安時代 器種別土器分布図	310
第236図	S I - 12遺構図(2)・出土遺物	271	第266図	IV区奈良・平安時代 器種別土器分布図	311
第237図	S I - 12鉄滓重量分布図	272	第267図	V区奈良・平安時代 器種別土器分布図	312
第238図	S I - 13遺構図・出土遺物	274	第268図	VI区奈良・平安時代 器種別土器分布図	313
第239図	S I - 12・S I - 13鉄滓重量分布図	275	第269図	I・II区鉄滓重量分布図	314
第240図	S I - 56遺構図	276	第270図	III・IV区鉄滓重量分布図	315
第241図	S D - 1遺構図	277	第271図	V区鉄滓重量分布図	316
第242図	S D - 3遺構図	278	第272図	瓦重量分布図	317
第243図	S C - 1・S K - 41遺構図	279	第273図	瓦出土グリッド図	318
第244図	S Z - 1遺構図・出土遺物	279	第274図	鉄滓重量分布図	318
第245図	S E - 1遺構図	280	第275図	III区器種別土器分布図(1)	319
第246図	S C - 2遺構図	280	第276図	III区器種別土器分布図(2)	320
第247図	III区奈良・平安時代土坑遺構図	282	第277図	III区鉄滓・羽口 ・鉄製品分布図	321
第248図	III区奈良・平安時代土坑出土遺物	283			
第249図	IV区奈良・平安時代 土坑遺構図(1)	285			
第250図	IV区奈良・平安時代 土坑遺構図(2)	288			
第251図	IV区奈良・平安時代 土坑出土遺物	289			
第252図	V区奈良・平安時代土坑遺構図	291			
第253図	V区奈良・平安時代 土坑出土遺物	292			
第254図	I区グリッド出土奈良・平安時代 出土遺物	293			
第255図	II区グリッド出土奈良・平安時代 出土遺物(1)	294			

表 目 次

第1表 縄文時代石器属性表 ……133・135・136・138	第10表 III区縄文時代礫属性表 ……149・152・153
第2表 I区縄文時代石器組成表 ……144	第11表 IV区縄文時代礫属性表 ……155・156・157・158
第3表 II区縄文時代石器属性表 ……144	第12表 V区縄文時代礫属性表 ……166・167・168・169
第4表 III区縄文時代石器属性表 ……144	第13表 VI区縄文時代礫属性表 ……170・171
第5表 IV区縄文時代石器属性表 ……144	第14表 S I - 52鉄滓集計表 ……235
第6表 V区縄文時代石器属性表 ……144	第15表 S I - 40鉄滓集計表 ……262
第7表 VI区縄文時代石器組属性表 ……144	第16表 S K - 166鉄滓集計表 ……268
第8表 I区縄文時代礫属性表 ……149	第17表 S I - 12鉄滓集計表 ……272・273
第9表 II区縄文時代礫属性表 ……149	第18表 瓦集計表 ……318

図 版 目 次

図版1 遺跡航空写真 (昭和42年撮影、約1/10,000)	10. S K - 221, 222, 223
図版2 1～3. 遺跡調査前 (II区基壇状高まり)	図版6 III区縄文時代土坑(3)
4. R 8 - 10土層断面	1. S K - 224, 225
6. I・II区全景(東から)	2. S K - 226, 227, 228
図版3 1. V区全景(南から)	3. S K - 232 4. S K - 233
2・3. S I - 55炉・全景	IV区縄文時代土坑(1)
4～6. S I - 55埋甕検出状況	5. S K - 87 6. S K - 88
図版4 III区縄文時代土坑(1)	7. S K - 90 8. S K - 142
1. S K - 183 2. S K - 186	9・10. S K - 143
3・4. S K - 190	図版7 IV区縄文時代土坑(2)
5・6. S K - 191	1・2. S K - 156
7. S K - 193 8. S K - 199	3. S K - 158 4. S K - 163
9. S K - 200 10. S K - 206	5. S K - 164 S K - 170
図版5 III区縄文時代土坑(2)	7・8. S K - 241
1. S K - 210 2. S K - 211	V区縄文時代土坑(1)
3. S K - 212 4. S K - 213	9・10. S K - 91
5・6. S K - 216	図版8 V区縄文時代土坑(2)
7. S K - 217 8. S K - 219	1. S K - 89 2. S K - 110
9. S K - 220, 231	3. S K - 111 4. S I - 21
	VI区縄文時代土坑(1)
	5. S K - 1 6. S K - 2

- 7・8. SK-3
9. SK-6 10. SK-7
- 図版9 VI区縄文時代土坑(2)
1. SK-9, 10 2. SK-13
3. SK-15, 16 4. SK-19
5. SK-21 6. SK-22
7. SK-25 8. SK-29
9. SK-9 10. SK-10
- 図版10 VI区縄文時代土坑(3)
1. SK-38 2. SK-39
3. SK-49 4. SK-50
5. SK-52 6. SK-53
7. SK-57 8. SK-59
9. SK-63 10. SK-80
- 図版11 1. Icブロック
2. Iaブロック
3. III区縄文時代土坑群
(J6-22周辺)
4. IVbブロック(西から)
- 図版12 1. IVcブロック 2. IVbブロック
3. IVeブロック 4. IVdブロック
5. IVfブロック 6. IVeブロック
- 図版13 VI区礫群
1・2. Vfブロック
3・4. U7グリッド礫群検出状況
5・6. W7グリッド礫群検出状況
- 図版14 1. SI-14 2. II区全景
3. I4-14・15瓦出土集中地点
4. SB-1・2 5. II区全景
- 図版15 1・2. SB1
3~7. SB-2
- 図版16 1~3. SB-3
4・5. SB-4
6. IV区全景
7. IV区遺物出土状況
- 図版17 1~3. SB-6a
4・5. SB-6b
6. SB-6c
- 図版18 1. SI-51 2. SI-51(P6)
3. SI-51(P7)
4~9. SB-5a
8. SB-5a(P4)
9. SB-5a(P8)
- 図版19 1. SB-5c・d
2. SI-21 3. SX-2
4. SD-3
- 図版20 I区奈良・平安時代住居跡(1)
1~3. SI-1 4・5. SI-2
6~8. SI-3
- 図版21 I区奈良・平安時代住居跡(2)
1・2. SI-4 3~5. SI-5
6・7. SI-6
- 図版22 I区奈良・平安時代住居跡(3)
1~3. SI-15 4~6. SI-23
III区奈良・平安時代住居跡(1)
7~9. SI-34
- 図版23 III区奈良・平安時代住居跡(2)
1~3. SI-42 4. SI-43
5~7. SI-45
- 図版24 III区奈良・平安時代住居跡(3)
1~3. SI-46 4~6. SI-48
7. SI-49
- 図版25 III区奈良・平安時代住居跡(4)
1~3. SI-50 4~6. SI-52
7~9. SI-54
- 図版26 III区奈良・平安時代住居跡(5)
1・2. SI-57
IV区奈良・平安時代住居跡(1)
3~5. SI-17 6・7. SI-33
- 図版27 IV区奈良・平安時代住居跡(2)
1~3. SI-35 4・5. SI-37
6・7. SI-16
- 図版28 V区奈良・平安時代住居跡(1)
1・2. SI-22 3~5. SI-24

6. S I - 26
- 図版29 V区奈良・平安時代住居跡(2)
1. S I - 28 2~4. S I - 31
5・6. S I - 32
- 図版30 I・III区奈良・平安時代竪穴状遺構
1. S I - 9 2. S I - 41
3. S I - 44
IV区奈良・平安時代竪穴状遺構(1)
4. S I - 7
- 図版31 IV区奈良・平安時代竪穴状遺構(2)
1. S I - 10 2. S I - 18
3. S I - 36 4・5. S I - 30
- 図版32 III区奈良・平安時代鍛冶関連遺構(1)
1・2. S I - 38 3・4. S I - 39
5. S I - 40 6~8. S I - 47
- 図版33 III区奈良・平安時代鍛冶関連遺構(2)
1・2. S I - 53 3~5. S K - 162
6・7. S K - 166 8・9. S K - 166
- 図版34 V区奈良・平安時代鍛冶関連遺構
1. S I - 12 2. S I - 12炉1
3. S I - 12炉2 4~6. S I - 12
7. S I - 13
- 図版35 VI区奈良・平安時代遺構
1. S I - 56 2. S Z - 1
3. S K - 41 4. S E - 1
III区奈良・平安時代土坑(1)
5. S K - 148 6. S K - 150
7. S K - 152 8. S K - 159
9. S K - 160 10. S K - 161
- 図版36 III区奈良・平安時代土坑(2)
1. S K - 168 2. S K - 172
3. S K - 174 4. S K - 175
5. S K - 177 6. S K - 178
7. S K - 180 8. S K - 181
9・10. S K - 182
- 図版37 III区奈良・平安時代土坑(3)
1. S K - 185 2. S K - 189
3. S K - 195 4. S K - 196
5. S K - 203 6. S K - 218
7・8. S K - 242
IV区奈良・平安時代土坑(1)
9. S K - 74 10. S K - 76
- 図版38 IV区奈良・平安時代土坑(2)
1. S K - 78 2. S K - 79
3. S K - 84 4. S K - 85
5. S K - 86 6. S K - 131
7. S K - 134 8. S K - 135
9. S K - 136, 137 10. S K - 141
- 図版39 IV区奈良・平安時代土坑(3)
1. S K - 145 2. S K - 153
3. S K - 154 4. S K - 155
5. S K - 156 6. S K - 167
V区奈良・平安時代土坑(1)
7. S K - 123 8. S K - 125
9. S K - 129 10. S K - 140
- 図版40 縄文土器(1)
- 図版41 縄文土器(2)
- 図版42 縄文土器(3)
- 図版43 縄文土器(4)
- 図版44 縄文土器(5)
- 図版45 縄文土器(6)
- 図版46 縄文土器(7)
- 図版47 縄文土器(8)
- 図版48 縄文土器(9)
- 図版49 縄文土器(10)
- 図版50 縄文土器(11)
- 図版51 縄文土器(12)
- 図版52 縄文土器(13)
- 図版53 縄文土器(14)
- 図版54 縄文土器(15)
- 図版55 縄文土器(16)
- 図版56 縄文土器(17)
- 図版57 縄文土器(18)
- 図版58 縄文土器(19)

- 図版59 縄文土器 (20) 出土土器
 図版60 縄文土器 (21) 図版82 S I - 34, S I - 35, S I - 37, S I - 38
 図版61 縄文土器 (22) S I - 42, S I - 45, S I - 46, S I - 48
 図版62 縄文土器 (23) 出土土器
 図版63 縄文土器 (24) 図版83 S I - 48, S I - 50, S I - 52, S I - 54
 図版64 旧石器時代・縄文時代石器 (1) S I - 57出土土器
 図版65 縄文時代石器 (2) 図版84 墨書・線刻土器
 図版66 縄文時代石器 (3) 図版85 S B - 1 ~ S B - 6, S Z - 1, S K - 74
 図版67 縄文時代石器 (4) S K - 84, S K - 123出土土器
 図版68 縄文時代石器 (5) 図版86 S K - 123, S K - 166, S K - 172
 図版69 縄文時代石器 (6) S K - 242, グリッド出土土器 (1)
 図版70 縄文時代石器 (7) 図版87 グリッド出土土器 (2)
 図版71 縄文時代石器 (8) 図版88 グリッド出土土器 (3)
 図版72 縄文時代石器 (9) 図版89 グリッド出土遺物 (4)
 図版73 縄文時代石器 (10) 図版90 S B - 2 出土瓦 (1)
 図版74 縄文時代石器 (11)・礫 図版91 S B - 2 出土瓦 (2)
 図版75 縄文時代石器 (12) 図版92 S B - 2 出土瓦 (3)・S B - 1, II区出土
 図版76 縄文時代遺構出土土器 (1) 瓦 (1)
 図版77 縄文時代遺構出土土器 (2) 図版93 II区出土瓦 (2)・S X - 2 出土瓦
 図版78 縄文土器・弥生土器・古墳時代土師器 図版94 鉄製品 (1): S B - 2
 図版79 S I - 1 ~ S I - 5 出土土器 図版95 鉄製品 (2)・銭貨
 図版80 S I - 6, S I - 9, S I - 14 ~ S I - 19 図版96 鉄製品 (3)
 S I - 22出土土器 図版97 羽口
 図版81 S I - 23 ~ S I - 25, S I - 28 図版98 鉄製品・鉄滓
 S I - 30, S I - 31, S I - 33, S I - 34 図版99 S X - 2 出土瓦・自然遺物

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

千葉県は、上総アカデミアパークの開発に伴い、矢那川の流水の正常な機能を維持することを目的に、矢那川ダムの建設を計画した。事業地内の埋蔵文化財の取扱いについては関係諸機関の間で協議が重ねられた結果、止むを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、平成6年10月から財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施する事となった。

発掘調査は平成6年10月から平成7年10月まで行った。久野遺跡の対象面積86,100㎡について、平成6年度に上層確認調査8,610㎡を実施した。下層については、上層遺構が集中する地区20,000㎡を除く66,100㎡について確認調査1,320㎡を実施した。また、平成6年度には事業地区の東端の上層本調査9,800㎡を併せて実施した。平成7年度は事業地区の中央部分の上層本調査16,500㎡を実施した。なお、事業地区の西側の上層遺構が集中する20,000㎡については、関係諸機関と協議した結果、当面の間現状保存されることとなった。

発掘調査の担当者と実施期間は、以下のとおりである。

平成6年度 調査研究部長 西山太郎 市原調査事務所長 石田廣美

研究員 土屋治雄，主任技師 大谷弘幸，主任技師 神野 信，技師 城田義友

平成6年10月1日～平成7年3月31日

平成7年度 調査研究部長 西山太郎 市原調査事務所長 森 尚登

主任技師 神野 信，技師 半澤幹雄，技師 吉野健一

平成7年4月1日～平成7年10月31日

整理作業の担当者と実施期間は、以下のとおりである。

平成8年度 調査研究部長 西山太郎 南部調査事務所長 高田 博

技師 糸原 清

平成8年4月1日～平成9年3月31日

平成9年度 調査部長 西山太郎 南部調査事務所長 高田 博

研究員 土屋治雄 主任技師 新田浩三 技師 糸原 清

平成9年4月1日～平成10年3月31日

平成10年度 調査部長 沼澤 豊 南部調査事務所長 高田 博

木更津調査室長 小林清隆 主任技師 糸原 清 技師 吉野健一

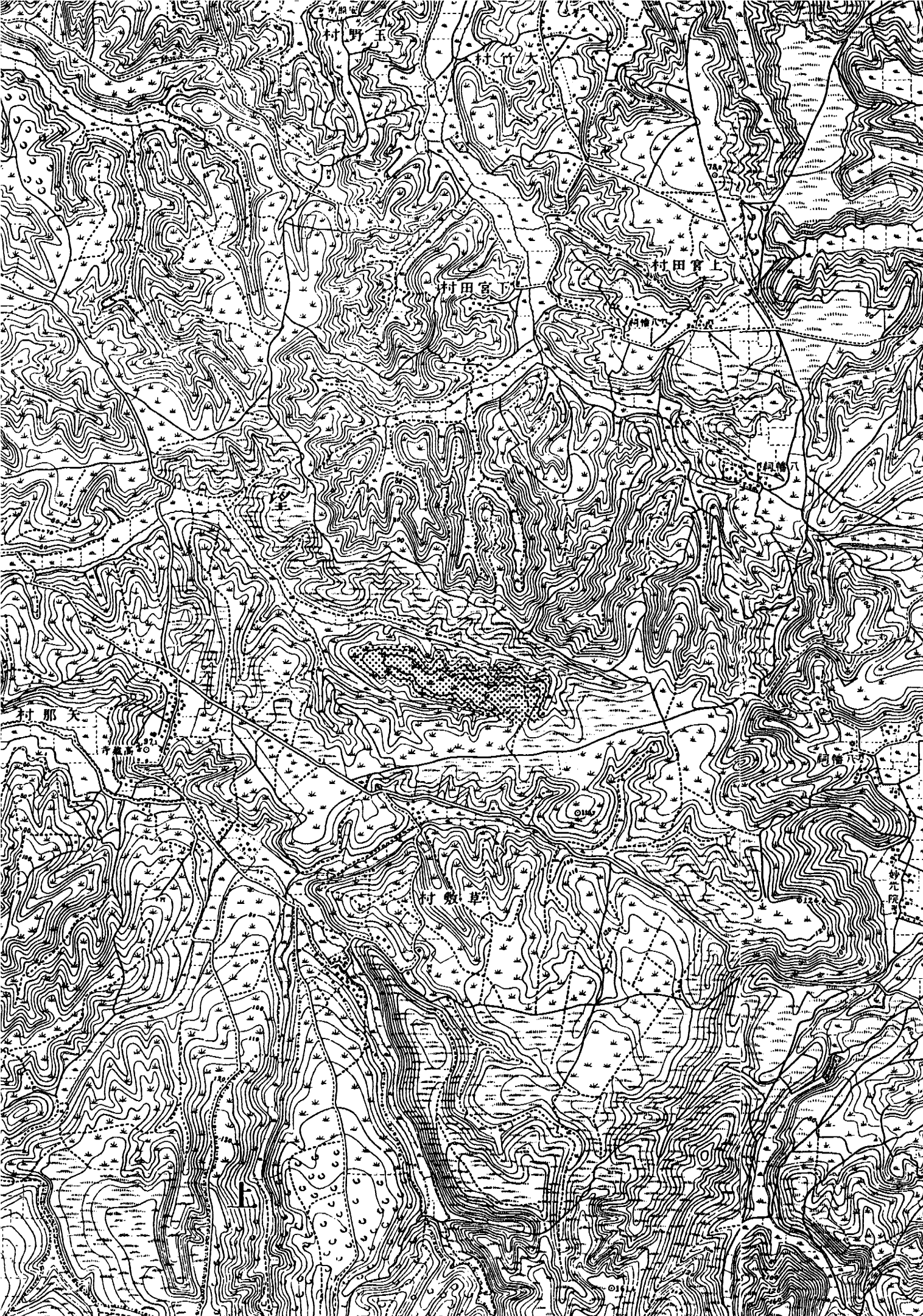
平成10年4月1日～平成10年9月30日

2 調査の方法と概要（第3図～第11図）

発掘区の設定は、国土地理院国家座標を基準とし、40m×40mの方眼の大グリッドを東西 区画，南北 区画設定し，西から東に向かってA・B・C…T・U・W，北から南に向かって1・2・3…とし，A



第1区 遺跡位置図 (1)



第2図 遺跡位置図(2)

1, B 2 と呼称した。さらに大グリッド内を 4 m 方眼の小グリッドに分割し、西から東へ 00・01・02・・・とし、北から南へ 00・10・20・・・とした。したがって、各々の小グリッドは A 1-00 K 5-64 となる。また、小グリッドをさらに 4 分割し、2 m 方眼の小グリッドとした。グリッドは北東を a, 南東を b, 南西を c, 北西を d と呼称し、G 3-55a と表記した。

また本文中では、遺跡全体が東西に細長いことや、各地点により調査の工程、方法などが異なっていたことや、分布する遺構の時代や性格、分布状況の疎密に差が見られることから、便宜的に遺跡を I 区～VI 区の 6 区画に分けて記述することにする。そのため、遺構の事実記載については、「II 区 H 5-65」というように、区名とグリッド名を併記している。

遺構番号は、遺構の種類ごとに記号を用い、基壇建物跡を S B, 炭窯を S C, 溝状遺構を S D, 井戸を S E, 住居跡を S I, 土坑・集石土坑・炉穴・陥穴・炭窯を S K, 墓跡を S Z, これら以外の遺構を S X とし、それぞれについて検出された順に S I-1, S I-2・・・というように付した。また整理作業の結果から、発掘調査時とは遺構の評価が異なってしまったものも存在するが、これらについても調査時の記号のまま掲載した。

上層の確認調査は座標系を使用し、等高線と直交するように南北及び東西に幅 2 m のトレンチを設置し、実施した。その結果、I 区からは、小規模な縄文時代早期の礫群と平安時代の竪穴住居跡が 10 軒検出され、遺構を検出したトレンチを拡張して遺構の調査を行った。II 区からは、基壇建物跡 4 基、溝状遺構、竪穴住居跡、土坑が多数検出された。遺構が集中することから保存区域とし、4 基の基壇建物跡についてのみ、トレンチによる確認調査を行った。III 区、IV 区、V 区については、一部の区域を除きほぼ全面本調査とし、重機により表土を除去して調査を行った。III 区からは、縄文時代早期の礫群を伴う土坑群、平安時代の基壇建物跡、製鉄遺構、竪穴住居跡などが検出されている。IV 区は、縄文時代早期・前期の礫群が広範囲に展開するとともに、縄文時代中期の竪穴住居跡、平安時代の基壇建物跡、竪穴住居跡などが分布している。III・IV 区で検出された基壇建物跡は重複が見られ、比較的長期間営まれていたと考えられる。V 区は、III 区・IV 区と比較して、遺構の分布は薄く、縄文時代早期・前期の礫群、平安時代の基壇建物跡、竪穴住居跡、製鉄遺構が検出されている。VI 区は、調査区の西端に縄文時代早期の礫群、土坑群が集中して検出されたが、それ以外の区域には遺構が見られなかったことから、西端の区画についてのみ本調査を行った。

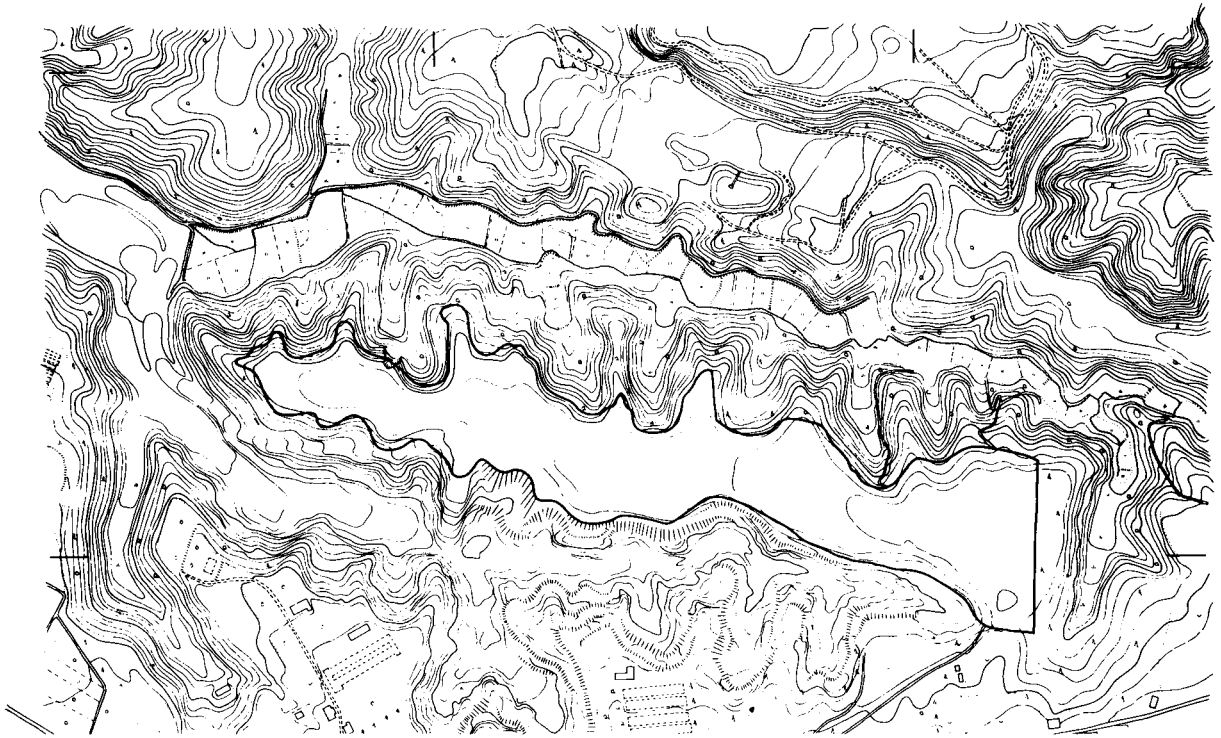
下層の確認調査は 2 m × 2 m グリッドを 4 % 設定し、基本的に X I 層上面まで掘り下げ、遺構・遺物の検出を行った。

遺物の取上げについては、遺構に伴って出土したものは遺構内の通し番号で、包含層の遺物についてはグリッド内の通し番号で取り上げた。また、製鉄遺構の土サンプルは遺構ごとに小グリッドを使用し取上げを行った。

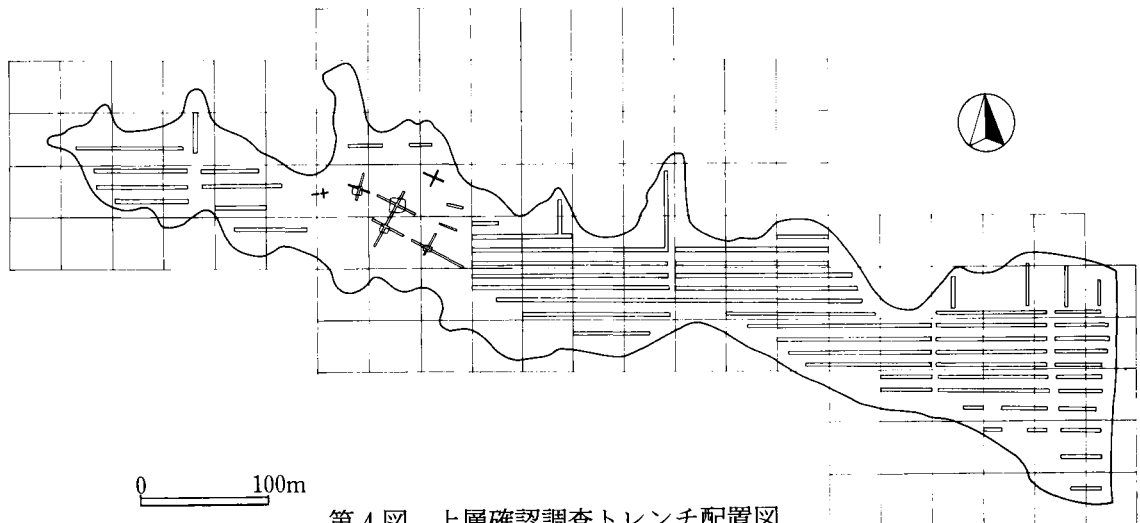
第 2 節 遺跡の位置と環境 (第 1 図, 第 2 図)

千葉県南西部に位置する木更津市は、房総丘陵と東京湾に流入する小櫃川の両岸に広がる沖積平野からなる。久野遺跡(1)は木更津市の南東に位置し、北側の袖ヶ浦市と南側の君津市と接している。地形的には東京湾に流入する矢那川最上流北岸の丘陵上に位置している。

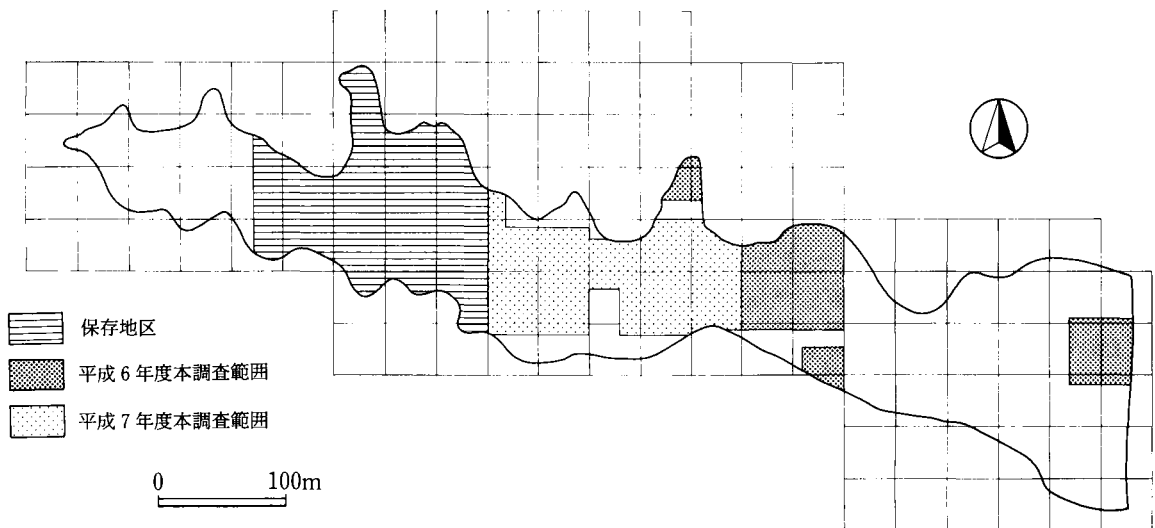
周辺の矢那川上流域では縄文時代早期の遺跡が点々と所在するのみであるが、矢那川中流域では旧石器時代から縄文時代中期、弥生時代後期から古墳時代前期、古墳時代後期、奈良・平安時代の集落遺跡など多



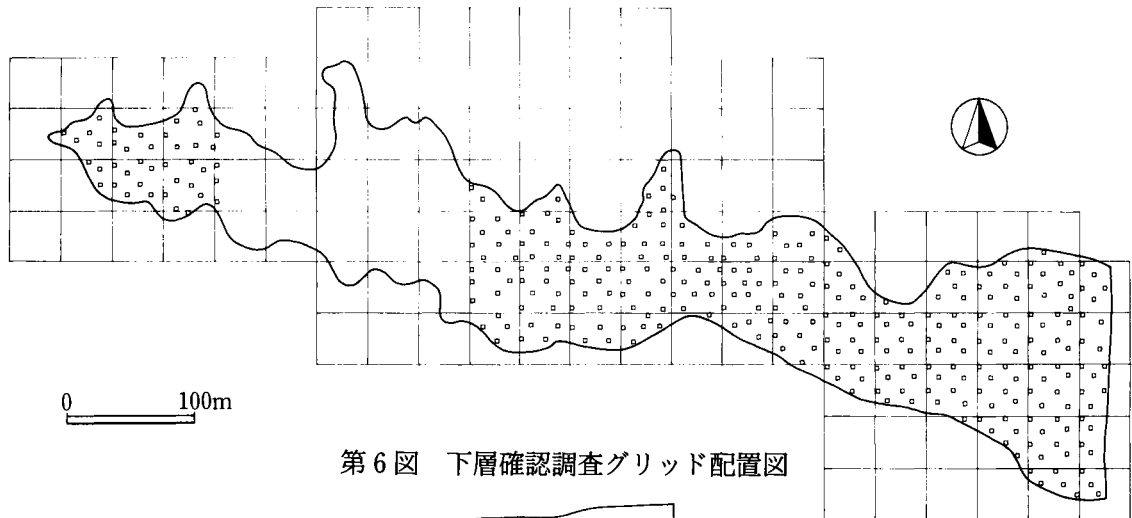
第3図 調査範囲図 (1/8,000)



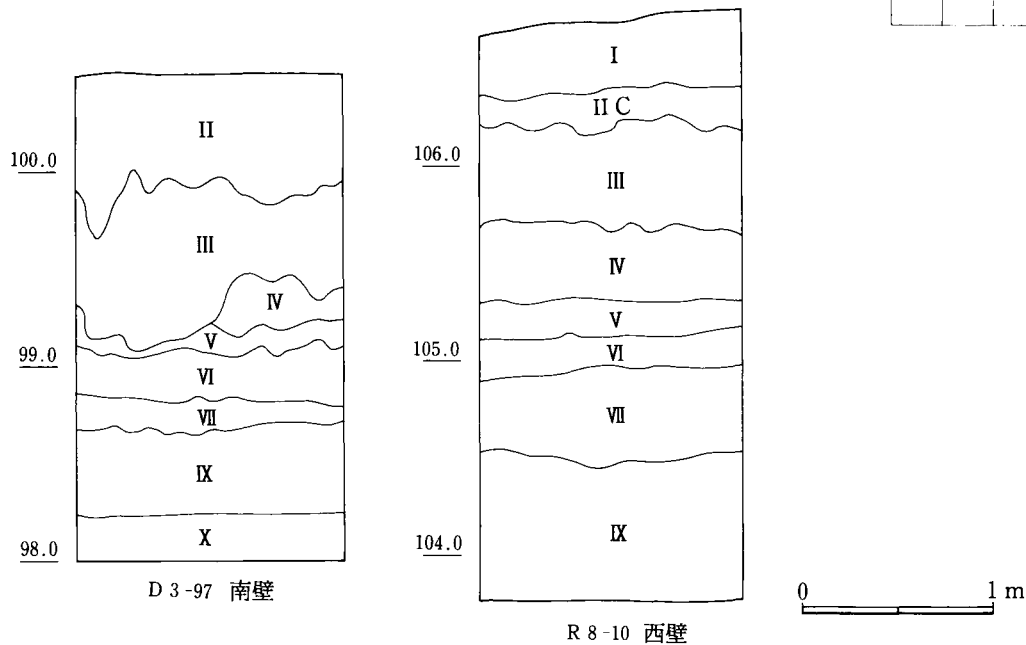
第4図 上層確認調査トレンチ配置図



第5図 上層本調査年度図



第6図 下層確認調査グリッド配置図



第7図 基本土層柱状図

数分布している¹⁾。

旧石器時代の遺跡としては、金二矢台遺跡(23)²⁾³⁾でVII層～IX層とIV層下部のブロック、蓮華寺遺跡(20)⁴⁾でIII層のブロックが発見され、矢那川下流から中流の台地端部で比較的多く発見されている。また、矢那川中流の段丘面の二重山遺跡(2)⁵⁾からもV層～VI層段階のブロックが発見され、台地から段丘面を含めた広範囲な遺跡分布が窺える。

縄文時代では縄文時代早期及び縄文時代中期後半～後期前半の集落を中心に密に分布している。矢那川と小糸川・田高川の分水界など丘陵頂部に位置する上ノ山A(6)・B遺跡(5)⁶⁾、台木A(14)・B遺跡(13)⁷⁾⁸⁾など早期の遺跡が点々と分布する。一方、中流域の丘陵先端部の伊豆山台遺跡(19)⁹⁾、明石口遺跡(22)などでは中期の集落跡が発見されている。

弥生時代以降のものでは、大畑台遺跡(24)¹⁰⁾の弥生時代後期から奈良・平安時代の集落、天神前遺跡¹¹⁾の弥生時代後期から古墳時代前期の集落、蓮華寺遺跡(20)¹²⁾の古墳時代前期の集落、古墳時代後期から奈良・平安時代の花山遺跡(18)¹³⁾など、矢那川下流から中流域の台地で多くの集落が発見されている。さらに上

名主ヶ谷窯跡群 (17)¹⁴⁾や露岬窯跡 (16)、高島窯跡 (12)、沼田窯跡 (9) などの須恵器窯や瓦窯、山ノ下製鉄遺跡¹⁵⁾や上ノ山A遺跡 (6)⁶⁾、二重山遺跡 (2)⁵⁾などの製鉄関連遺跡など多くの生産遺跡が中流域から上流域にかけて密に分布している¹⁶⁾¹⁷⁾。

その他に、久野遺跡から検出された遺構と関連するものとして小谷遺跡¹⁸⁾で寺院跡が、大畑遺跡 (24)、金二矢台遺跡 (23) などで石櫃火葬墓が発見されている。

それに対し、下流北岸の太田山丘陵は市街地化しているため現存する古墳は少ないものの、5世紀前半の前方後方墳の鳥越古墳と前方後円墳の太田山古墳が所在する。下流南岸の請西地区は古墳分布が濃密で、弥生時代後期から8世紀にかけての墓域が連綿と発見されている。その中には全長80mの大型前方後円墳の鹿島塚古墳も含まれている。一方中・上流地域では、上流に向かって希薄になるものの、点々と小規模な円墳を中心とした古墳群の分布がみられ、久野遺跡の南西の草敷地区にも出台・下草敷谷古墳群がある。また、製鉄遺跡については、鎌倉大仏鑄造伝説をもつ大野五郎右衛門遺跡があり、古代から中・近世にかけて製鉄が盛んであった地域である。

第3節 層序区分

関東ローム層の分層は、(島立ほか1992) に提示された基準に従った¹⁹⁾。

- I層 表土層 腐植土層。II a層との区分が難しいため、これを含めている。
- II b層 暗黄褐色土層 粒度は細かいが、しまりが甘い。いわゆる「新期テフラ層」と考えられる。上面は、植物の根などの作用により攪乱されている。II b層上面で、古墳時代以降の遺構が検出された。
- II c層 暗褐色土層 径5cm~10cmの暗黄褐色土斑文が多く見られる。粒土は細かく、しまっている。II b層、II c層をあわせると、層厚は50cm~60cmに及ぶ。II c層上面からIII層上面で、縄文時代の遺構は検出された。
- III層 暗黄褐色土層 いわゆるソフトローム層。風化が進行している。層厚は50cm~80cmに及ぶ。
- IV層 橙黄褐色土層 いわゆるハードローム層の上層部である。赤色スコリア、黒灰色スコリアを含む。
- V層 暗褐色土層 立川ローム第1黒色帯である。赤色スコリア、黒灰色粒子、白色スコリアを含む。
- VI層 明黄褐色土層 始良・Tn火山灰を含む層である。赤色スコリア、黒灰色スコリア、白色スコリアを含む。
- VII層 暗黄褐色土層 VI層よりやや暗い。第2黒色帯の上部層である。黒灰色スコリアを多く含む。
- IX層 暗褐色土層 第2黒色帯の下部層である。
- X層 暗黄褐色土層 立川ローム最下部層である。

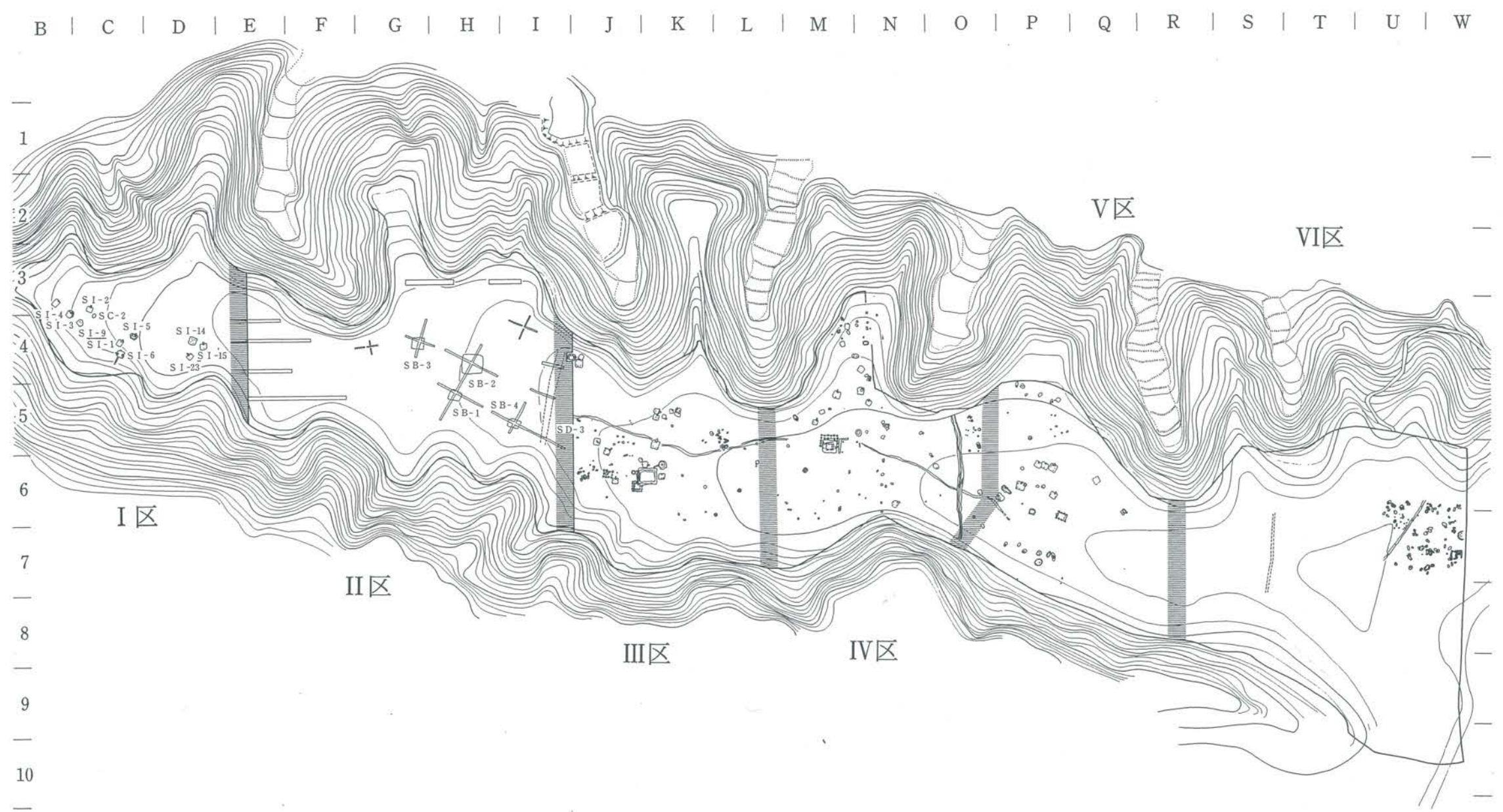
これ以下の地層については省略する。

注

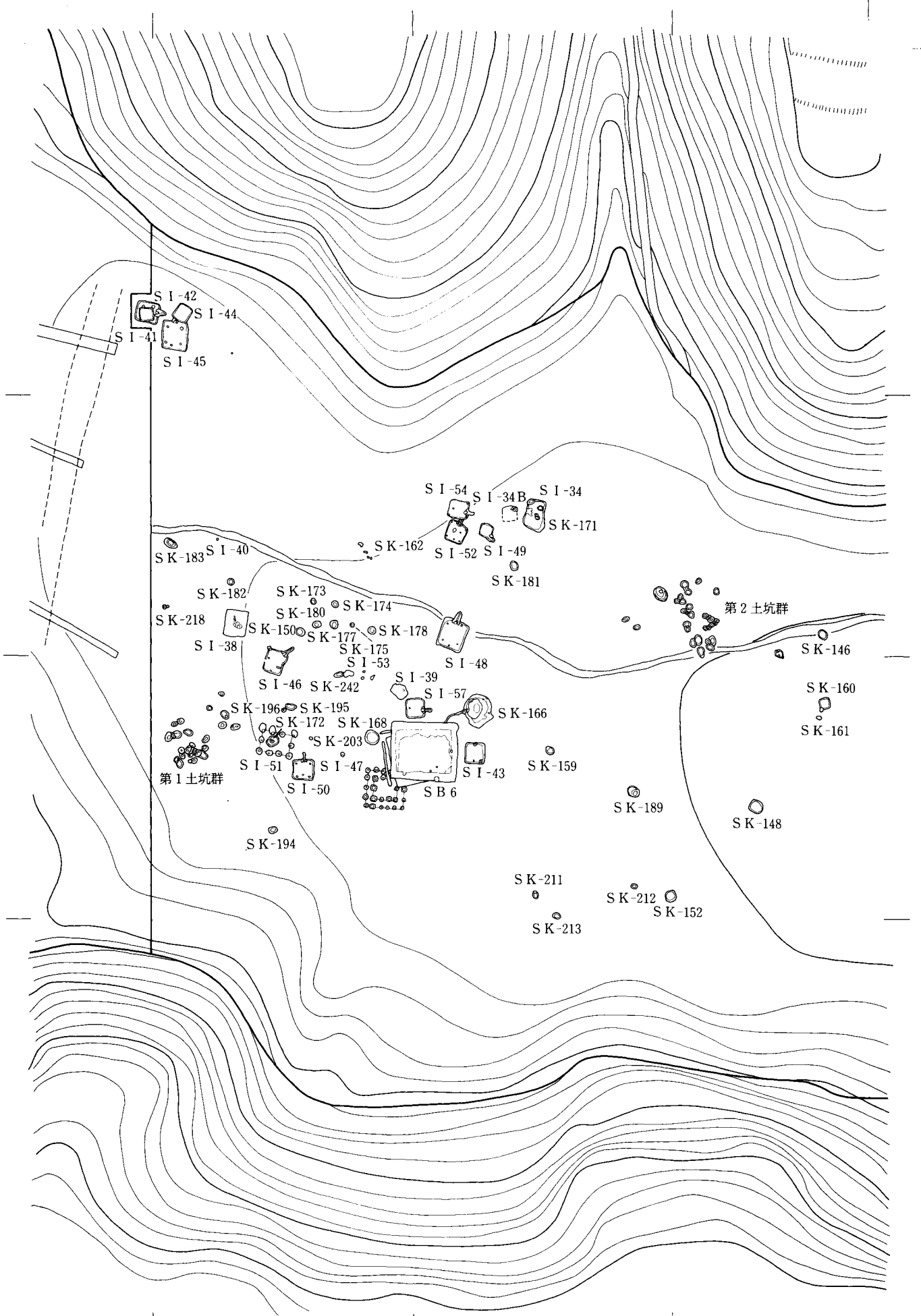
- 1 木更津市教育委員会 1977 『木更津市埋蔵文化財分布調査報告書-矢那川流域周辺遺跡詳細分布調査-』
- 2 (財)千葉県文化財センター 1992 「金二矢台遺跡」『(財)千葉県文化財センター年報No.17』
- 3 (財)千葉県文化財センター 1993 「金二矢台遺跡」『(財)千葉県文化財センター年報No.18』
- 4 松本 勝 1994 『蓮華寺遺跡II』(財)君津郡市文化財センター
- 5 神野 信 半沢幹雄 1997 『矢那川ダム埋蔵文化財調査報告書1-木更津市二重山遺跡-』(財)千葉県文化

財センター

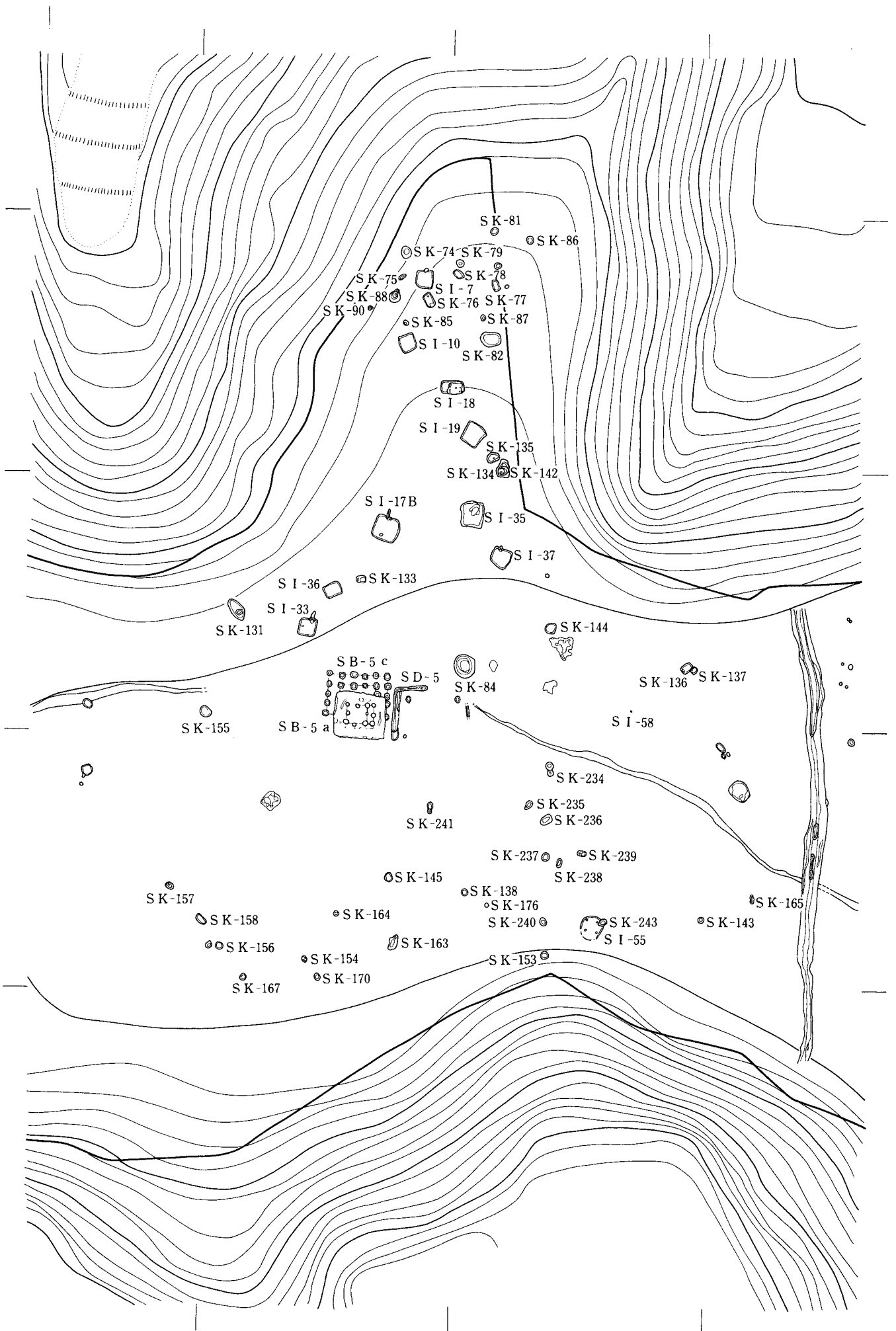
- 6 中能 隆 1996 『上ノ山A・上ノ山B・下根田A・下根田B・御所塚遺跡』(財) 君津郡市文化財センター
- 7 安藤道由 1995 『台木A遺跡』(財) 君津郡市文化財センター
- 8 安藤道由 1996 『菟谷・上時田・下時田・向台木・台木B遺跡』(財) 君津郡市文化財センター
- 9 今坂公一 1993 『木更津市内遺跡発掘調査報告書 伊豆山台遺跡』 木更津市教育委員会
- 10 當眞嗣史 1997 『大畑台遺跡群発掘調査報告書II－大畑台遺跡－』(財) 君津郡市文化財センター
- 11 小高幸男 1992 『天神前遺跡』(財) 君津郡市文化財センター
- 12 野口行雄 1988 『蓮華寺遺跡』(財) 君津郡市文化財センター
- 13 平野雅之 1988 『花山遺跡』(財) 君津郡市文化財センター
- 14 佐久間豊 1989 『木更津市上名主ヶ谷窯跡確認調査報告書』(財) 千葉県文化財センター
- 15 中能 隆 1995 『山ノ下製鉄遺跡』(財) 君津郡市文化財センター
- 16 大川 清 1967 「木更津市矢那瓦窯址」『古代』第49・50合併号
- 17 谷 旬 1994 「生産遺跡の研究」3『(財) 千葉県文化財センター研究紀要』14 (財) 千葉県文化財センター
- 18 今泉 潔 1994 『大畑台遺跡群発掘事前総合調査報告書－銭賦遺跡・小谷遺跡－』(財) 君津郡市文化財センター
- 19 島立 桂・新田浩三・渡辺修一 1992 「下総台地における立川ローム層の層序区分－平成2・3年度職員研修会から－」『研究連絡誌』第35号 (財) 千葉県文化財センター



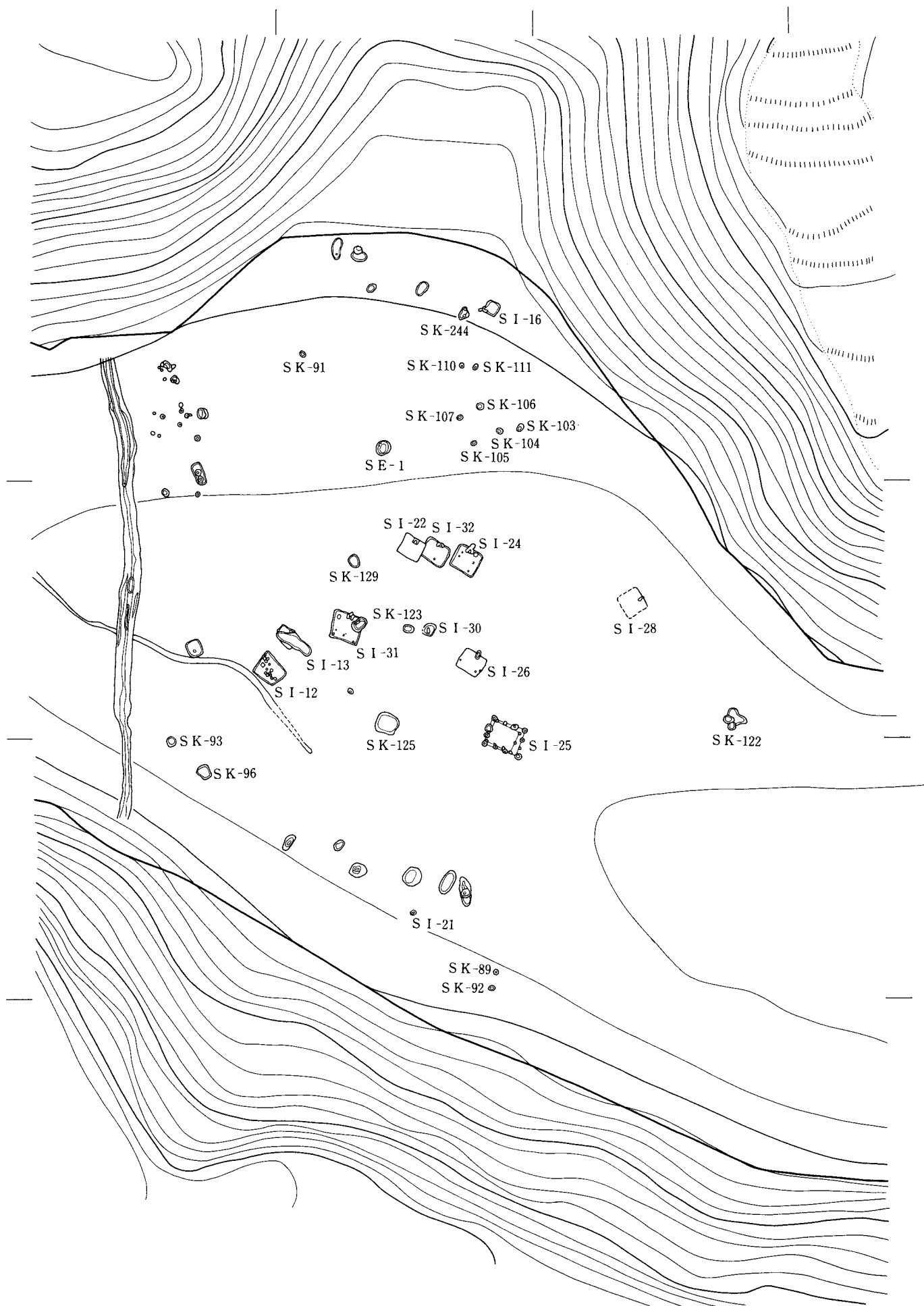
第8图 全测图 (1/2,000)



第9图 III区遺構配置图 (1/800)



第10図 IV区遺構配置図 (1/800)



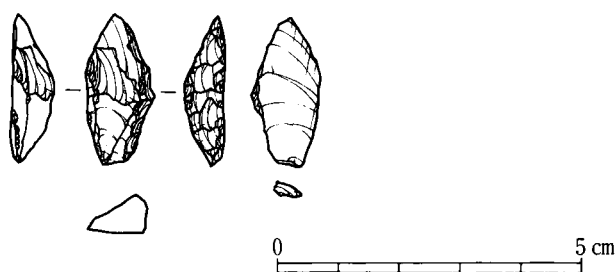
第11図 V区遺構配置図 (1/800)

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 旧石器時代 (第12図, 図版64)

確認調査の結果、旧石器時代に属する遺構、遺物集中地点などは検出されなかったが、遺構覆土中から石器が1点検出された。

1はナイフ形石器で、全長25.0mm、幅10.6mm、厚さ6.8mmを測る。一側縁調整のナイフ形石器で、素材剥片を縦位に用いている。右側縁辺に腹面からの調整剥離が施されている。また基部左側にも微細調整が認められる。背面には多方向からの剥離痕が観察され、素材剥片が回転系多打面型石核から生産されたことを窺わせる。石材は珪質頁岩である。



第12図 旧石器時代出土石器

第2節 縄文時代

1 遺構

(1) 竪穴住居跡

検出された竪穴住居は1軒のみである。加曾利E II式期に属しており、IV区の南側に面した谷頭に位置している。

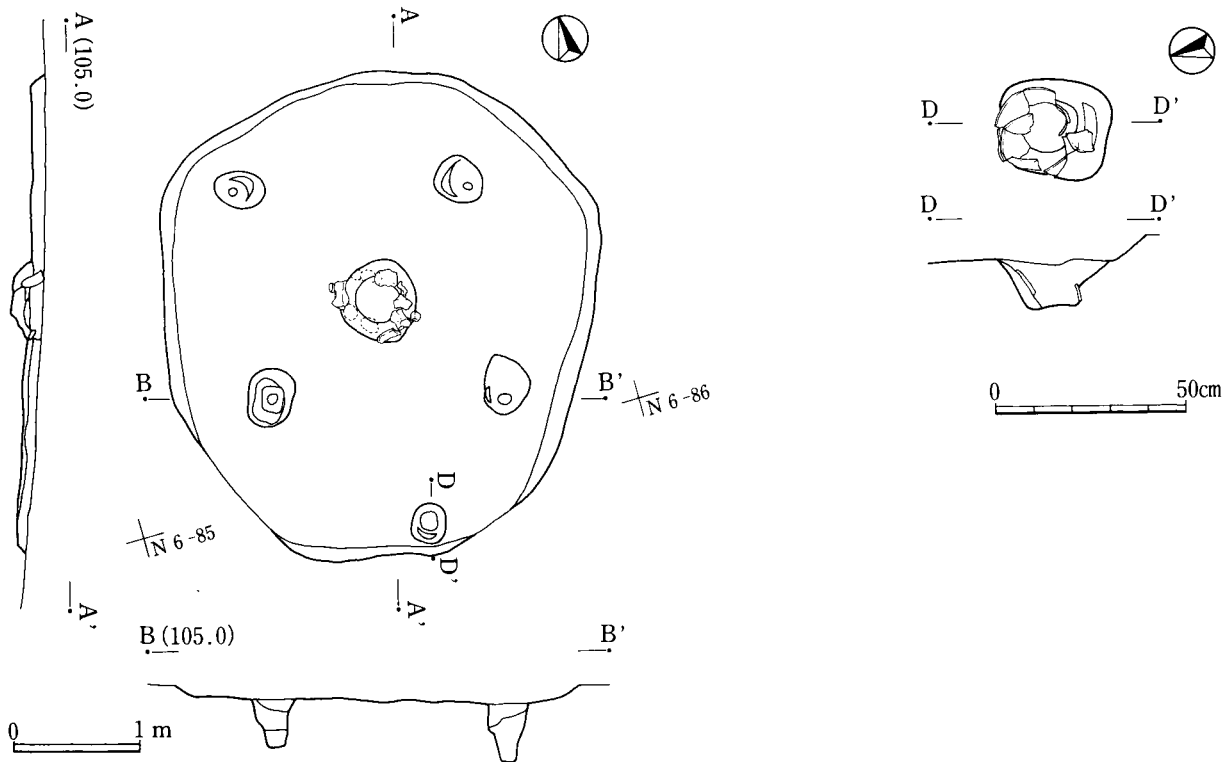
S I - 55 (第13図, 図版3, 遺物: 第30図, 図版78)

位置: N 6 - 75

規模・形態: 長径3.7m、短径3.4mの不整楕円形である。支柱穴は4本である。中央に軟質砂岩を用いた石囲炉が設置されている。南側壁沿いの床面にピットが設けられ、加曾利E II式の深鉢(第30図-62)が埋設されていた。

覆土: 汚れたロームを含む暗褐色土である。

遺物: 加曾利E II式土器深鉢、土器片が出土している。



第13図 S I -55

(2) 土坑・集石土坑・炉穴・陥穴

土坑と集石土坑は、覆土中の礫の多少により分類している。陥穴、炉穴は数が少なく、土坑・集石土坑が多くを占める。これらの遺構の多くは遺物が検出されず、時期の確定が難しいが、遺物包含層の分布との関連から、縄文時代早期～前期に属するものが多く、少数だが中期のものが含まれるものと推測される。

III区 (第9図, 第14図, 第88図～第90図)

III区の東側と西側に土坑が集中する。それらを便宜的に第1土坑群, 第2土坑群と呼称しており, それぞれの周辺に, IIIcブロック, IIIdブロックとした礫群が分布している。第1土坑群は田戸上層式土器, 第2土坑群は井草II式土器の分布と相関を示す。

SK-183 陥穴 (第15図, 図版4)

位置: J 5-50

規模・形態: 平面長楕円形で長軸径2.03m, 短軸1.15mを測る。深さ1.12mで, 底面はほぼ平坦である。

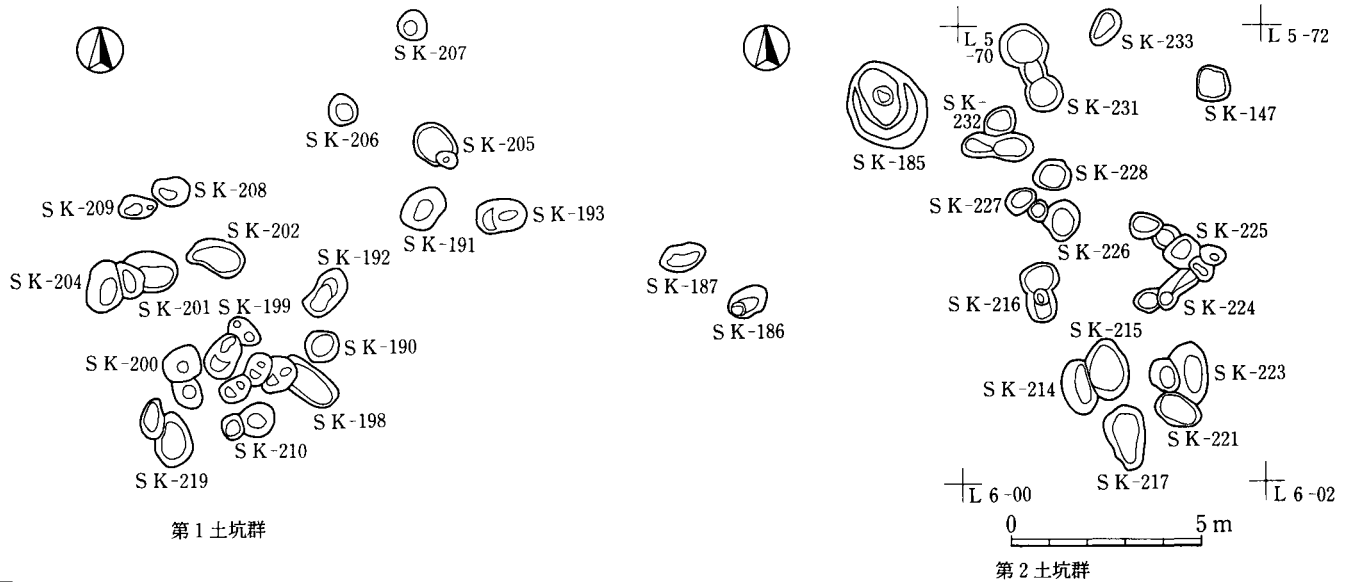
覆土: ロームブロックを含む暗褐色土, 褐色土, 黄褐色土がレンズ状に堆積する。

SK-186 陥穴 (第15図, 図版4, 遺物: 第29図, 図版77)

位置: K 5-88

規模・形態: 平面長楕円形で長軸1.12m, 短軸0.76mを測る。深さ1.48mで, 底面はやや凹凸を有す。

覆土: 砂・ロームブロックを含む暗褐色土と黄褐色土がほぼレンズ状に堆積しているが, 東側に埋没後に掘り込まれた痕跡が見られる。堆積土は, しまりの弱い黄褐色土を主体としている。



第14図 III区縄文時代土坑群遺構配置図

遺物：破碎礫1点と沈線文系前葉の土器片が出土している。

SK-187 土坑 (第15図)

位置：K 5-88

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.28m，短軸0.70mを測る。深さ0.30mで，底面はやや凹凸を有す。

覆土：暗褐色土と黒色土，褐色土がレンズ状に堆積する。

遺物：赤化した破碎礫1点

SK-190 集石土坑 (第16図，図版4)

位置：J 6-32 (礫群III cブロック内)

規模・形態：平面楕円形で径0.86m~0.94mを測る。深さ0.15mで，丸底である。

覆土：炭化物を含む黒色土と黒褐色土，黄褐色土が堆積する。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫148点 (第10表) と，撚糸文系の土器片が出土している。

SK-191 集石土坑 (第16図，図版4)

位置：J 6-22 (礫群III cブロック内)

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.25m，短軸0.98mを測る。深さ0.14m~0.20mで，底面は凹凸を有す。

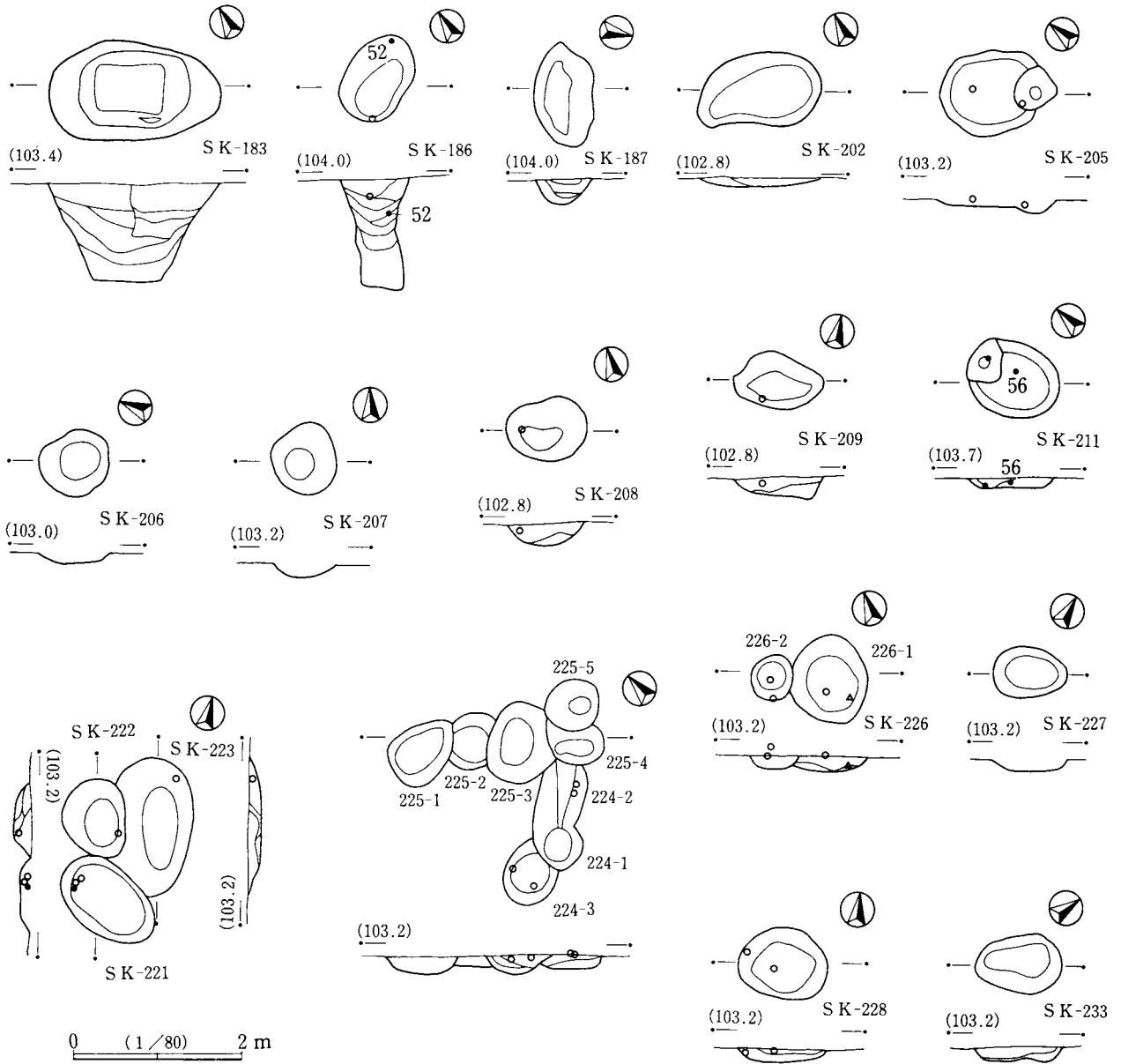
覆土：炭化物とロームブロックを含む黒褐色土と褐色土が堆積する。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫241点 (第10表)。

SK-192 集石土坑 (第16図)

位置：J 6-32

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.40m，短軸0.85mを測る。深さ0.35mで，底面はやや丸底である。



第15図 III区縄文時代土坑（1）

覆土：上層は炭化物を含む褐色土が、下層はロームブロックを多く含む黄色土が主体的に堆積する。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫47点

SK-193 集石土坑（第16図，図版4，遺物：第29図，図版77）

位置：J 6-33

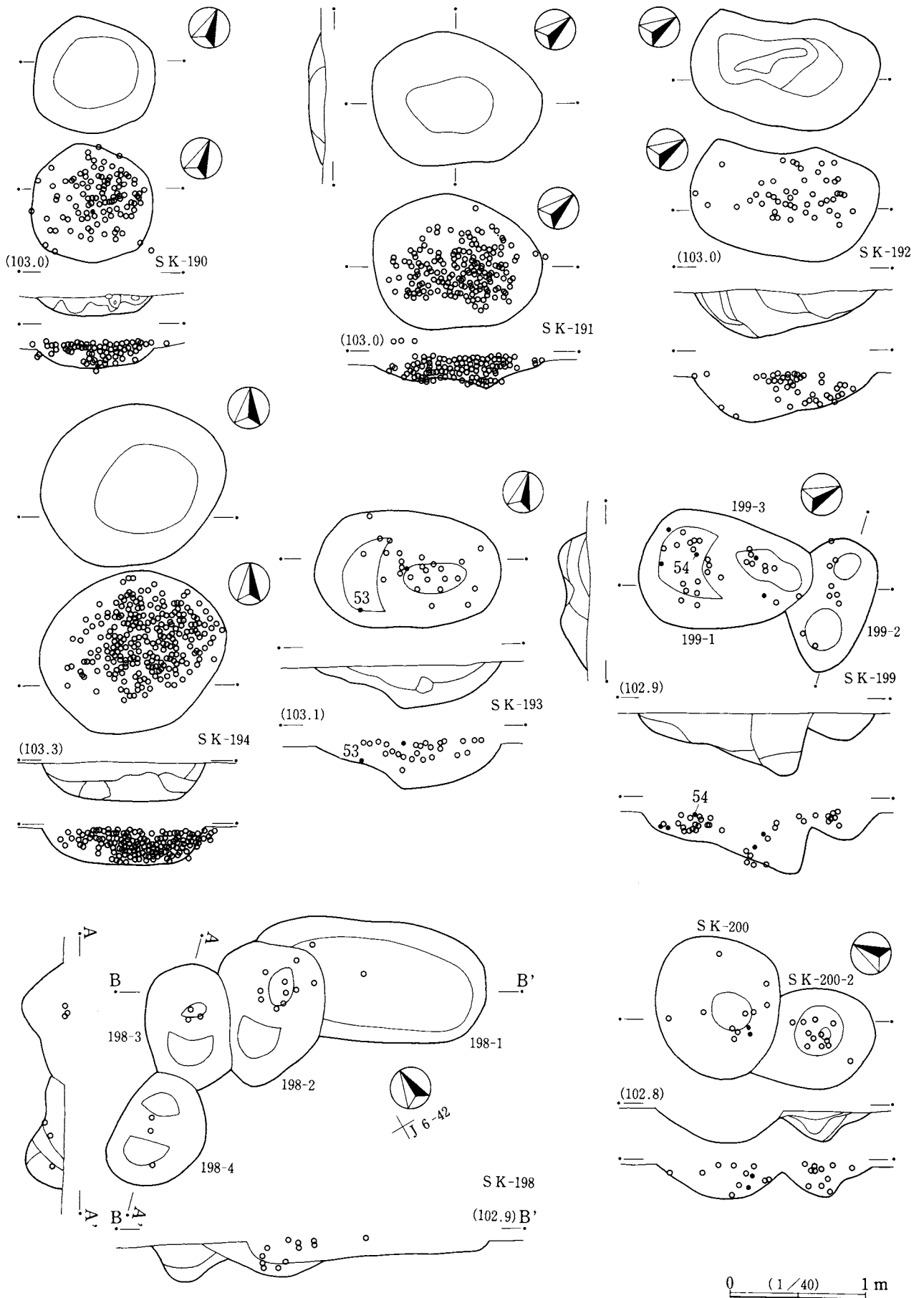
規模・形態：平面長楕円形で長軸1.40m，短軸0.80mを測る。深さ0.30mの丸底で，西側に浅い段を有す。

覆土：上層は炭化物をやや多く含む暗褐色土が，下層は黄褐色土が堆積する。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫28点と，沈線文系後葉と考えられる土器片が出土している。

SK-194 集石土坑（第16図）

位置：J 6-55（礫群IIIcブロック内）



第16図 III区縄文時代土坑（2）

規模・形態：平面楕円形で長軸1.40m，短軸1.15mを測る。深さ0.20m～0.28mで，底面はやや凹凸を有す。

覆土：上層は褐色土が，下層は炭化物と焼土粒を含む黒色土と暗褐色土が主体的に堆積する。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫が239点出土している。

S K-198 土坑 (第16図)

位置：J 6-31・32 (礫群III c ブロック内)

規模・形態：平面長楕円形の4基がほぼ東西に重複する。東側からS K-198-1 (長軸1.84m，短軸0.87m，深さ0.12m)，S K-198-2 (長軸1.04m，短軸0.82m，深さ0.25m)，S K-198-3 (長軸0.90m，0.64m，深さ0.30m)，S K-198-4 (長軸0.84m，短軸0.62m，深さ0.28m)である。S K-198-1はほぼ平底で，他の3基はほぼ丸底で，いずれも浅い段を有す。礫群調査後にその下位から検出された。

覆土：ロームを含む暗褐色土，褐色土，黄褐色土が堆積する。

重複関係：S K-198-3 → S K-198-2 → S K-198-1。ただしS K-198-3とS K-198-4の前後関係は不明である。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫18点が出土した。

S K-199 集石土坑 (第16図，図版4，遺物：第29図，図版77)

位置：J 6-31 (礫群III c ブロック内)

規模・形態：平面長楕円形の3基がほぼ南北に重複する。南側にS K-199-1 (長軸1.30m，短軸0.80m，深さ0.20m～0.43m)，北側にS K-199-2 (長軸0.95m，短軸0.60m，深さ0.18m～0.24m)が，中央にS K-199-3 (長軸0.61m，短軸0.50m，深さ0.48m)が位置している。3基ともほぼ丸底で，S K-119-2には浅い段を有す。

覆土：ロームを含む暗褐色土，褐色土，黄褐色土が堆積する。

重複関係：S K-199-1とS K-199-2の新旧関係は不明だが，S K-199-3が最も新しい。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫37点，加曾利E式土器の破片が出土している。

S K-200 集石土坑 (第16図，図版4)

位置：J 6-31 (礫群III c ブロック内)

規模・形態：平面楕円形の2基が南北に重複する。北からS K-200-1 (径0.98m～1.04m，深さ0.24m)，S K-200-2 (径0.72m，深さ0.22m)である。両者とも丸底である。

覆土：ロームを含む暗褐色土と黄褐色土が堆積する。

重複関係：S K-200-1がS K-200-2に先行する。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫19点，加曾利E式土器の破片が出土している。

S K-201 土坑 (第17図)

位置：J 6-20・21・30・31 (礫群III c ブロック内)

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.60m，短軸1.00mを測る。深さ0.22mでほぼ平坦である。

覆土：ロームブロックを含む暗褐色土，黄褐色土等がほぼレンズ状に堆積する。

重複関係：S K-204を切る。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫4点，縄文時代前期末葉の土器の破片が出土している。

S K-202 土坑 (第15図)

位置：J 6-21・22 (礫群III c ブロック周縁)

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.44m，短軸0.82mを測る。深さ0.10mで，底面はほぼ平坦である。

覆土：暗褐色土と黄褐色土が堆積する。

S K-204 土坑 (第17図)

位置：J 6-20・30 (礫群III c ブロック内)

規模・形態：平面長楕円形の掘り方が二つ東西に重複しており，西側の方が新しい。東西1.50m，南北1.40mを測る。深さ0.35mを測り，底面はほぼ平坦である。

覆土：暗褐色土と褐色土，黄褐色土が堆積する。

重複関係：S K-201に先行する。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫7点と，縄文時代前期末葉土器の破片が出土している。

S K-205 土坑 (第15図)

位置：J 6-22・23 (礫群III c ブロック内)

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.43m，短軸1.00mを測る。深さ0.06mで，底面はほぼ平坦である。南東壁際に径0.50m，深さ0.15mのピット状の攪乱が見られる。礫群を調査した後に，その下位から検出された。

遺物：赤化した破損礫3点

S K-206 土坑 (第15図，図版4)

位置：J 6-12・22 (礫群III c ブロック内)

規模・形態：平面楕円形で径0.82m～0.84mを測る。深さ0.12mで，底面はほぼ平坦である。礫群調査後にその下位から検出された。

S K-207 土坑 (第15図)

位置：J 6-12 (礫群III c ブロック周縁)

規模・形態：平面楕円形で径0.80m～0.85mを測る。深さ0.15mで，ほぼ丸底である。

S K-208 土坑 (第15図)

位置：J 6-21 (礫群III c ブロック周縁)

規模・形態：平面楕円形で径0.78m～0.97mを測る。深さ0.15mで，ほぼ丸底である。

覆土：ロームを含む暗褐色土と黄褐色土が堆積する。

遺物：赤化した破損礫1点

S K-209 土坑 (第15図)

位置：J 6-20・21 (礫群III c ブロック周縁)

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.08m，短軸0.66mを測る。深さ0.16m～0.28mで，底面はやや斜面を呈す。

覆土：ロームを含む暗褐色土と黄褐色土が堆積する。

遺物：赤化した破損礫1点

S K-210 集石土坑 (第17図，図版5)

位置：J 6-31・41 (礫群III c ブロック内)

規模・形態：平面楕円形の2基が東西に重複する。東側がS K-210-1で径0.90m～0.94m，深さ0.21m

で、西側がS K-210-2で径0.60m～0.65m、深さ0.15m～0.18mである。両者ともほぼ平坦である。

覆土：黒色土と褐色土、黄褐色土が堆積する。

重複関係：S K-210-2がS K-210-1に先行する。

遺物：赤化した破損礫8点

S K-211 土坑（第15図，図版5，遺物：第29図，図版77）

位置：K 6-84・94

規模・形態：平面楕円形で径0.87m～1.10mを測る。深さ0.09m～0.12mで、北壁際に径0.40m～0.60m、深さ0.25mのピット状の攪乱を有す。

覆土：黒色土と黄褐色土が堆積する。

遺物：沈線文系土器中葉の田戸下層式土器が出土している。

S K-212 集石土坑（第17図，図版5）

位置：K 6-88

規模・形態：平面楕円形で径0.88m～0.94mを測る。深さ0.14m～0.16mで、底面はほぼ平坦である。

覆土：ロームを含む暗褐色土と褐色土が主体的に堆積する。

遺物：赤化した完形礫・破損礫13点

S K-213 集石土坑（第17図，図版5）

位置：K 6-95

規模・形態：平面楕円形で径1.10m～1.30mを測る。深さ0.16m～0.18mで、底面はほぼ平坦である。

覆土：黄褐色土が主体的に堆積する。

遺物：赤化した完形礫・破損礫15点と、沈線文系土器前葉の土器片が出土している。

S K-214 集石土坑（第17図）

位置：L 5-90（礫群III dブロック内）

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.42m、短軸0.80mを測る。深さ0.20mで、底面はほぼ平坦である。

覆土：ロームブロックを含む暗褐色土と褐色土が堆積する。

重複関係：ほぼ東西に並立し、S K-215が東側に重複する。前後関係は不明である。

遺物：赤化した完形礫・破損礫8点

S K-215 集石土坑（第17図）

位置：L 5-90・91（礫群III dブロック内）

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.58m、短軸1.10mを測る。深さ0.16mで、底面はほぼ平坦である。

覆土：ロームブロックを含む黒色土と、暗褐色土、褐色土が堆積する。

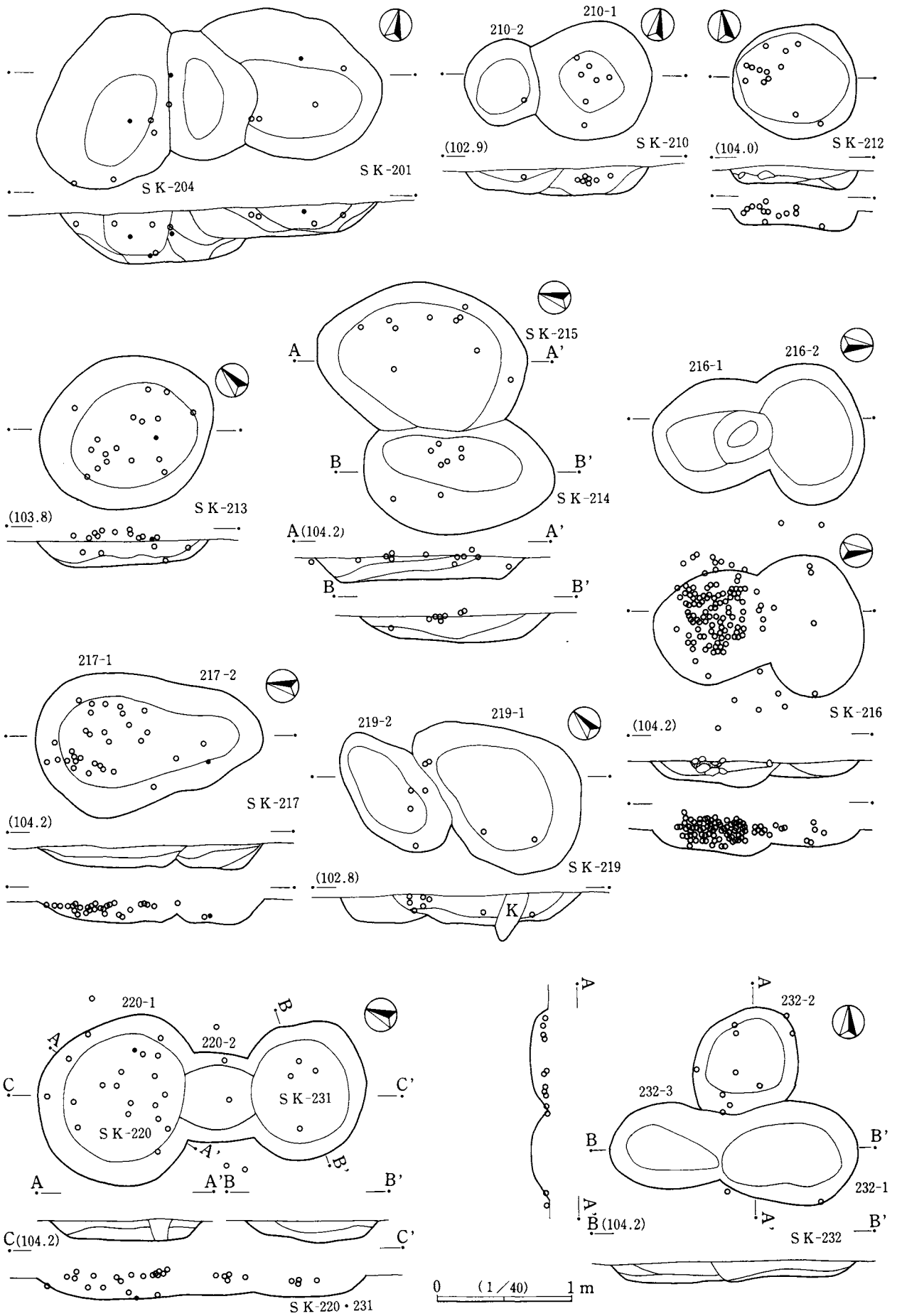
遺物：赤化した完形礫・破損礫14点

S K-216 集石土坑（第17図，図版5）

位置：L 5-80（礫群III dブロック内）

規模・形態：平面楕円形の2基が南北に重複する。南側のS K-216-1が径0.70m～1.00m、深さ0.10mで、北側のS K-216-2が径0.80m～0.95m、深さ0.13m～0.20mである。

覆土：S K-216-1のほぼ中央に集中する礫群の下層に厚さ0.08m程の焼土ブロックが堆積する。ロームブロックを含む暗褐色土と褐色土が主体的に堆積する。



第17図 III区縄文時代土坑 (3)

重複関係：S K-216-2 が S K-216-1 に先行する。

遺物：赤化した完形礫・破損礫133点（第10表）

S K-217 集石土坑（第17図，図版5）

位置：L 5-90・91（礫群III d ブロック内）

規模・形態：平面長楕円形の2基が南北に重複する。北側のS K-217-1が径1.06m～1.10m，深さ0.15mで，南側のS K-217-2が径0.70m～0.72m，深さ0.18mである。両者とも底面はほぼ平坦である。

覆土：暗褐色土と黄褐色土が堆積する。

重複関係：S K-217-2 が S K-217-1 に先行する。

遺物：赤化した完形礫・破損礫31点と，撚糸文系土器の破片が出土している。

S K-219 集石土坑（第17図，図版5）

位置：J 6-31・41（礫群III c ブロック内）

規模・形態：平面長楕円形の2基が東西に重複する。東側のS K-219-1が長軸1.44m，短軸1.00m，深さ0.22mで，西側のS K-219-2が長軸1.02m，短軸0.60m，深さ0.20mである。

覆土：S K-219-1が黒色土，S K-219-2が褐色土を主体的に堆積する。

重複関係：S K-219-2 が S K-219-1 に先行する。

遺物：赤化した破損礫7点

S K-220 集石土坑・S K-231 土坑（第17図，図版5）

位置：L 5-70（礫群III d ブロック内）

規模・形態：平面楕円形の土坑3基が重複している。北からS K-220-1，S K-220-2，S K-231の順で所在する。

S K-220-1は径1.20m～1.28mを測り深さ0.14mで，底面はほぼ平坦である。S K-220-2は径約0.60m～0.70m，深さ0.10mで，底面は平坦である。S K-231は径1.00m，深さ0.15mで，底面はやや丸味を有す。

覆土：S K-220は，暗褐色土と，ロームを含む褐色土が，S K-231は，上層に暗褐色土が，下層に褐色土が堆積する。

重複関係：新旧関係は不明である。

遺物：S K-220-1からは赤化した完形礫・破損礫31点と，田戸上層式に比定される破片が，S K-220-2からは赤化した完形礫・破損礫が2点，S K-231からは赤化した破損礫4点出土している。

S K-221 土坑・S K-222 土坑・S K-223 土坑（第15図，図版5）

位置：L 5-91（礫群III d ブロック内）

3基の土坑が重複して検出された。S K-221は平面長楕円形で長軸1.25m，短軸0.80m，深さ0.08mで，底面はほぼ平坦である。覆土は，暗褐色土と炭化物を少量含む褐色土が主体的に堆積する。赤化した完形礫・破損礫2点と，撚糸文系土器の破片が出土している。

S K-222は，平面楕円形で径0.74m～0.94mを測る。深さ0.14m～0.22mで，底面はやや凹凸を有す。覆土は暗褐色土と黄褐色土，ロームを含む褐色土が堆積しており，遺物は，赤化した破損礫1点出土している。

S K-223は，平面長楕円形で長軸1.60m，短軸0.90mを測る。深さ0.10m～0.14mで，底面はやや丸味

を有す。これら3基の前後関係は不明である。

S K-224 土坑・S K-225 土坑 (第15図, 図版6)

位置: L 5-81 (礫群III d ブロック周縁)

規模・形態: 平面楕円形の土坑8基が重複している。ほぼ東西に並ぶ3基をS K-224, ほぼ南北に並ぶ5基をS K-225とした。S K-224に属する3基は, 西からS K-224-3 (径0.62m~0.80m, 深さ0.10m), S K-224-1 (径0.50m~0.60m, 深さ0.26m) S K-224-2 (径0.56m~0.80m, 深さ0.14m) とし, S K-225に属する5基は, 北からS K-225-1 (径0.68m~0.86m, 深さ0.20m), S K-225-2 (径0.60m~0.70m, 深さ0.12m), S K-225-3 (径0.80m~0.94m, 深さ0.14m), S K-225-4 (径0.50m~0.70m, 深さ0.14m), S K-225-5 (径0.62~0.68m, 深さ0.16m) とした。

覆土: S K-224-1ではロームブロックを含む暗褐色土と褐色土が, S K-224-2では暗褐色土と褐色土が堆積している。S K-225-2はローム主体の黄褐色土, その他はいずれもロームを含む暗褐色土が主体的に堆積する。

重複関係: S K-224-2がS K-224-1に先行する。S K-224-3との前後関係は不明である。S K-225-2→S K-225-1, S K-225-2・4・5→S K-225-3の前後関係を有す。また, S K-225-4は西側でS K-224-2とも重複するが, S K-225-4が先行する。

遺物: S K-224から, 赤化した完形礫・破損礫が4点出土している。

S K-226 土坑 (第15図, 図版6)

位置: L 5-80 (礫群III d ブロック内)

規模・形態: 平面楕円形の2基がほぼ東西に並立する。東側がS K-226-1で, 径0.90m~1.06m, 深さ0.16mである。西側がS K-226-2で, 径0.48m~0.52mで, 深さ0.16mである。

覆土: S K-226-1が暗褐色土, S K-226-2がロームを含む褐色土を主体的に堆積する。

重複関係: S K-226-1がS K-226-2に先行する。

遺物: 赤化した破損礫3点, 黒曜石1点

S K-227 土坑 (第15図, 図版6)

位置: L 5-80 (礫群III d ブロック内)

規模・形態: 平面長楕円形で長軸0.90m, 短軸0.60mを測る。深さ0.15mで, 底面はほぼ平坦である。

覆土: 炭化物を少量含む黒色土が上層に, 下層に暗褐色土, 褐色土が堆積する。

S K-228 土坑 (第15図, 図版6)

位置: L 5-70・80 (礫群III d ブロック内)

規模・形態: 平面楕円形で径0.85m~1.02mを測る。深さ0.10m~0.14mで, 底面はほぼ平坦である。

覆土: 上層は炭化物を含む暗褐色土が, 下層は褐色土が堆積する。

遺物: 赤化した破損礫2点

S K-232 集石土坑 (第17図, 図版6)

位置: L 5-70 (礫群III d ブロック内)

規模・形態: 平面楕円形の3基が並立する。東側にS K-232-1 (径0.78m~1.02m, 深さ0.12m) が, 北にS K-232-2 (径0.76m~0.82m, 深さ0.14m) が, 西にS K-232-3 (径0.64m~0.85m, 深さ0.16m) が位置する。

覆土：S K-232-1 はロームを含む暗褐色土，S K-232-3 が褐色土を主体的に堆積する。

重複関係：S K-232-3 がS K-232-1 に先行する。

遺物：赤化した破損礫14点

S K-233 土坑（第15図，図版6）

位置：L 5-60・61・70・71（礫群III d ブロック周縁）

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.05m，短軸0.70mを測る。深さ0.14m～0.30mで，底面はやや凹凸を有す。

覆土：暗褐色土，褐色土，黄褐色土が堆積する。

IV区（第10図，第130図～第133図）

大きく二つの集中地点が見られる。一つは北側に突き出した尾根上で，もう一つは，南側に開口した谷の周辺である。北側の地点は比較的集中するのに対し，南側の地点は，広範囲に散漫に分布する。北側の地点には縄文時代前期末葉～中期初頭の土器，礫群IV c ブロックが分布し，南側の谷周辺には縄文時代早期の土器群，礫群IV a ブロックが分布している。

S K-87 集石土坑（第18図，図版6）

位置：N 4-31（礫群IV c ブロック内）

規模・形態：平面楕円形で径0.89m～0.96mを測る。深さ0.40mで，丸底である。

覆土：遺構確認面から上層にかけて，礫が集中する。

遺物：赤化した完形礫・破損礫103点（第11表）

S K-88 集石土坑（第18図，図版6）

位置：M 4-27・37（礫群IV c ブロック内）

規模・形態：平面楕円形で径1.66m～2.08mを測る。深さ0.40mで，北東を中心とした周囲に浅い段を有す。

覆土：遺構確認面から上層にかけて，礫が集中する。

遺物：赤化した完形礫・破損礫223点（第11表）

S K-90 炉穴（第18図，図版6）

位置：M 4-36（礫群IV c ブロック内）

規模・形態：平面楕円形で径0.65m～0.82m，深さ0.06m～0.13mを測る。東側に浅い段を有し，掘込みに接する遺構確認面の南側で，径0.60m程の範囲で硬化面（図中スクリーントーン部分）が認められる。

覆土：焼土粒と炭化物を含む褐色土と暗黄褐色土が主体的に堆積する。

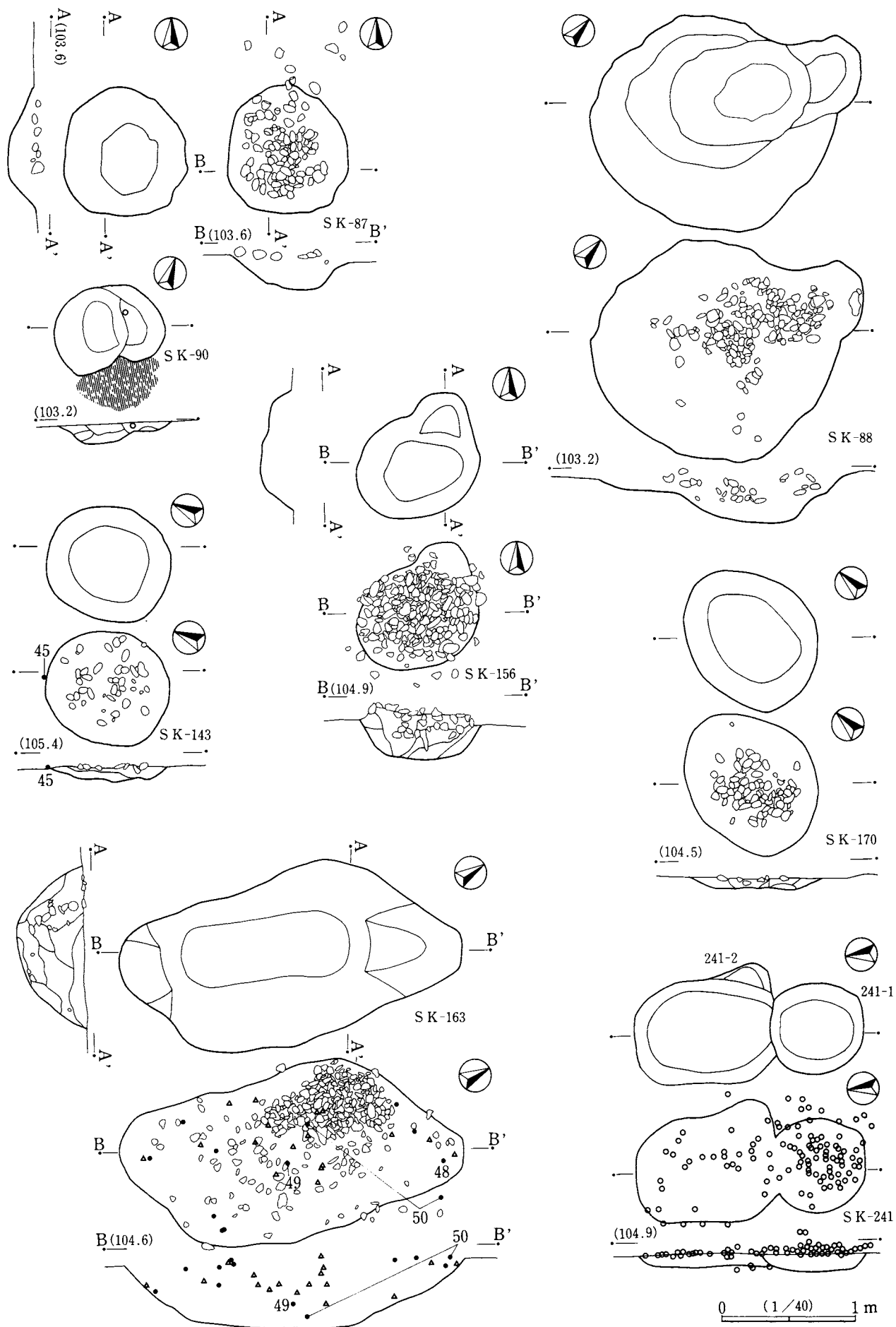
遺物：赤化した破損礫1点

S K-138 土坑（第19図）

位置：N 6-60（礫群IV a ブロック内）

規模・形態：礫群調査後にその下位から検出された。平面楕円形で径0.46m～0.50mを測る。深さ0.14mで，底面はほぼ平坦である。

覆土：炭化物を含む暗褐色土と褐色土が主体的に堆積する。



第18図 IV区縄文時代土坑(1)

S K-142 土坑 (第19図, 図版6, 遺物: 第29図, 図版77)

位置: N 4-91・92, N 5-01・02

規模・形態: 平面楕円形で長軸2.80m, 短軸2.10mを測る。深さ0.35mで, 丸底でやや凹凸を有す。

覆土: ロームブロックと焼土粒, 炭化物を含む褐色土が堆積する。

重複関係: S K-142のほぼ中央に奈良・平安時代の土坑S K-134が重複している。

遺物: 加曾利E式土器の破片が出土している。

S K-143 集石土坑 (第18図, 図版6, 遺物: 第29図, 図版77)

位置: N 6-79 (礫群IV eブロック内)

規模・形態: 平面楕円形で径0.80m~0.90mを測る。深さ0.16m~0.18mで, 底面はやや凹凸を有す。

覆土: 上層は炭化物を含む黒褐色土が, 下層はロームブロックを含む暗褐色土が主体的に堆積する。

遺物: 赤化した完形礫・破損礫45点と, 撚糸文系土器の破片が出土している。

S K-156 集石土坑 (第18図, 図版7)

位置: M 6-80 (礫群IV bブロック内)

規模・形態: 平面楕円形で, 径0.90m~0.95mを測る。深さ0.35mで, 丸底である。

覆土: 上層は暗黄褐色土と褐色土, 下層は炭化物を含む黒色土が主体的に堆積する。

遺物: 赤化した完形礫・破損礫272点 (第11表)

S K-158 土坑 (第19図, 図版7)

位置: M 6-70 (礫群IV bブロック内)

規模・形態: 平面長楕円形で長軸1.80m, 短軸1.00mを測る。深さ0.10m~0.14mで, 底面はほぼ平坦である。

覆土: 炭化物を含む暗褐色土と褐色土が堆積する。

S K-163 集石土坑 (第18図, 図版7, 遺物: 第29図, 図版77)

位置: M 6-87 (礫群IV aブロック内)

規模・形態: 平面長楕円形で長軸2.53m, 短軸1.24mを測る。深さ0.48mで, 底面はほぼ平坦である。長軸方向の立上がりは緩やかで, 浅い段状を呈する。

覆土: 上層から下層にかけて, 径10mm程の炭化物や炭化物粒を含む暗褐色土が主体的に堆積する。

遺物: 赤化したものを含む完形礫・破損礫555点 (第11表), 礫石斧1点 (第130図, 184), 黒曜石22点, 井草II式土器, 田戸上層式土器の破片が出土している。

S K-164 土坑 (第19図, 図版7)

位置: M 6-75 (礫群IV aブロック内)

規模・形態: 礫群調査後にその下位から検出された。平面楕円形で径0.88m~0.95mを測る。深さ0.08mで, 底面はほぼ平坦で, 中央から西北隅にかけて硬化面がある。

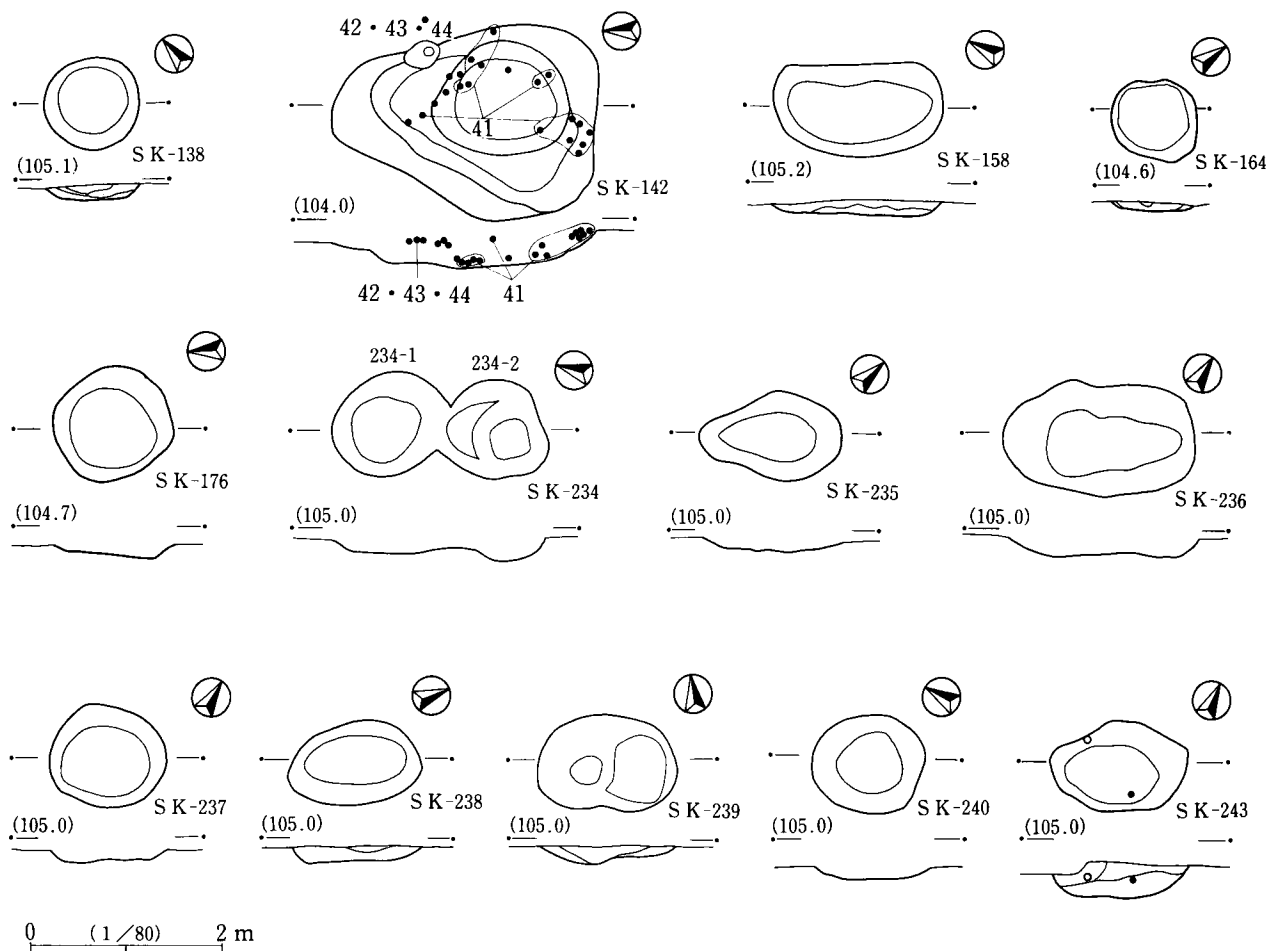
覆土: 灰褐色砂質土と暗褐色土, 褐色土が堆積する。

S K-170 集石土坑 (第18図, 図版7)

位置: M 6-94 (礫群IV aブロック内)

規模・形態: 平面楕円形で径0.90m~1.12mを測る。深さ0.08mで, 底面はやや凹凸を有す。

覆土: 炭化物を含む黒色土が主体的に堆積する。



第19図 IV区縄文時代土坑(2)

遺物：赤化した完形礫・破損礫88点

SK-176 土坑(第19図)

位置：N6-61(礫群IVaブロック内)

規模・形態：礫群調査後にその下位から検出された。平面楕円形で径0.56m~0.62mを測る。深さ0.04m~0.07mで、底面はやや凹凸を有す。

SK-234 土坑(第19図)

位置：N6-13

規模・形態：平面楕円形が2基南北に重複している。北側にSK-234-1(径1.05m~1.25m, 深さ0.13m)が、南側にSK-234-2(径1.04m~1.12m, 深さ0.20m)が位置する。

遺物：赤化した完形礫・破損礫2点

SK-235 土坑(第19図)

位置：N6-22・23・32・33

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.50m, 短軸0.90mを測る。深さ0.11mで、底面はやや凹凸を有す。

遺物：赤化した破損礫2点

SK-236 土坑(第19図)

位置：N6-33

規模・形態：平面長楕円形で長軸2.00m，短軸1.14mを測る。深さ0.15mで，底面はやや凹凸を有す。

遺物：赤化した破損礫1点

S K-237 土坑 (第19図)

位置：N 6-43・44

規模・形態：平面楕円形で径1.04m～1.20mを測る。深さ0.09mで，底面はやや凹凸を有す。

S K-238 土坑 (第19図，遺物：第29図)

位置：N 6-54

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.42m，短軸0.86mを測る。深さ0.12m～0.18mで，底面はほぼ平坦である。

覆土：黒色土ブロックを含む黄褐色土が主体的に堆積する。

遺物：黒曜石1点，井草II式土器の破片が出土している。

S K-239 土坑 (第19図)

位置：N 6-45

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.48m，短軸1.00mを測る。深さ0.10m～0.18mで，東側にやや浅い段を有す。

覆土：黒色土とロームブロックを含む黄褐色土が堆積する。

遺物：捺糸文系土器の破片が出土している。

S K-240 土坑 (第19図)

位置：N 6-73

規模・形態：平面楕円形で径1.05m～1.20mを測る。深さ0.10mで，底面はほぼ平坦である。

遺物：田戸上層式土器の破片が出土している。

S K-241 集石土坑 (第18図，図版7，遺物：第29図，図版77)

位置：M 6-29・39 (礫群IV g ブロック内)

規模・形態：平面楕円形の2基が南北に並立する。南側のS K-241-1は径0.68m～0.70m，深さ0.14m，北側のS K-241-2は長軸1.10m，短軸0.77m，深さ0.10mを測る。

覆土：ロームを含む暗褐色土が堆積する。

重複関係：S K-241-2が，S K-241-1に先行する。

遺物：赤化したものも含む完形礫・破損礫132点 (第11表)，田戸下層式土器が出土している。

S K-243 土坑 (第19図)

位置：N 6-75・76

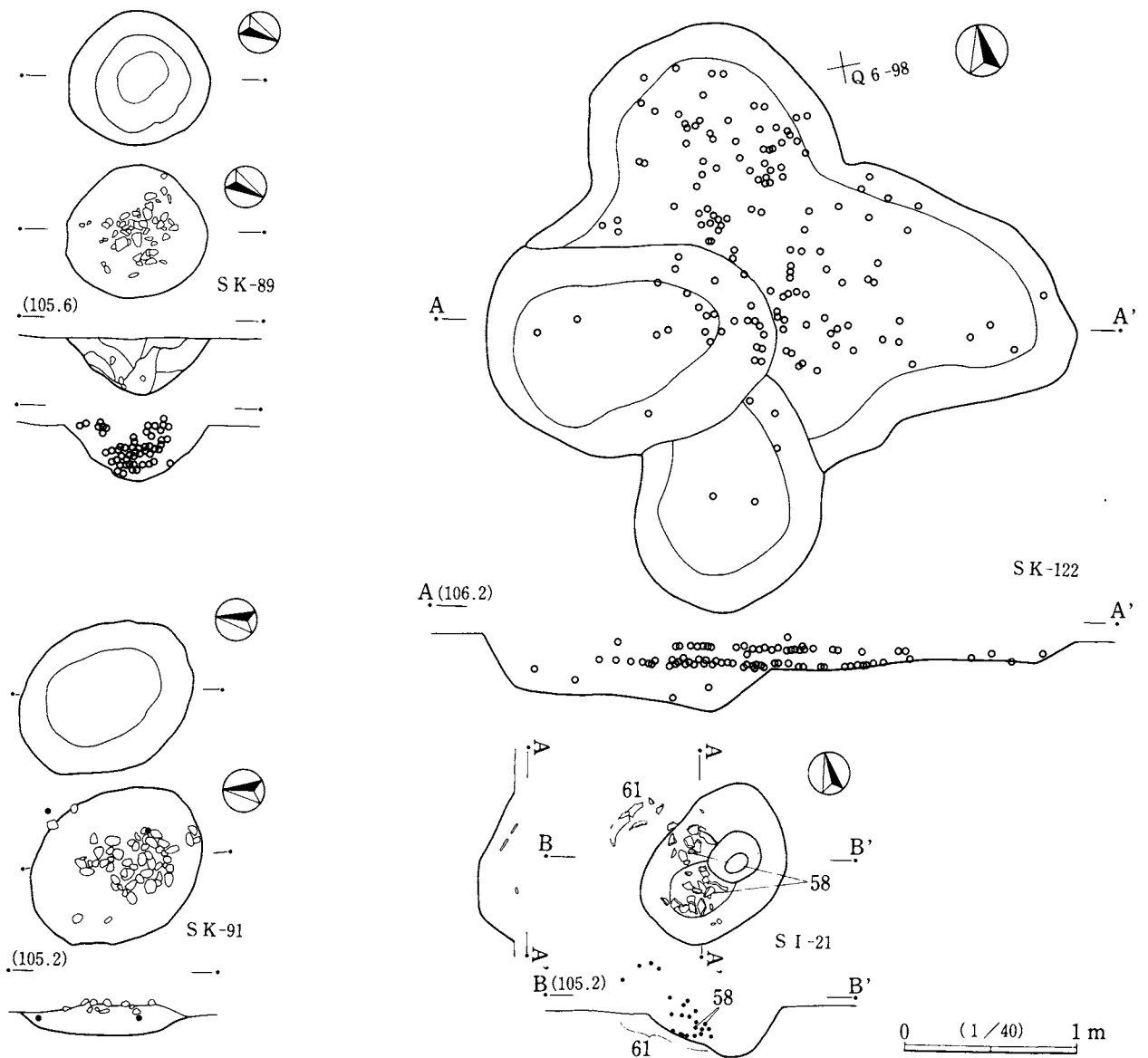
規模・形態：平面長楕円形で長軸1.50m，短軸0.94mを測る。深さ0.38mで，底面はほぼ平坦である。

覆土：ロームを含む黒褐色土が堆積する。

重複関係：S I-55に先行する。

V区 (第11図，第114図～第116図)

土坑・集石土坑の分布は比較的薄い。S K-91，S K-122，S K-89に伴って，礫群V a ブロック，V b ブロック，V e ブロックが位置している。S I-21は竪穴住居として調査されたが，加曽利E式に属す



第20図 V区縄文時代土坑(1)

る深鉢形土器が埋設された土坑であったと推測される。SK-103~107, SK-110・111によって構成される土坑群の西側には礫群が見られ、田戸下層式土器、縄文時代前期末葉の土器が分布していることから、これらの時代の遺構である可能性がある。

SK-89 集石土坑(第20図, 図版8)

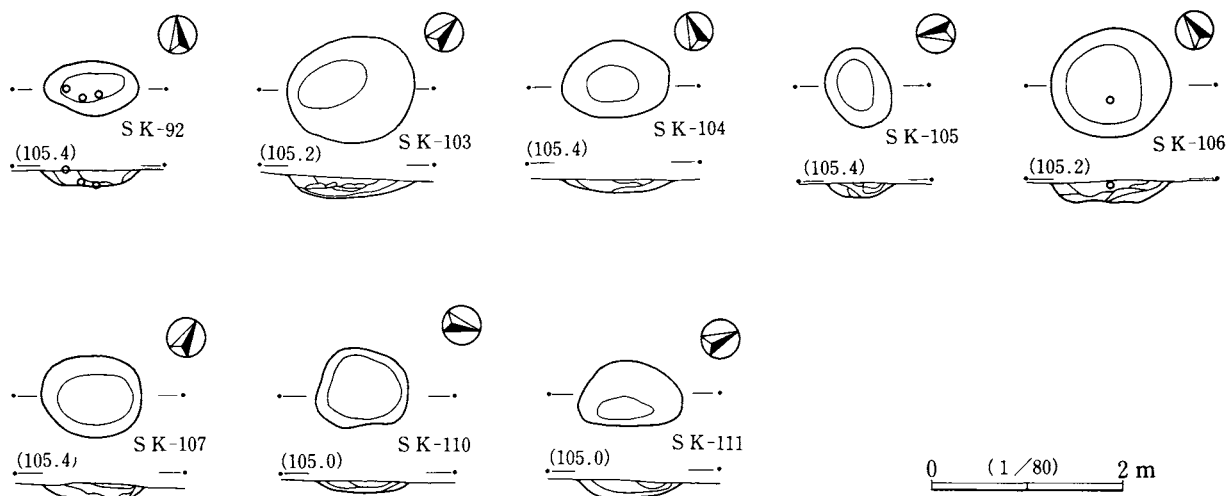
位置: P 7-88・98(礫群Vcブロック内)

規模・形態: 平面楕円形で径0.75m~0.80mを測る。深さ0.33mで、丸底である。

覆土: 焼土粒を含む暗褐色土, 褐色土, 明褐色土が主体的に堆積する。

遺物: 赤化した完形礫・破損礫54点

SK-91 集石土坑(第20図, 図版7)



第21図 V区縄文時代土坑(2)

位置：P 5-51

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.07m，短軸0.85mを測る。深さ0.16mで，底面はやや丸味を有す。

覆土：径5.0mm～10.0mmの黄褐色土粒を多く含む明褐色土が堆積する。

遺物：赤化した完形礫・破損礫63点，撚糸文系土器破片が出土している。

SK-92 土坑(第21図)

位置：P 7-98(礫群V eブロック内)

規模・形態：礫群調査後にその下位から検出された。平面長楕円形で長軸1.00m，短軸0.57mを測る。深さ0.17mで，底面はほぼ平坦である。

覆土：東側は炭化物を含む暗褐色土と褐色土が，西側はロームを多く含む褐色土と暗黄褐色土が堆積する。

遺物：赤化した破碎礫2点

SK-103 土坑(第21図)

位置：P 5-79・89

規模・形態：平面楕円形で径1.12m～1.34mを測る。深さ0.22mで，底面はやや丸味を有す。

覆土：径2mm～5mm炭化物を含む暗褐色土と黒褐色土が堆積する。

SK-104 土坑(第21図)

位置：P 5-88

規模・形態：平面楕円形で径0.82m～1.14mを測る。深さ0.14mで，底面はやや丸味を有す。

覆土：径2mm～5mmの炭化物を含む暗褐色土が堆積する。

SK-105 土坑(第21図)

位置：P 5-87

規模・形態：平面楕円形で径0.64m～0.84mを測る。深さ0.15mで，底面はやや平坦である。

覆土：径1mm～3mmの焼土粒を多量に含む明赤褐色土を主体的に堆積する。

SK-106 土坑(第21図)

位置：P 5-77・78

規模・形態：平面楕円形で径1.12m～1.28mを測る。深さ0.22m～0.25mで、底面はやや凹凸を有す。

覆土：径1mm～3mmの焼土粒と径1mm～9mmの炭化物を含む暗灰黄褐色土が堆積する。

遺物：赤化した完形礫1点

S K-107 土坑（第21図）

位置：P 5-77

規模・形態：平面楕円形で径0.84m～1.05mを測る。深さ0.16mで、底面はほぼ平坦である。

覆土：径1mm～10mmの焼土粒と、径1mm～5mmの炭化物を含む暗褐色土と黒褐色土が堆積する。

S K-110 土坑（第21図，図版8）

位置：P 5-57

規模・形態：平面楕円形で径0.83m～0.95mを測る。深さ0.12mで、底面はやや丸味を有す。

覆土：径1mm～3mmの炭化物を含む黄灰褐色土と、暗褐色土が堆積する。

S K-111 土坑（第21図，図版8）

位置：P 5-57

規模・形態：平面楕円形で径0.70m～1.10mを測る。深さ0.15m～0.20mで、底面はほぼ平坦である。

覆土：径1mm～3mmの炭化物を含む暗黄褐色土と黒褐色土，暗褐色土が堆積する。

S K-122 集石土坑（第20図）

位置：Q 6-87・97・98（礫群V bブロック内）

規模・形態：長楕円形の掘込みが十字に重複する。東西長3.40m，南北長3.40mを測る。深さは0.10m～0.30mで、それぞれの掘込みはほぼ平坦である。

重複関係：西側と南側の掘込みが先行する。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫148点（第12表）

S I-21 土坑（第20図，図版8，遺物：第30図）

位置：P 7-65

規模・形態：長径1.90m，短径1.30m，深さ0.40mの長楕円形である。土坑底面から北西側周辺にかけて、土器片がまとまって出土している。周辺から出土したものをあわせると、3個体分以上になる。

覆土：暗褐色土が堆積している。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫4点と加曾利E式土器が出土している。

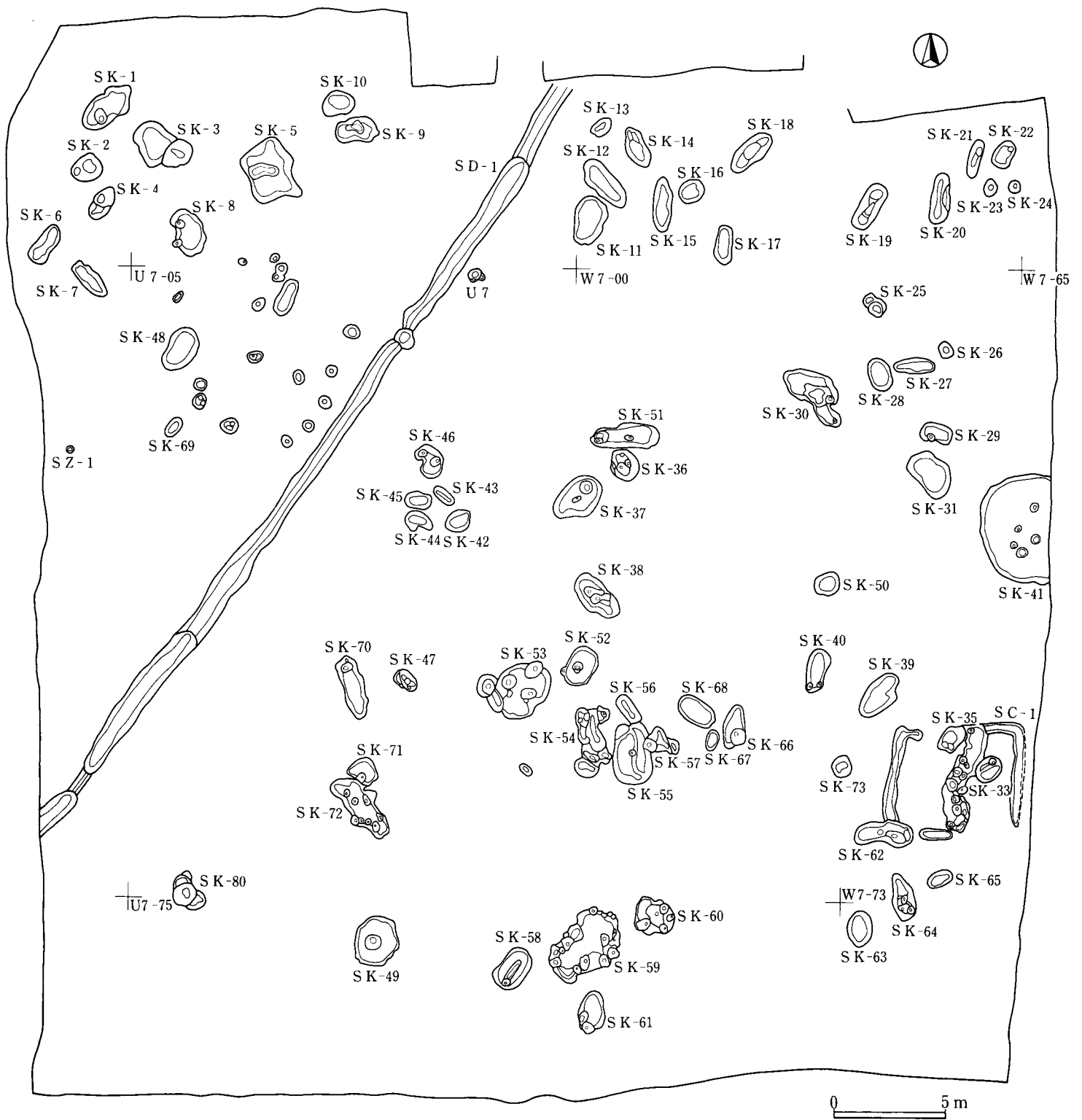
VI区（第22図，第117図～第121図）

集石土坑の数が多く、礫群との強い関連が見て取れる。縄文時代早期の土器が多く分布することから、いずれもこの時期に伴う遺構であると考えられる。

S K-1 土坑（第23図，図版8）

位置：U 6-84（礫群VIブロック内）

規模・形態：礫群調査後、その下位から検出された。平面長楕円形で長軸2.72m，短軸1.30mを測る。深さ0.10m～0.18mで、底面はほぼ平坦である。中央付近で径0.45m～0.70m，深さ0.42mのピット状の攪

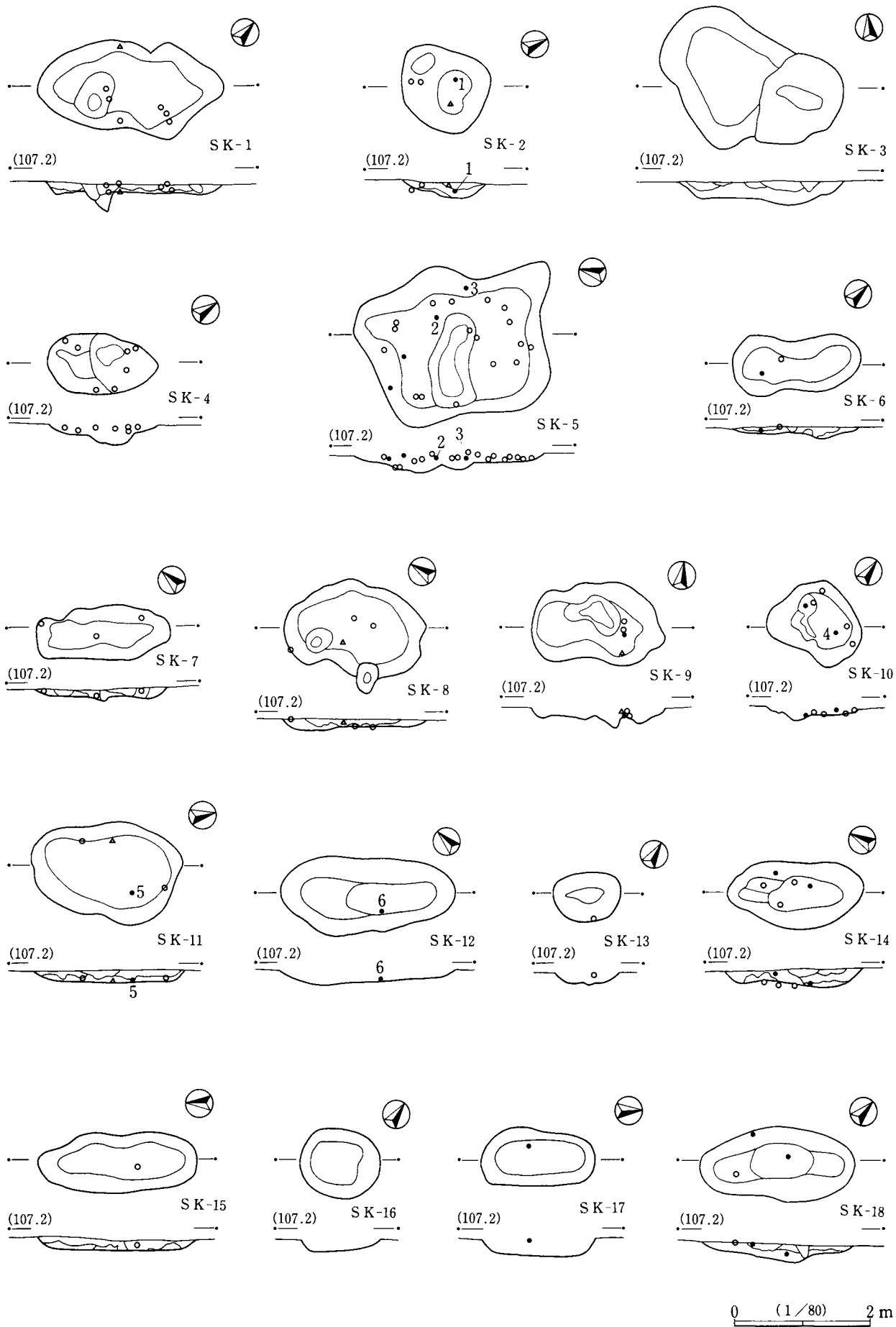


第22図 VI区縄文時代土坑群遺構配置図

乱を受ける。

覆土：暗褐色土と暗黄褐色土が堆積する。

遺物：黒曜石製の三角形素材剥片Ⅲ1点（第117図3），赤化した破碎礫6点，



第23図 VI区縄文時代土坑(1)

S K-2 土坑 (第23図, 図版8, 遺物: 第28図, 図版76)

位置: U 6-84・94 (礫群VIブロック内)

規模・形態: 礫群調査後にその下位から検出された。平面楕円形で径1.18m~1.45mを測る。深さ0.13m~0.25mで、南西に浅い段を有す。

覆土: 暗褐色土とローム粒を含む褐色土が主体的に堆積する。

遺物: 黒曜石1点, 赤化した完形礫2点, 竹之内式土器の破片が出土している。

S K-3 集石土坑 (第23図, 第24図, 図版8)

位置: U 6-85 (礫群VIブロック内)

規模・形態: 平面長楕円形で長軸2.70m, 短軸1.75mを測る。深さ0.24m~0.34mで、東側に一段深い落込みを有す。

覆土: 上層はロームブロックを含む暗黄褐色土と褐色土が、下層は暗黄褐色土が主体的に堆積する。

遺物: 黒曜石3点, 赤化した完形礫・破損礫268点 (第13表), 田戸上層式土器の破片が出土している。

S K-4 集石土坑 (第23図)

位置: U 6-94 (礫群VIブロック内)

規模・形態: 平面長楕円形で長軸1.60m, 短軸0.85mを測る。深さ0.20m~0.30mで、南側にやや浅い段を有す。

遺物: 赤化した完形礫・破砕礫7点

S K-5 集石土坑 (第23図, 遺物: 第28図, 図版76)

位置: U 6-86・96 (礫群VIブロック内)

規模・形態: 平面不整形で長軸2.80m, 短軸2.20mを測る。深さ0.10m~0.28mで、底面は凹凸を有す。

遺物: 赤化した完形礫・破砕礫17点, 竹之内式土器の破片が出土している。

S K-6 土坑 (第23図, 図版8)

位置: U 6-93・94 (礫群VIブロック内)

規模・形態: 礫群調査後にその下位から検出された。平面長楕円形で長軸1.86m, 短軸0.88mを測る。深さ0.10m~0.14mで、北東側がやや深く、底面がやや丸味を有す。

覆土: ローム粒を含む黒褐色土と暗黄褐色土が主体的に堆積する。

遺物: 赤化した完形礫1点, 撚糸文系土器の破片が出土している。

S K-7 土坑 (第23図, 図版8)

位置: U 6-94, U 7-04 (礫群VIブロック内)

規模・形態: 平面長楕円形で長軸1.94m, 短軸0.80mを測る。深さ0.10m~0.14mで、底面はやや凹凸を有す。

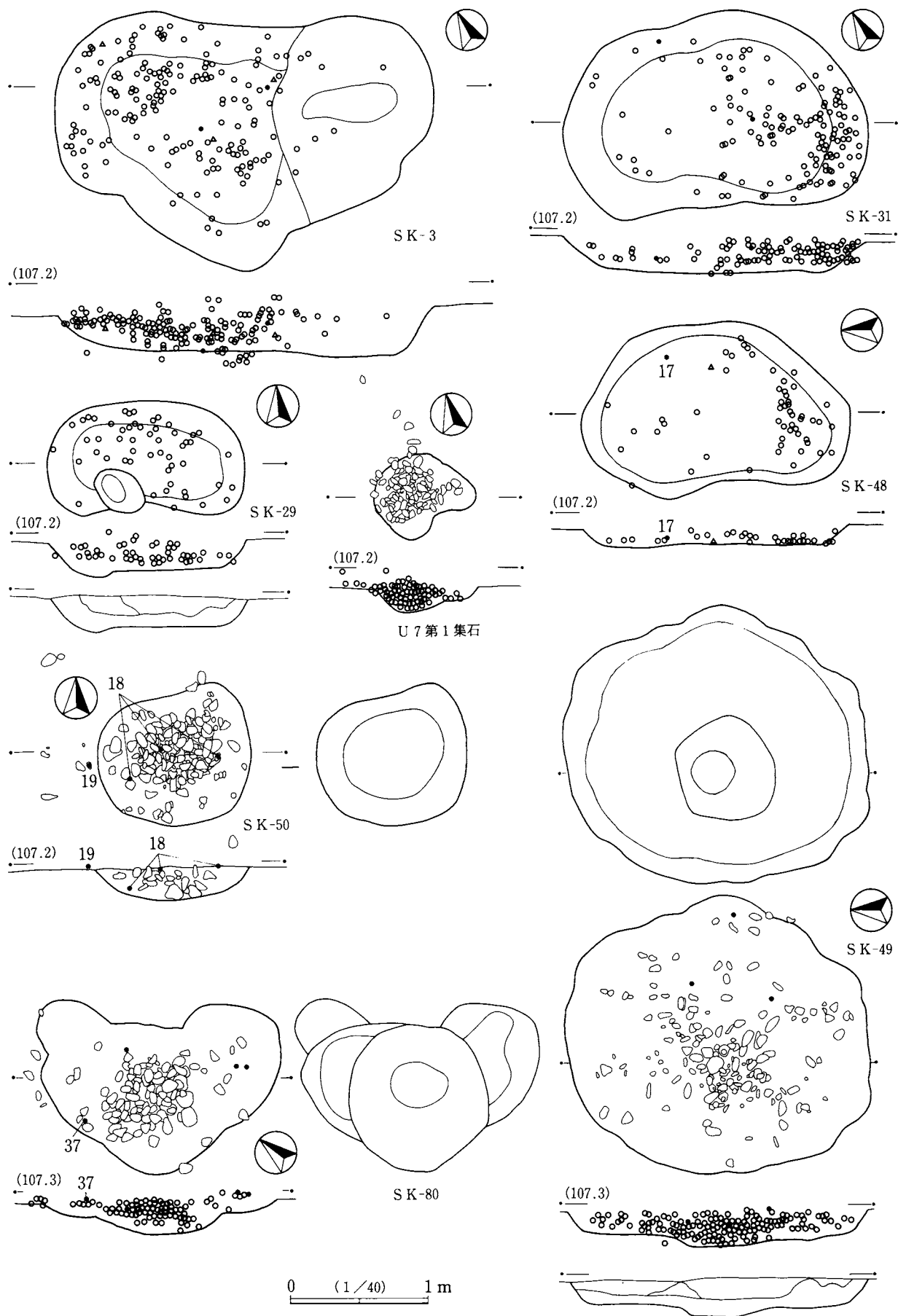
覆土: ロームブロックを含む黒褐色土とローム粒を含む暗黄褐色土が主体的に堆積する。

遺物: 赤化した完形礫・破砕礫3点

S K-8 土坑 (第23図)

位置: U 6-95 (礫群VIブロック内)

規模・形態: 平面長楕円形で長軸2.04m, 短軸1.32mを測る。深さ0.08m~0.15mで、底面はほぼ平坦である。



第24図 VI区縄文時代土坑(2)

覆土：ローム粒を含む暗褐色土と暗黄褐色土が堆積する。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫 3点

SK-9 土坑（第23図，図版9）

位置：U6-87（礫群VIブロック内）

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.93m，短軸1.14mを測る。深さ0.10m～0.28mで，底面は凹凸を有す。

遺物：黒曜石製三角形素材剥片III 1点，赤化した破碎礫 2点，田戸上層式土器の破片が出土している。

SK-10 土坑（第23図，図版9，遺物：第28図，図版76）

位置：U6-87（礫群VIブロック内）

規模・形態：礫群調査後，その下位から検出された。平面楕円形で径1.00m～1.40mを測る。深さ0.10m～0.20mで，底面はやや凹凸を有す。

遺物：赤化した破碎礫 4点，竹之内式土器の破片が出土している。

SK-11 土坑（第23図，遺物：第28図，図版76）

位置：W6-90（礫群VIブロック内）

規模・形態：礫群調査後にその下位から検出された。平面長楕円形で長軸2.08m，短軸1.40mを測る。深さ0.15mで，底面は平坦である。

覆土：上層はローム粒を含む暗褐色土と褐色土が，下層は暗黄褐色土が堆積する。

遺物：黒曜石 1点，赤化した破碎礫 2点

SK-12 土坑（第23図，遺物：第28図，図版76）

位置：W6-80・90（礫群VIブロック内）

規模・形態：平面長楕円形で長軸2.55m，短軸1.12mを測る。深さ0.12m～0.20mで，北西側がやや深い落込み状を呈す。

遺物：田戸下層式土器が出土している。

SK-13 土坑（第23図，図版9）

位置：W6-80（礫群VIブロック内）

規模・形態：平面楕円形で径0.70m～1.00mを測る。深さ0.12m～0.14mで，底面はやや凹凸を有す。

遺物：赤化した破碎礫 1点

SK-14 土坑（第23図）

位置：W6-80（礫群VIブロック内）

規模・形態：平面長楕円形で長軸2.00m，短軸0.95mを測る。深さ0.12m～0.25mで，北側に浅い段を有す。

覆土：黄褐色土と褐色土が主体的に堆積する。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫 3点，田戸下層式土器が出土している。

SK-15 土坑（第23図，図版9）

位置：W6-90・91（礫群VIブロック内）

規模・形態：平面長楕円形で長軸2.30m，短軸0.82mを測る。深さ0.17mで，底面はほぼ平坦である。

覆土：上層はローム粒を含む暗褐色土が，下層は暗黄褐色土と褐色土が堆積する。

遺物：赤化した破碎礫 1点

S K-16 土坑 (第23図, 図版 9)

位置: W 6-91 (礫群VIブロック内)

規模・形態: 平面楕円形で径0.90m~1.15mを測る。深さ0.15mで、底面はほぼ平坦である。

S K-17 土坑 (第23図)

位置: W 6-91 (礫群VIブロック内)

規模・形態: 平面長楕円形で長軸1.65m, 短軸0.82mを測る。深さ0.25mで、底面はほぼ平坦である。

遺物: 竹之内式土器が出土している。

S K-18 土坑 (第23図)

位置: W 6-81・91 (礫群VIブロック内)

規模・形態: 平面長楕円形で長軸2.25m, 短軸1.06mを測る。深さ0.10m~0.24mで、中央に一段深い落込みを有す。

覆土: ローム粒を含む黒褐色土と暗褐色土, 暗黄褐色土が堆積する。

遺物: 赤化した破碎礫 1点

S K-19 土坑 (第25図, 図版 9)

位置: W 6-93 (礫群VIブロック内)

規模・形態: 平面長楕円形で長軸2.18m, 短軸0.96mを測る。深さ0.15m~0.25mで、両端にやや深い落込みを有す。

S K-20 土坑 (第25図)

位置: W 6-84・94 (礫群VIブロック内)

規模・形態: 平面長楕円形で長軸2.22m, 短軸0.82mを測る。深さ0.12m~0.20mで、東側にやや浅い段を有す。

覆土: 上層はローム粒をブロック状に含む暗褐色土が, 下層はローム粒を含む黄褐色土が主体的に堆積する。

遺物: 竹之内式土器が出土している。

S K-21 土坑 (第25図, 図版 9)

位置: W 6-84 (礫群VIブロック内)

規模・形態: 平面長楕円形で長軸1.70m, 短軸0.52mを測る。深さ0.25m~0.32mで、北側に深い落込みを有す。

覆土: ローム粒をブロック状に含む黒褐色土が主体的に堆積する。

S K-22 土坑 (第25図, 図版 9)

位置: W 6-84 (礫群VIブロック内)

規模・形態: 平面長楕円形で長軸1.20m, 短軸0.80m, 深さ0.15mを測る。北東隅に径0.15m~0.20m, 深さ0.13mのピットを伴う。

覆土: 暗褐色土と暗黄褐色土が堆積する。

S K-23 土坑 (第25図)

位置: W 6-94 (礫群VIブロック内)

規模・形態: 平面楕円形で径0.56m~0.78mを測る。深さ0.20mで丸底である。

S K-24 土坑 (第23図)

位置：W 6-94 (礫群VIブロック内)

規模・形態：平面楕円形で径0.50m～0.52mを測る。深さ0.32mで、ほぼ丸底である。

S K-25 土坑 (第25図, 図版9)

位置：W 7-03 (礫群VIブロック内)

規模・形態：径0.70m～0.80mの平面楕円形に、長さ0.40m、幅0.50mの浅い掘込みが伴う、深さは0.22mで、底面はやや丸味を有す。

遺物：赤化した破碎礫1点

S K-26 土坑 (第25図)

位置：W 7-04 (礫群VIブロック内)

規模・形態：平面楕円形で径0.54m～0.80mを測る。深さ0.25mで、底面は丸底である。

遺物：赤化した破碎礫1点

S K-27 集石土坑 (第25図)

位置：W 7-13 (礫群VIブロック内)

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.84m、短軸0.65mを測る。深さ0.14mで、底面はほぼ平坦である。

覆土：上層はローム粒をブロック状に含む暗褐色土が、下層は暗黄褐色土が堆積する。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫21点

S K-28 土坑 (第25図)

位置：W 7-13 (礫群VIブロック内)

規模・形態：礫群調査後、その下位から検出された。平面長楕円形で長軸1.48m、短軸1.00mを測る。深さ0.20mで、底面はほぼ平坦である。

覆土：ローム粒を含む暗黄褐色土が主体的に堆積する。

遺物：赤化した破碎礫3点

S K-29 集石土坑 (第24図, 図版9)

位置：W 7-13・14 (礫群VIブロック内)

規模・形態：平面楕円形で長軸1.30m、短軸0.75mを測る。深さ0.20m～0.23mで、底面はほぼ平坦である。

覆土：ローム粒を斑紋状に含む黒褐色土と暗褐色土が主体的に堆積する。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫51点、礫石斧1点 (第121図34)

S K-30 集石土坑 (第25図, 第28図)

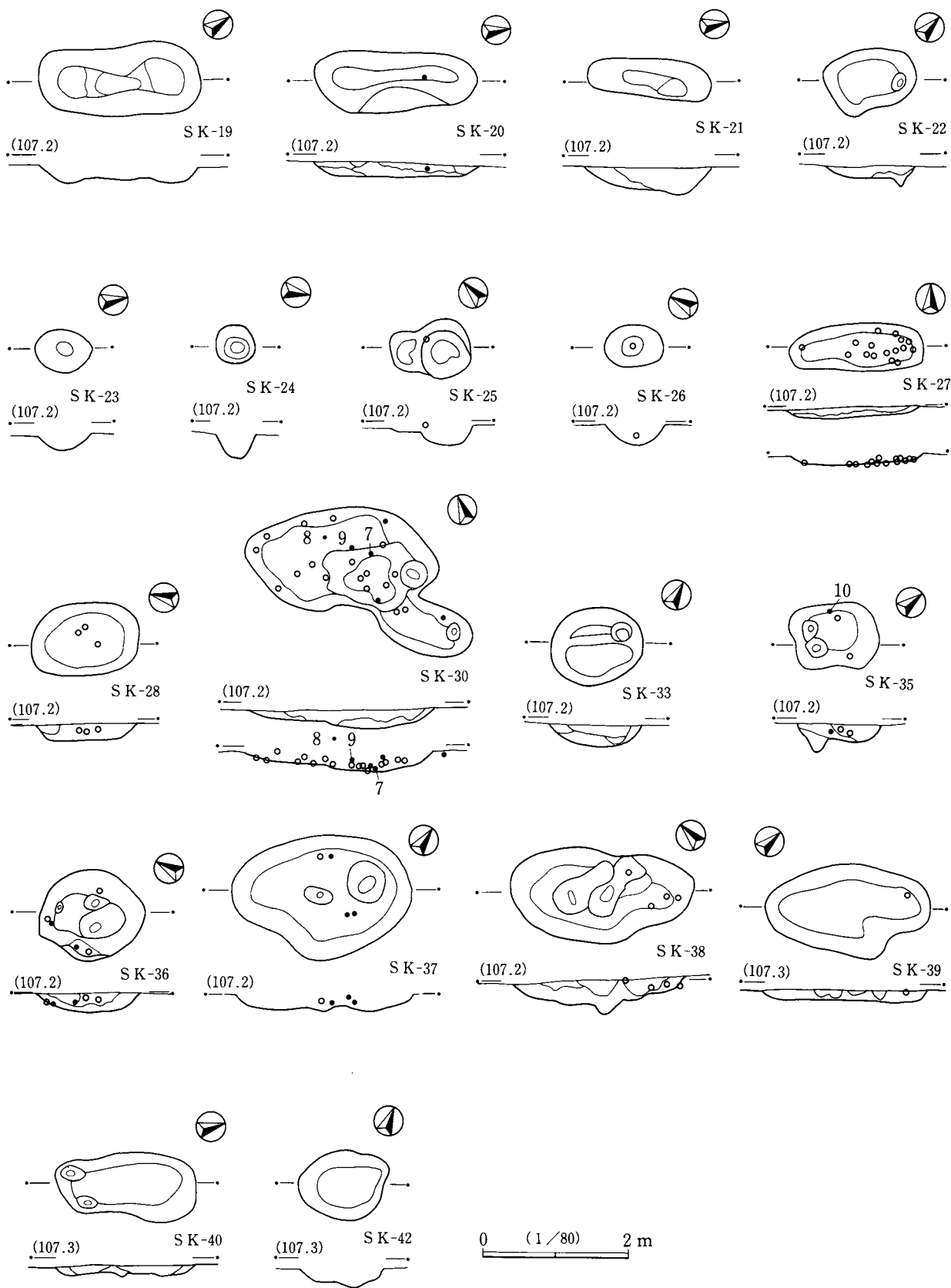
位置：W 7-12 (礫群VIブロック内)

規模・形態：長軸2.68m、短軸1.28m、深さ0.10m～0.24mの平面長楕円形の掘り方の南東に、長軸1.10m、短軸0.68m、深さ0.20mの平面長楕円形の掘り方が接する。両掘り方が接した箇所が一段深く落ち込む。

覆土：上層はローム粒をブロック状に含む暗褐色土と褐色土が、下層が暗黄褐色土が堆積する。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫22点、田戸下層式土器が出土している。

S K-31 集石土坑 (第24図)



第25図 VI区縄文時代土坑(3)

位置：W7-23・24（礫群VIブロック内）

規模・形態：平面長楕円形で長軸2.20m，短軸1.40mを測る。深さ0.22mで，底面はほぼ平坦である。

覆土：ローム粒を斑紋状に含む暗褐色土が主体的に堆積する。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫141点（第6表），田戸上層式土器が出土している。

SK-33 土坑（第25図）

位置：W7-54（礫群VIブロック内）

規模・形態：平面楕円形で径1.02m～1.16mを測る。深さ0.22m～0.24mで，北側にやや浅い段を有す。

覆土：上層はローム粒を斑紋状に含む黒褐色土が，下層は暗黄褐色土が主体的に堆積する。

SK-35 土坑（第25図，遺物：第28図，図版76）

位置：W7-54（礫群VIブロック内）

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.20m，短軸0.84mを測る。深さ0.22mで，ピット状の落込みを有す。

覆土：ローム粒を斑紋状に含む黒褐色土と褐色土が主体的に堆積する。

遺物：赤化した破碎礫3点，田戸下層式土器，田戸上層式土器が出土している。

SK-36 土坑（第25図，遺物：第28図）

位置：W7-30（礫群VIブロック内）

規模・形態：平面楕円形で径1.22m～1.48mを測る。深さ0.23mで，底面はやや丸味を有す。

覆土：黒褐色土と暗褐色土，暗黄褐色土が堆積する。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫3点，撚糸文系土器の破片が出土している。

SK-37 土坑（第25図）

位置：U7-29，W7-20（礫群VIブロック内）

規模・形態：礫群調査後にその下位から検出された。平面長楕円形で長軸2.44m，短軸1.65mを測る。深さ0.16m～0.24mで，ピット状の落込みを有す。

遺物：赤化した完形礫1点，撚糸文系土器，田戸上層式土器が出土している。

SK-38 土坑（第25図，図版10）

位置：W7-20（礫群VIブロック内）

規模・形態：平面長楕円形で長軸2.50m，短軸1.20mを測る。深さ0.18m～0.34mで，底面は凹凸を有す。

覆土：上層はローム粒をブロック状に含む黒褐色土が，下層は暗黄褐色土が主体的に堆積する。

遺物：赤化した破碎礫4点

SK-39 土坑（第25図，図版10）

位置：W7-43（礫群VIブロック内）

規模・形態：平面長他円形で長軸2.23m，短軸1.18mを測る。深さ0.12mで，底面はほぼ平坦である。

覆土：ローム粒を含む暗褐色土と，ローム粒を斑紋状に含む褐色土が主体的に堆積する。

遺物：赤化した破碎礫1点

SK-40 土坑（第25図）

位置：W7-42（礫群VIブロック内）

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.88m，短軸0.86mを測る。深さ0.11m～0.14mで，底面はやや凹凸を有す。

覆土：ローム粒をブロック状に含む黒褐色土と褐色土が堆積する。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫22点

S K-42 土坑 (第25図)

位置：U 7-28 (礫群VIブロック内)

規模・形態：平面楕円形で径0.94m～1.24mを測る。深さ0.18m～0.26mで、底面はやや凹凸を有す。

S K-43 土坑 (第26図)

位置：U 7-28 (礫群VIブロック内)

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.15m，短軸0.48mを測る。深さ0.28mで、底面はほぼ平坦である。

覆土：上層はローム粒をブロック状に含む黒褐色土が，下層は暗黄褐色土が堆積する。

S K-44 土坑 (第26図)

位置：U 7-28 (礫群VIブロック内)

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.30m，短軸1.40mを測る。深さ0.20mで、底面はほぼ平坦である。

覆土：上層はローム粒をブロック状に含む暗褐色土が，下層は暗黄褐色土が堆積する。

S K-45 土坑 (第26図)

位置：U 7-28 (礫群VIブロック内)

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.19m，短軸0.75mを測る。深さ0.20mで、底面はほぼ平坦である。

遺物：赤化した破碎礫1点

S K-46 土坑 (第26図)

位置：U 7-28 (礫群VIブロック内)

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.48m，短軸1.10mを測る。深さ0.11m～0.20mで、ピット状の落込みを有する。

覆土：上層はローム粒を含む黒褐色土が，下層はローム粒を斑紋状に含む暗黄褐色土が堆積する。

遺物：赤化した破碎礫1点

S K-47 土坑 (第26図)

位置：U 7-48 (礫群VIブロック内)

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.15m，短軸0.72mを測る。深さ0.12m～0.25mで、中央にピット状の落込みを，西側に浅い段を有す。

S K-48 集石土坑 (第24図)

位置：U 7-05・15 (礫群VIブロック内)

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.96m，短軸1.22mを測る。深さ0.12mで、底面はほぼ平坦である。

遺物：黒曜石1点，赤化した完形礫・破碎礫56点，田戸上層式土器が出土している。

S K-49 集石土坑 (第24図，図版10)

位置：U 7-77 (礫群VIブロック内)

規模・形態：平面楕円形で径1.98m～2.20mを測る。深さ0.18m～0.26mで、中央に浅い落込みを有す。

覆土：ローム粒を斑紋状に含む暗褐色土が主体的に堆積する。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫164点 (第13表)，撚糸文系土器が出土している。

S K-50 集石土坑 (第24図，図版10，遺物：第28図，図版76)

位置：W 7 - 32 (礫群VIブロック内)

規模・形態：平面楕円形で径0.90m~1.10mを測る。深さ0.24mで、底面はやや丸味を有す。礫は3層認められる。

覆土：黒色土粒を含む暗茶褐色土が堆積する。

遺物：赤化した完形礫・破砕礫174点 (第13表)、竹之内式土器が出土している。

S K - 51 土坑 (第26図, 遺物：第28図, 図版76)

位置：W 7 - 10 (礫群VIブロック内)

規模・形態：礫群を調査後、その下位から検出された。平面長楕円形で長軸3.10m, 短軸1.12mを測る。深さ0.10m~0.22mで、底面に浅いピット状の落込みを有す。

遺物：赤化した破損礫2点, 撚糸文系土器が出土している。

S K - 52 土坑 (第26図, 図版10)

位置：W 7 - 40 (礫群VIブロック内)

規模・形態：礫群調査後にその下位から検出された。平面長楕円形で長軸1.75m, 短軸1.30mを測る。深さ0.18m~0.32mで、中央にピット状の落込みを有す。

遺物：赤化した完形礫・破損礫8点, 撚糸文系土器が出土している。

S K - 53 土坑 (第26図, 図版10, 遺物：第28図, 図版76)

位置：U 7 - 49 (礫群VIブロック内)

規模・形態：礫群調査後にその下位から検出された。平面楕円形で長軸2.66m, 短軸2.14mを測る。深さ0.18mで、複数のピットが切り合う。また、西側にも径1.00m, 深さ0.30mの楕円形の掘込み2基と接する。

遺物：赤化した完形礫・破損礫15点, 井草II式土器, 田戸上層式土器が出土している。

S K - 54 土坑 (第26図, 遺物：第28図, 図版76)

位置：W 7 - 40・50 (礫群VIブロック内)

規模・形態：長軸1.90m, 短軸0.58m, 深さ0.18mの平面長楕円形の掘り方を中心に、径0.50m~1.00m, 深さ0.20m程の平面楕円形の掘り方5基が周囲に接する。

遺物：完形礫・破損礫2点, 黒曜石1点, 井草II式土器が出土している。

S K - 55 土坑 (第26図)

位置：W 7 - 50・51 (礫群VIブロック内)

規模・形態：平面長楕円形で長軸2.68m, 短軸1.68mを測る。深さ0.06m~0.10mで、東側に浅い段を、中央に径0.20m, 深さ0.26mのピットを有す。

重複関係：東側でSK-57と切り合う。

遺物：赤化した完形礫・破損礫3点

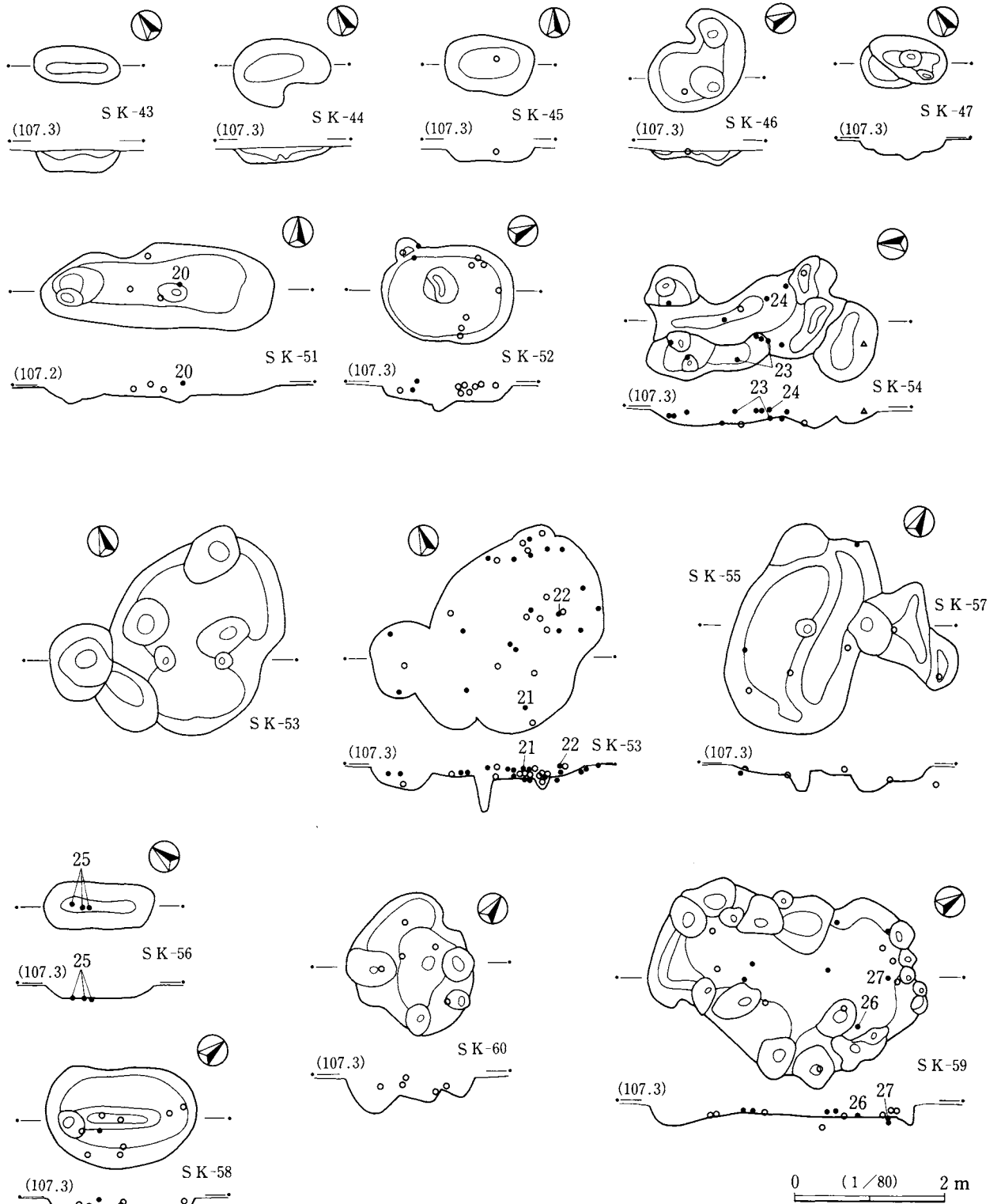
S K - 56 土坑 (第26図, 遺物：第28図, 図版76)

位置：W 7 - 40・50 (礫群VIブロック内)

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.44m, 短軸0.60mを測る。深さ0.16mで、底面は平坦である。

遺物：田戸上層式土器が出土している。

S K - 57 土坑 (第26図, 図版10)



第26図 VI区縄文時代土坑(4)

位置：W7-41・51（礫群VIブロック内）

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.5m，短軸1.02mを測る。深さ0.20m～0.30mで，東西に深い掘り方を有す。

重複関係：西側でSK-55と切り合う。

遺物：赤化した破損礫 2 点

S K-58 土坑 (第26図)

位置：U 7-79 (礫群VIブロック内)

規模・形態：礫群を調査後、その下位から検出された。平面長楕円形で、長軸1.98m、短軸1.27mを測る。深さ0.22m~0.28mで、中央に深い溝状の落ち込みを有す。

遺物：赤化した完形礫・破損礫 8 点、田戸上層式土器が出土している。

S K-59 土坑 (第26図, 図版10, 遺物：第28図, 図版76)

位置：U 7-79, W 7-70 (礫群VIブロック内)

規模・形態：礫群調査後、その下位から検出された。平面長楕円形で長軸3.70m、短軸2.28mを測る。深さ0.12m~0.28mで、掘り方の周囲にピット状ないし周溝状の落ち込みを有す。

遺物：赤化した完形礫・破損礫 9 点、礫石斧 1 点 (第147図-37)、井草II式土器が出土している。

S K-60 土坑 (第26図)

位置：W 7-70・71 (礫群VIブロック内)

規模・形態：平面楕円形で径1.68m~1.86mを測る。深さ0.10m~0.44mで、西側に浅い段と、周囲にピット状の落ち込みを有す。

遺物：赤化したものを含む破損礫 5 点、礫石斧 1 点 (第121図33)

S K-61 土坑 (第27図, 遺物：第28図, 図版76)

位置：W 7-80 (礫群VIブロック内)

規模・形態：礫群調査後、その下位から検出された。平面長楕円形で長軸1.98m、短軸1.14mを測る。深さ0.20m~0.34mで、南側にピット状の落ち込みを有す。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫 3 点、撚糸文系土器、沈線文系土器が出土している。

S K-62 土坑 (第27図)

位置：W 7-63 (礫群VIブロック内)

規模・形態：平面長楕円形で長軸2.60m、短軸1.08mを測る。深さ0.22m~0.30mで、底面にピット状の落ち込みを有す。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫 2 点

S K-63 土坑 (第27図, 図版10)

位置：W 7-73 (礫群VIブロック内)

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.58m、短軸1.14mを測る。深さ0.31mで、底面はほぼ平坦である。

遺物：赤化した完形礫 1 点、撚糸文系土器が出土している。

S K-64 土坑 (第27図)

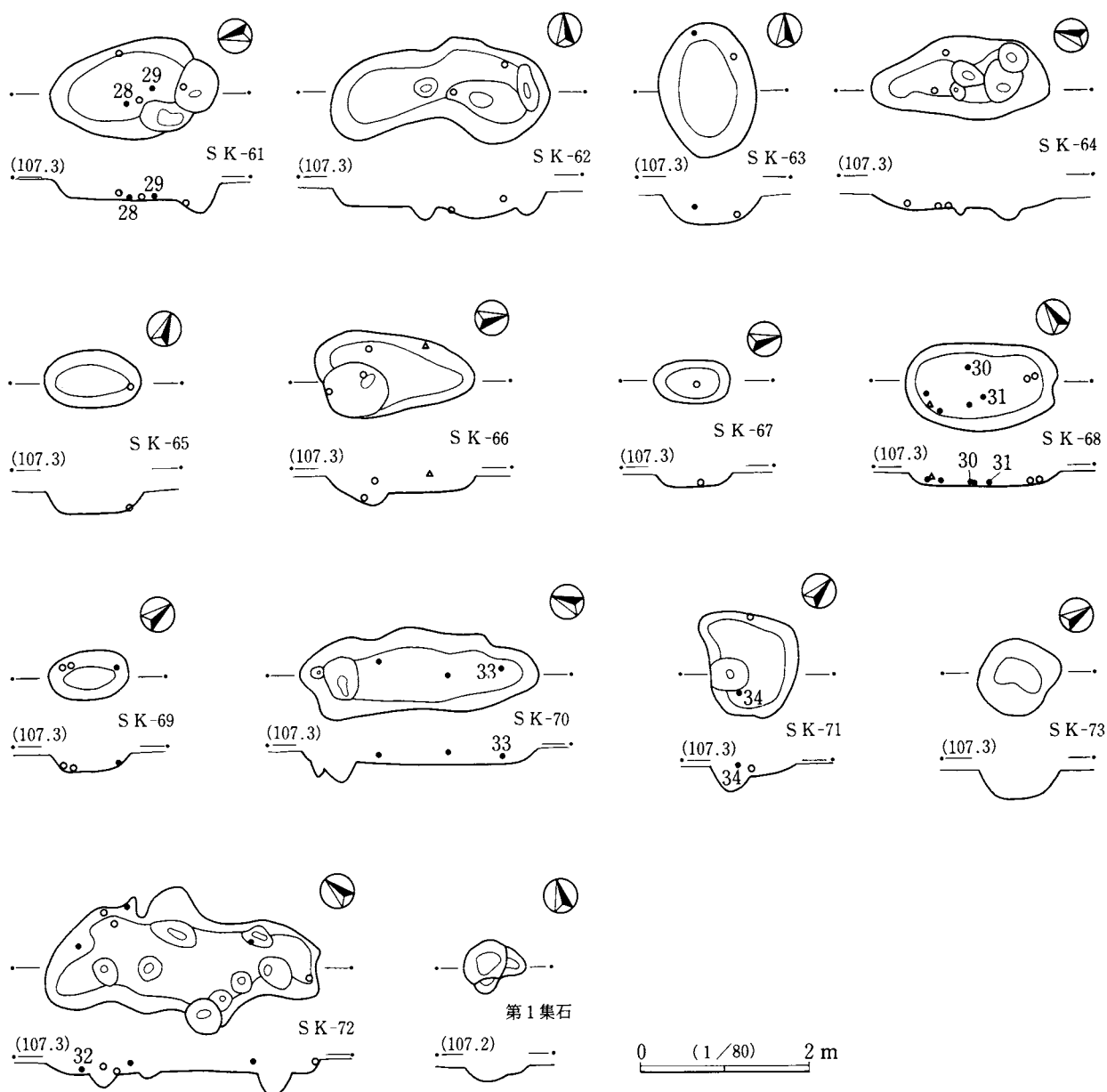
位置：W 7-63・73 (礫群VIブロック内)

規模・形態：礫群調査後、その下位から検出された。平面長楕円形で長軸2.12m、短軸1.00mを測る。深さ0.18m~0.30mで、底面にピットを有す。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫 3 点

S K-65 土坑 (第27図)

位置：W 7-64 (礫群VIブロック内)



第27図 VI区縄文時代土坑（5）

規模・形態：礫群調査後，その下位から検出された。平面長楕円形で長軸1.14m，短軸0.65mを測る。深さ0.26mで，底面はほぼ平坦である。

遺物：田戸上層式土器が出土している。

S K-66 土坑（第27図）

位置：W 7-41・51（礫群VIブロック内）

規模・形態：礫群調査後，その下位から検出された。平面長楕円形で長軸1.90m，短軸0.90mを測る。深さ0.18m～0.30mで，南側に深い落込みを有す。

遺物：赤化した完形礫・破碎礫3点，黒曜石1点

S K-67 土坑（第27図）

位置：W 7-51（礫群VIブロック内）

規模・形態：礫群調査後，その下位から検出された。平面長楕円形で長軸0.90m，短軸0.50mを測る。深

さ0.14mで、底面はほぼ平坦である。

S K-68 土坑 (第27図, 遺物: 第28図, 図版76)

位置: W 7-41・51 (礫群VIブロック内)

規模・形態: 礫群調査後, その下位から検出された。平面長楕円形で長軸1.78m, 短軸1.02mを測る。深さ0.15mで、底面はほぼ平坦である。

遺物: 赤化した完形礫・破碎礫3点, 黒曜石2点, 井草II式土器, 竹之内式土器, 田戸上層式土器が出土している。

S K-69 土坑 (第27図)

位置: U 7-15 (礫群VIブロック内)

規模・形態: 平面長楕円形で長軸0.94m, 短軸0.56mを測る。深さ0.20mで、底面はほぼ平坦である。

遺物: 赤化した破碎礫1点, 田戸上層式土器が出土している。

S K-70 土坑 (第27図, 遺物: 第28図, 図版76)

位置: U 7-47 (礫群VIブロック内)

規模・形態: 平面長楕円形で長軸2.82m, 短軸0.95mを測る。深さ0.18m~0.34mで、北側でピット状の落込みを伴う。

遺物: 井草II式土器を出土している。

S K-71 土坑 (第27図, 遺物: 第28図, 図版76)

位置: U 7-57 (礫群VIブロック内)

規模・形態: 平面長楕円形で長軸1.38m, 短軸1.07mを測る。深さ0.12m~0.26mで、南側でピット状の落込みを伴う。

遺物: 赤化した破碎礫1点, 夏島式土器を出土している。

S K-72 土坑 (第27図, 遺物: 第28図, 図版76)

位置: U 7-57・58 (礫群VIブロック内)

規模・形態: 平面長楕円形で長軸3.25m, 短軸1.40mを測る。深さ0.14m~0.38mで、立ち上がり付近にかけてピット状の落込みを複数有す。

遺物: 赤化した破碎礫4点, 夏島式土器, 田戸上層式土器が出土している。

S K-73 土坑 (第27図)

位置: W 7-52・53 (礫群VIブロック内)

規模・形態: 平面楕円形で径0.88m~1.0mを測る。深さ0.20mで、底面はほぼ平坦である。

S K-80 集石土坑 (第24図, 図版10, 遺物: 第29図, 図版77)

位置: U 7-65・75 (礫群VIブロック内)

規模・形態: 平面長楕円形で長軸1.75m, 短軸1.04mを測る。深さ0.06m~0.20mで、東西に浅い段を有す。

遺物: 赤化した完形礫・破碎礫107点 (第13表), 撚糸文系土器, 田戸上層式土器が出土している。

U 7第1集石 集石土坑 (第27図)

位置: U 7-08 (礫群VIブロック内)

規模・形態: 平面長楕円形で長軸0.74m, 短軸0.69mを測る。深さ0.10m~0.20mで、東と南に浅い段を有す。

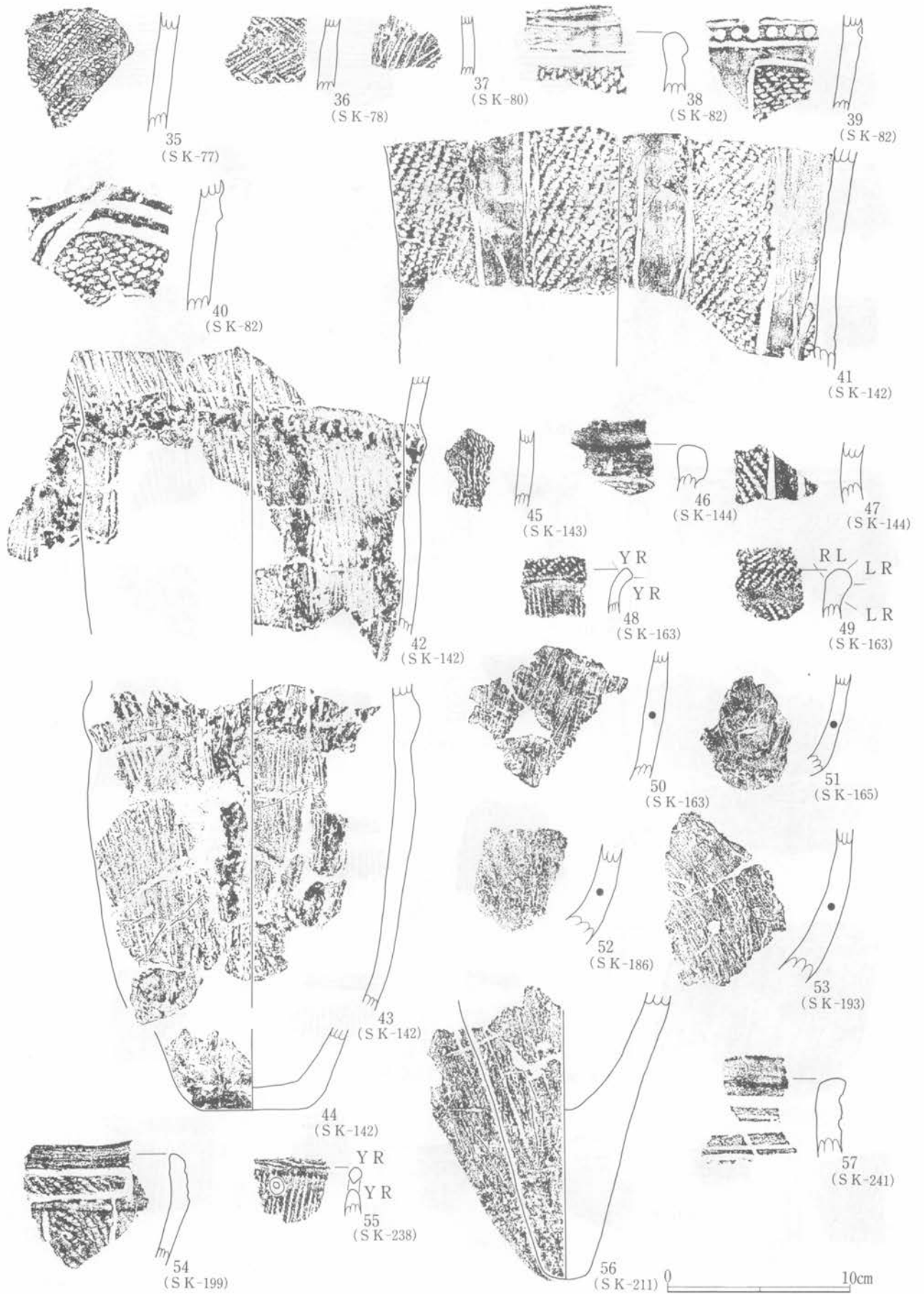
2. 遺物

(1) 遺構出土の遺物 (第28図～第30図, 図版76～78)

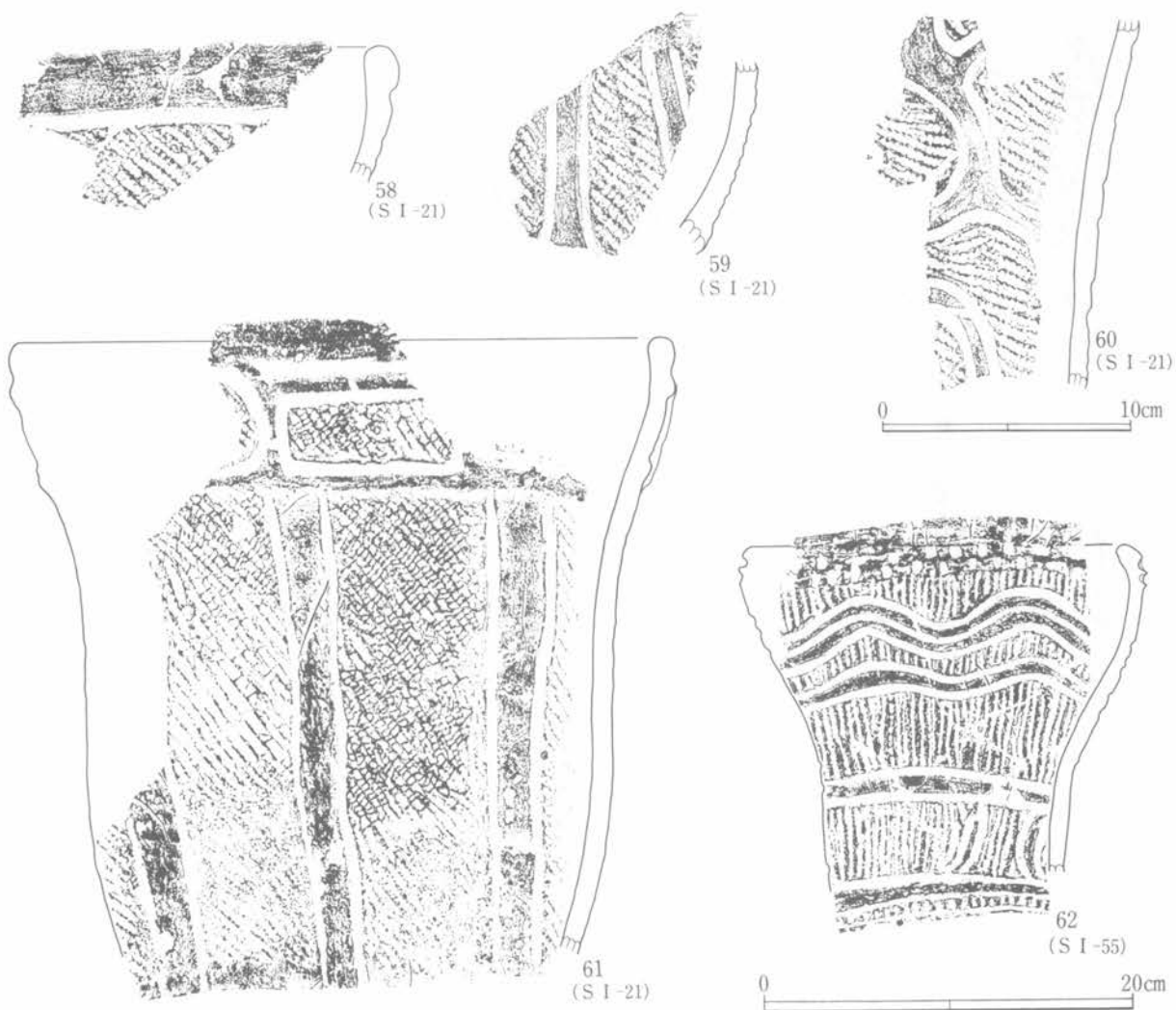
縄文時代の遺構からは、縄文土器、石器、礫などが出土している。石器、礫については、各遺構ごとの組成、属性を表にまとめたため、ここでは触れないことにする。ここでは縄文土器についてのみ記述を行う。

1はSK-2出土のものである。器面に強い擦痕が見られる。胎土には砂を含み、焼成は良好で明褐色を呈する。竹之内式土器の底部付近の破片である。2, 3はSK-5出土のものである。横位の細い沈線が見られる。3は破片の下位に沈線による斜格子文が施されている。胎土、焼成は1に類似し、1と同時期のものと考えられる。5はSK-11出土の口縁部破片である。焼成はやや悪く、器面に擦痕が見られる。胎土には繊維を少し含み、暗褐色である。6はSK-12出土の尖底部破片である。尖底部は肥厚せず、比較的鋭角である。胎土には砂、繊維を含む。7～9はSK-30出土の口縁部破片である。口唇部には横位のナデ、胴部には縦位の擦痕が見られる。胎土に繊維を混入する。9は底部破片で、丸底に近い平底になると考えられる。胎土は少し繊維を含む。何れも褐色を呈する。5～9は田戸上層式に属するものと考えられる。11は、SK-36出土の撚糸文系土器の胴部破片である。撚糸文が間隔を空けて縦位に施されている。12～15はSK-41出土の破片である。12, 13は同一個体であると考えられる。胴部は横方向のケズリによる擦痕が見られ、口唇部はナデが施されている。胎土には石英粒子、砂を含むが緻密で、焼成は良好である。14, 15は胴部破片である。縦位の間隔の空いた撚糸文が施されている。14, 15は稲荷台式土器であると考えられ、12, 13も同様のものである可能性が高い。18, 19はSK-50出土のものである。18は底部付近の破片で、19は口縁部の破片である。口唇部はやや肥厚し、口唇部直下から撚糸文が施されている。補修孔が見られる。20はSK-51-1から、21, 22はSK-53から、24はSK-54からそれぞれ出土している。21, 23は口縁部破片である。いずれも撚糸文が施されており、21は口唇部に刻目が、23には撚糸文がそれぞれ施されている。井草II式土器に比定されよう。25は、内外面とも、口唇部周辺に横ナデが施されており、胴部には縦方向の強い擦痕が見られる。田戸上層式に比定される。26, 27はSK-59出土のものである。27は口唇部が少し肥厚し、撚糸文が施されるのに対し、26はそれがほとんど見られない。26は夏島式土器、27は井草II式土器に比定される。29はSK-61出土のもので、撚糸文系土器の胴部破片である。30はSK-68出土のもので、口唇部、胴部に撚糸文が施されており、井草II式土器に比定される。31はSK-68出土のものである。12と類似した特徴を持ち、同様の時期のものと考えられる。32はSK-72出土の資料で、小型で無文の資料である。撚糸文系土器に属する可能性が高い。33はSK-70出土の資料で、口唇部に撚糸文が施される。34はSK-71出土のもので、外面は撚糸文の原体により縦位の条線を描いたものと考えられる。

35は、SK-77出土の胴部破片で、縄文時代中期初頭の土器である。36はSK-78出土で、羽状縄文と結節文が見られる。縄文時代前期末葉の資料である。37はSK-80のもので、撚糸文系土器の底部付近の破片である。38, 39, 40はSK-82出土である。加曾利E式土器である。41はSK-142出土の資料で、加曾利EII式土器の胴部破片である。42, 43, 44は同一個体であると考えられ、曾利式土器である。隆帯を横位、縦位に配し、刻目を施している。45はSK-143から検出された撚糸文系土器胴部破片である。46, 47はSK-144出土の加曾利E式土器の口縁部、胴部破片である。48, 49はSK-163から出土している。



第29図 遺構出土縄文土器 (2)

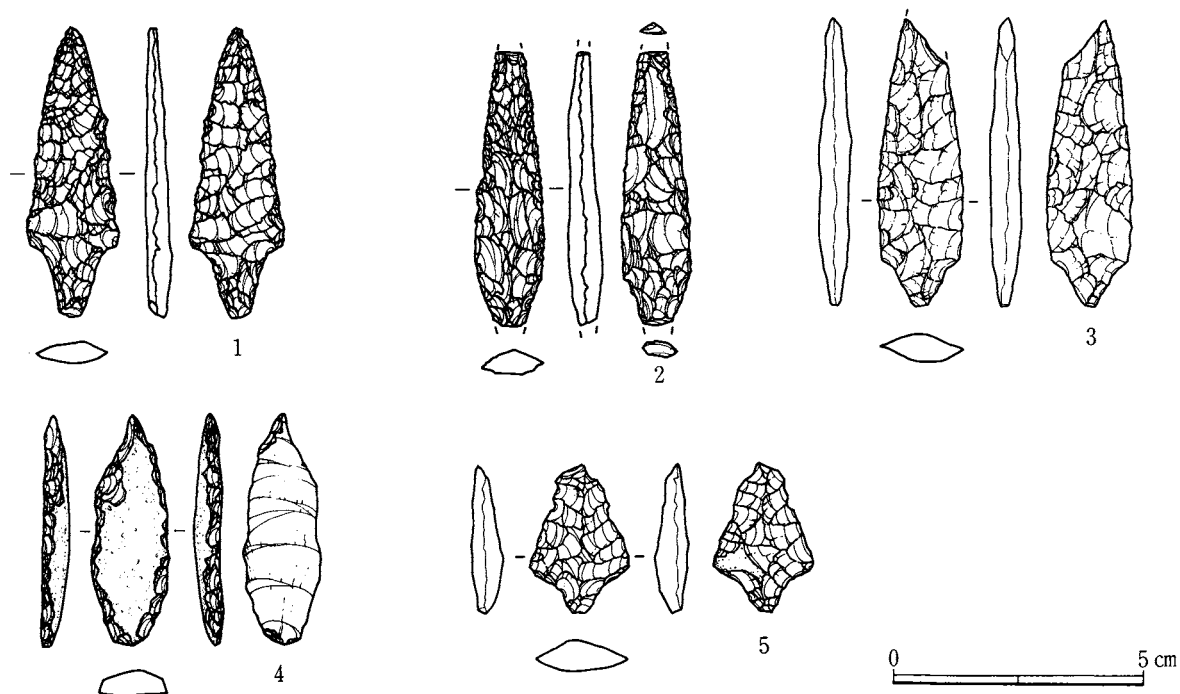


第30図 遺構出土縄文土器（3）

48は口縁部が強く外反しており、口唇部には縄文が施され、内面にまで続いている。胴部にはY Rの捺糸文が施されている。49は口唇部が強く肥厚しており、縄文が施されている。胴部にもR Lの縄文が施されている。井草I式土器であると考えられる。50は163から出土している。田戸上層式土器の胴部破片である。51はS K-186出土の田戸上層式土器の尖底部付近の破片で、丸底に近い尖底であろう。52はS K-186出土のものである。尖底部付近の破片で、胎土に砂を含み、繊維は含まない。稲荷台式土器であると考えられる。53はS K-193出土の底部付近の破片である。胎土や擦痕の状況から、稲荷台式土器に比定される可能性が高い。54はS K-199出土の加曾利E式土器である。55は、S K-238から出土している捺糸文系土器で、井草II式土器であると考えられる。56はS K-211から、57はS K-241からそれぞれ出土している。56は田戸下層式土器の尖底部破片で、先端が著しく肥厚する。57はやはり田戸下層式土器の口縁部破片で、横位沈線により文様が構成されている。

58~61はS I-21土坑出土の土器である。いずれも加曾利E式である。61は土坑内に埋設されたように検出された個体で、加曾利E II式に比定される。口縁部付近は被熱しており脆く、底部は欠損している。

62はS I-55出土の土器で、床面下に埋納された形で検出されており、いわゆる埋甕であろう。外面は横位の沈線文、刺突文により文様が構成されており、地文は捺糸文である。底部は欠損している。加曾利



第31図 縄文時代草創期石器

E II式土器である。

(2) 包含層出土の遺物

1) 縄文時代草創期の遺物 (第31図, 図版64)

縄文時代草創期に属すると考えられる石器が5点出土しており、いずれも有舌尖頭器である。1, 5が後世の住居跡の覆土中からの出土, 2が表面採集, 他がグリッド出土のもので、遺構を伴う出土ではなかった。

1は石材が珪質頁岩で、全長57.4mm、幅18.2mm、厚さ4.9mmである。表面、裏面とも右側部に微調整痕が確認できる。2は現存する全長が54.5mm、幅14.0mm、7.0mmである。細身で比較的肉厚であり、先端部と舌部が欠損している。表面の左右側に微調整痕が確認できる。石材は頁岩である。3は現存する全長が56.9mm、幅16.5mm、厚さ6.3mmである。先端が欠損している。石材は安山岩で、表面の風化が進んでいるため、微細な調整は明瞭ではないが、最終調整は左側縁に加えられているようである。2, 3は舌部が三角舌に近い形態で、古相を示そう。4は表面に自然面を裏面に主要剥裏面を残す個体である。縦長の剥片を縦位に用いており、整形および調整の剥離は腹面側から行われている。舌部が明瞭に作出されてはいない。石材は安山岩である。形態からは草創期の遺物と断定できないが、便宜的にここに含めておいた。5は、全長28.7mm、幅19.5mm、厚さ6.4mmで、他の例と比較して短いのが特徴である。本来1と同様の形態であったものが、先端および舌部が欠損した後に、再生を施したものと考えられる。石材は珪質頁岩である。

2) 縄文土器 (第32図～第82図, 図版40～63)

分類方法

今回の調査では、礫群、集石土坑などに伴う遺物包含層が検出され、縄文時代早期の撚糸文系土器から沈線文系土器、前期末から中期初頭の土器、中期後葉の土器に位置づけられる資料がまとまって検出された。また、点数は少ないが中期前葉及び、後期中葉に比定される資料もあり、それらを踏まえて、久野遺跡から出土した縄文土器を第1群から第8群に分類した。

第1群土器 撚糸文土器群

第1類土器 井草I式土器、井草II式土器、夏島式土器に比定される土器で、撚糸文系土器前葉～中葉に位置づけられる資料である。

第2類土器 大浦山式土器に比定される資料である。

第3類土器 器面は無文で縦位もしくは横位の擦痕が見られる。縄文時代早期、撚糸文系土器後葉に位置づけられると考えられ、稻荷台式土器、稻荷原式土器、平坂式土器などに比定されるものと見られる。

第2群土器 沈線文土器群

第1類土器 沈線文土器群前葉三戸式土器の古いタイプに位置づけられる例である。東北地方南部に分布する竹之内式土器と極めて類似した文様形態であることから、本文では竹之内式としている。

第2類土器 沈線文土器群中葉の田戸下層式土器に比定される資料である。

第3類土器 胎土に繊維を含み器面に雑な擦痕が見られる、底部は丸底に近い尖底から平底に近い丸底である。横位隆線が巡り、刻み目が施される例も見られる。沈線文系土器後葉の田戸上層式土器～条痕文系土器初頭の子母口式に比定されるものと考えられる。

第3群土器 押型文系土器に比定される土器群。

第4群土器 縄文時代前期前葉の関山式土器に比定される資料である。

第5群土器 縄文時代前期後葉～縄文時代中期初頭の土器群。

第1類土器 縄文時代前期後葉の浮島式、諸磯式土器に比定される資料である。

第2類土器 縄文時代前期末葉の土器に比定される資料である。外面のほぼ全体に縄文が施文されている例で、羽状縄文や結節文が横位に展開している。口縁部は平縁で、装飾のないもの、折り返し口縁のもの、頸部が屈曲しながら外反するものなどが見られる。

第3類土器 縄文時代中期初頭の土器群である。五領ヶ台式土器に比定される一群を第3類としている。器面に縄文が施され、結節文が縦位に展開する例もここに分類した。

第6群土器 縄文時代中期中葉～中期後葉の土器で、阿玉台式土器～加曾利E式土器・曾利式土器を含む。

第7群土器 縄文時代後期中葉の土器で、加曾利B式土器に比定される資料である。

第1群・第2類に分類した例については、主たる文様がほとんどないため、分類、位置づけが難しく、撚糸文系土器の中葉～沈線文系土器中葉までの、かなり広い時間幅の資料を含む可能性がある。それらの資料については、本文中でそれぞれ指摘することにする。

また、縄文時代前期と中期との区分については、現在のところ不明な点が多いが、東北地方における大木6式と7a式の区分と、関東地方における区分を対比した上で、本文では、横方向施文から縦方向施文・柱状区画へと文様構成が変化した段階をもって中期への移行と捉えるものとする。このことについては、

古くは山内清男の論述の中に大木6式の横方向の縄文施文と大木7a式の縦方向の縄文施文に関する記載が見られる¹⁾。また、小林謙一による八辺貝塚、大原内貝塚出土土器の分析の成果から、東北地方と関東地方それぞれにおける前期から中期へ変遷を整合性を重視して対比した場合、縄文の横方向施文から縦方向施文へ移行する段階が両地域において共通する括期としてとらえるのが妥当であるとしている²⁾。しかしその一方で、横方向施文の縄文・結節文を持つ土器が中期初頭まで残存するという所見も見られることから、検討の余地はあろう。

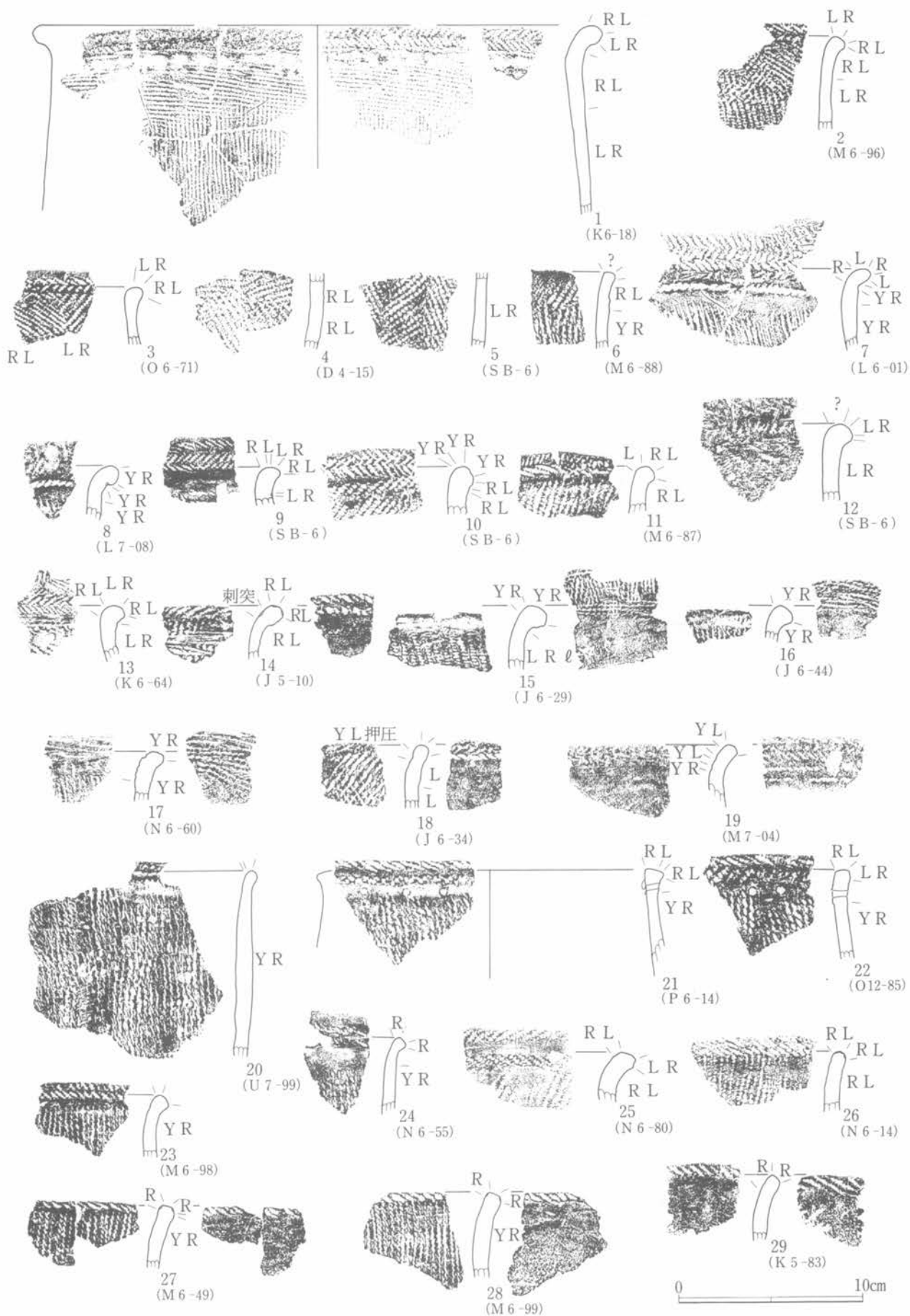
第1群 撚糸文土器群（第32図～第47図，図版40～47）

第1類 井草I式～夏島式土器（第32図～第42図，図版40～45）

1は比較的大型の胴部上半の破片である。胴部にわずかな張りをもたせ、口縁部は外反して口唇部が肥厚する。口唇部、頸部、胴部に縄文が施されている。口唇部の施文は頂部から外面にかけて行われ、口唇部直下には指頭の圧痕が認められる。内面は口縁部から頸部にかけて横方向の調整が顕著であるが、胴部については口縁部ほど鮮明には残っていない。胎土に少量の雲母と多めの長石粒が認められ、色調は暗い黄褐色を示す。口径は40cm内外になると推定される。2・3は接合しないものの同一個体である。口縁部の外側への反りは小さく、頸部から胴部は寸胴になる。口唇部、頸部、胴部に縄文が施され、頸部への施文は羽状構成になる。5は頸部の破片である。6は口縁部が胴部からわずかに反って開いている。口唇部、頸部には斜行する縄文が施され、胴部には縦走する縄文が認められる。7は口唇部が強く屈曲して外側に開き、胴部にやや張りをもつ器形である。口唇部から内面上部にかけて縄文が施され、口唇部直下の頸部に撚紐の押圧縄文が巡り、胴部は撚糸文が施文される。口唇部内面の縄文施文部の下は、横方向の調整が施され、同様な調整が胴部へと続いている。色調は赤褐色で焼成は良い。8も7と近似した構成をとるが、撚紐押圧の下位には指頭の圧痕が存在する。9は丸頭状の口唇部の頂部からやや内側にまで縄文が施され、口唇部直下には横方向のナデが入る。10は口縁部の屈曲が弱く、口唇部の下位から頸部にかけて縄文が施される。11は口唇部内面以下に横方向のナデが認められる。12は口唇部がかなり肥厚するものであるが、器表面の保存状態が不良である。13～19は口唇部の内側に施文が及ぶものである。13・15・16・17は口縁部が外反して口縁部が肥厚するが、14・18・19はわずかに反って口唇部が丸頭状になる。19は外面頸部が横方向のナデによって無文になっている。

20～24は口縁部の外反が顕著でなく、口唇部もわずかに肥厚するにとどまるものである。20は口唇部と口唇部直下から胴部に撚糸文の施文が行われている。21・22は同一個体である。口唇部に縄文を施文し、頸部に円孔を開け、胴部には撚糸文が施される。頸部に一定間隔で穿たれた円孔は、焼成前に表面から内側に棒状具の刺突によって施したものである。また、頸部は孔を開ける前に横方向のナデが加えられている。23・24・27・28は口唇部に縄文、そして胴部には撚糸文をそれぞれ施文している。25・26は口唇部と胴部に縄文が施文されるものである。29は頸部が無文になっている。

30は肥厚外反した口唇部に撚糸文を施し、口唇部外面端部から胴部にかけても縦走する撚糸文が施文されている。口唇部直下の横方向のナデは、縦走の撚糸文が施される前に行われ、施文後はそのままになっている。31～43は口唇部の外反が弱く、口唇部の肥厚も小さくなる器形である。31は口唇部上部と、頸部から胴部に撚糸文を施しているもので、33～43までが同じ構成をとる。また、47・49～55も口唇部撚糸文、



第32図 第1群・第1類縄文土器(1)

胴部も捺糸文の施文が行われている。

44は口唇部の上端が削り状の調整により平坦になっており、口唇前部に縄文が施文されている。口唇部直下は横方向にナデられ、胴部に縦走する縄文が施される。45は口唇部が丸頭を呈し、上端から全面側と、胴部に縄文が施文される。口唇部の下に棒状工具によるナデが行われた痕跡を残している。

46は口唇部に縄文の、そして胴部には捺糸文の施文が行われている。49～55は口唇部と胴部に捺糸文が施されるもので、口唇部の肥厚は顕著ではない。52は口縁部が内斜し、胴部上位から口縁部にかけてすぼまる器形と考えられる。

56～60は口唇部がわずかに肥厚するものの反り方は弱く、口唇部及び胴部共に縄文の施文が認められるものである。58はほかと比較してやや口唇部の肥厚が目立ち、頸部がつくられ、そこに横方向のナデが施されている。いずれも特徴的な混和物は含まず、焼成は普通である。

61～67, 70は口唇部の肥厚が弱く、胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形になる。61・62は、ほとんど肥厚しない口唇部と胴部に捺糸文が施される。63～65, 67, 70は口唇上端の丸味が顕著でなく、むしろ角頭状を呈しており、口唇部及び胴部共に縄文が施文されている。66は、口唇部が肥厚せずに弱く外反している。68は、わずかに肥厚する口唇部が外反している。口唇部と胴部に縄文が施されている。

71, 72は、口唇部がわずかに肥厚し、外反している。口唇部と胴部に連続して捺糸文が施されている。

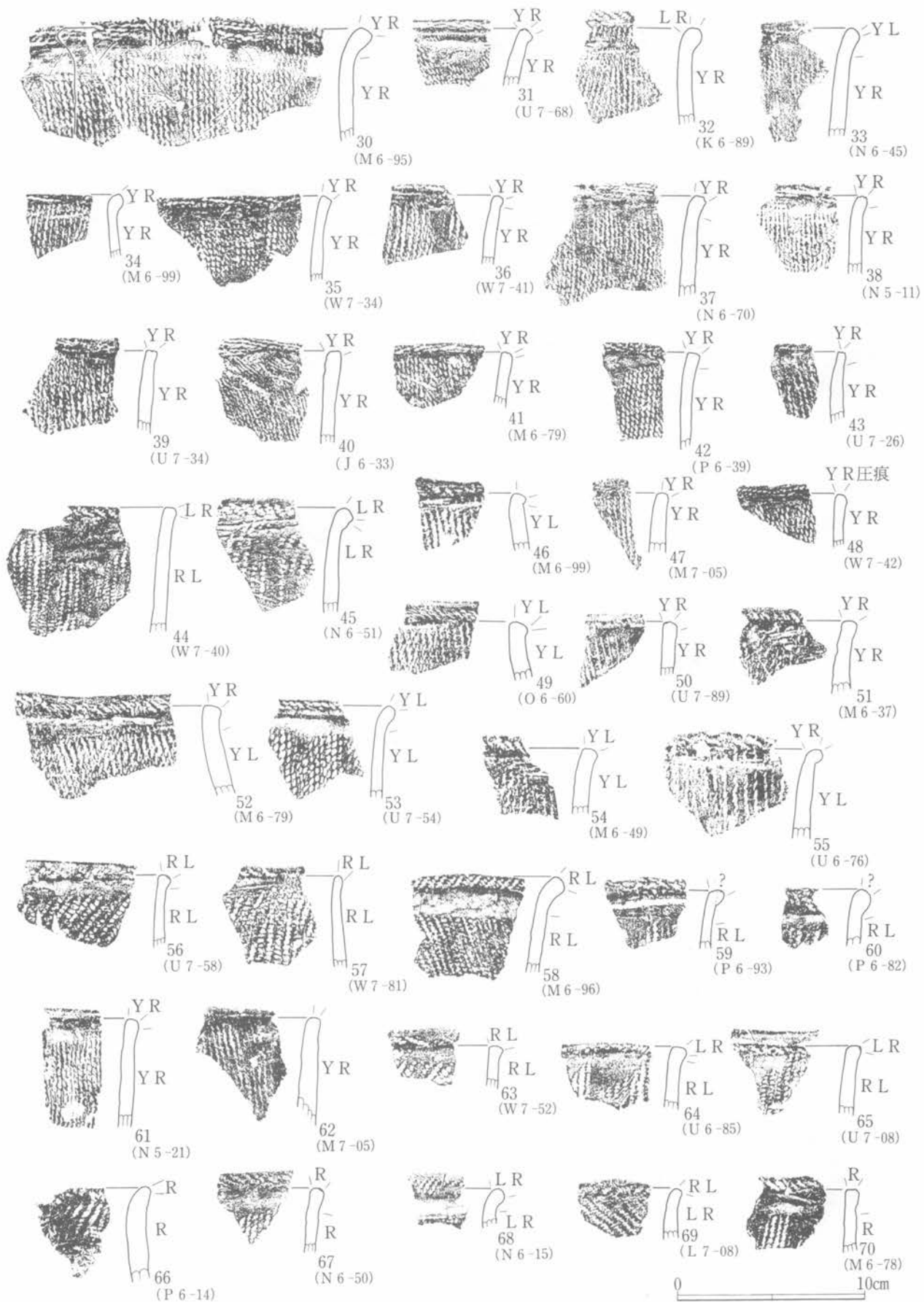
73～78は口縁部がわずかに外反するものの、口唇部の肥厚が弱いものである。73・76は胴部から開くように口縁部につながるが、ほかは一度すぼまって頸部をもつ形になる。とくに78は頸部が明瞭である。いずれも口唇部頂部から胴部にかけて、単一の原体による捺糸文が施されている。相対的に焼成はやや甘く、色調は黄褐色を示す。内面の調整は横方向のなでであるが、焼成が甘いこともあり、その保存状態は不良である。

79～88は胴部から口縁部にかけて開きながら立ち上がり、口縁部は肥厚しない。80・81は口唇部のみを小さく外傾させるが、頸部は明瞭ではない。79・83・84は口唇部の上面が平坦で角頭状の観を呈している。口唇頂部から胴部にかけて捺糸文の施文が行われるが、条間隔はそれぞれ異なる。内面調整は横方向に行われ、ナデか削りに近い調整痕をとどめている。

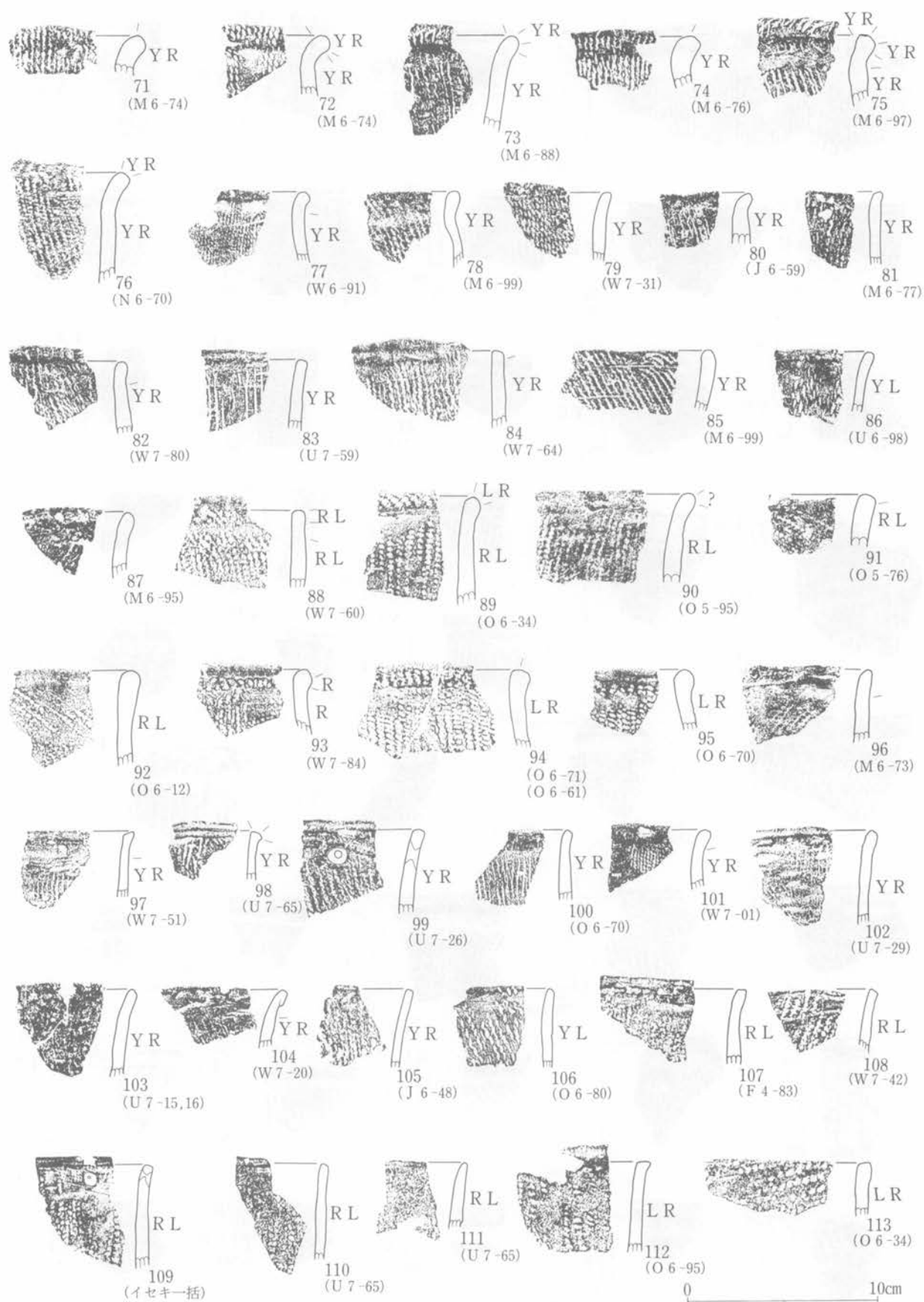
89は若干口唇部が膨らみ、口唇部と胴部に縄文を施している。

90～95は口縁部の外反が弱く、口唇部が丸頭になるものである。口唇部外面から胴部にかけて縄文が施文され、口唇頂部はナデ調整が施される。

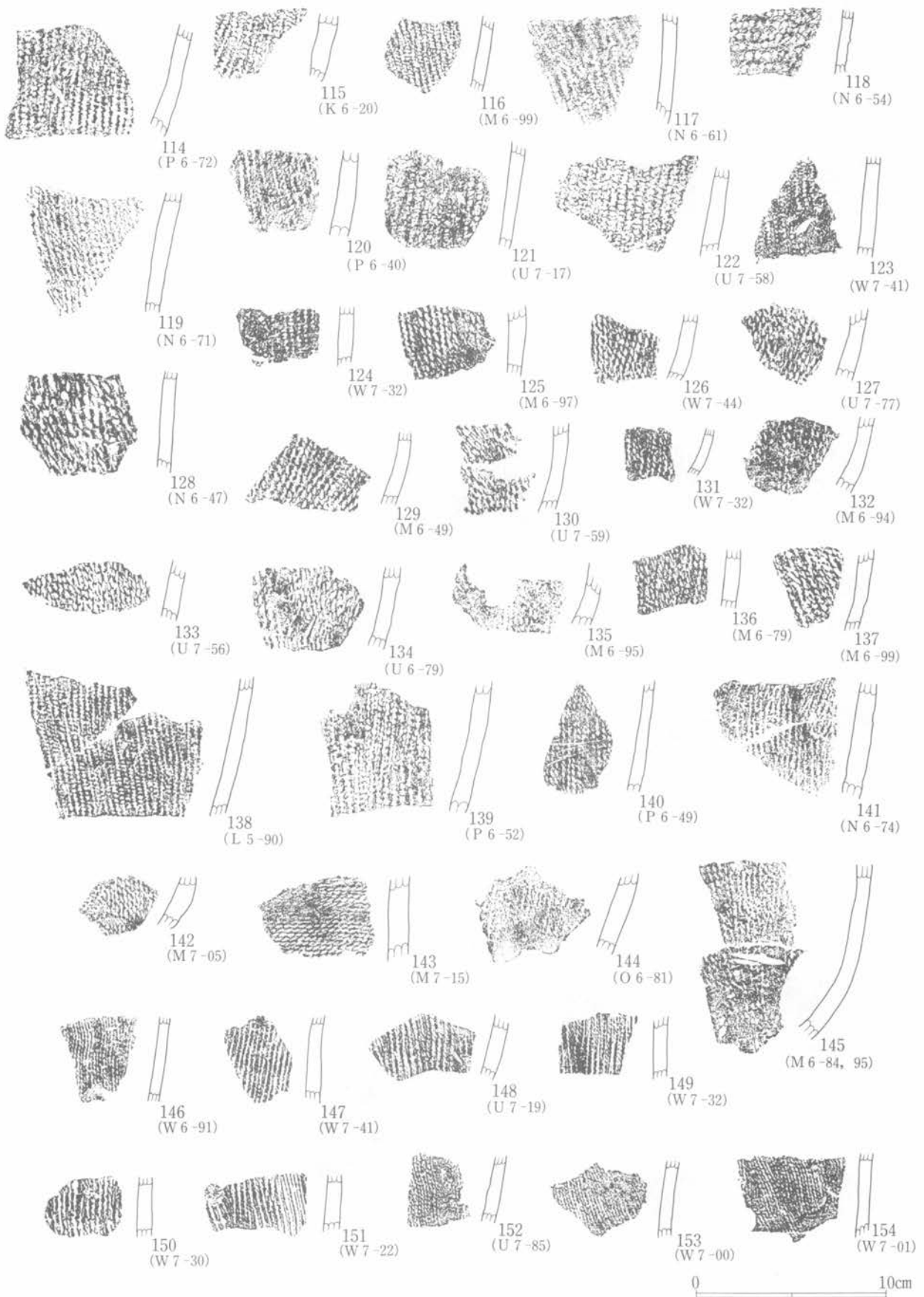
96～113は胴部から直立気味に口縁部まで立ち上がり、口唇部の肥厚及び外反がほとんど認められないものである。97は口唇部が内削ぎ状を呈し、口縁部外面は横方向の調整により無文で、上端から1.5cm下位から捺糸文の施文が行われている。99は頂部を除く口唇部外面から胴部に捺糸文が施されるが、口唇部直下に部分的な横方向のナデが加えられる。また、焼成後に両側から開けられた径5mmの円孔が存在する。100・101とも口唇部直下に横方向のナデが加えられ、その下に捺糸文の施文が認められる。103・104は、表面のナデ調整が目立ち、捺糸文が浅めに施文されているので、一見無文のように見える。105の器厚は6mm程度と薄く、捺糸文の条間は狭く、色調は黒褐色を示す。106は口唇部から胴部にかけて、包むように捺糸文が施されるが、口唇部直下に横方向のナデが施されている。108～113は口唇部外面から胴部に縄文の施文が行われているものである。いずれも口唇部の肥厚は顕著でなく、むしろ上端が平坦になるものが認められる。焼成は比較的良く、色調は明褐色や、褐色を呈する。109には焼成後に穿たれた円形の孔が1



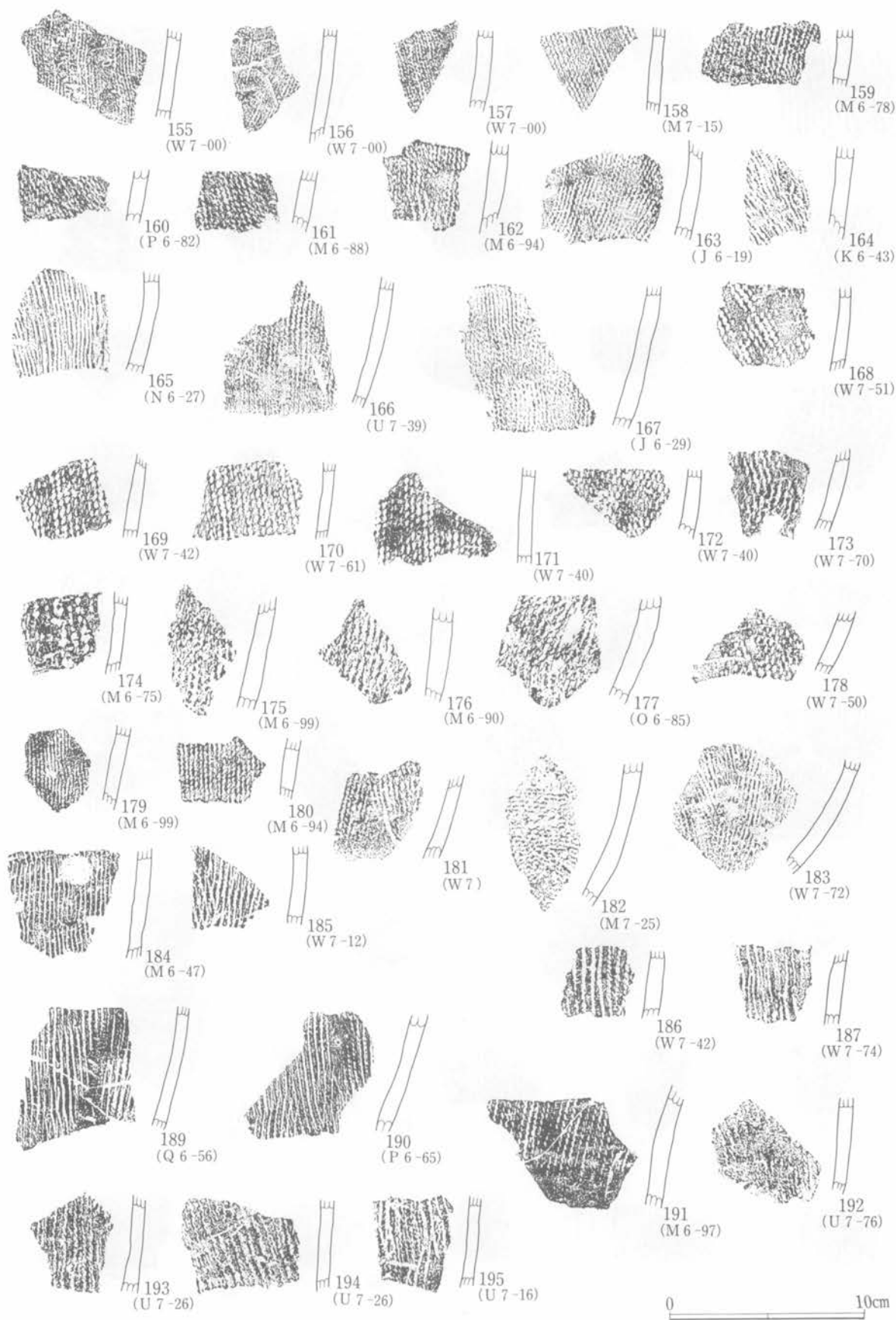
第33図 第1群・第1類縄文土器 (2)



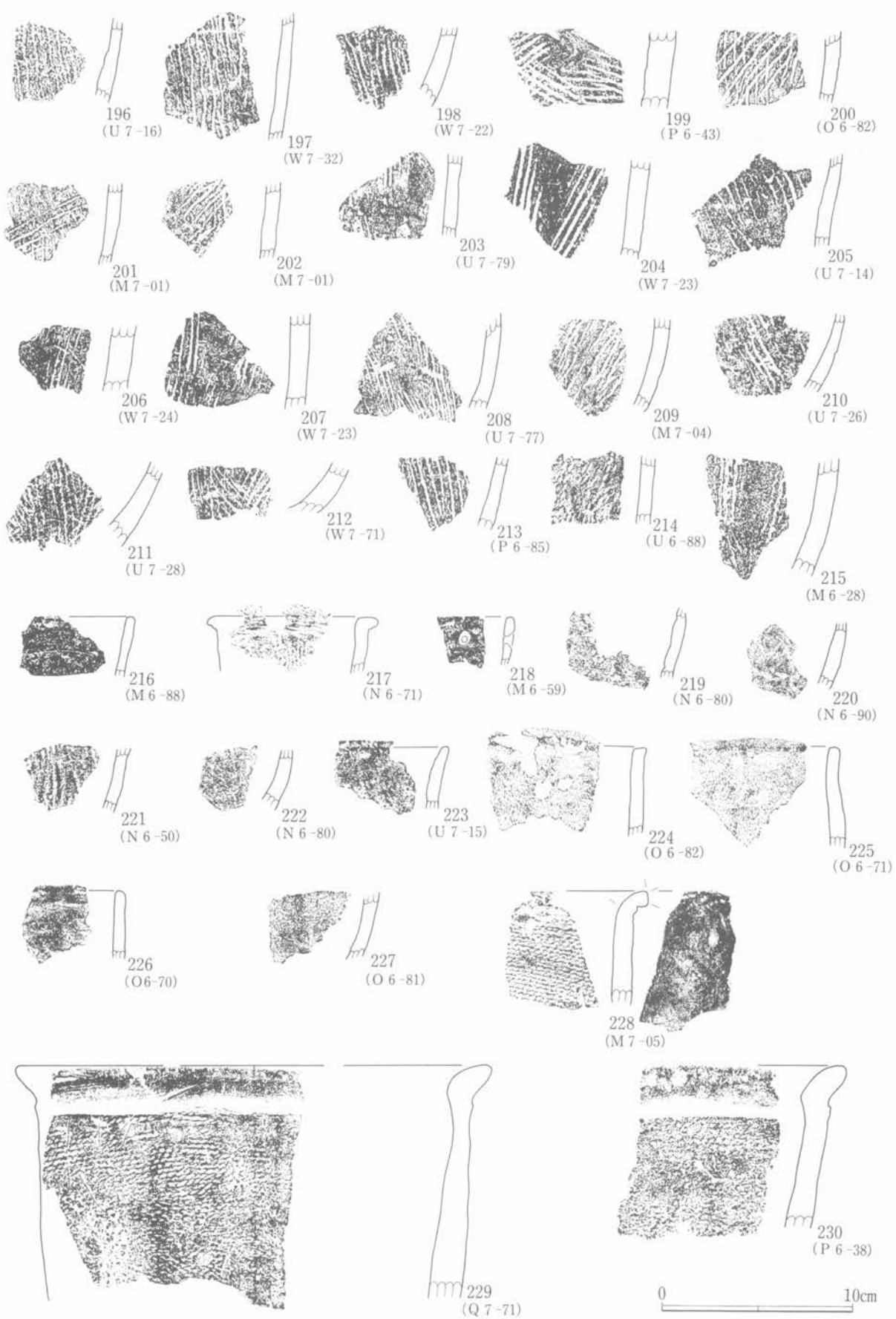
第34図 第1群・第1類縄文土器(3)



第35図 第1群・第1類縄文土器(4)



第36図 第1群・第1類縄文土器(5)



第37図 第1群・第1, 第2類縄文土器 (6)

か所存在する。

114～133は捺糸文系土器の胴部の破片である。ここに示した胴部の破片は、段階細別を明確にした配列ではなく、単に胴部破片で一括している。149・153は頸部の一部と推定され、171・180・181は底部近くと考えられる。縄文や捺糸文の施文のタイミングは一様でなく、文様が鮮明であったり、薄かったりしている。内面の調整はナデであるが、ナデの痕跡を良好にとどめている資料は少なく、ザラついているものが目立つ。

216～227に示した土器は、捺糸文系土器群に伴うミニチュア土器である。216は口縁部断面が角頭を呈し、器厚が薄く作られている。外面は横方向のナデが施され、内面も同様に行われるが、外面に比してやや雑である。217は口唇部が外方に張出すように屈曲し、その口唇部と胴部に捺糸文の施文が認められる。復元口径は9cm内外になる。218は小型の無文土器である。内外面とも横方向のナデが認められ、楕円形の補修孔が存在する。219～221は胴部の下位の一部になる。

223の口縁部は緩やかに外反し、口唇部はやや尖り気味になる。内外面ともナデによって調整されている。225は頸部で若干絞られ、口縁部が直立し口唇部は角頭を呈している。調整はナデである。

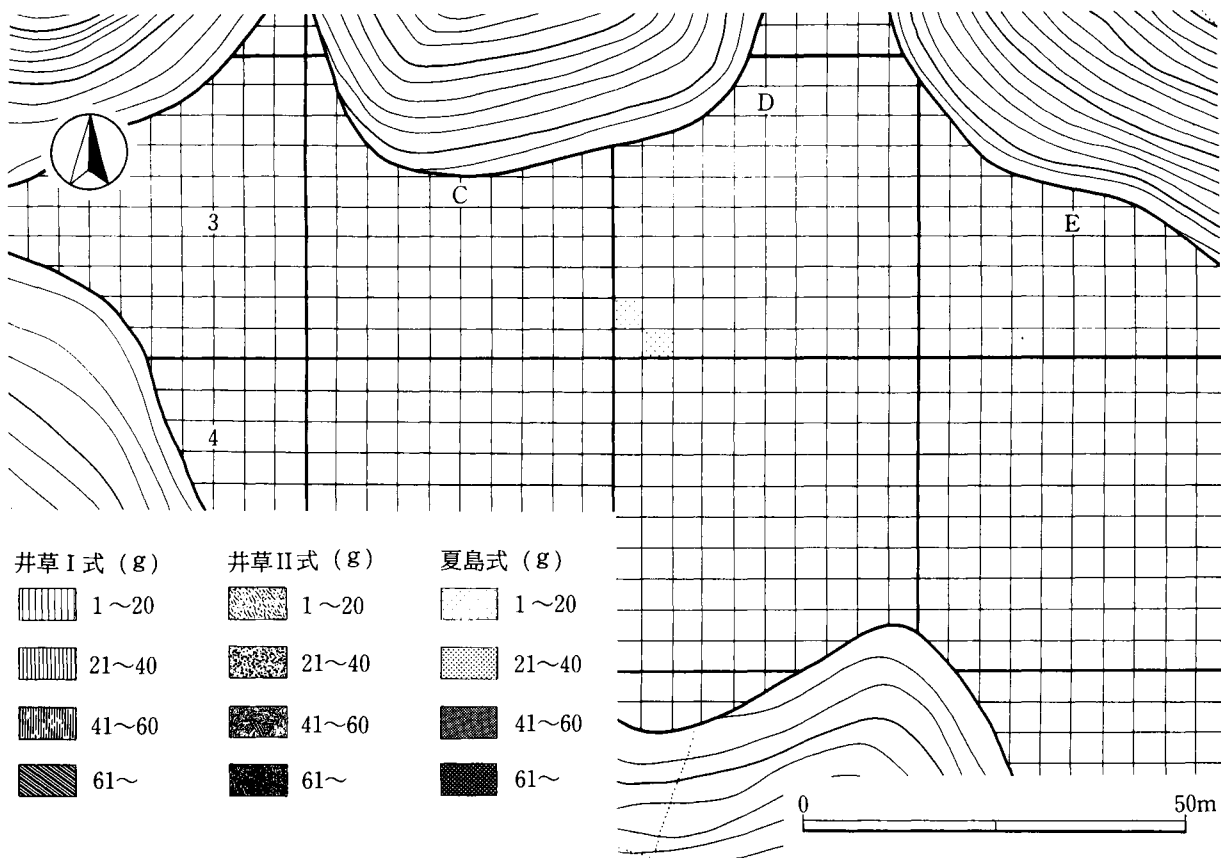
第2類土器（第37図、図版45）

大浦山式土器に比定される228～230をここに分類した。大浦山式に比定できる口縁部を3点確認したが、229と230が同一個体なので、個体数としては2個体である。229・230は寸胴の胴部を作り、頸部を設けて、口縁部は強く外方へ屈曲する。器厚は頸部で一度薄くなり、口縁部で再び肥厚して口唇部に至る。また、口縁部と胴部の境には稜が生じ、内面には一段と鮮明な稜が巡る。口縁部外面は横方向のナデが施され、胴部は横方向に捺糸文が施文されている。内面は外面の口縁部ほどは丁寧さのない横方向のナデで仕上げられている。胎土にスコリアと見られる赤色粒や雲母の細粒が含まれ、色調は赤みをもつ褐色を呈する。胴部の器厚は17mm前後と厚いが、焼成は比較的良好である。228は口縁部が緩やかに外反し、一見井草式のように見えるが、胴部に施された捺糸文の雰囲気から大浦山式に比定した。口縁部直下に表裏両面から行った穿孔痕跡を残している。色調は暗褐色で、焼成はやや甘い感じである。

第3類 捺糸文土器後葉の無文土器（第43図～第47図、図版46・47）

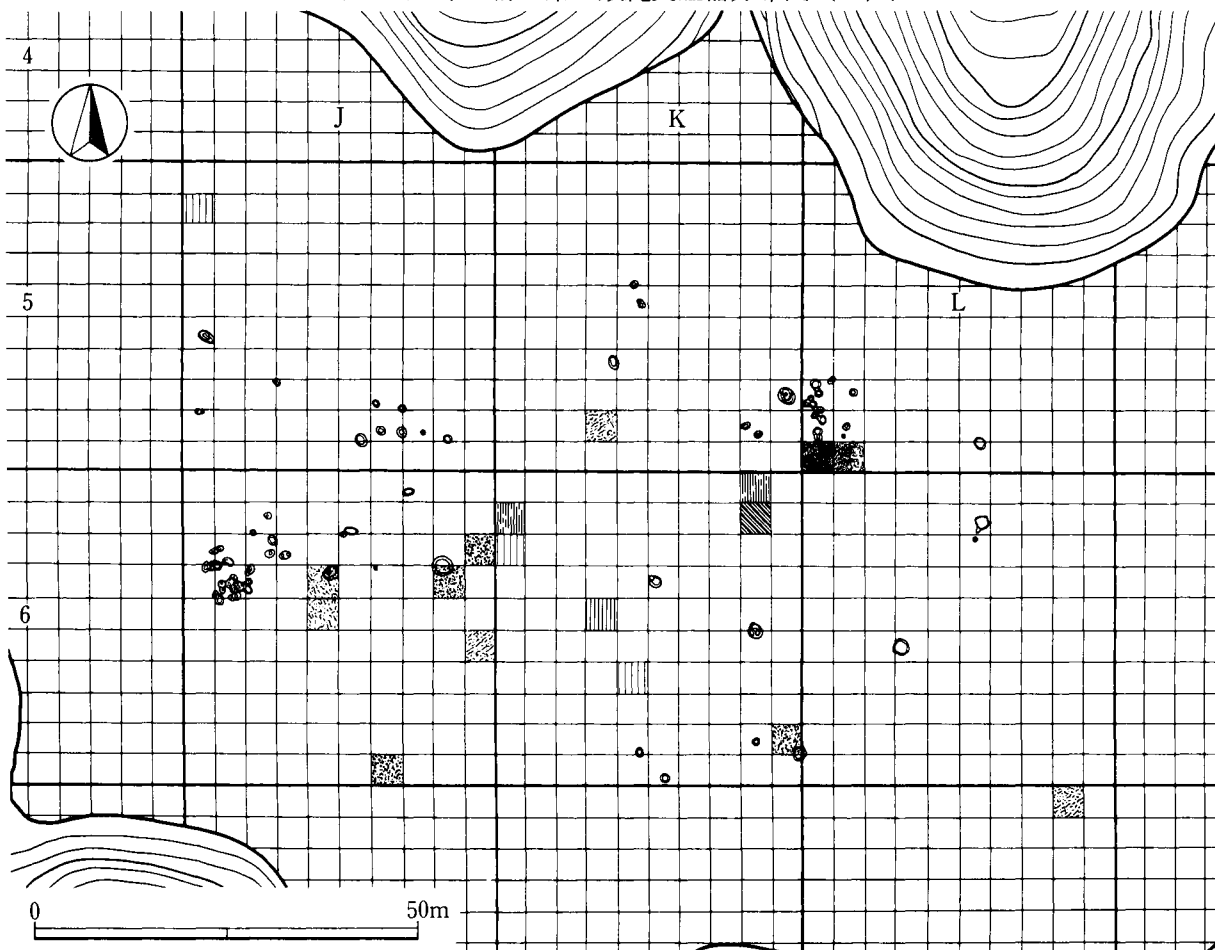
捺糸文土器後葉に位置づけられる無文のもの、あるいはわずかに捺糸文が施されるものをここに分類した。

1は口縁部破片で、口唇部がわずかに肥厚し、胴部がやや張り出す器形である。口唇部断面は丸みを帯びるが、内外面に稜が見られる。外面は縦方向の削りによる調整が施された後で、口唇部に横方向のナデを施している。胎土には砂、白色の鉱物を少し混入し、赤褐色を呈し焼成は良好である。2は口縁部がやや外反し、口唇部に刻み目が施されており、外面には捺糸文が施されている。3～6は1と類似した口唇部の破片だが、外面に捺糸文が施されているのが確認できる。6は補修孔が二つ見られ、下の方が未貫通である。いずれも赤褐色で、焼成は良好である。7～9は胴部破片である。外面に擦痕が見られる。10～13は口縁部破片である。わずかに口縁部が肥厚するか、ほとんどしないかである。外面の調整は、10は縦位の弱い削りが、11～13は横位の弱い削りがそれぞれ施されている。11～13は灰褐色を呈し、砂を胎土に含み、焼成は良好である。14は外削り状の口唇部断面で、縦位削りが施されている。1～14は捺糸文系土器



井草I式 (g)	井草II式 (g)	夏島式 (g)
1~20	1~20	1~20
21~40	21~40	21~40
41~60	41~60	41~60
61~	61~	61~

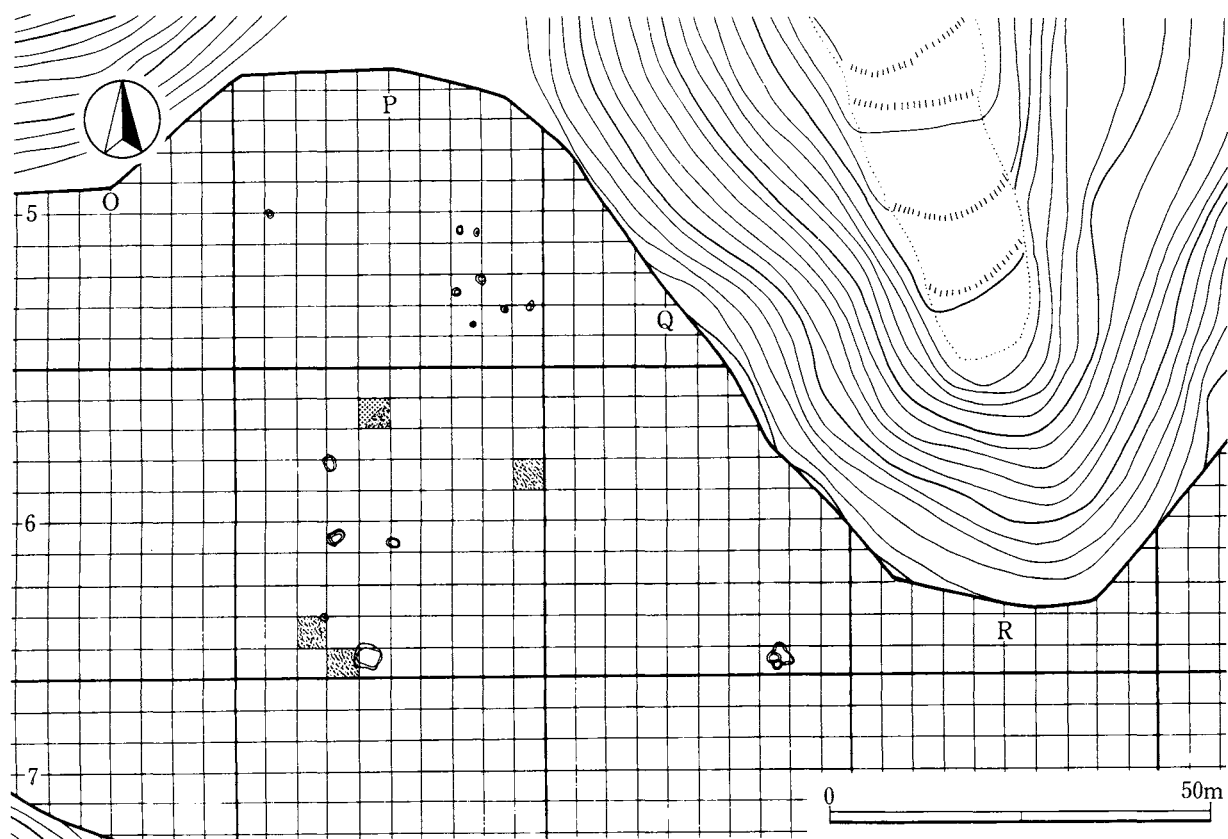
第38図 第1群・第1類縄文土器分布図 (I区)



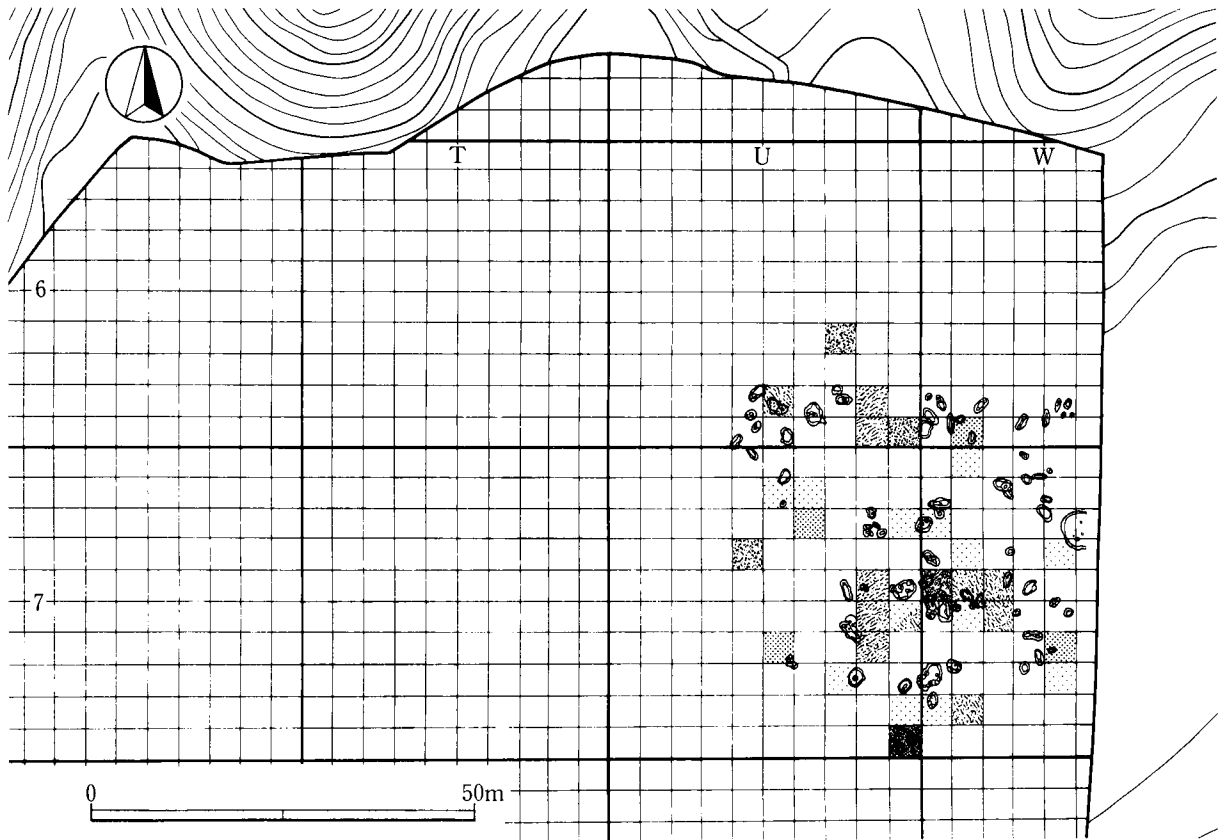
第39図 第1群・第1類縄文土器分布図 (III区)



第40図 第1群・第1類縄文土器分布図（Ⅳ区）



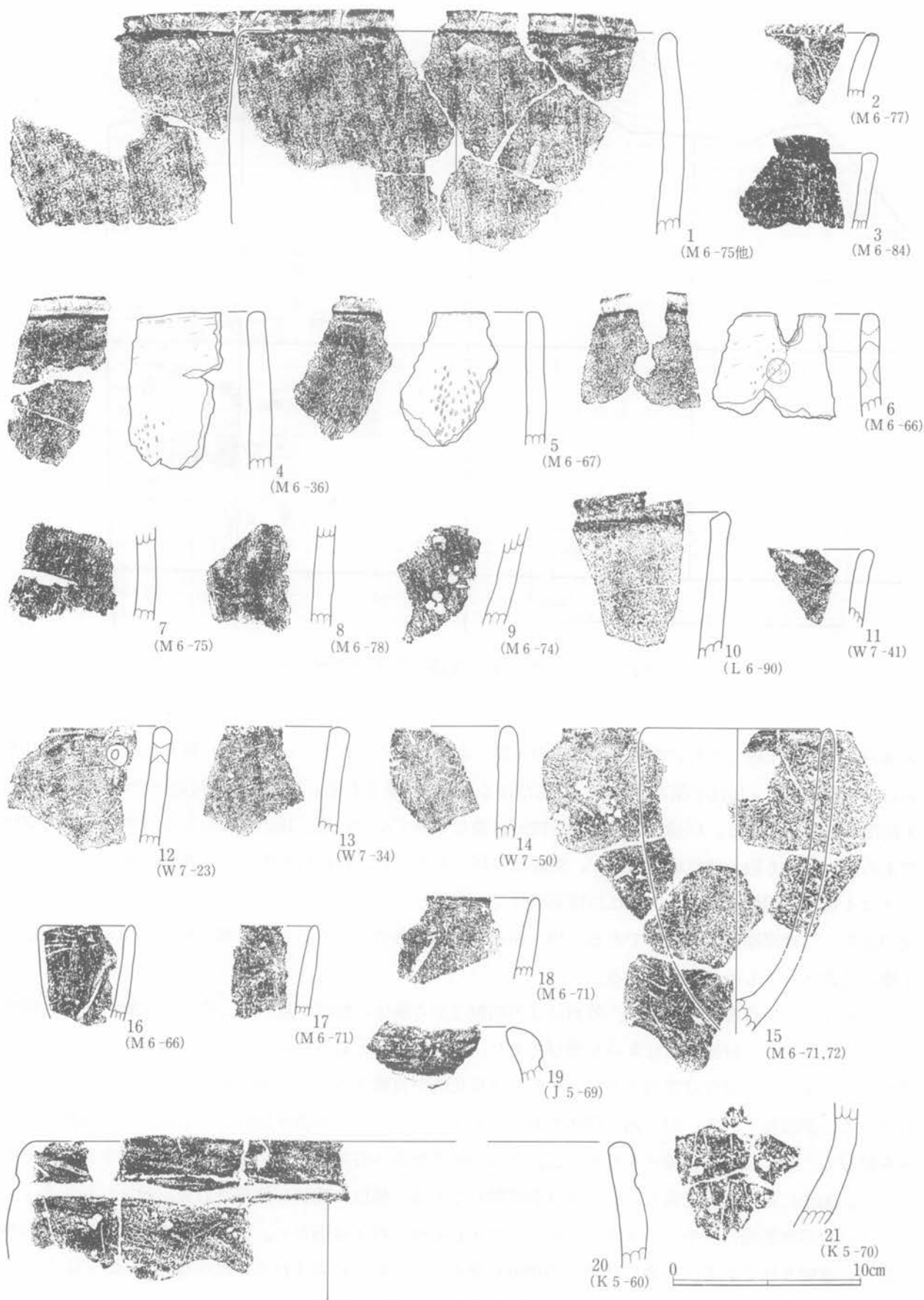
第41図 第1群・第1類縄文土器分布図（Ⅴ区）



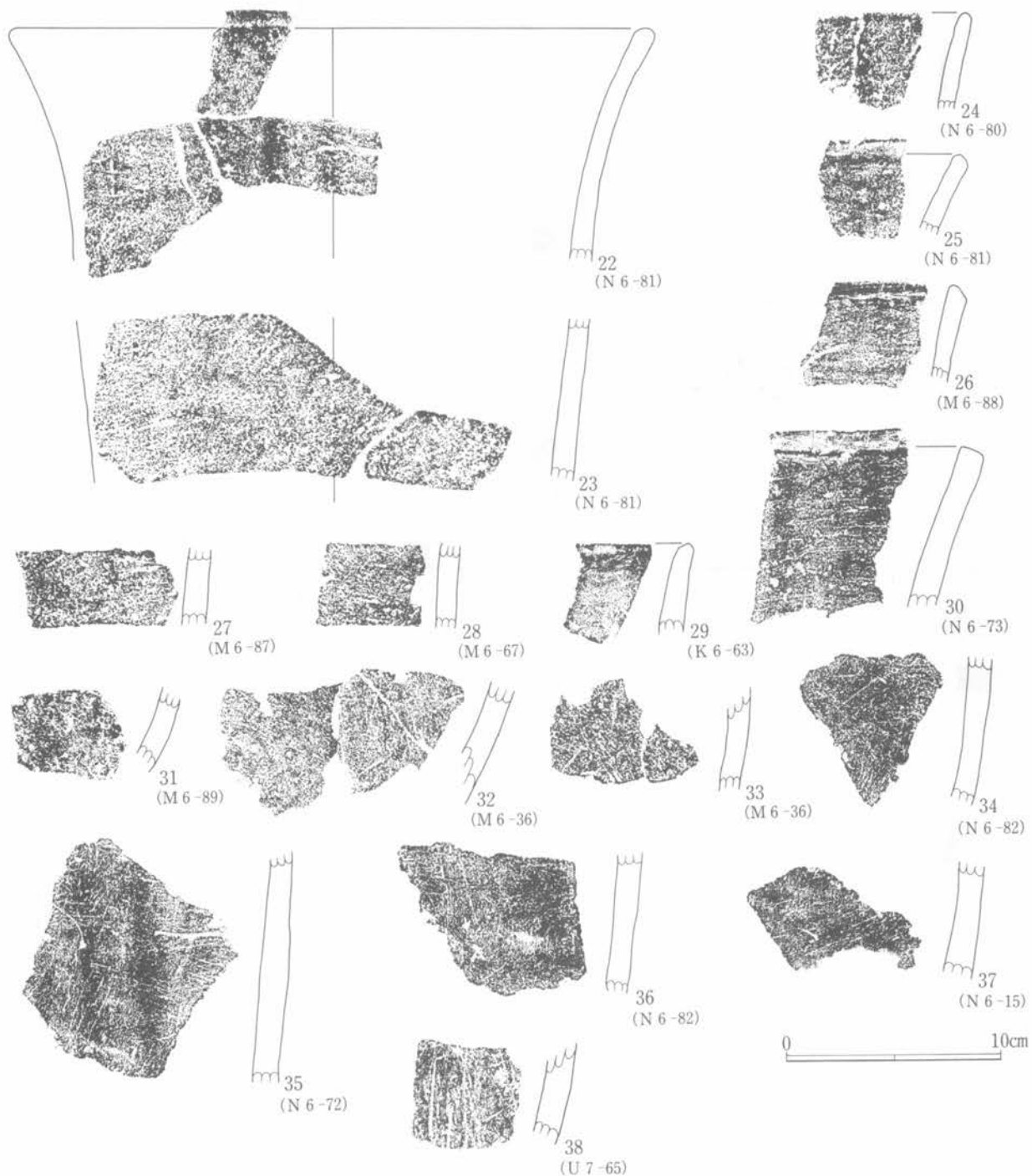
第42図 第1群・第1類縄文土器分布図 (VI区)

後葉の稲荷台式土器とそれに後続する時期の土器であると考えられる。15～18は口唇部断面がやや尖りぎみになる例である。15は小型の個体で、尖底になるものと考えられる。18は尖底部付近までの個体である。尖底部は肥厚している。口縁部周辺は炭化物が付着して黒ずんでいる。16, 17は18よりはやや大型の個体である。いずれも胎土は比較的緻密で、焼成は良好である。15, 18は暗褐色から赤褐色である。16, 17の胎土は4などに類似する。19, 20は口縁部破片で、内湾している。口唇部直下の外面には横位の太い沈線文が巡る。21は底部付近の破片である。19, 20と同様の器形のものであると推測される。19～21は東山式土器に比定されるものと考えられる。

22は外反する口縁部破片である。外面には不明瞭ながら横位の擦痕が見られ、内面は比較的丁寧に調整が行われている。口唇部断面は丸みを帯びており、稜はほとんど見られない。色調は明褐色で、胎土には砂が多く含まれる。焼成は普通である。外面には炭化物が付着する。23は胴部破片である。輪積み痕で割れているのが観察される。22と同一個体であると考えられる。24は外面が風化している。口唇部断面は丸みを帯びる。胎土には黒色粒子を含む。25, 26は口唇部断面が外削げ状で、口唇部は明確にナデが施されている。胎土には砂を多く含む。27, 28は胴部破片である。横位の擦痕が観察される。胎土に砂を多く含む。29は口唇部断面がやや尖りぎみで、胎土に含まれる砂の粒子は細かい。30は外反する口縁部で、口唇部断面は擦切り状である。外面には横位の擦痕が見られる。胎土に含まれる砂は少ない。22, 23は平坂式土器であると考えられる。25, 26も胎土は類似するが、口唇部の特徴が異なる。27, 28は近似する個体であると考えられるが沈線文系土器初頭の資料に類似することから、その時期まで下る可能性もある。また、



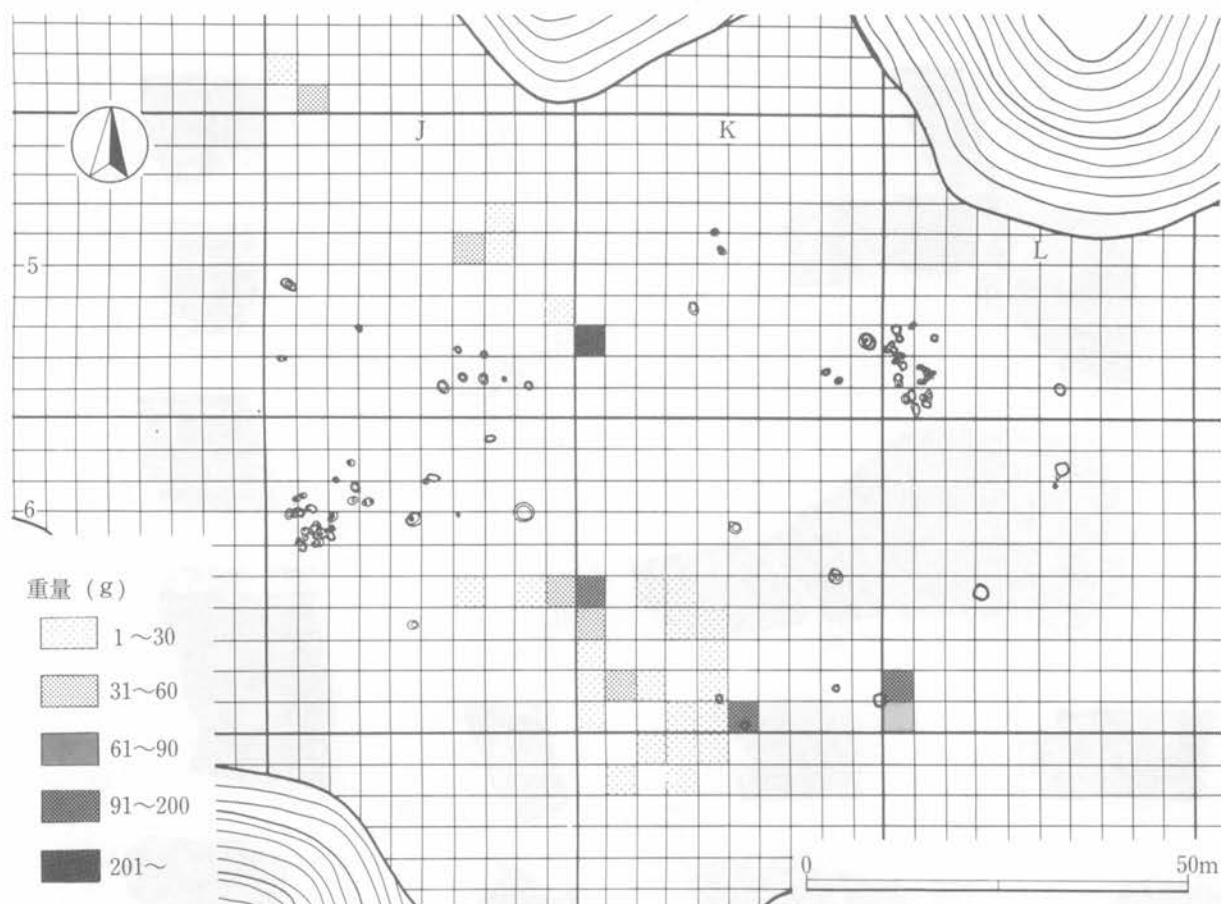
第43図 第1群・第3類縄文土器(1)



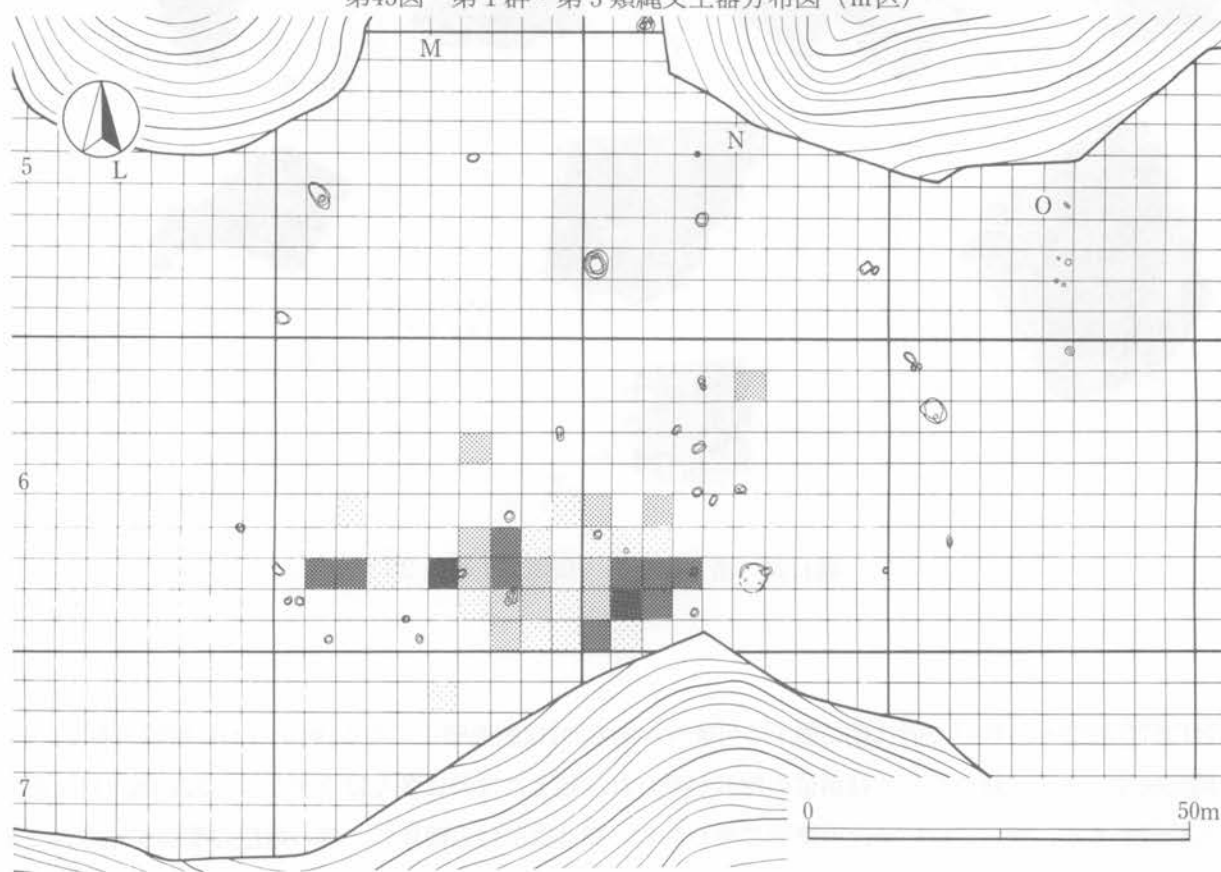
第44図 第1群・第3類縄文土器(2)

30は口唇部特徴から田戸下層式期に属する可能性がある。31は胴部破片である。胎土は24に類似する。32～35は胴部破片である。縦位もしくは斜位の擦痕が見られ、胎土には砂は多くは含まない。37は胎土は上記資料と類似するが、横位に近い斜位の擦痕で覆われる。38は底部付近破片で、強い縦位の擦痕が施される例である。

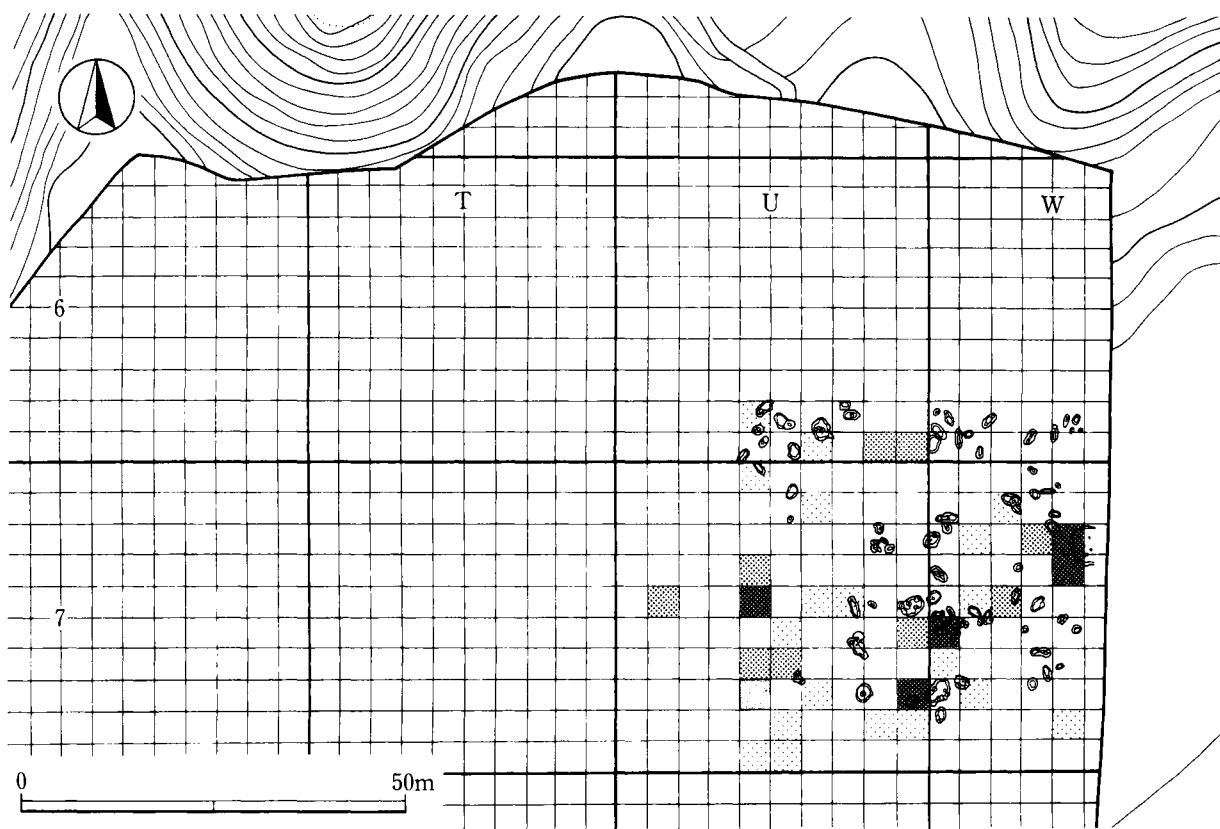
分布は、Ⅲ区、Ⅳ区、Ⅵ区に集中する。Ⅲ区には19～21が、11～14がⅥ区に、他はⅣ区に分布している。



第45図 第1群・第3類縄文土器分布図(Ⅲ区)



第46図 第1群・第3類縄文土器分布図(Ⅳ区)



第47図 第1群・第3類縄文土器分布図 (VI区)

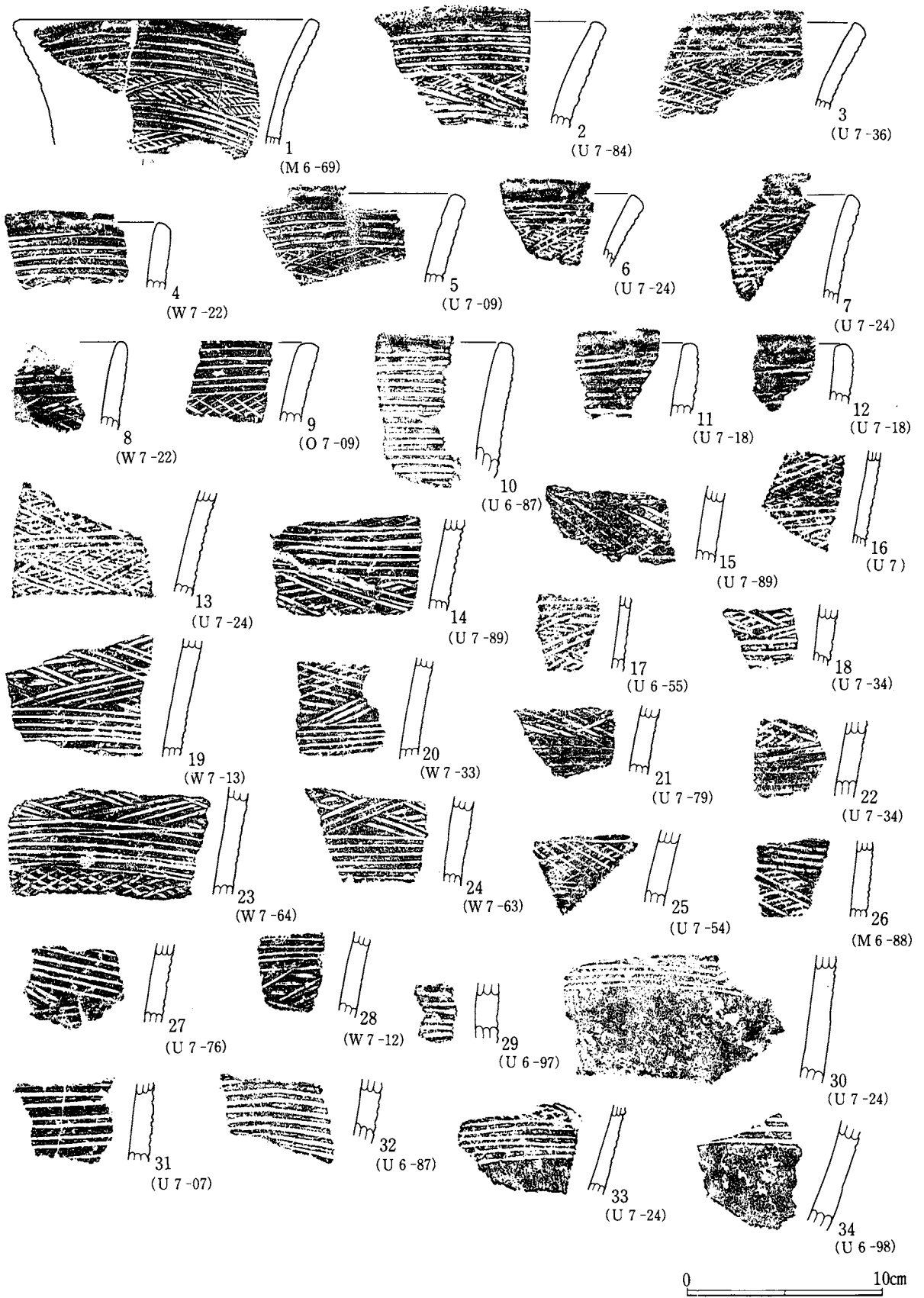
第2群 沈線文土器群 (第48図～第64図, 図版48～55)

第1類 沈線文土器初頭の土器 (第48図, 第49図, 第53図～第56図, 図版48, 49)

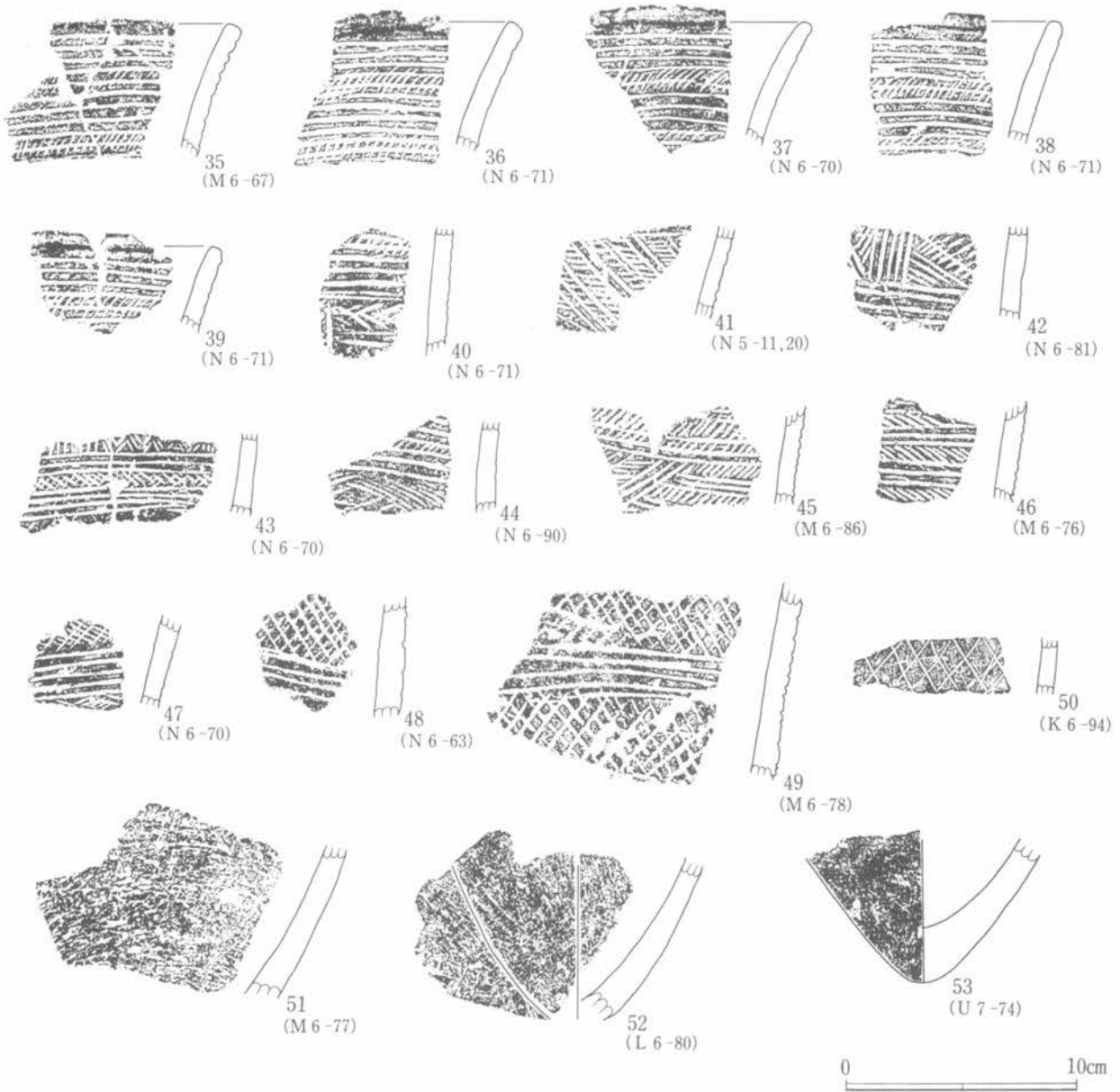
1～12は、口縁部破片である。1～7は平縁の深鉢で、やや外傾して立ち上がる体部が口縁部付近で屈曲し外反する器形になると考えられる。内外面とも良く磨かれており、数条の並行細沈線により横帯区画が形成され、鍵状の集合沈線が施されている。鍵状集合沈線は、並行する数条の斜位の細沈線が左傾・右傾交互に施されることで構成される。1は小型の深鉢で、内外面ともよく磨かれている。胎土には長石や石英粒を含み、焼成は良好で、外面は明灰褐色である。2～3も同様の文様形態をとるものと考えられるが、1よりもかなり大型の個体である。2, 4, 5は焼成は良好で、色調は暗褐色であるのに対し、3, 6, 7は、焼成はやや甘く、明褐色である。いずれも胎土には長石、石英を含む。8は口縁部破片だが、二次的な火を受けたためか、器面が剥落しているが、2などと同様の文様構成をするものと考えられる。9は、口縁部の並行細沈線の下に、単純な斜格子文が施されている。胎土には長石、石英が少し含まれ、焼成は良好で、色調は灰褐色である。

10, 11は、口縁部の並行細沈線の幅が広い個体である。1～9と比較して、沈線の間隔が密で数が多いのが特徴である。12は小さな破片で、明確なことは不明だが、上記に示した例と同様の例であると考えられる。

13～28は胴部破片である。13～22は、口縁部付近か、それより下に続くと考えられる破片である。13は、破片中央部に3条の並行細沈線が見られる。破片上部と下部の区画の集合沈線文がほぼ同じ施文方法を取っており、文様は3に類似する。14も同様の例と考えられるが、鍵状集合沈線文は2や5に見られるよう



第48図 第2群・第1類縄文土器 (1)



第49図 第2群・第1類縄文土器(2)

な例に類似する。なお、14に斜めに見られる太い沈線状のものは、後世についた傷である。17~22, 24~28についても、鍵状集合沈線文は、いずれも口縁部破片に見られるものと同様である。23は一つの個体において違った集合沈線が施される例である。上には鍵状のものが、下位には斜格子文が施されている。

29~34は底部付近の破片である。29~31は横位の並行細沈線が施されている例である。32~34は破片上部に細沈線が施されているが、下位は無文である。無文部分は、文様が施された部分と比較して、器面の肌理がやや荒いが、削りにより比較的丁寧に調整されていると見て良く、体部との違和感はさほど感じられない。いずれも焼成は良好である。

これらの破片資料から、土器の文様を概観すると、①器面は何段かの並行細沈線による横帯区画が形成され、区画内には鍵状集合沈線文や斜格子文が充填される。②鍵状集合沈線文と斜格子文は、同一個体内に存在する場合がある。といったことが見て取れる。また、胎土には、その多寡こそあれ、いずれも長石や石英を含む砂粒が含まれ、焼成が甘く器面が荒れた破片では、ざらついた手触りが感じられる。

35～47は、細い沈線により文様が構成されている例で、いずれも胎土に砂を多く含み、色調は暗褐色である。35～39は口縁部破片である。35～47は同一個体であると考えられる。35～39は口縁部破片で、横位の細い沈線が施されており、右に傾斜した刻むような細い沈線が横方向に帯状に施されている。40～47は胴部の破片である。41に見られるように、鍵状集合沈線文が施される例も見られるが、40、42にあるように、縦位に区画する並行沈線も見られるのが特徴である。また、45に見られるように、横帯区画を形成する並行沈線に割り込むような施文が見られる。文様の種類は、46に見られるような、並行沈線の中に短い斜沈線を充填するものを主体とし、40に見られる綾杉文状のものや、43に見られる斜格子文などがある。これらは、胎土に砂を多く含み、暗褐色で、焼成はやや甘い。

48、49は同一個体と考えられる。並行細沈線により区画され、斜格子文が施されている例である。施文工具は先端が尖った棒状のものであると考えられ、前出の例とは相違が見られる。胎土は砂を多く含み、焼成がやや甘く、ざらついた感触である。色調は黄褐色である。

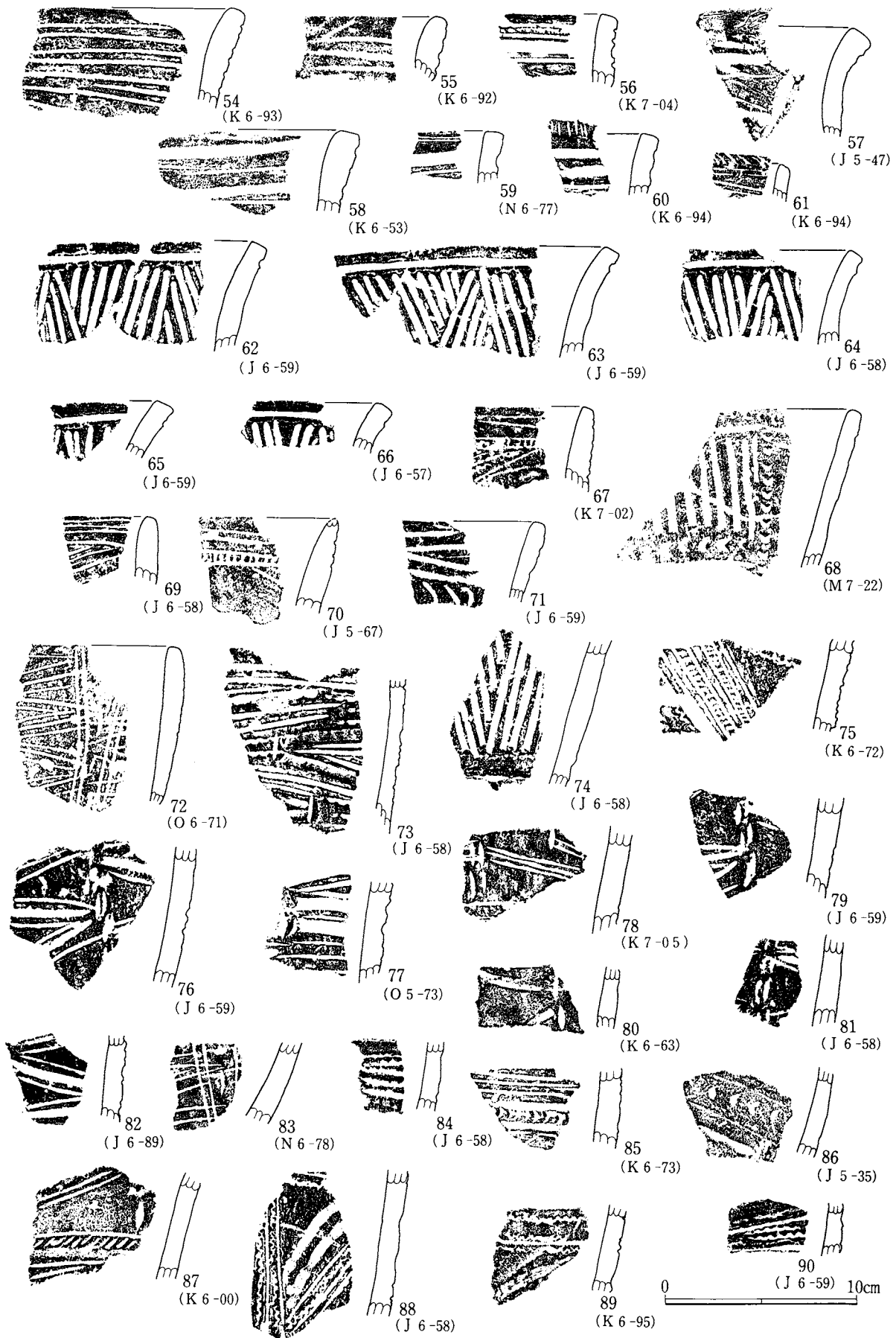
50は、やや粗い斜格子文が施されている破片である。器面は丁寧に磨かれており、砂などの混入物が少なく、焼成は極めて良好である。

これらの土器は、沈線文土器の古い段階のいわゆる竹ノ内式と、それに後続する時期の土器であると考えられる。1～33は相対的に古く、竹ノ内式段階に位置し、35～47はやや新しい時期のものと考えられる。48、49は、横帯区画に斜格子文が充填されていることから、竹ノ内式の範疇に含まれるものと考えられるが、胎土に長石や石英をあまり含まないことで、違いが見られる。また、50は、他に類似する文様が見られないが、斜格子文が施されていることから、ここに加えて報告する。

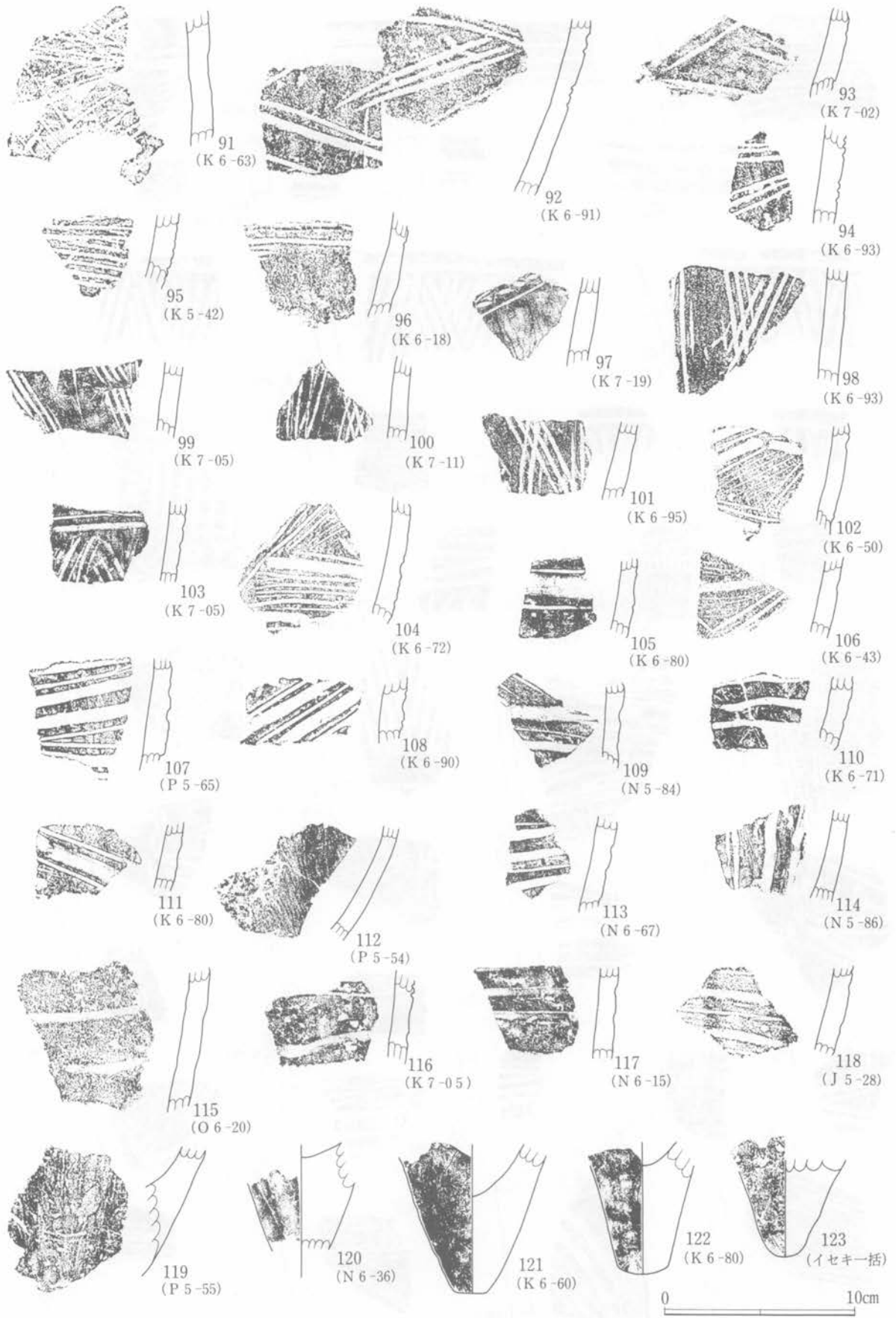
第2類 沈線文土器中葉の土器（第50図～第64図、図版50・51）

54～72は口縁部破片である。54、55は細い横位沈線により文様が施されており、口唇部が丸みを帯びながら角頭状になる。56～60は細い沈線と太い沈線により文様が構成されている例である。57が、口唇部が肥厚しながら強く外反したり、58がやや丸みを帯びたりするが、いずれも口唇部は擦切状の断面である。また60の口唇部上端には刻み目が施されている。61は小破片で、器面に細沈線が施されており、やはり口唇部に刻み目を持つ。62～66は同一個体である。口唇部に横位の太い沈線が施され、その下に、太い斜位の沈線が数条一組で左右交互に施されている。器面は比較的良く磨かれ、焼成は普通で色調は暗褐色である。また、74も胎土や色調の様子から同一個体と考えられる。斜位の太沈線の下はさらに太く浅い横位沈線により区画されているのがわかる。67、69、70は細い沈線により文様が施されている例で、横位の沈線から斜位に沈線が派生している。67、70においては、2条の細い横位沈線の間刻み目を充填している例である。口唇部は、やや丸みを帯びる角頭状か鈍く尖る形態をとるものと考えられる。71は太い沈線で文様が構成されており、横に連続する三日月状の文様が見られる。68は、口唇部の横位太沈線から縦位の沈線が降りる例だが、縦位沈線は交叉せず、また、これらの沈線群は、半裁竹管文により形成された区画内を埋めるように施されているのが特徴といえる。72は細い沈線により文様が施されている例だが、数条一組の斜位の沈線が交互に施され、その交叉する部分に、2条一組の縦沈線を2列施し、間に縦の点列が配されている。胴部破片の中では、83が同じ文様構成であり、同一個体の可能性がある。

73～118は胴部の破片である。75は67、69と同様に並行な細い沈線の間刻み目が充填されている。文様を構成する要素に貝殻腹縁文が見られる。73は交互に斜行する細沈線と太沈線により文様が構成されてい



第50図 第2群・第2類縄文土器(1)



第51図 第2群・第2類縄文土器(2)

る例で、所々に貝殻腹縁文が施されている。太沈線が交叉するポイントで沈線を描く工具は明確に止められ、縦方向の刻み目がアクセントを付けるように施されている。76～83も類似した文様構成の例である。76, 79, 82は太沈線と細沈線が組になっている例である、太沈線は73ほど太くはなく、彫り込みが深いのが特徴である。縦方向の刻みは2つ対になって、縦に点列を形成するようである。78, 79, 81は細い沈線により同様の文様が形成されている例である。85, 86は並行する2条の沈線の中に半截竹管文が点列状に施される例である。87は、斜行する2条の細い沈線に点列が施されている。縦方向の刻みが見られることから、76～83などと類似した文様構成の個体である考えられる。84, 88～90は沈線と貝殻腹縁文により文様が施されている例である。

91～96, 98～101は細い沈線により文様が構成されている例である。いずれも規則性に欠け、全体像が掴みにくいのが特徴である。91は胴部の破片で、破片中央部で幾分括れるような器形である。92～94は乱雑な数条の細沈線により菱形のような文様が形成されるものと考えられる。92, 93はやや底部に近い破片である。95, 96は横位の細沈線により文様が施されている例である。98～101は斜位の細い沈線により文様が構成されている例で、数条が一組となり、交叉する様子が見られる。97は、2本の細沈線の間点列が施される例である。

102～118は太沈線、細沈線によって施文されている破片である。102, 104, 106は太沈線により菱形状の文様を描き、擦痕のような細沈線が乱雑に施されている。103は、太横位沈線から斜位の沈線が派生するような構成だが、施文自体が雑である。105, 107, 108, 109, 111, 114は太沈線に細沈線が並行するように施文されている。112, 119は尖底部付近の破片である。114も同様の破片で、縦方向に太沈線が施されている。

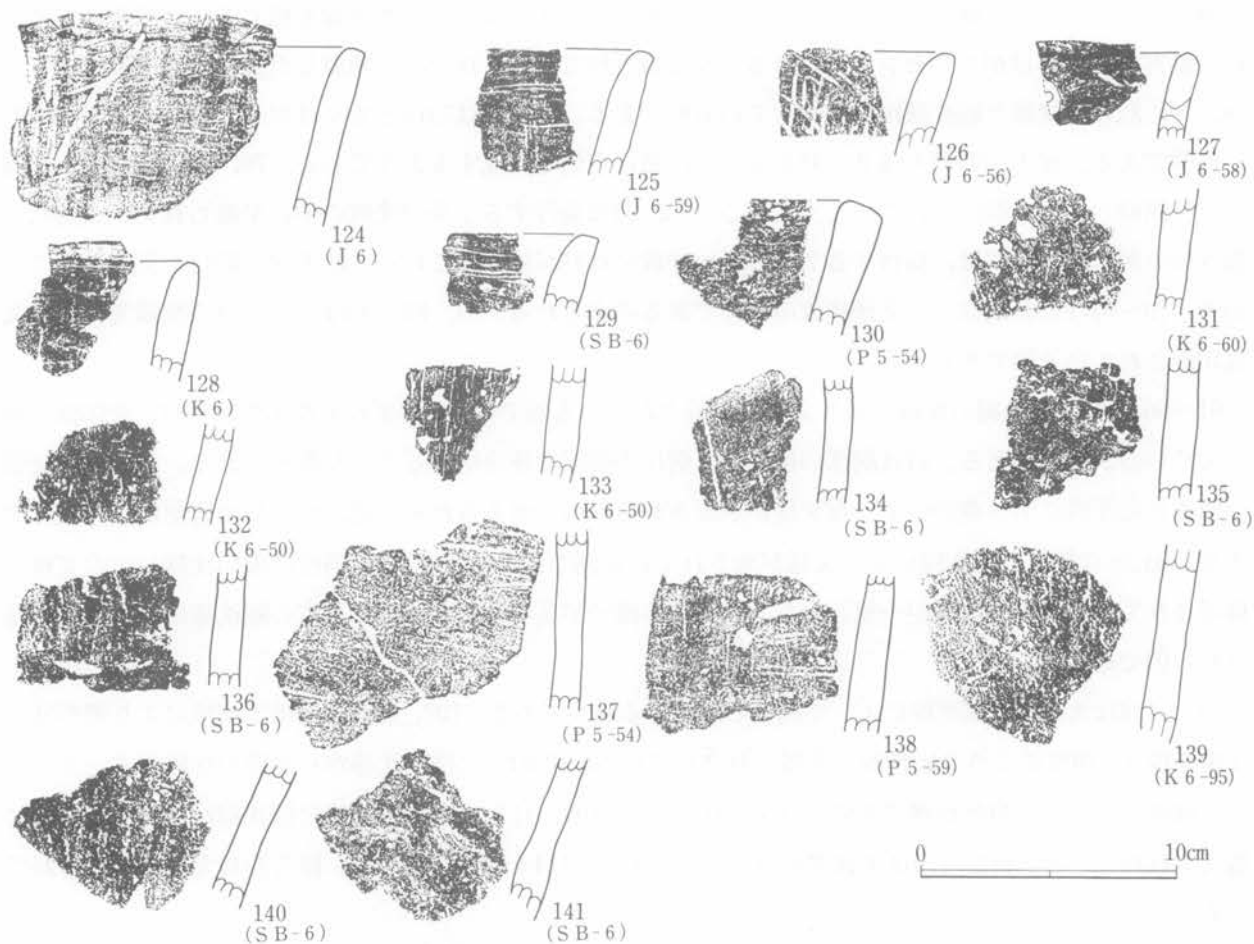
120～123は尖底部破片である。いずれも鋭角的に尖り、先端が肥厚する例である。器面は縦方向に削りが施されている。

以上の例は、沈線文土器中葉に位置する田戸下層式である。全体として、丁寧に仕上げられている例もあるが、器面のミガキや施文が雑な例の方が多く、焼成も甘く、ざらついた手触りである。器形としては、口縁部が直線的に、あるいはめくれるように外反する尖底深鉢であるといえる。極端な屈曲はほとんど認められない。

124～141は、無文の破片である。

124～130は口縁部の破片で、いずれも胴部から垂直に立ち上がり、横方向に削り、あるいはミガキが施されている。124, 125, 128, 129は、口唇部上端が擦切状になる例で、やや内削ぎ状である。口唇部の内外両端に削りにより生じた稜が見られる。所々に凹凸があり、成形が丁寧であるとは言えない。外面には砂が動いた擦痕が明確に観察される。焼成はいずれも良好で硬く、暗赤褐色である。126には雑な沈線(あるいは明瞭な擦痕)が見られる。沈線は、生乾きの状態で施されている。焼成がやや甘く、くすんだ褐色である。127は、補修孔が見られる破片である。口唇部断面は丸みを帯びるが、ヘラ状工具により横方向に削られ、弱い稜が形成されている。130は、口唇部上端は擦切状だが、先端で内側に肥厚する。胎土には小石や繊維が少し含まれ、焼成はやや甘い。

131～138は胴部破片である。131～136は縦方向の擦痕が観察される。出土地点に近いことや、胎土や色調等が口縁部の破片と極めて類似している。焼成は良好で硬く、濃赤褐色で、器面には微光沢がある。137は、横方向の擦痕が施されている例である。焼成がやや甘く、色調はくすんだ褐色である。138は横方向と



第52図 第2群・第2類縄文土器 (3)

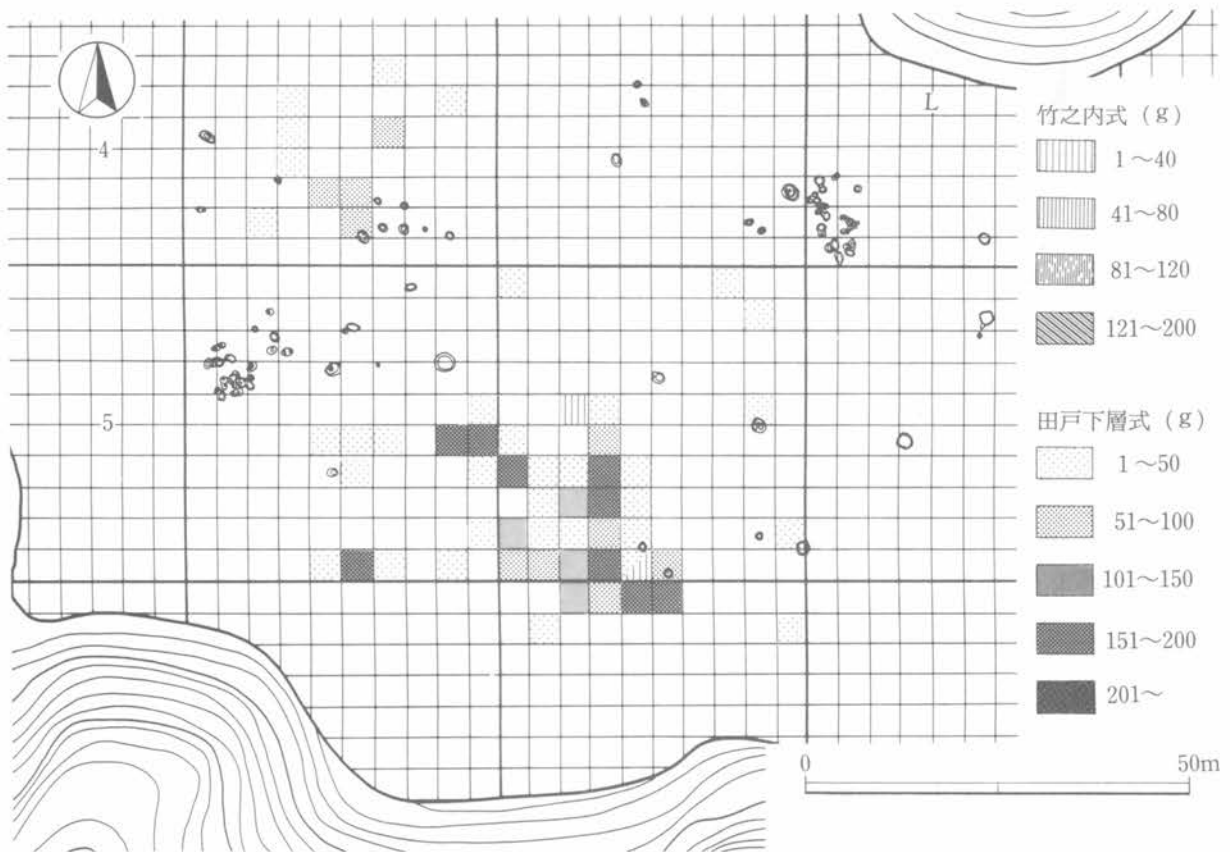
縦方向の擦痕が見られる例である。横方向の調整を施した後で、縦方向に施されていると考えられる。焼成はやや甘く、色調は暗褐色である。139～141は、底部付近の破片である。いずれもやや外反して尖底部に続くものと考えられる。調整は139, 140は縦に、141は左下から右上に向かって施されている。焼成はやや甘く、内面が脆く崩れている部分も見られる。色調は淡褐色である。

これらは、無文で、文様による比較が出来ないが、口縁部形態や分布状況などから、撚糸文土器の無文土器と区別し、田戸下層式に並行する時期のものであると考えられる。ただし、胴部の破片や口縁部の127などは、稻荷台式～平坂式に属する可能性も否定できない。

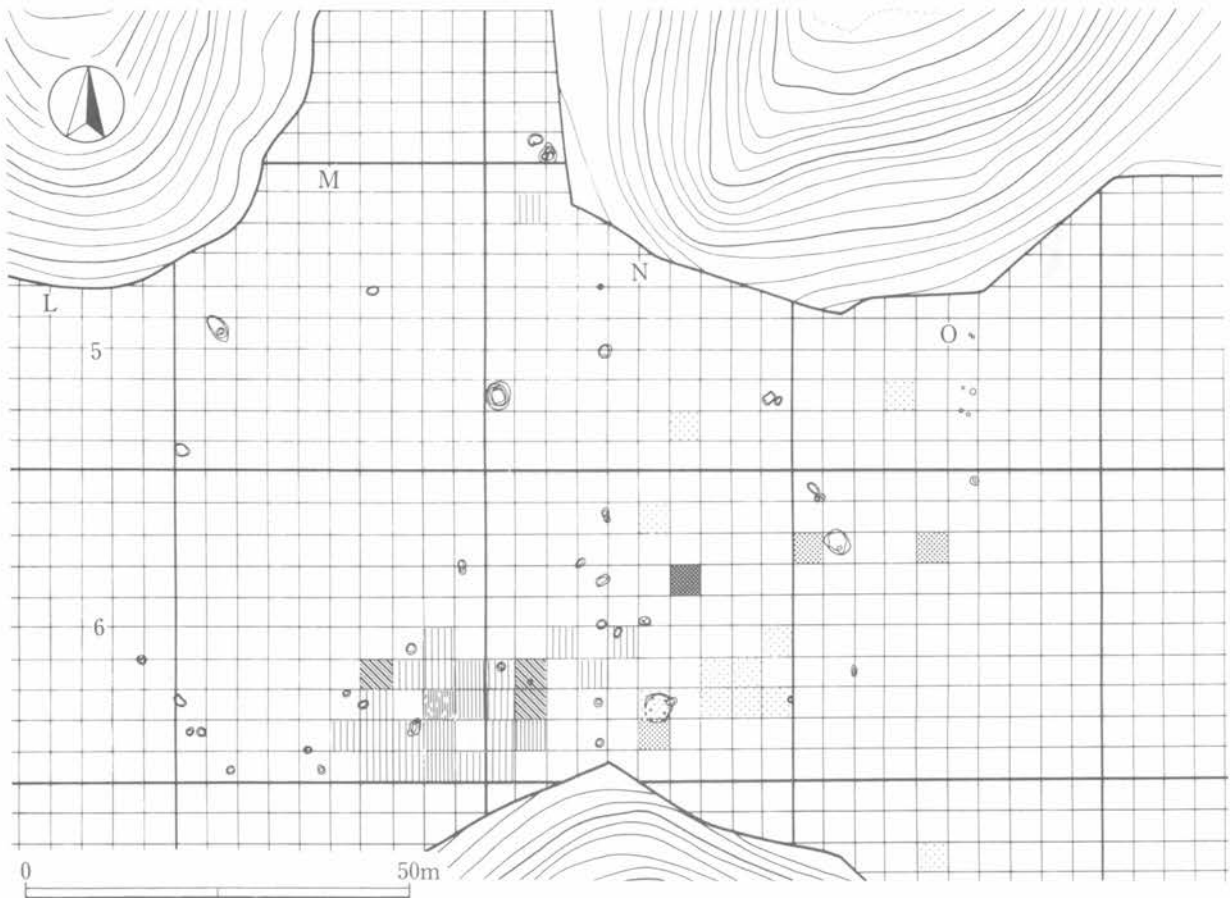
第3類 沈線文土器後葉の土器 (第57図～第64図, 図版52～55)

繊維を少し含み、内外面が擦痕で覆われているものをここに示した。ほとんどが無文で、僅かに数片が横位の細い隆線を巡らすものが見られる程度である。隆線に刻み目が施される例が1例見られる。口縁部はほとんどが平縁で、2例だけ装飾が見られる。底部は尖底もしくは不安定な丸底に近い平底である。胎土に長石粒を含むものや繊維の多いものと少ないものがあり、色調も、明灰褐色のものや濃赤褐色のものもある。

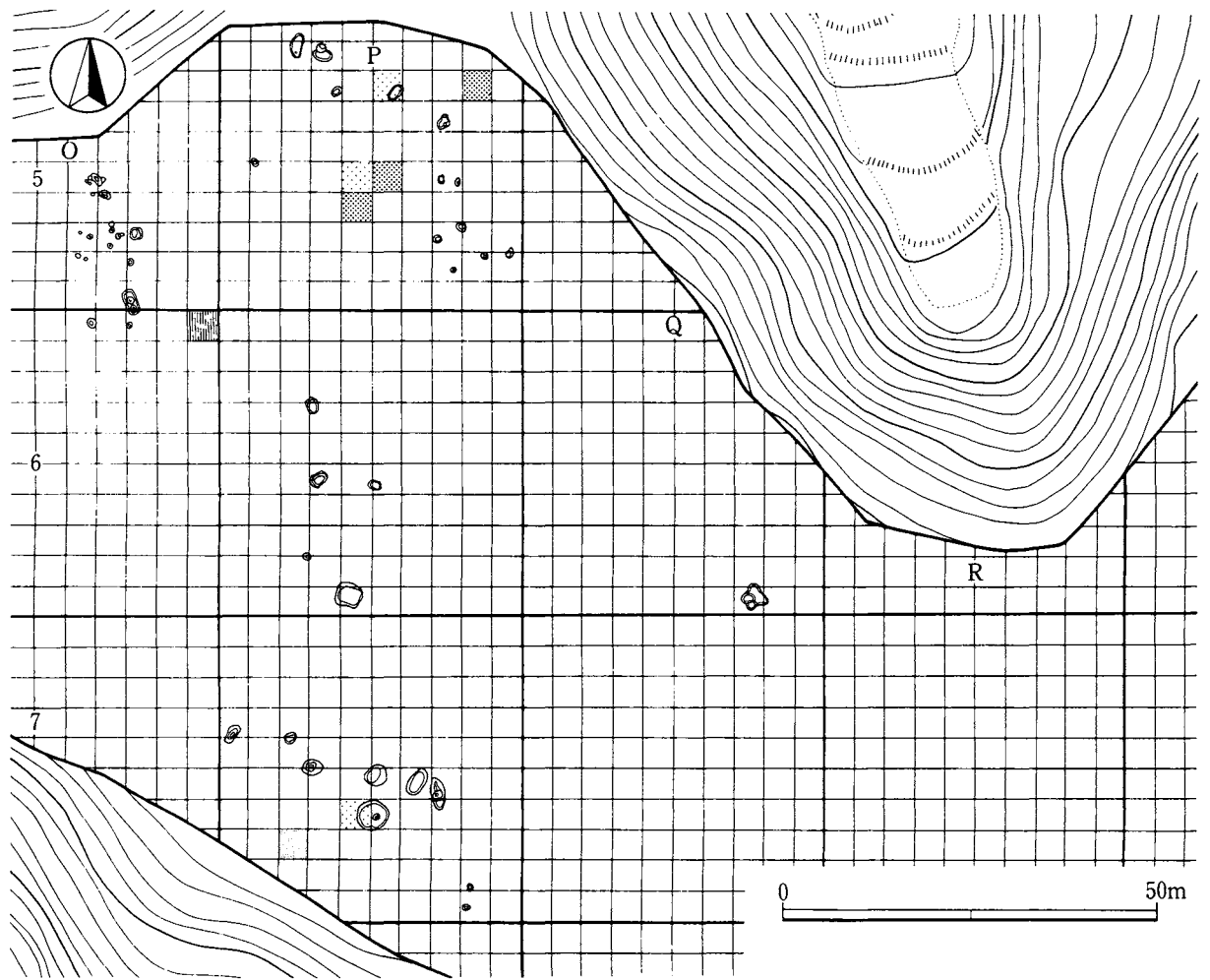
1～10は横位の隆線が施される例と、それらと近い場所から出土した無文の破片及び底部破片を示した。1は口唇部外面に隆線を巡らせ、刻み目を施す例である。口唇部は外削ぎ状に成形され、器内外面とも横



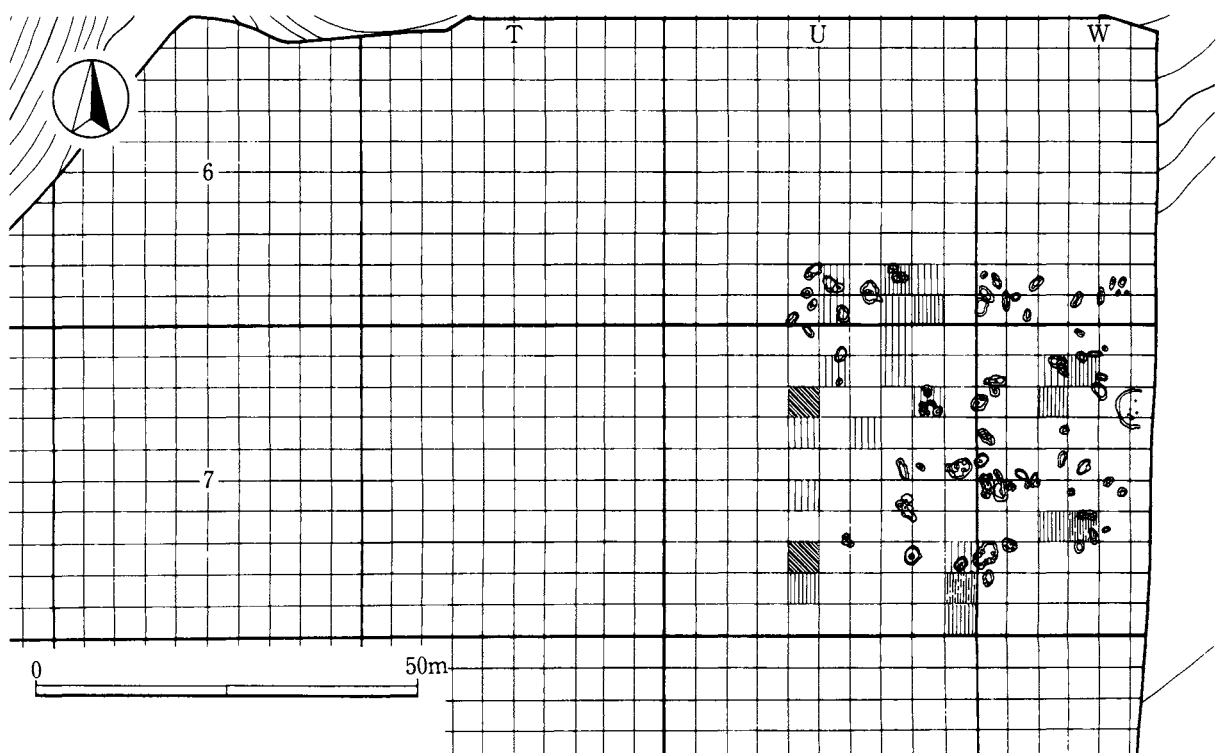
第53図 第2群・第1, 2類縄文土器分布図 (Ⅲ区)



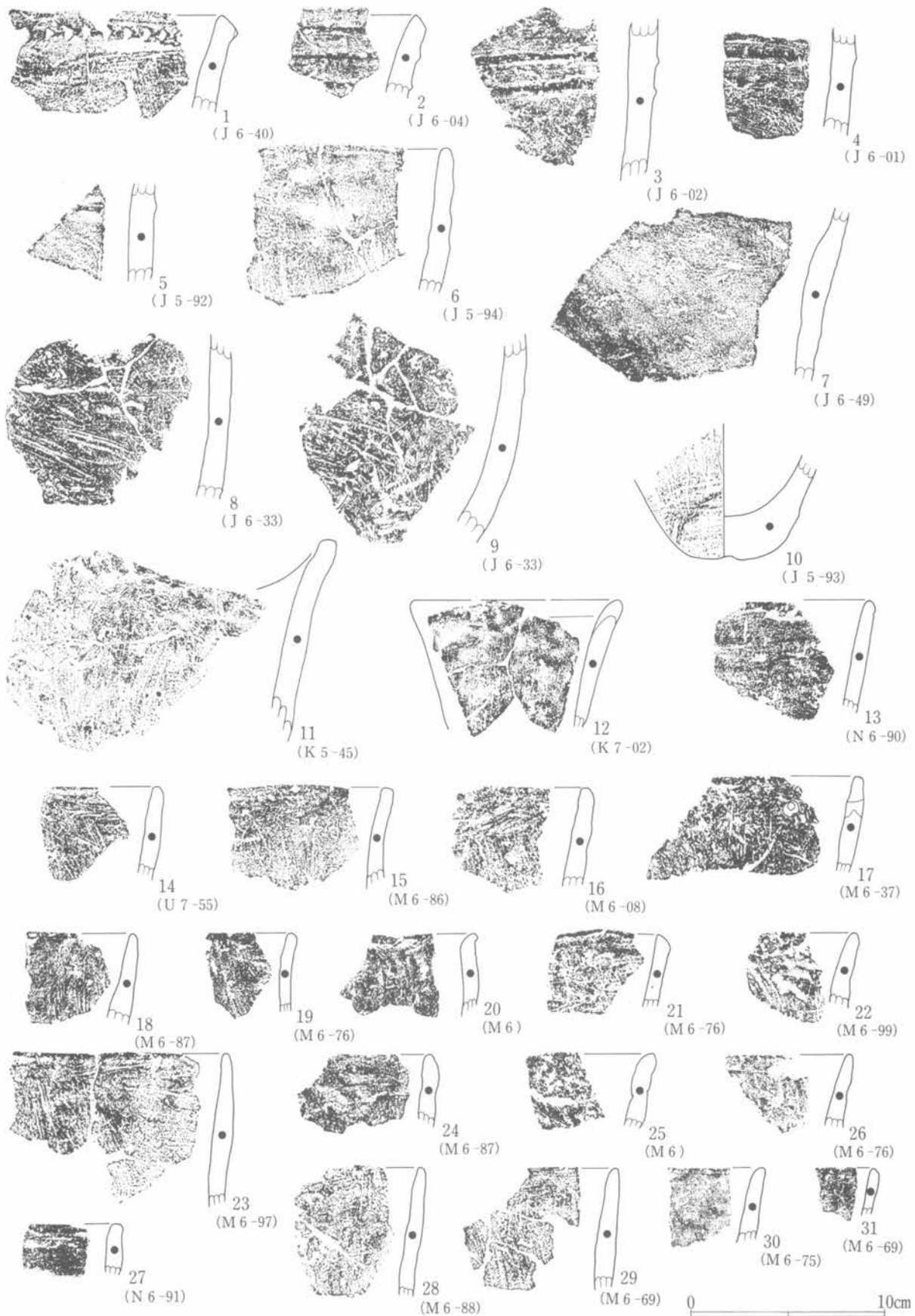
第54図 第2群・第1, 2類縄文土器分布図 (Ⅳ区)



第55図 第2群・第1, 2類縄文土器分布図 (V区)



第56図 第2群・第1, 2類縄文土器分布図 (VI区)



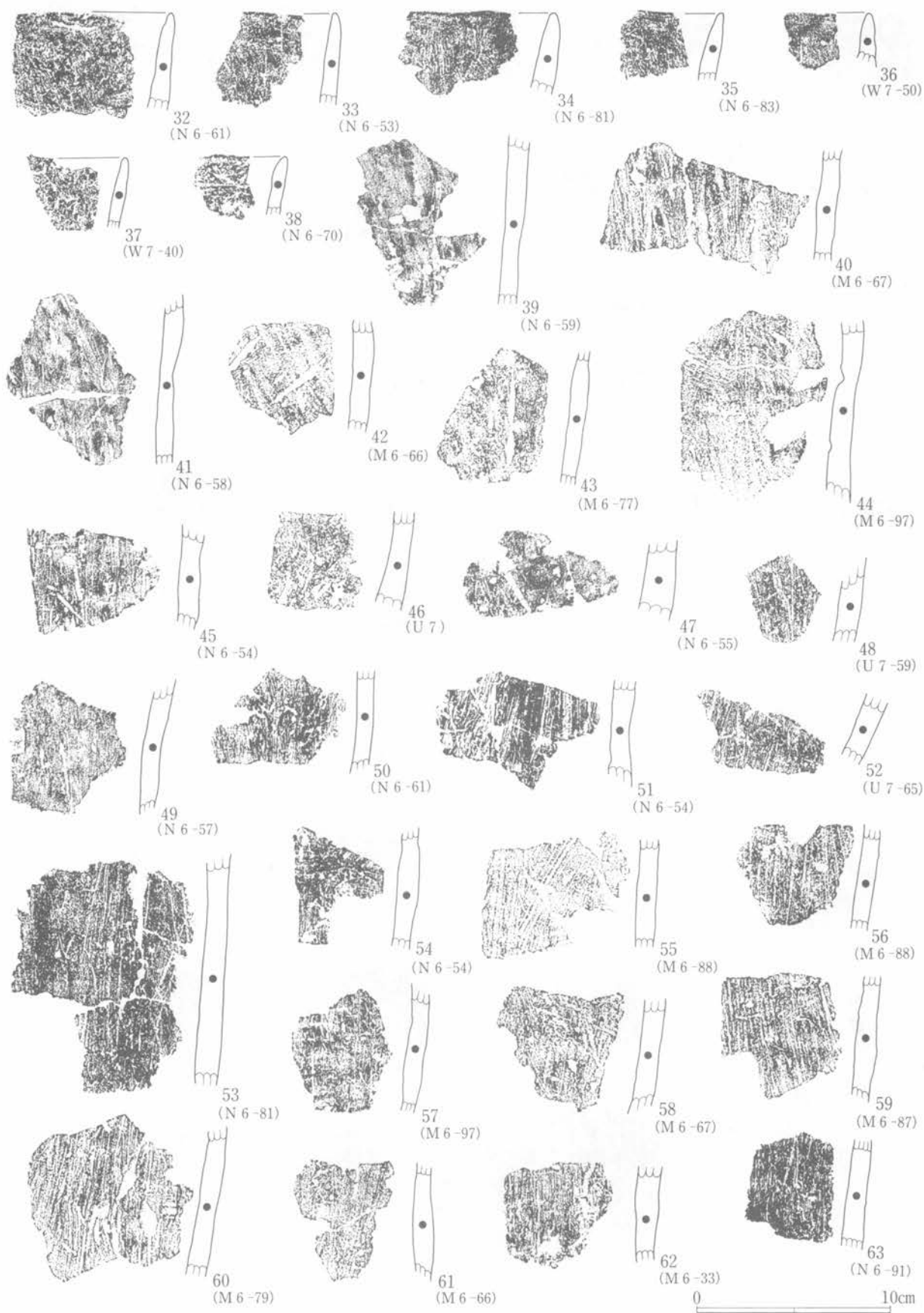
第57図 第2群・第3類縄文土器 (1)

方向の削りが施されている。胎土には繊維，砂が多く含まれ，焼成は普通で，色調は灰褐色である。2は，口唇部を含め3条の細い横位隆線が巡らされている破片である。口唇部はやはり外削ぎ状に成形されている。内外面とも横方向に調整が行われている。胎土には繊維を含み，焼成は普通で，色調は灰褐色である。3～5は胴部破片である。細い横位隆線が施されている例で，3では2条，4，5ではそれぞれ1条が確認できる。隆線付近では，横方向のナデが施されているが，そこから離れると擦痕は，右下がりに施される。胎土には繊維が含まれ，焼成は普通である。色調はいずれも灰褐色である。これらは，田戸上層式土器の特徴を持つことから，当該期の資料であると考えられる。6は，無文の口縁部破片である。口唇部付近には横方向のナデが施されているのに対し，胴部には縦方向の擦痕が観察される。縦方向に調整を行った後で，口唇部付近のみ，横方向に指でナデを施したものと見られる。口唇部上端は指で横方向にナデが施されている。繊維，砂（特に粒子の細かい長石が目立つ）を含み，焼成は普通である。色調は褐色である。7は，胴部破片である。右下方向に向かって調整が施されている。8，9は底部に近い破片である。横位を主とした雑な擦痕が施されている。胎土に繊維を含み，明褐色である。10は底部破片である。丸底に近い平底で，底部周辺は雑な条痕が施されている。11は波状を呈する口縁部で，口唇部断面は丸みを帯びた擦切状である。胎土には繊維を含み，焼成は良好で，明灰褐色を呈する。波状口縁などの特徴から，子母口式土器であると考えられる。12は小型の個体で，口唇部に段差が見られ，拓影の向かって右側が一段下がる。内外面とも胴部には縦位の擦痕が，口縁部は部分的に横位の擦痕が見られる。

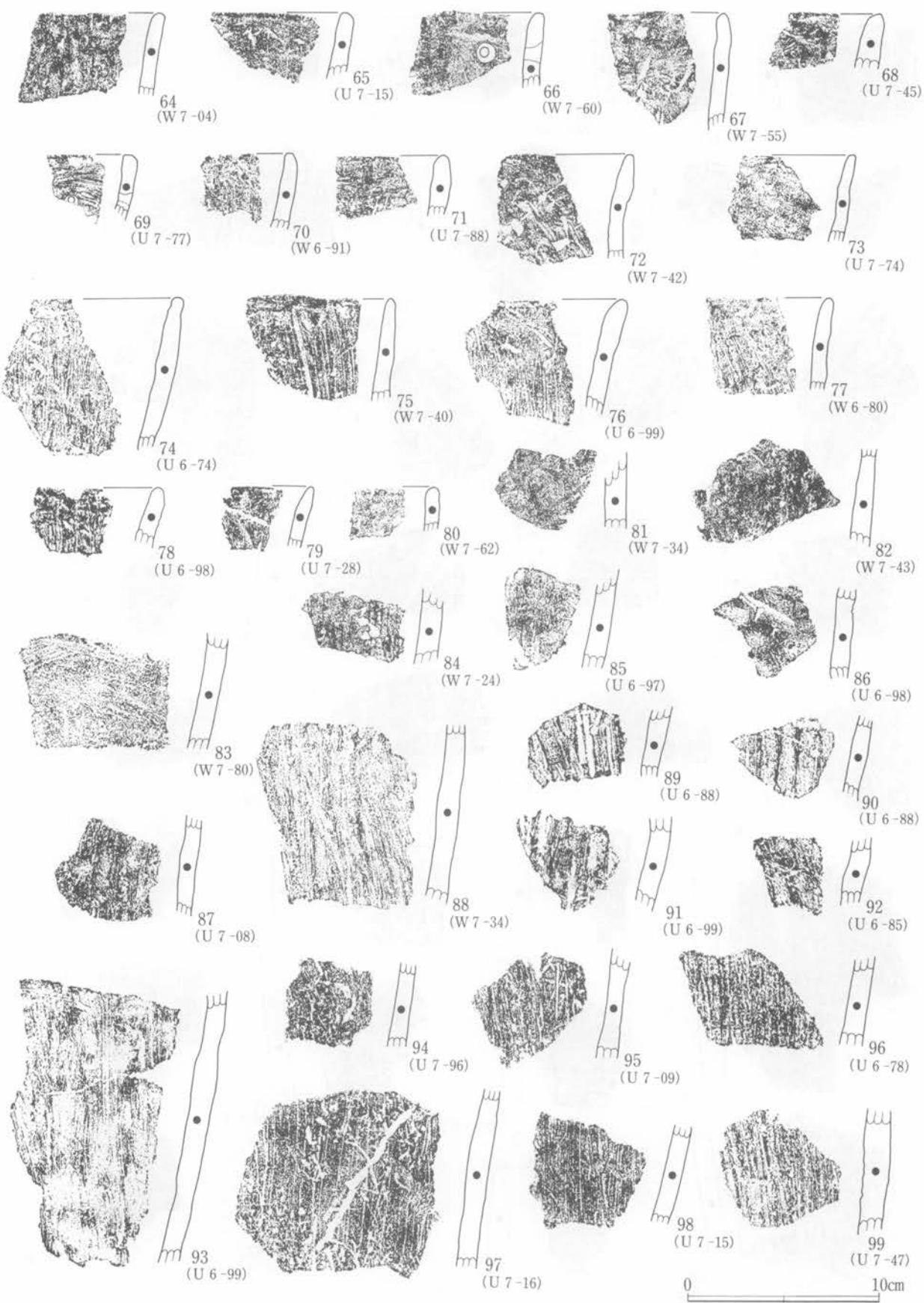
13から103は，無文の破片で，器面に擦痕が見られる例である。13～63はIV区出土の破片で，13～38は口縁部である。口縁部破片はいずれも平縁で，口唇部断面が丸みを帯びるもの，先端が尖るものなどの変化が見られる。13は口唇部が丸みを帯びる破片で，内外面とも横方向の比較的丁寧な調整が見られる。14，16，19，25，26，28，29は，胎土の肌理が粗く，白色の粒子が混入し，赤褐色を呈する破片である。口唇部断面は丸みを帯びるものが多く，器形の成形はやや雑である。19はやや口縁部が外反している。29は胴部には縦方向，口唇部付近には横方向の調整が施され，口唇部上端にナデが施されている。23，28も同様の調整が見られたものと考えられるが，23は胎土がやや緻密で，焼成も良好である。15は，器形は丁寧に造られている個体で，口縁部はやや外反し，口唇部上端は擦切状を呈する。明褐色で，胎土には砂を少し含む。これらの様相から，田戸下層式以前に属する可能性もある。17，20，22，24，30は色調が明褐色の破片である。比較的胎土は緻密だが，成形は粗い。17は補修孔が見られる。20，30は口唇部がやや外反する。18は，口唇部断面がやや尖りぎみで，焼成は良好である。21は口唇部断面が外削ぎ状で，胎土に粗い砂を多く含む内面の調整は丁寧である。27は口唇部直下に横位の浅い凹みが見られる。胎土は細かい砂を多く含む。

32～38は，口唇部断面がやや尖りぎみの破片で，先端はやや丸みを帯びる。色調は暗褐色から赤褐色で，焼成はやや良好である。胴部は主に縦方向の調整で，口唇部とその周辺には不明瞭な横ナデが施されているものと見られる。

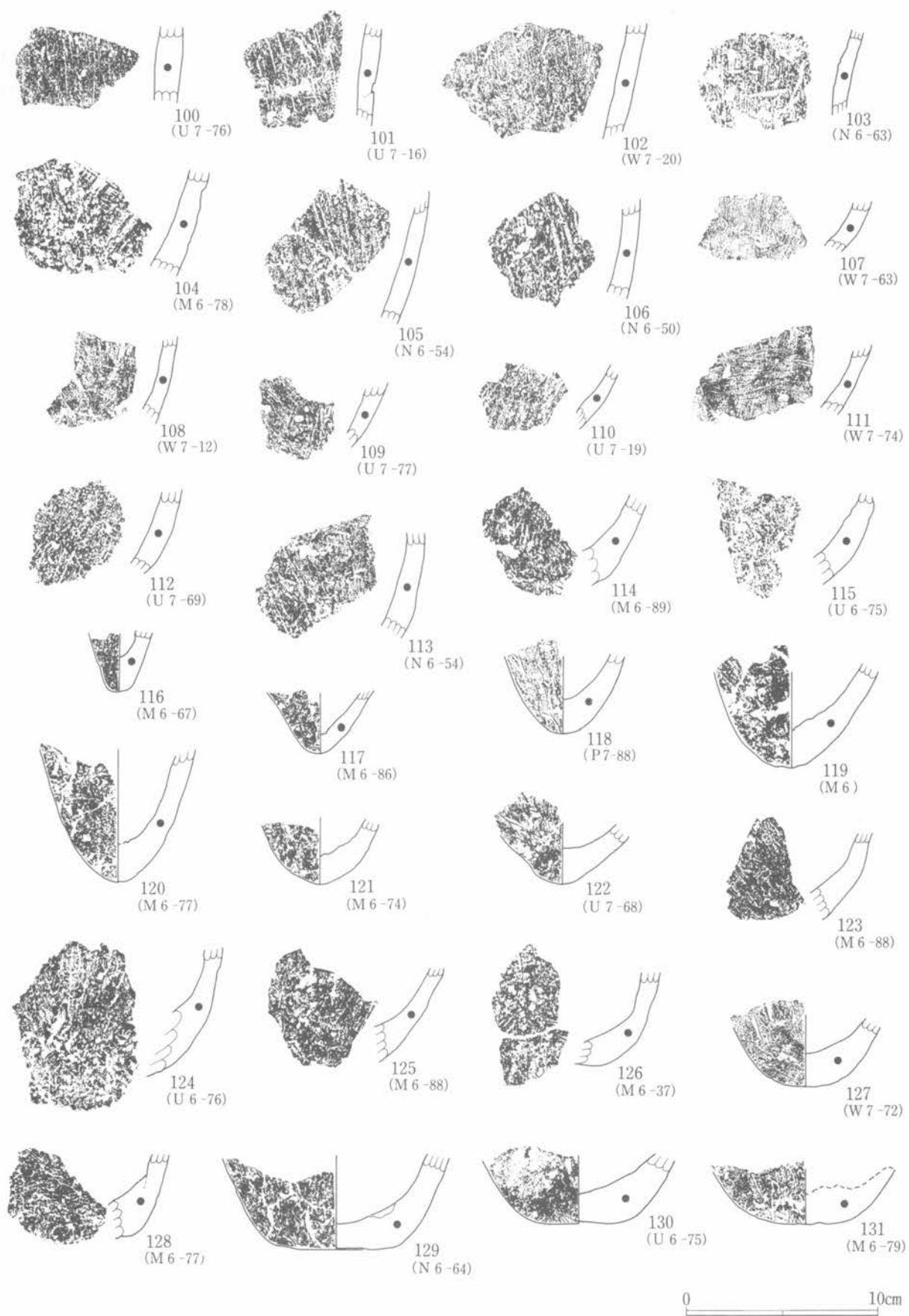
39～63は胴部破片である。ほとんどが縦位もしくはそれに近い調整が施されている。39～45，51は，ヘラ状の工具により調整が施され，樋状の凹みが見られる。47～50，52～63は明瞭な擦痕が見られるが，凹凸は弱い。いずれも成形は粗雑だが，焼成は比較的良好で，器面が堅牢なものも見られる。色調は暗褐色～赤褐色のものと明褐色のものがある。器形から見ると変化に乏しいが，41，44，49，51はわずかに外側に屈曲している。



第58図 第2群・第3類縄文土器 (2)



第59図 第2群・第3類縄文土器 (3)



第60図 第2群・第3類縄文土器(4)

64～111はVI区の資料である。64～80は口縁部破片である。口唇部断面は丸みを帯びるものが多く、72, 73, 79などがやや尖りぎみである。色調は64, 65が明褐色である他は、褐色から暗褐色である。1は比較的丁寧な成形で、胎土も緻密である。明瞭な擦痕は見られない。66は、口唇部とその直下3cmほどに横位の擦痕が、その下位に縦位の擦痕が見られる例である。68, 71も同様の調整が施されている。69にも強い横位の擦痕が見られる。70, 73～78は口唇部に横位のナデが施され、その直下から内外面に縦位の擦痕が見られる例である。74には口唇部下位1cmほどに横位のナデが見られるが、他の資料にはほとんど見られない。72はやや屈曲し外反する破片で、口唇部及びその直下は丁寧な横ナデが施されており、胴部には斜位の擦痕が施されている。79, 80は小型の土器の破片である。

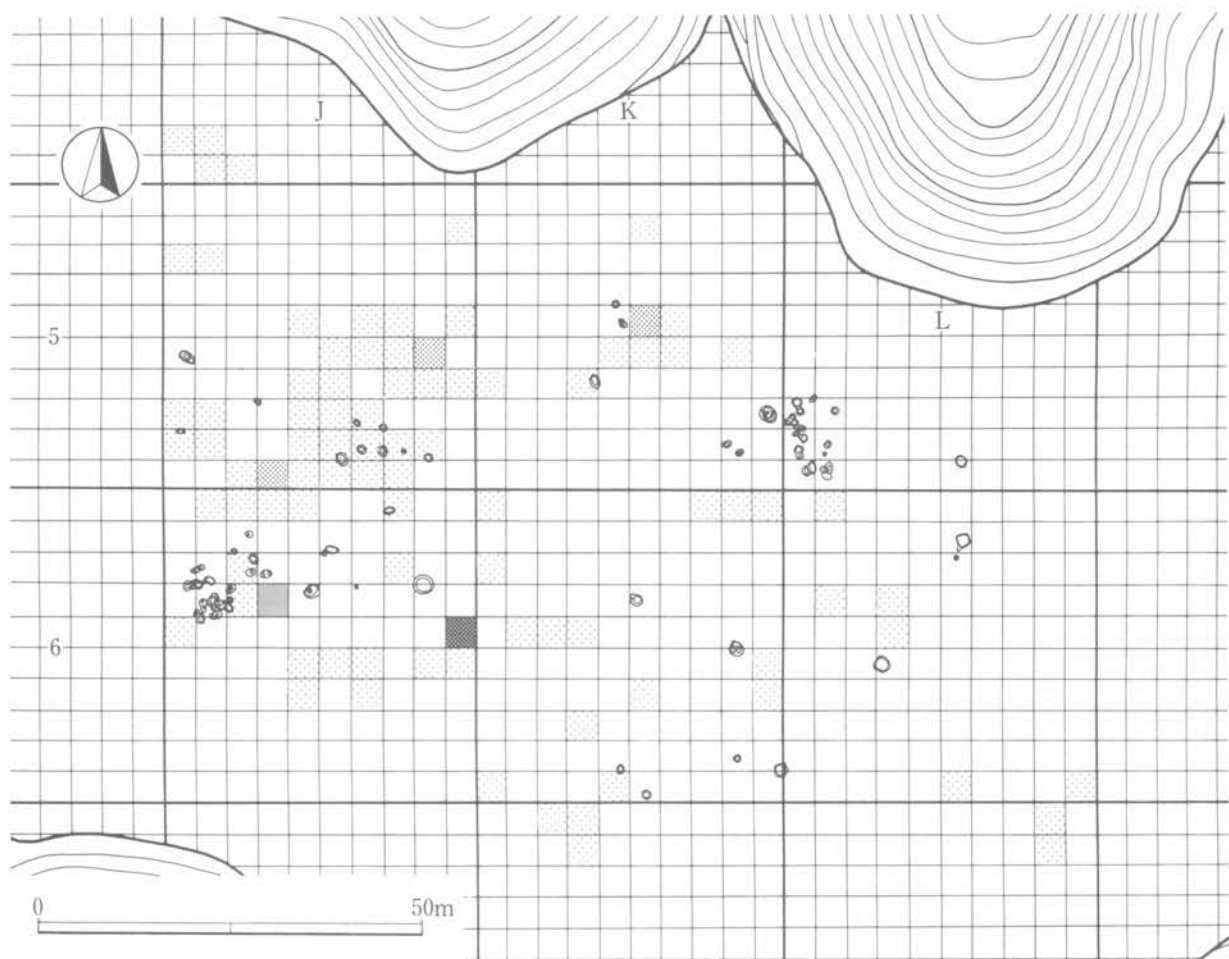
81～103は、胴部破片である。81, 82, 84～86は器面の調整が不明瞭な破片である。86の外面に横位の擦痕が見られる他は、縦位に調整が施されているものと考えられる。85, 86は暗褐色だが、他は黄褐色を呈する。87～103は、明瞭な縦位の擦痕が見られる例である。88～92は特に顕著で、部分的に槌状の削り跡が見られる。色調は、91, 93, 97, 102は明褐色、95, 99は暗褐色、101が灰褐色である他は、赤褐色から褐色である。器形は、変化に乏しいが、103にやや外反する傾向が見られる。

104～113, 123, 125は底部付近の破片である。いずれも、やや丸みを帯びながら厚みを増し底部に至る。104は器面が被熱して、剝落が著しい。107は胎土の肌理が細かく、焼成は良好である。109, 110は薄手の資料で、小型の個体であろう。色調は、107, 110, 111が明褐色である他は、暗い赤褐色である。

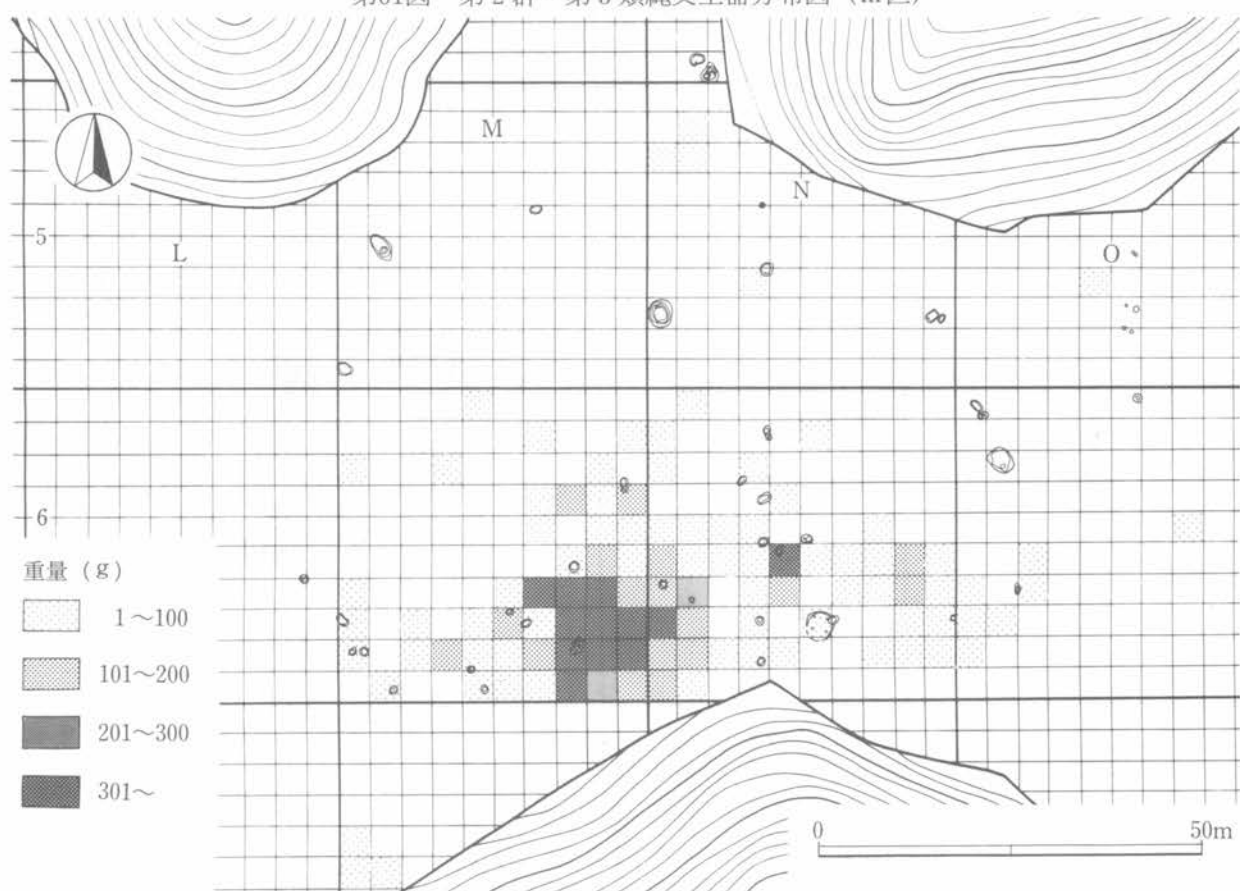
114～131は、底部の破片である。116～122は、尖底となる破片で、先端はやや肥厚するが、田戸下層式のように極端には厚くならない。器面調整はほとんどが尖底部の頂点を起点とし、放射状に行われている。116は鋭角に尖る例で、胎土は緻密で含まれる繊維はわずかである。暗褐色を呈し、焼成は良好である。117は、やや鈍角になる例である。胎土に含まれる繊維は少なく、赤褐色を呈し、焼成は良好である。118～121は先端がやや丸みを帯びる例である。118は接地した部分に摩耗した痕跡が見られる。119は被熱しており、器面の剝落が著しい。120, 121も被熱のために脆くなっている。これらは色調が赤褐色を呈し、胎土には繊維、砂粒を含み、焼成はやや良好である。122は鈍角な破片で、焼成が良好で、胎土も緻密である。明褐色である。

124, 126, 127は、丸底に近い破片である。いずれも底部の輪郭が明瞭ではない。124は下端に摩耗痕が見られることから、接地していたものと考えられる。126は、被熱し脆くなっている破片である。127はやや底部の輪郭が見られる例である。128は破片が小さいため、形態が明確ではないが、同様に丸底であろう。124, 126は褐色、127は暗い赤褐色である。

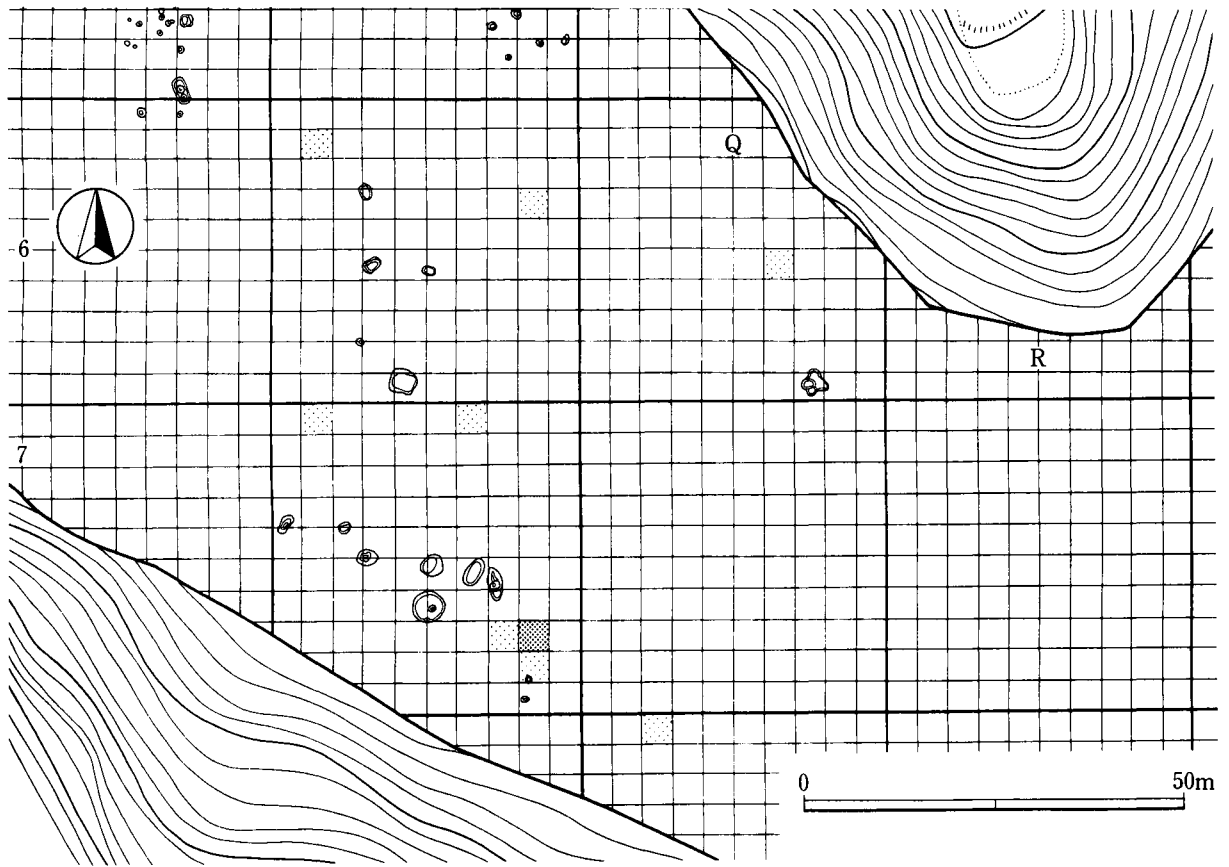
129～131は、丸底に近い平底となる破片である。いずれも被熱しており、内外面とも剝落が見られる。底面の輪郭は比較的明瞭で、底面と器壁外面を別に調整しているが、器面調整が雑である。130は底面に白色の物質が付着している。131は内面が熱により剝落しており、旧状を留めてはいない。いずれも暗い赤褐色を呈する。



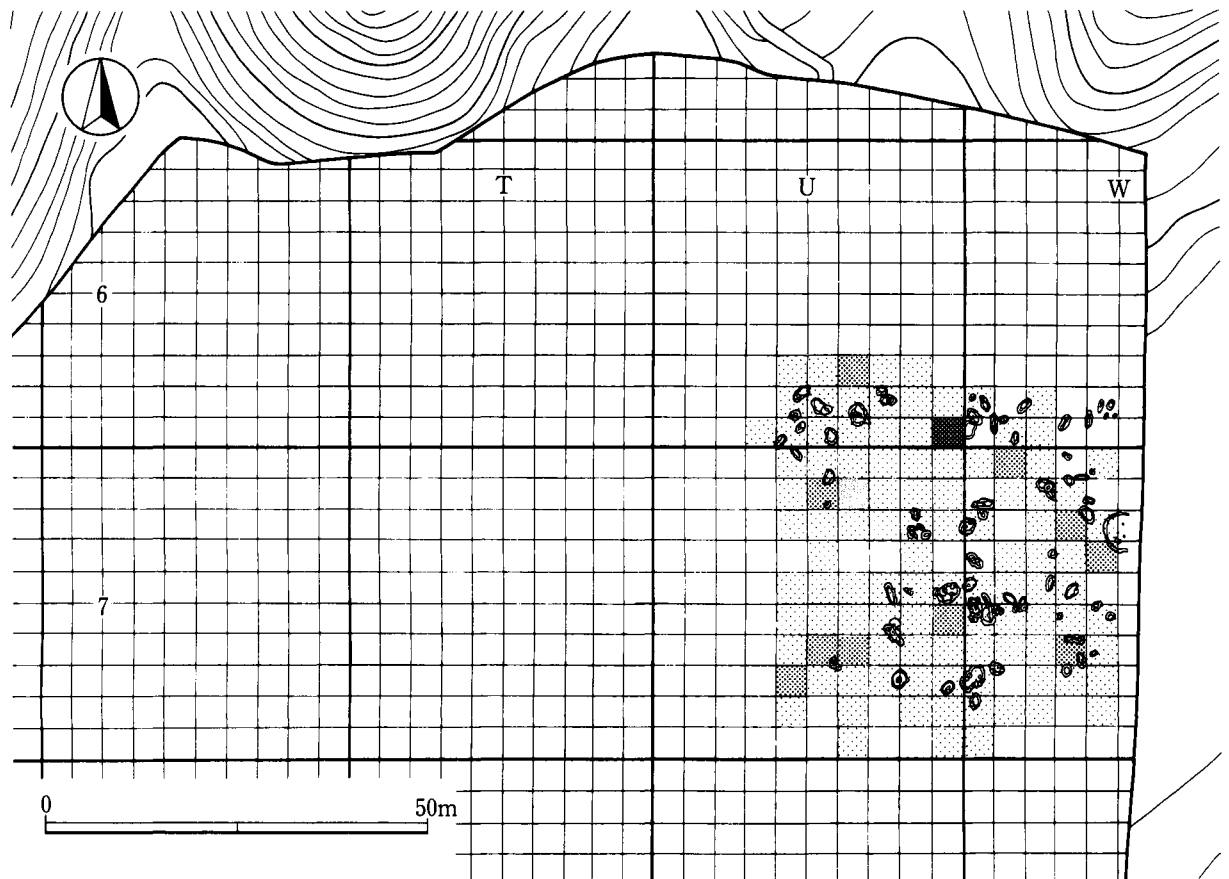
第61図 第2群・第3類縄文土器分布図(Ⅲ区)



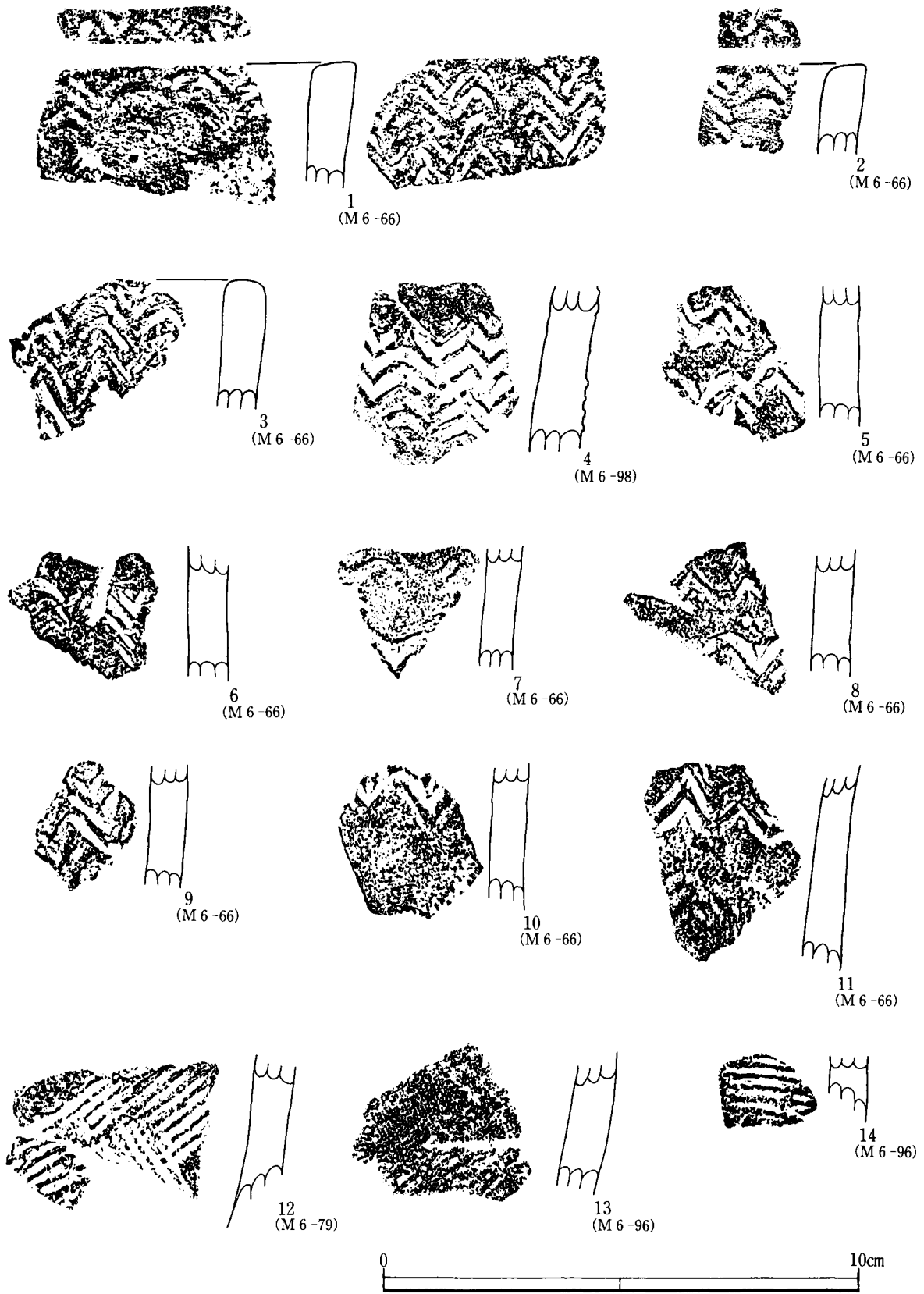
第62図 第2群・第3類縄文土器分布図(Ⅳ区)



第63図 第2群・第3類縄文土器分布図 (V区)



第64図 第2群・第3類縄文土器分布図 (VI区)

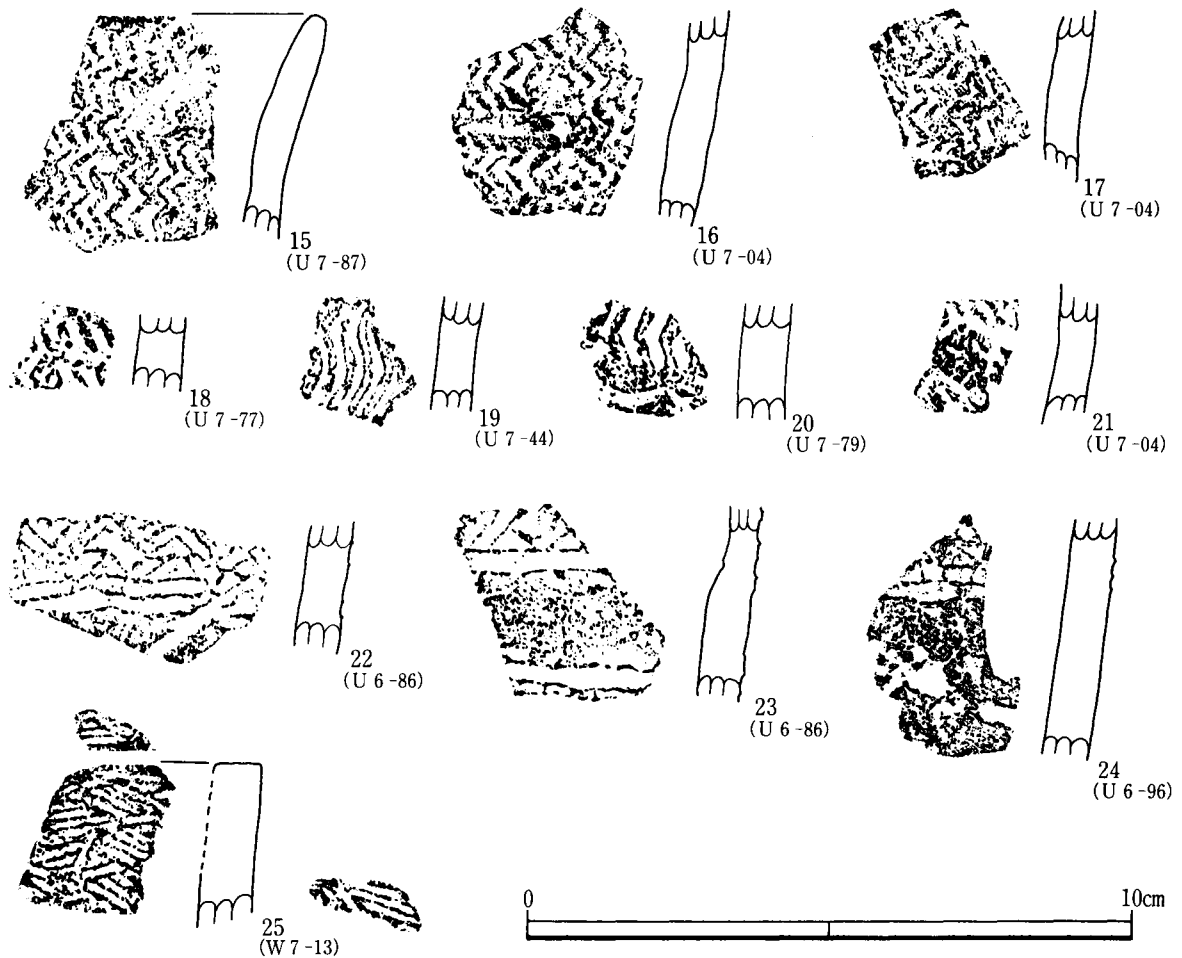


第65図 第3群縄文土器 (1)

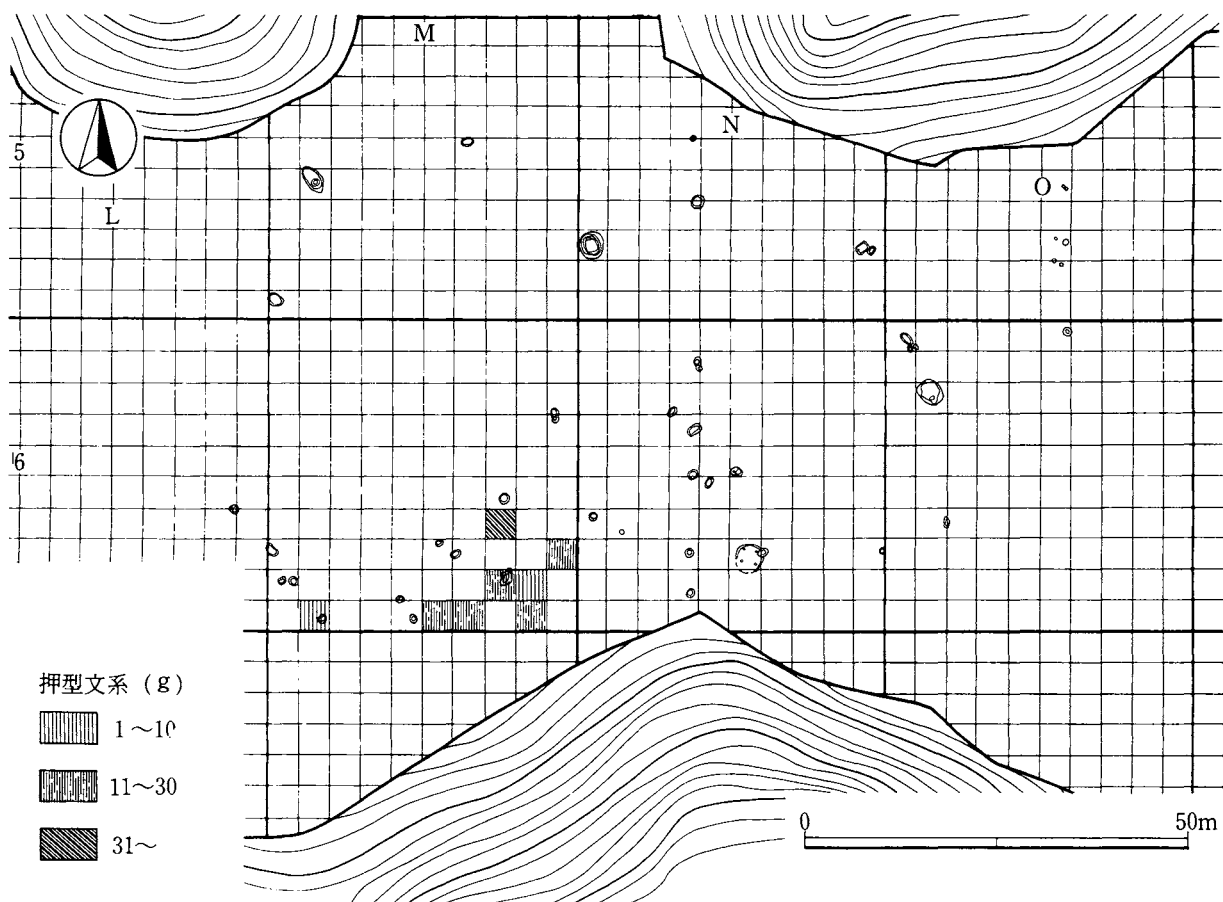
第3群土器 押型文土器群 (第65図～第68図, 図版56)

押型文系土器に分類されるものを第3群土器とした。1～3は口縁部破片である。1は内外面および口唇部に横位の山形押型文が施されている。2は、外面、口唇部に山形文が施される例で、内面には文様が確認されない。3は外面にのみ文様が見られる。4は胴部破片である。山形文が密集して施されているが、破片上部に施文が見られない部分がある。6も同様の破片である。数条の山形文が密集して施されている。5, 7, 8は山形文が施される胴部破片であるが、文様が密集しないのが特徴である。9～11も同様の文様であると考えられるが、破片が小さいこと、摩耗が激しいため、不明である。これらはいずれも器面は灰色を呈し、胎土に砂粒や黒色の粒子を含む。12, 13は外面に一松文様が施される。14も小破片であるが、同様の文様である可能性が高い。これらの破片はIV区から検出された例である。

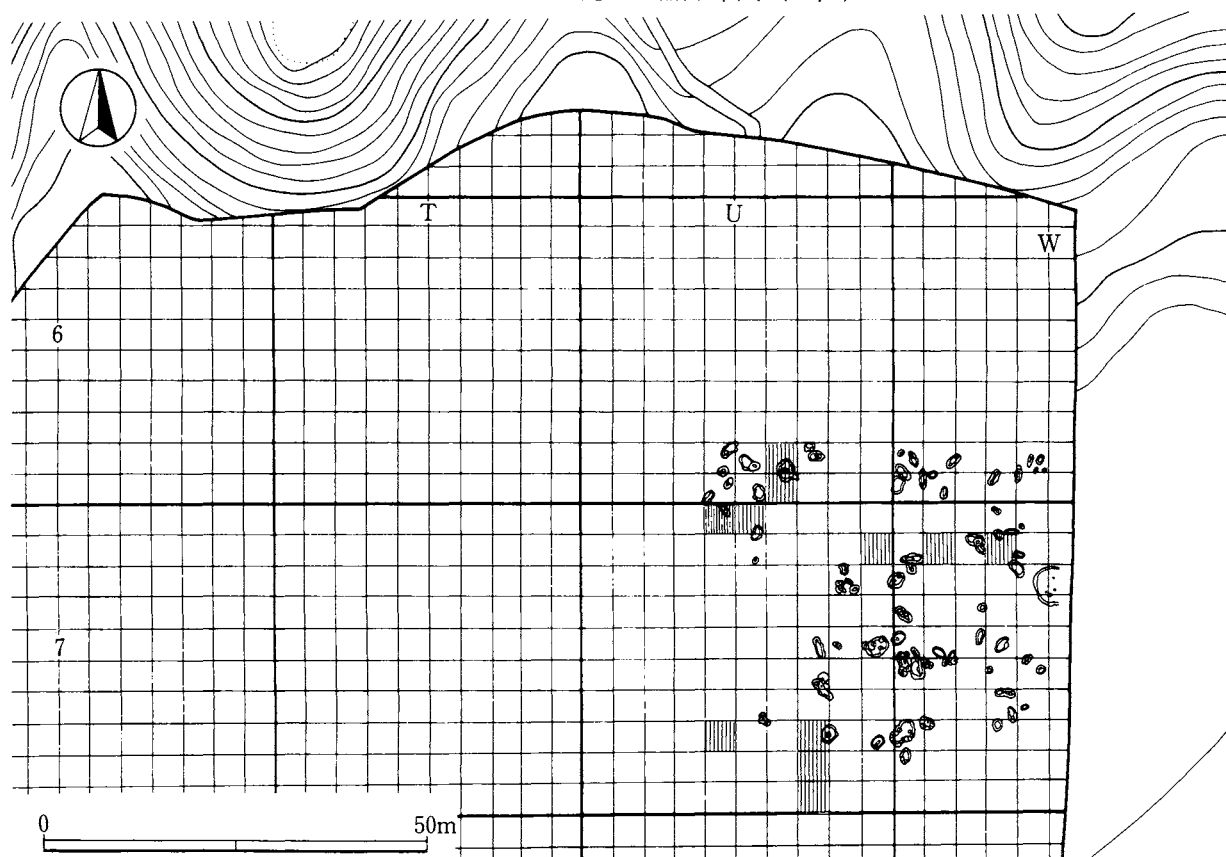
15は口縁部破片である。縦位の山形押型文が施されている。外反し、口唇部断面は先端が丸みを帯びる。16～17は胴部破片だが、同様の文様であると考えられる。18～20はいずれも胴部の小破片である。18も山形文であるが、屈曲が緩やかである。19は縦位・横位の両方の山形文が混在しているものと考えられる。21～23は、胴部破片だが、横位の直線による区画が見られる。22は並行する2本の横位直線間に、無文部分が見られる。23は横位直線が破線状となっている例である。24は一松模様が施されている口縁部破片である。内外面、口唇部にも同様の文様が施されていると考えられるが、破損が激しく、詳細は不明である。これらはVI区から検出されている。



第66図 第3群縄文土器 (2)



第67図 第3群縄文土器分布図 (Ⅳ区)



第68図 第3群縄文土器分布図 (Ⅵ区)

第4群 縄文時代前期前葉の土器群（第72図，図版60）

72図-72，73は，同一個体である。串状の工具と細い竹管により文様が施されている。胎土は緻密だが，焼成はやや悪く，黒褐色を呈する。縄文時代前期前葉の関山式土器であると考えられる。

第5群 縄文時代前期後葉から末葉の土器群（第69図～第77図，図版57～61）

第1類土器 縄文前期後葉に位置づけられる土器群（第69図・71図，図版57・59）

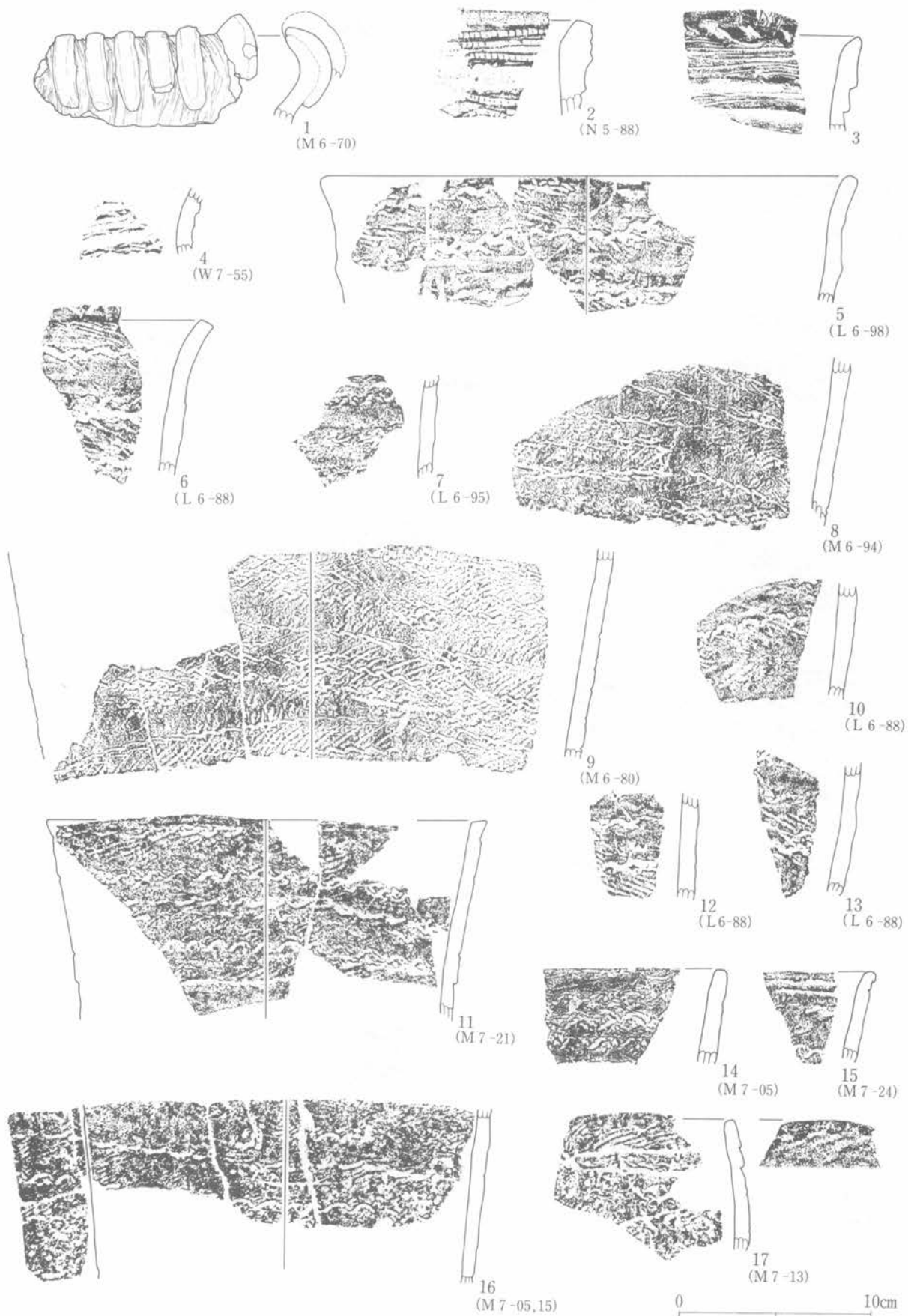
第71図-1は口縁部破片である。串状工具で縦方向に条線を施した上に粘土紐を縦位に貼付けている。胎土には砂礫を多く含み，焼成は良好である。諸磯b式である。4は頸部付近の破片で，強く外反する。横位の隆線上に刻目が施される。諸磯式である。3は口縁部破片で，粘土紐を横位に貼り付けて段を形成している。外面には横位の細い沈潜群が施されており，口唇部には角棒状工具により刻目が施されている。これらは，浮島式に比定される。

第72図-68～71は，同一個体であると考えられる。68は口縁部破片である。粘土紐の張り付けにより口唇部に帯状の装飾を施し，その下位の部分に角棒状工具で鋸歯状の刻みを施している。69～71は胴部破片である。2本一組の棒状工具による点列文で文様が構成されている。70は底部付近の破片で，底部付近には文様が希薄であることが伺える。胎土には砂などは含まれず，緻密で，焼成も良好である。色調は名褐色である。粘土紐の継ぎ目で割れる傾向がある。浮島III式土器であると考えられる。

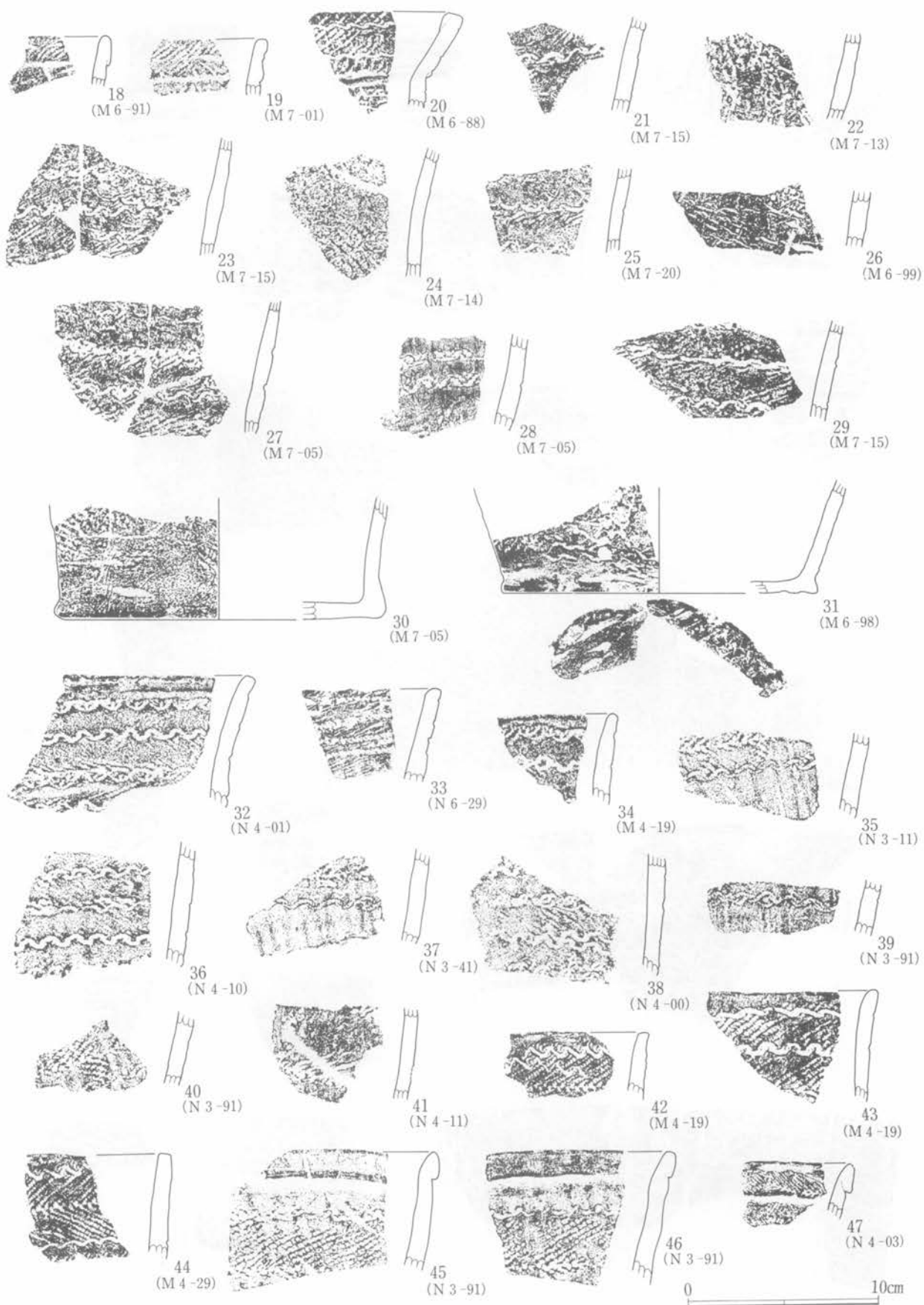
第1類 縄文前期末葉の土器（第69図～第71図，第75図～第77図，図版57～59）

横位の縄文，羽状縄文，結節文が器面全体に施される土器群である。

5は口縁部破片で，段を有する個体である。結節文が斜位に施され，不鮮明ながら部分的に一段の縄文が見られる。6も同様の文様構成だが，口唇部断面が擦切り状で，段は見られない。7～12は胴部破片である。5，6とほぼ同様の文様構成である。縄文は明瞭な部分と不明瞭な部分があり，結節文もほぼ平行に施されているものの，重複や消長が激しく，文様構成に明確な規則性を持たない。9には内外面とも炭化物が付している。胎土には白色の粒子を少し含み，焼成は比較的良好である。粘土紐の継ぎ目で割れる傾向があり，5，8，9には特に明瞭に見ることができる。10も，横位の結節文と不明瞭な斜行縄文により文様が構成されている。口唇部は内削ぎ状で，破片下部付近には粘土紐痕が明瞭に残されており，段を形成している。11は二次的に被熱して外面に剝離している部分が見られ，内面には炭化物の付着が見られる。胎土には砂，雲母が含まれ，焼成は良好で，淡褐色を呈する。13，14は，雲母を含まず，暗褐色を呈し，焼成は良好である。15は口縁部破片である。口唇部断面は擦り切り状で，胎土は緻密で焼成は良好である。表面に炭化物が付着している。16は口唇部は断面が擦り切り状で，外面に粘土紐跡を明瞭に残している。胎土には雲母，砂が含まれている。焼成は良好で，淡褐色を呈する。17は内湾する口縁部破片で，口唇部外面には2段にわたり，粘土紐跡を装飾的に残しており，上段には縄文が施されている。外面が被熱のため剝離しており，文様構成は不明瞭だが，横位，縦位両方の結節文が見られる。胎土は緻密で，焼成は良好で，淡褐色である。18，19は，口唇部付近の小破片である。やはり口唇部に帯状の装飾が見られ，縄文



第69図 第5群・第1, 2類縄文土器



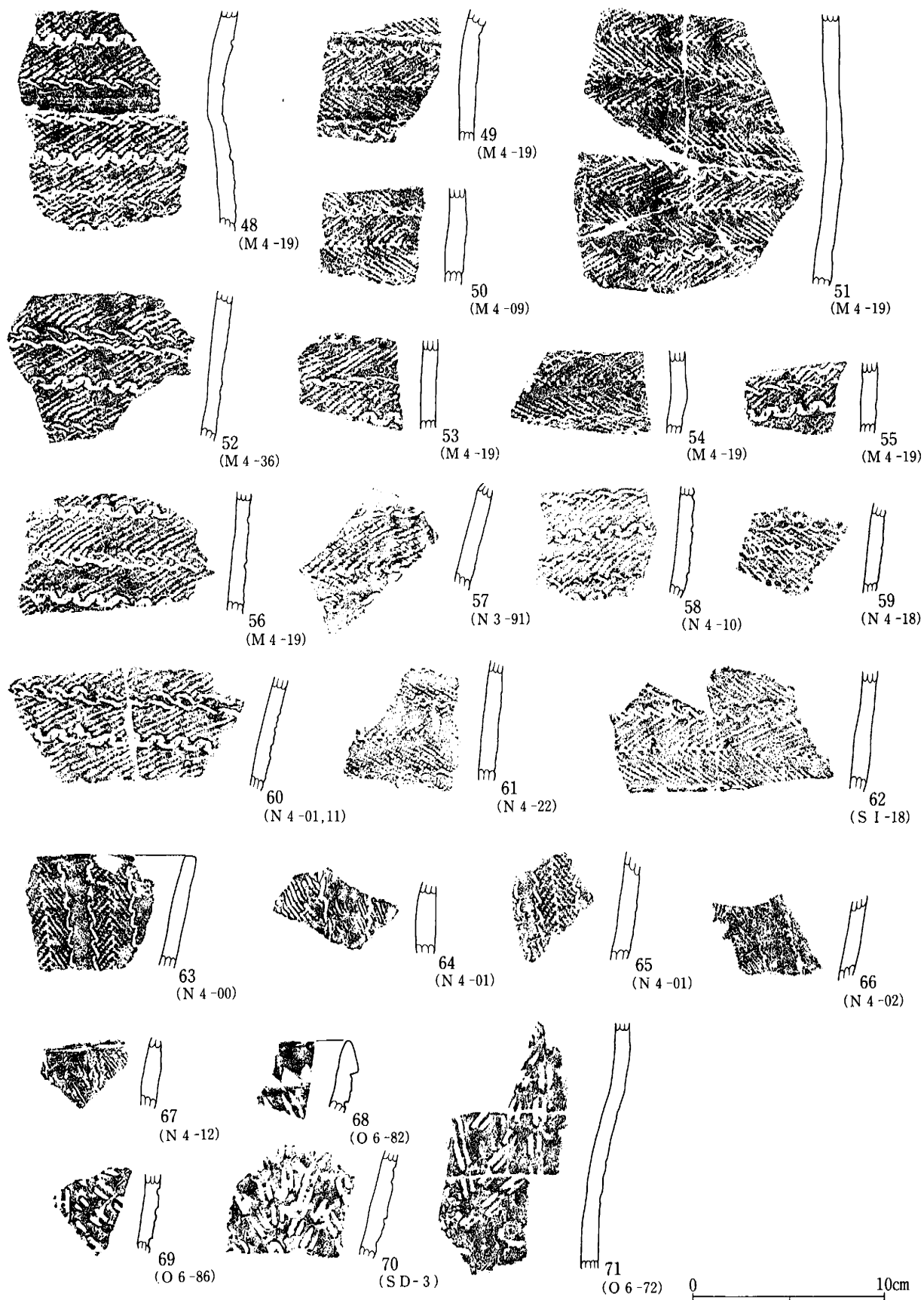
第70図 第5群・第2類縄文土器

が施されている。20は口縁部が強く外側に屈曲する個体である。屈曲部は粘土紐の継ぎ目で、粘土紐跡が残されている。口唇部は肥厚し、内側に折り返している。外面には比較的明瞭に結節文と縄文が施されている。外面には炭化物が付着している。これらはいずれも胎土は緻密で、明褐色を呈し、焼成は良好である。21から29は胴部破片である。22は外面が被熱して傷みが激しく、不明瞭だが、縦方向と横方向に結節文が見られる。胎土に白色の粒子を含み、明褐色である。24はやや屈曲する器形で、結節文は見られず、斜行縄文が施されるのみの破片である。胎土には砂、石英粒を含み、焼成は良好で、褐色を呈する。26は結節文が不明瞭で、撚糸文状になっている例である。胎土は緻密で、白色粒子をわずかに含み、明褐色を呈する。28も胎土は緻密で焼成も良好である。21, 23, 25, 27, 29は、いずれも胎土に雲母、砂を含み、色調は淡褐色で、焼成は良好である。30, 31は底部破片である。外面には、胴部破片と同様の横位結節文と不鮮明な縄文が確認できる。底面は水平で、底端には張り出しが見られる。30には結節文は見られず、必ずしも全面に結節文が施されないことを示している。31には不鮮明ながら底面に網代痕が見られる。焼成は本来良好であったが、二次的な被熱のため、表面の剝離が著しく、脆くなっている。炭化物が付着している。

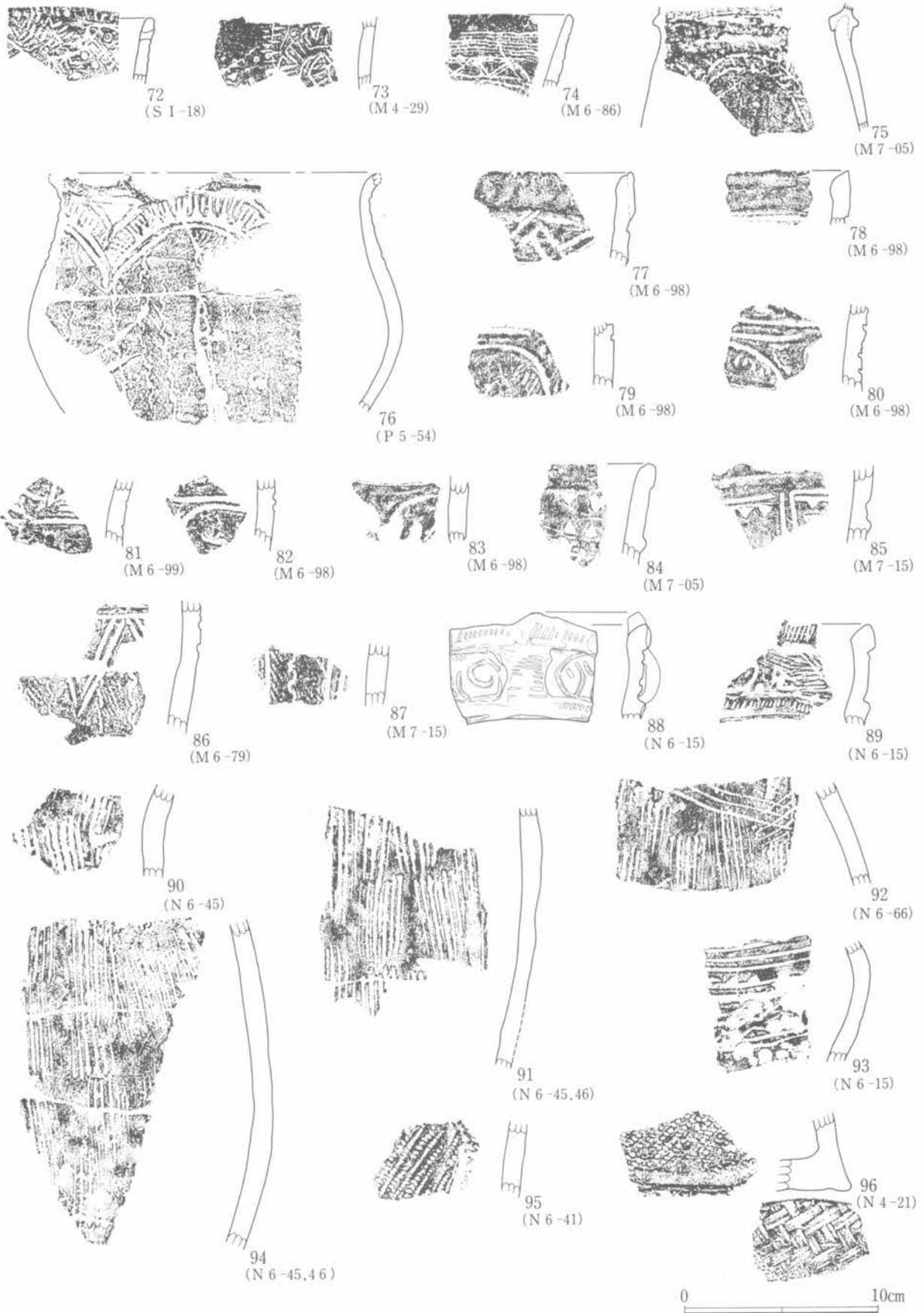
32～34は口縁部破片である。32は、頸部に緩い屈曲を持つ個体で、口縁部はやや外反する。外面には、ほぼ平行に結節文が施されている。33は結節のある縄文を横位に押圧したか、あるいは棒に巻き付けて転がして施文されている例である。地文に縄文を施している。35～39は、胴部破片である。35は、上位に見られる結節と下位に見られる結節が明らかに異なっており、それらの間に斜縄文が一定間隔で出現し、連続性があることから、上下の結節文は同一原体によるものであると考えられる。よって、2本の縄を組み合わせ、両端を結んだものを原体として用いていることがわかる。36～39も同様の例であると見られる。これらは胎土に長石粒、石英粒を少し含み、焼成は良好である。

40は結節文と羽状縄文が見られる例である。41の中央に見られる沈線状のものは、後世についた傷である。42は結節文が施されている例だが、地文として縄文を施した後に結節文を施している。43は二種類の結節文が交互に出現する破片である。35と同様に一組の原体で施文しているものと考えられる。44～47は口縁部破片である。44は擦り切り状の口唇部断面で、羽状縄文と結節文により文様が構成されている。羽状縄文と上下の結節文で、一組となっており、これらの下位には文様が見られない。胎土に長石粒を含む。45, 46は口唇部に粘土紐の折り返しにより装飾が施されている例である。文様は44と同様の構成であると考えられる。47にも口縁部の折り返しが見られるが、その上に目の細かい縄文が施されている。86も羽状縄文が形成される例だが、被熱による表面の剝離が著しい。

48は胴部で、緩く屈曲する個体である。羽状縄文は形成せず、43と類似した文様構成である。器形が屈曲する部分に無文帯が配され、破片の下位の部分では結節文の重複が見られる。49はやはり屈曲する器形で、羽状縄文が施される例である。結節文の部分に重複が見られる。50, 51, 54, 57, 61, 62も同様の文様構成である。51は胴部が緩く張り出す個体で、切れ目なく羽状縄文が配されている。57, 61は、隣り合う結節文の間に空白部分が見られる例である。52, 53, 55, 56, 58～60は羽状縄文を形成しない例である。59は左上がりの斜縄文であるのに対し、他は右上がりである。48から60はいずれも、胎土には白色粒子もしくは砂を含み、焼成は良好で、暗褐色から褐色を呈する。そのほとんどが粘土紐の継ぎ目で割れており、また、器形屈曲の変換点も粘土紐の継ぎ目に見られる。



第71図 第5群・第1, 2, 3類縄文土器



第72図 第4群, 第5群・第3類縄文土器

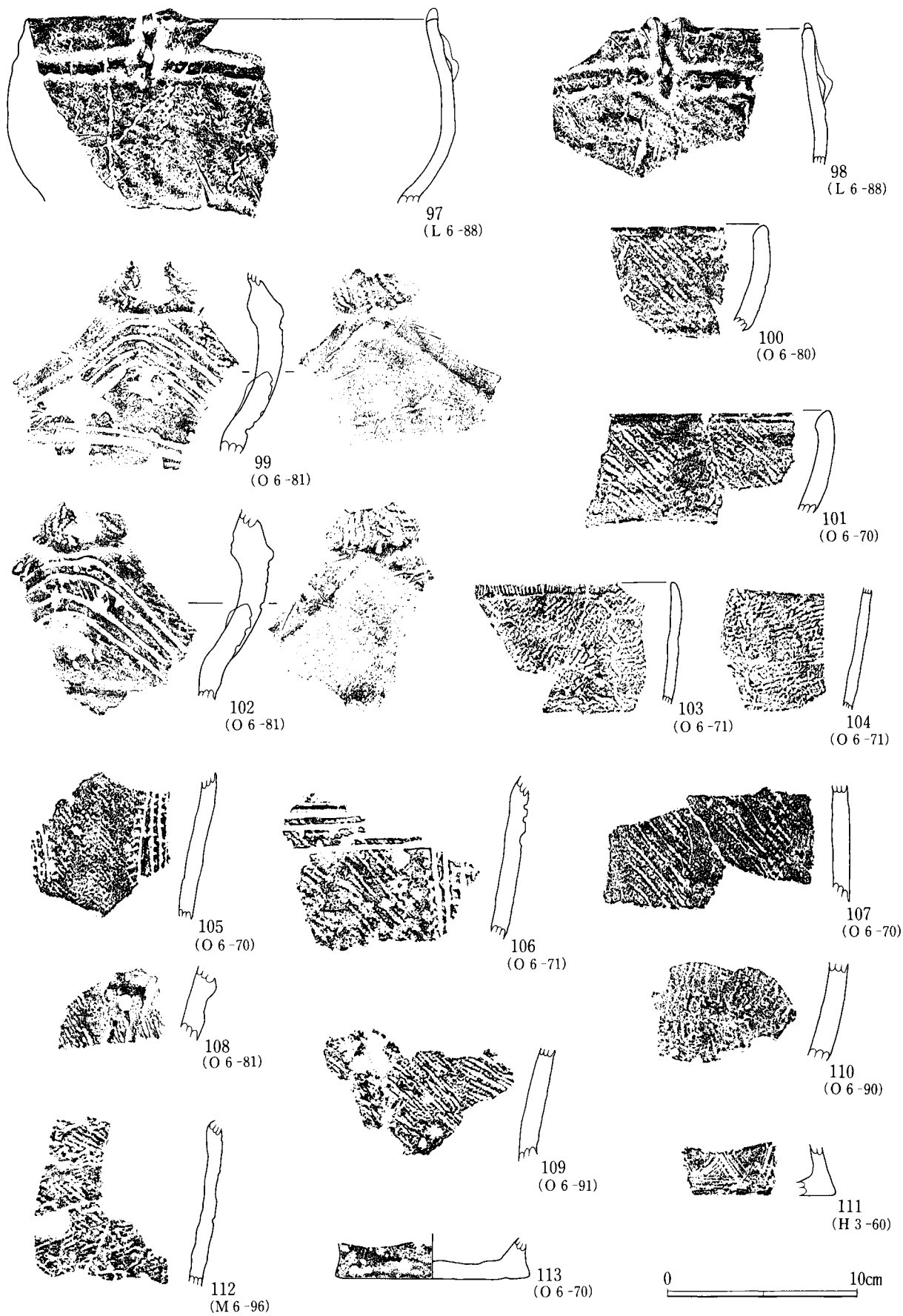
第2類 縄文中期初頭の土器（第69図、第71図～第77図、図版60・61）

中期初頭の五領ヶ台式土器に位置づけられる一群をここに示した。

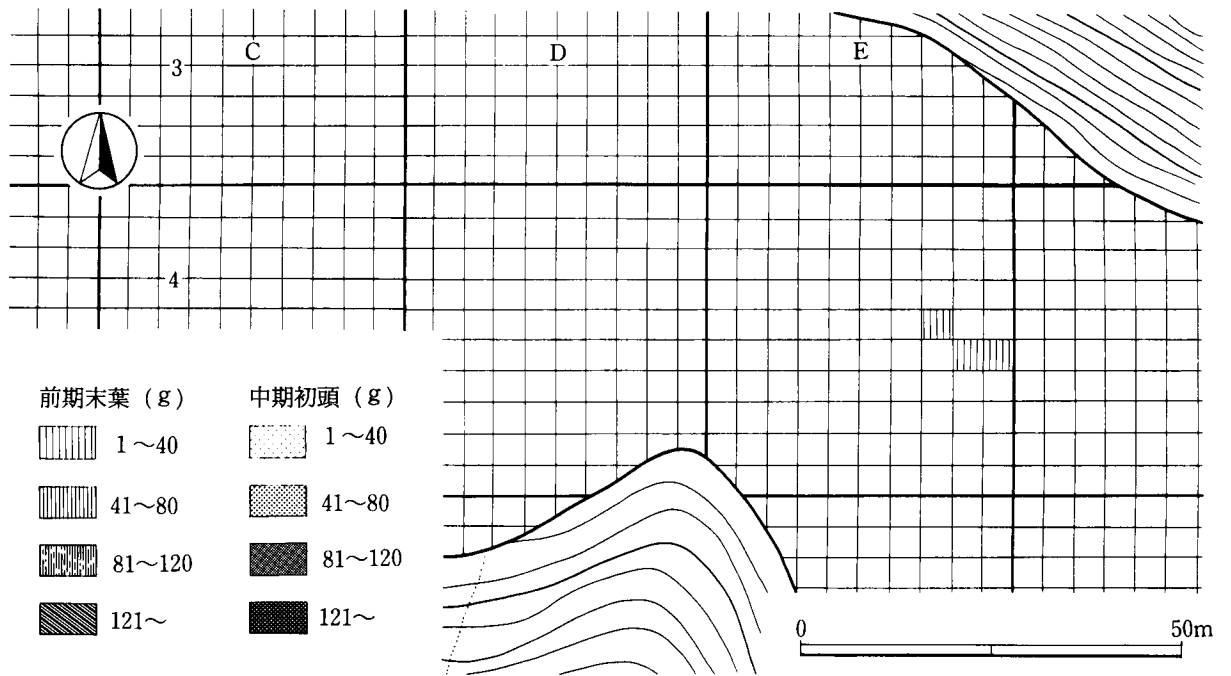
63～66は縦方向に羽状縄文、結節文が展開する例である。63は口縁部破片である。平縁で、口唇部端から文様が施されている。64～66は胴部破片だが、63と同様の文様構成であると考えられる。67も同様の文様を持つ胴部破片だが、破片上端付近に横位の沈線が見られる。いずれも胎土に砂を少し混入し、焼成は良好である。中期初頭のいわゆる八辺式土器と呼ばれる資料である。

2は口縁部破片で、口唇部にかけて強く肥厚している。外面は横方向の押引き文で文様が構成されている。72、73は同一個体である。口縁部が内湾し、頸部が大きく括れる例であると見られる。口唇部には少なくとも2つの、二つ一組の小突起が見られ、そこから隆線が垂下する。口唇部直下には隆線が巡っている。外面には縦方向の結節文が施されている。破片の下端からは、筒状の胴部が続くものと考えられる。器厚が薄く焼成は良好である。内外面に炭化物が付着する。74、75は同一個体である。波状口縁の波頭部破片である。口唇部に向かい肥厚し、口唇部内面には稜線を持つ。外面には口縁と平行に4条の沈線が施され、破片下部には頸部の括れが見られ、境界に横位の沈線が巡るようである。波頂部には三角形の装飾が見られ、内外面に縄文が施されている。二次的な被熱のため表面が剥離し、脆くなっている。77は、やや内湾する口縁部破片で、口唇部内面に横方向の稜線を有する。外面には斜縄文が施されており、胎土に砂を含む。78、79は、同一個体である。薄手の造りで、口唇部に細密な刻み目を持つ。外面は、縦の結節文が施されており、その他の縄文も規則性から、結節文施文と同時に施されたものであろう。80～85は胴部破片である。筒状を呈する胴部の中間の部分で、数本の沈線が垂下して区画が形成され、沈線に沿って刺突文列が施される例である。器面には縄文が施されている。81も同様の文様構成をする例だが、より頸部に近い破片で、頸部下に横位に施される沈線が観察される。82は斜縄文が施されている。83は被熱による剥落が著しいが、粘土紐を張り付けた隆線が横位、縦位に施され、破片上部で交差しているのが観察される。84にも破片左端に、縦位の隆線が張り付けられていた痕跡が見られる。87、88は底部破片である。88は角棒状工具により格子状文が施されている。

89、90は細沈線と細い竹管文で文様が構成されている例である。89は口縁部破片で、補修口が見られる。91は細沈線により文様が構成されており、連続三角文が描かれている。92、93は沈線により弧状文を横位に連続して描出する例である。92は2本の並行する弧状文に沿って連続刺突文が施されている。93は弧状文で描かれた区画内に花卉状の文様を充填している。弧状文から下へ結節文が垂下する。94～100は同一個体であると考えられる。口縁部および口縁部下文様帯の破片で、沈線により楕円形などの区画文を形成し、刺突文などを配しているものと考えられる。101、102は同一個体である。101は口縁部破片で、隆線で横位に形成された区画内に三角刺突文を配している。102は胴部破片であろう。細い沈線により方形の区画が形成され、やはり三角刺突文が配されている。胎土に雲母を少し混入する。107、108は胴部破片である。103は細沈線により三角文を描出し、直下に結節文が垂下する。104は細沈線による縦位の区画文の中に結節文が垂下している。105、106は同一個体である。横位の隆帯により区画された中に細沈線による渦巻状文などが充填されている。105は把手の付いた部分である。107～110は胴部破片である。6本一組の串状工具により雑な沈線が施されている。108～110は胎土や焼成の度合いなどから、105、106と同一個体の可能性が高い。口縁部に形成される文様帯の下位に括れが作出され、中央が張り出すような胴部が続くものと考えられる。111は横位の細沈線により文様が構成される例である。112は胴部破片で、隆線が張り付けられ、



第73図 第5群・第3類繩文土器



第74図 第5群縄文土器分布図 (I区)



第75図 第5群縄文土器分布図 (III区)



第76図 第5群縄文土器分布図（Ⅳ区）

それに沿う形で押引文が施されている。胎土に雲母を混入する。これは、阿玉台式に属する可能性もある。113は底部破片である。底面には網代痕が見られる。これらの土器群は、量の多寡はあるものの、何れも胎土に砂を含んでおり、粘土紐の継ぎ目で割れる傾向がある。焼成は良好なものが多いが、二次的に被熱しており、器面が剝離している例が多く、炭化物の付着が目立つ。

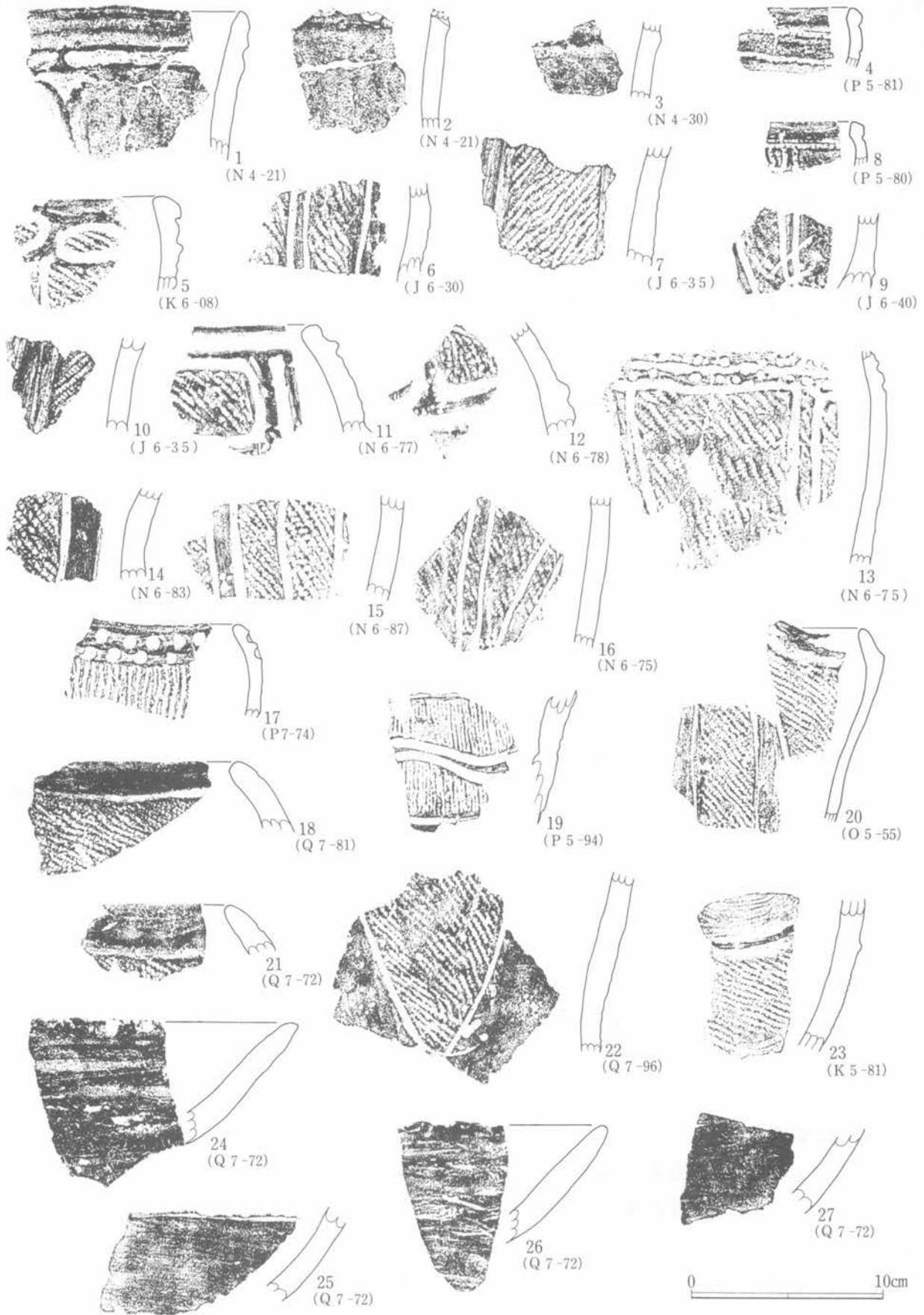


第77図 第5群縄文土器分布図（V区）

第6群土器 縄文時代中期前葉～後葉の土器群（第78図～第82図，図版62・63）

1～3は深鉢の同一個体である。器形は、胴部から口縁部にかけて開きながら立ち上がり、平縁になるとみられる。1は口縁部に低い隆線による楕円形の区画をつくり、さらに下段の隆線から「Y」の字状の隆線文が下方に伸びていく。口唇部はわずかに尖り気味で、内面に丁寧さに欠ける稜を有している。焼成は普通で、胎土に径2mm～10mmの多量の石英粒と細かな雲母を含み、色調は褐色を示している。2・3は胴部の破片で、2には焼成後に穿たれた円形の孔が存在する。4・5は同一個体と考えられ、内彎する口縁部外面に角押文が施され、口唇部内面に稜がつくりだされている。5には上・下の角押文をつなぐような縦方向の角押文が加えられ、全体として杵状の構成が口縁部に展開する可能性がある。胎土に細かな金色を呈する雲母を多く含み、焼成は良好で色調は褐色を示す。

6は口縁部がわずかに内彎する深鉢になると思われる。楕円形の隆線文の内側に縄文が施されている。口唇部から内面にかけては横方向のミガキが施され、色調は暗褐色を呈する。7～10は深鉢の胴部破片である。いずれも縄文を施文し、その上に垂下する沈線を施し、さらに沈線間の縄文を磨消している。9は



第78図 第6群・第1類縄文土器

底部付近の破片で、示した拓本には斜行する2条の沈線が認められるが、この沈線は調査中に付いた傷であり、本来の文様ではない。

11は隆線文と幅広い磨消帯をもつ胴部の破片である。色調は黄褐色で焼成はやや甘い感じがする。

12・13はキャリパー形の深鉢の口縁部の破片である。12には杵状に隆線文が施され、その内側に縄文が施文されている。13は楕円形に隆線が施されている可能性がある。両者とも隆線文の断面形はカマボコ形である。また、内面は丁寧にミガキが施されて、色調は暗褐色である。14は12の胴部の一部と考えられる破片である。縄文の施文と垂下する2条の沈線が認められ、沈線間は磨消されている。外面は暗褐色で、内面は黒色を呈する。

16・17は胴部破片である。16は懸垂磨消帯の間に蛇行する沈線が加えられており、17には並行する沈線が2方向に施されている。6～17については加曾利E II式と考えられる。

15はいわゆる連弧文系土器の一部と考えられ、部位は括れ部以下にと推測される。括れ部に当たる部分には2条の沈線が周回し、沈線間に生じた凸部に円形の刺突文を加えている。その括れ部から下位には縄文が施文され、さらに周回する沈線から2本1組の沈線が垂下する。使用中の火熱によるためか、全体に脆くなっている。

18・19も連弧文系土器である。18は内彎する口縁部で平縁を呈すると推測される。口唇直下に2条の沈線を周回させ、さらに沈線の中に円形の刺突を加えている。この刺突は、上段と下段で位置がずれるため、交互刺突文のような効果をだしている。また、地文には撚糸文が用いられている。19は胴部の破片である。

20は波状口縁になる深鉢である。口縁部を無文にし、断面が三角形になる隆線文以下の胴部には、沈線文によるモチーフが展開すると見られる。

22・23は口縁部が無文になり、その下に1条の沈線が口唇部と並行して周回し、胴部には縄文が施されている。器種としては深鉢か、やや浅い鉢であるが、形態は明確にならない。

24はキャリパー形の器形を呈する深鉢の、括れ部と口縁部の中間の胴部破片である。やや鋭角の弧線の内側に縄文が充填され、ほかはミガキが施されている。弧線を描く沈線はやや深く器面に刻み込まれている。色調は暗褐色で焼成はやや甘い感じで、内面は調整痕を残していない。

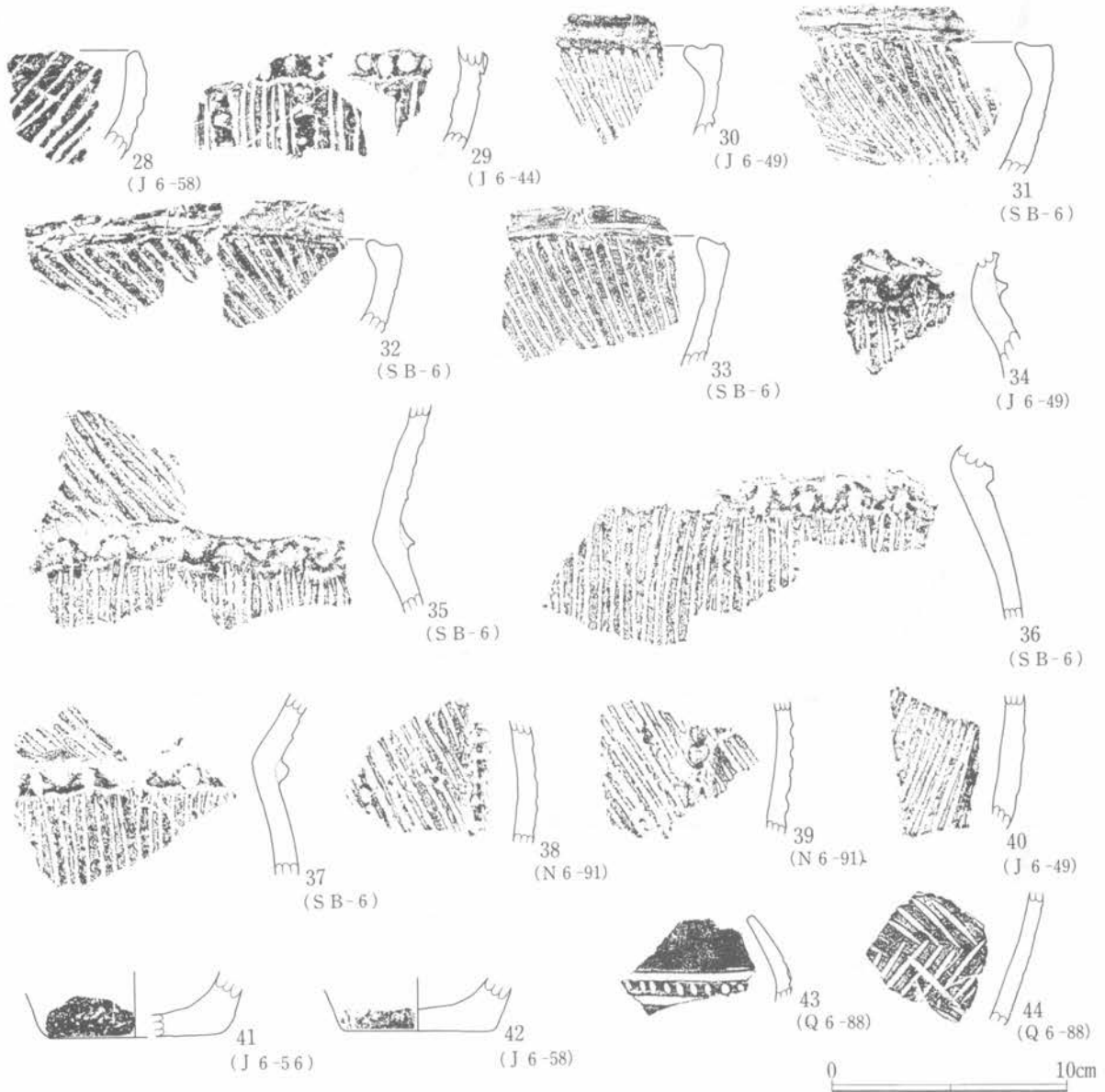
25～28は無文の鉢である。28は浅鉢の可能性があり、口縁部の下に1条の沈線を周回させ、胴部をミガキのみで仕上げ、ほかの装飾的要素を加えていない。

29～40は曾利系土器と考えられる。29は内彎する口縁部に、右上がりの斜行沈線文を施している。30は胴部の括れ部と考えられ、押圧が施された幅広い隆線文が周回し、胴部は縦位の沈線文が施された上に、括れ部に施した同様な隆線が2本降下している。

31～34は外傾して開いた口縁部が内彎して納められ、口唇部が内側に折り返されている。いずれも左上がりの斜行沈線文が施されており、32の沈線は半截竹管を用いて施文されている。

35～38は括れ部の破片になる。35の括れには蛇行隆線が貼りつけられ、36～38は隆線文の上下に刺突を加えることによって、蛇行隆起線と同様な効果を見せている。この4点の胴部には縦位の条線状の沈線が施されている。39・40は、押捺が加えられた隆線が貼られた胴部破片である。以上の曾利系土器は外面にミガキの様子は認められず、内面も比較的簡単なミガキで調整を済ませている。色調は黄褐色か暗褐色で、目立つ混和物は認められない。

41・42は中期後半の深鉢の底部である。加曾利Eの底部になるか曾利系の底部ではあるが、文様が及ん

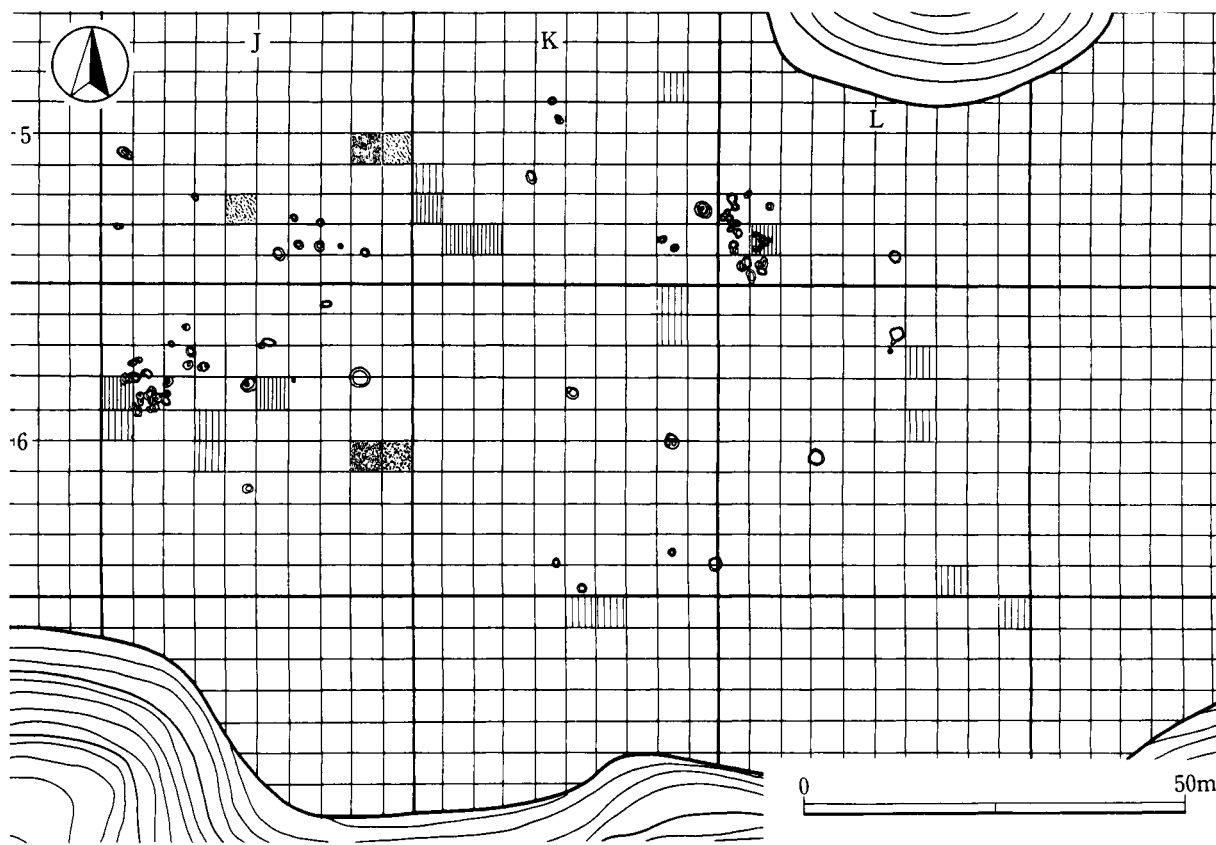


第79図 第6群・第2類, 第7群縄文土器

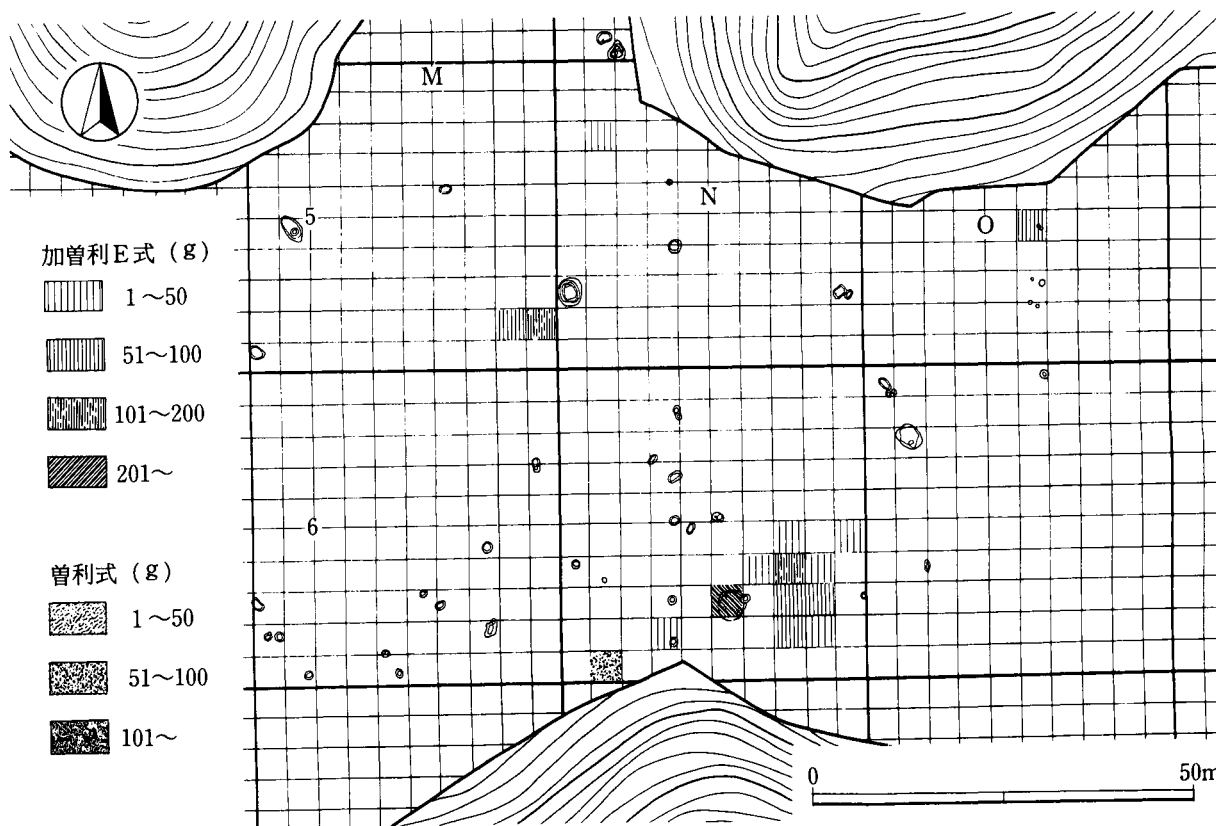
でないため断定はできない。

第7群 縄文時代後期中葉の土器群 (第79図, 図版62)

43は加曾利B I式の精製の浅鉢である。口縁部が内傾する器形になり、屈曲部に2条の沈線を巡らせ、その間に列点状の刻みを加えている。内外面とも丁寧な横方向のミガキが行われている。44は深鉢の胴部と考えられ、横方向に羽状の沈線が施されている。内面は横方向の丁寧なミガキが認められる。加曾利B IIに比定されよう。



第80图 第6群縄文土器分布图 (Ⅲ区)



第81图 第6群縄文土器分布图 (Ⅳ区)



第82図 第6群縄文土器分布図（V区）

3) 石器（第83～121図，第134～140・147図，第1～7表）

久野遺跡からは，総数4,307点の石器が検出された。器種は石鏃，礫石斧，楔形石器，彫器，石核，剥片，破片が検出されている。製品は159点で，最も多いのが礫石斧（礫器を含む）で98点，次いで石鏃が56点であった。剥片の中には，三角形素材剥片，二次加工のある剥片を含んでいる。三角形素材剥片は，剥片の形状が三角形を呈し，少なくとも三角形の一辺が加工痕もしくは切断加工が施されているものを指し，その加工部位によって，以下の3つのタイプに分類される。

三角形素材剥片Ⅰ：三角形の一辺に，加工痕あるいは切断加工が施される三角形素材剥片。

三角形素材剥片Ⅱ：三角形の二辺に，加工痕あるいは切断加工が施される三角形素材剥片。

三角形素材剥片Ⅲ：三角形の三辺に，加工痕あるいは切断加工が施される三角形素材剥片。

これらは黒曜石製で，他の石材からは製作されていない。製品を製作する過程に製作されるものと考えられ，特にそのほとんどが黒曜石製である石鏃の製作との関連が考えられる。

なお，個々の遺物については概略を表に示したので，ここでは各区ごとの傾向と，遺構との関連について述べることにする。

I区，II区（第83・84図，図版64・72）

I区，II区から検出されている石器は少なく，遺構に伴った出土は見られなかった。I区からは石鏃が

1点、石核が1点、II区からは石鏃が2点、礫石斧が2点を含む6点のみであった。5は小型の磨製石斧で、両側に剝離が施されている。

III区 (第85・86図, 第1・4表, 図版72~74)

石鏃6点、礫石斧7点を含む23点が検出されている。これらは分布状況から、IIIcブロックに伴うもの、III dブロックに伴うもの、ブロック外から出土したものに分けられる。III aブロック、III bブロックからは検出されていない。III区における石鏃あるいは三角形素材剝片の分布は希薄である。

IV区 (第87~110・131~140図, 第1・5表, 図版64~70)

石鏃46点、石鏃未製品43点、礫石斧54点を含む、4,132点が検出された。三角形素材剝片と石核はIV区が全体の91%を占めており、この地点を特徴付ける器種といえよう。またこれらの器種は全て黒曜石製であることも、石鏃の91%が黒曜石製であることと強く関連しているものと考えられる。

IV区の礫群の中にはIV a、IV e、IV fといったように黒曜石の分布と重複するブロックが見られる。さらにIV aの北側には黒曜石のみの集中地点IV gブロックが検出されている。これらは石鏃、石鏃の未製品及び三角形素材剝片、石核、剝片、碎片から形成されている。

IV aブロック (第87~110・134・135・137~140図, 図版65~70・72~74)

石鏃、石鏃未製品(破損品)、三角形素材剝片、石核、剝片(二次加工のある剝片を含む)、碎片から構成されている。M 6-78、88グリッドを中心とした地点に大規模な集中地点(W地点)が、N 6-81ポイントを中心とした小規模な集中地点(E地点)が見られる。これら分布の中心は、碎片の分布の集中と一致している。器種ごとの分布の特徴を示すと、製品及び未製品は、E地点の中心にわずかに集中するものの、全体としては散漫な分布を示す。三角形素材剝片の分布は、W、E両地点とも中心に集中する傾向にあるが、W地点においては中心から北西に向かって分布が広がる傾向にある。二次加工のある剝片、石核については、W地点の中心には分布が薄く、中心の北西に集中する傾向にある。比較的、石核、二次加工のある剝片ともに多く見られる。E地点では、石核が中心に集中する傾向にあるが、数は少なく、二次加工のある剝片も少ない。

これらのことから、W地点については、器種ごとに分布の中心に相違が見られるのに対し、E地点では一致するといえる。W地点においては碎片+三角形素材剝片、三角形素材剝片+二次加工のある剝片+石核という分布の相関が見られる。

IV eブロック (第111図, 第1表)

石鏃未製品、三角形素材剝片、碎片から構成されている。分布は散漫である。

IV gブロック (第112・136・138~140図, 第1表, 図版74)

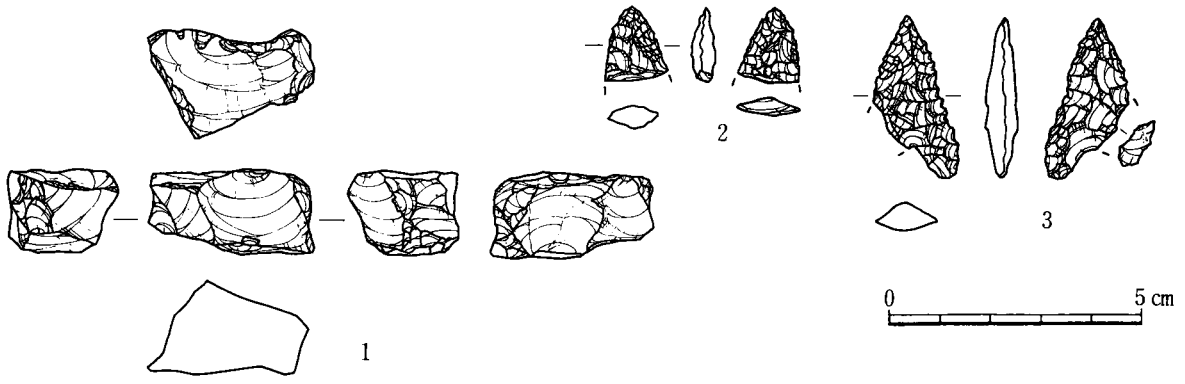
N 6-31ポイント付近に位置する。石鏃未製品、三角形素材剝片、石核、剝片(二次加工のある剝片を含む)、碎片により構成されている。最も集中する地点は直径1mほどで、そこには石核を含まない。

V区 (第114~116図, 第1・6表, 図版71・75)

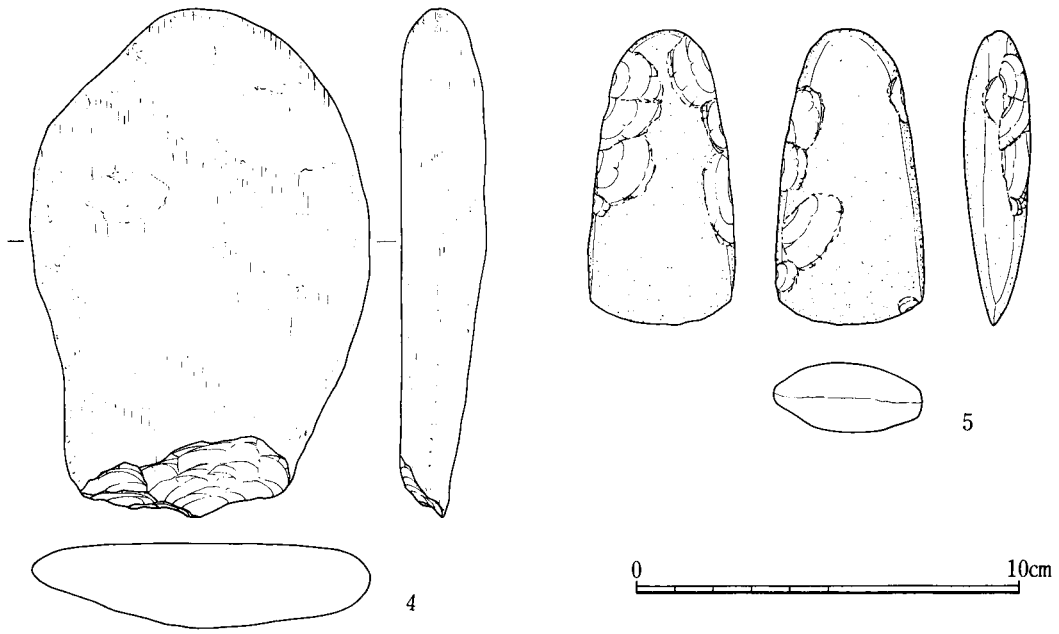
黒曜石製の器種には、楔形石器、三角形素材剝片、石核が見られる。V bブロック礫石斧、楔形石器が含まれる。V cブロックには、石核が2点、V dブロックには三角形素材剝片、礫石斧が含まれる。集土坑、礫群が存在しているのに対し、石器の分布は希薄である。

VI区 (第117~121・147図, 第1・7表, 図版71・75)

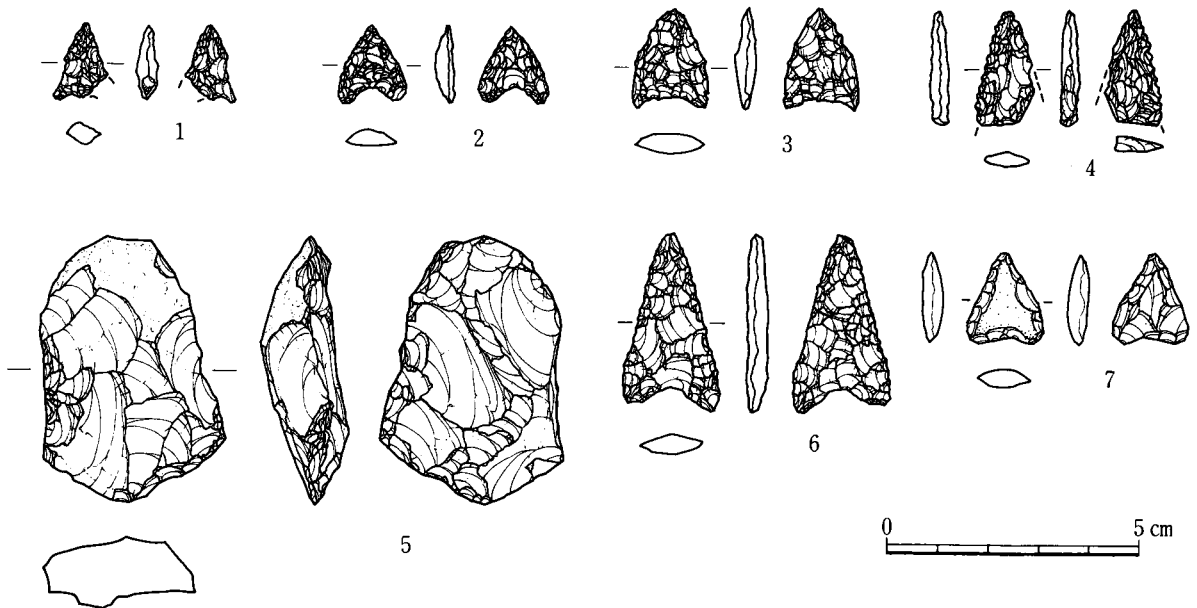
黒曜石製の石鏃、三角形素材剝片、刻器、楔形石器、石核と、礫石斧が検出されている。三角形素材剝



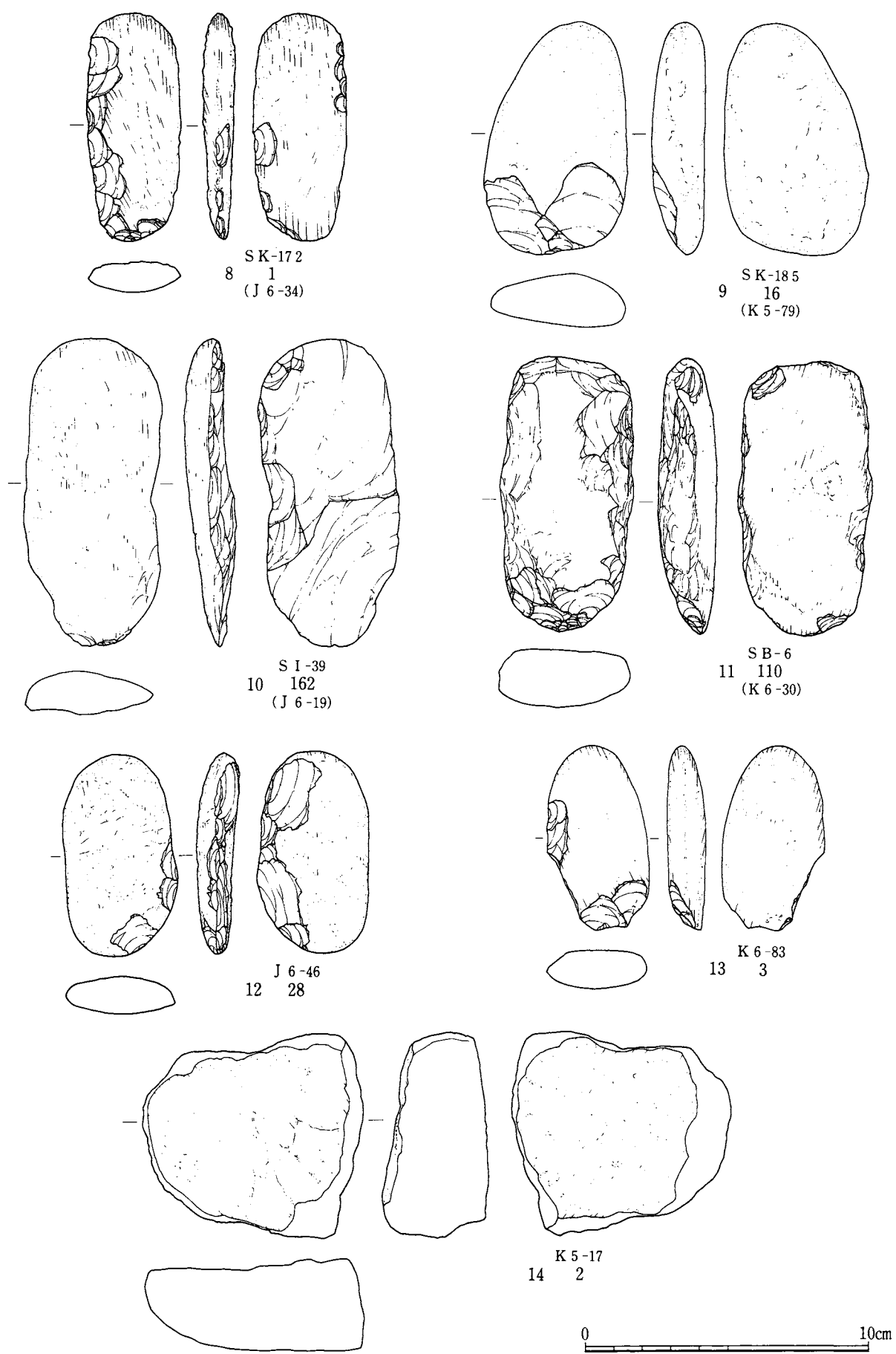
第83图 I·II区出土石器



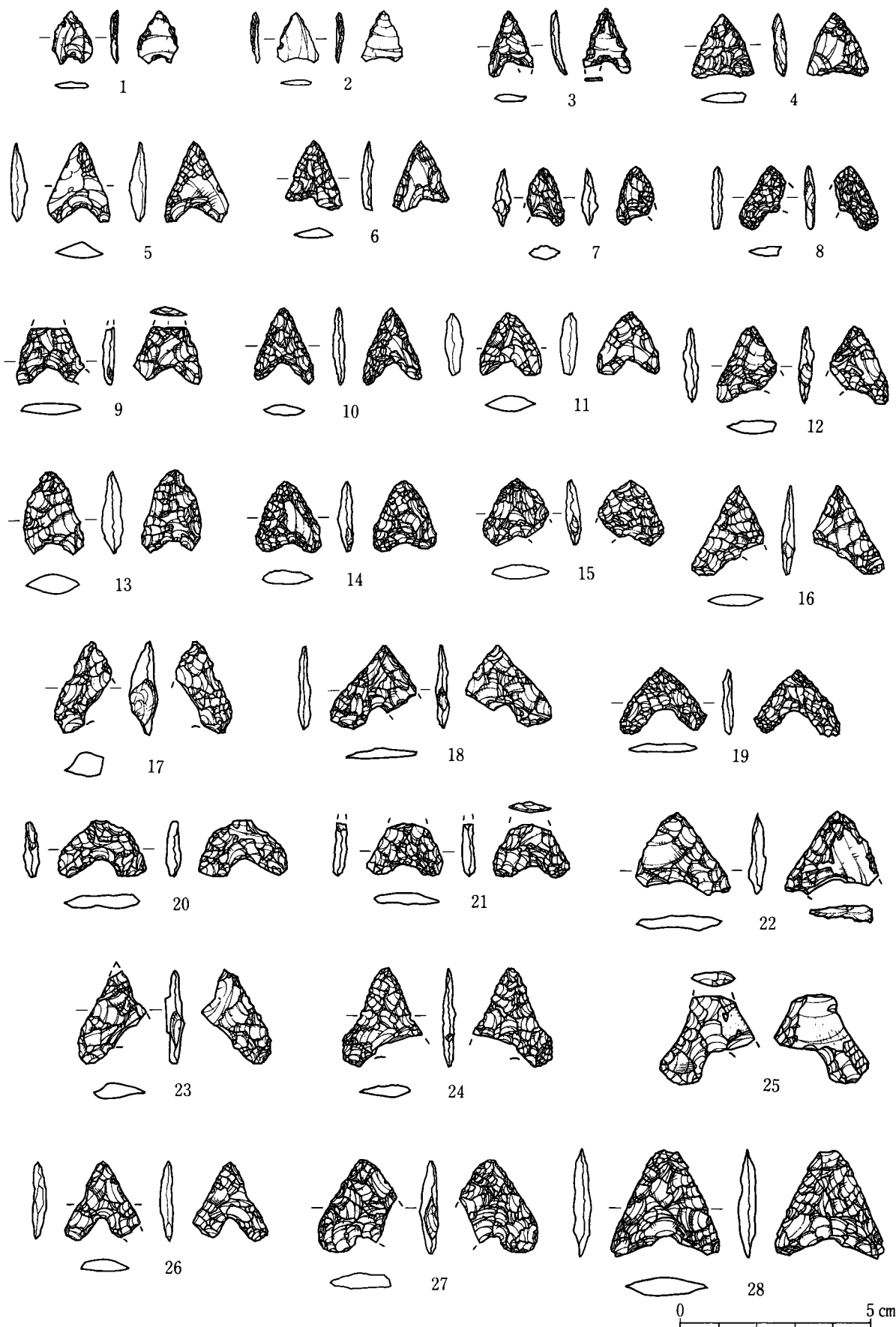
第84图 II区出土石器



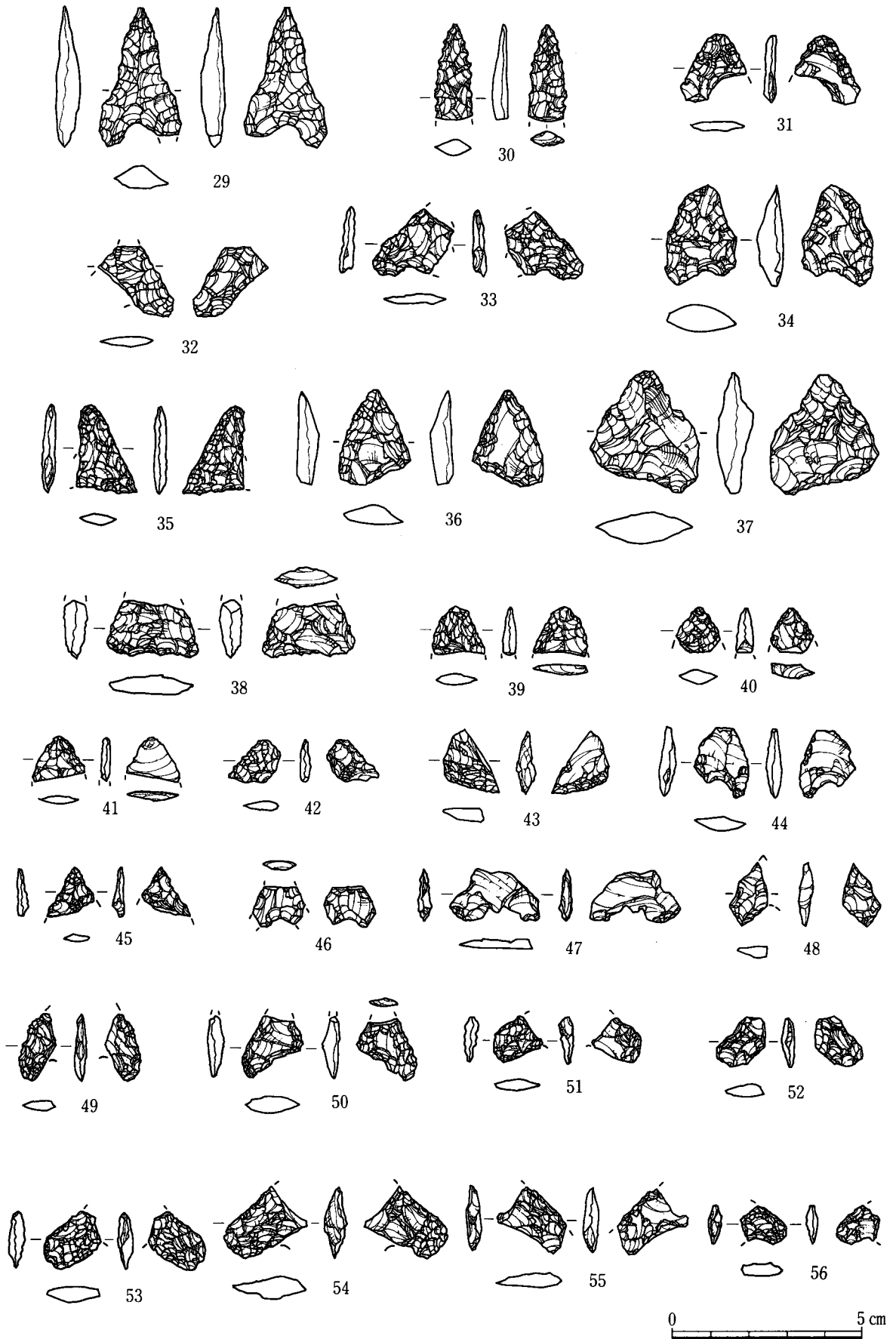
第85图 III区出土石器(1)



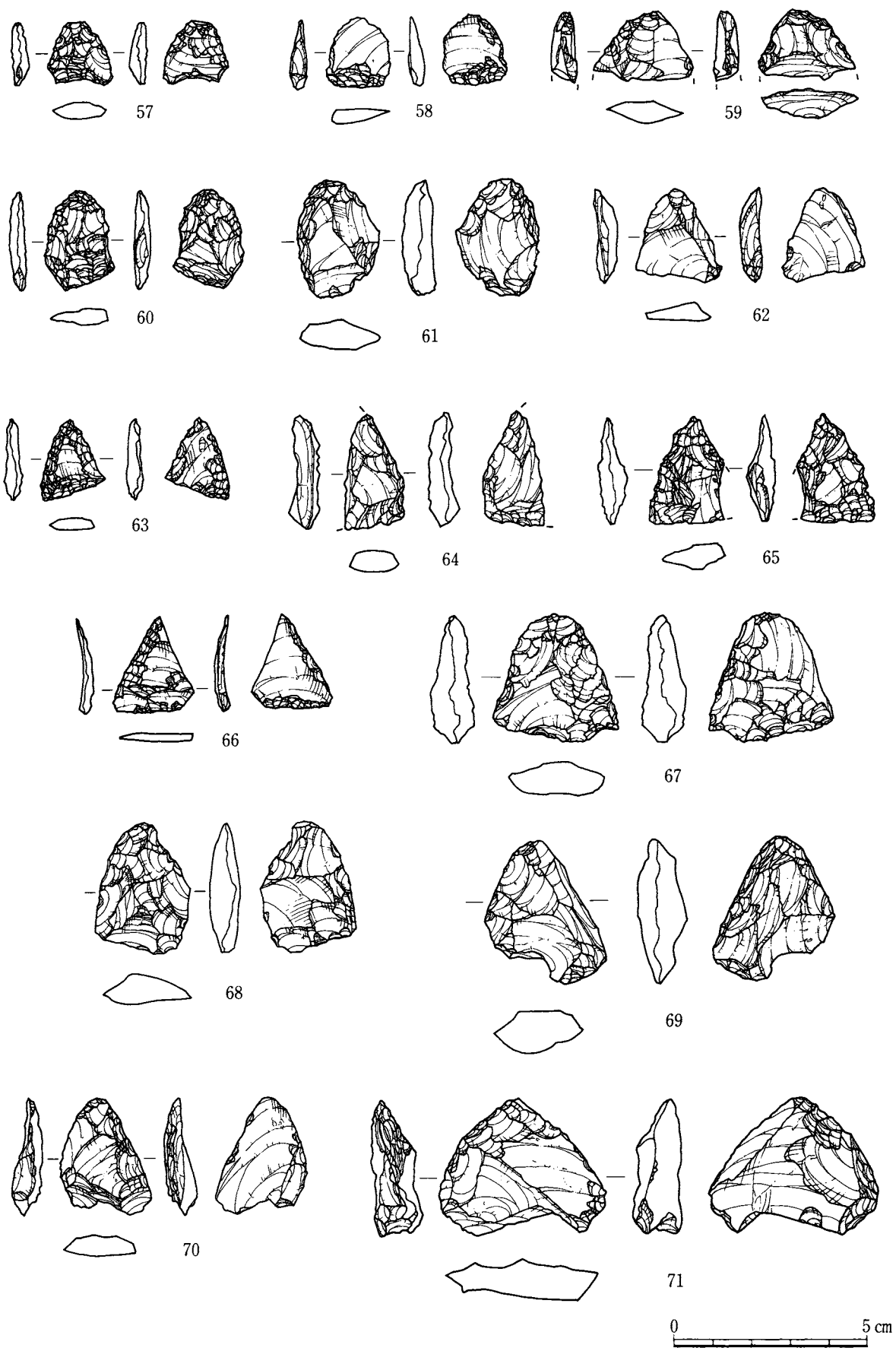
第86图 III区出土石器(2)



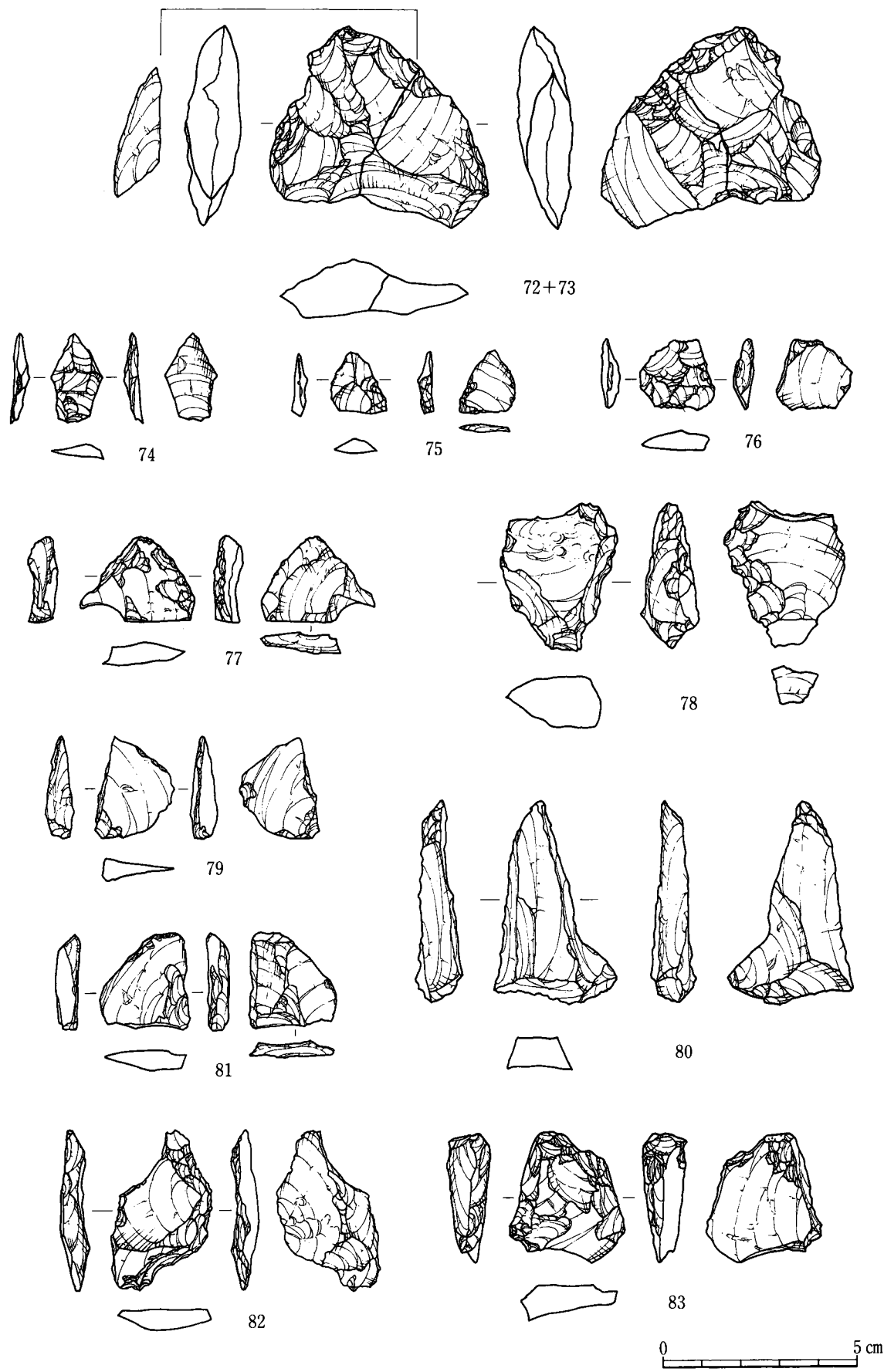
第87図 IV a ブロック出土石器 (1)



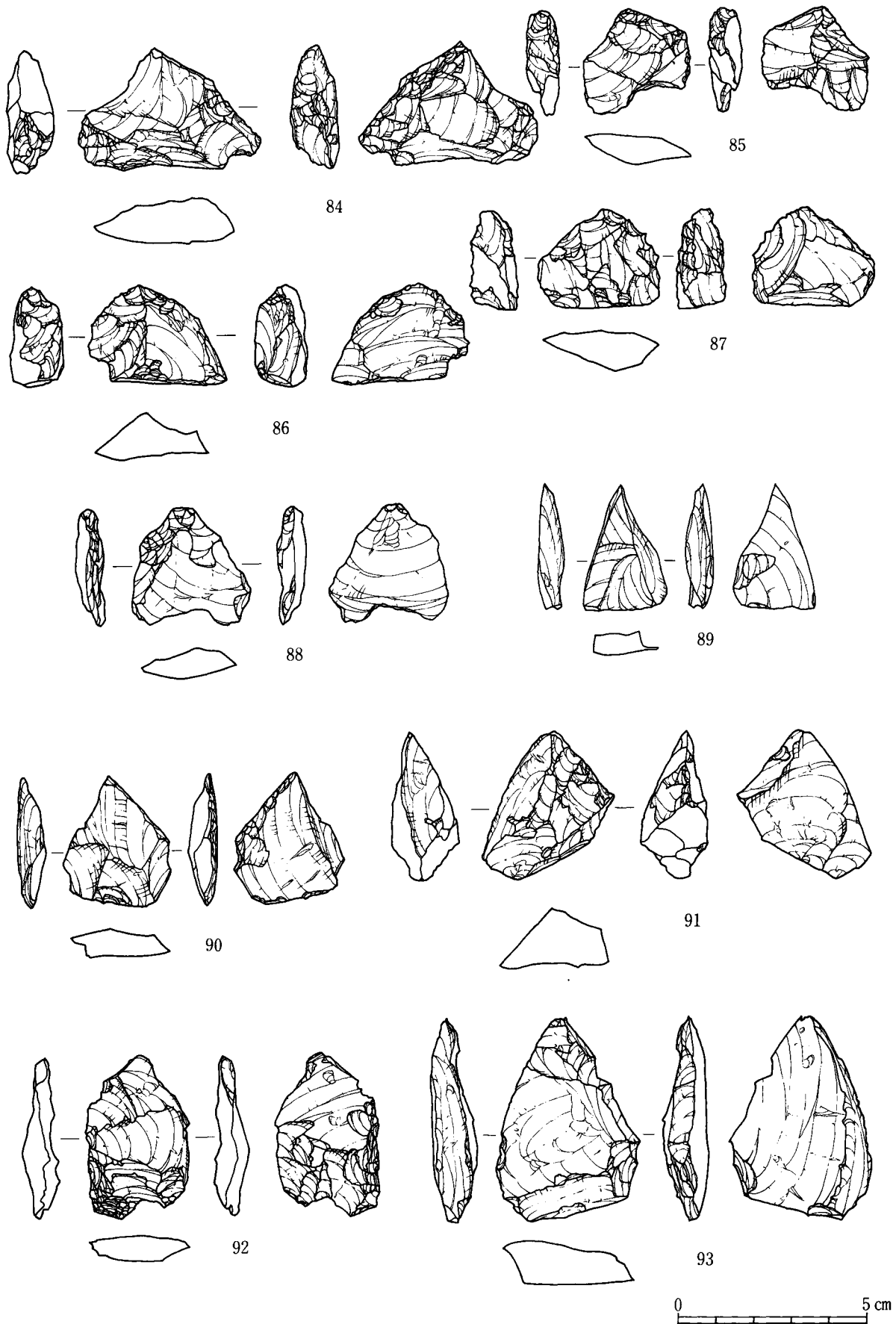
第88図 IV a ブロック出土石器 (2)



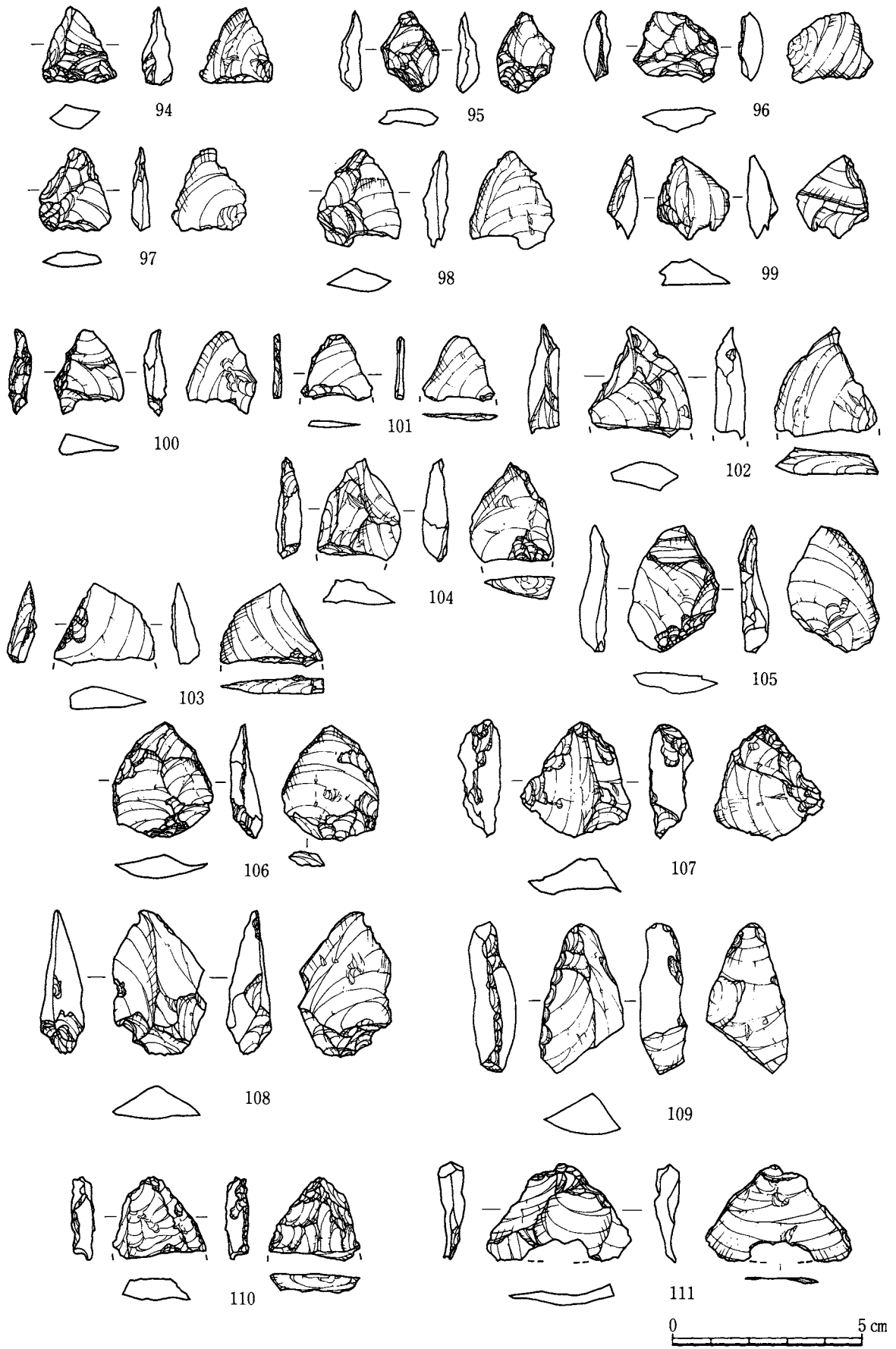
第89図 IV a ブロック出土石器 (3)



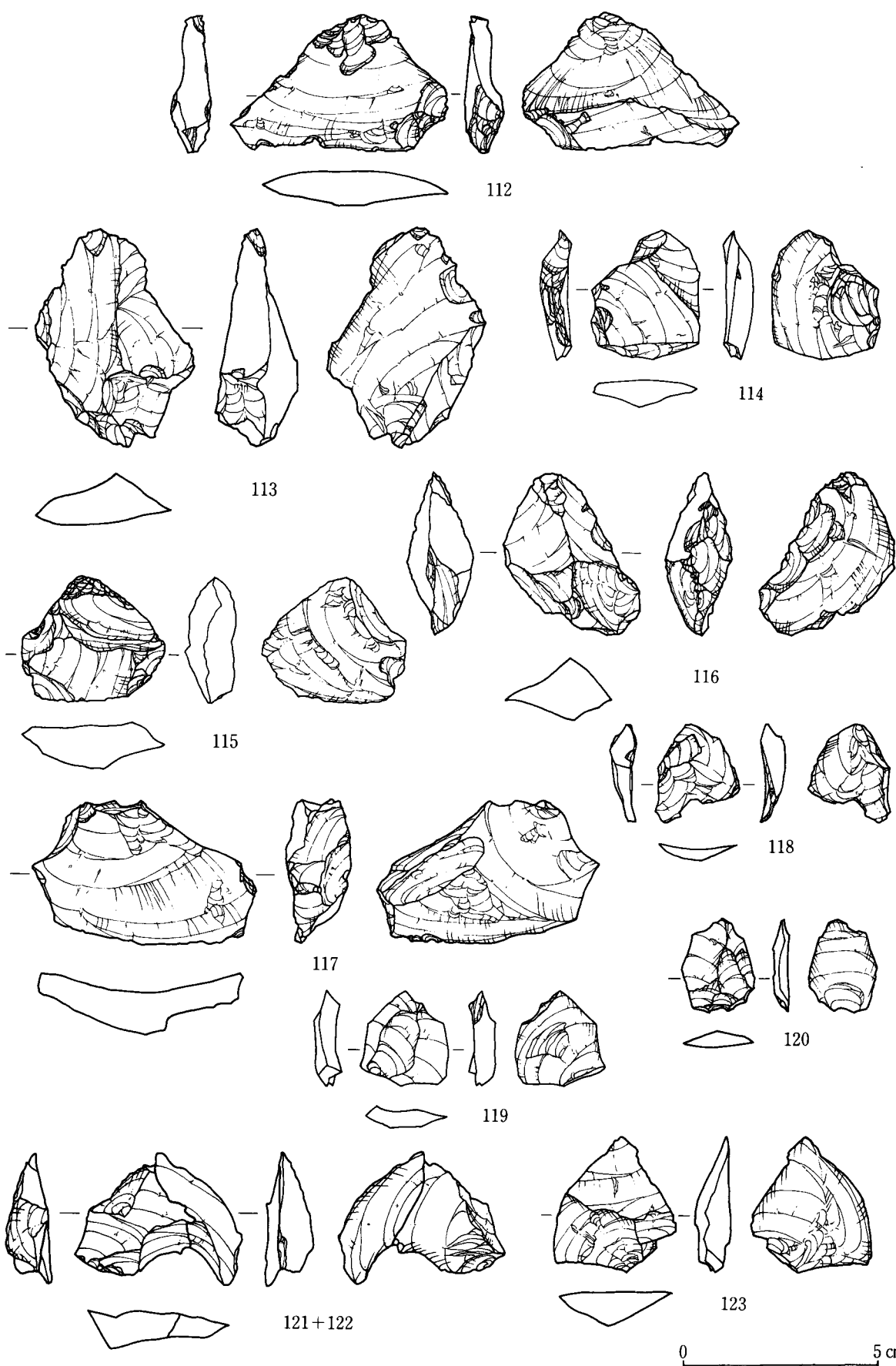
第90図 IV a ブロック出土石器 (4)



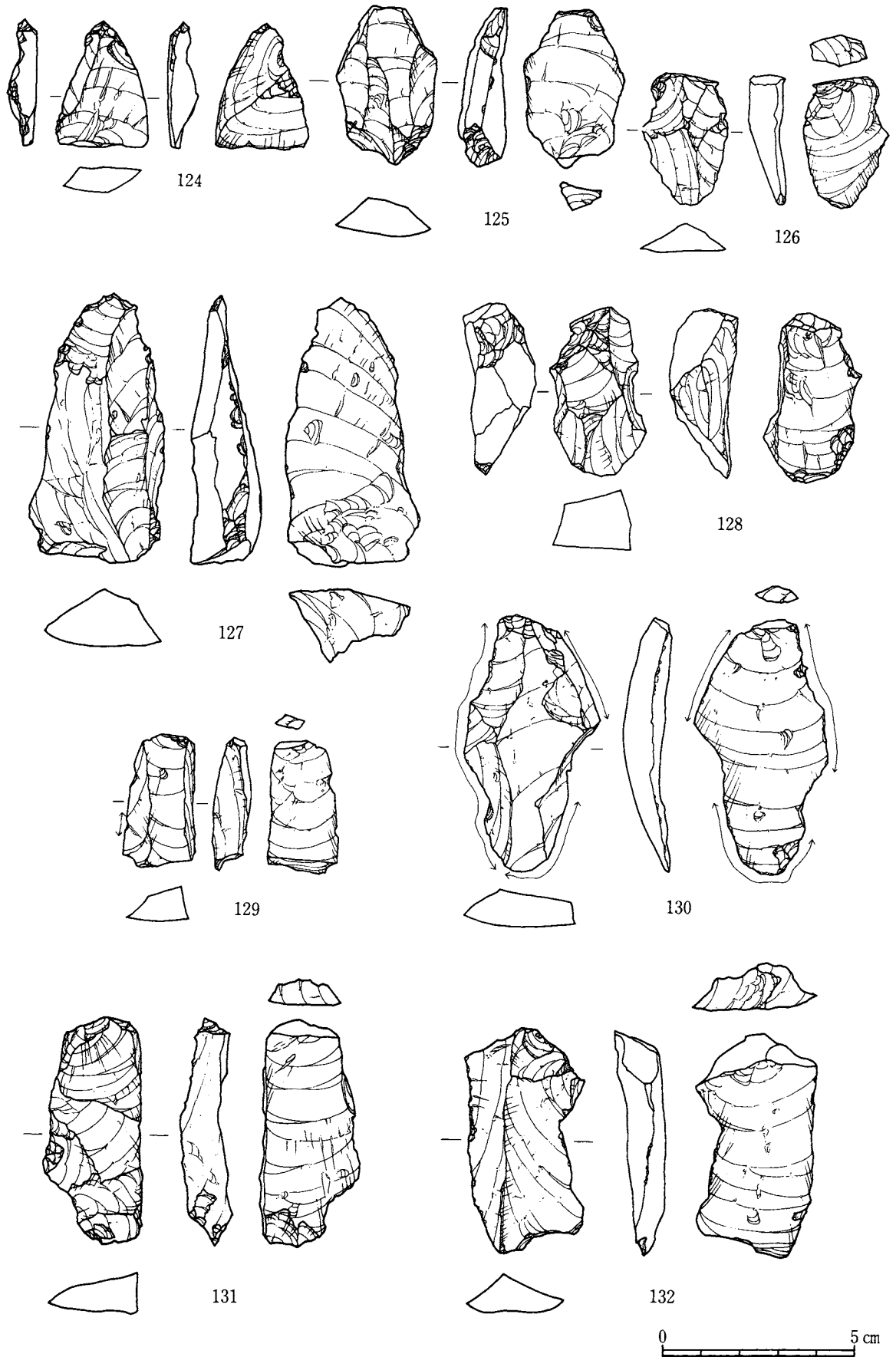
第91図 IV a ブロック出土石器 (5)



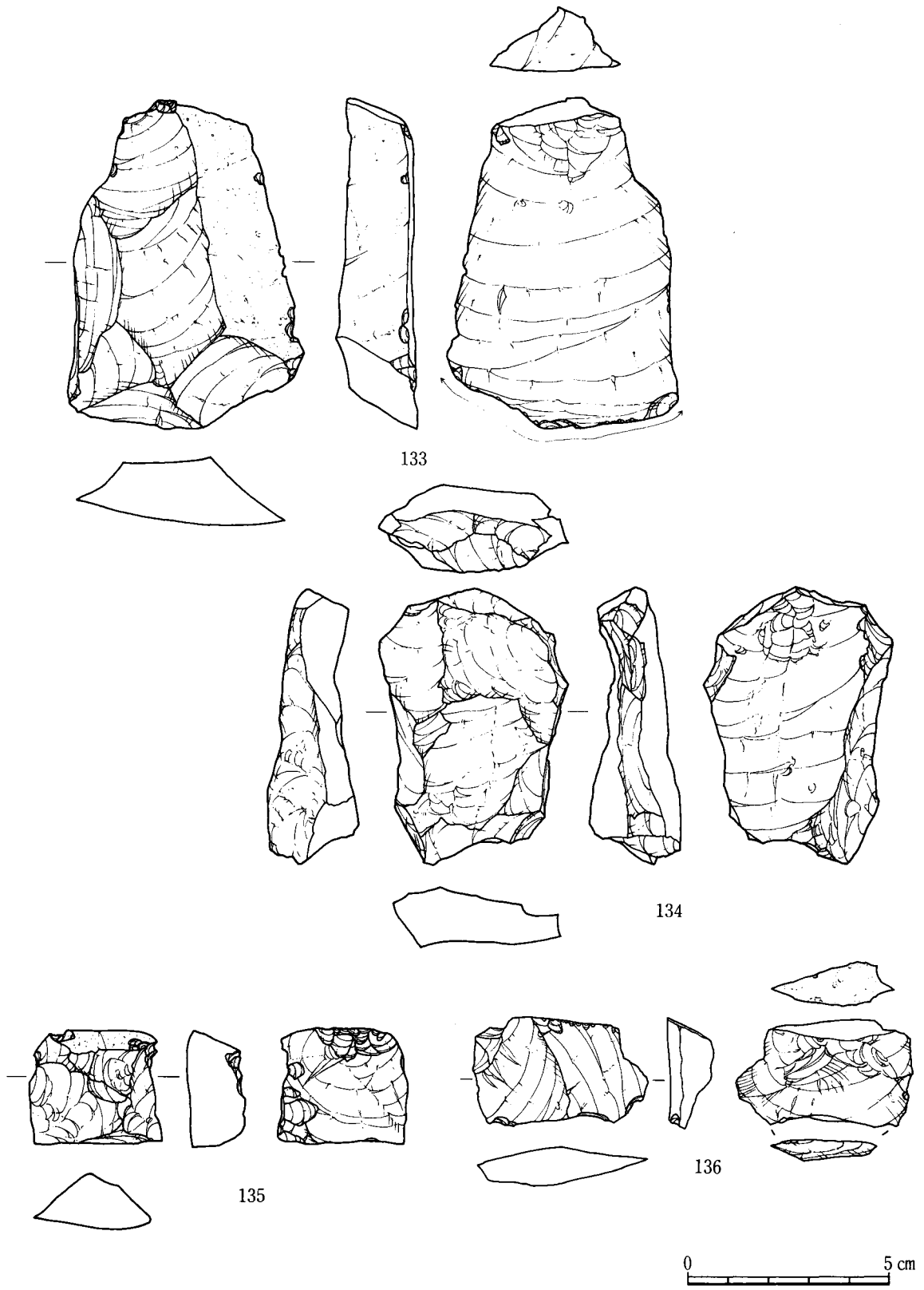
第92図 IV a ブロック出土石器 (6)



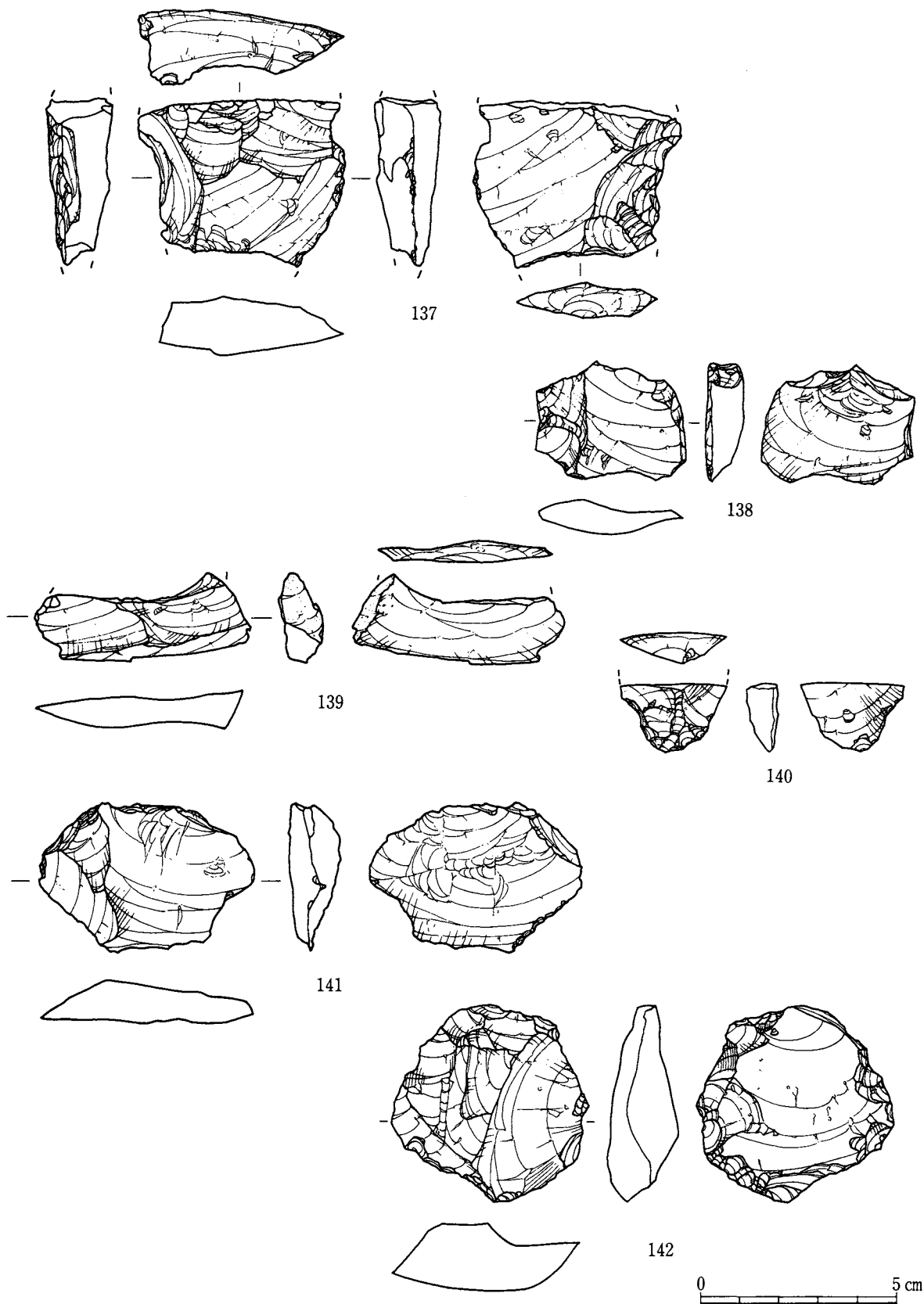
第93図 IV a ブロック出土石器 (7)



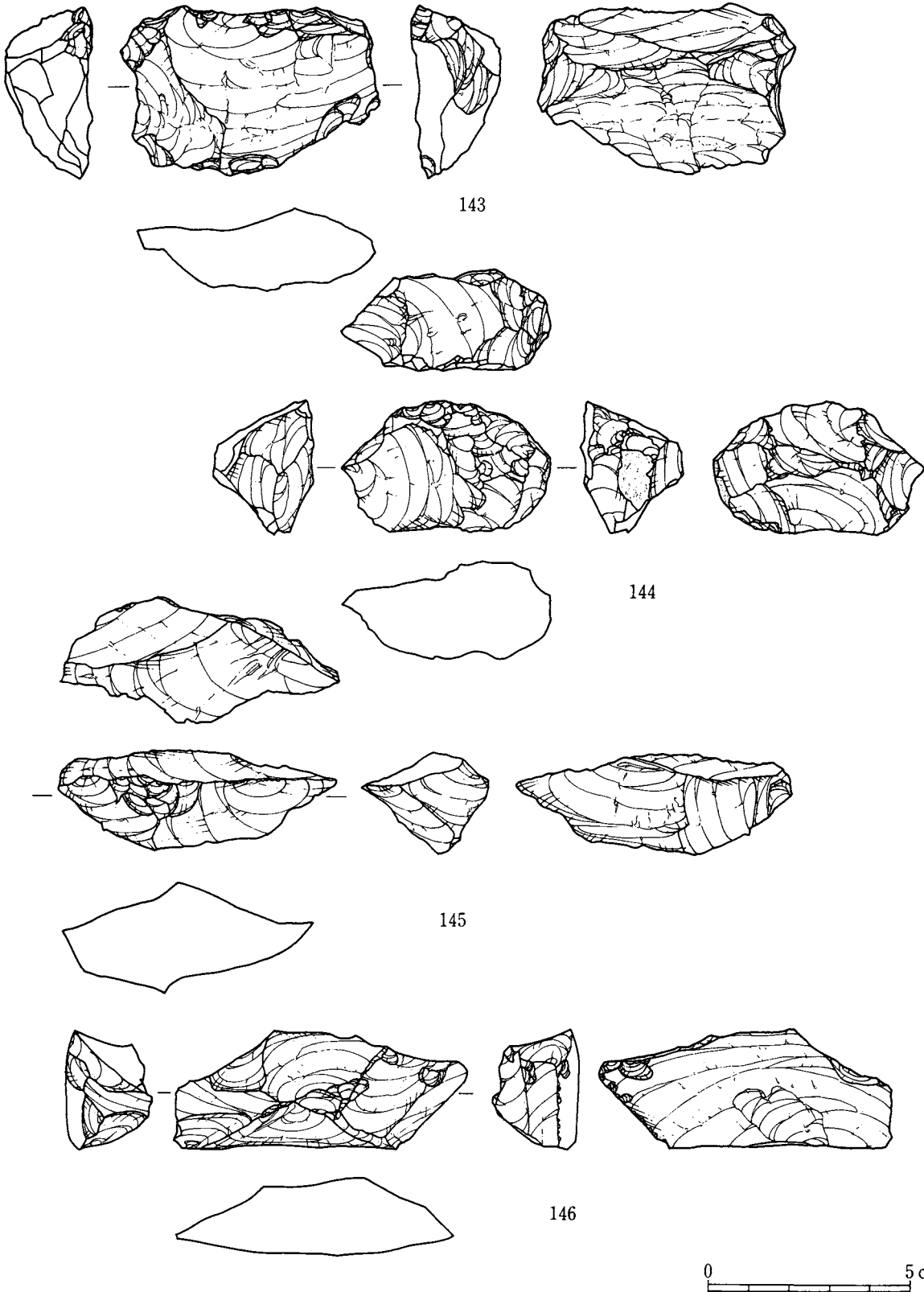
第94図 IV a ブロック出土石器 (8)



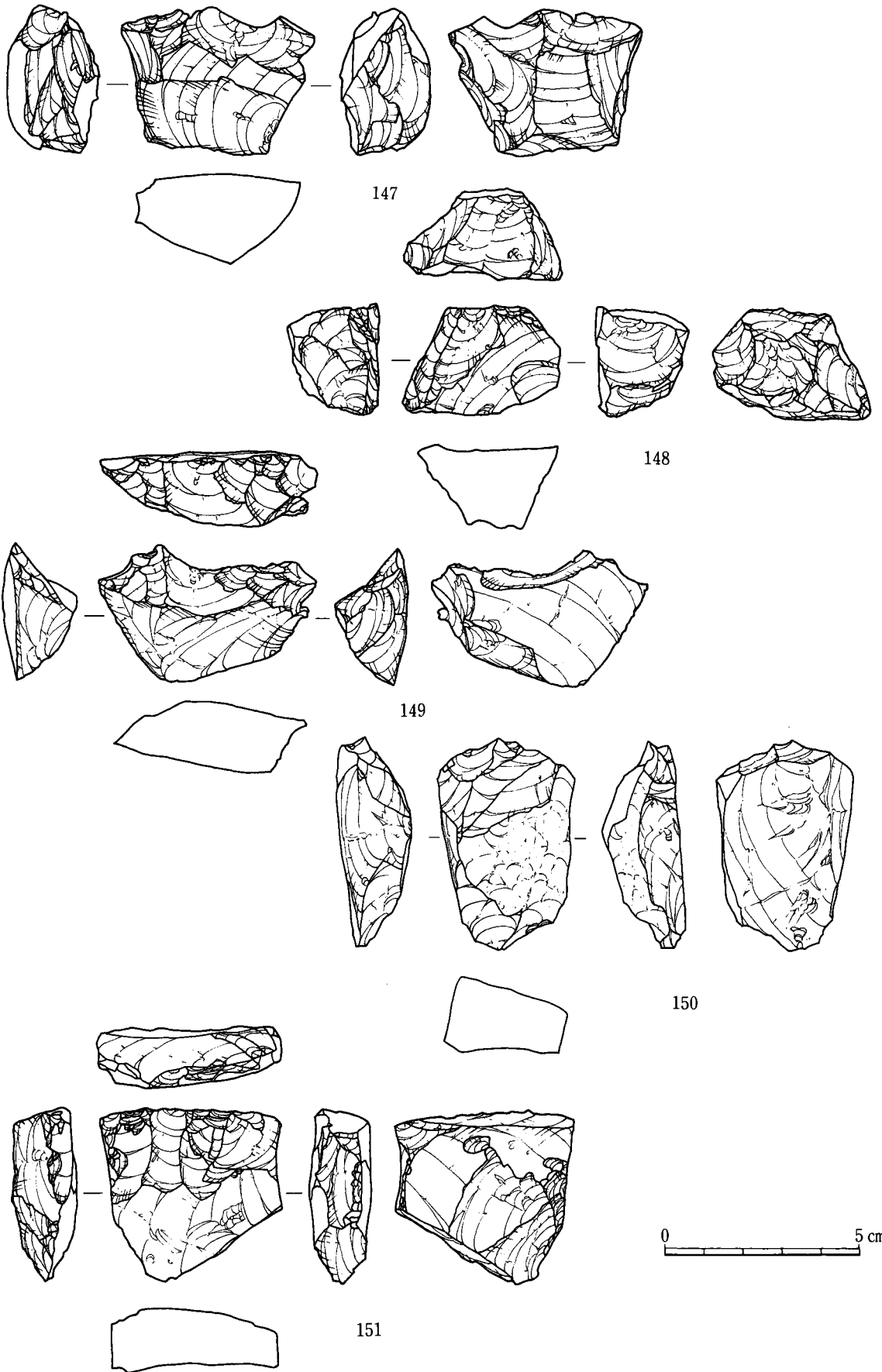
第95図 IV a ブロック出土石器 (9)



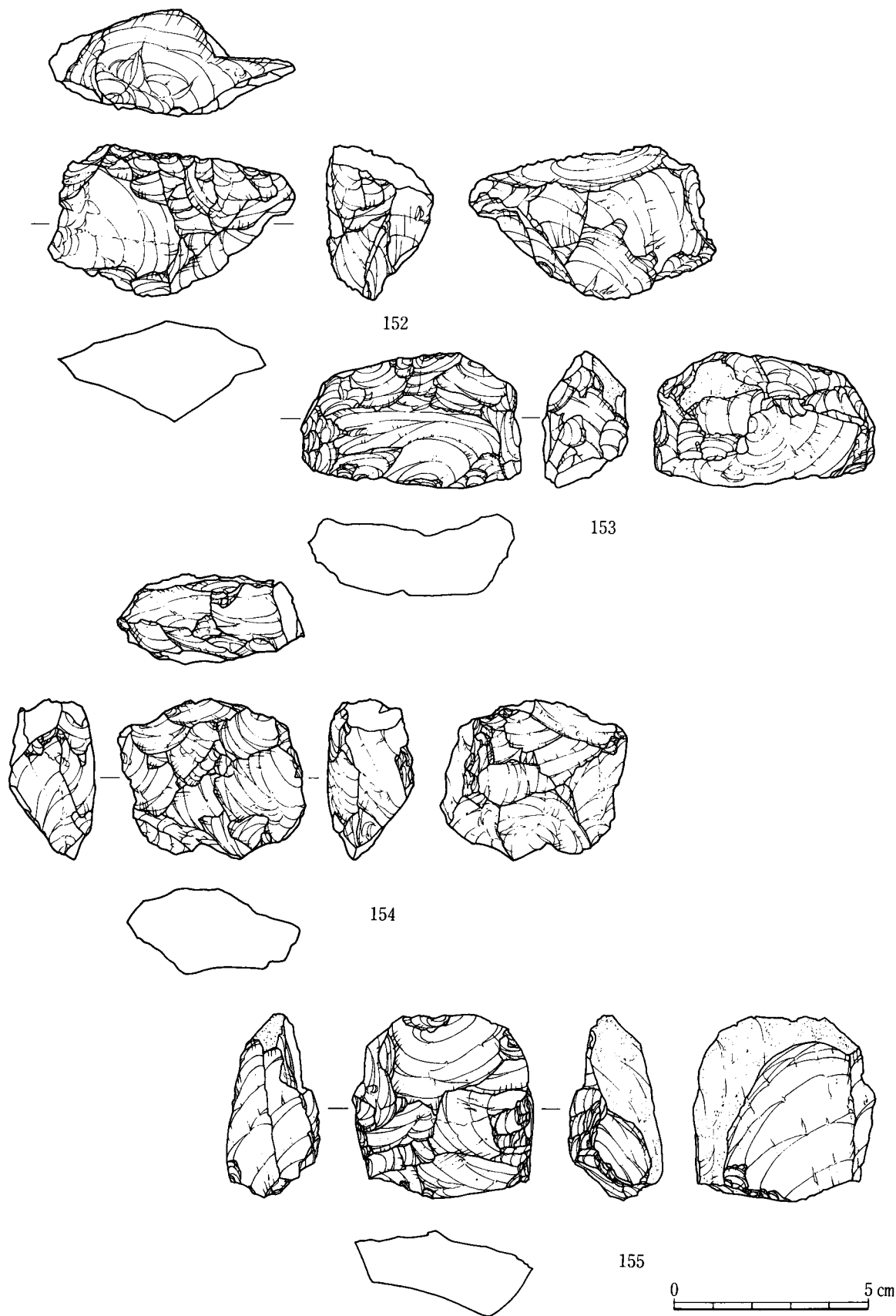
第96図 IV a ブロック出土石器 (10)



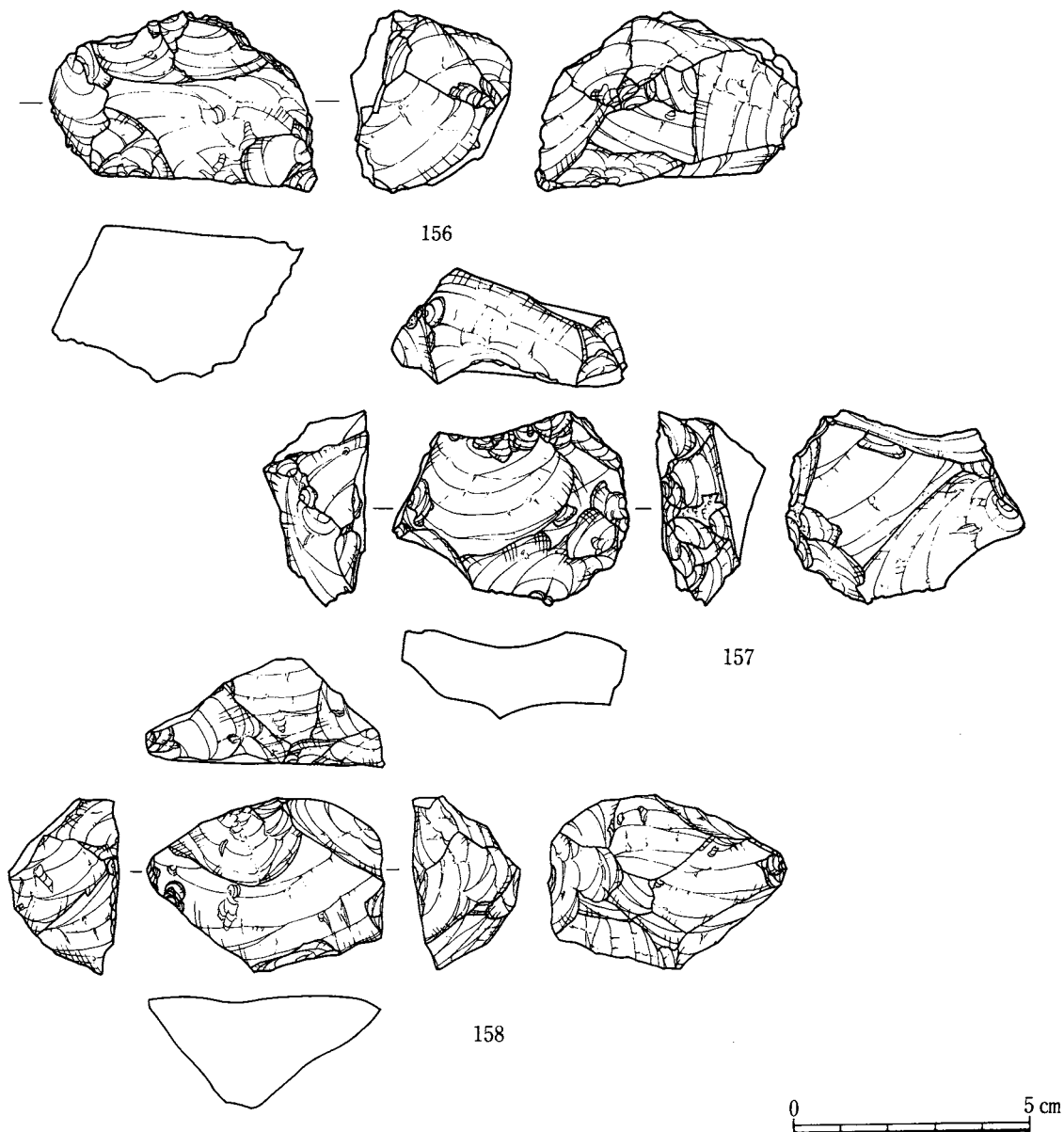
第97図 IV a ブロック出土石器 (11)



第98図 IV a ブロック出土石器 (12)

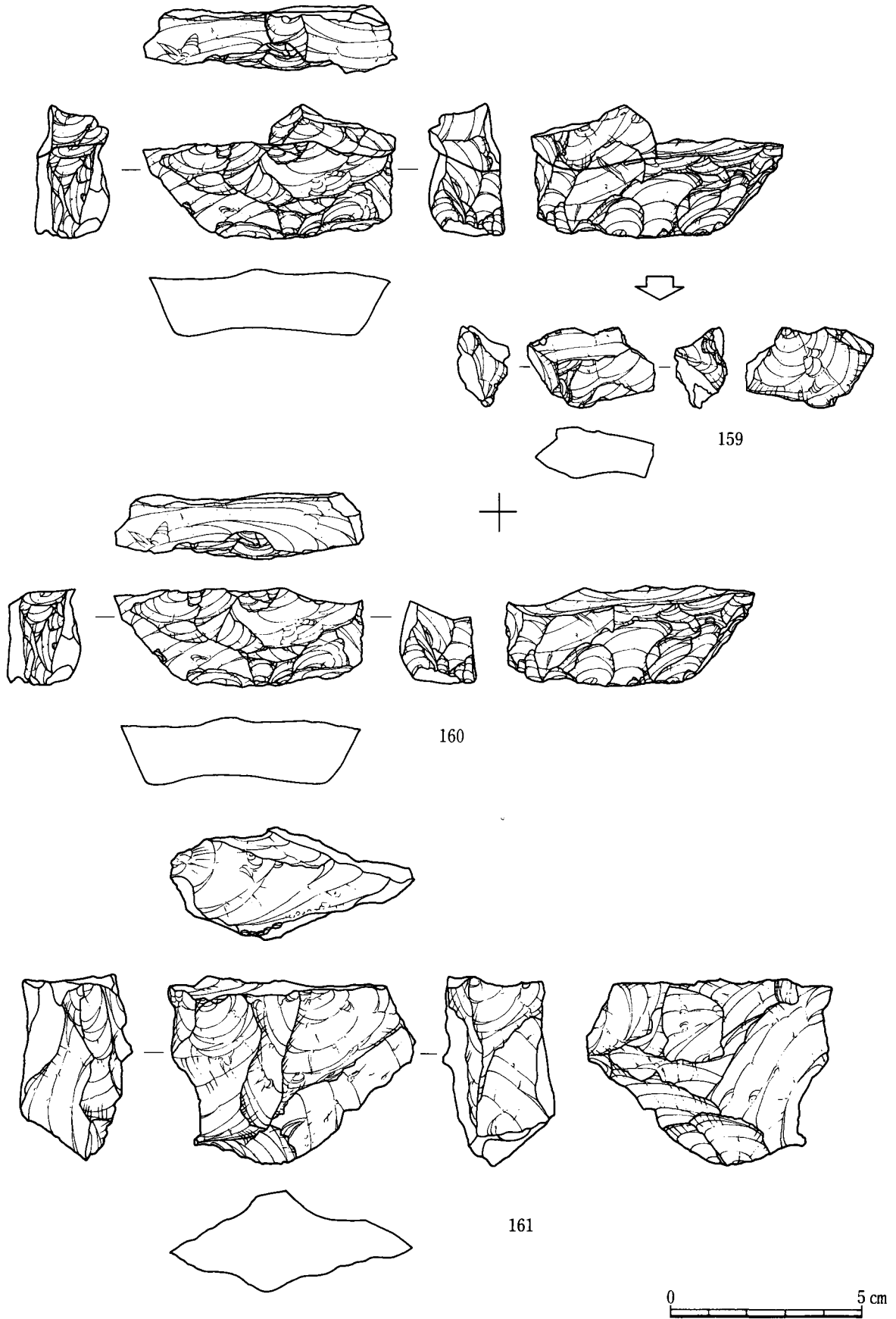


第99図 IV a ブロック出土石器 (13)

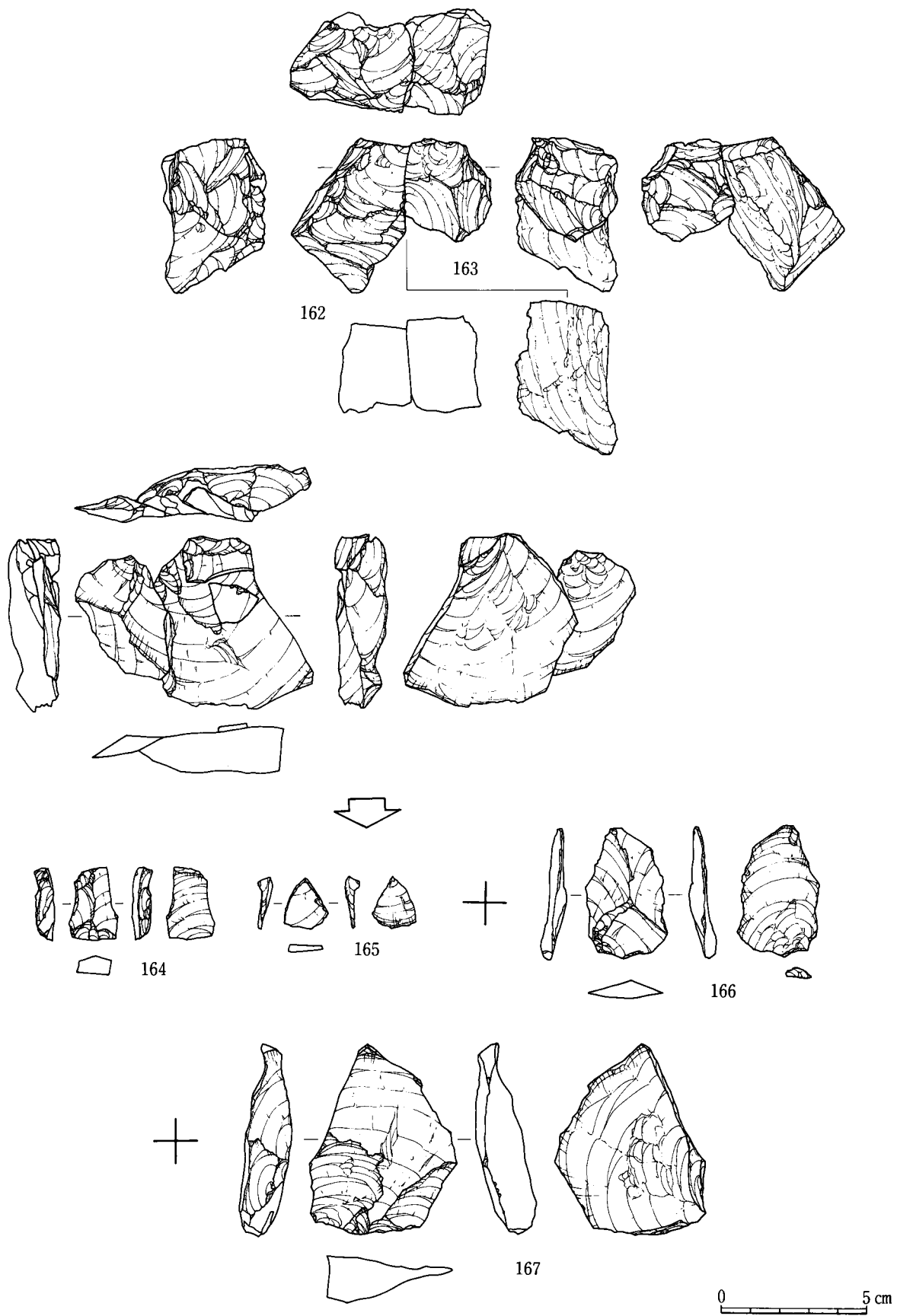


第100図 IV a ブロック出土石器 (14)

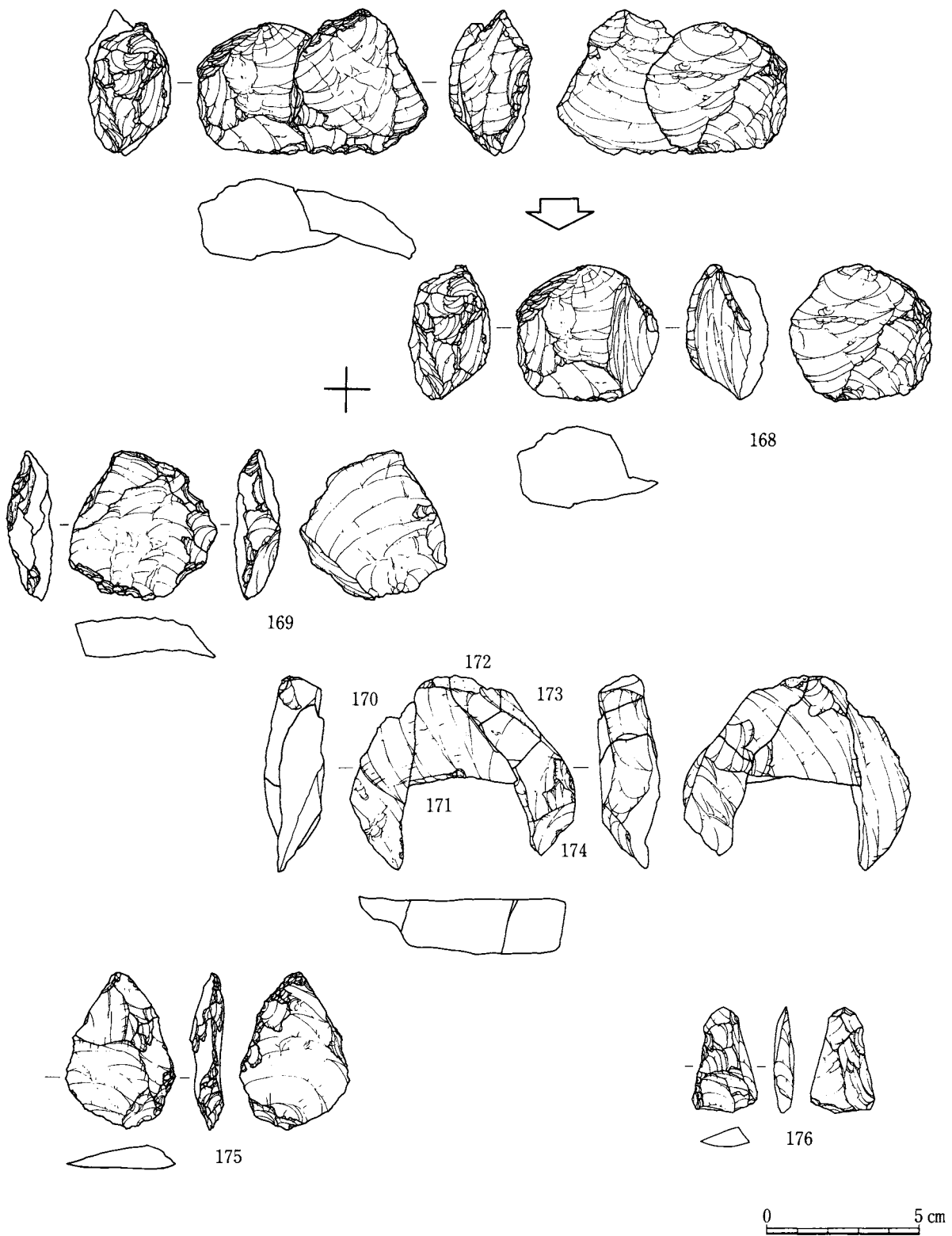
片が50点と多いのに対し、石鏃の数が1点と少ない。全体の分布は散漫で、SK-67, 86の東側、SK-3, 8, 5の周辺に若干偏る傾向が見られるが、集中地点と呼べるほどではない。VI区では集石土坑を中心として礫群が見られるが、これらの礫群と黒曜石の強い相関は見られない。SK-67, 86の東側には小さな礫集中地点が見られるが、礫群に黒曜石が混入するような出土状況とはいえない。



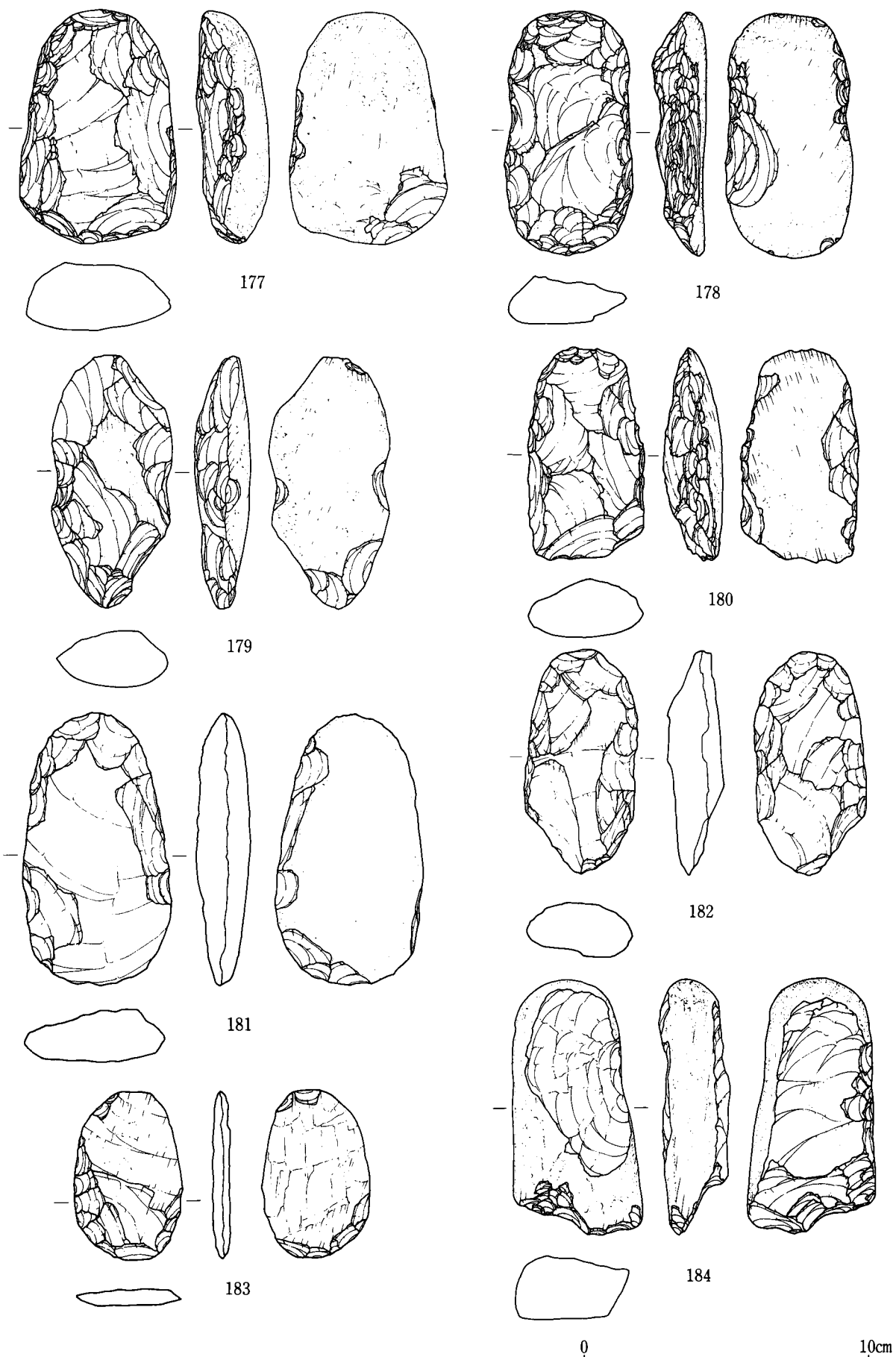
第101図 IV a ブロック出土石器 (15)



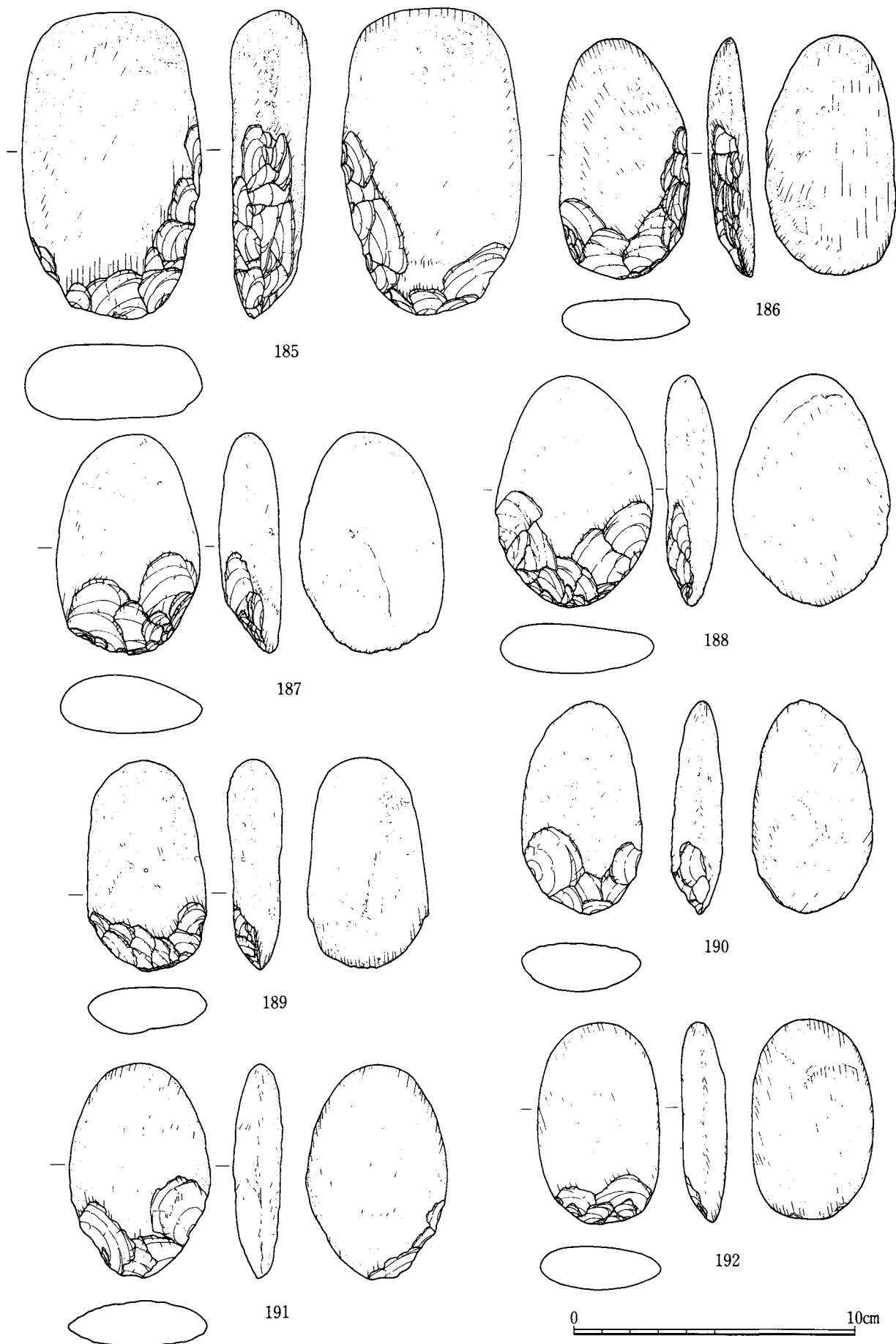
第102図 IV a ブロック出土石器 (16)



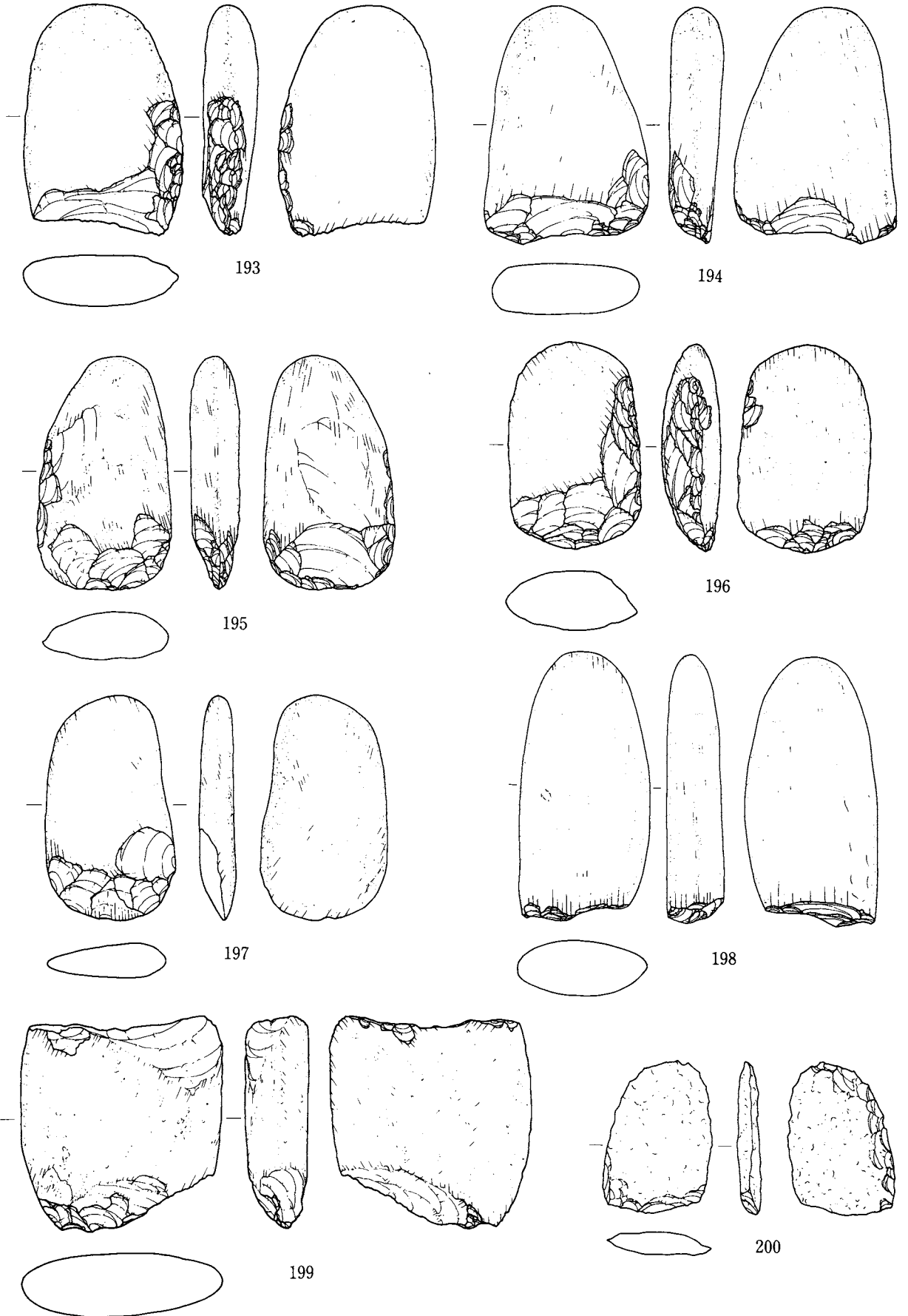
第103図 IV a ブロック出土石器 (17)



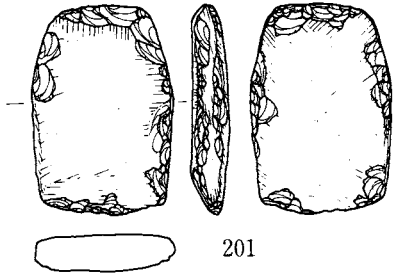
第104図 IV a ブロック出土石器 (18)



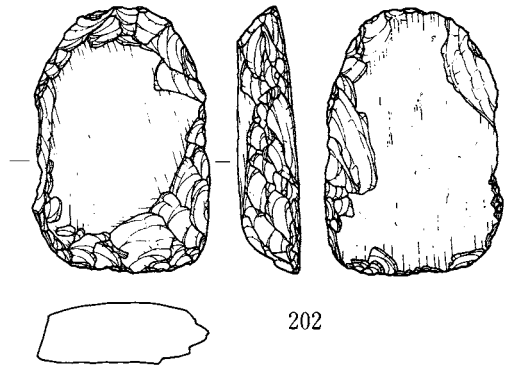
第105図 IV a ブロック出土石器 (19)



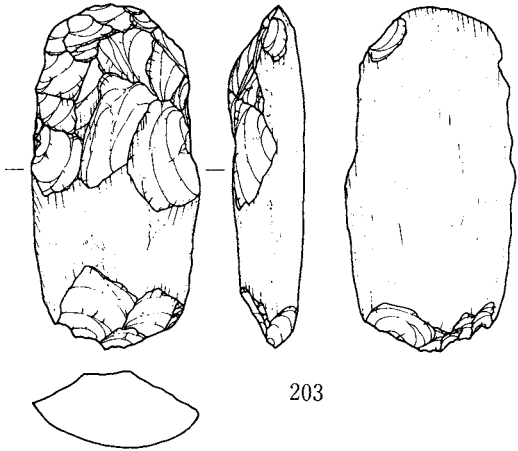
第106図 IV a ブロック出土石器 (20)



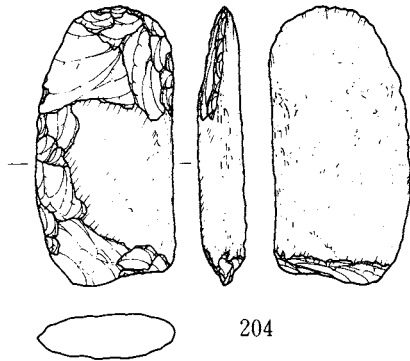
201



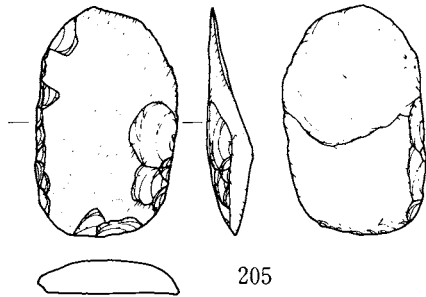
202



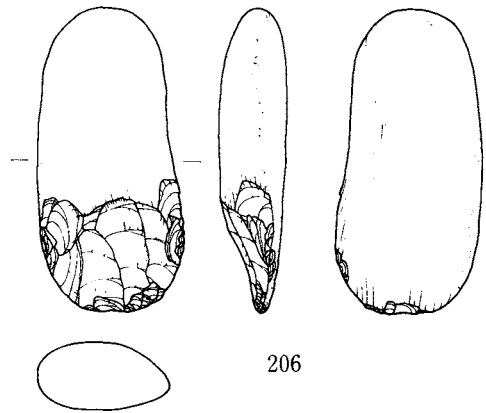
203



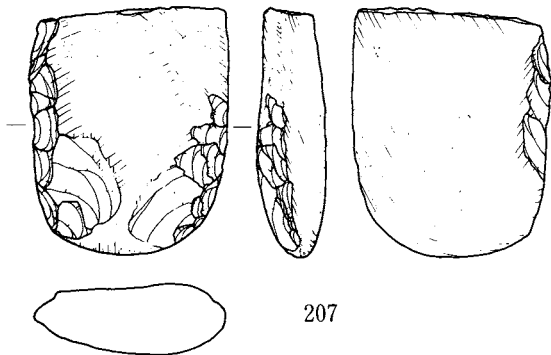
204



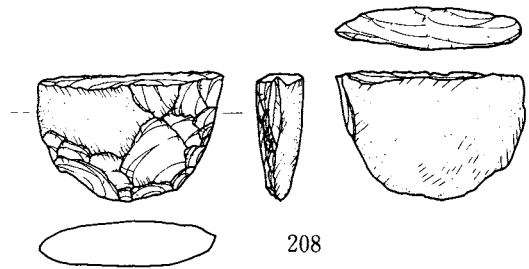
205



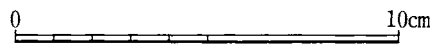
206



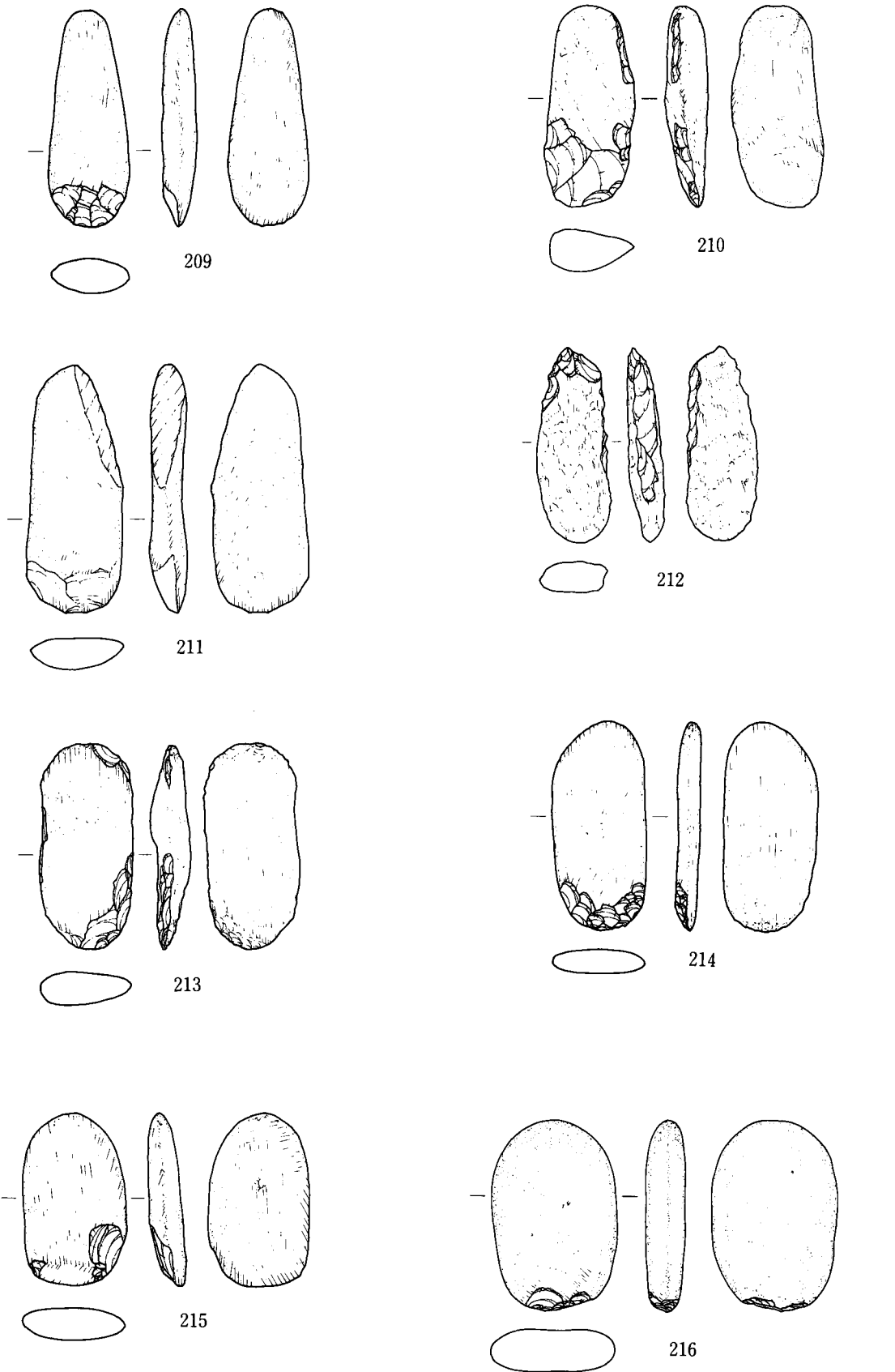
207



208

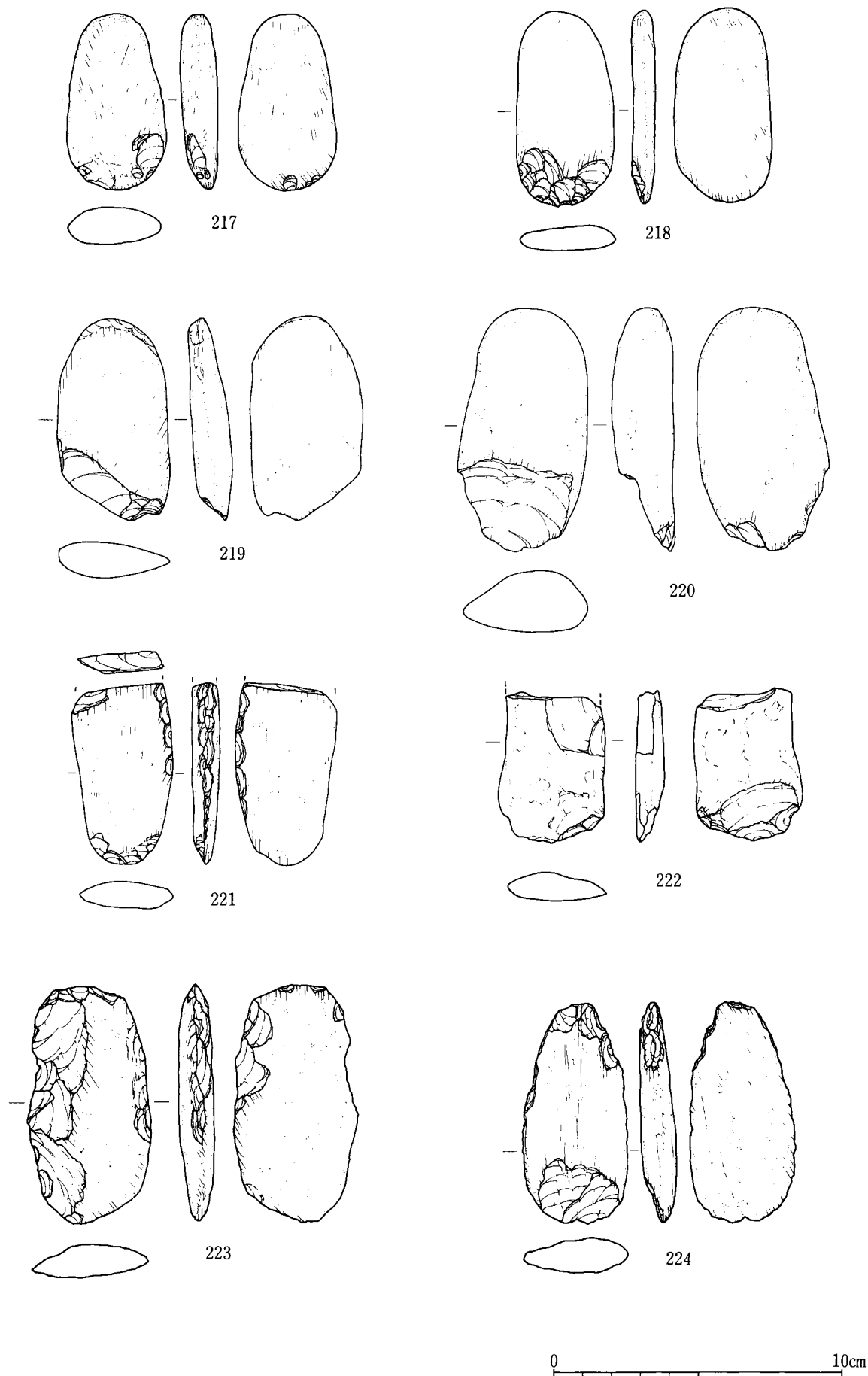


第107図 IV a ブロック出土石器 (21)

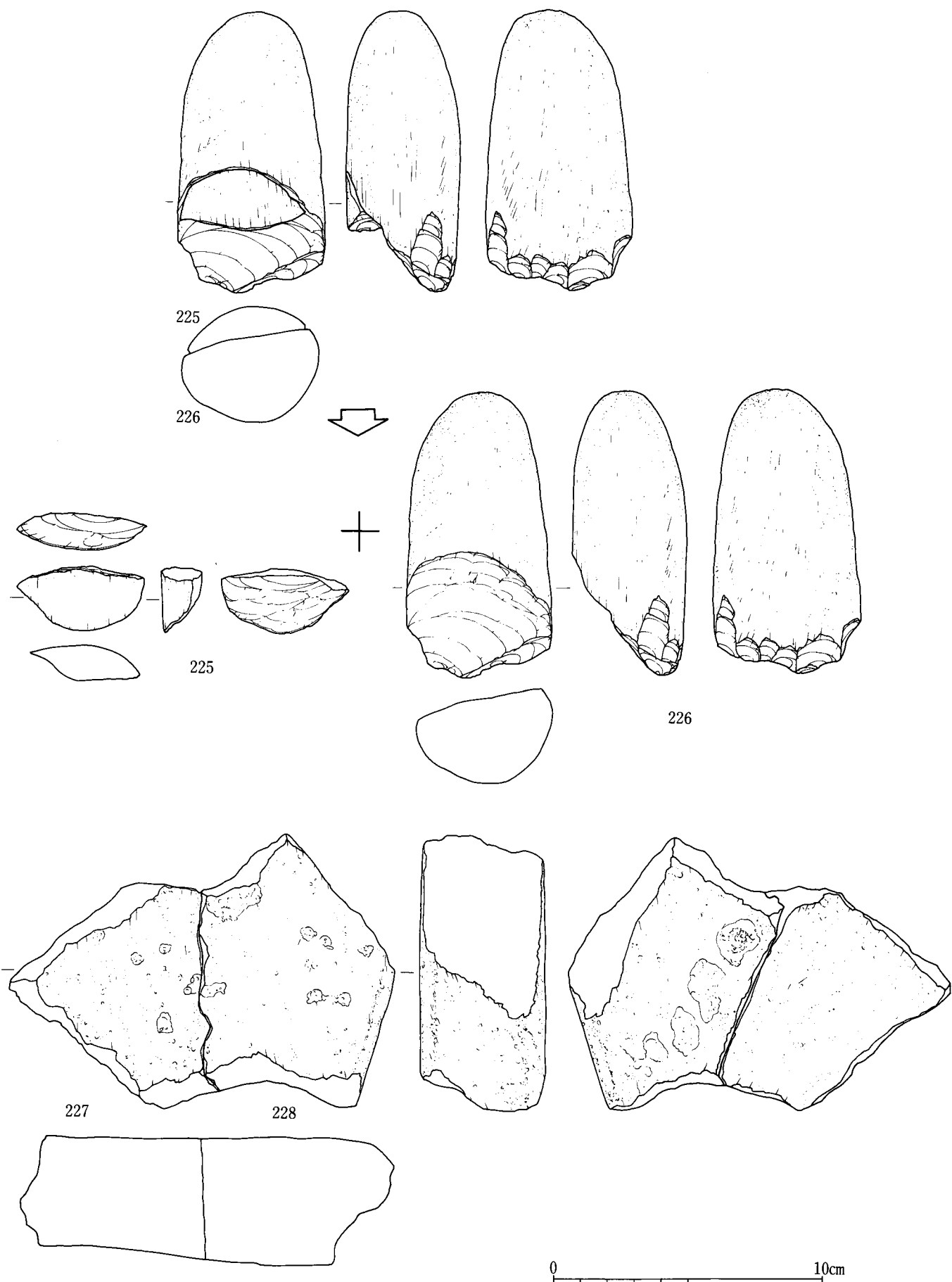


0 10cm

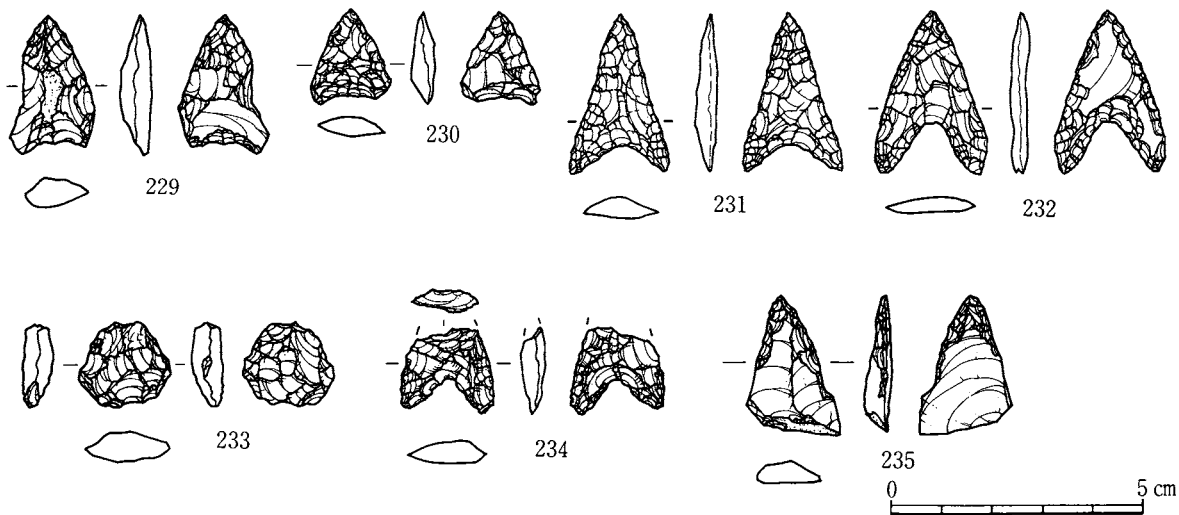
第108図 IV a ブロック出土石器 (22)



第109図 IV a ブロック出土石器 (23)



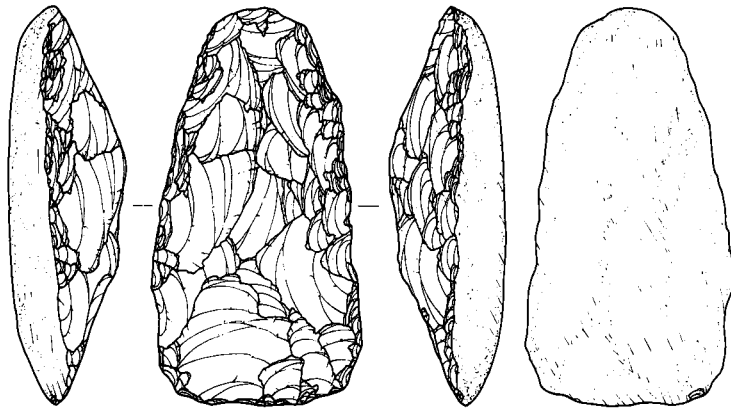
第110図 N aブロック出土石器 (24)



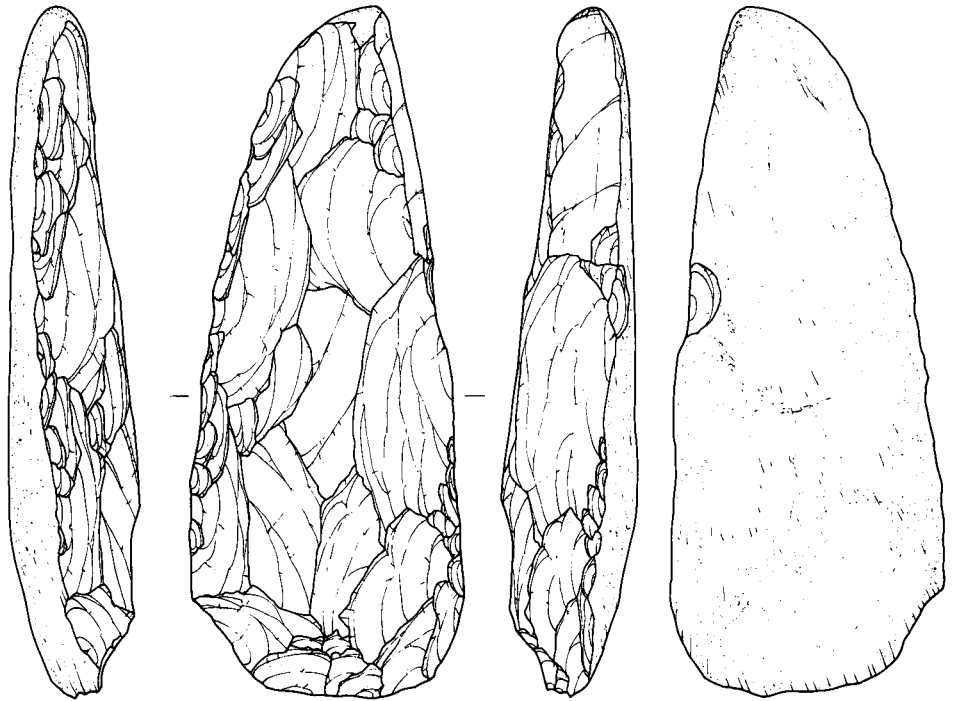
第111図 IV b・IV d・IV e ブロック・単独出土石器

第1表-1 石器属性表(1)

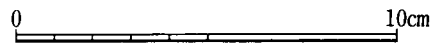
区域	ブロック	挿図番号	グリッド遺構番号	遺物番号	枝番号	器種	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g
I		1	SI-023	33		石核	黒曜石	3.01	2.24	1.59	11.68
II		2	G4-50	3		石鏃	黒曜石	1.40	1.19	0.40	0.64
II		3	H3-65	3		石鏃	黒曜石	3.18	1.30	0.57	1.89
II		4	F4-82	3		礫石斧	安山岩	7.58	3.88	1.64	66.10
II		5	F4-52	2		礫石斧	ホルンフェルス	12.97	8.81	2.33	380.30
III	III c	2	SI-039	171		石鏃	黒曜石	1.47	1.35	0.34	0.45
III	III c	5	SI-051	0		頁岩		3.41	1.96	0.41	2.06
III	III c	6	J6-46	53		楔形石器	チャート	5.21	3.62	1.44	26.01
III	III c	8	SK-172	1		礫石斧	ホルンフェルス	8.03	3.24	1.13	39.40
III	III c	10	SI-039	162		礫石斧	ホルンフェルス	10.62	4.69	1.53	101.20
III	III c	12	J6-46	28		礫石斧	ホルンフェルス	7.00	3.99	1.31	49.10
III	III d	1	L6-22	50		黒曜石		1.42	1.05	0.32	0.35
III	III外	3	J6-59	5		石鏃	黒曜石	1.90	1.45	0.33	1.00
III	III外	4	J5-24	16		石鏃	黒曜石	2.14	1.01	0.27	0.79
III	III外	7	K6-39	1		石鏃	メノウ	1.74	1.47	0.39	0.98
III	III外	9	SK-185	16		砂岩		8.43	5.19	1.88	104.60
III	III外	11	SB-006	110		砂岩		9.49	4.73	2.08	143.80
III	III外	13	K6-83	3		礫石斧	ホルンフェルス	6.45	3.54	1.34	43.40
III	III外	14	K5-17	2		礫石斧	凝灰岩	7.57	7.05	3.79	293.90
IV	IV a	1	N6-70	568		石鏃	黒曜石	1.35	0.95	0.12	0.21
IV	IV a	2	N6-81	353		石鏃	黒曜石	1.39	0.99	0.06	0.16
IV	IV a	3	N6-61	17		石鏃	黒曜石	1.74	1.22	0.12	0.28
IV	IV a	4	N6-80	388		石鏃	黒曜石	1.74	1.51	0.27	0.74
IV	IV a	5	M6-89	411		石鏃	黒曜石	2.05	1.59	0.42	0.82
IV	IV a	6	N6-53	3	2	石鏃	黒曜石	1.78	1.45	0.24	0.56
IV	IV a	7	M6-69	88		石鏃	黒曜石	1.49	1.05	0.10	0.37
IV	IV a	8	N6-61	91		石鏃	黒曜石	1.66	0.80	0.22	0.37
IV	IV a	9	N6-21	25		石鏃	黒曜石	1.72	1.43	0.26	0.72
IV	IV a	10	N6-69	5		石鏃	黒曜石	1.86	1.48	0.24	0.55
IV	IV a	11	M6-76	16		石鏃	黒曜石	1.52	1.47	0.41	0.88
IV	IV a	12	N6-60	23		石鏃	黒曜石	2.06	1.25	0.27	0.71
IV	IV a	13	M6-66	17		石鏃	黒曜石	2.30	1.45	0.48	1.36
IV	IV a	14	N6-81	368		石鏃	黒曜石	1.82	1.67	0.28	0.76
IV	IV a	15	N6-70	404		石鏃	黒曜石	1.74	1.22	0.24	0.71
IV	IV a	16	M6-97	77		石鏃	黒曜石	2.46	1.49	0.27	0.78
IV	IV a	17	N6-63	4	3	石鏃	黒曜石	2.54	1.65	1.13	3.56
IV	IV a	18	M6-78	102		石鏃	黒曜石	1.67	2.32	0.31	1.07
IV	IV a	19	M6-86	18		石鏃	黒曜石	1.65	2.26	0.25	0.65
IV	IV a	20	M6-88	64		石鏃	黒曜石	1.34	1.02	0.23	0.22
IV	IV a	21	N6-61	19		石鏃	黒曜石	1.98	1.33	0.21	0.69
IV	IV a	22	M6-94	14		石鏃	黒曜石	2.44	2.47	0.37	1.45
IV	IV a	23	M6-78	158		石鏃	黒曜石	2.00	1.32	0.38	1.07
IV	IV a	24	N6-81	17		石鏃	黒曜石	2.61	1.90	0.23	0.82
IV	IV a	25	M6-98	94		石鏃	黒曜石	2.60	1.90	0.46	1.72
IV	IV a	26	M6-99	439		石鏃	黒曜石	2.12	1.96	0.30	0.90
IV	IV a	27	M6-77	314		石鏃	黒曜石	2.54	1.57	0.44	1.53
IV	IV a	28	M6-78	544		石鏃	黒曜石	2.69	2.79	0.45	2.67
IV	IV a	29	M6-76	50		石鏃	黒曜石	3.62	2.00	0.59	2.71
IV	IV a	30	N6-60	75		石鏃	黒曜石	2.57	0.99	0.39	0.91
IV	IV a	31	-	-		石鏃	黒曜石	2.10	1.10	0.20	0.56
IV	IV a	32	M6-98	265		石鏃	黒曜石	2.16	1.08	0.25	0.74
IV	IV a	33	M6-86	108		石鏃	黒曜石	1.77	2.21	0.31	0.88
IV	IV a	34	N6-90	505		石鏃	黒曜石	2.64	1.86	0.65	2.96
IV	IV a	35	M6-88	738		石鏃	黒曜石	2.53	1.50	0.30	0.86
IV	IV a	36	M6-79	674		石鏃	黒曜石	2.46	1.80	0.53	2.07
IV	IV a	37	M6-98	98		石鏃	黒曜石	2.85	2.73	0.79	5.25
IV	IV a	38	M6-88	773		石鏃	黒曜石	2.40	1.39	0.49	1.76
IV	IV a	39	N6-71	482		石鏃未製品	黒曜石	1.32	1.18	0.28	0.48
IV	IV a	40	M6-88	507		石鏃未製品	黒曜石	1.09	1.01	0.42	0.49
IV	IV a	41	N6-61	236		石鏃未製品	黒曜石	1.34	1.02	0.17	0.29
IV	IV a	42	M6-99	444		石鏃未製品	黒曜石	1.35	0.82	0.19	0.27
IV	IV a	43	M6-98	355	1	石鏃未製品	黒曜石	1.82	1.31	0.38	0.71
IV	IV a	44	M6-84	19		石鏃未製品	黒曜石	1.77	1.43	0.38	0.75
IV	IV a	45	M6-69	46		石鏃未製品	黒曜石	1.95	1.30	0.18	0.56
IV	IV a	46	M6-98	134		石鏃未製品	黒曜石	1.35	1.06	0.22	0.34
IV	IV a	47	M6-78	478		石鏃未製品	黒曜石	1.34	2.37	0.24	0.62
IV	IV a	48	M6-98	28		石鏃未製品	黒曜石	1.39	0.90	0.32	0.45
IV	IV a	49	M6-69	79		石鏃未製品	黒曜石	1.65	0.76	0.22	0.36
IV	IV a	50	N6-41	5		石鏃未製品	黒曜石	1.77	1.14	0.30	0.70
IV	IV a	51	M6-78	682		石鏃未製品	黒曜石	1.15	0.96	0.33	0.38
IV	IV a	52	N6-71	313		石鏃未製品	黒曜石	1.39	0.86	0.26	0.38
IV	IV a	53	N6-71	19		石鏃未製品	黒曜石	1.36	1.01	0.42	0.61
IV	IV a	54	M6-77	18	1	石鏃未製品	黒曜石	2.40	1.58	0.94	3.00
IV	IV a	55	N6-81	250	1	石鏃未製品	黒曜石	1.76	1.12	0.33	0.77
IV	IV a	57	M6-69	66		石鏃未製品	黒曜石	1.65	1.60	0.37	0.99
IV	IV a	58	N6-70	635		石鏃未製品	黒曜石	1.80	1.62	0.32	0.99
IV	IV a	59	M6-76	49		石鏃未製品	黒曜石	1.80	2.44	0.60	2.74



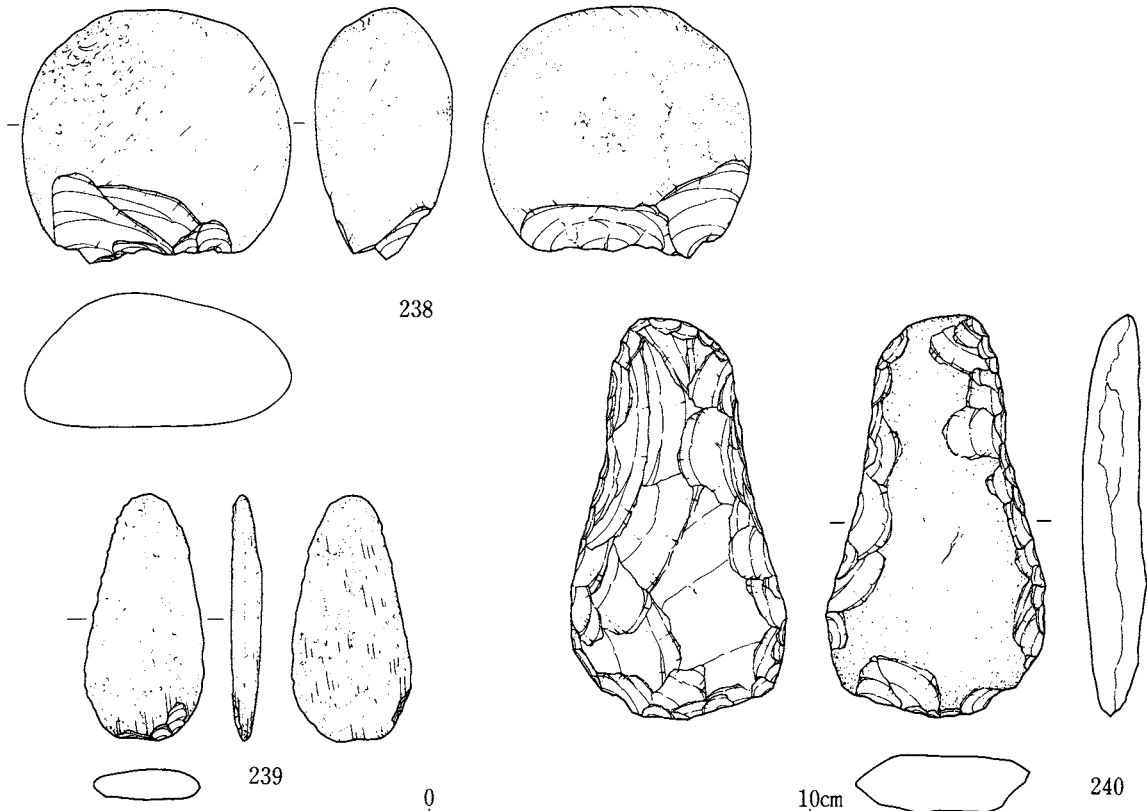
236



237



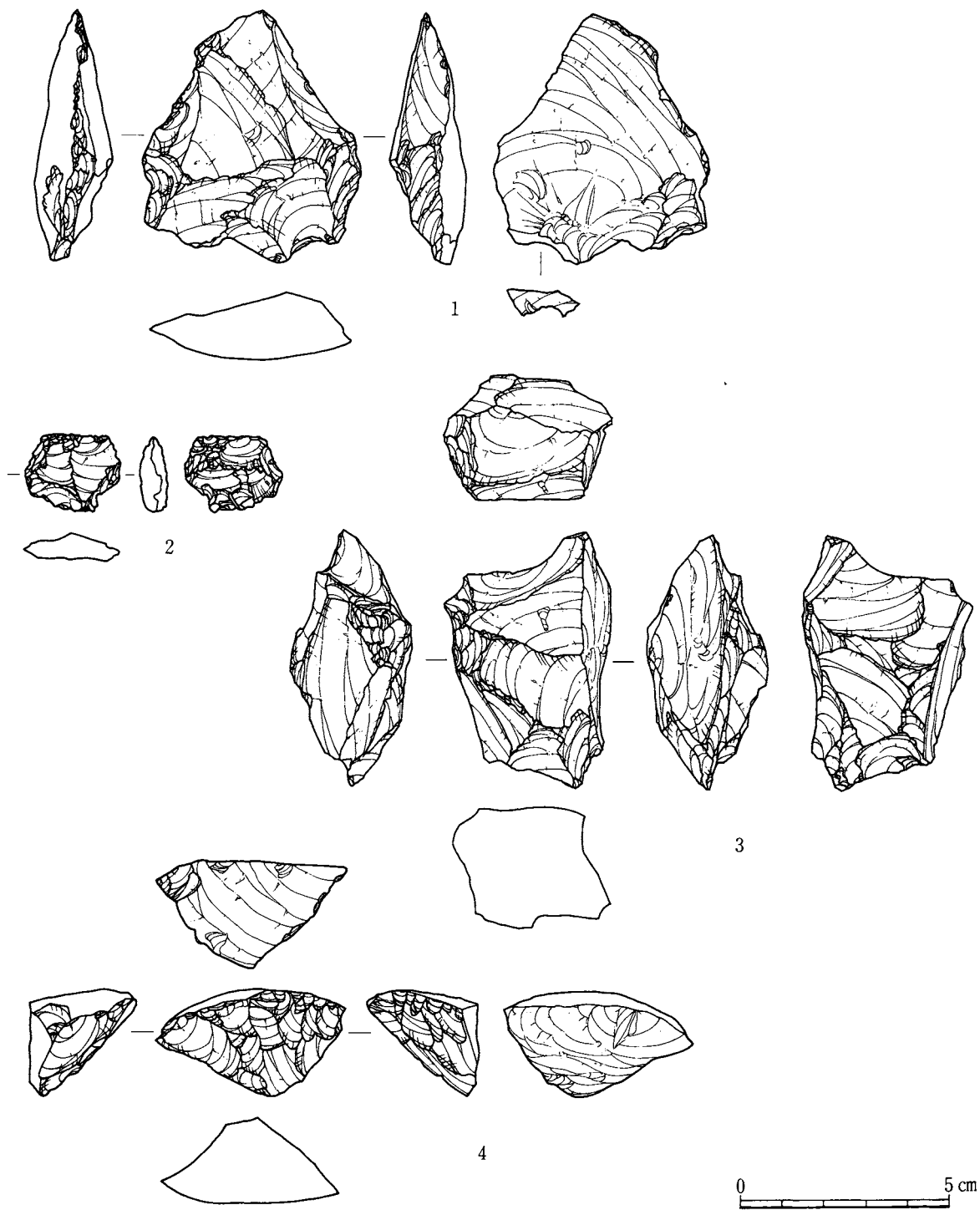
第112図 IV gブロック出土石器



第113図 IV b ブロック・単独出土石器

第1表-2 石器属性表(2)

区域	ブロック	種目番号	グリッド遺構番号	遺物番号	枝番号	器種	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	区域	ブロック	種目番号	グリッド遺構番号	遺物番号	枝番号	器種	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g
IV	IV a	60	M6-77	136		石鏃未製品	黒曜石	2.50	1.75	0.31	1.60	IV	IV a	125	M6-78	398		三角形素材剥片 I	黒曜石	4.20	2.64	0.97	11.71
IV	IV a	61	M6-89	394		石鏃未製品	黒曜石	2.10	2.96	0.72	4.99	IV	IV a	127	N6-60	266		三角形素材剥片 I	黒曜石	6.72	3.51	2.04	31.56
IV	IV a	62	M6-69	395		石鏃未製品	黒曜石	2.37	1.98	0.49	1.88	IV	IV a	126	M6-97	155		二次加工のある剥片	黒曜石	3.45	2.18	0.86	4.72
IV	IV a	63	M6-68	150		石鏃未製品	黒曜石	2.12	1.58	0.35	0.99	IV	IV a	128	M6-79	450		二次加工のある剥片	黒曜石	4.33	2.40	1.40	14.54
IV	IV a	65	M6-88	500		石鏃未製品	黒曜石	2.95	1.90	0.74	2.56	IV	IV a	129	M6-78	807		剥片	黒曜石	3.33	1.80	0.80	5.47
IV	IV a	66	M6-97	280		石鏃未製品	黒曜石	2.58	1.85	0.25	1.21	IV	IV a	130	M6-78	25		剥片	黒曜石	6.51	3.48	0.92	17.98
IV	IV a	67	N6-71	107		石鏃未製品	黒曜石	3.38	3.26	0.91	8.36	IV	IV a	131	M6-79	129		二次加工のある剥片	黒曜石	5.43	2.38	0.99	15.27
IV	IV a	68	M6-97	110		石鏃未製品	黒曜石	3.19	2.32	0.75	5.48	IV	IV a	132	N6-60	147		二次加工のある剥片	黒曜石	5.80	3.08	1.11	15.58
IV	IV a	69	N6-74	4	1	石鏃未製品	黒曜石	4.30	3.03	2.00	16.79	IV	IV a	133	M6-58	31		剥片	黒曜石	8.15	5.93	1.88	80.57
IV	IV a	70	N6-81	28		石鏃未製品	黒曜石	3.07	1.99	0.66	3.67	IV	IV a	134	N6-71	594		二次加工のある剥片	黒曜石	6.63	4.71	2.28	59.24
IV	IV a	72	M6-79	350		石鏃未製品	黒曜石	3.81	3.62	0.99	10.74	IV	IV a	135	M6-78	104		二次加工のある剥片	黒曜石	2.72	2.97	1.25	13.67
IV	IV a	73	M6-79	579		石鏃未製品	黒曜石	3.17	4.82	1.14	16.26	IV	IV a	136	M6-67	155		二次加工のある剥片	黒曜石	4.44	2.67	1.06	9.83
IV	IV a	74	M6-89	258		三角形素材剥片 III	黒曜石	2.21	1.33	0.32	0.70	IV	IV a	137	M6-67	61		二次加工のある剥片	黒曜石	4.16	5.38	1.41	31.61
IV	IV a	75	M6-67	62		三角形素材剥片 III	黒曜石	1.56	1.31	0.29	0.47	IV	IV a	138	M6-98	272		二次加工のある剥片	黒曜石	4.21	2.95	0.91	9.18
IV	IV a	76	M6-77	313	1	三角形素材剥片 III	黒曜石	1.76	1.85	0.42	1.33	IV	IV a	139	M6-97	152		二次加工のある剥片	黒曜石	5.47	1.98	0.95	7.44
IV	IV a	77	M6-69	361		三角形素材剥片 III	黒曜石	2.91	2.51	0.54	3.09	IV	IV a	140	M6-78	391		二次加工のある剥片	黒曜石	1.66	2.68	0.78	2.63
IV	IV a	78	M6-67	259		三角形素材剥片 III	黒曜石	3.65	3.08	1.35	11.28	IV	IV a	141	M6-78	29		二次加工のある剥片	黒曜石	3.96	5.38	1.08	19.50
IV	IV a	79	M6-78	604		三角形素材剥片 III	黒曜石	2.36	1.79	0.57	2.15	IV	IV a	142	M6-78	480		二次加工のある剥片	黒曜石	5.05	4.87	1.76	33.92
IV	IV a	80	M6-77	152	1	三角形素材剥片 III	黒曜石	4.87	2.97	0.87	10.65	IV	IV a	143	M6-99	403		石核	黒曜石	6.31	4.40	2.06	51.90
IV	IV a	81	M6-89	159		三角形素材剥片 III	黒曜石	2.93	2.23	0.43	3.19	IV	IV a	144	M6-89	376		石核	黒曜石	2.64	5.12	2.78	33.30
IV	IV a	82	M6-68	121		三角形素材剥片 III	黒曜石	4.19	2.43	0.53	4.95	IV	IV a	145	M6-77	182		石核	黒曜石	6.75	2.65	2.12	27.28
IV	IV a	83	M6-77	288		三角形素材剥片 III	黒曜石	3.05	3.47	0.98	7.18	IV	IV a	146	M6-78	277		石核	黒曜石	7.43	2.79	1.97	37.36
IV	IV a	86	N6-71	293		三角形素材剥片 III	黒曜石	3.73	2.57	1.16	10.51	IV	IV a	147	N6-90	183	1	石核	黒曜石	5.00	3.85	2.27	38.11
IV	IV a	85	M6-67	123		三角形素材剥片 III	黒曜石	3.15	2.58	0.81	4.74	IV	IV a	148	M6-79	520		石核	黒曜石	4.33	2.95	2.27	25.10
IV	IV a	87	M6-77	257		三角形素材剥片 III	黒曜石	2.60	3.24	0.98	9.21	IV	IV a	149	N6-71	136		石核	黒曜石	5.58	3.50	1.85	25.42
IV	IV a	84	N6-21	50		三角形素材剥片 III	黒曜石	4.79	3.24	1.22	14.65	IV	IV a	150	M6-98	292		石核	黒曜石	5.29	3.57	1.95	33.86
IV	IV a	88	M6-88	46		三角形素材剥片 III	黒曜石	3.40	3.13	0.73	5.52	IV	IV a	151	M6-89	1	1	石核	黒曜石	4.65	4.29	1.38	34.41
IV	IV a	89	M6-87	151		三角形素材剥片 III	黒曜石	2.18	3.45	0.74	3.71	IV	IV a	152	M6-67	151		石核	黒曜石	6.48	3.28	2.69	46.50
IV	IV a	92	M6-88	38		三角形素材剥片 III	黒曜石	4.18	2.74	0.85	7.86	IV	IV a	153	M6-88	323		石核	黒曜石	5.62	3.52	1.93	38.26
IV	IV a	90	N6-71	135		三角形素材剥片 III	黒曜石	3.45	2.77	0.68	5.30	IV	IV a	154	N6-61	137		石核	黒曜石	5.10	4.00	2.29	39.89
IV	IV a	91	N6-71	493	1	三角形素材剥片 III	黒曜石	3.98	2.83	1.49	12.78	IV	IV a	155	M6-87	419		石核	黒曜石	4.71	4.64	2.04	42.67
IV	IV a	93	M6-88	157		三角形素材剥片 III	黒曜石	5.38	3.89	1.22	19.05	IV	IV a	157	M6-68	379		石核	黒曜石	6.13	3.64	3.17	66.38
IV	IV a	94	N6-80	443		三角形素材剥片 II	黒曜石	2.16	1.84	0.66	1.86	IV	IV a	157	M6-68	379		石核	黒曜石	5.05	4.20	2.22	33.89
IV	IV a	95	M6-78	52		三角形素材剥片 II	黒曜石	1.57	1.50	0.54	1.18	IV	IV a	158	N6-81	331		石核	黒曜石	5.14	3.59	2.24	32.35
IV	IV a	96	N6-90	173		三角形素材剥片 II	黒曜石	2.24	2.08	0.57	1.74	IV	IV a	159	M6-67	156		剥片	黒曜石	1.94	1.70	0.22	0.73
IV	IV a	97	M6-79	118		三角形素材剥片 II	黒曜石	2.10	2.28	0.34	1.15	IV	IV a	160	M6-67	21		石核	黒曜石	2.59	6.62	1.47	29.89
IV	IV a	98	M6-88	183		三角形素材剥片 II	黒曜石	2.53	2.16	0.59	2.24	IV	IV a	161	N6-81	72		石核	黒曜石	6.44	4.74	2.73	68.30
IV	IV a	99	M6-67	23		三角形素材剥片 II	黒曜石	1.82	2.13	0.70	1.82	IV	IV a	162	M6-98	276		石核	黒曜石	5.70	4.09	4.02	60.39
IV	IV a	100	N6-71	302		三角形素材剥片 II	黒曜石	2.06	1.82	0.37	1.18	IV	IV a	163	M6-97	139		石核	黒曜石	3.44	3.03	2.85	37.16
IV	IV a	101	M6-89	505		三角形素材剥片 II	黒曜石	1.73	1.87	0.16	0.57	IV	IV a	164	M6-79	581		三角形素材剥片 II	黒曜石	2.40	1.63	0.60	2.76
IV	IV a	102	M6-79	667		三角形素材剥片 II	黒曜石	2.70	2.57	0.72	4.53	IV	IV a	165	M6-79	222		三角形素材剥片 II	黒曜石	1.76	1.55	0.18	0.60
IV	IV a	103	M6-78	303		三角形素材剥片 II	黒曜石	2.38	2.33	0.45	2.16	IV	IV a	166	M6-87	501		三角形素材剥片 II	黒曜石	4.44	3.17	0.57	6.23
IV	IV a	104	N6-70	405		三角形素材剥片 II	黒曜石	2.63	2.09	0.55	2.56	IV	IV a	167	M6-98	114		三角形素材剥片 III	黒曜石	6.35	5.08	1.58	39.33
IV	IV a	105	M6-78	263		三角形素材剥片 II	黒曜石	2.65	2.65	0.65	4.09	IV	IV a	168	M6-67	60		石核	黒曜石	4.41	4.67	2.91	48.90
IV	IV a	106	SB-005	10		三角形素材剥片 II	黒曜石	2.63	2.53	0.68	3.71	IV	IV a	169	M6-67	161		三角形素材剥片 III	黒曜石	4.79	4.45	1.17	26.71
IV	IV a	107	M6-88	33		三角形素材剥片 II	黒曜石	3.03	2.00	0.76	3.52	IV	IV a	170	M6-67	142		三角形素材剥片 II	黒曜石	5.66	2.18	1.35	8.79
IV	IV a	108	N6-71	419		三角形素材剥片 II	黒曜石	3.77	2.37	1.01	6.95	IV	IV a	171	M6-79	109		三角形素材剥片 II	黒曜石	2.53	1.71	0.21	1.08
IV	IV a	109	M7-04	27		三角形素材剥片 II	黒曜石	3.86	2.26	1.16	6.98	IV	IV a	172	N6-71	250		三角形素材剥片 II	黒曜石	2.02	1.30	0.95	2.87
IV	IV a	110	N6-71	301		三角形素材剥片 II	黒曜石	2.33	2.02	0.55	2.89	IV	IV a	173	N6-60	29		三角形素材剥片 II	黒曜石	2.56	1.58	1.47	7.73
IV	IV a	111	N6-54	4	1	三角形素材剥片 II	黒曜石	3.76	2.65	0.63	2.78	IV	IV a	174	N6-71	18		三角形素材剥片 II	黒曜石	3.95	1.89	1.64	14.39
IV	IV a	112	M6-98	168		三角形素材剥片 II	黒曜石	5.48	3.53	0.94	13.17	IV	IV a	175	M6-89	176		二次加工のある剥片	チャート	3.59	1.56	0.95	5.08
IV	IV a	113	M6-67	26		三角形素材剥片 II	黒曜石	5.56	3.97	1.84	24.49	IV	IV a	176	M6-79	176		二次加工のある剥片	玉髄	2.08	0.66	0.42	3.39
IV	IV a	114	M6-67	22	1	三角形素材剥片 III	黒曜石	2.82	3.22	0.78	6.00	IV	IV a	177	M6-67	256		礫石斧	ホルンフェルス	8.12	5.54	2.26	140.20
IV	IV a	115	N6-71	507		三角形素材剥片 III	黒曜石	3.70	3.22	1.26	10.75	IV	IV a	178	N6-50	3		砂岩	砂岩	8.59	4.58	1.83	92.30
IV	IV a	116	N6-62	4	2	三角形素材剥片 II	黒曜石	4.41	2.64	1.47	12.93	IV	IV a	179	N6-80	168		礫石斧	ホルンフェルス	8.68	4.26	1.86	88.80
IV	IV a	117	M6-79	722		三角形素材剥片 II	黒曜石	0.82	0.61	0.12	0.08	IV	IV a	180	N6-70	37		礫石斧	安山岩	7.25	4.30	1.95	78.50
IV	IV a	118	M6-88	648		三角形素材剥片 I	黒曜石	2.36	1.17	0.83	1.97	IV	IV a	181	M6-98	216		礫石斧	ホルンフェルス	9.19	5.06	1.89	108.60
IV	IV a	119	M6-77	164	1	三角形素材剥片 I	黒曜石	2.28	2.23	0.37	2.52	IV	IV a	182	M6-99	167		礫石斧	ホルンフェルス	7.63	3.99	1.92	66.60
IV	IV a	120	M6-97	236		三角形素材剥片 I	黒曜石	2.30	1.82	0.30	1.18	IV	IV a	183	M6-98	19		礫石斧	ホルンフェルス	5.73	3.79	0.60	19.80
IV	IV a	121	M6-78	723		三角形素材剥片 I	黒曜石	3.05	2.40	0.89	5.00	IV	IV a	184	SK-163	206		礫石斧	ホルンフェルス	8.70	4.51	2.06	129.30
IV	IV a	122	M6-78	37		三角形素材剥片 I	黒曜石	1.36	3.74	0.49	2.45	IV	IV a	185	M6-67	115		礫石斧	砂岩	10.86	6.37	2.90	



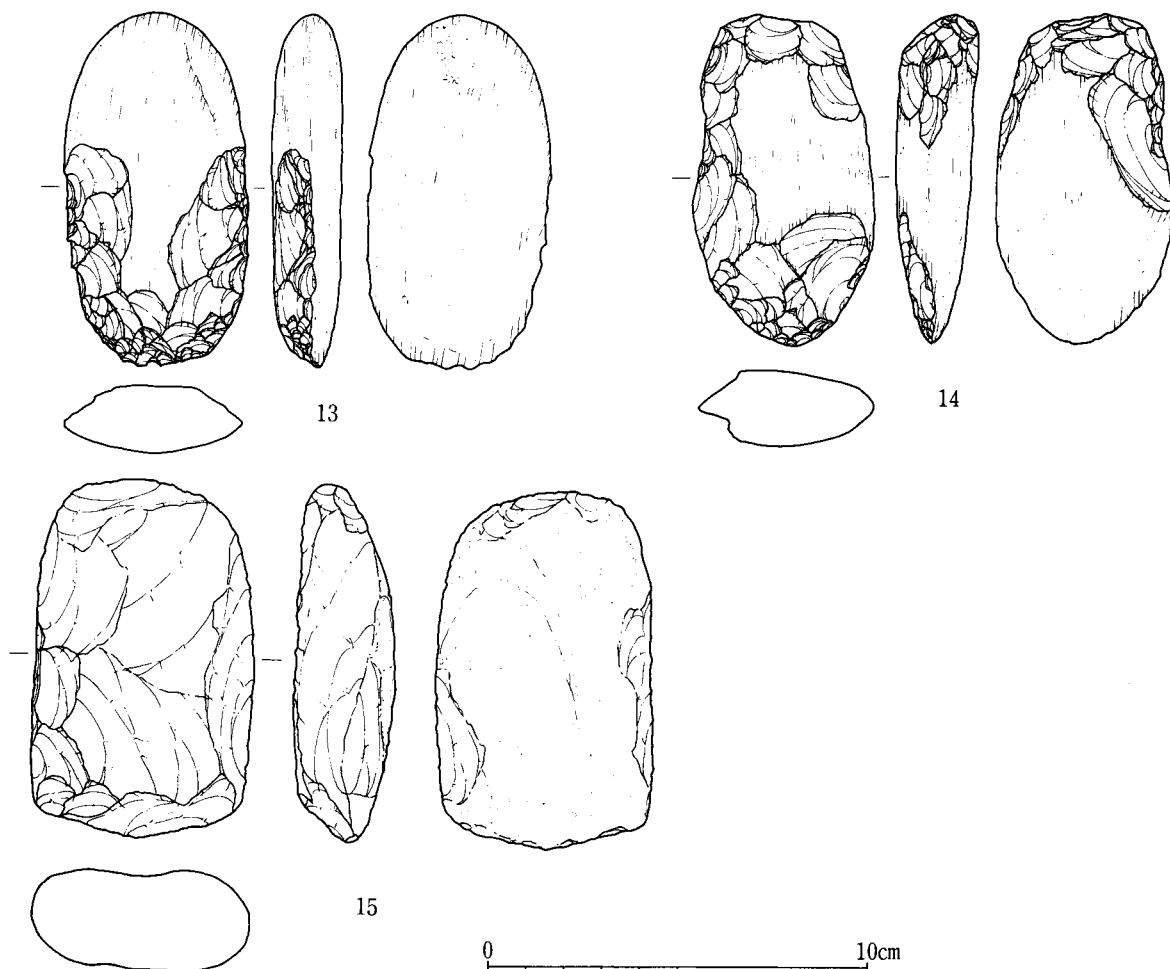
第114図 V区出土石器(1)

第1表-3 石器属性表(3)

区域	ブロック	種目番号	グリッド遺構番号	遺物番号	枝番号	器種	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	区域	ブロック	種目番号	グリッド遺構番号	遺物番号	枝番号	器種	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g
IV	IV a	189	M6-79	398		礫石斧	砂岩	7.43	4.33	1.92	85.30	IV	IV a	203	M6-85	31		礫石斧	ホルンフェルス	8.84	4.38	1.75	95.10
IV	IV a	190	M6-98	309		礫石斧	ホルンフェルス	7.47	4.36	1.75	79.40	IV	IV a	204	M6-67	185		礫石斧	安山岩	7.19	3.57	1.11	42.20
IV	IV a	191	M6-98	106		礫石斧	ホルンフェルス	7.46	4.02	1.56	83.90	IV	IV a	205	M6-59	3		礫石斧	ホルンフェルス	5.87	3.63	1.18	28.70
IV	IV a	192	N6-58	2		礫石斧	安山岩	6.98	4.37	1.55	72.30	IV	IV a	207	M6-77	122		礫石斧	ホルンフェルス	6.43	5.20	1.66	90.20
IV	IV a	193	M6-77	225		礫石斧	安山岩	8.01	5.48	1.88	133.50	IV	IV a	208	M6-98	240		礫石斧	ホルンフェルス	4.93	3.28	1.19	25.20
IV	IV a	194	M6-97	188		礫石斧	砂岩	13.88	5.94	1.86	132.80	IV	IV a	209	M6-58	2		礫石斧	砂岩	6.15	3.44	1.10	38.60
IV	IV a	195	N6-60	143		礫石斧	安山岩	8.12	4.69	1.73	94.80	IV	IV a	210	M6-77	200		礫石斧	砂岩	6.71	3.90	0.70	31.30
IV	IV a	196	N6-81	135		礫石斧	安山岩	7.08	4.68	1.88	97.50	IV	IV a	211	M6-69	374		礫石斧	砂岩	6.99	3.89	1.30	51.30
IV	IV a	197	M6-98	212		礫石斧	安山岩	7.82	4.57	1.31	69.30	IV	IV a	212	N6-61	109		礫石斧	安山岩	8.40	4.50	2.15	101.20
IV	IV a	198	M6-88	599		礫石斧	安山岩	9.38	4.60	2.00	135.20	IV	IV a	213	N6-61	225		礫石斧	ホルンフェルス	6.07	3.46	0.90	29.60
IV	IV a	199	M6-37	3		礫石斧	安山岩	7.21	7.17	2.19	166.10	IV	IV a	214	M6-79	258		礫石斧	ホルンフェルス	5.01	3.70	1.02	27.10
IV	IV a	200	M6-88	145		礫石斧	ホルンフェルス	5.42	3.76	0.70	21.00	IV	IV a	215	M6-78	243		礫石斧	ホルンフェルス	8.05	4.30	1.08	49.50
IV	IV a	201	M6-67	85		礫石斧	安山岩	5.51	3.64	0.90	33.90	IV	IV a	216	M6-77	116		礫石斧	ホルンフェルス	7.46	3.65	1.12	41.60
IV	IV a	202	M6-89	106		礫石斧	凝灰岩	6.98	4.65	1.51	77.20	IV	IV a	217	M6-98	280		礫石斧	安山岩	7.06	2.60	1.08	27.50



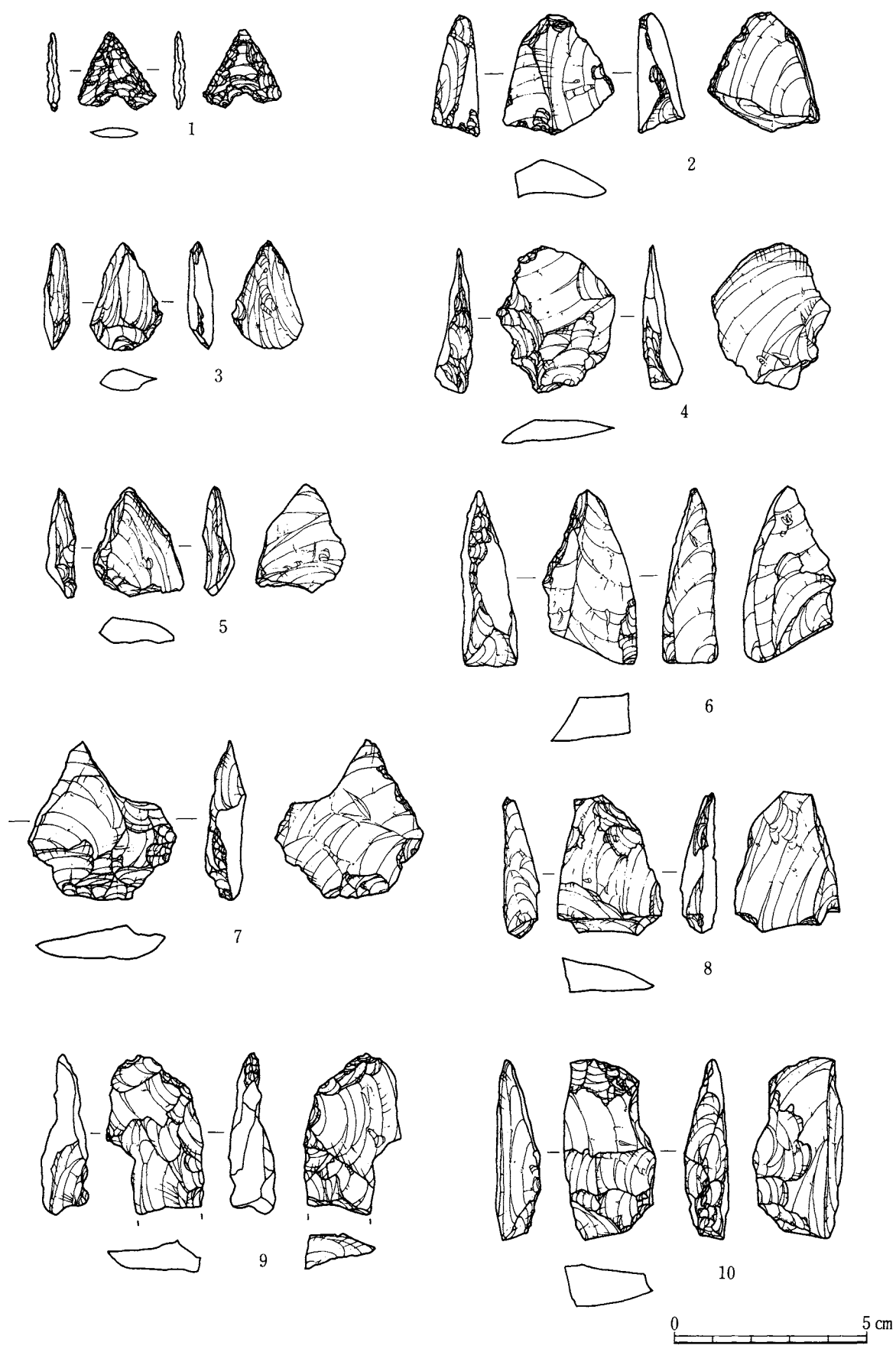
第115图 V区出土石器(2)



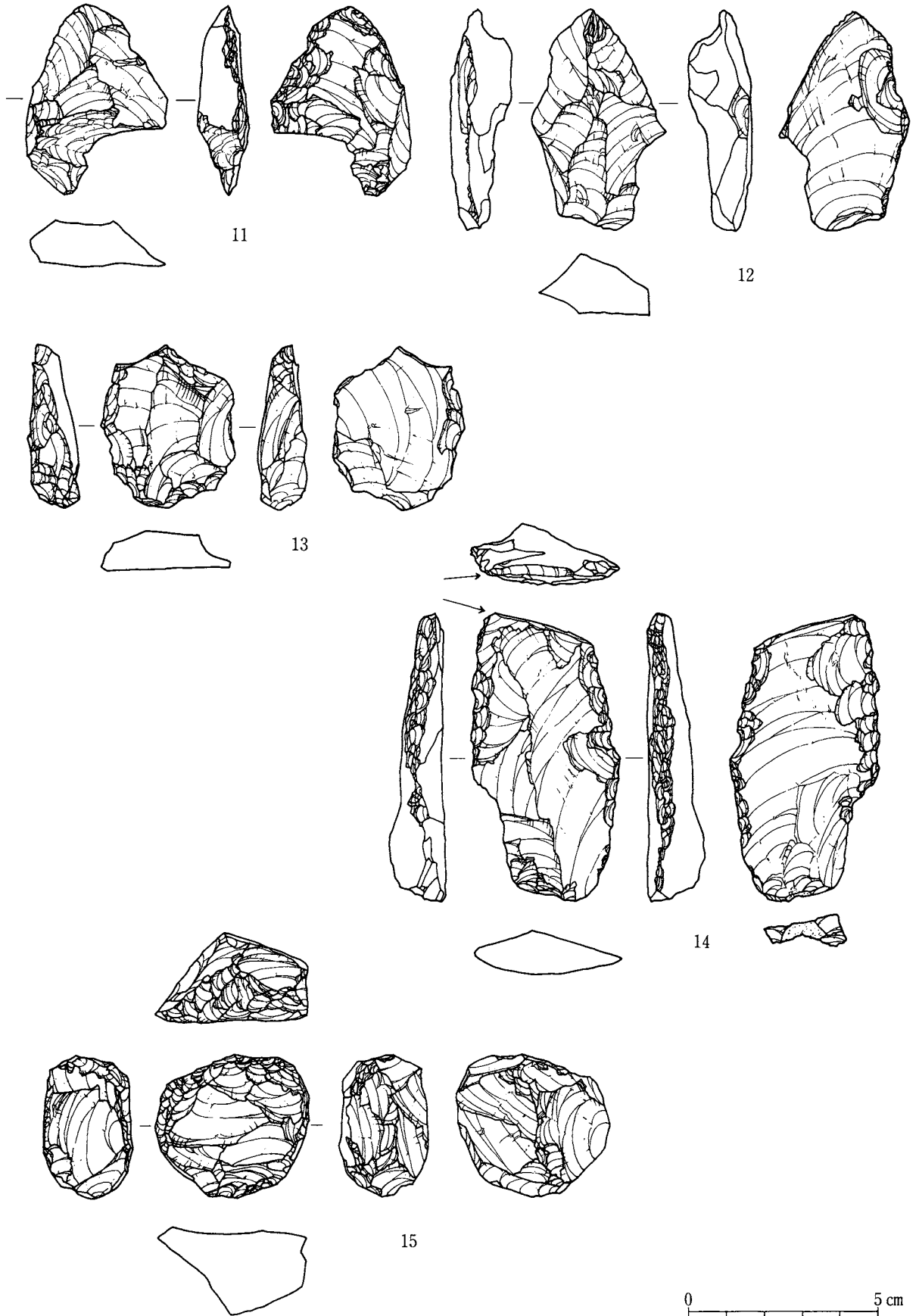
第116図 V区出土石器(3)

第1表-4 石器属性表(4)

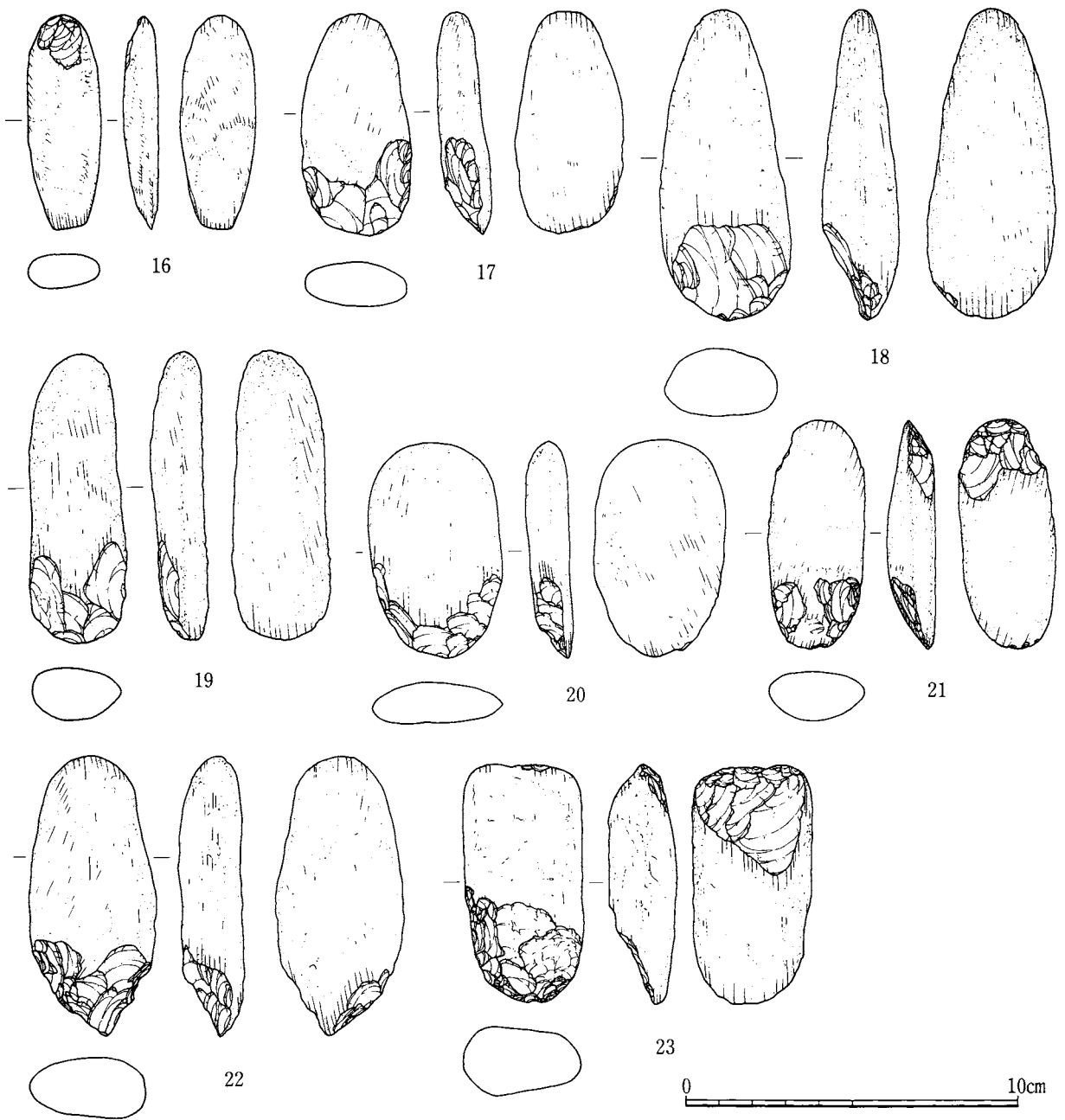
区域	ブロック	挿入番号	グリッド遺構番号	遺物番号	枝番号	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	区域	ブロック	挿入番号	グリッド遺構番号	遺物番号	枝番号	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g
IV	IV a	218	M6-97	28		礫石斧	ホルンフェルス	6.50	2.83	1.32	34.90	VI	1	U7-59	4	石鏃	黒曜石	2.07	1.94	0.23	0.80		
IV	IV a	219	M6-98	0		礫石斧	ホルンフェルス	7.83	3.20	1.22	43.50	VI	2	U7-54	36	三角形素材剥片III	黒曜石	3.06	2.73	1.20	7.09		
IV	IV a	220	M6-88	370		礫石斧	ホルンフェルス	6.10	2.30	1.00	19.10	VI	3	SK-001	1	三角形素材剥片III	黒曜石	2.67	1.78	0.53	2.36		
IV	IV a	221	N6-70	72		礫石斧	ホルンフェルス	6.52	2.98	1.10	28.50	VI	4	W7-23	16	三角形素材剥片III	黒曜石	3.62	3.05	0.83	6.07		
IV	IV a	222	M6-78	595		礫石斧	砂岩	5.47	3.03	0.70	26.90	VI	5	W7-52	8	三角形素材剥片III	黒曜石	2.84	2.22	0.66	3.78		
IV	IV a	223	M6-88	237		砂岩	砂岩	5.47	3.30	1.02	30.40	VI	6	W7-01	61	三角形素材剥片III	黒曜石	4.44	2.55	1.29	12.30		
IV	IV a	224	M6-87	116		礫石斧	砂岩	6.03	4.11	1.27	54.30	VI	8	U7-18	13	三角形素材剥片III	黒曜石	3.83	2.78	0.96	7.07		
IV	IV a	225	M6-89	475		礫石斧	ホルンフェルス	2.56	4.74	1.52	16.80	VI	7	W7-31	26	三角形素材剥片III	黒曜石	3.78	3.31	0.86	9.40		
IV	IV a	226	M6-89	274		礫石斧	ホルンフェルス	10.54	5.62	4.34	319.20	VI	9	U7-09	8	三角形素材剥片III	黒曜石	3.97	2.34	1.00	8.28		
IV	IV a	227	M6-48	3		礫石斧	ホルンフェルス	8.04	8.02	4.15	369.60	VI	10	U7-87	18	三角形素材剥片III	黒曜石	4.50	2.21	1.09	11.90		
IV	IV a	228	M6-37	5		礫石斧	ホルンフェルス	9.82	8.40	4.54	496.70	VI	11	SK-009	4	三角形素材剥片III	黒曜石	4.97	3.75	1.22	14.94		
IV	IV a	236	N6-21	3	1	礫石斧	凝灰岩	10.48	5.31	2.83	157.60	VI	12	U7-04	7	三角形素材剥片III	黒曜石	5.85	3.43	1.42	21.35		
IV	IV a	237	N6-21	3	2	礫石斧	ホルンフェルス	18.09	7.27	3.50	441.50	VI	13	W6-92	6	三角形素材剥片II	黒曜石	4.22	3.55	1.16	17.31		
IV	IV a	239	O5-94	2		礫石斧	安山岩	6.34	3.18	0.70	18.30	VI	14	U7-36	9	彫器	黒曜石	7.36	3.90	1.38	23.94		
IV	IV a	240	M6-20	2		礫石斧	安山岩	10.39	5.65	1.57	118.50	VI	15	U6-98	22	石核	黒曜石	4.24	3.44	2.35	32.25		
IV	IV b	229	L6-98	88		石鏃	安山岩	2.69	1.76	0.62	2.24	VI	16	U7-29	9	礫石斧	凝灰岩	6.46	2.27	0.90	22.30		
IV	IV b	230	L7-07	140		石鏃	安山岩	1.84	1.54	0.47	1.04	VI	21	U7-65	30	砂岩	砂岩	6.85	2.80	1.51	38.00		
IV	IV b	231	M6-73	26		石鏃	チャート	3.18	1.93	0.48	1.46	VI	19	W7-42	115	礫石斧	ホルンフェルス	8.80	3.00	1.43	56.90		
IV	IV d	232	N5-21	28		石鏃	チャート	3.13	2.17	0.31	1.65	VI	22	U7-44	21	砂岩	砂岩	8.33	3.89	1.83	85.30		
IV	IV e	233	O6-72	11		石鏃未製品	黒曜石	1.63	1.81	0.69	1.60	VI	17	U7-36	25	礫石斧	砂岩	6.75	3.30	1.36	43.20		
IV	IV e	234	O6-60	9		石鏃未製品	黒曜石	1.65	1.88	0.52	1.15	VI	18	U6-74	13	礫石斧	安山岩	9.37	3.88	2.33	100.50		
IV	IV e	235	N6-45	2		石鏃未製品	チャート	2.66	1.90	0.51	1.89	VI	23	U7-87	7	礫石斧	チャート	7.21	3.63	2.10	76.10		
V	V b	9	P7-98	22		礫石斧	砂岩	7.25	4.12	1.25	52.70	VI	20	U6-94	34	礫石斧	安山岩	6.47	3.97	1.20	48.40		
V	V b	11	P7-88	34		礫石斧	安山岩	8.16	5.40	1.84	102.80	VI	24	W7-50	9	礫石斧	ホルンフェルス	8.83	4.03	2.36	113.90		
V	V b	12	P7-77	1		礫石斧	安山岩	7.61	6.47	1.97	129.30	VI	25	U6-86	15	礫石斧	凝灰岩	10.80	5.12	1.93	131.50		
V	V b	2	Q6-66	1		楔形石器	黒曜石	2.19	1.93	0.64	2.03	VI	26	U7-78	32	礫石斧	安山岩	5.57	4.91	1.87	72.10		
V	V c	3	Q6-89	1		石核	黒曜石	5.86	3.85	2.97	53.16	VI	27	U7-66	3	礫石斧	ホルンフェルス	5.40	5.14	2.37	75.60		
V	V c	4	Q6-88	1		石核	黒曜石	4.51	3.22	2.23	18.53	VI	28	U7-05	37	礫石斧	ホルンフェルス	9.24	5.07	1.65	110.50		
V	V d	1	SK-126	59		三角形素材剥片III	黒曜石	5.80	5.67	1.64	37.03	VI	29	U7-64	14	礫石斧	ホルンフェルス	8.52	5.09	1.44	92.90		
V	V d	5	SK-126	63		礫石斧	ホルンフェルス	7.13	4.11	1.44	60.90	VI	30	W7-13	105	砂岩	砂岩	8.14	4.59	2.27	129.60		
V	V d	6	SK-126	61		礫石斧	頁岩	7.20	3.51	0.90	36.80	VI	31	W7-72	12	礫石斧	ホルンフェルス	6.46	5.54	1.78	105.60		
V	V d	7	SK-126	60		礫石斧	安山岩	8.26	4.71	1.27	71.20	VI	32	U7-9	34	礫石斧	安山岩	7.22	5.37	1.68	98.10		
V	V d	8	SK-126	62		礫石斧	凝灰岩	9.16	4.23	2.12	117.20	VI	33	SK-60	115	礫石斧	安山岩	4.45	3.88	1.13	28.70		
V	V外	10	P7-08	115		礫石斧	砂岩	7.30	4.70	2.08	108.20	VI	34	SK-29	23	礫石斧	ホルンフェルス	9.70	6.75	2.77	240.30		
V	V外	13	Q7-98	1		礫石斧	砂岩	9.21	4.83	1.83	119.60	VI	35	U7-15	9	礫石斧	安山岩	4.89	3.83	1.76	39.70		
V	V外	14	P7-01	1		礫石斧	安山岩	8.70	4.84	2.06	105.20	VI	36	U6-75	15	礫石斧	砂岩	3.68	3.16	1.57	26.00		
V	V外	15	P7-84	1		礫石斧	砂岩	8.16	5.75	2.57	214.70	VI	37	SK-59	1	礫石斧	砂岩	6.18	3.66	1.84	54.60		
												VI	38	U6-75	20	礫石斧	安山岩	4.55	3.82	1.02	25.70		
												VI	39	U7-79	9	礫石斧	ホルンフェルス	5.98	4.12	1.33	40.00		



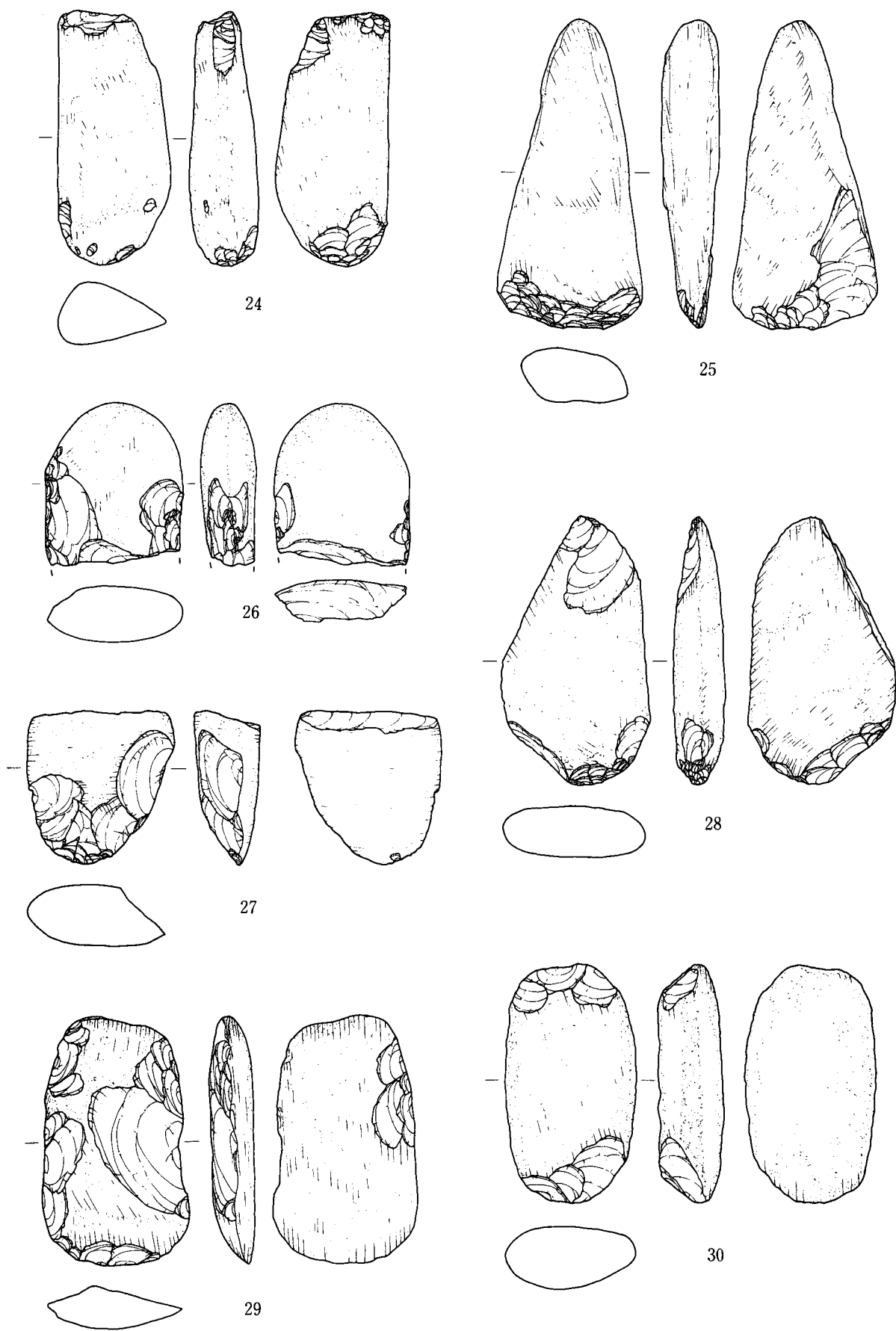
第117图 VI区出土石器(1)



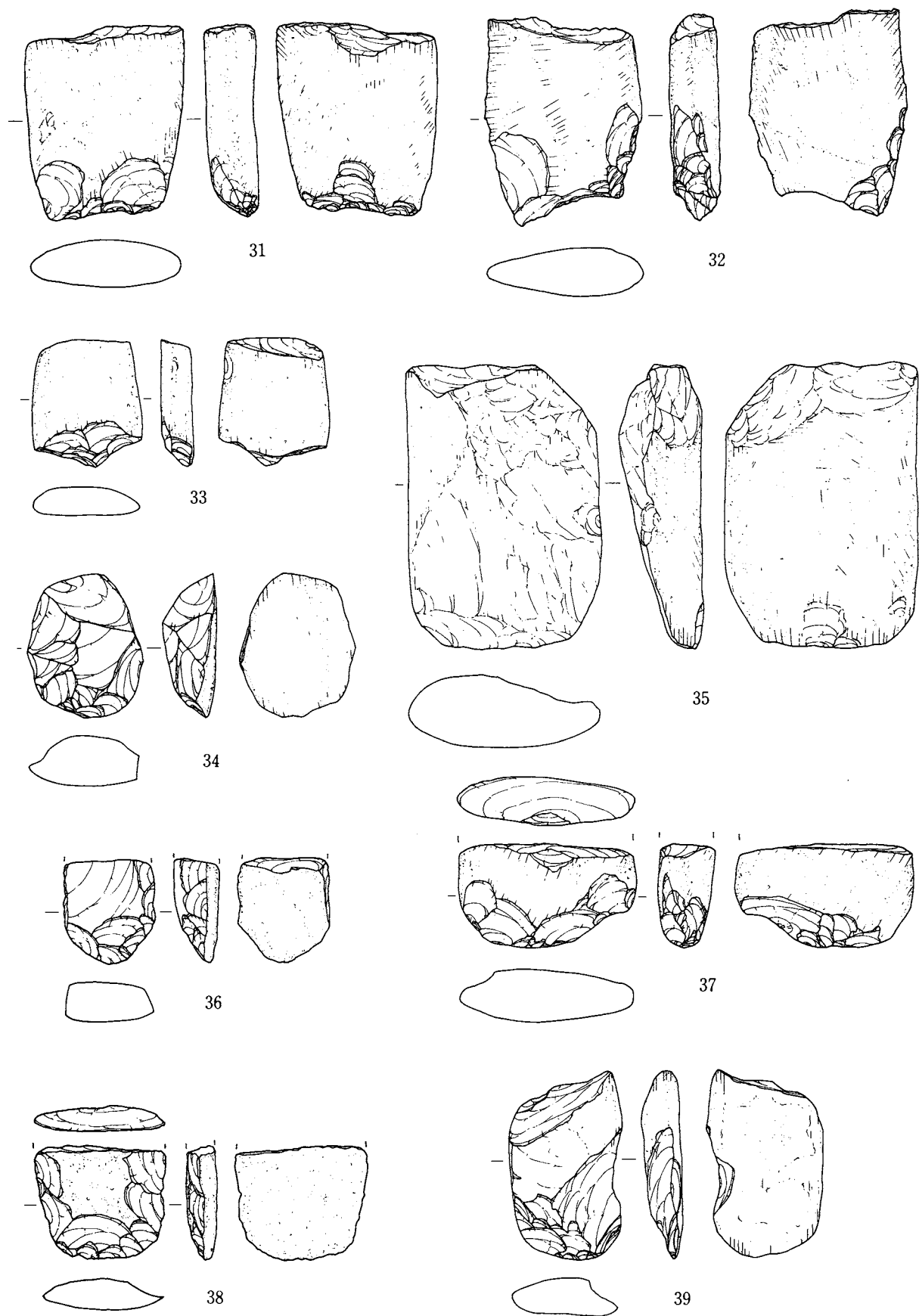
第118图 VI区出土石器(2)



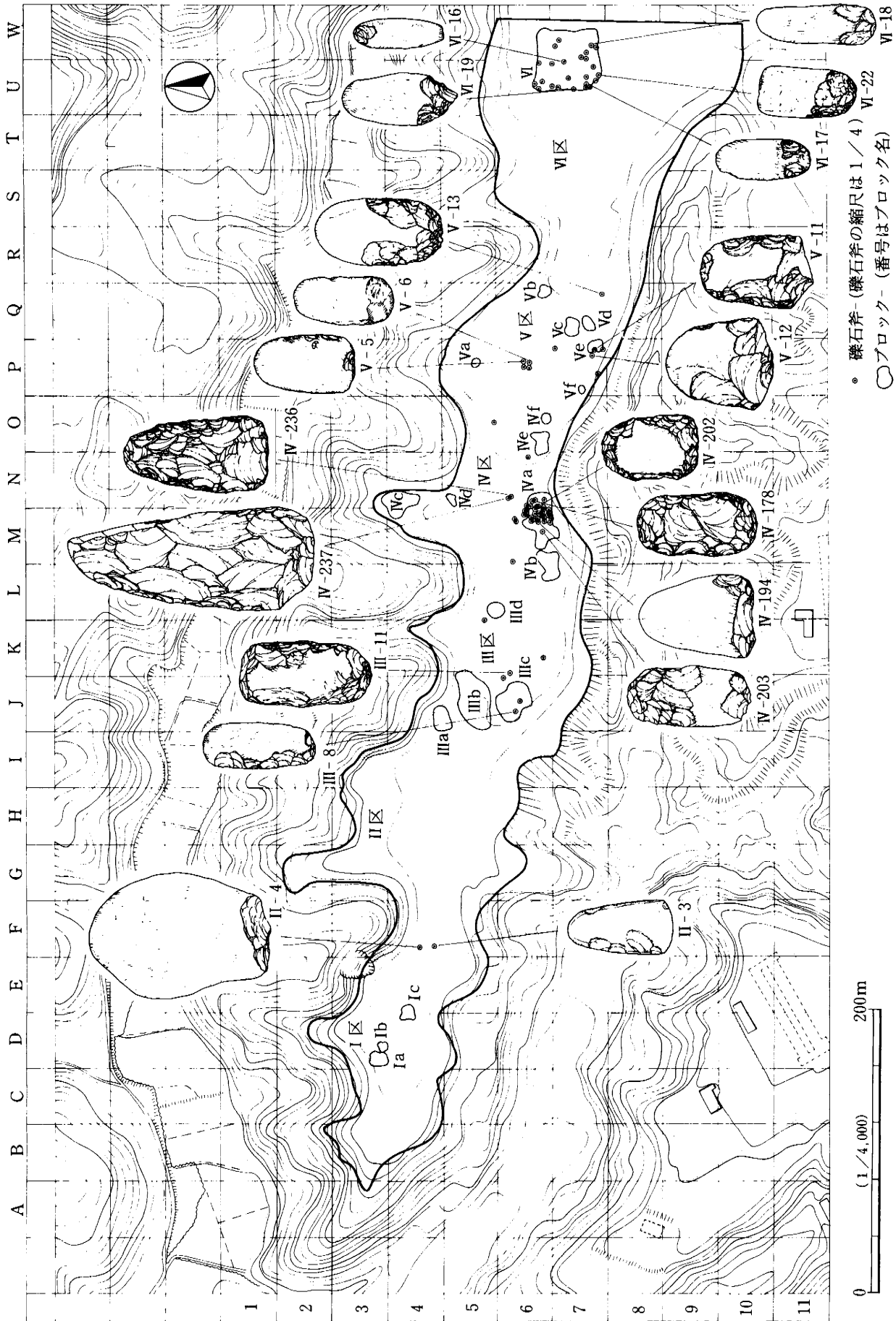
第119图 VI区出土石器(3)



第120图 VI区出土石器(4)



第121图 VI区出土石器(5)



● 礫石斧 (礫石斧の縮尺は 1/4)
○ ブロック (番号はブロック名)

第122図 礫石斧の分布 (1/4,000)

3 礫群

(1) 分布状況 (第123図)

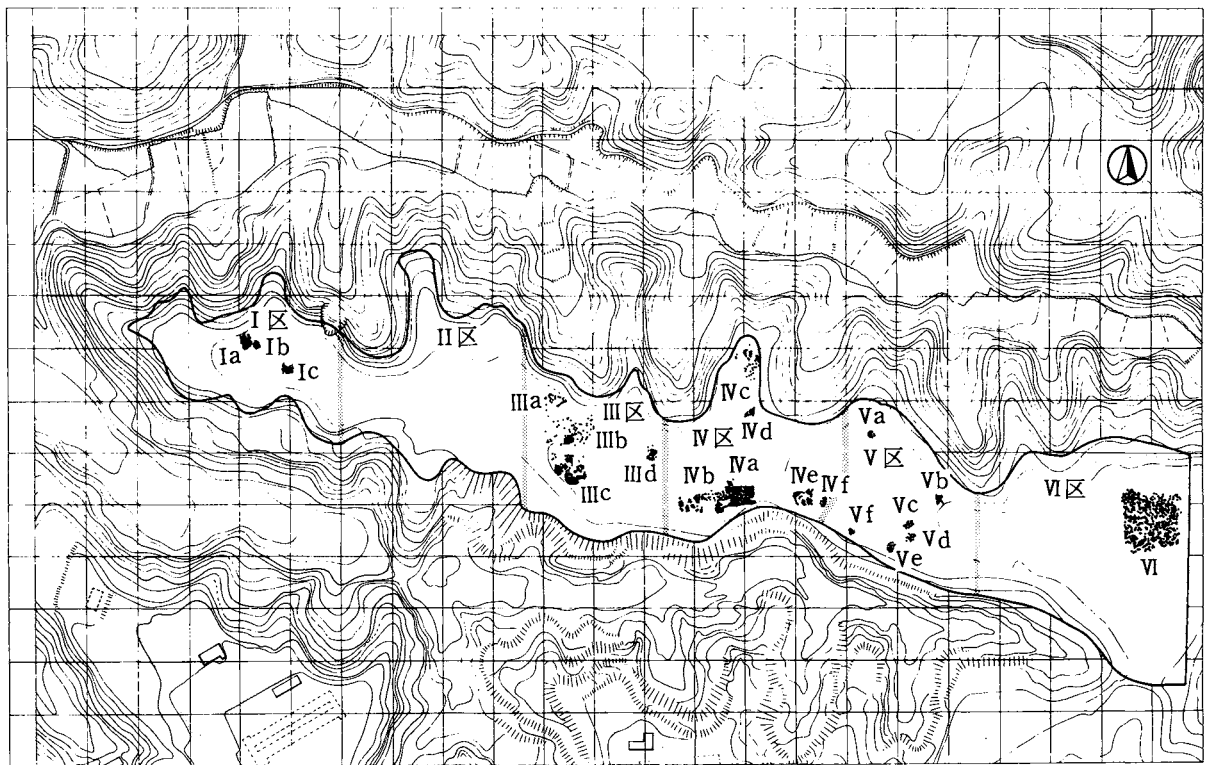
礫群は、II区を除く調査区全体から検出されている。これらはIIc層から出土していることや、縄文土器と伴出していることなどから、縄文時代に属するものであると考えられる。これらの礫群は、幾つかの明確なまとまりを持って出土していることから、それらをI～VI区の中でそれぞれIaブロック、Ibブロック、IIIcブロック・・・といったように呼称し、その他の遺構、土器、石器との分布の関係を併せて図示することにする。なお、土器、遺構は縄文時代に属するものについて時期を区別せずに示している。

I区 (第124・125図, 第8表, 図版11)

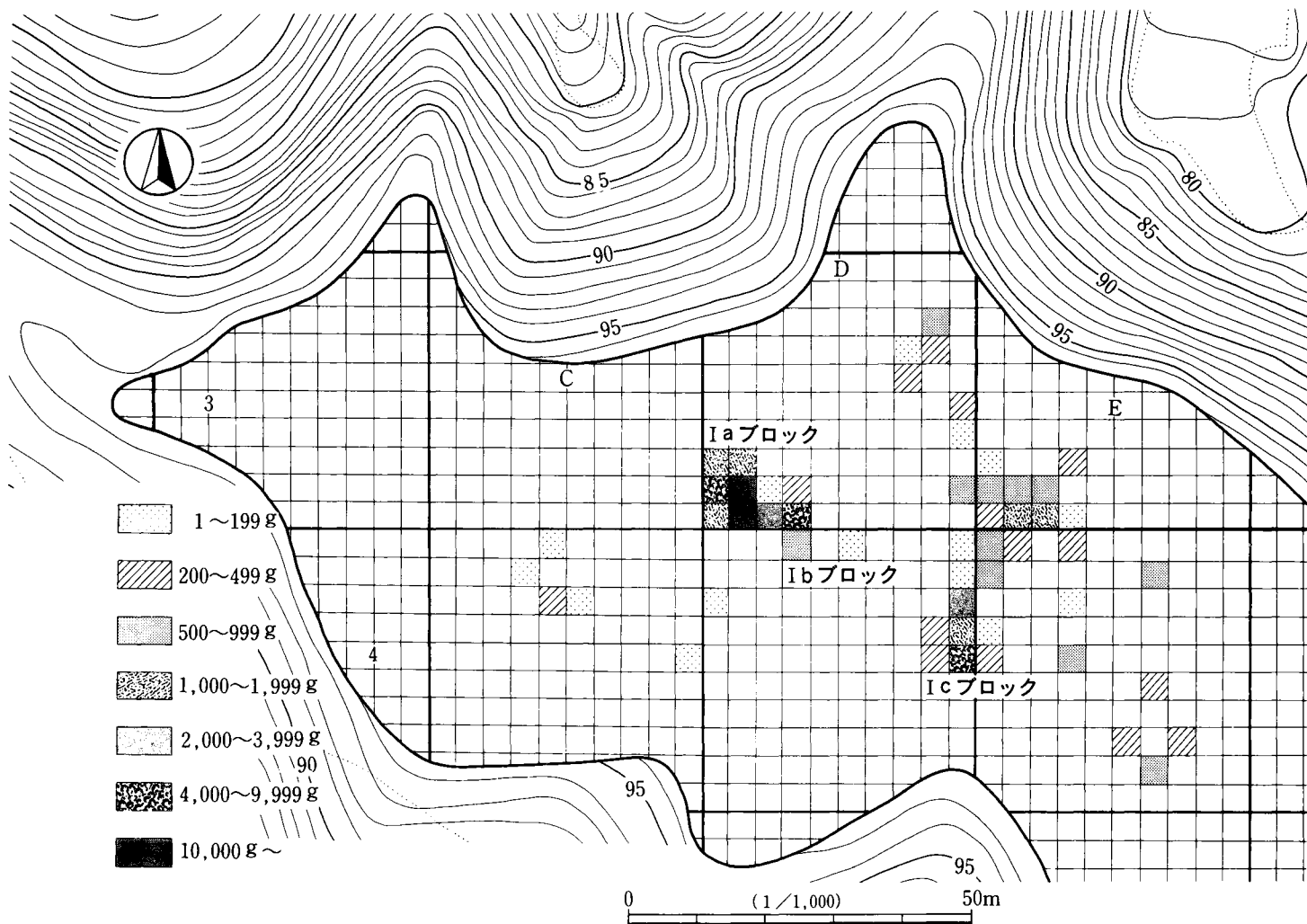
Ia～Icの3ブロックが検出されている。分布範囲はIaが最も大きく、Icが小さい。Iaには夏島式土器が、Icには加曾利E式土器が伴出している。Ibからは土器の出土が見られないが、Iaに隣接することから、同時期のものであると考えられる。

II区 (第126図, 第9表)

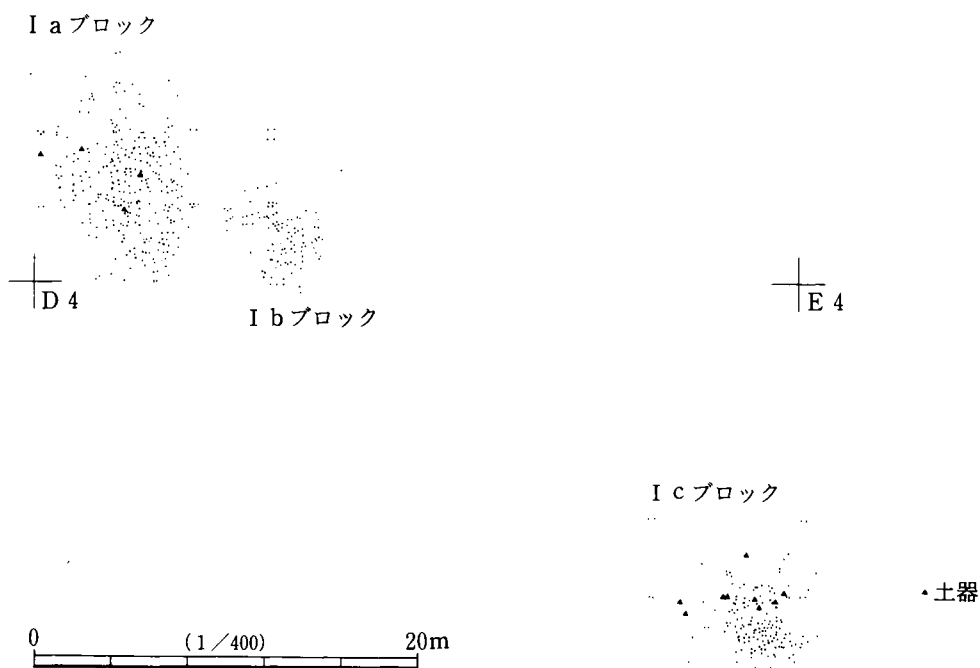
明確な集中地点は確認されなかったが、H3-72, H3-97, H5-10に小さな集中が見られる。分布が散漫だが、集中地点が存在した可能性がある。



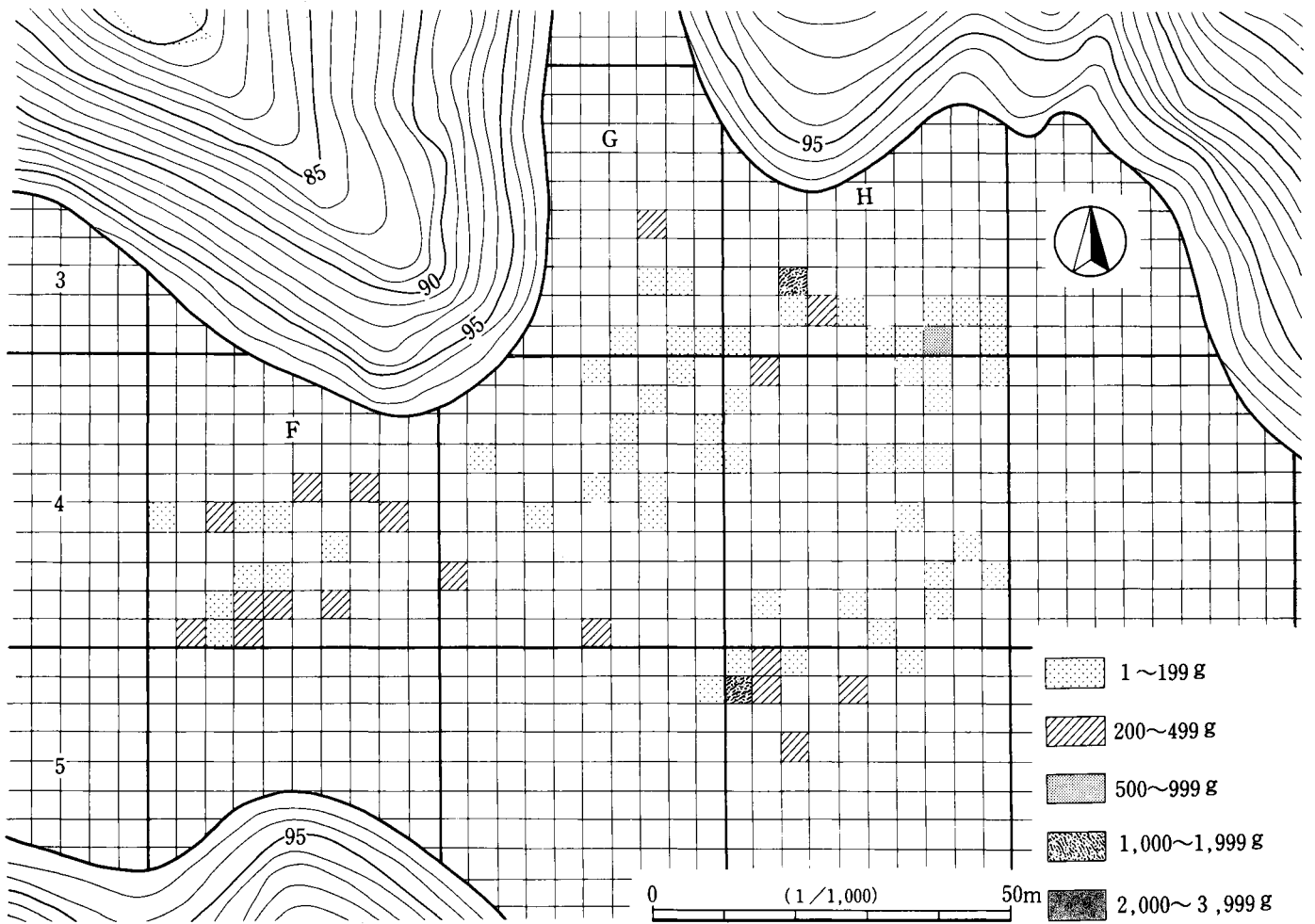
第123図 礫の分布 (1/6,000)



第124図 I区礫グリッド別重量分布図



第125図 I区遺物出土状況 (1/400) [ドット：礫]



第126図 II区礫グリッド別重量分布図

第8表 I区礫属性表--1

石材		完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化	表面赤化	表面非赤化	表面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	94	24	159	24	25	14	340	16.97%
	重量	6,947	726	10,573	888	952	405	20,491	26.34%
	重量平均	74	30	66	37	38	29	60	
ホルンフェルス	個数	7	3	4	0	0	1	15	0.75%
	重量	1,506	910	490	0	0	291	3,197	4.11%
	重量平均	215	303	123	0	0	291	213	
安山岩	個数	1	0	1	0	0	0	2	0.10%
	重量	200	0	319	0	0	0	519	0.67%
	重量平均	200	0	319	0	0	0	260	
凝灰岩	個数	1	0	0	0	0	0	1	0.05%
	重量	115	0	0	0	0	0	115	0.15%
	重量平均	115	0	0	0	0	0	115	
玉髓	個数	1	0	0	0	0	0	1	0.05%
	重量	26	0	0	0	0	0	26	0.03%
	重量平均	26	0	0	0	0	0	26	
砂岩	個数	46	8	168	23	1	5	251	12.52%
	重量	2,208	2,121	10,239	1,939	63	365	16,935	21.77%
	重量平均	48	265	61	84	63	73	67	
泥岩	個数	0	0	3	0	0	0	3	0.15%
	重量	0	0	9	0	0	0	9	0.01%
	重量平均	0	0	3	0	0	0	3	
頁岩	個数	0	0	1	0	0	0	1	0.05%
	重量	0	0	6	0	0	0	6	0.01%
	重量平均	0	0	6	0	0	0	6	
流紋岩	個数	152	14	221	945	50	8	1,390	69.36%
	重量	10,795	1,452	17,984	5,194	791	269	36,485	46.91%
	重量平均	71	104	81	5	16	34	26	
合計	個数	302	49	557	992	76	28	2,004	100.00%
	重量	21,797	5,209	39,620	8,021	1,806	1,330	77,783	100.00%
	重量平均	72	106	71	8	24	48	39	
組成比	個数比	15.1%	2.4%	27.8%	49.5%	3.8%	1.4%	100.0%	
	重量比	28.0%	6.7%	50.9%	10.3%	2.3%	1.7%	100.0%	

I aブロック

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化	表面赤化	表面非赤化	表面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	17	5	48	9	1	2	82	21.52%
	重量	2,410	163	3,903	203	164	42	6,885	17.72%
	重量平均	142	33	81	23	164	21	84	
ホルンフェルス	個数	2	0	3	0	0	0	5	1.31%
	重量	718	0	481	0	0	0	1,199	3.09%
	重量平均	359	0	160	0	0	0	240	
砂岩	個数	10	4	74	11	0	3	102	26.77%
	重量	1,401	582	7,544	1,080	0	251	10,858	27.94%
	重量平均	140	146	102	98	0	84	106	
流紋岩	個数	21	4	102	50	11	4	192	50.39%
	重量	5,003	464	11,240	2,555	457	202	19,921	51.26%
	重量平均	238	116	110	51	42	51	104	
合計	個数	50	13	227	70	12	9	381	100.00%
	重量	9,532	1,209	23,168	3,838	621	495	38,863	100.00%
	重量平均	191	93	102	55	52	55	102	
組成比	個数比	13.1%	3.4%	59.6%	18.4%	3.1%	2.4%	100.0%	
	重量比	24.5%	3.1%	59.6%	9.9%	1.6%	1.3%	100.0%	

I bブロック

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化	表面赤化	表面非赤化	表面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	11	3	6	6	3	0	29	20.71%
	重量	1,583	159	530	312	103	0	2,687	31.19%
	重量平均	144	53	88	52	34	0	93	
ホルンフェルス	個数	2	0	0	0	0	1	3	2.14%
	重量	426	0	0	0	0	291	717	8.32%
	重量平均	213	0	0	0	0	291	239	
安山岩	個数	1	0	0	0	0	0	1	0.71%
	重量	200	0	0	0	0	0	200	2.32%
	重量平均	200	0	0	0	0	0	200	
砂岩	個数	0	0	1	0	0	0	1	0.71%
	重量	0	0	40	0	0	0	40	0.46%
	重量平均	0	0	40	0	0	0	40	
流紋岩	個数	12	3	19	38	33	1	106	75.71%
	重量	1,731	409	1,966	851	0	14	4,971	57.70%
	重量平均	144	136	103	22	0	14	47	
合計	個数	26	6	26	44	36	2	140	100.00%
	重量	3,940	568	2,536	1,163	103	305	8,615	100.00%
	重量平均	152	95	98	26	3	153	62	
組成比	個数比	18.6%	4.3%	18.6%	31.4%	25.7%	1.4%	100.0%	
	重量比	45.7%	6.6%	29.4%	13.5%	1.2%	3.5%	100.0%	

第8表-2

Icブロック

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	7	3	71	5	19	4	109	52.15%
	重量	733	249	3,886	192	627	41	5,728	53.90%
	重量平均	105	83	55	38	33	10	53	
砂岩	個数	0	0	17	2	0	1	20	9.57%
	重量	0	0	761	152	0	62	975	9.17%
	重量平均	0	0	45	76	0	62	49	
流紋岩	個数	4	2	41	28	5	0	80	38.28%
	重量	381	305	2,302	696	240	0	3,924	36.92%
	重量平均	95	153	56	25	48	0	49	
合計	個数	11	5	129	35	24	5	209	100.00%
	重量	1,114	554	6,949	1,040	867	103	10,627	100.00%
	重量平均	101	111	54	30	36	21	51	
組成比	個数比	5.3%	2.4%	61.7%	16.7%	11.5%	2.4%	100.0%	
	重量比	10.5%	5.2%	65.4%	9.8%	8.2%	1.0%	100.0%	

I区ブロック外

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	59	13	34	4	2	8	6,390	84.70%
	重量	2,221	155	2,254	181	58	322	5,191	26.38%
	重量平均	38	12	66	45	29	40	1	
ホルン フェルス	個数	3	3	1	0	0	0	7	0.09%
	重量	362	910	9	0	0	0	1,281	6.51%
	重量平均	121	303	9	0	0	0	183	
安山岩	個数	0	0	1	0	0	0	1	0.01%
	重量	0	0	319	0	0	0	319	1.62%
	重量平均	0	0	319	0	0	0	319	
凝灰岩	個数	1	0	0	0	0	0	1	0.01%
	重量	115	0	0	0	0	0	115	0.58%
	重量平均	115	0	0	0	0	0	115	
玉髓	個数	1	0	0	0	0	0	1	0.01%
	重量	26	0	0	0	0	0	26	0.13%
	重量平均	26	0	0	0	0	0	26	
砂岩	個数	36	4	76	10	1	1	128	1.70%
	重量	807	1,539	1,894	707	63	52	5,062	25.72%
	重量平均	22	385	25	71	63	52	40	
泥岩	個数	0	0	3	0	0	0	3	0.04%
	重量	0	0	9	0	0	0	9	0.05%
	重量平均	0	0	3	0	0	0	3	
頁岩	個数	0	0	1	0	0	0	1	0.01%
	重量	0	0	6	0	0	0	6	0.03%
	重量平均	0	0	6	0	0	0	6	
流紋岩	個数	115	5	59	829	1	3	1,012	13.41%
	重量	3,680	274	2,476	1,092	94	53	7,669	38.97%
	重量平均	32	55	42	1	94	18	8	
合計	個数	215	25	175	843	4	12	7,544	100.00%
	重量	7,211	2,878	6,967	1,980	215	427	19,678	99.98%
	重量平均	34	115	40	2	54	36	3	
組成比	個数比	2.8%	0.3%	2.3%	11.2%	0.1%	0.2%	100.0%	
	重量比	36.6%	14.6%	35.4%	10.1%	1.1%	2.2%	100.0%	

第9表 II区礫属性表

II区

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	20	28	6	11	1	3	69	22.48%
	重量	844	1,015	374	607	45	52	2,937	18.26%
	重量平均	42	36	62	55	45	17	43	
ホルン フェルス	個数	0	2	0	0	0	3	5	1.63%
	重量	0	1,060	0	0	0	405	1,465	9.11%
	重量平均	0	530	0	0	0	135	293	
メノウ	個数	0	1	0	0	0	2	3	0.98%
	重量	0	22	0	0	0	12	34	0.21%
	重量平均	0	22	0	0	0	6	11	
安山岩	個数	1	0	1	0	0	0	2	0.65%
	重量	31	0	16	0	0	0	47	0.29%
	重量平均	31	0	16	0	0	0	24	
凝灰岩	個数	1	0	1	0	0	0	2	0.65%
	重量	6	0	2	0	0	0	8	0.05%
	重量平均	6	0	2	0	0	0	4	
砂岩	個数	8	8	26	6	4	8	60	19.54%
	重量	593	1,322	936	167	303	137	3,458	21.50%
	重量平均	74	165	36	28	76	17	58	
泥岩	個数	0	0	3	0	0	0	3	0.98%
	重量	0	0	73	0	0	0	73	0.45%
	重量平均	0	0	24	0	0	0	24	
流紋岩	個数	36	15	27	80	0	5	163	53.09%
	重量	1,912	3,809	1,253	1,016	0	75	8,065	50.13%
	重量平均	53	254	46	13	0	15	49	
合計	個数	66	54	64	97	5	21	307	100.00%
	重量	3,386	7,228	2,654	1,790	348	681	16,087	100.00%
	重量平均	51	134	41	18	70	32	52	
組成比	個数比	21.5%	17.6%	20.8%	31.6%	1.6%	6.8%	100.0%	
	重量比	21.0%	44.9%	16.5%	11.1%	2.2%	4.2%	100.0%	

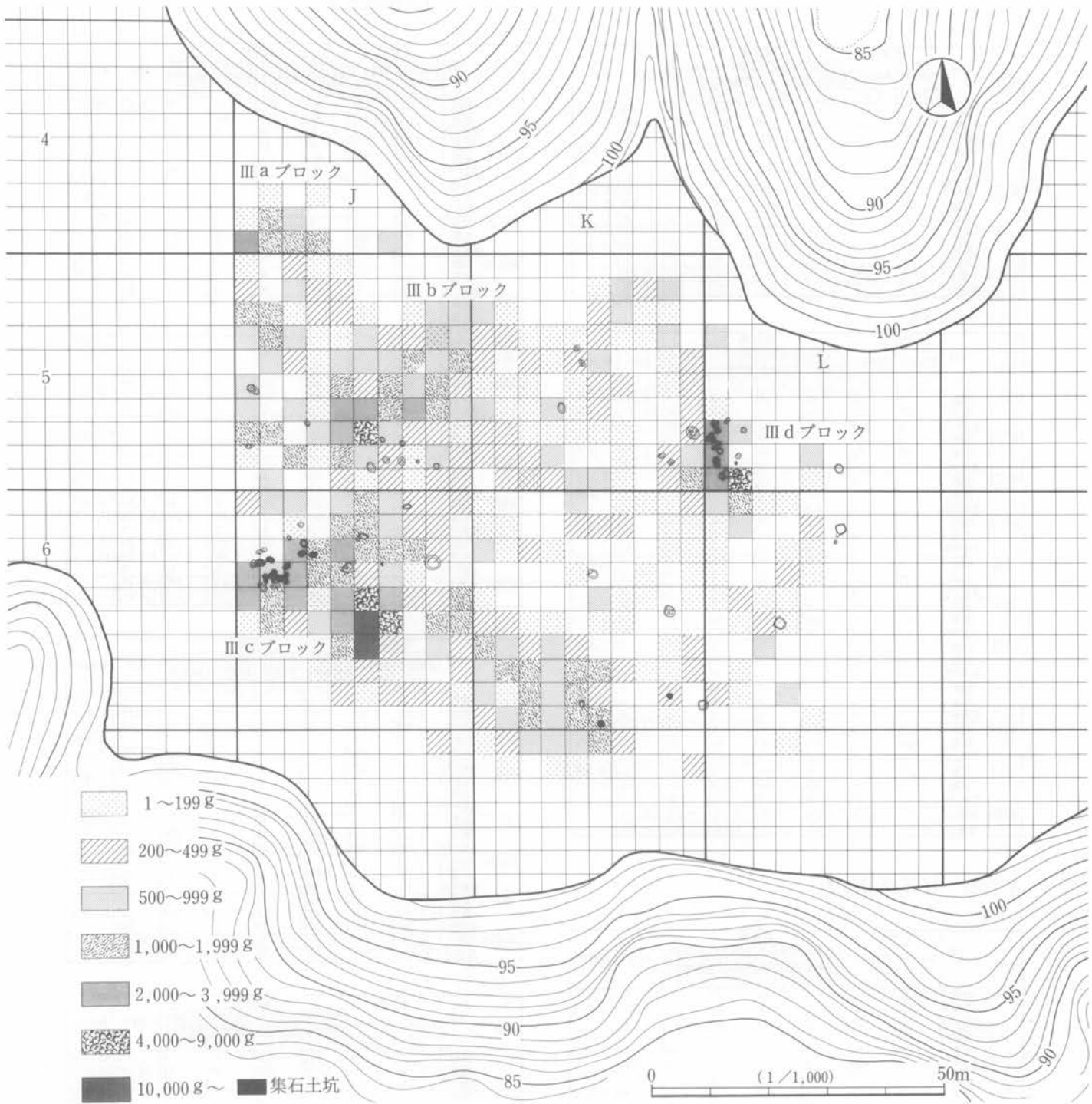
第10表 III区礫属性表-1

III区全体

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	292	139	550	761	91	46	1,879	1692.79%
	重量	27,615	9,894	29,221	12,090	940	1,171	80,931	3.70%
	重量平均	95	71	53	16	10	25	43	
ホルン フェルス	個数	24	13	48	12	1	16	114	2.86%
	重量	3,060	2,281	5,494	757	45	1,039	12,676	0.58%
	重量平均	128	175	114	63	45	65	111	
メノウ	個数	0	0	0	0	0	2	2	0.01%
	重量	0	0	0	0	0	15	15	0.00%
	重量平均	0	0	0	0	0	8	8	
安山岩	個数	10	3	28	1	1	10	53	0.19%
	重量	917	638	2,491	11	51	564	4,672	0.21%
	重量平均	92	213	89	11	51	56	88	
凝灰岩	個数	3	1	1	1	0	0	6	0.02%
	重量	415	37	175	36	0	0	663	0.03%
	重量平均	138	37	175	36	0	0	111	
玉髓	個数	5	1	0	0	0	0	6	0.02%
	重量	58	16	0	0	0	0	74	0.00%
	重量平均	12	16	0	0	0	0	12	
珪質 頁岩	個数	0	0	1	0	0	0	1	0.00%
	重量	0	0	345	0	0	0	345	0.02%
	重量平均	0	0	345	0	0	0	345	
砂岩	個数	160	47	513	308	28	40	1,096	3.95%
	重量	19,375	5,359	57,626	18,956	1,601	1,968	104,885	4.79%
	重量平均	121	114	112	62	57	49	96	
泥岩	個数	0	0	3	0	0	0	3	0.01%
	重量	0	0	54	0	0	0	54	0.00%
	重量平均	0	0	18	0	0	0	18	
頁岩	個数	0	0	1	1	0	0	2	0.01%
	重量	0	0	130	43	0	0	173	0.01%
	重量平均	0	0	130	43	0	0	87	
流紋岩	個数	405	72	1,218	611	93	89	2,488	8.98%
	重量	65,668	17,281	91,854	42,327	2,408	4,760	224,298	10.25%
	重量平均	162	240	75	69	26	53	90	
合計	個数	899	276	2,363	1,695	214	203	5,650	20.39%
	重量	117,108	35,506	187,390	74,220	5,045	9,517	428,786	19.60%
	重量平均	130	129	79	44	24	47	76	
組成比	個数比	3.2%	1.0%	8.5%	6.1%	0.8%	0.7%	20.4%	
	重量比	5.4%	1.6%	8.6%	3.4%	0.2%	0.4%	19.6%	

IIIaブロック

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	13	8	14	1	2	2	40	40.00%
	重量	2,189	1,016	872	21	36	10	4,144	25.82%
	重量平均	168	127	62	21	18	5	104	
ホルン フェルス	個数	2	3	0	0	0	1	6	6.00%
	重量	174	893	0	0	0	139	1,206	7.51%
	重量平均	87	298	0	0	0	139	201	
玉髓	個数	0	1	0	0	0	0	1	1.00%
	重量	0	16	0	0	0	0	16	0.10%
	重量平均	0	16	0	0	0	0	16	
砂岩	個数	7	5	14	13	0	2	41	41.00%
	重量	1,294	1,343	1,867	1,590	0	256	6,350	39.57%
	重量平均	185	269	133	122	0	128	155	
流紋岩	個数	7	0	4	0	0	1	12	12.00%
	重量	2,320	0	1,998	0	0	14	4,332	26



第127図 III区礫グリッド別重量分布図

III区 (第127~129図, 第10表, 図版11)

III a~III dの4つのブロックが検出されている。III aブロックはこれらの中で最も規模が小さく、分布も散漫であるのに対し、III cブロックは規模が大きい。III aブロックは、田戸上層式の分布と重複するが、井草I式土器の分布も周辺にわずかだが見られる。比較的小規模で、その他の遺構などは伴わない。III bブロックは田戸上層式土器の分布と弱い相関を示す。円形の皿状の土坑群を伴っており、礫の集中の中心



Ⅲ a ブロック

J 5

K 5

Ⅲ b ブロック

183

182

218

173

174

150

180

177

175

178

J 5
J 6

K 5
K 6

Ⅲ c ブロック

242

207

206

205

196

195

208

209

204

201

200

219

202

192

199

190

198

210

191

193

196

195

172

203

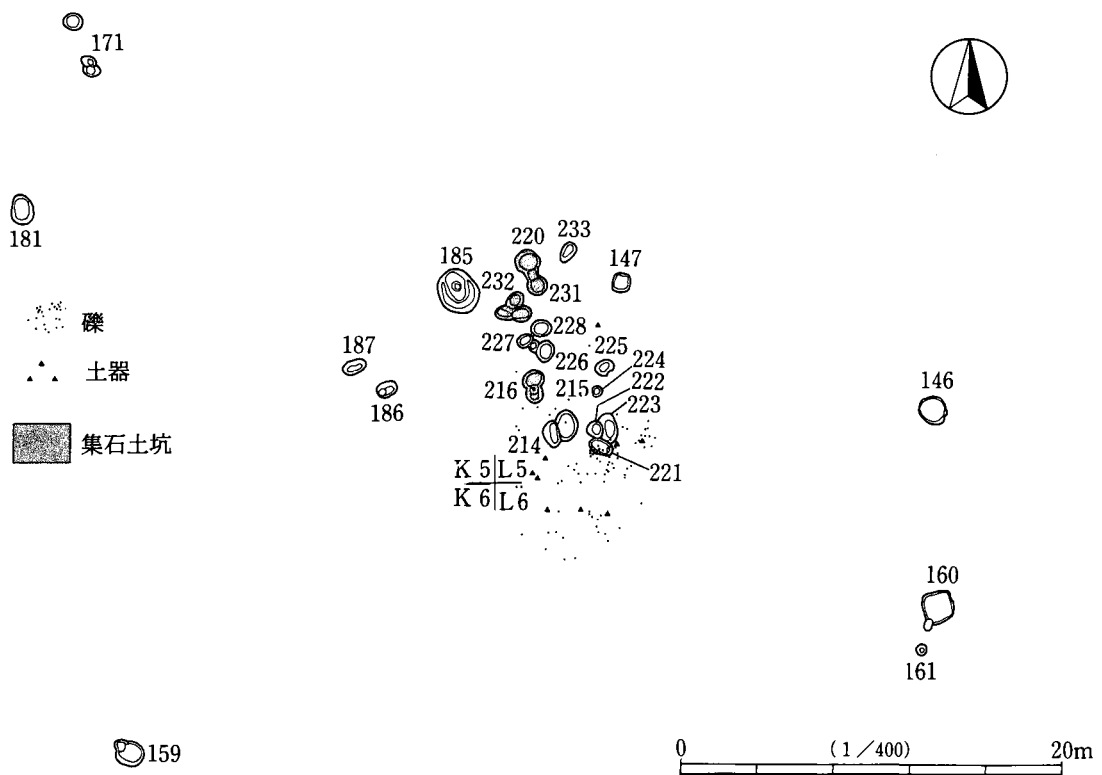
168

集石土坑

土器

0 (1/400) 20m

第128図 Ⅲ区西側遺物出土状況 (1/400) [ドット：礫]



第129図 III区東側遺物出土状況

第10表-2 IIIcブロック

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化	表面赤化	表面非赤化	表面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数 重量 重量平均	124 9,397 76	78 3,669 47	315 14,904 47	303 9,468 31	40 697 17	29 742 26	889 38,877 44	28.28% 17.20%
安山岩	個数 重量 重量平均	0 0 0	0 0 0	3 315 105	0 0 0	0 0 0	0 0 0	3 315 105	2.03% 2.31%
珪質頁岩	個数 重量 重量平均	0 0 0	0 0 0	1 345 345	0 0 0	0 0 0	0 0 0	1 345 345	0.68% 2.53%
砂岩	個数 重量 重量平均	4 712 178	0 0 0	15 1,571 105	0 0 0	0 0 0	0 0 0	19 2,283 120	12.84% 16.71%
流紋岩	個数 重量 重量平均	19 3,525 186	0 0 0	97 5,866 60	0 0 0	0 0 0	0 0 0	116 9,391 81	78.38% 68.75%
合計	個数 重量 重量平均	25 4,626 185	0 0 0	123 9,033 73	0 0 0	0 0 0	0 0 0	148 13,659 92	100.00% 100.00%
組成比	個数比 重量比	16.9% 33.9%	0.0% 0.0%	83.1% 66.1%	0.0% 0.0%	0.0% 0.0%	0.0% 0.0%	100.0% 100.0%	

S K-190 土壌 [IIIcブロック内]

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化	表面赤化	表面非赤化	表面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数 重量 重量平均	2 389 195	0 0 0	7 936 134	0 0 0	0 0 0	0 0 0	9 1,325 147	6.08% 9.70%
安山岩	個数 重量 重量平均	0 0 0	0 0 0	3 315 105	0 0 0	0 0 0	0 0 0	3 315 105	2.03% 2.31%
珪質頁岩	個数 重量 重量平均	0 0 0	0 0 0	1 345 345	0 0 0	0 0 0	0 0 0	1 345 345	0.68% 2.53%
砂岩	個数 重量 重量平均	4 712 178	0 0 0	15 1,571 105	0 0 0	0 0 0	0 0 0	19 2,283 120	12.84% 16.71%
流紋岩	個数 重量 重量平均	19 3,525 186	0 0 0	97 5,866 60	0 0 0	0 0 0	0 0 0	116 9,391 81	78.38% 68.75%
合計	個数 重量 重量平均	25 4,626 185	0 0 0	123 9,033 73	0 0 0	0 0 0	0 0 0	148 13,659 92	100.00% 100.00%
組成比	個数比 重量比	16.9% 33.9%	0.0% 0.0%	83.1% 66.1%	0.0% 0.0%	0.0% 0.0%	0.0% 0.0%	100.0% 100.0%	

S K-191 土壌 [IIIcブロック内]

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化	表面赤化	表面非赤化	表面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数 重量 重量平均	1 92 92	0 0 0	1 667 667	0 0 0	0 0 0	0 0 0	2 759 380	0.83% 3.23%
ホルンフェルス	個数 重量 重量平均	2 232 116	0 0 0	6 1,066 178	0 0 0	0 0 0	0 0 0	8 1,298 162	3.32% 5.53%
安山岩	個数 重量 重量平均	2 236 118	0 0 0	4 383 96	0 0 0	0 0 0	0 0 0	6 619 103	2.49% 2.64%
砂岩	個数 重量 重量平均	7 1,108 158	0 0 0	29 2,589 89	0 0 0	0 0 0	0 0 0	36 3,697 103	14.94% 15.74%
流紋岩	個数 重量 重量平均	38 6,061 160	0 0 0	151 11,049 73	0 0 0	0 0 0	0 0 0	189 17,110 91	78.42% 72.86%
合計	個数 重量 重量平均	50 7,729 155	0 0 0	191 15,754 82	0 0 0	0 0 0	0 0 0	241 23,483 97	100.00% 100.00%
組成比	個数比 重量比	20.7% 32.9%	0.0% 0.0%	79.3% 67.1%	0.0% 0.0%	0.0% 0.0%	0.0% 0.0%	100.0% 100.0%	

第10表-3

III d ブロック

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数 重量 重量平均	33 5,078 154	5 754 151	37 3,576 97	1 39 39	0 0 0	5 190 38	81 9,637 119	22.75% 19.62%
ホルン フェルス	個数 重量 重量平均	7 1,011 144	1 53 53	3 197 66	0 0 0	0 0 0	0 0 0	11 1,261 115	3.09% 2.57%
安山岩	個数 重量 重量平均	3 326 109	0 0 0	3 420 140	0 0 0	0 0 0	0 0 0	6 746 124	1.69% 1.52%
砂岩	個数 重量 重量平均	18 3,700 206	2 173 87	72 10,158 141	5 548 110	1 135 135	0 0 0	98 14,714 150	27.53% 29.95%
頁岩	個数 重量 重量平均	0 0 0	0 0 0	0 0 0	1 43 43	0 0 0	0 0 0	1 43 43	0.28% 0.09%
流紋岩	個数 重量 重量平均	62 12,512 202	0 0 0	97 10,213 105	0 0 0	0 0 0	0 0 0	159 22,725 143	44.66% 46.26%
合計	個数 重量 重量平均	123 22,627 184	8 980 123	212 24,564 116	7 630 90	1 135 135	5 190 38	356 49,126 138	100.00% 100.00%
組成比	個数比 重量比	34.6% 46.1%	2.2% 2.0%	59.6% 50.0%	2.0% 1.3%	0.3% 0.3%	1.4% 0.4%	100.0% 100.0%	

SK-216 土塊 [III d ブロック内]

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数 重量 重量平均	8 1,124 141	0 0 0	10 1,685 169	0 0 0	0 0 0	0 0 0	18 2,809 156	13.53% 10.83%
ホルン フェルス	個数 重量 重量平均	2 295 148	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0 0 0	2 295 148	1.50% 1.14%
安山岩	個数 重量 重量平均	2 263 132	0 0 0	3 420 140	0 0 0	0 0 0	0 0 0	5 683 137	3.76% 2.63%
砂岩	個数 重量 重量平均	8 1,545 193	0 0 0	24 5,350 223	0 0 0	0 0 0	0 0 0	32 6,895 215	24.06% 26.57%
流紋岩	個数 重量 重量平均	39 7,659 196	0 0 0	37 7,606 206	0 0 0	0 0 0	0 0 0	76 15,265 201	57.14% 58.83%
合計	個数 重量 重量平均	59 10,886 185	0 0 0	74 15,061 204	0 0 0	0 0 0	0 0 0	133 25,947 195	100.00% 100.00%
組成比	個数比 重量比	44.4% 42.0%	0.0% 0.0%	55.6% 58.0%	0.0% 0.0%	0.0% 0.0%	0.0% 0.0%	100.0% 100.0%	

は土坑群の北西にある。III c ブロックもやはり、田戸上層式土器の分布と相関が強い。土坑群が J 6 グリッドの北西部分に位置しており、礫群は土坑群に伴う一群と、土坑群の南東側に集中する大きな一群とに分かれる。この大きな一群の南側には比較的まとまった井草 II 式土器の分布域が見られることから、この一群の一部は井草 II 式期に属する可能性もある。III d ブロックは、土坑群を伴っており、井草 II 式土器の分布が見られる。K 6 グリッド南西区に散漫ではあるが、比較的多量の礫が分布しており、田戸下層式土器の分布と一致する。また K 5 グリッド中央にも小さな集中が見られるが、田戸上層式土器が伴っている。

IV 区 (第130~133図, 第11表, 図版12,13)

IV a~IV f の 6 ブロックが確認されている。IV a, IV b, IV e, IV f ブロックは、南側に開口した谷の谷頭に分布しており、IV a と IV e の間にもほぼ切れ目なく礫が分布している。礫は谷頭から台地中央に向かって拡散するように分布し、所々に小規模な集中地点を形成している。

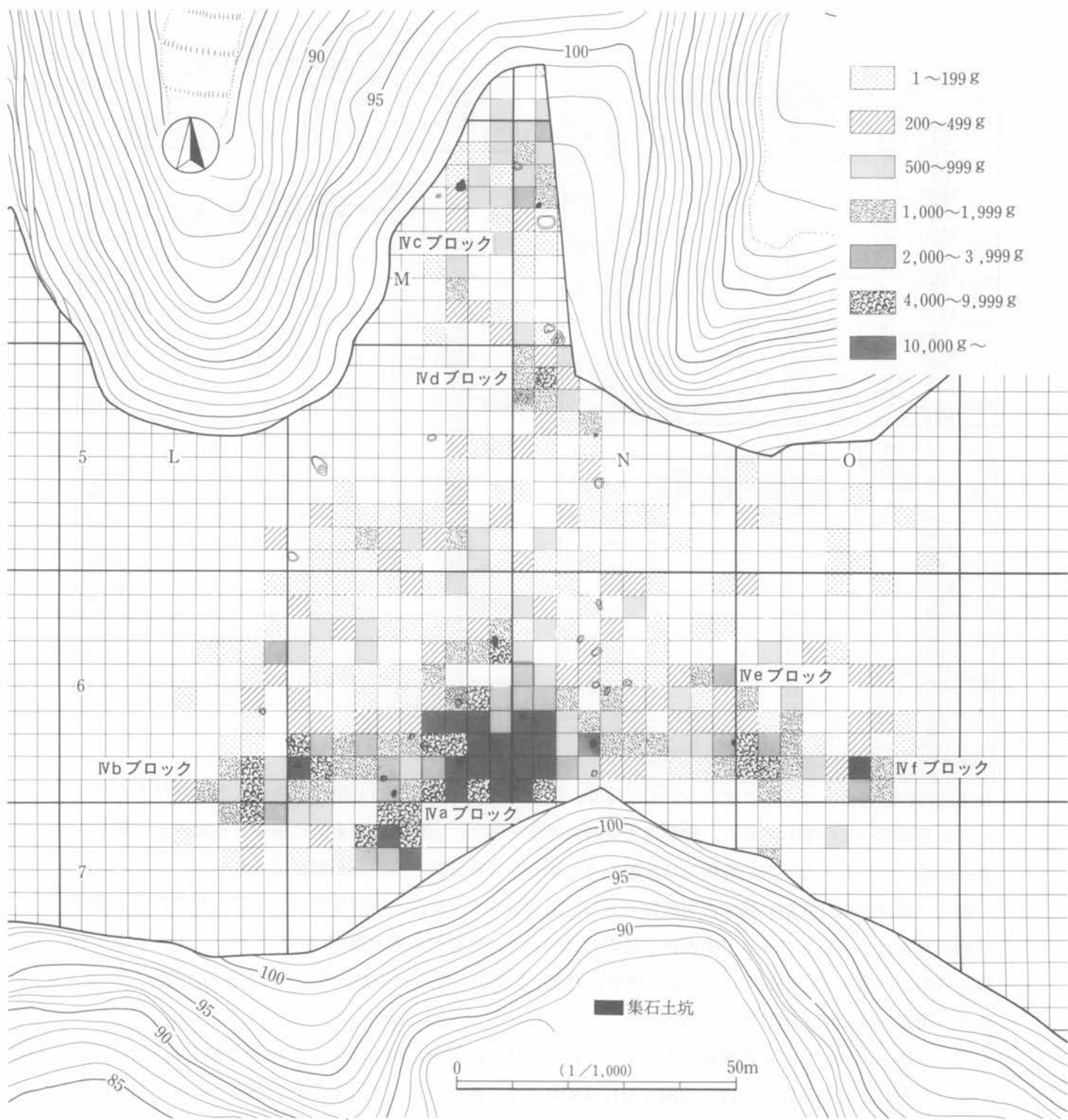
IV a ブロックは、無文土器、竹之内式土器、田戸上層式が集中して分布しており、撚糸文系土器の分布も見られる。IV a ブロックにはいくつかの小さな集中地点が見られる。特に SK-138 と SK-165 の間から N 7 ポイントにかけての範囲に直径約 2 m ほどの集石が十数か所確認することができ、周辺にも多くの礫が分布している。また、田戸上層式期に属する集石土坑 SK-165 の周辺にも礫が集中している。その他にも、SK-145 の南西にも礫の集中が見られる。これらの礫群は先に示したように幾つかの時期にまたがって形成されたものと考えられる。

III e ブロック

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
流紋岩	個数 重量 重量平均	23 4,013 174	6 2,969 495	27 2,276 84	8 923 115	0 0 0	0 0 0	64 10,181 159	100.00% 100.00%
組成比	個数比 重量比	35.9% 39.4%	9.4% 29.2%	42.2% 22.4%	12.5% 9.1%	0.0% 0.0%	0.0% 0.0%	100.0% 100.0%	

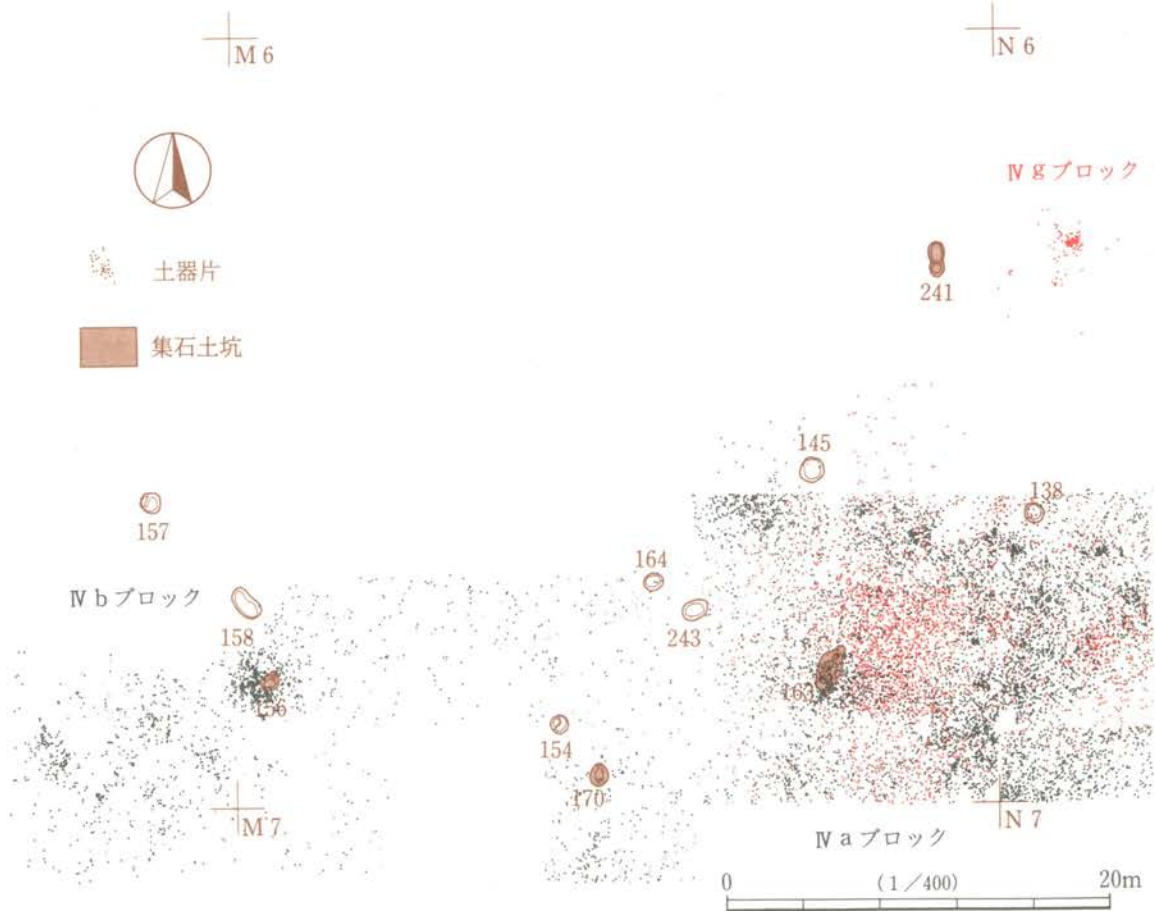
III 区ブロック外

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数 重量 重量平均	57 4,171 73	30 2,457 82	109 5,283 48	129 1,601 12	4 108 27	7 105 15	336 13,725 41	34.57% 21.40%
ホルン フェルス	個数 重量 重量平均	5 748 150	2 51 26	8 632 79	1 57 57	1 45 45	4 112 28	21 1,645 78	2.16% 2.57%
メノウ	個数 重量 重量平均	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0 0 0	1 4 4	1 4 4	0.10% 0.01%
安山岩	個数 重量 重量平均	3 199 66	0 0 0	10 788 79	1 11 11	2 0 0	2 12 6	16 1,010 63	1.65% 1.58%
凝灰岩	個数 重量 重量平均	1 348 348	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0 0 0	1 348 348	0.10% 0.54%
玉髓	個数 重量 重量平均	3 45 15	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0 0 0	3 45 15	0.31% 0.07%
砂岩	個数 重量 重量平均	28 2,951 105	9 1,133 126	82 6,826 83	39 3,169 81	9 547 61	12 725 60	179 15,351 86	18.42% 23.94%
泥岩	個数 重量 重量平均	0 0 0	0 0 0	2 30 15	0 0 0	0 0 0	0 0 0	2 30 15	0.21% 0.05%
頁岩	個数 重量 重量平均	0 0 0	0 0 0	1 130 130	0 0 0	0 0 0	0 0 0	1 130 130	0.10% 0.20%
流紋岩	個数 重量 重量平均	76 6,144 81	24 4,890 204	177 13,653 77	61 3,886 64	46 1,516 33	28 1,749 62	412 31,838 77	42.39% 49.65%
合計	個数 重量 重量平均	173 14,606 84	65 8,531 131	389 27,342 70	231 8,724 38	60 2,216 37	54 2,707 50	972 64,126 66	100.00% 100.00%
組成比	個数比 重量比	17.8% 22.8%	6.7% 13.3%	40.0% 42.6%	23.8% 13.6%	6.2% 3.5%	5.6% 4.2%	100.0% 100.0%	



第130図 IV区礫グリッド別重量分布図

IVbブロックは、集石土坑SK-156とその周辺に形成されており、縄文前期末葉の土器を伴っている。IVcブロックは、北側に細く突き出た瘦尾根上に位置している。小規模な土坑群を伴っている。縄文前期末葉の土器の分布と一致する。IVdブロックは、IVcよりもやや台地中央部に位置し、北側に土坑群を伴う。井草II式土器、竹之内式土器、田戸上層式土器が、この礫群に重なって分布している。また、南側に加曾利E式土器の分布している。小規模なブロックであることから、IVaのように重複していることは考



第131図 IV区南側遺物出土状況(1/400) [黒：礫、赤：黒曜石、セピア：土器]

第11表 IV区礫属性表-1

石材	分類	完形礫				破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 側面赤化	表面非赤化 側面赤化	表面赤化 側面赤化	表面非赤化 側面赤化	表面赤化 側面赤化	表面非赤化 側面赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d	II c	II d		
チャート	個数 重量 重量平均	969 59,669 62	72 2,772 39	1,865 83,963 45	155 7,645 49	49 2,029 41	31 1,125 36	3,141 157,203 50	24.49%	16.35%	
ホルン フェルス	個数 重量 重量平均	135 16,456 122	6 434 72	209 17,513 84	44 2,188 50	2 135 68	34 2,055 60	430 38,781 90	3.35%	4.03%	
メノウ	個数 重量 重量平均	0 0 0	0 0 0	0 0 0	1 2 2	0 0 0	0 0 0	1 2 2	0.01%	0.00%	
安山岩	個数 重量 重量平均	61 8,097 133	6 416 69	122 8,694 71	22 1,061 48	1 83 83	9 160 18	221 18,511 84	1.72%	1.93%	
凝灰岩	個数 重量 重量平均	0 0 0	0 0 0	5 1,292 258	0 0 0	0 0 0	1 36 36	6 1,328 221	0.05%	0.14%	
玉髄	個数 重量 重量平均	6 173 29	0 0 0	20 1,327 66	1 10 10	0 0 0	1 2 2	28 1,512 54	0.22%	0.16%	
砂岩	個数 重量 重量平均	427 43,772 103	19 3,207 169	1,669 132,156 79	119 9,714 82	24 710 30	53 2,115 40	2,311 191,674 83	18.02%	19.94%	
泥岩	個数 重量 重量平均	0 0 0	0 0 0	11 95 9	0 0 0	0 0 0	4 215 54	15 310 21	0.12%	0.03%	
頁岩	個数 重量 重量平均	1 149 149	0 0 0	33 687 21	1 9 9	0 0 0	0 0 0	35 845 24	0.27%	0.09%	
流紋岩	個数 重量 重量平均	1,763 217,276 123	12 2,482 207	4,542 303,436 67	253 24,014 95	40 2,505 63	26 1,338 51	6,636 551,051 83	51.75%	57.33%	
合計	個数 重量 重量平均	3,362 345,592 103	115 9,311 81	8,476 549,163 65	596 44,643 75	116 5,462 47	159 7,046 44	12,824 961,217 75	100.00%	100.00%	
組成比	個数比 重量比	26.2% 36.0%	0.9% 1.0%	66.1% 57.1%	4.6% 4.6%	0.9% 0.6%	1.2% 0.7%	100.0% 100.0%			

石材	分類	完形礫				破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 側面赤化	表面非赤化 側面赤化	表面赤化 側面赤化	表面非赤化 側面赤化	表面赤化 側面赤化	表面非赤化 側面赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d	II c	II d		
チャート	個数 重量 重量平均	588 40,059 68	32 612 19	1,429 58,271 41	69 3,548 51	25 1,508 60	11 529 48	2,154 104,527 49	25.23%	18.07%	
ホルン フェルス	個数 重量 重量平均	72 8,821 123	1 86 86	150 12,623 84	14 816 58	0 0 0	21 1,661 79	258 24,007 93	3.02%	4.15%	
安山岩	個数 重量 重量平均	40 5,482 137	4 217 54	73 4,641 64	10 365 37	1 83 83	6 57 10	134 10,845 81	1.57%	1.88%	
玉髄	個数 重量 重量平均	5 149 30	0 0 0	1 23 23	0 0 0	0 0 0	0 0 0	6 172 29	0.07%	0.03%	
砂岩	個数 重量 重量平均	222 24,125 109	8 590 74	1,189 84,536 71	60 4,642 77	21 480 23	15 549 37	1,515 114,922 76	17.74%	19.87%	
泥岩	個数 重量 重量平均	0 0 0	0 0 0	7 43 6	0 0 0	0 0 0	0 43 6	7 43 6	0.08%	0.01%	
頁岩	個数 重量 重量平均	0 0 0	0 0 0	3 229 76	0 0 0	0 0 0	0 0 0	3 229 76	0.04%	0.04%	
流紋岩	個数 重量 重量平均	992 113,367 114	4 640 160	3,275 193,195 59	146 14,493 99	31 1,548 50	14 389 28	4,462 323,632 73	52.25%	55.96%	
合計	個数 重量 重量平均	1,919 192,003 100	49 2,145 44	6,127 353,561 58	299 23,864 80	78 3,619 46	67 3,185 48	8,539 578,377 68	100.00%	100.00%	
組成比	個数比 重量比	22.5% 33.2%	0.6% 0.4%	71.8% 61.1%	3.5% 4.1%	0.9% 0.6%	0.8% 0.6%	100.0% 100.0%			



第132図 IV区北側遺物出土状況 (1/400) [黒：礫]

第11表-2

SK-163土壌 [IVaブロック内]

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化	表面赤化	表面非赤化	表面非赤化		
		IA	IB	IIa	IIb	IIc	IId		
チャート	個数	5	0	30	0	0	0	35	6.31%
	重量	392	0	1,036	0	0	0	1,428	3.11%
	重量平均	78	0	35	0	0	0	41	
ホルンフェルス	個数	9	0	8	0	0	0	17	3.06%
	重量	1,119	0	1,702	0	0	0	2,821	6.15%
	重量平均	124	0	213	0	0	0	166	
安山岩	個数	3	0	12	0	0	0	15	2.70%
	重量	441	0	1,099	0	0	0	1,540	3.36%
	重量平均	147	0	92	0	0	0	103	
砂岩	個数	8	0	81	0	0	0	89	16.04%
	重量	884	0	7,215	0	0	0	8,099	17.66%
	重量平均	111	0	89	0	0	0	91	
流紋岩	個数	81	0	291	11	16	0	399	71.89%
	重量	12,142	0	18,988	688	148	0	31,966	69.71%
	重量平均	150	0	65	63	9	0	80	
合計	個数	106	0	422	11	16	0	555	100.00%
	重量	14,978	0	30,040	688	148	0	45,854	100.00%
	重量平均	141	0	71	63	9	0	83	
組成比	個数比	19.1%	0.0%	76.0%	2.0%	2.9%	0.0%	100.0%	
	重量比	32.7%	0.0%	65.5%	1.5%	0.3%	0.0%	100.0%	

SK-241土壌 [IVaブロック内]

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化	表面赤化	表面非赤化	表面非赤化		
		IA	IB	IIa	IIb	IIc	IId		
チャート	個数	8	0	5	0	0	0	13	9.85%
	重量	1,274	0	560	0	0	0	1,834	10.82%
	重量平均	159	0	112	0	0	0	141	
ホルンフェルス	個数	1	0	0	0	0	0	1	0.76%
	重量	208	0	0	0	0	0	208	1.23%
	重量平均	208	0	0	0	0	0	208	
安山岩	個数	0	0	7	0	0	0	7	5.30%
	重量	0	0	199	0	0	0	199	1.17%
	重量平均	0	0	28	0	0	0	28	
砂岩	個数	15	1	18	0	0	0	34	25.76%
	重量	1,828	95	2,473	0	0	0	4,396	25.93%
	重量平均	122	95	137	0	0	0	129	
流紋岩	個数	32	0	45	0	0	0	77	58.33%
	重量	5,209	0	5,106	0	0	0	10,315	60.85%
	重量平均	163	0	113	0	0	0	134	
合計	個数	56	1	75	0	0	0	132	100.00%
	重量	8,519	95	8,338	0	0	0	16,952	100.00%
	重量平均	152	95	111	0	0	0	128	
組成比	個数比	42.4%	0.8%	56.8%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	
	重量比	50.3%	0.6%	49.2%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	

第11表-3

IVbブロック

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	94	15	294	68	19	10	500	29.26%
	重量	8,577	901	14,078	2,834	371	411	27,172	17.97%
	重量平均	91	60	48	42	20	41	54	
ホルン フェルス	個数	8	2	13	23	1	8	55	3.22%
	重量	1,067	124	1,337	506	53	219	3,306	2.19%
	重量平均	133	62	103	22	53	27	60	
メノウ	個数	0	0	0	1	0	0	1	0.06%
	重量	0	0	0	2	0	0	2	0.00%
	重量平均	0	0	0	2	0	0	2	
安山岩	個数	6	0	14	8	0	1	29	1.70%
	重量	1,165	0	1,801	473	0	62	3,501	2.32%
	重量平均	194	0	129	59	0	62	121	
凝灰岩	個数	0	0	1	0	0	0	1	0.06%
	重量	0	0	444	0	0	0	444	0.29%
	重量平均	0	0	444	0	0	0	444	
砂岩	個数	49	6	231	44	2	29	361	21.12%
	重量	6,807	1,963	18,579	2,698	32	1,197	31,276	20.68%
	重量平均	139	327	80	61	16	41	87	
泥岩	個数	0	0	0	0	0	4	4	0.23%
	重量	0	0	0	0	0	215	215	0.14%
	重量平均	0	0	0	0	0	54	54	
流紋岩	個数	180	5	493	68	6	6	758	44.35%
	重量	33,103	749	44,320	5,983	709	450	85,314	56.41%
	重量平均	184	150	90	88	118	75	113	
合計	個数	337	28	1,046	212	28	58	1,709	100.00%
	重量	50,719	3,737	80,559	12,496	1,165	2,554	151,230	100.00%
	重量平均	151	133	77	59	42	44	88	
組成比	個数比	19.7%	1.6%	61.2%	12.4%	1.6%	3.4%	100.0%	
	重量比	33.5%	2.5%	53.3%	8.3%	0.8%	1.7%	100.0%	

IVcブロック

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	18	2	34	4	3	3	64	14.32%
	重量	3,213	185	3,070	295	96	70	6,929	11.90%
	重量平均	179	93	90	74	32	23	108	
ホルン フェルス	個数	7	1	8	2	0	2	20	4.47%
	重量	1,007	47	1,130	193	0	66	2,443	4.19%
	重量平均	144	47	141	97	0	33	122	
安山岩	個数	4	1	8	3	0	0	16	3.58%
	重量	239	52	294	219	0	0	804	1.38%
	重量平均	60	52	37	73	0	0	50	
凝灰岩	個数	0	0	4	0	0	0	4	0.89%
	重量	0	0	848	0	0	0	848	1.46%
	重量平均	0	0	212	0	0	0	212	
砂岩	個数	14	2	58	3	0	3	80	17.90%
	重量	2,036	333	6,281	231	0	153	9,034	15.51%
	重量平均	145	167	108	77	0	51	113	
泥岩	個数	0	0	1	0	0	0	1	0.22%
	重量	0	0	1	0	0	0	1	0.00%
	重量平均	0	0	1	0	0	0	1	
流紋岩	個数	90	0	165	7	0	0	262	58.61%
	重量	21,205	0	15,706	1,274	0	0	38,185	65.56%
	重量平均	236	0	95	182	0	0	146	
合計	個数	133	6	278	19	3	8	447	100.00%
	重量	27,700	617	27,330	2,212	96	289	58,244	100.00%
	重量平均	208	103	98	116	32	36	130	
組成比	個数比	29.8%	1.3%	62.2%	4.3%	0.7%	1.8%	100.0%	
	重量比	47.6%	1.1%	46.9%	3.8%	0.2%	0.5%	100.0%	

IVdブロック

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	16	5	19	9	0	4	53	13.02%
	重量	864	518	1,428	819	0	35	3,664	9.27%
	重量平均	54	104	75	91	0	9	69	
ホルン フェルス	個数	9	0	4	1	1	1	16	3.93%
	重量	873	0	118	631	82	46	1,750	4.43%
	重量平均	97	0	30	631	82	46	109	
安山岩	個数	2	1	3	0	0	0	6	1.47%
	重量	226	147	447	0	0	0	820	2.08%
	重量平均	113	147	149	0	0	0	137	
凝灰岩	個数	0	0	0	0	0	1	1	0.25%
	重量	0	0	0	0	0	36	36	0.09%
	重量平均	0	0	0	0	0	36	36	
玉髄	個数	0	0	0	1	0	0	1	0.25%
	重量	0	0	0	10	0	0	10	0.03%
	重量平均	0	0	0	10	0	0	10	
砂岩	個数	21	0	28	11	0	0	60	14.74%
	重量	2,265	0	2,894	2,140	0	0	7,299	18.47%
	重量平均	108	0	103	195	0	0	122	
流紋岩	個数	135	1	109	23	0	2	270	66.34%
	重量	16,122	444	7,915	1,438	0	11	25,930	65.63%
	重量平均	119	444	73	63	0	6	96	
合計	個数	183	7	163	45	1	8	407	100.00%
	重量	20,350	1,109	12,802	5,038	82	128	39,509	100.00%
	重量平均	111	158	79	112	82	16	97	
組成比	個数比	45.0%	1.7%	40.0%	11.1%	0.2%	2.0%	100.0%	
	重量比	51.5%	2.8%	32.4%	12.8%	0.2%	0.3%	100.0%	

SK-156土壌 [IVbブロック内]

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	12	0	23	0	0	0	35	12.87%
	重量	2,457	0	3,228	0	0	0	5,685	13.11%
	重量平均	205	0	140	0	0	0	162	
ホルン フェルス	個数	0	0	2	0	0	0	2	0.74%
	重量	0	0	410	0	0	0	410	0.95%
	重量平均	0	0	205	0	0	0	205	
安山岩	個数	0	0	7	0	0	0	7	2.57%
	重量	0	0	1,188	0	0	0	1,188	2.74%
	重量平均	0	0	170	0	0	0	170	
凝灰岩	個数	0	0	1	0	0	0	1	0.37%
	重量	0	0	444	0	0	0	444	1.02%
	重量平均	0	0	444	0	0	0	444	
砂岩	個数	13	0	28	0	0	0	41	15.07%
	重量	2,349	0	3,449	0	0	0	5,798	13.37%
	重量平均	181	0	123	0	0	0	141	
流紋岩	個数	73	0	111	0	2	0	186	68.38%
	重量	16,560	0	13,248	0	35	0	29,843	68.81%
	重量平均	227	0	119	0	18	0	160	
合計	個数	98	0	172	0	2	0	272	100.00%
	重量	21,366	0	21,967	0	35	0	43,368	100.00%
	重量平均	218	0	128	0	18	0	159	
組成比	個数比	36.0%	0.0%	63.2%	0.0%	0.7%	0.0%	100.0%	
	重量比	49.3%	0.0%	50.7%	0.0%	0.1%	0.0%	100.0%	

SK-088土壌 [IVcブロック内]

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
ホルン フェルス	個数	4	0	7	0	0	0	11	4.93%
	重量	391	0	1,092	0	0	0	1,483	5.78%
	重量平均	98	0	156	0	0	0	135	
安山岩	個数	0	0	1	0	0	0	1	0.45%
	重量	0	0	74	0	0	0	74	0.29%
	重量平均	0	0	74	0	0	0	74	
砂岩	個数	7	0	32	0	0	0	39	17.49%
	重量	675	0	2,957	0	0	0	3,632	14.14%
	重量平均	96	0	92	0	0	0	93	
流紋岩	個数	60	0	112	0	0	0	172	77.13%
	重量	11,615	0	8,875	0	0	0	20,490	79.79%
	重量平均	194	0	79	0	0	0	119	
合計	個数	71	0	152	0	0	0	223	100.00%
	重量	12,681	0	12,998	0	0	0	25,679	100.00%
	重量平均	179	0	86	0	0	0	115	
組成比	個数比	31.8%	0.0%	68.2%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	
	重量比	49.4%	0.0%	50.6%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	

SK-087土壌 [IVdブロック内]

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	0	0	2	0	0	0	2	1.83%
	重量	0	0	234	0	0	0	234	1.46%
	重量平均	0	0	117	0	0	0	117	
ホルン フェルス	個数	6							

237
238

239



IV eブロック

IV fブロック

240

153

礫

- ☆ 石鏝未製品
- ▲ 三角形素材剥片 I
- 剥片
- 碎片
- 土器

集石土坑

N 6 | O 6
N 7 | O 7



第133図 IV区東側遺物出土状況 (1/400)

第11表-4

IV eブロック

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	18	1	18	1	0	0	38	9.50%
	重量	1,379	11	2,145	34	0	0	3,569	7.34%
	重量平均	77	11	119	34	0	0	94	
ホルンフェルス	個数	13	1	4	2	0	2	22	5.50%
	重量	2,748	171	299	27	0	63	3,308	6.80%
	重量平均	211	171	75	14	0	32	150	
安山岩	個数	3	0	10	1	0	0	14	3.50%
	重量	172	0	578	4	0	0	754	1.55%
	重量平均	57	0	58	4	0	0	54	
砂岩	個数	16	1	50	0	1	3	71	17.75%
	重量	2,193	265	6,506	0	198	32	9,194	18.90%
	重量平均	137	265	130	0	198	11	129	
頁岩	個数	0	0	0	1	0	0	1	0.25%
	重量	0	0	0	9	0	0	9	0.02%
	重量平均	0	0	0	9	0	0	9	
流紋岩	個数	75	0	168	6	2	3	254	63.50%
	重量	14,913	0	16,220	201	8	459	31,801	65.39%
	重量平均	199	0	97	34	4	153	125	
合計	個数	125	3	250	11	3	8	400	100.00%
	重量	21,405	447	25,748	275	206	554	48,635	100.00%
	重量平均	171	149	103	25	69	69	122	
組成比	個数比	31.3%	0.8%	62.5%	2.8%	0.8%	2.0%	100.0%	
	重量比	44.0%	0.9%	52.9%	0.6%	0.4%	1.1%	100.0%	

IV fブロック

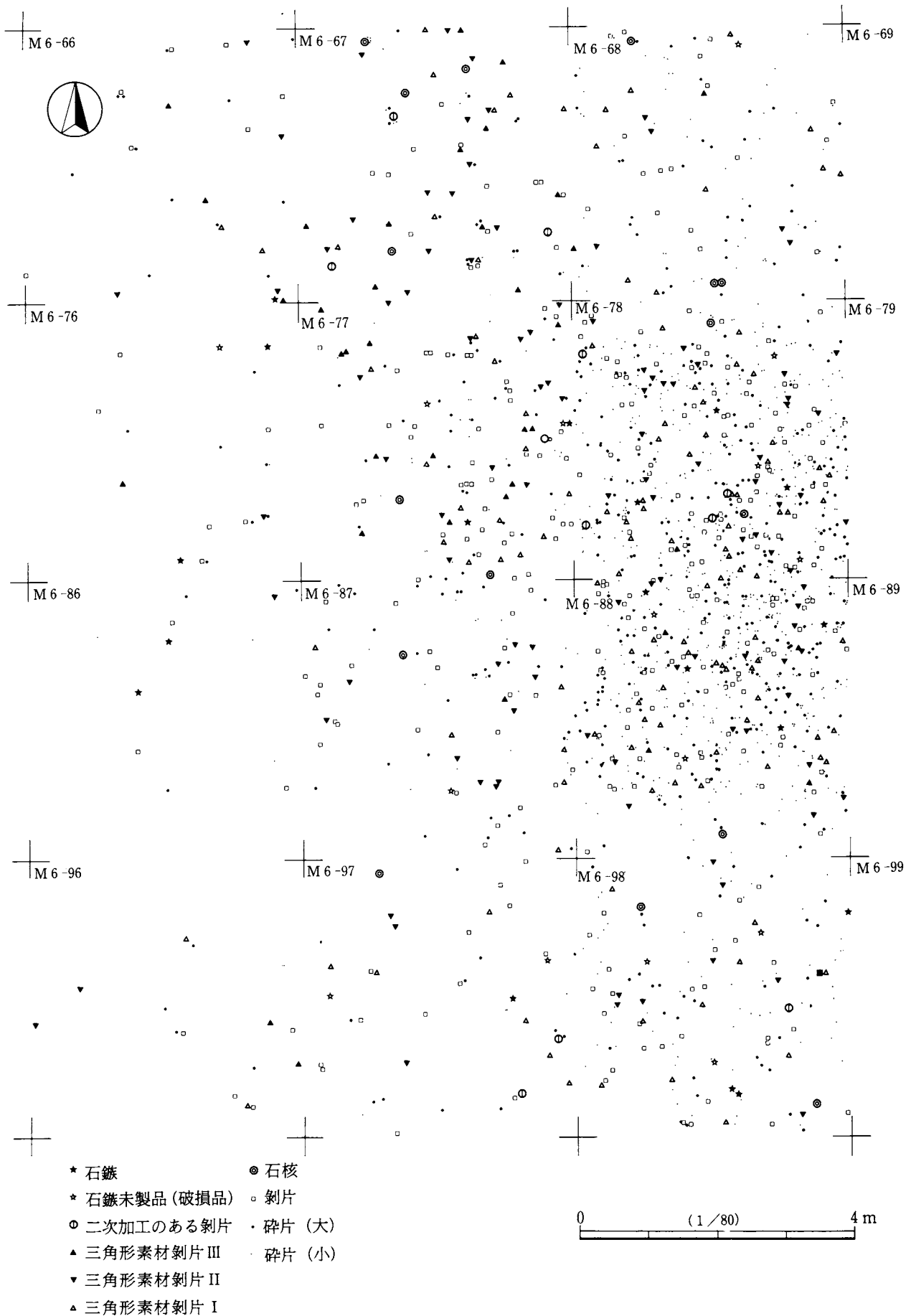
石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	9	1	12	0	0	0	22	13.33%
	重量	896	12	841	0	0	0	1,749	9.70%
	重量平均	100	12	70	0	0	0	80	
ホルンフェルス	個数	2	0	1	0	0	0	3	1.82%
	重量	191	0	61	0	0	0	252	1.40%
	重量平均	96	0	61	0	0	0	84	
安山岩	個数	1	0	2	0	0	0	3	1.82%
	重量	242	0	189	0	0	0	431	2.39%
	重量平均	242	0	95	0	0	0	144	
砂岩	個数	8	0	23	0	0	1	32	19.39%
	重量	1,001	0	2,472	0	0	1	3,474	19.26%
	重量平均	125	0	107	0	0	1	109	
頁岩	個数	1	0	2	0	0	0	3	1.82%
	重量	149	0	94	0	0	0	243	1.35%
	重量平均	149	0	47	0	0	0	81	
流紋岩	個数	23	0	77	0	1	1	102	61.82%
	重量	3,040	0	8,576	0	240	29	11,885	65.90%
	重量平均	132	0	111	0	240	29	117	
合計	個数	44	1	117	0	1	2	165	100.00%
	重量	5,519	12	12,233	0	240	30	18,034	100.00%
	重量平均	125	12	105	0	240	15	109	
組成比	個数比	26.7%	0.6%	70.9%	0.0%	0.6%	1.2%	100.0%	
	重量比	30.6%	0.1%	67.8%	0.0%	1.3%	0.2%	100.0%	

えにくく、これらのいずれかの時期であると考えられる。IV eブロックは、井草II式～夏島式に属する燃系文土器の分布と重複する。田戸上層式土器の分布とも重なるが、燃系文土器が集中することから、当該期の礫群である可能性が高い。IV fブロックは、谷頭から最も東側に外れた小規模なブロックである。井草II式土器の分布と重複し、当該期の礫群であると考えられる。

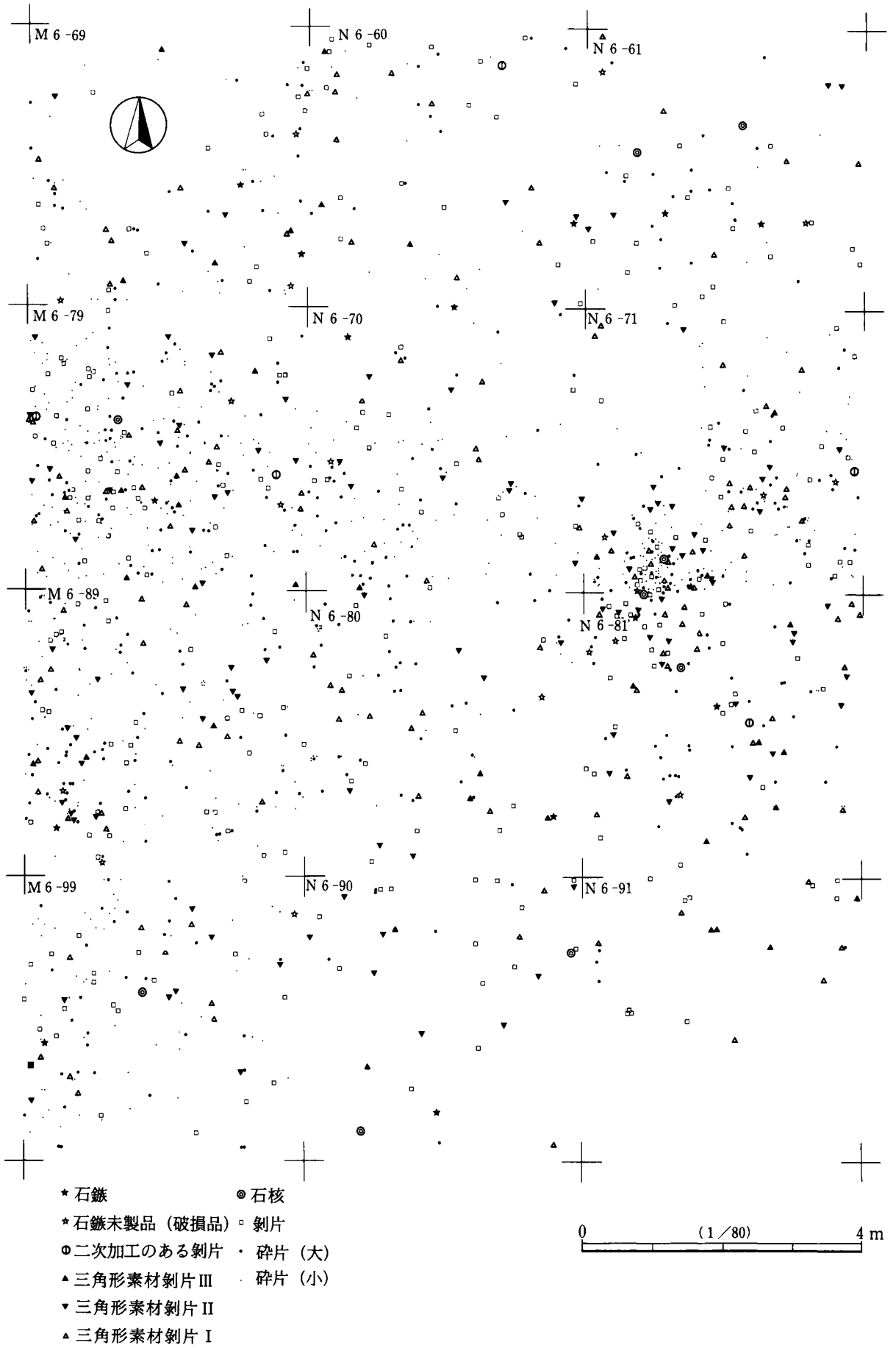
IV区ブロック外

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	226	16	59	4	2	3	310	26.79%
	重量	4,681	533	4,130	115	54	80	9,593	14.28%
	重量平均	21	33	70	29	27	27	31	
ホルンフェルス	個数	24	1	29	2	0	0	56	4.84%
	重量	1,749	6	1,945	15	0	0	3,715	5.53%
	重量平均	73	6	67	8	0	0	66	
安山岩	個数	5	0	12	0	0	2	19	1.64%
	重量	571	0	744	0	0	41	1,356	2.02%
	重量平均	114	0	62	0	0	21	71	
玉髄	個数	1	0	19	0	0	1	21	1.82%
	重量	24	0	1,304	0	0	2	1,330	1.98%
	重量平均	24	0	69	0	0	2	63	
砂岩	個数	97	2	90	1	0	2	192	16.59%
	重量	5,345	56	10,888	3	0	183	16,475	24.52%
	重量平均	55	28	121	3	0	92	86	

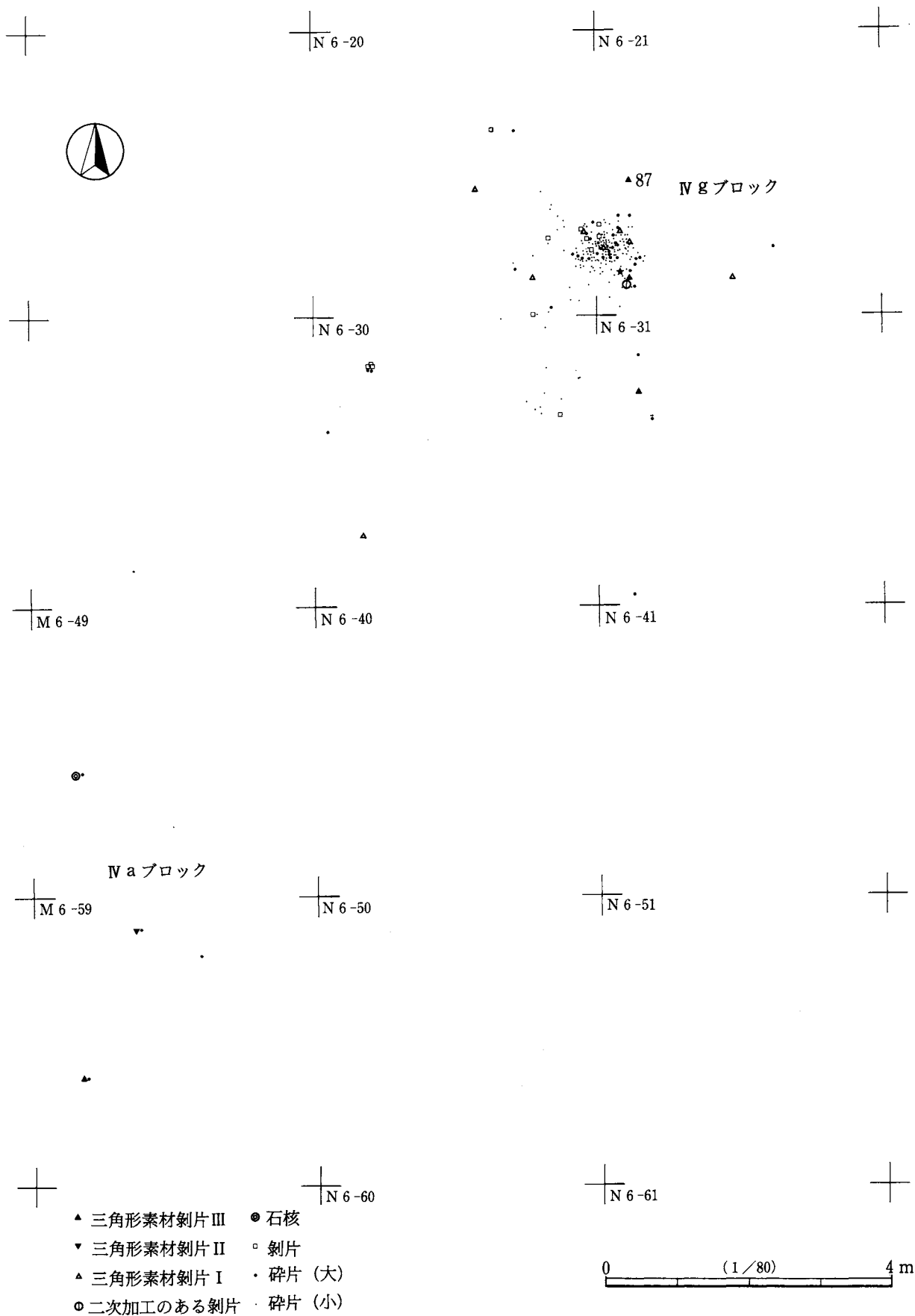
石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
泥岩	個数	0	0	3	0	0	0	3	0.26%
	重量	0	0	51	0	0	0	51	0.08%
	重量平均	0	0	17	0	0	0	17	
頁岩	個数	0	0	28	0	0	0	28	2.42%
	重量	0	0	364	0	0	0	364	0.54%
	重量平均	0	0	13	0	0	0	13	
流紋岩	個数	268	2	255	3	0	0	528	45.64%
	重量	15,526	649	17,504	625	0	0	34,304	51.06%
	重量平均	58	325	69	208	0	0	65	
合計	個数	621	21	495	10	2	8	1,157	100.00%
	重量	27,896	1,244	36,930	758	54	306	67,188	100.00%
	重量平均	45	59	75	76	27	38	58	
組成比	個数比	53.7%	1.8%	42.8%	0.9%	0.2%	0.7%	100.0%	
	重量比	41.5%	1.9%	55.0%	1.1%	0.1%	0.5%	100.0%	



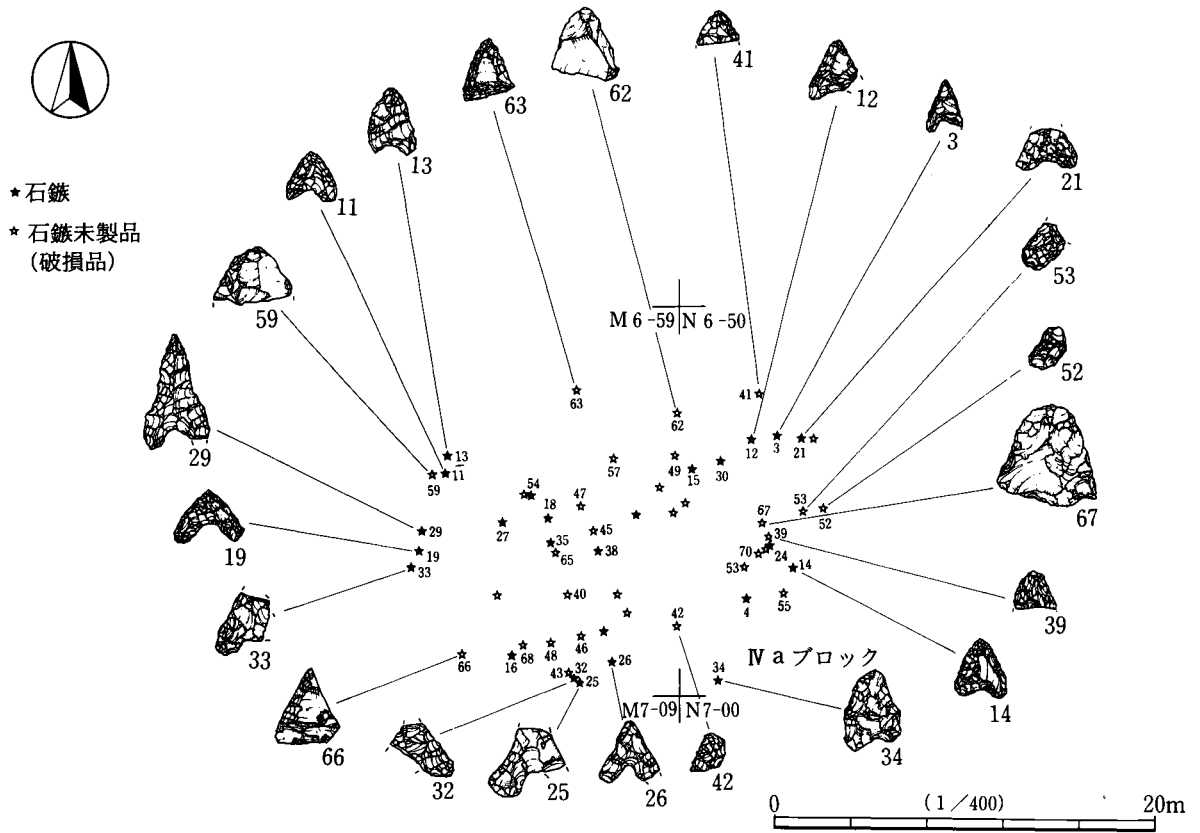
第134図 IV a ブロック器種別分布図(1)



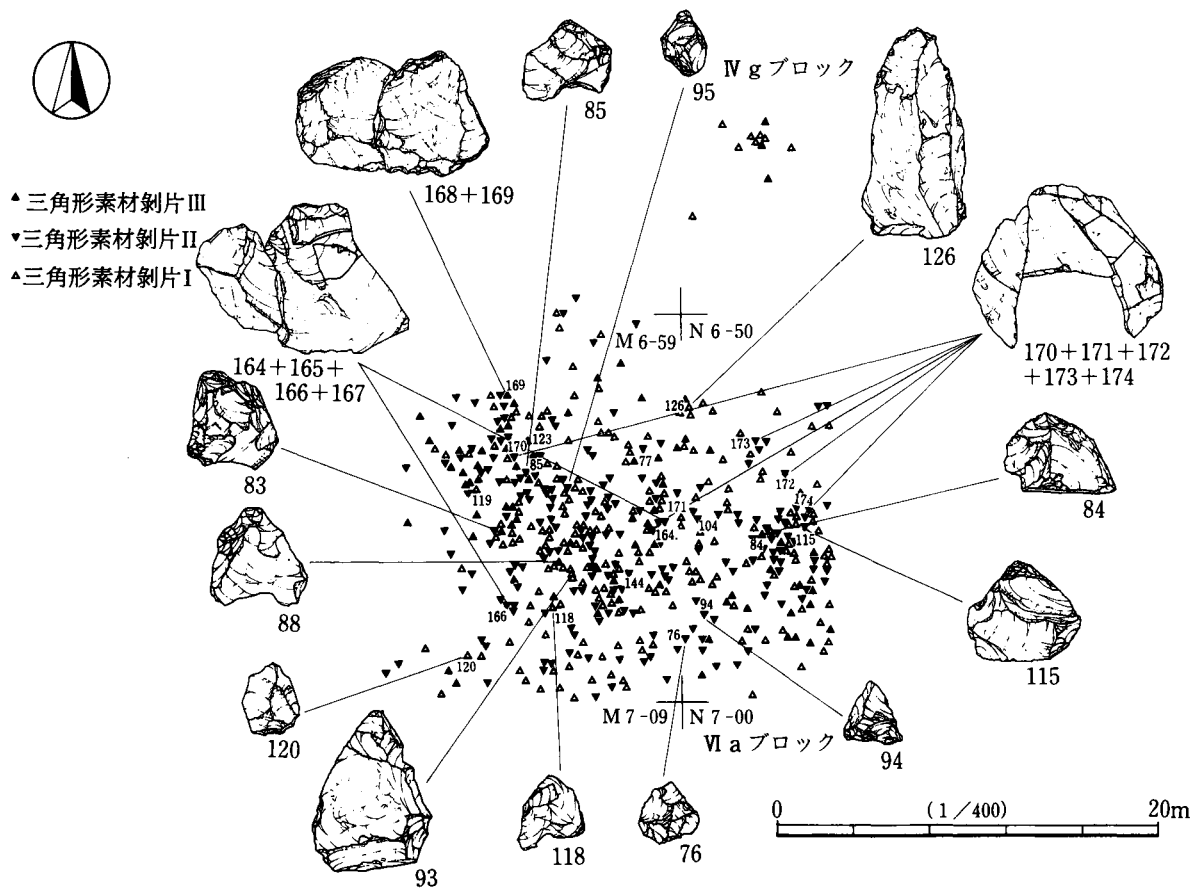
第135図 IV aブロック器種別分布図(2)



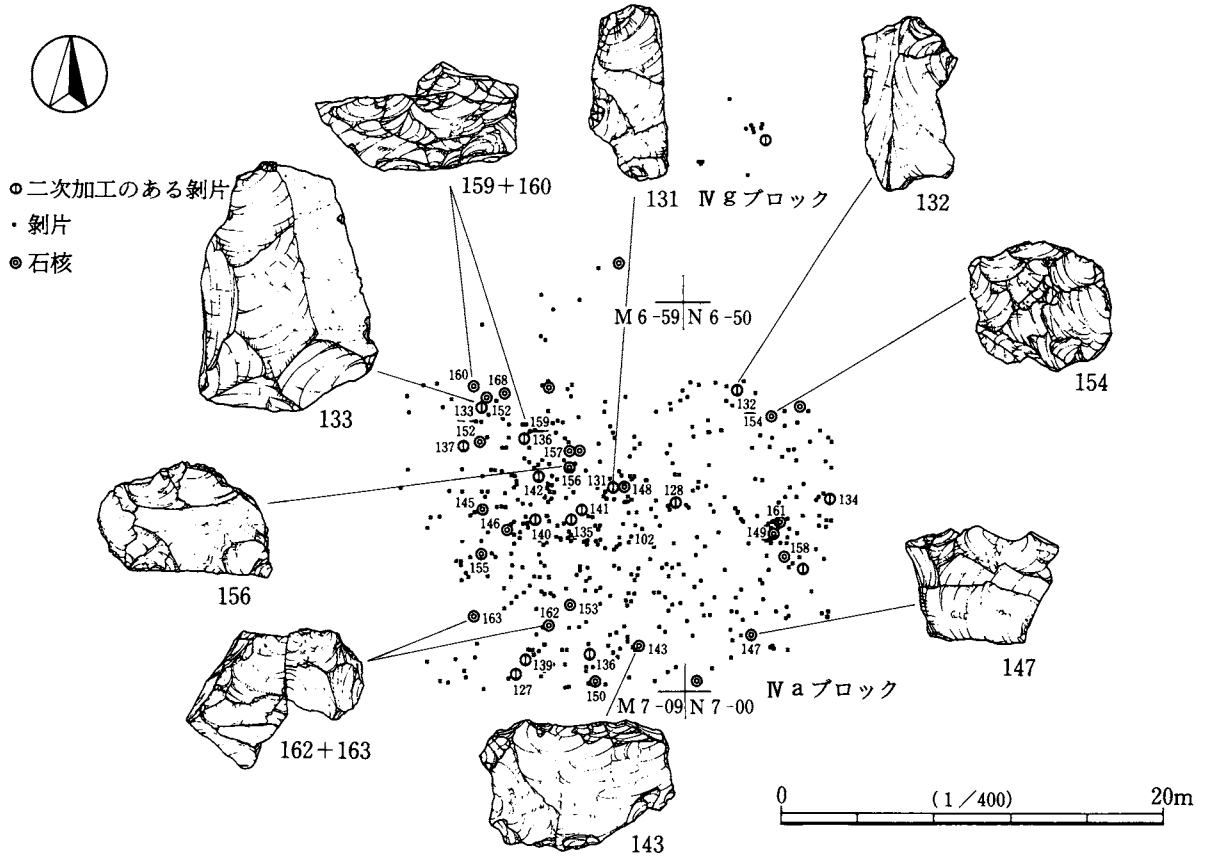
第136図 IV g ブロック器種別分布図



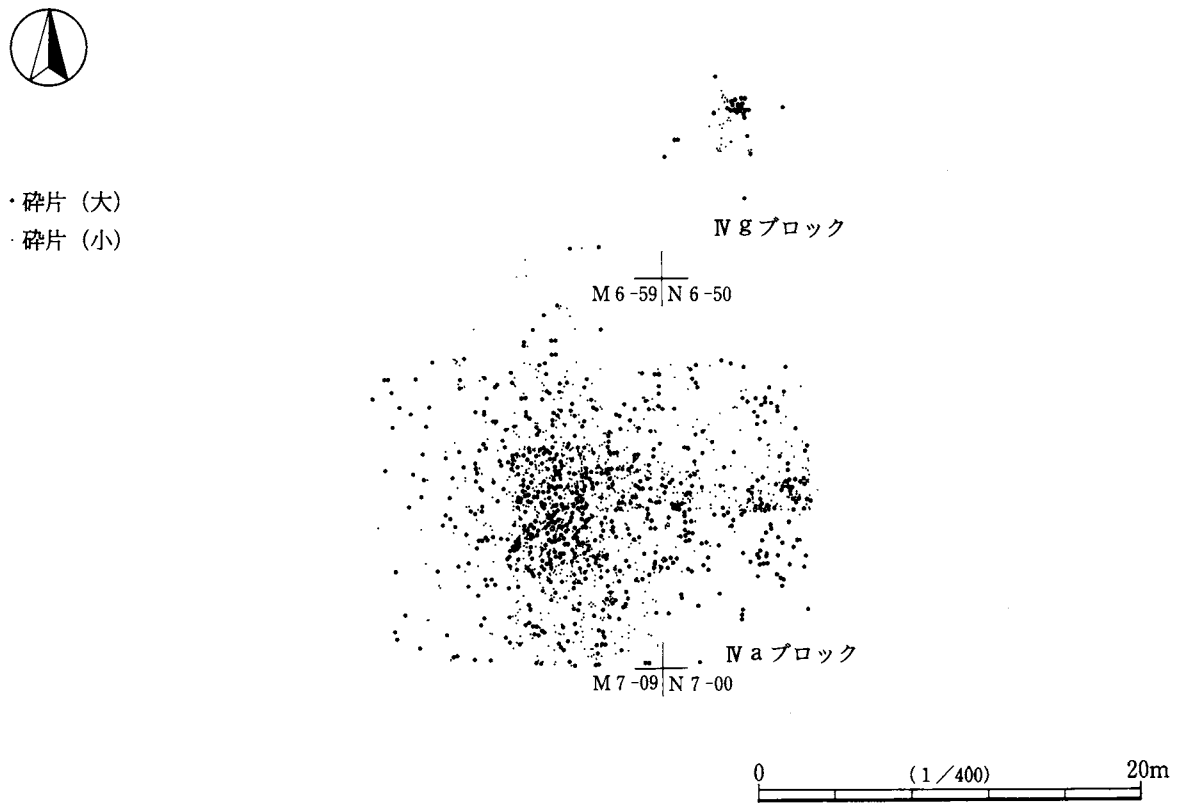
第137図 IV a ブロック石鏃・石鏃未製品分布図



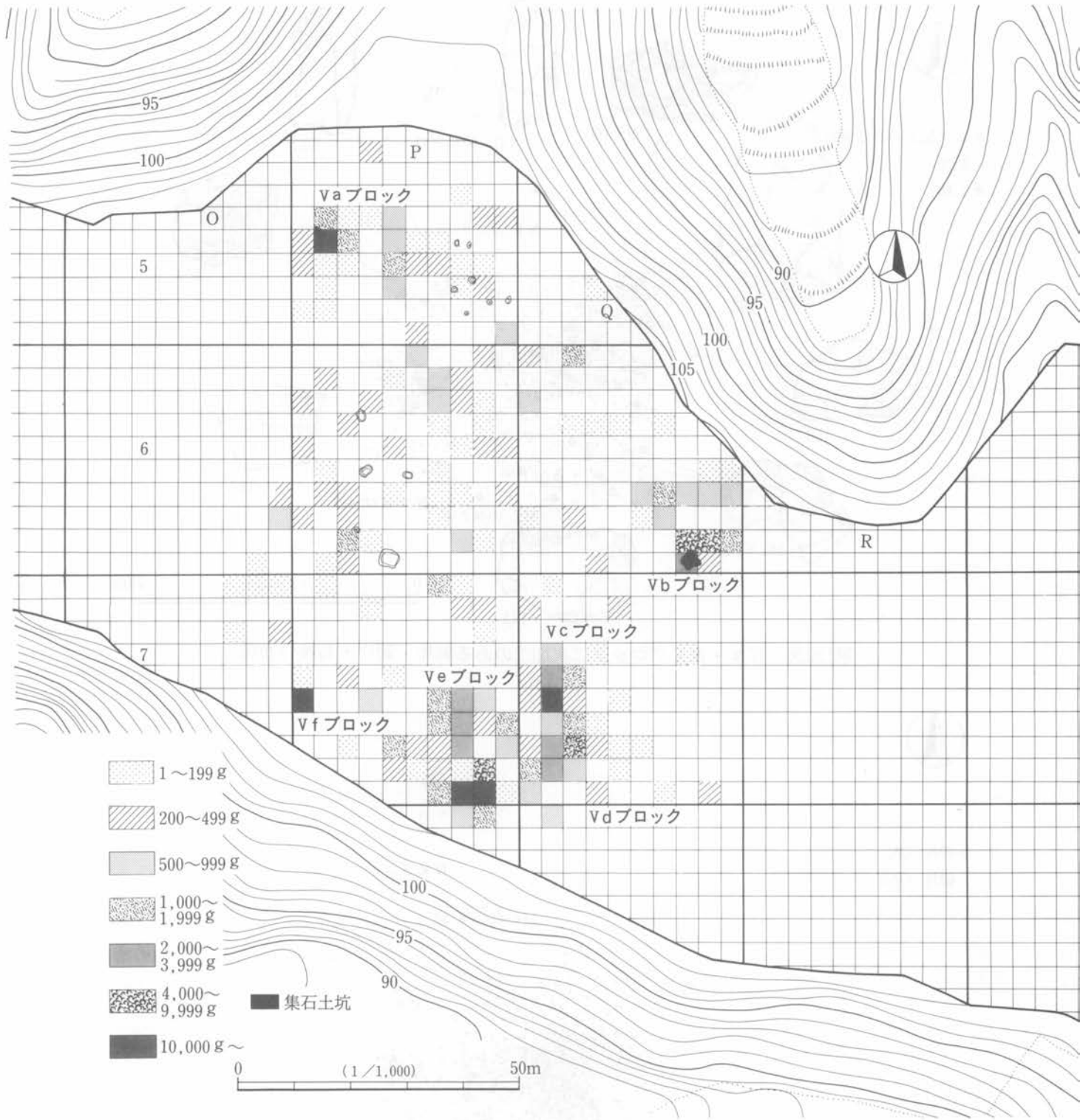
第138図 IV a・IV g ブロック三角形素材剥片分布図



第139図 IV a・IV gブロック二次加工のある剥片・剥片・石核分布図



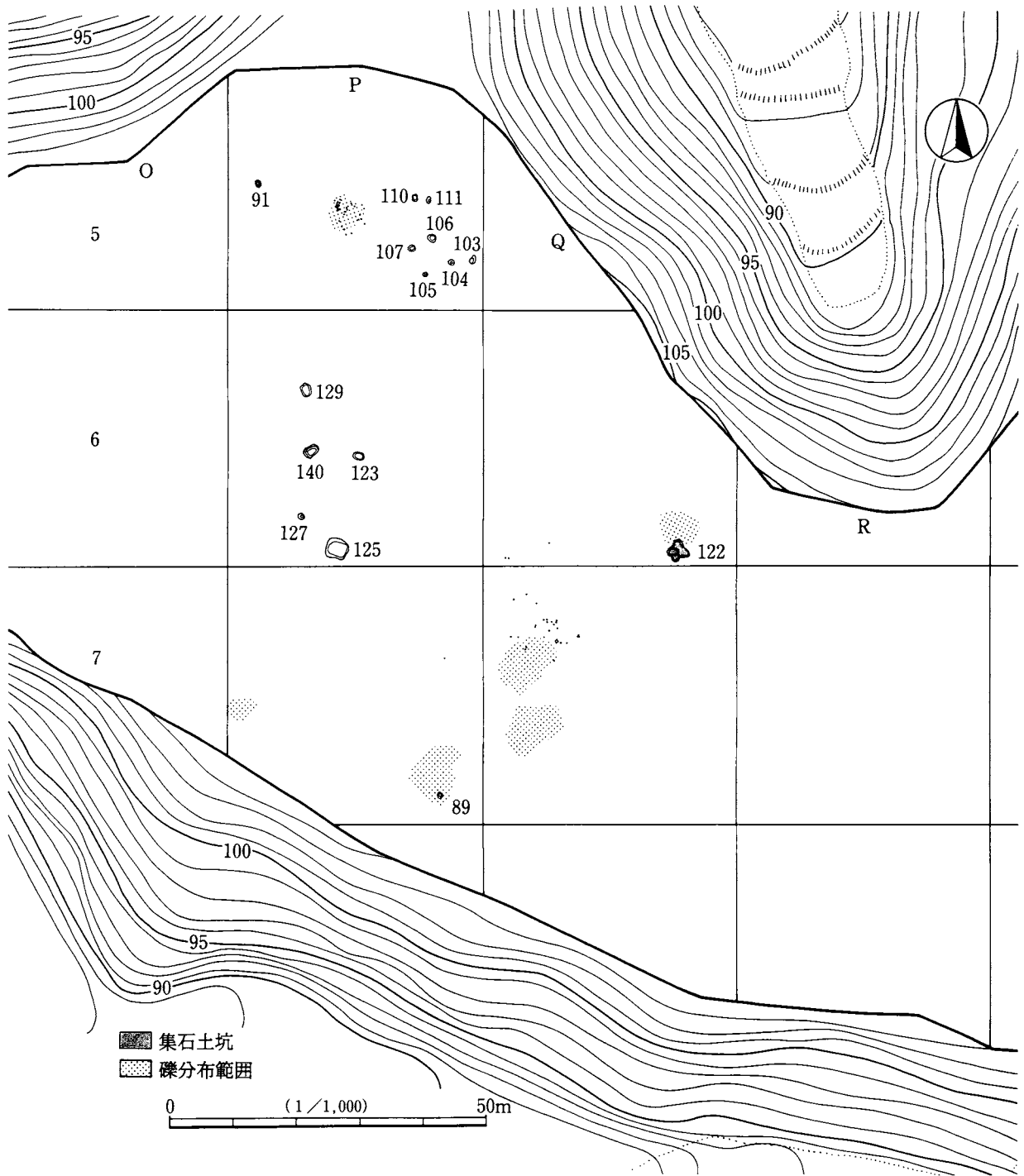
第140図 IV a・IV gブロック碎片分布図



第141図 V区礫グリッド別重量分布図

V区 (第141~144図, 第12表, 図版13)

Va~Vfのブロックが確認された。Vaブロックは、北に張り出した尾根上に位置し、東側に土坑群を配し、西側には集石土坑SK-91が見られる。土坑群周辺にも礫は分布する。田戸下層式土器、前期末葉土器の分布と相関を示す。Vbブロックは、北に開口する谷の谷頭に位置する。集石土坑SK-122に伴う礫群で、土坑と同時期のものと考えられる。Vcブロックは、台地中央に位置している。土器の分布と



第142図 V区遺物出土状況 (1/1,000) [ドットは土器]

重複しないことから、時期は不明である。V d～V fブロックは南側に面する緩斜面に位置する。V dブロックは、前期末葉の土器群、加曾利E式土器と分布が重複している。礫の分布が東側に広がりを見せる点で、加曾利E式土器の分布のしかたと相関を示す。V eブロックは、V dブロックの西側に位置し、北側に広がりを見せる。田戸上層式土器の分布と一致するが土器の量は多くない。土坑群が西側に見られるが、S I-55は曾利式期の土坑であり、直接の関連はないと考えられる。V fブロックはV eブロックのさらに西側に位置している。礫の分布範囲は小さいが形成する礫の量は多い。田戸下層式土器の分布が近くに見られることから、当該期のものである可能性が高い。

P 7

P 6/Q 6
P 7/Q 7

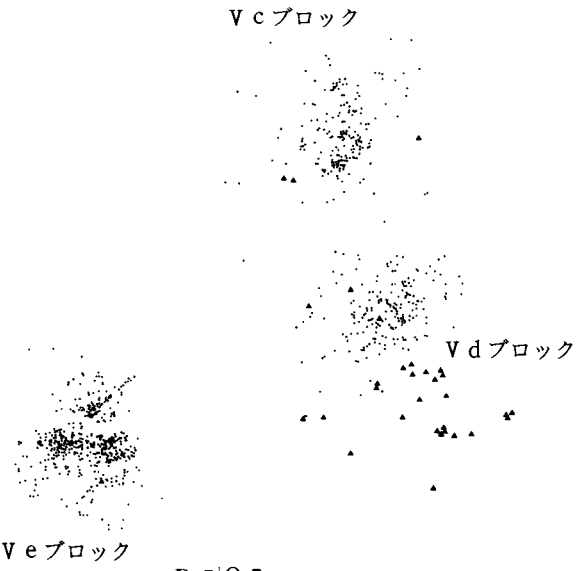


V fブロック

▲ 土器

0 (1/400) 20m

P 7
P 8



V cブロック

V dブロック

V eブロック

P 7/Q 7
P 8/Q 8

第143図 V区南側遺物出土状況 (1/400)

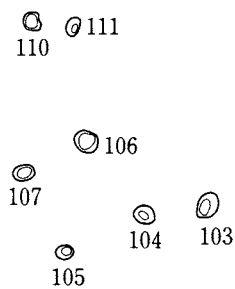
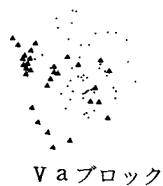
第12表 V区礫属性表-1

V区全体

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化	表面赤化	表面非赤化	表面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	138	6	279	8	4	4	439	19.71%
	重量	15,413	90	20,292	363	88	565	36,811	16.42%
	重量平均	112	15	73	45	22	141	84	
ホルンフェルス	個数	20	0	50	1	0	1	72	3.23%
	重量	2,708	0	4,667	327	0	127	7,829	3.49%
	重量平均	135	0	93	327	0	127	109	
安山岩	個数	13	0	24	2	0	0	39	1.75%
	重量	2,503	0	1,784	35	0	0	4,322	1.93%
	重量平均	193	0	74	18	0	0	111	
玉随	個数	0	0	2	0	0	0	2	0.09%
	重量	0	0	3	0	0	0	3	0.00%
	重量平均	0	0	2	0	0	0	2	
砂岩	個数	68	1	344	5	1	0	419	18.81%
	重量	8,805	197	28,233	132	6	0	37,373	16.67%
	重量平均	129	197	82	26	6	0	89	
泥岩	個数	0	0	17	0	0	0	17	0.76%
	重量	0	0	365	0	0	0	365	0.16%
	重量平均	0	0	21	0	0	0	21	
頁岩	個数	0	0	7	0	1	0	8	0.36%
	重量	0	0	494	0	3	0	497	0.22%
	重量平均	0	0	71	0	3	0	62	
流紋岩	個数	236	2	973	12	7	1	1,231	55.28%
	重量	42,369	729	90,968	2,512	446	21	137,045	61.11%
	重量平均	180	365	93	209	64	21	111	
合計	個数	475	9	1,696	28	13	6	2,227	100.00%
	重量	71,798	1,016	146,806	3,369	543	713	224,245	100.00%
	重量平均	151	113	87	120	42	119	101	
組成比	個数比	21.3%	0.4%	76.2%	1.3%	0.6%	0.3%	100.0%	
	重量比	32.0%	0.5%	65.5%	1.5%	0.2%	0.3%	100.0%	

V aブロック

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化	表面赤化	表面非赤化	表面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	15	0	64	1	3	1	84	28.47%
	重量	3,101	0	3,680	17	81	39	6,918	21.86%
	重量平均	207	0	58	17	27	39	82	
ホルンフェルス	個数	0	0	8	0	0	1	9	3.05%
	重量	0	0	584	0	0	127	711	2.25%
	重量平均	0	0	73	0	0	127	79	
安山岩	個数	0	0	1	1	0	0	2	0.68%
	重量	0	0	4	6	0	0	10	0.03%
	重量平均	0	0	4	6	0	0	5	
砂岩	個数	6	0	28	0	0	0	34	11.53%
	重量	1,111	0	2,864	0	0	0	3,975	12.56%
	重量平均	185	0	102	0	0	0	117	
頁岩	個数	0	0	1	0	0	0	1	0.34%
	重量	0	0	161	0	0	0	161	0.51%
	重量平均	0	0	161	0	0	0	161	
流紋岩	個数	28	0	133	3	0	1	165	55.93%
	重量	5,968	0	12,735	1,148	0	21	19,872	62.79%
	重量平均	213	0	96	383	0	21	120	
合計	個数	49	0	235	5	3	3	295	100.00%
	重量	10,180	0	20,028	1,171	81	187	31,647	100.00%
	重量平均	208	0	85	234	27	62	107	
組成比	個数比	16.6%	0.0%	79.7%	1.7%	1.0%	1.0%	100.0%	
	重量比	32.2%	0.0%	63.3%	3.7%	0.3%	0.6%	100.0%	

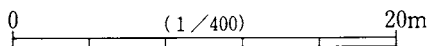


P 5|Q 5
P 6|Q 7



▲ 土器

■ 集石土坑



V b ブロック

122

P 6|Q 6
P 7|P 7

第144図 V区北側遺物出土状況 (1/1,000)

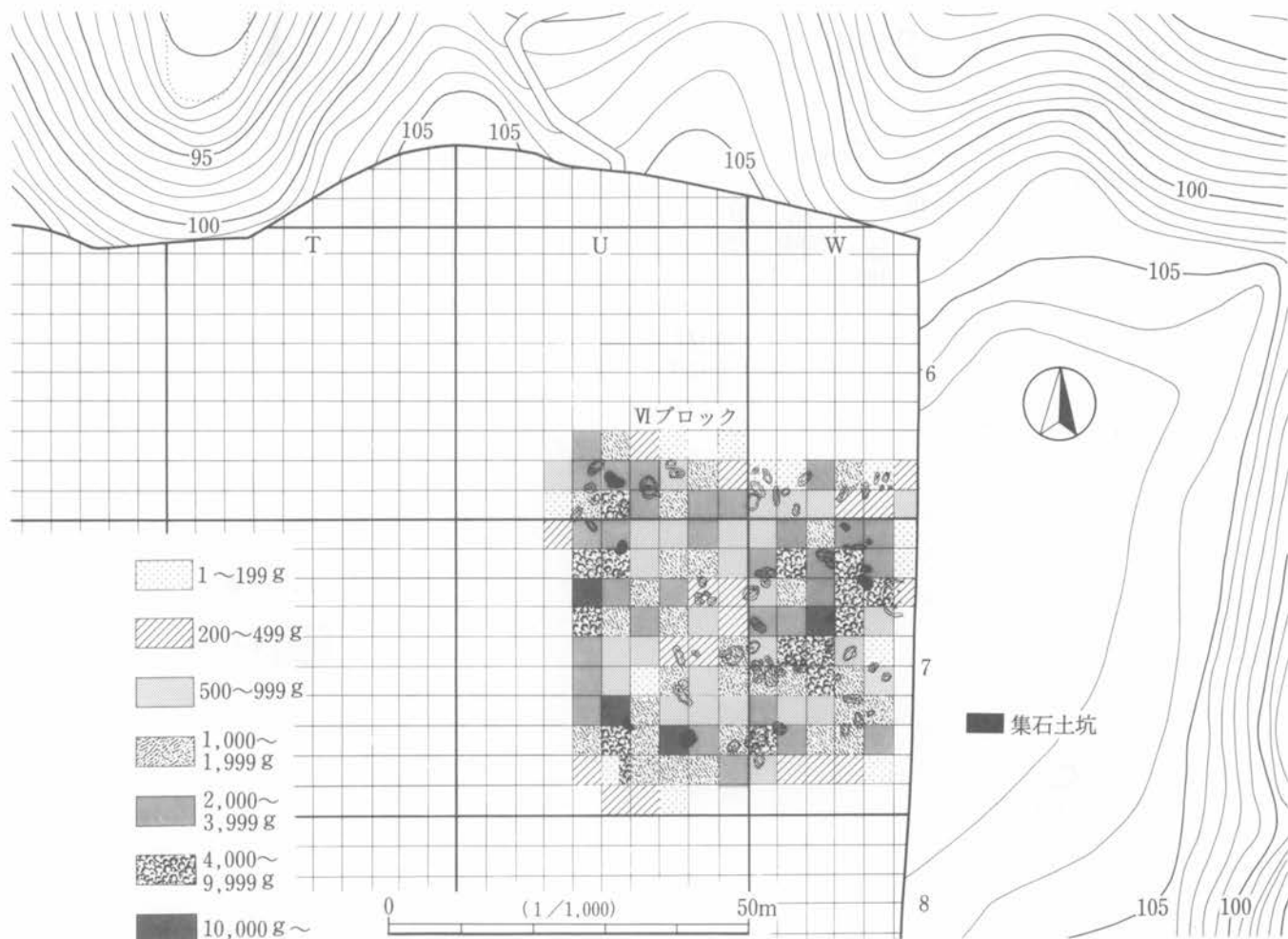
第12表-2

V b ブロック

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	8	0	42	0	0	0	50	16.45%
	重量	943	0	1,694	0	0	0	2,637	10.14%
	重量平均	118	0	40	0	0	0	53	
ホルン フェルス	個数	0	0	4	0	0	0	4	1.32%
	重量	0	0	422	0	0	0	422	1.62%
	重量平均	0	0	106	0	0	0	106	
安山岩	個数	0	0	0	1	0	0	1	0.33%
	重量	0	0	0	29	0	0	29	0.11%
	重量平均	0	0	0	29	0	0	29	
砂岩	個数	6	0	82	0	1	0	89	29.28%
	重量	1,276	0	6,213	0	6	0	7,495	28.81%
	重量平均	213	0	76	0	6	0	84	
流紋岩	個数	16	0	143	1	0	0	160	52.63%
	重量	3,859	0	11,388	182	0	0	15,429	59.31%
	重量平均	241	0	80	182	0	0	96	
合計	個数	30	0	271	2	1	0	304	100.00%
	重量	6,078	0	19,717	211	6	0	26,012	100.00%
	重量平均	203	0	73	106	6	0	86	
組成比	個数比	9.9%	0.0%	89.1%	0.7%	0.3%	0.0%	100.0%	
	重量比	23.4%	0.0%	75.8%	0.8%	0.0%	0.0%	100.0%	

SK-122土壌 [V b ブロック内]

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
砂岩	個数	1	0	45	0	0	0	46	31.08%
	重量	253	0	2,900	0	0	0	3,153	32.33%
	重量平均	253	0	64	0	0	0	69	
流紋岩	個数	4	0	97	1	0	0	102	68.92%
	重量	793	0	5,624	182	0	0	6,599	67.67%
	重量平均	198	0	58	182	0	0	65	
合計	個数	5	0	142	1	0	0	148	100.00%
	重量	1,046	0	8,524	182	0	0	9,752	100.00%
	重量平均	209	0	60	182	0	0	66	
組成比	個数比	3.4%	0.0%	95.9%	0.7%	0.0%	0.0%	100.0%	
	重量比	10.7%	0.0%	87.4%	1.9%	0.0%	0.0%	100.0%	



第145図 VI区礫グリッド別重量分布図

第12表-3

Vcブロック

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化	表面赤化	表面非赤化	表面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	15	0	10	1	0	0	26	10.88%
	重量	1,979	0	1,001	59	0	0	3,039	10.82%
	重量平均							117	
ホルンフェルス	個数	2	0	3	0	0	0	5	2.09%
	重量	317	0	567	0	0	0	884	3.15%
	重量平均							177	
安山岩	個数	2	0	2	0	0	0	4	1.67%
	重量	315	0	266	0	0	0	581	2.07%
	重量平均							145	
砂岩	個数	6	0	21	0	0	0	27	11.30%
	重量	565	0	1,870	0	0	0	2,435	8.67%
	重量平均							90	
泥岩	個数	0	0	4	0	0	0	4	1.67%
	重量	0	0	142	0	0	0	142	0.51%
	重量平均							36	
流紋岩	個数	43	0	127	1	2	0	173	72.38%
	重量	5,937	0	14,995	13	68	0	21,013	74.80%
	重量平均	138	0	118	13	34	0	121	
合計	個数	68	0	167	2	2	0	239	100.00%
	重量	9,113	0	18,841	72	68	0	28,094	100.00%
	重量平均	134	0	113	36	34	0	118	
組成比	個数比	28.5%	0.0%	69.9%	0.8%	0.8%	0.0%	100.0%	
	重量比	32.4%	0.0%	67.1%	0.3%	0.2%	0.0%	100.0%	

Vdブロック

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化	表面赤化	表面非赤化	表面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	4	0	12	0	0	1	17	6.46%
	重量	444	0	809	0	0	4	1,257	5.73%
	重量平均	111	0	67	0	0	4	74	
ホルンフェルス	個数	3	0	3	0	0	0	6	2.28%
	重量	393	0	291	0	0	0	684	3.12%
	重量平均	131	0	97	0	0	0	114	
安山岩	個数	2	0	0	0	0	0	2	0.76%
	重量	377	0	0	0	0	0	377	1.72%
	重量平均	189	0	0	0	0	0	189	
砂岩	個数	4	0	47	0	0	0	51	19.39%
	重量	684	0	3,309	0	0	0	3,993	18.21%
	重量平均	171	0	70	0	0	0	78	
泥岩	個数	0	0	10	0	0	0	10	3.80%
	重量	0	0	155	0	0	0	155	0.71%
	重量平均	0	0	16	0	0	0	16	
流紋岩	個数	20	0	157	0	0	0	177	67.30%
	重量	3,337	0	12,119	0	0	0	15,456	70.50%
	重量平均	167	0	77	0	0	0	87	
合計	個数	33	0	229	0	0	1	263	100.00%
	重量	5,235	0	16,683	0	0	4	21,922	100.00%
	重量平均	159	0	73	0	0	4	83	
組成比	個数比	12.5%	0.0%	87.1%	0.0%	0.0%	0.4%	100.0%	
	重量比	23.9%	0.0%	76.1%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	

第12表-4

Veブロック

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 断面赤化	表面赤化 断面非赤化	表面非赤化 断面赤化	表面非赤化 断面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	30	0	104	1	1	0	136	19.35%
	重量	3,654	0	6,662	120	7	0	10,443	16.77%
	重量平均	122	0	64	120	7	0	77	
ホルンフェルス	個数	7	0	25	0	0	0	32	4.55%
	重量	761	0	2,031	0	0	0	2,792	4.48%
	重量平均	109	0	81	0	0	0	87	
安山岩	個数	3	0	9	0	0	0	12	1.71%
	重量	678	0	743	0	0	0	1,421	2.28%
	重量平均	226	0	83	0	0	0	118	
砂岩	個数	12	0	147	4	0	0	163	23.19%
	重量	1,607	0	11,329	119	0	0	13,055	20.97%
	重量平均	134	0	77	30	0	0	80	
流紋岩	個数	70	0	282	5	3	0	360	51.21%
	重量	10,795	0	22,864	803	96	0	34,558	55.50%
	重量平均	154	0	81	161	32	0	96	
合計	個数	122	0	567	10	4	0	703	100.00%
	重量	17,495	0	43,629	1,042	103	0	62,269	100.00%
	重量平均	143	0	77	104	26	0	89	
組成比	個数比	17.4%	0.0%	80.7%	1.4%	0.6%	0.0%	100.0%	
	重量比	28.1%	0.0%	70.1%	1.7%	0.2%	0.0%	100.0%	

V区ブロック外

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 断面赤化	表面赤化 断面非赤化	表面非赤化 断面赤化	表面非赤化 断面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	54	6	29	5	0	2	96	30.67%
	重量	3,524	90	4,927	167	0	522	9,230	23.09%
	重量平均	65	15	170	33	0	261	96	
ホルンフェルス	個数	6	0	3	1	0	0	10	3.19%
	重量	849	0	270	327	0	0	1,446	3.62%
	重量平均	142	0	90	327	0	0	145	
安山岩	個数	6	0	12	0	0	0	18	5.75%
	重量	1,133	0	771	0	0	0	1,904	4.76%
	重量平均	189	0	64	0	0	0	106	
砂岩	個数	34	1	19	1	0	0	55	17.57%
	重量	3,562	197	2,648	13	0	0	6,420	16.06%
	重量平均	105	197	139	13	0	0	117	
頁岩	個数	0	0	2	0	1	0	3	0.96%
	重量	0	0	136	0	3	0	139	0.35%
	重量平均	0	0	68	0	3	0	46	
流紋岩	個数	41	2	86	2	0	0	131	41.85%
	重量	8,678	729	11,059	366	0	0	20,832	52.12%
	重量平均	212	365	129	183	0	0	159	
合計	個数	141	9	151	9	1	2	313	100.00%
	重量	17,746	1,016	19,811	873	3	522	39,971	100.00%
	重量平均	126	113	131	97	3	261	128	
組成比	個数比	45.0%	2.9%	48.2%	2.9%	0.3%	0.6%	100.0%	
	重量比	44.4%	2.5%	49.6%	2.2%	0.0%	1.3%	100.0%	

Vfブロック

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 断面赤化	表面赤化 断面非赤化	表面非赤化 断面赤化	表面非赤化 断面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	12	0	18	0	0	0	30	27.27%
	重量	1,768	0	1,519	0	0	0	3,287	22.94%
	重量平均	147	0	84	0	0	0	110	
ホルンフェルス	個数	2	0	4	0	0	0	6	5.45%
	重量	388	0	502	0	0	0	890	6.21%
	重量平均	194	0	251	0	0	0	148	
玉髓	個数	0	0	2	0	0	0	2	1.82%
	重量	0	0	3	0	0	0	3	0.02%
	重量平均	0	0	1.5	0	0	0	1.5	
泥岩	個数	0	0	3	0	0	0	3	2.73%
	重量	0	0	68	0	0	0	68	0.47%
	重量平均	0	0	22.67	0	0	0	22.67	
頁岩	個数	0	0	4	0	0	0	4	3.64%
	重量	0	0	197	0	0	0	197	1.37%
	重量平均	0	0	49.25	0	0	0	49.25	
流紋岩	個数	18	0	45	0	2	0	65	59.09%
	重量	3,795	0	5,808	0	282	0	9,885	68.98%
	重量平均	211	0	129	0	141	0	152	
合計	個数	32	0	76	0	2	0	110	100.00%
	重量	5,951	0	8,097	0	282	0	14,330	100.00%
	重量平均	186	0	107	0	141	0	130	
組成比	個数比	29.1%	0.0%	69.1%	0.0%	1.8%	0.0%	100.0%	
	重量比	41.5%	0.0%	56.5%	0.0%	2.0%	0.0%	100.0%	

SK-080土壌

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 断面赤化	表面赤化 断面非赤化	表面非赤化 断面赤化	表面非赤化 断面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	2	0	8	0	0	0	10	9.35%
	重量	309	0	3,104	0	0	0	3,413	13.09%
	重量平均	155	0	388	0	0	0	341	
ホルンフェルス	個数	1	0	0	0	0	0	1	0.93%
	重量	364	0	0	0	0	0	364	1.40%
	重量平均	364	0	0	0	0	0	364	
安山岩	個数	3	0	3	0	0	0	6	5.61%
	重量	448	0	695	0	0	0	1,143	4.38%
	重量平均	149	0	232	0	0	0	191	
砂岩	個数	8	0	17	0	0	0	25	23.36%
	重量	1,438	0	4,344	0	0	0	5,782	22.17%
	重量平均	180	0	256	0	0	0	231	
泥岩	個数	0	0	1	0	0	0	1	0.93%
	重量	0	0	72	0	0	0	72	0.28%
	重量平均	0	0	72	0	0	0	72	
流紋岩	個数	34	0	30	0	0	0	64	59.81%
	重量	10,515	0	4,789	0	0	0	15,304	58.69%
	重量平均	309	0	160	0	0	0	239	
合計	個数	48	0	59	0	0	0	107	100.00%
	重量	13,074	0	13,004	0	0	0	26,078	100.00%
	重量平均	272	0	220	0	0	0	244	
組成比	個数比	44.9%	0.0%	55.1%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	
	重量比	50.1%	0.0%	49.9%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	

VI区 (第145・146図, 第13表, 図版13)

① 礫群 (第146図, 図版13)

VI区は多くの土坑が分布している。特に集石土坑が7基確認されており、礫群もその周辺から検出されていることから、多くは集石土坑に伴うものであると考えられる。集石土坑を伴わない礫群としては、SK-30の西側に分布する一群、SK-66付近に分布する一群、SK-11の西側に分布する一群、SK-69の南側に分布する一群などが見られる。SK-11の西側には田戸上層式土器が集中して検出されているほかは、これらの礫群の時期を決定する材料に乏しい。IVa区と同様に、様々な時期の土器が検出されていることから、複数の時期にわたって礫群が形成されたことを示しているものと考えられよう。

② 黒曜石の分布 (第147図)

VI区では、調査を行った範囲全体にわたり、散漫に分布している。際立った集中は見られないが、SK-66付近とSK-5の南東側あたりに比較的多く分布している。器種は、石鏃、三角形素材剥片、石核、剥片、碎片のほか、彫器、楔形石器によって構成されている。三角形素材剥片が比較的多いが、石鏃、石核は少ない。IVaブロックと比較して碎片が少ない。

第13表 VI区礫属性表-1

VI区全体

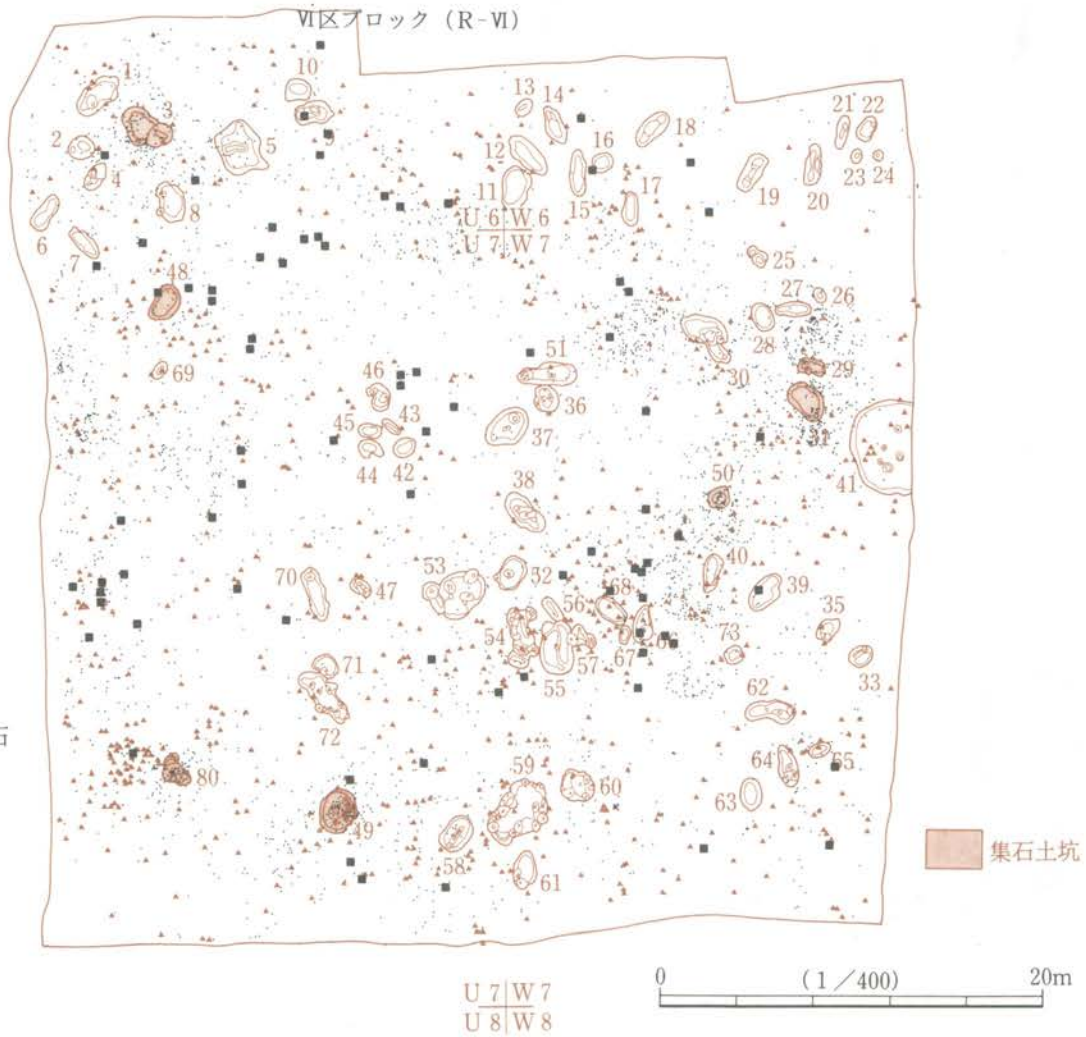
石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数 重量 重量平均	177 20,948 118	11 943 86	329 26,488 81	2 100 50	1 35 35	2 78 39	522 48,592 93	11.11% 10.13%
ホルン フェルス	個数 重量 重量平均	74 11,249 152	2 545 273	77 9,117 118	3 554 185	0 0 0	1 29 29	157 21,494 137	3.34% 4.48%
安山岩	個数 重量 重量平均	39 4,327 111	1 243 243	52 4,650 89	2 50 25	0 0 0	1 6 6	95 9,276 98	2.02% 1.93%
玉髓	個数 重量 重量平均	4 516 129	0 0 0	1 2 2	0 0 0	0 0 0	0 0 0	5 518 104	0.11% 0.11%
珪質 頁岩	個数 重量 重量平均	0 0 0	0 0 0	1 36 36	0 0 0	0 0 0	0 0 0	1 36 36	0.02% 0.01%
砂岩	個数 重量 重量平均	155 27,461 177	3 168 56	802 77,834 97	10 989 99	3 220 73	2 74 37	975 106,746 109	20.74% 22.26%
泥岩	個数 重量 重量平均	0 0 0	0 0 0	15 948 63	0 0 0	0 0 0	0 0 0	15 948 63	0.32% 0.20%
頁岩	個数 重量 重量平均	2 298 149	0 0 0	5 672 134	0 0 0	1 103 103	1 1,415 1,415	9 2,488 276	0.19% 0.52%
流紋岩	個数 重量 重量平均	696 112,991 162	6 800 133	2,200 173,523 79	16 2,048 128	2 139 70	1 20 20	2,921 289,521 99	62.15% 60.36%
合計	個数 重量 重量平均	1,147 177,790 155	23 2,699 117	3,482 293,270 84	33 3,741 113	7 497 71	8 1,622 203	4,700 479,619 102	100.00% 100.00%
組成比	個数比 重量比	24.4% 37.1%	0.5% 0.6%	74.1% 61.1%	0.7% 0.8%	0.1% 0.1%	0.2% 0.3%	100.0% 100.0%	

SK-003土壌

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数 重量 重量平均	0 0 0	0 1 0	62 0 0	0 0 0	0 0 0	0 0 0	62 1 0	23.13% 0.01%
ホルン フェルス	個数 重量 重量平均	2 304 152	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0 0 0	2 304 152	0.75% 2.59%
砂岩	個数 重量 重量平均	3 305 102	0 0 0	52 2,680 52	0 0 0	0 0 0	0 0 0	55 2,985 54	20.52% 25.48%
流紋岩	個数 重量 重量平均	16 1,828 114	0 0 0	133 6,599 50	0 0 0	0 0 0	0 0 0	149 8,427 57	55.60% 71.92%
合計	個数 重量 重量平均	21 2,437 116	0 1 0	247 9,279 38	0 0 0	0 0 0	0 0 0	268 11,717 44	100.00% 100.00%
組成比	個数比 重量比	7.8% 20.8%	0.0% 0.0%	92.2% 79.2%	0.0% 0.0%	0.0% 0.0%	0.0% 0.0%	100.0% 100.0%	

SK-031土壌

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化 割面赤化	表面赤化 割面非赤化	表面非赤化 割面赤化	表面非赤化 割面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
ホルン フェルス	個数 重量 重量平均	4 187 47	0 0 0	8 666 83	0 0 0	0 0 0	0 0 0	12 853 71	8.51% 12.03%
砂岩	個数 重量 重量平均	5 360 72	0 0 0	8 577 72	0 0 0	0 0 0	0 0 0	13 937 72	9.22% 13.22%
流紋岩	個数 重量 重量平均	23 1,520 66	0 0 0	89 3,691 41	4 87 22	0 0 0	0 0 0	116 5,298 46	82.27% 74.75%
合計	個数 重量 重量平均	32 2,067 65	0 0 0	105 4,934 47	4 87 22	0 0 0	0 0 0	141 7,088 50	100.00% 100.00%
組成比	個数比 重量比	22.7% 29.2%	0.0% 0.0%	74.5% 69.6%	2.8% 1.2%	0.0% 0.0%	0.0% 0.0%	100.0% 100.0%	



第146図 VI区遺物出土状況 (1/400)

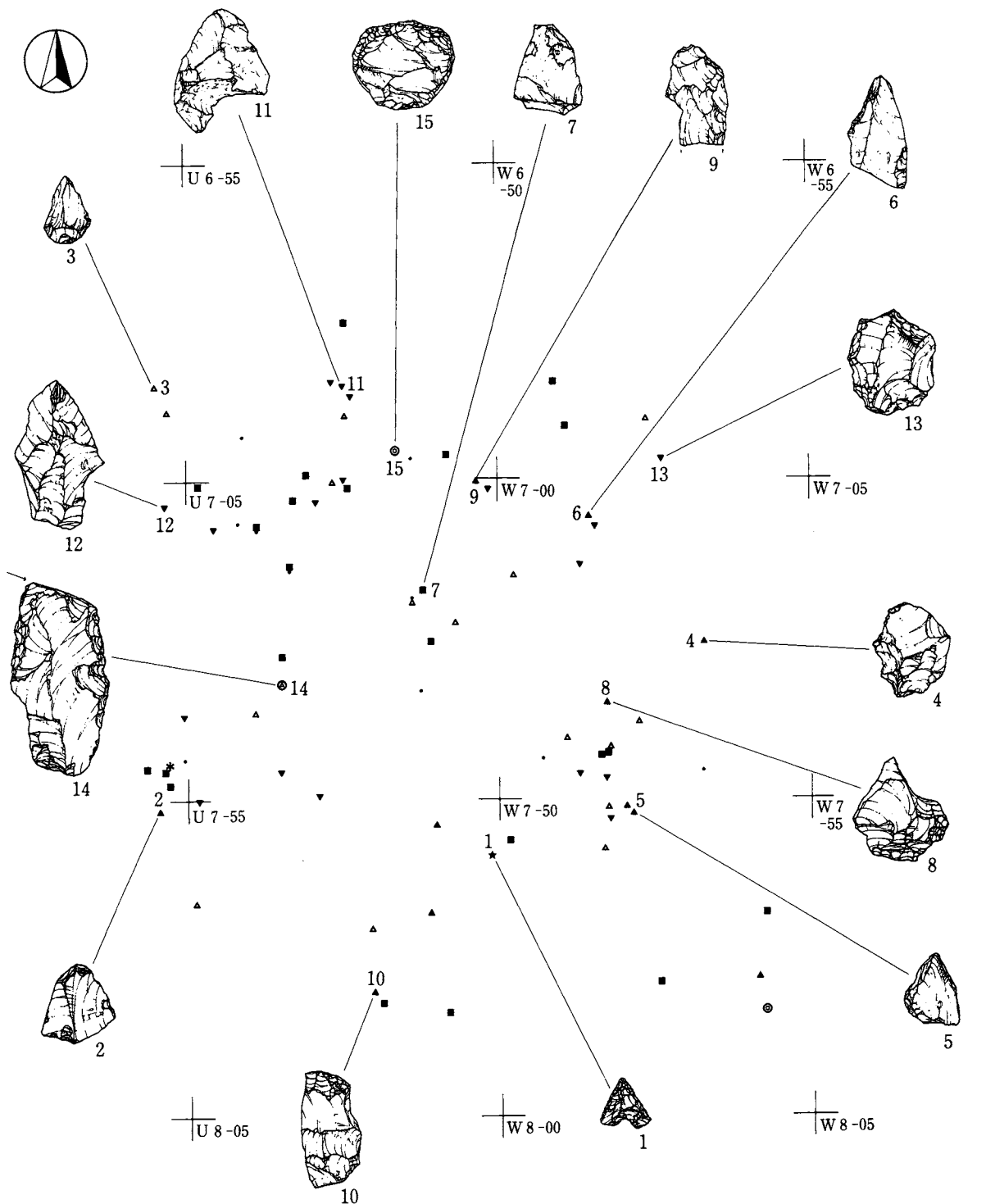
第13表-2

SK-049土壌

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化	表面赤化	表面非赤化	表面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	17	0	12	0	0	0	29	18.01%
	重量	3,059	0	1,456	0	0	0	4,515	13.63%
	重量平均	180	0	121	0	0	0	156	
ホルンフェルス	個数	1	0	2	0	0	0	3	1.86%
	重量	530	0	95	0	0	0	625	1.89%
	重量平均	530	0	48	0	0	0	208	
安山岩	個数	1	0	0	0	0	0	1	0.62%
	重量	54	0	0	0	0	0	54	0.16%
	重量平均	54	0	0	0	0	0	54	
砂岩	個数	10	0	39	0	0	0	49	30.43%
	重量	2,529	0	9,097	0	0	0	11,626	35.11%
	重量平均	253	0	233	0	0	0	237	
泥岩	個数	0	0	3	0	0	0	3	1.86%
	重量	0	0	134	0	0	0	134	0.40%
	重量平均	0	0	45	0	0	0	45	
頁岩	個数	0	0	1	0	0	0	1	0.62%
	重量	0	0	128	0	0	0	128	0.39%
	重量平均	0	0	128	0	0	0	128	
流紋岩	個数	53	0	25	0	0	0	78	48.45%
	重量	11,773	0	4,396	0	0	0	16,169	48.82%
	重量平均	222	0	176	0	0	0	207	
合計	個数	82	0	79	0	0	0	161	100.00%
	重量	17,945	0	15,172	0	0	0	33,117	100.00%
	重量平均	219	0	192	0	0	0	206	
組成比	個数比	50.9%	0.0%	49.1%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	
	重量比	54.2%	0.0%	45.8%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	

SK-050土壌

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化	表面赤化	表面非赤化	表面非赤化		
		I A	I B	II a	II b	II c	II d		
チャート	個数	4	0	15	0	0	0	19	10.92%
	重量	1,118	0	2,643	0	0	0	3,761	7.45%
	重量平均	280	0	176	0	0	0	198	
ホルンフェルス	個数	1	0	3	0	0	0	4	2.30%
	重量	117	0	1,910	0	0	0	2,027	4.01%
	重量平均	117	0	637	0	0	0	507	
砂岩	個数	7	0	53	0	0	0	60	34.48%
	重量	1,837	0	12,373	0	0	0	14,210	28.14%
	重量平均	262	0	233	0	0	0	237	
流紋岩	個数	29	0	62	0	0	0	91	52.30%
	重量	13,062	0	17,446	0	0	0	30,508	60.40%
	重量平均	450	0	281	0	0	0	335	
合計	個数	41	0	133	0	0	0	174	100.00%
	重量	16,134	0	34,372	0	0	0	50,506	100.00%
	重量平均	394	0	258	0	0	0	290	
組成比	個数比	23.6%	0.0%	76.4%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	
	重量比	31.9%	0.0%	68.1%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	



- ★ 石鏃
- 彫器
- * 楔形石器 ⊙ 石核
- ▲ 三角形素材剝片Ⅲ ▣ 剝片
- ▼ 三角形素材剝片Ⅱ · 碎片 (大)
- ▲ 三角形素材剝片Ⅰ · 碎片 (小)

0 (1/400) 20m

第147图 VI区黑曜石器種別分布图

(2) 礫の被熱，破損状況（第8表～第13表）

礫群を構成する礫は，被熱して赤化しているものとしていないもの，破損しているものとしていないものが見られる。それらを分類するために，完形礫については，表面赤化（I A），非赤化（I B）の二つに，破損礫については，表面赤化・剖面赤化（II a），表面赤化・剖面非赤化（II b），表面非赤化・剖面赤化（II c），表面非赤化・剖面非赤化（II d）の四種類に分類し，その組成を各ブロックごとに比較を行った。概略の記述は重量比で行い，必要に応じて数量比を用いることにする。

I 区（第8表）

I a ブロック，I c ブロックでは，破損礫の割合が約70%～80%と高いのに対し，I b ブロックにおいては完形礫が50%を超えている。また，表面赤化剖面非赤化の割合が他と比較して多いのも特徴である。ブロック外のデータにおいては，I a，I c と I b の中間的様相を呈している。

II 区（第9表）

完形礫の割合が大きく，65.9%に上る。破損礫においても，II b 類の割合が11.1%と比較的高い。

III 区（第10表）

III a ブロックにおいては，完形礫の比率が高く，57.6%にも及ぶ。III b ブロックにおいても完形礫が43.2%と多い。破損礫の中では，II b 類の割合が約10%を占める。III c ブロックにおいては，完形礫の中では，赤化礫の割合が際立って高く，破損礫の中ではII b 類の比率が高い。

それに対し，S K-190，S K-191，S K-216といった集石土坑が礫群と伴って検出されているが，これらは共通した特徴を示す。いずれもほとんどI A類とII b類のみによって構成されている。これは，集石土坑が完形，破損を問わず焼けた状態で持ち込まれ，土坑内で加熱しなかったことを示しているものと推測される。また，III c ブロックは10種類の石材で構成されているのに対し，土坑は5種類に限定され，チャートの割合が著しく低くなる。

IV 区（第11表）

IV a ブロック内にS K-163，S K-241の二つの集石土坑土坑が存在する。両者ともI A類，II a類により構成されており，他はほとんど含まれない。S K-241の方が完形礫の割合が高い。IV a ブロックにおいてもほぼ同様の傾向が見られるが，若干他の例も出現する。土坑内の礫とIV a ブロックを構成する礫とで石材の組成比を比較すると，土坑内のものは2基とも，若干の相違はあるものの，5種類の石材が用いられ，流紋岩が際立って多いことが共通した特徴である。それに対し，IV a ブロックには，玉髓，泥岩，頁岩といった土坑には含まれない石材が含まれている。また，チャートの組成比も土坑と比較して高い。

IV b ブロック内にも集石土坑S K-156が存在する。ほとんどI A類，II b類のみによって構成される。IV bにおいては，II b類が8.3%と，比較的高い割合を占める。石材組成を比較すると，やはりIV aと同様にブロックと土坑との間に差が見られる。

IV c ブロックにおいても，それぞれの組成比においてIV a，IV bブロックと同様の傾向が見られる。IV dブロックでは，完形礫の割合が大きいのが特徴である。やはり上記のブロックと同様の傾向が見られる。

V 区（第12表）

全てのブロックにおいてI A類，II a類によってほとんどが占められていることがわかる。中でも破損礫が完形礫を大きく上回ることが一つの特徴といえる。ブロック外の礫については，それ以外の例も少量だが含まれる。

VI区 (第13表)

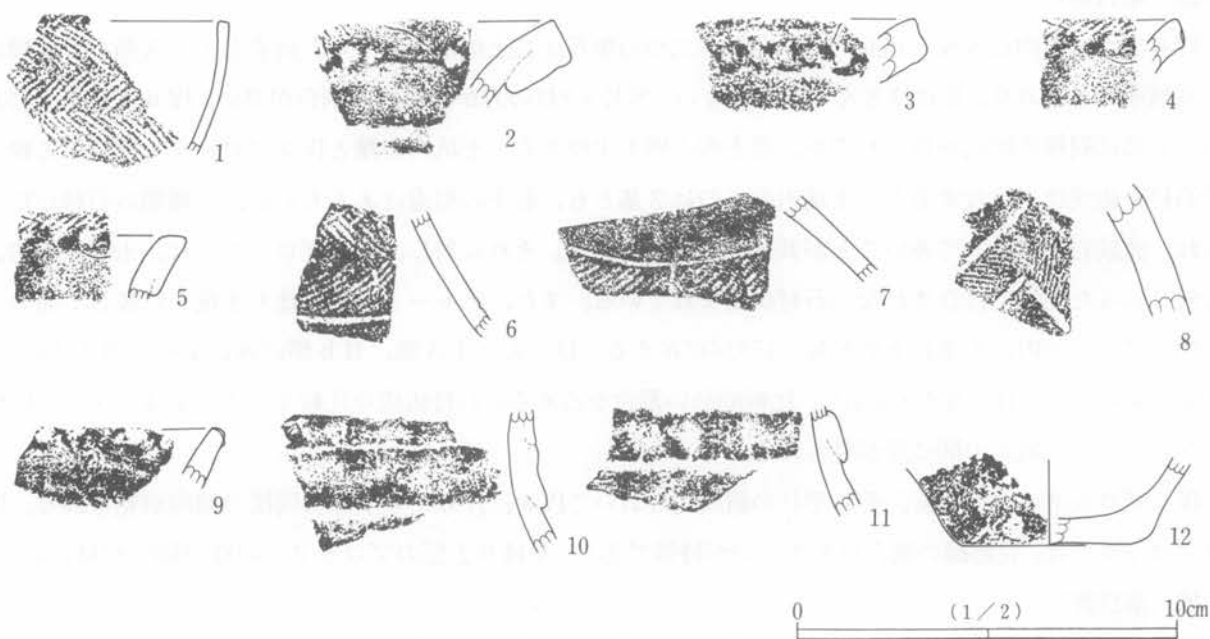
集石土坑については、一様に I A類, II a類のみで構成されているが, I A類と II a類がほぼ同じ割合の SK-049, SK-080と, II a類が約70%を上回る SK-003, SK-031, SK-050がとが見られる。IV区全体で見た場合は, 9種類の石材により構成されているが, 土坑内は, 3~7種類に限定される。

第3節 弥生時代

弥生時代はの遺物は包含層からの出土遺物のみで, 遺構は検出されなかった。ただ, 量は少ないが16m²という狭い範囲からの出土であるため, 本来は遺構が存在していた可能性もある。図示しえたのは以下の12点の小破片で, いずれも後期に比定される。

1 弥生土器 (第148図, 図版78)

1は鉢の口縁部である。外面には3段の羽状縄文, 口唇部端面には縄文原体の押捺が認められる。胎土は緻密で非常に薄手のつくりである。2~5は壺の口縁部である。いずれも口唇部下端には棒状工具による押捺が施され, 4, 5は口唇部端面に縄文を施す。3ははっきりしないが, その他はすべて折返しによる複合口縁であろう。6~8は壺の肩部~胴部上半である。6・7は羽状縄文の上下を沈線で区画するタイプと考えられるが, 6は上部, 7は下部が遺存していないためはっきりしない。8は上下を鋸歯状沈線で区画された幅の狭い文様帯に縄文を充填している。6・7はやや薄手で, 8は厚手のつくりである。9は甕の口縁部である。口唇部にはへら状工具によるキザミ, 口縁部は内面外面共にナデを施し, 薄手のつくりである。10・11は甕の頸部である。いずれも外面に明瞭な輪積痕を残し, 胴部が球状に張るタイプと考えられる。12は底部である。磨耗が著しいためはっきりしないが, 形態から甕と考えられる。比較的薄手のつくりである。いずれも胎土に砂や小石粒を多く含んでおり, 焼成はやや不良, 器面は磨耗している。



第148図 弥生土器

第4節 古墳時代

1 竪穴住居跡

S I-14 (第149図, 図版14, 78)

位置: I区。4D-46・47・56・57

規模・形態: 一辺4.5m~5.4mで, 平面方形を呈する。主軸方向はN-70°-Wである。

覆土: ローム塊を斑状に含む褐色土を主体として, レンズ状に堆積する。全体的に焼土粒と炭化粒を含む。

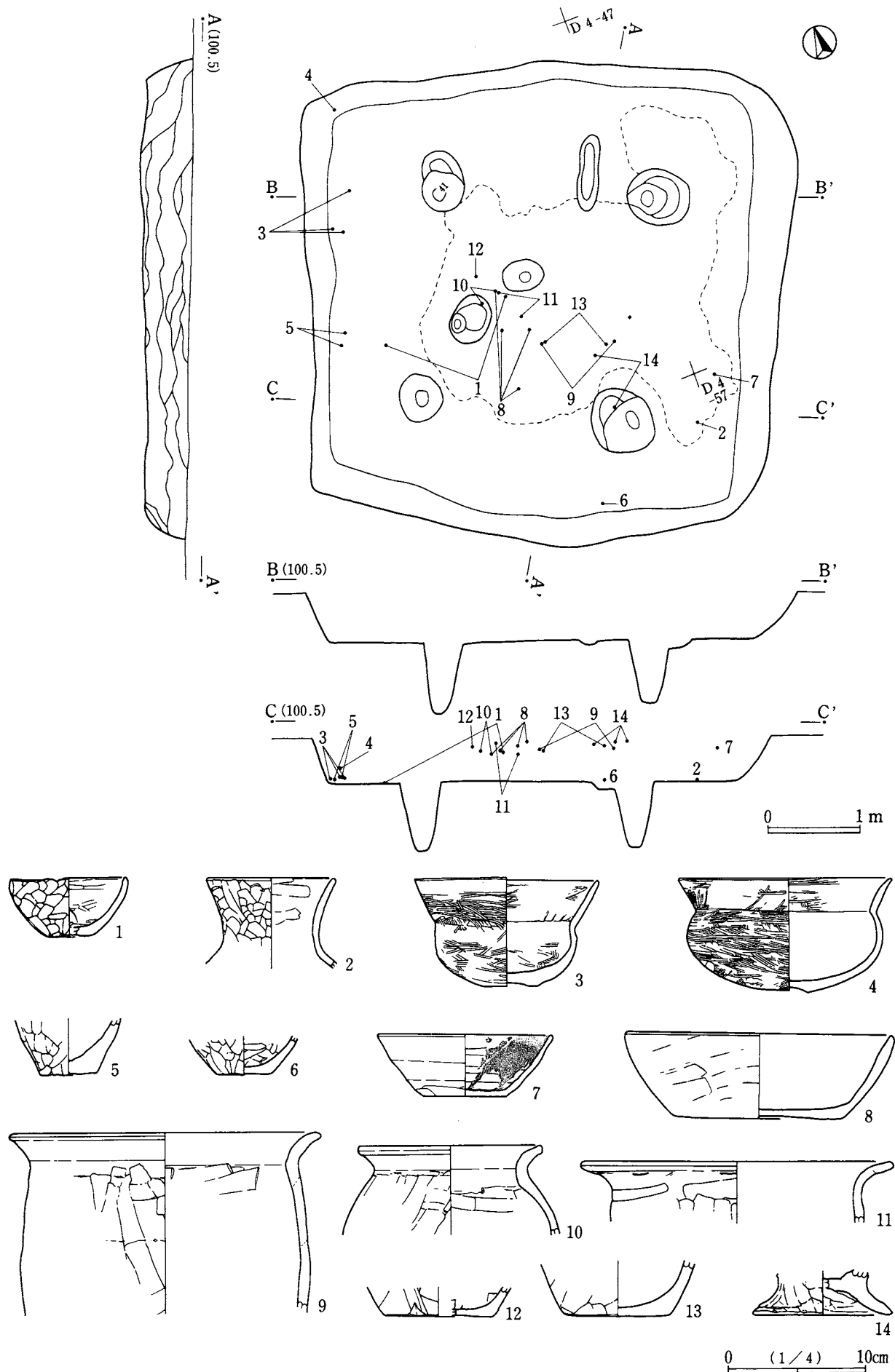
構造: ピットは6箇所で見出されたが, 主柱穴は対角線上に位置する4本であろう。住居中央付近に位置する2基のピットは, それぞれ径0.35m~0.45mで深さ0.37m, 径0.40m~0.50mで深さ0.15mである。床面は褐色土による貼床で, 床面中央から北東側及び東側に硬化面の広がりが見られた。また北側主柱穴間の若干東寄りに深さ0.03m~0.05mの間仕切溝が見出された。

遺物出土状況: 確認面及び覆土上層から奈良・平安時代の遺物が集中して, また北西壁側の床面付近から古墳時代の遺物がややまとまって出土した。

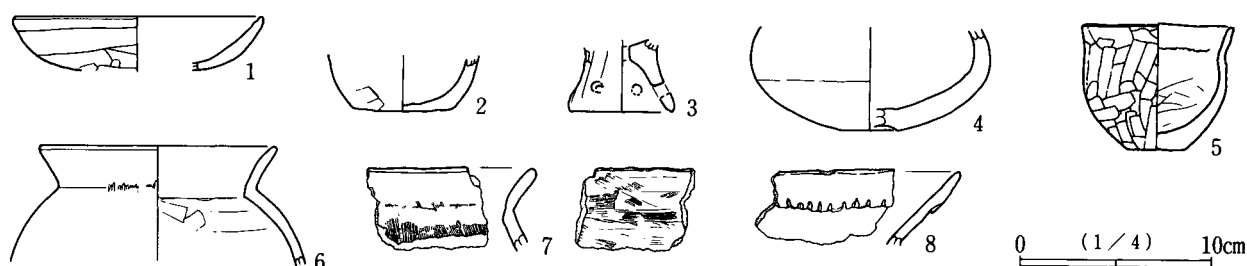
遺物: すべて土師器である。1は杯である。口径5.0cm, 器高は4.2cmで, 体部には内面外面共にヘラ削りを施す。2は壺ないし埴の口縁部~頸部である。口径8.9cm, 頸部は屈曲せず丸みを帯びて立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。3・4は小型埴で, いずれも胴部よりも口径のほうが大きく, 底部がわずかに窪むタイプである。3は口径13.4cm, 器高7.8cm, 4は口径15.1cm, 器高7.9cmで, いずれも口縁部内面と外面全面にミガキを施す。5・6・12・13は甕の底部であろう。いずれも外面に縦ヘラ削りを施す。7はロクロ土師器の杯で, 内面にススが付着する。8は非ロクロ土師器の杯で外面に手持ちヘラ削りを施す。9~11は甕の口縁部で, 9・11が長胴型, 10は球胴型を呈するものと考えられる。いずれも体部外面に縦ヘラ削りを施す。14は台付甕の脚台部で, 裾が大きく広がるタイプである。外面に斜ヘラ削りを施す。

2 グリッド出土遺物 (第150図, 図版78)

図示したものはすべて土師器である。1は杯もしくは皿で, 口径12.9cmである。外面にはヘラ削りを施す。2は杯で, 体部が急角度で立ちあがるタイプである。3は器台で, 裾が広がらないタイプである。器受部中央と脚部に4箇所の透孔が見られた。4は小型壺で, 胴部が偏球状に強く張るタイプと考えられる。5は小型甕で, 口径7.9cm, 器高6.9cmである。外面には縦ヘラ削りを施す。6は甕で, 口径12.1cm, 口縁部が「く」字形に屈曲し, 胴部が球状に張るタイプである。7は甕の口縁部である。頸部は「く」字形に屈曲し, 外面にハケ目調整を施す。8は甕である。口縁部は折返しによる複合口縁で下端にヘラ状工具によるキザミを施す。



第149図 S I-14遺構図・出土遺物



第150図 古墳時代前期グリッド出土遺物

第5節 奈良・平安時代

遺構としては、基壇建物跡、掘立柱建物跡、竪穴住居、竪穴状遺構、鍛冶関連遺構、溝、土坑、炭窯、井戸、墓などが検出されている。I区からVI区まで分布しているが、特にII、III区に多く分布している。II区は保存区域となったため、4基の基壇建物跡のみが調査されたが、トレンチによる確認調査の結果、I区に接する西側と基壇建物跡の北側から、当該期に属すると見られる竪穴住居跡もしくは竪穴状遺構がまとめて検出されている。II～III区は、基壇建物跡が特徴的だが、IV区は鍛冶関連遺構が比較的目立つ。VI区においては、当該期の遺構の分布はまばらで、住居跡は検出されなかった。

1 基壇建物跡・掘立柱建物跡

II区

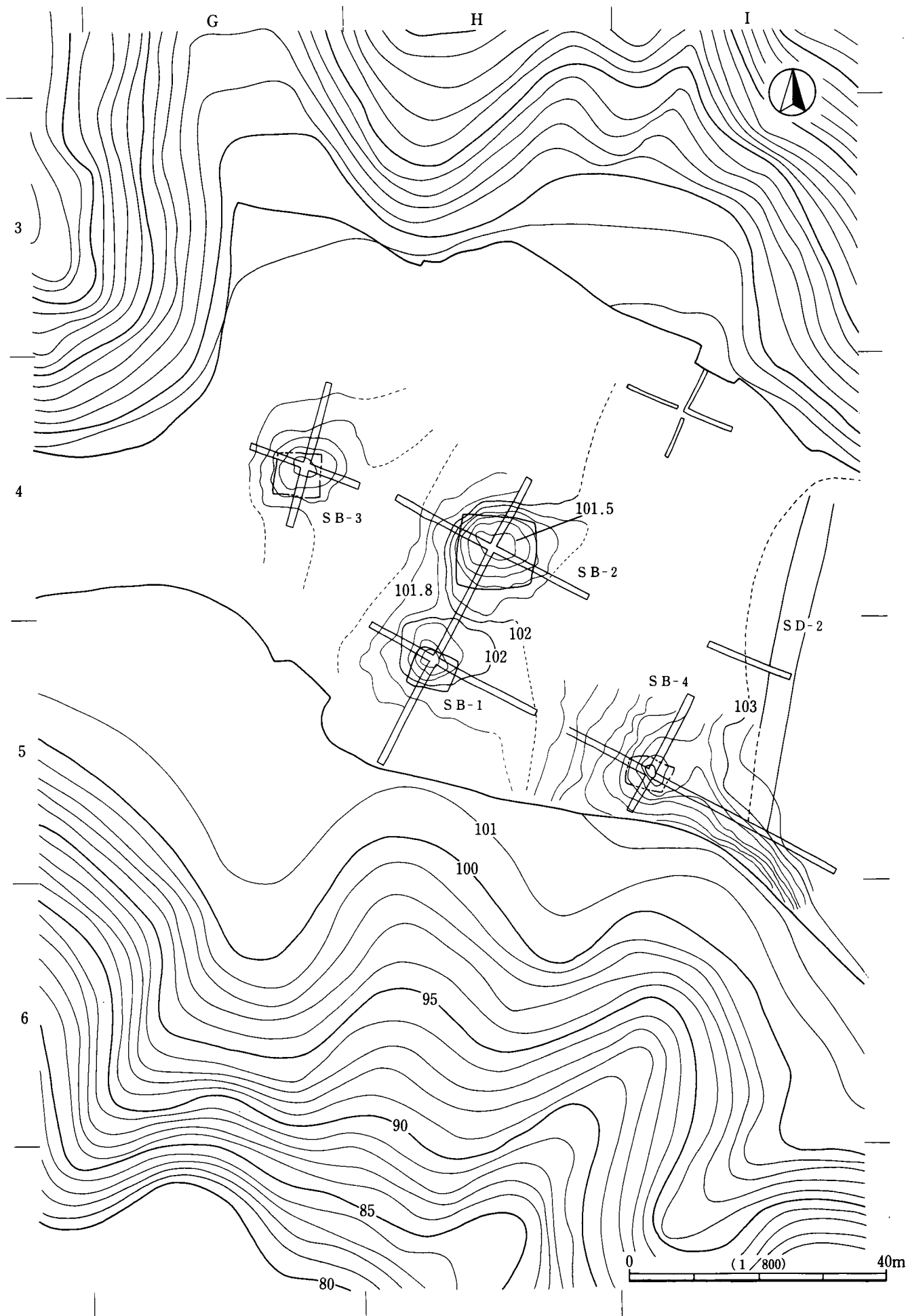
SB-1 (第152・153図 図版14・15・85)

位置：5H-12・13・22・23 SB-2の北西に位置する。

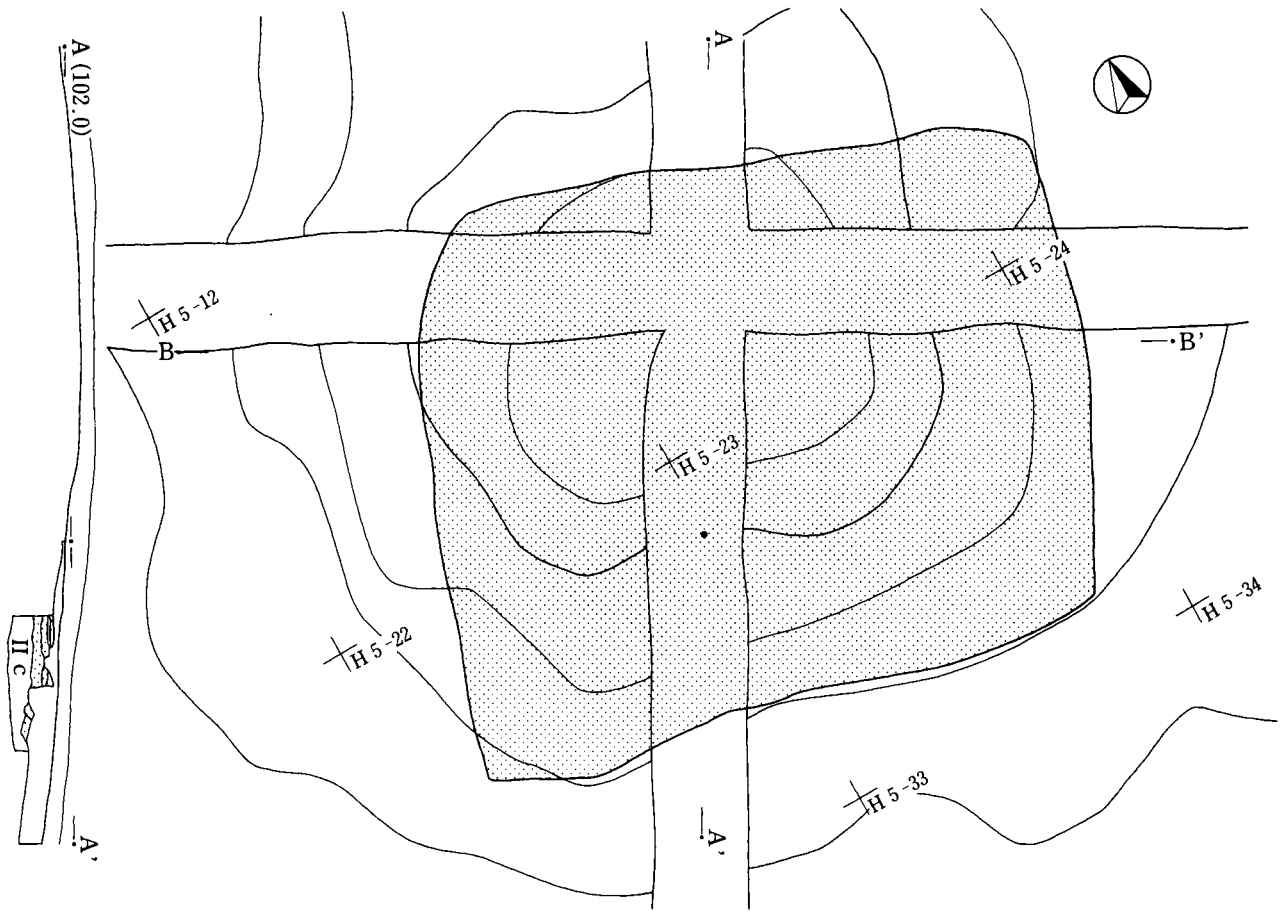
規模・形態：十字のトレンチ調査でIIc層上の地業層を東西と南で確認した後、表土層を除去し、東西幅がやや長い不整形の基壇プランを確認した。確認面での規模は東西6.7m～7.0m、南北5.2m～6.0mを測った。礎石や礎石据えつけ痕跡の確認までにはいたらなかった。

覆土：トレンチの東西と南でほぼ垂直に積み上げられた3層～4層の地業層が確認された。暗黄褐色土、明褐色土、褐色土、暗褐色土、黒褐色土等がほぼ水平に堆積しており、いずれもロームブロックを含み、比較的硬く締まった土層である。なお、南で炭片を多く含む黒褐色土層が、東で焼土粒を含む白灰色砂混粘土層が中間層で認められた。東西の地業層の外側で確認された層は硬化しておらず、基壇流出土と捉えられる。基壇化粧の痕跡は未確認である。また、基壇西側には地業底面とほぼ同レベルの硬化層が確認された。基壇造成時の整地層の可能性がある。比較的高所の基壇周辺をIIc層まで掘り下げ、周辺を整地し、その上に簡易な基壇を造成したと推測される。

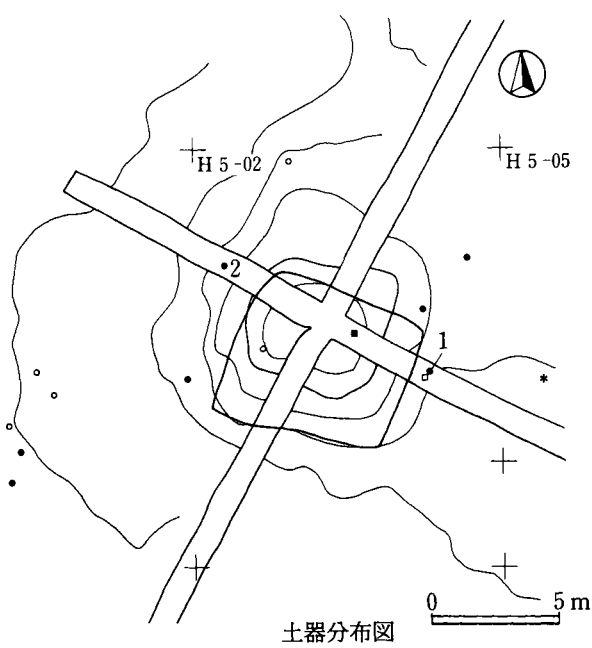
遺物出土状況：基壇周辺から丸瓦20点2,195g、平瓦33点5,413gが出土した。基壇を中心とした出土が見られるものの、全体の出土量が少ない。瓦の屋根葺材としての積極的な利用は想定し難い。土器については、基壇上面から須恵器甕と土師器甕の小破片が出土した他は、基壇周辺から須恵器甕や土師器甕の他、油煙付着の土師器杯と緑釉皿の破片が出土した。



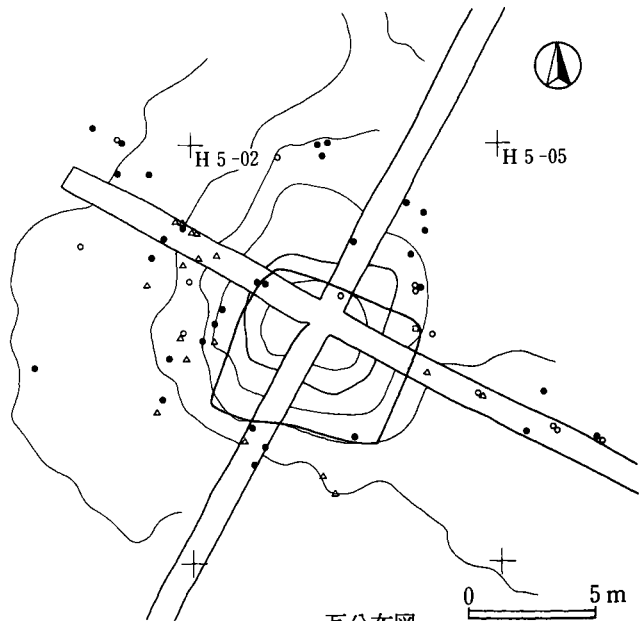
第151图 II区基壇建物跡群周辺地形測量図



SB-1 遺構図 (断面図の網掛けは、ロームブロックを含む層)

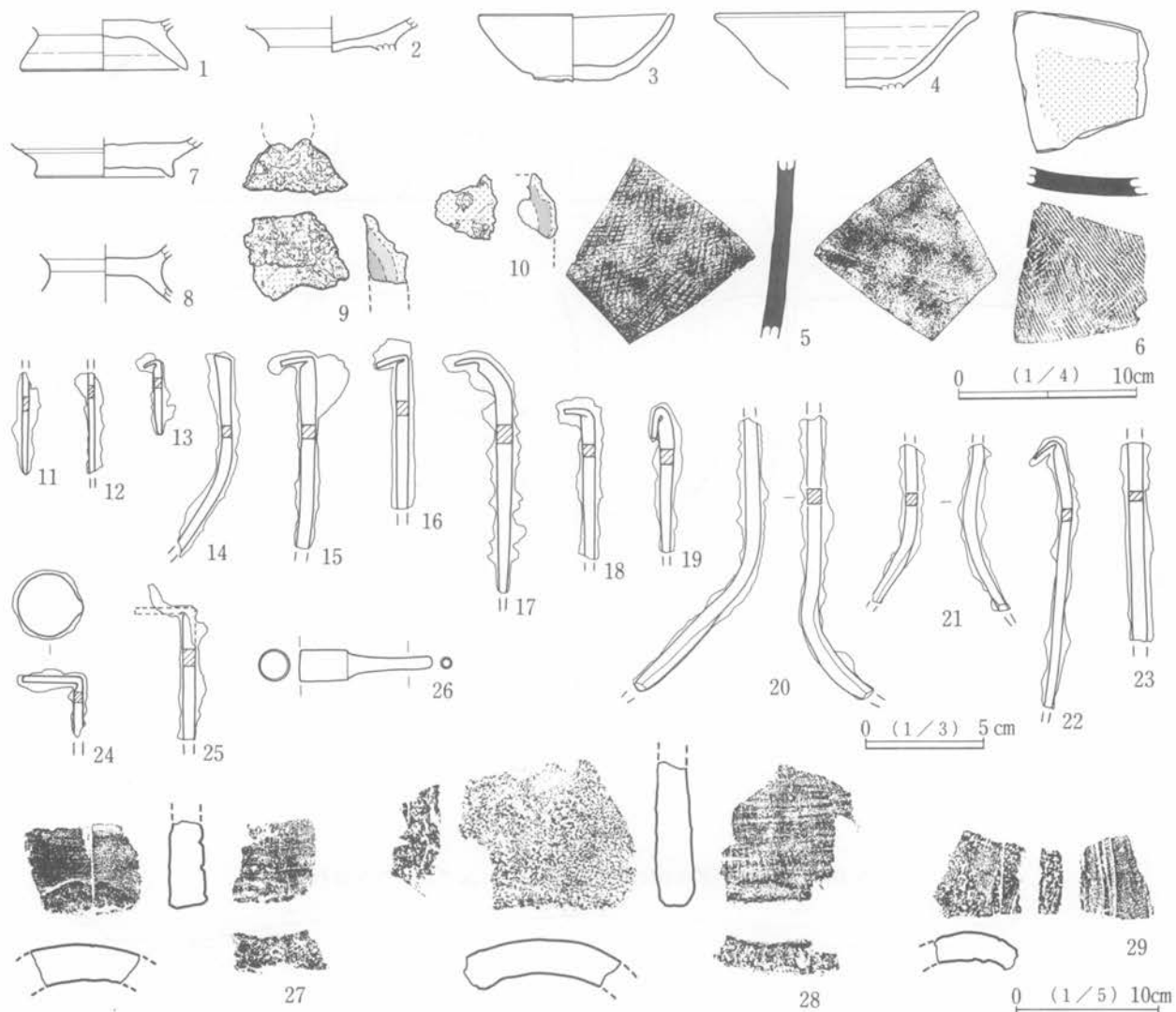


土器分布図



瓦分布図

第152図 SB-1 遺構図



第153図 SB-1・3・4出土遺物 (SB-1: 1, 2, 11, 27~29 SB-3: 3~6, 9, 10, 12~14 SB-4: 7, 8, 15~26)

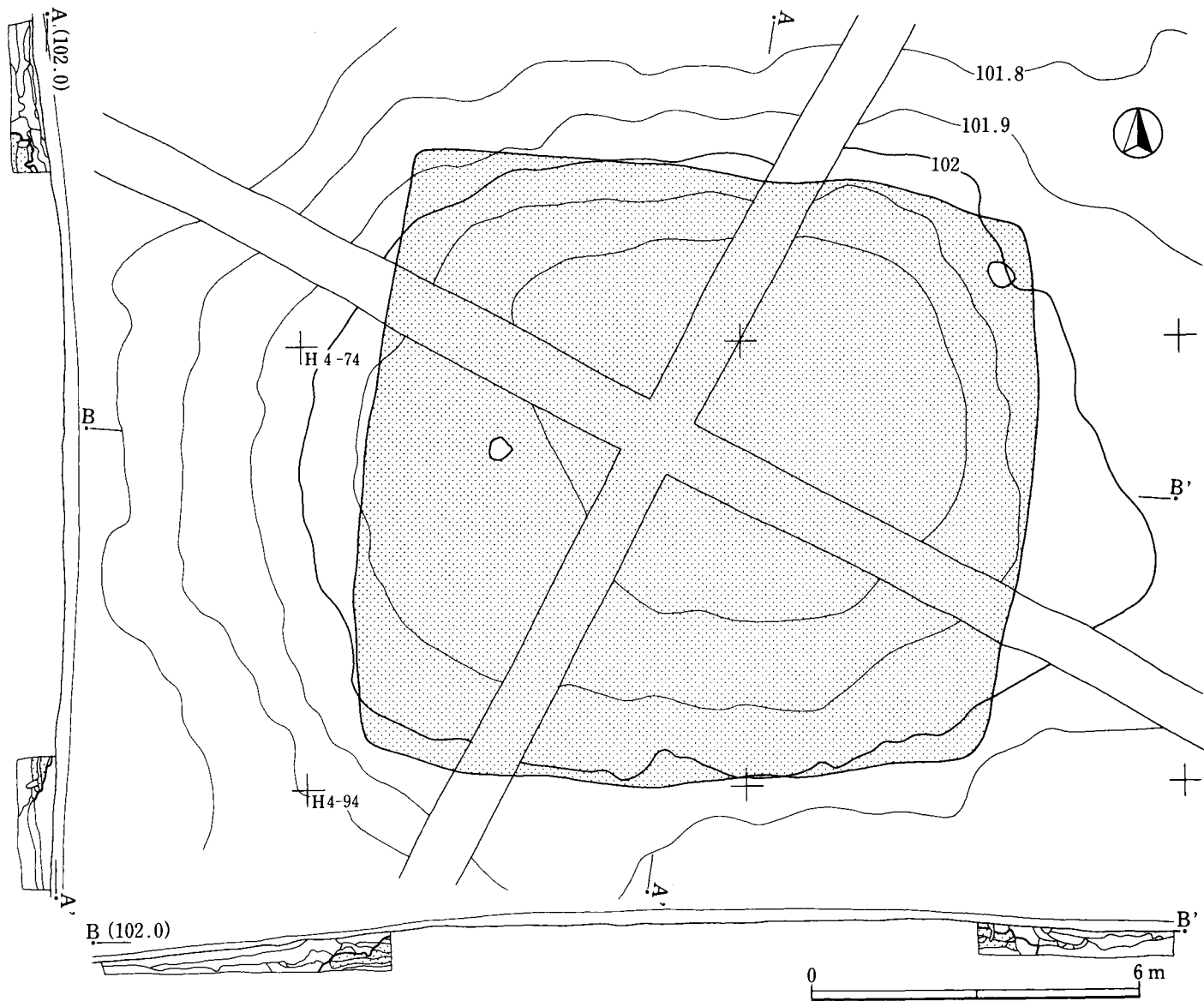
出土遺物：1, 2は土師器である。1は足高高台杯, 2は高台付碗である。11は鉄釘である。27~29は丸瓦である。

SB-2 (第154~163図 図版14, 15, 85, 89~92, 94, 95)

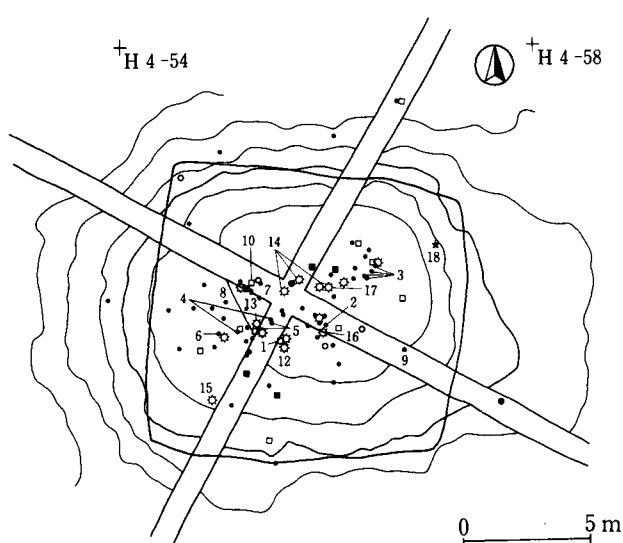
位置：H 4-64~67・74~77・84~87

規模・形態：十字のトレンチで地業層を確認した後、表土を除去し、東西に長い長方形基壇プランを確認した。東西11.4m~12.2m, 南北9.8m~11.2mを測る。基壇の西側と北東隅で礎石が確認された。ただし、現位置かは不明で、他の礎石や据えつけ痕跡の確認にはいたらなかった。

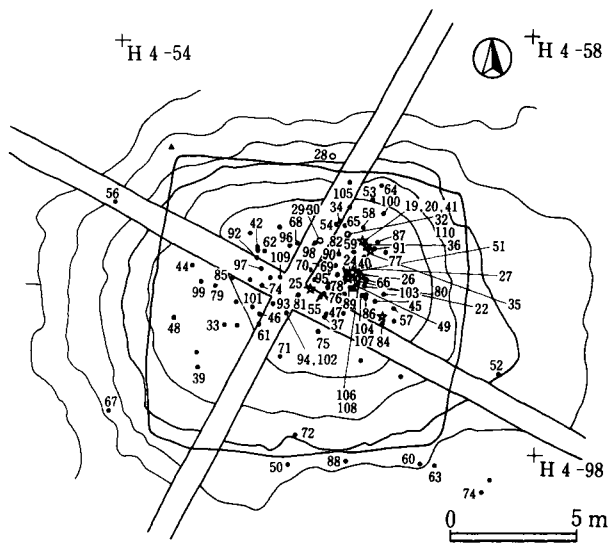
覆土：東西南北で地業層が確認された。南側と東側のトレンチの地業直下層から基壇周辺へと伸びる暗褐色土層と暗黄褐色土層、西側と北側のトレンチの基壇周辺のロームブロックを含む暗褐色土層と褐色土層が整地層と想定される。西端の地業の断面には段々が認められ、一部攪乱されているものの残る三方も斜面状を呈する。基壇化粧は不明である。整地面上に積上げ基壇を造成し、基壇は段状に積み上げられた可



S B-2 遺構図 (断面図の網掛けは、ロームブロックを含む硬化層)

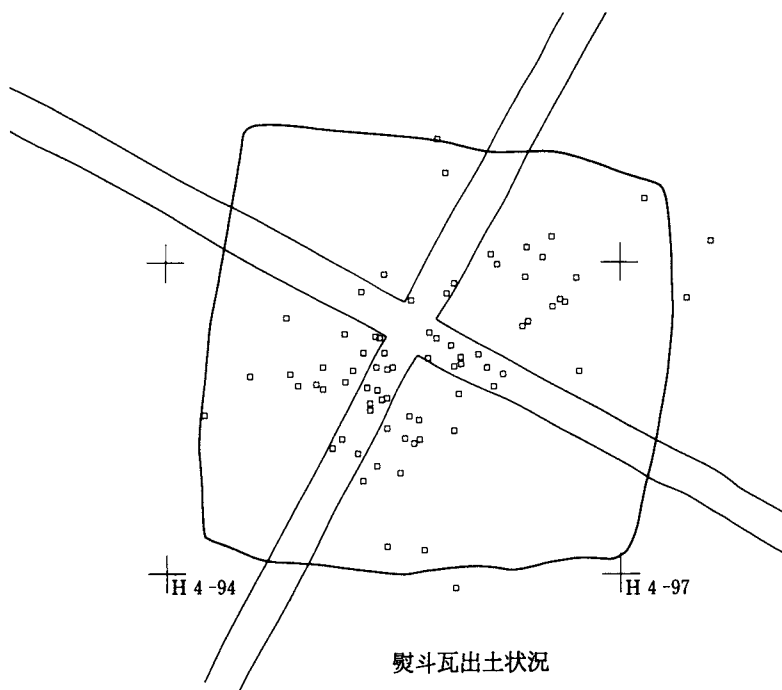
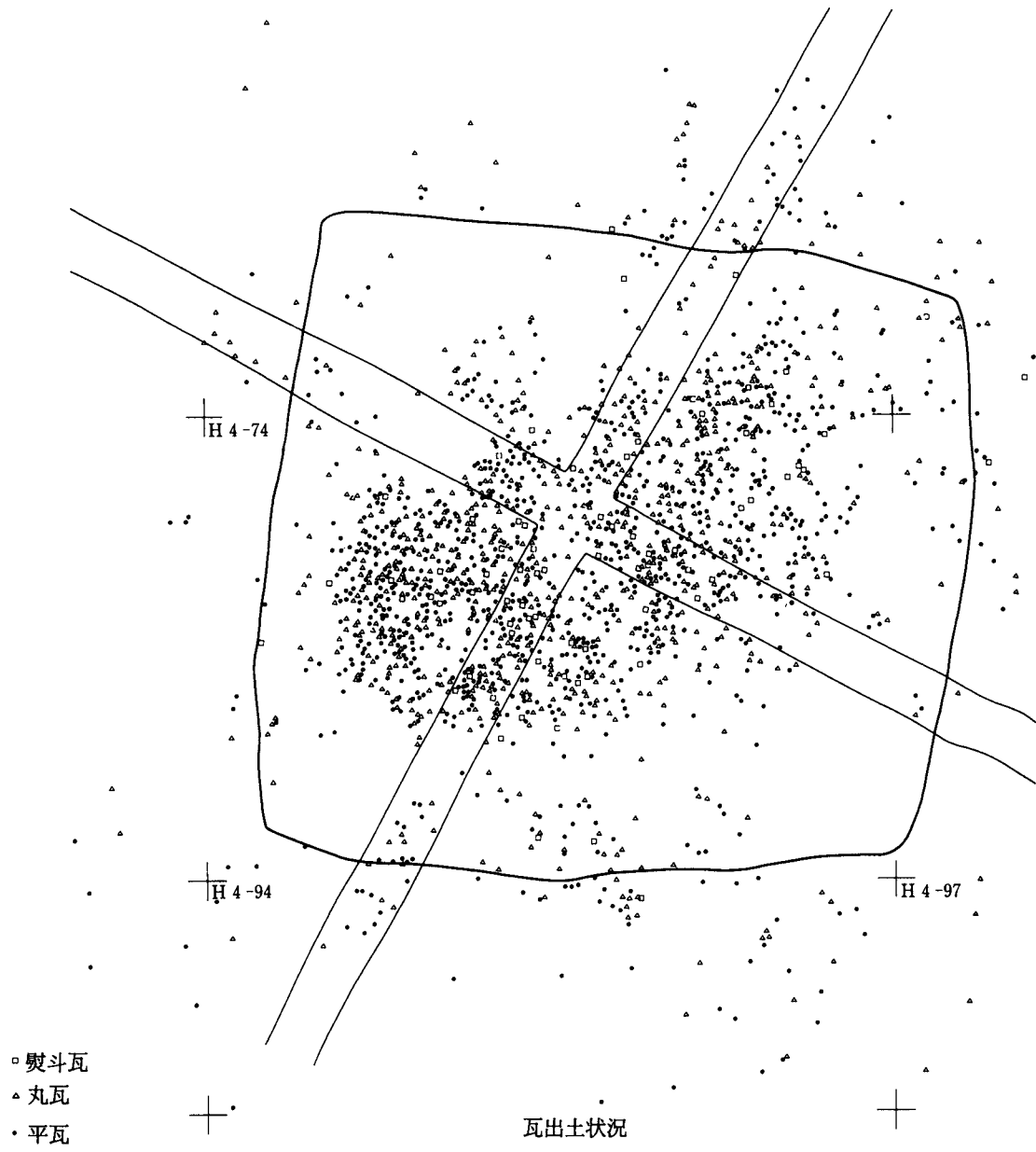


土器分布図

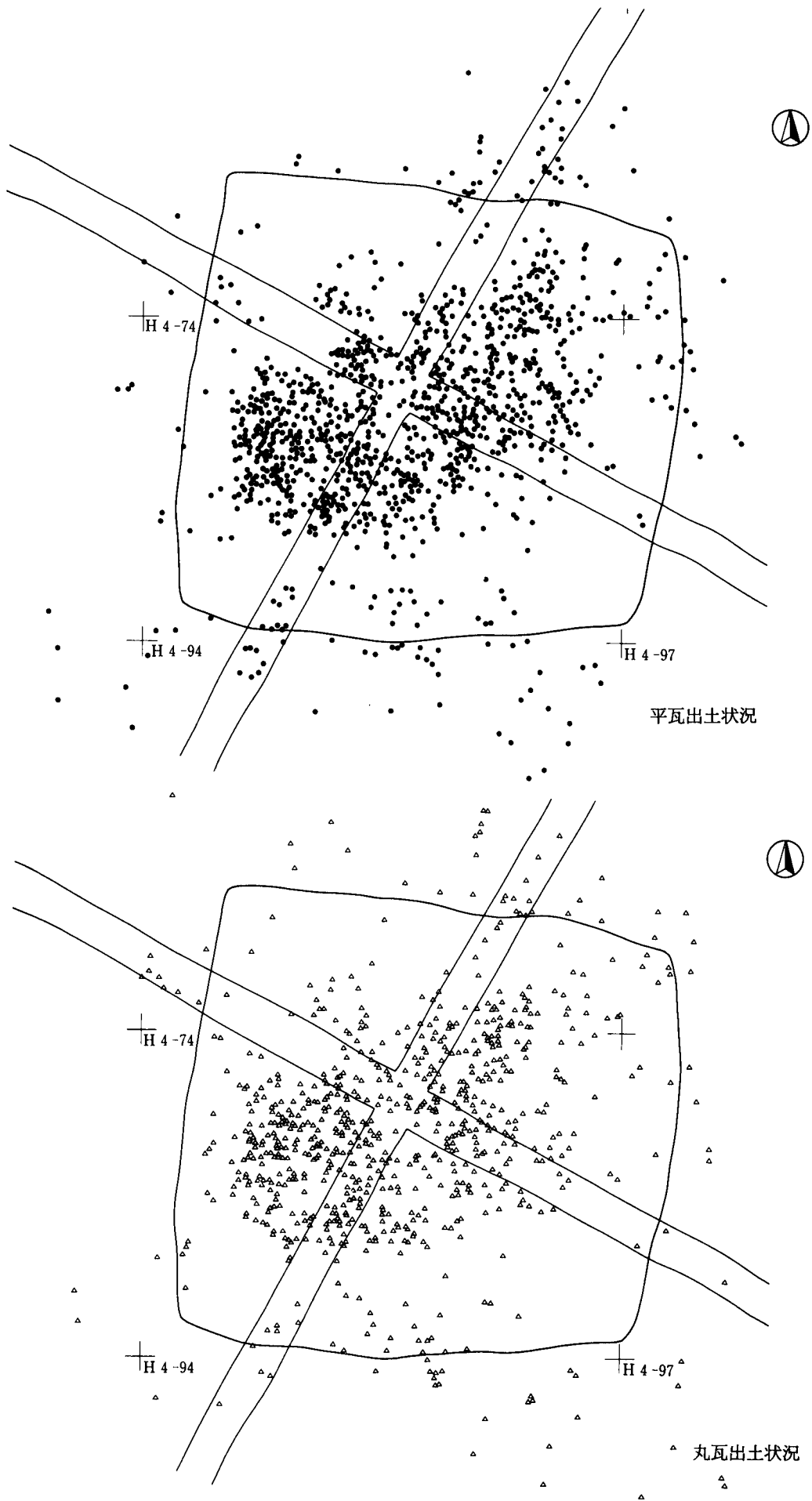


鉄製品分布図

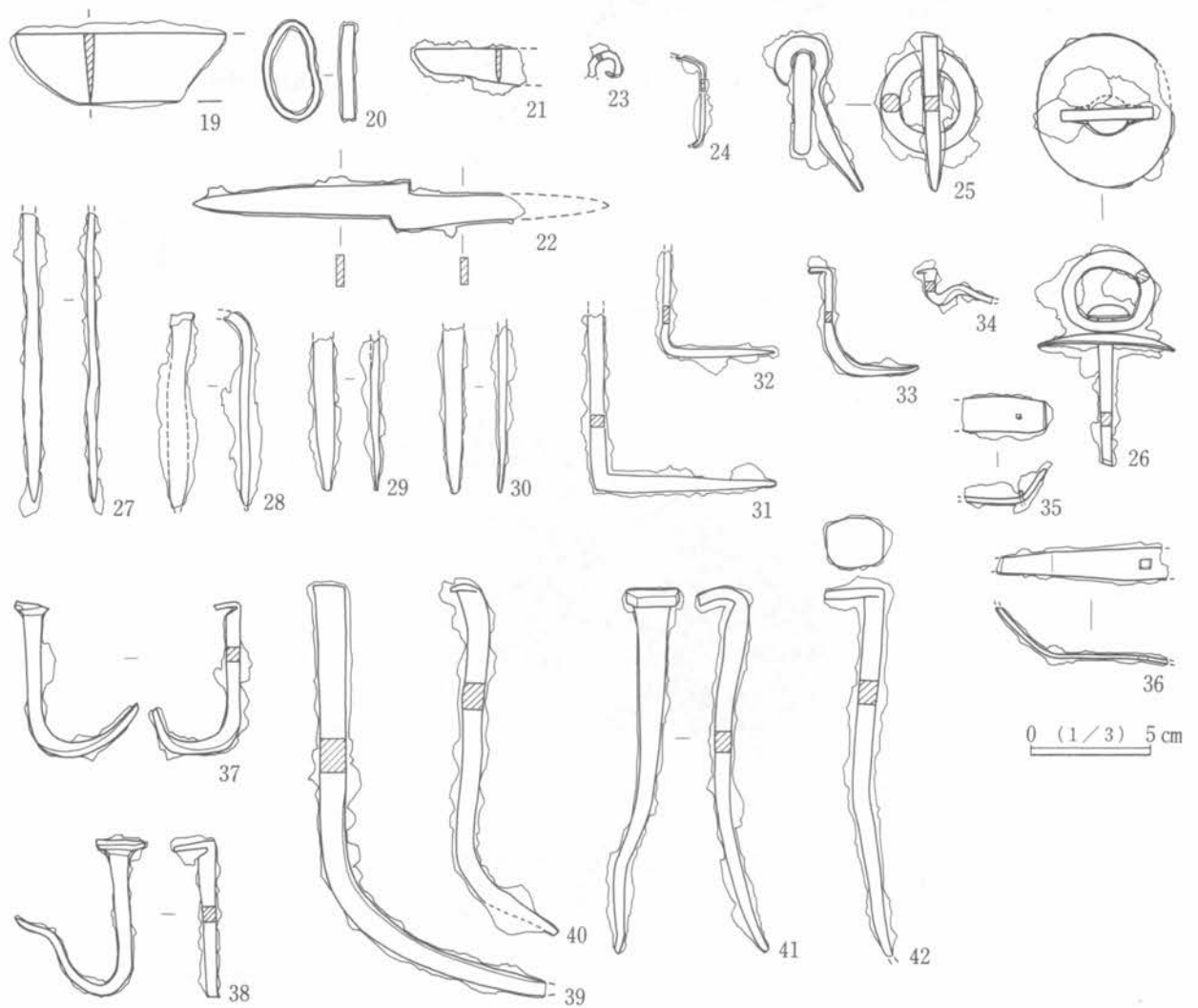
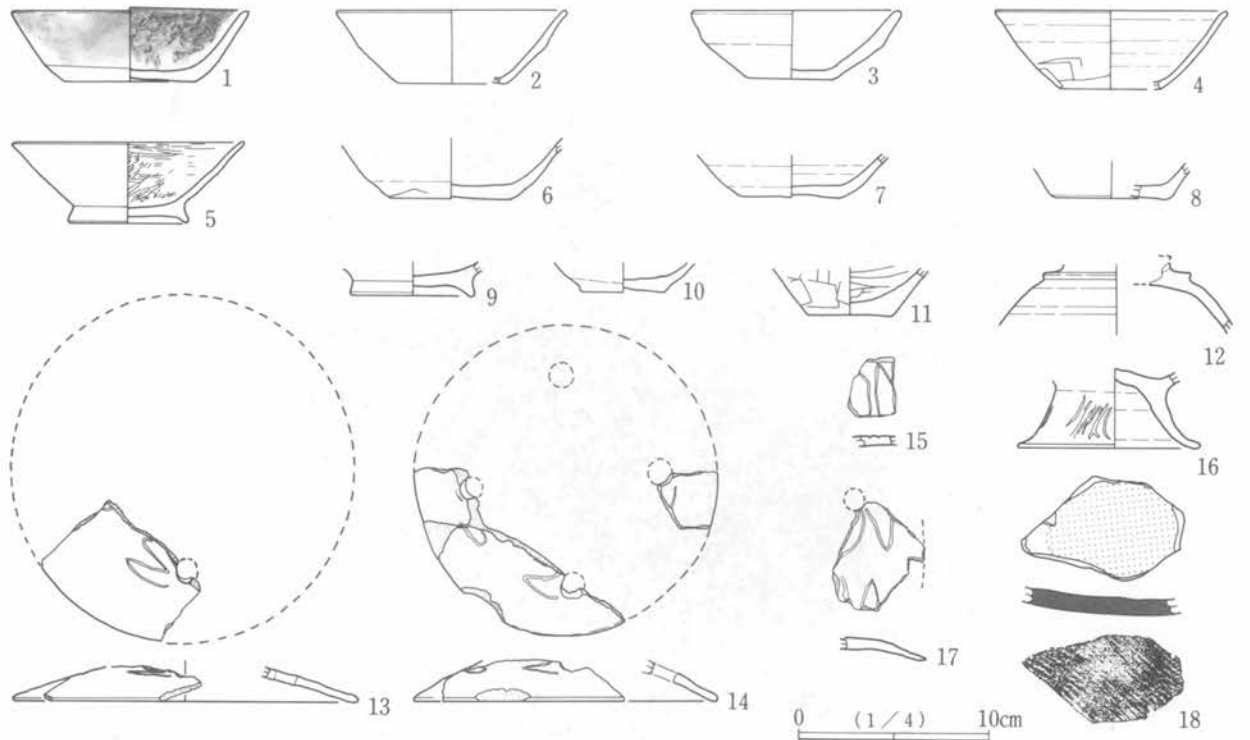
第154図 S B-2 遺構図



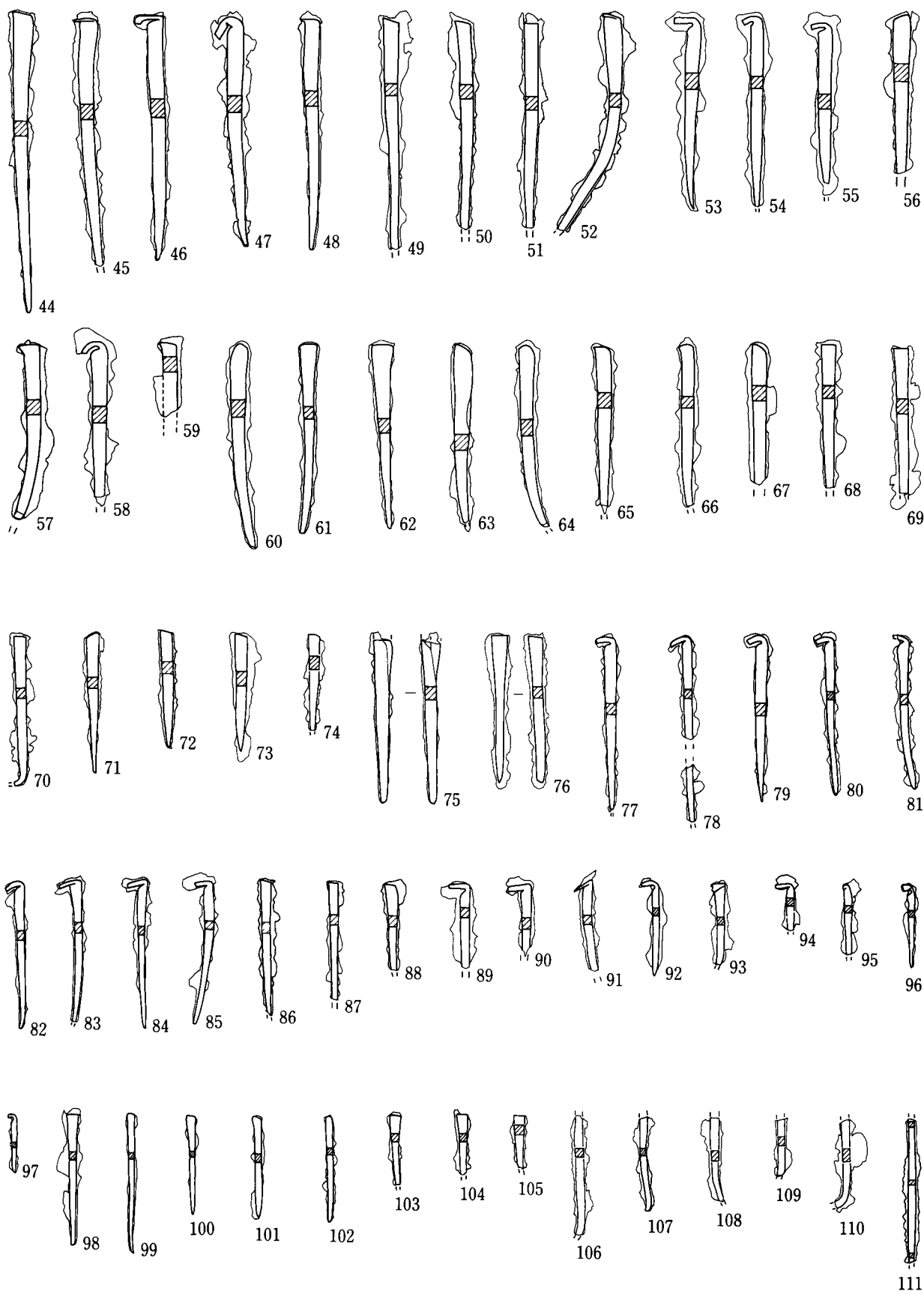
第155图 SB-2 瓦出土分布图 (1)



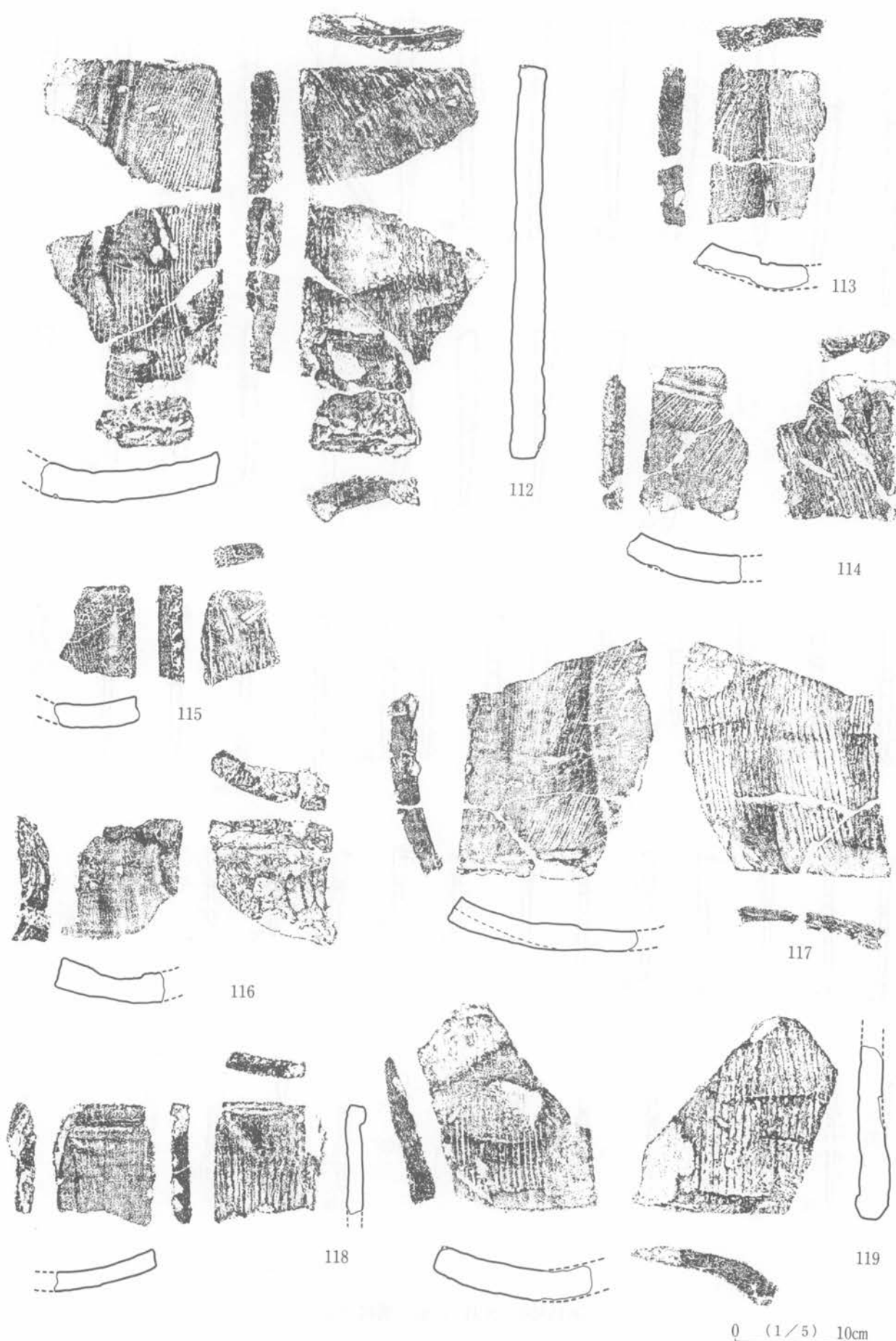
第156図 SB-2 瓦出土分布図 (2)



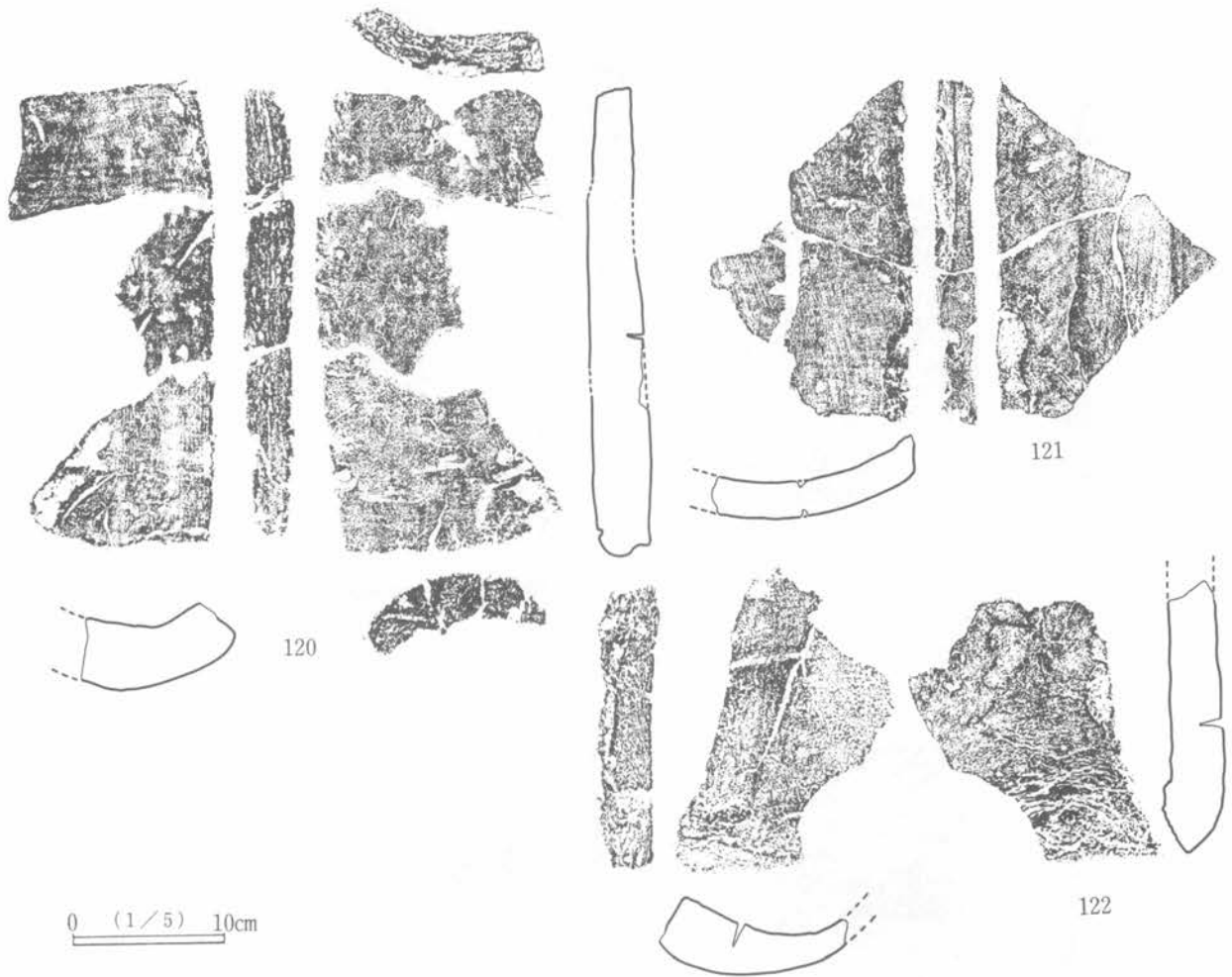
第157图 SB-2出土遗物(1)



第158图 SB-2 出土遺物 (2)



第159图 SB-2出土瓦(1)



第160図 SB-2出土瓦(2)

能性が推測される。地業は黄灰褐色，暗黄灰褐色，明褐色土，褐色土，暗黄褐色土がほぼ水平に堆積し，大半がロームブロックを含む硬く締まった土層である。基壇上面から周辺の表土層から基壇流出土層では焼土粒の混入が見られる。

遺物出土状況：土器は基壇上面中央に集中して出土した。油煙が付着したものを含む土師器杯が大半で，この他須恵器甕や香炉蓋，転用硯も出土した。鉄製品も土器同様に基壇上面中央で集中して発見された。釘類が大半であるが，金具類と刀装具，平釘については基壇中央やや東側の直径3.0m程の範囲から集中して発見された。瓦は，基壇中央部を中心に北東から南西に伸びた長径約10.0m，短径約5.3mほどの長楕円形の中に集中して分布している。熨斗瓦は比較的基壇中心部に集中しているのに対し，平瓦，丸瓦は，より周辺に分散する傾向にある。

遺物：1～4，6～8，10はロクロ土師器杯である。1・4は手持ちヘラ削りが施され，その他は底部回転糸切り無調整である。1の内面には油煙の付着が認められる。5・9は高台付碗で，内面ヘラミガキの後，黒色処理が施される。11は土師器甕の底部である。12～15，17は香炉蓋であり，16は香炉の身の部分と思われる。18は，須恵器甕の胴部片で，内面は平滑となっており，転用硯として使用されている。

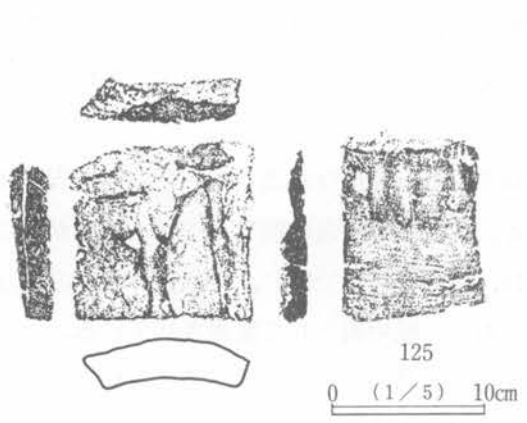
19～42は，鉄製品である。19は直刀の切先部分の断片で，20は刀装具である可能性が考えられる。21は刀子である。22～24，35・36は用途不明品である。25・26は吊り手金具と思われる。



123



124



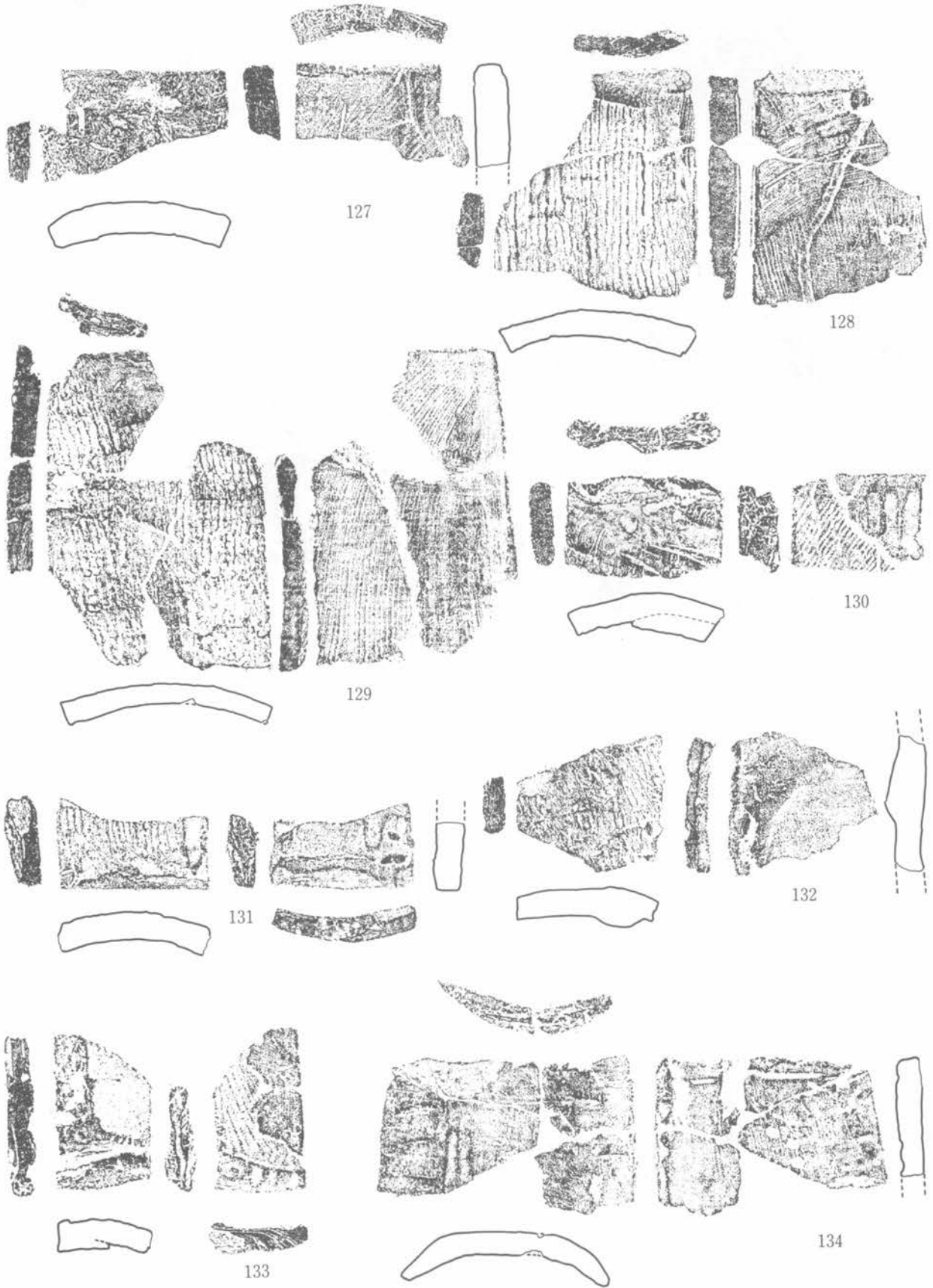
125

0 (1/5) 10cm



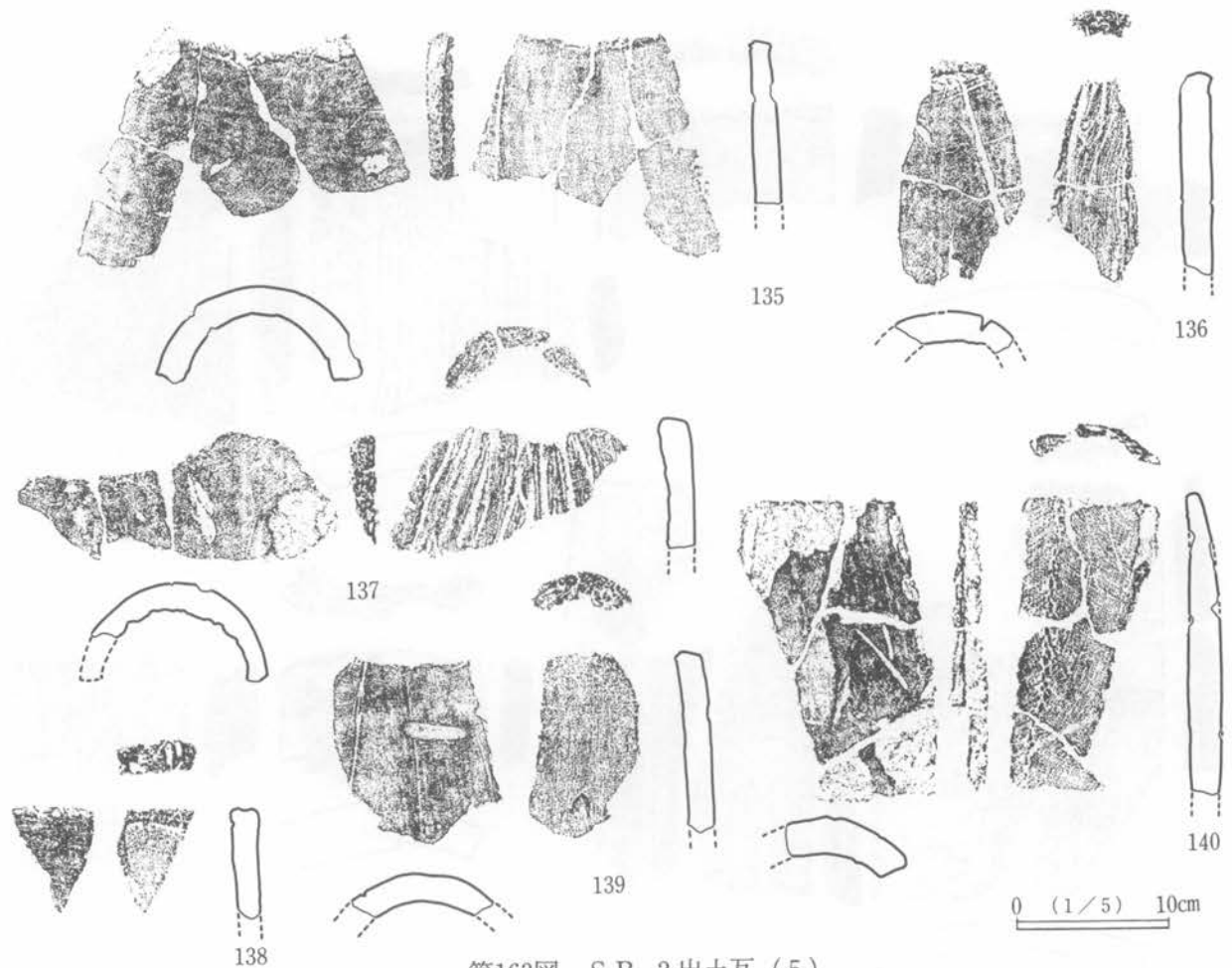
126

第161图 SB-2出土瓦(3)



0 (1/5) 10cm

第162图 SB-2出土瓦(4)



第163図 SB-2出土瓦(5)

27～32は鋸と思われる、33・34、37～111は鉄釘である。

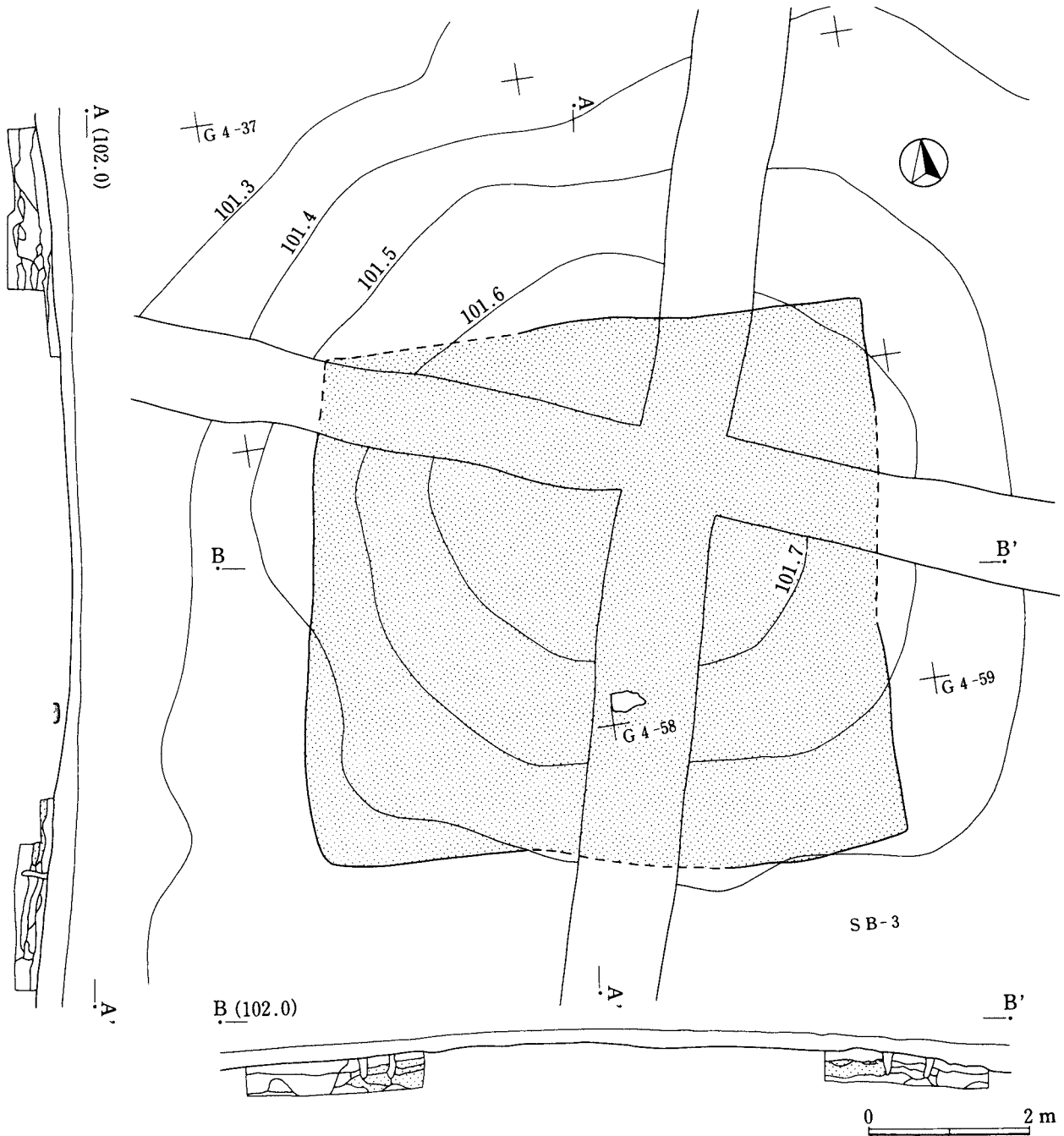
112～122は、平瓦及び熨斗瓦である。桶巻き作りで、凸面には細かな平行叩きが施される。127は隅欠きが行われている。135～140は丸瓦である。

SB-3 (第164・153図 図版16・85・95)

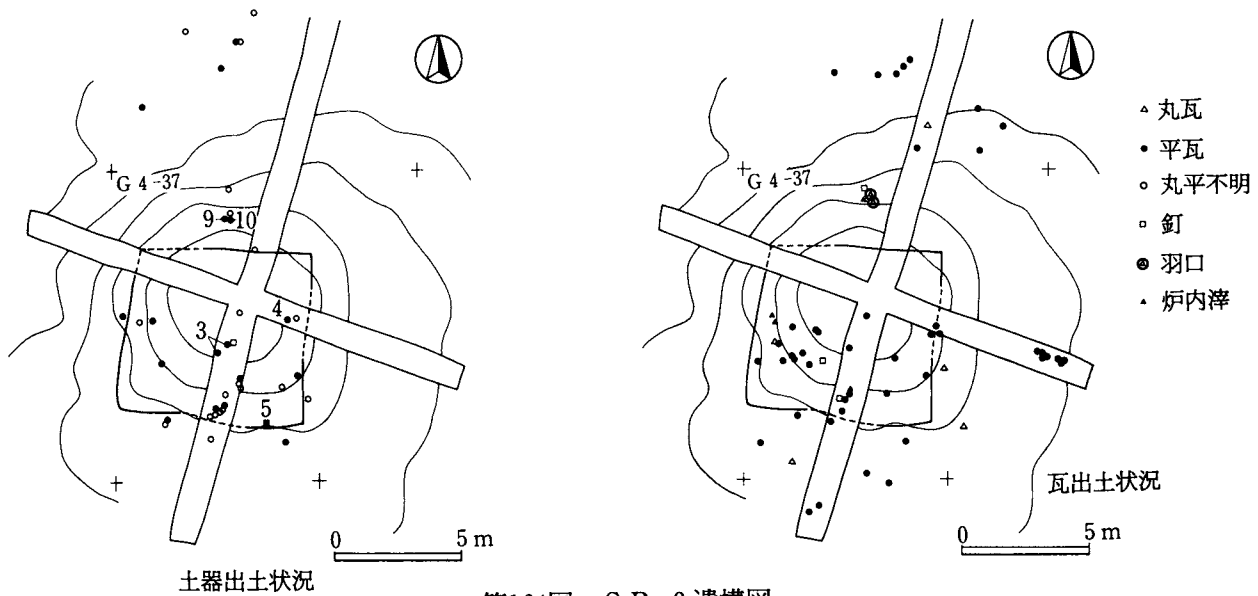
位置：G 3-37・38・47・48・57・58 SB-2の北西に位置する。

規模・形態：十字のトレンチで地業層を確認した後、表土を除去し、方形に近い基壇プランを確認した。東西6.8m～7.2m、南北6.2m～6.7mを測る。トレンチ南側で礎石1か所を確認した。据えつけ痕跡は未確認であるが、ほぼ水平に固定しており、現位置である可能性がある。東西0.4m、南北0.2mほどの不整形である。この他の礎石や据えつけ痕跡は未発見である。

覆土：東西南北で地業層が確認された。地業層直下の土層の性格は不明ながら、東西と南の地業層下から基壇周辺へと続いて、ロームブロックを多く含む土層が確認されたことから、整地後に積上げ基壇が造成された可能性がある。ただし、東西端は中央に近い地業層と異なり、締めりがやや甘い。また北端でもプラン確認された北側で、地業の可能性がある土層が確認されている。よってプラン確認規模よりも東西幅はやや短く、南北幅はやや長くなり、方形基壇の可能性がある。地業は褐色土、暗褐色土、暗黄褐色土がほぼ水平に堆積し、比較的硬く締まった土層である。基壇の隅に限られるものの、他の基壇建物跡と比較すると、地業の各層の厚さにバラツキがあり、硬く締められた土層が少ない傾向がある。また、表土層で



SB-3 遺構図 (断面図中網掛けは、ロームブロックを含む硬化層)



第164図 SB-3 遺構図

は焼土粒の混入が広い範囲で認められ、西側の基壇上面から周辺と、南側と北側の基壇周辺の土層でも焼土粒の混入が認められた。

遺物出土状況：基壇上面を中心に丸瓦3点508g，平瓦33点8,673gが出土した。全体量の出土量が少なく，屋根葺材として積極的に利用していた可能性は低い。土器についても基壇上面を中心に，土師器杯・甕，須恵器甕の破片が出土した。また，基壇の北1.5m程の地点で羽口と鉄滓が少量であるがまとまって出土した。

出土遺物：3，4は土師器である。3は杯で，底部に回転糸切り痕が見られる。4は足高高台杯である。5は須恵器甕である。9・10は韃羽口片である。12～14は鉄釘である。

S B - 4 (第165・153図 図版16・85・95・97)

位置：I 5 - 50・51・52・60・61・62 S B - 2の南東に位置する。

規模・形態：西側と南側のトレンチで地業層を確認した後，表土を除去し東西に長いほぼ長方形の基壇プランを確認した。東西6.0m～7.0m，南北4.0m～5.0mを測る。礎石や礎石据えつけ痕跡の検出までにはいたらなかった。

覆土：西側トレンチでIIc層と想定される自然土層上で地業層が確認された。ただし，南側のトレンチでは地業層下の自然土層の性格は不明確である。地業は暗黄褐色土，灰黄褐色土，暗褐色土がほぼ水平に堆積し，いずれもロームブロックを含み，比較的硬く締まった土層である。なお，南側の地業の中間層で，炭片と砂混粘土質土を含む黄灰褐色土が認められた。西側も南側も攪乱と想定される掘込みと重複しており，基壇外辺の状況は不明確である。ただし，硬化した地業層が垂直に立ち上がり，山裾状に広がっている点から，亀腹状の基壇の可能性はある。ただし，基壇化粧の痕跡は発見出来なかった。なお，西側の地業上面で焼土粒が散った土層が確認された。

遺物出土状況：基壇上面の南側と北東隅で，釘類の鉄製品がまとまって出土した。S B - 4の建物に伴うものであろう。この他，基壇上面西側で土師器杯・甕片が，基壇北側4m程の地点で土師器杯や転用硯が出土した。瓦は10m離れて平瓦片が2点発見されたのみである。S B - 4の建物には瓦は葺かれていなかったと推測される。

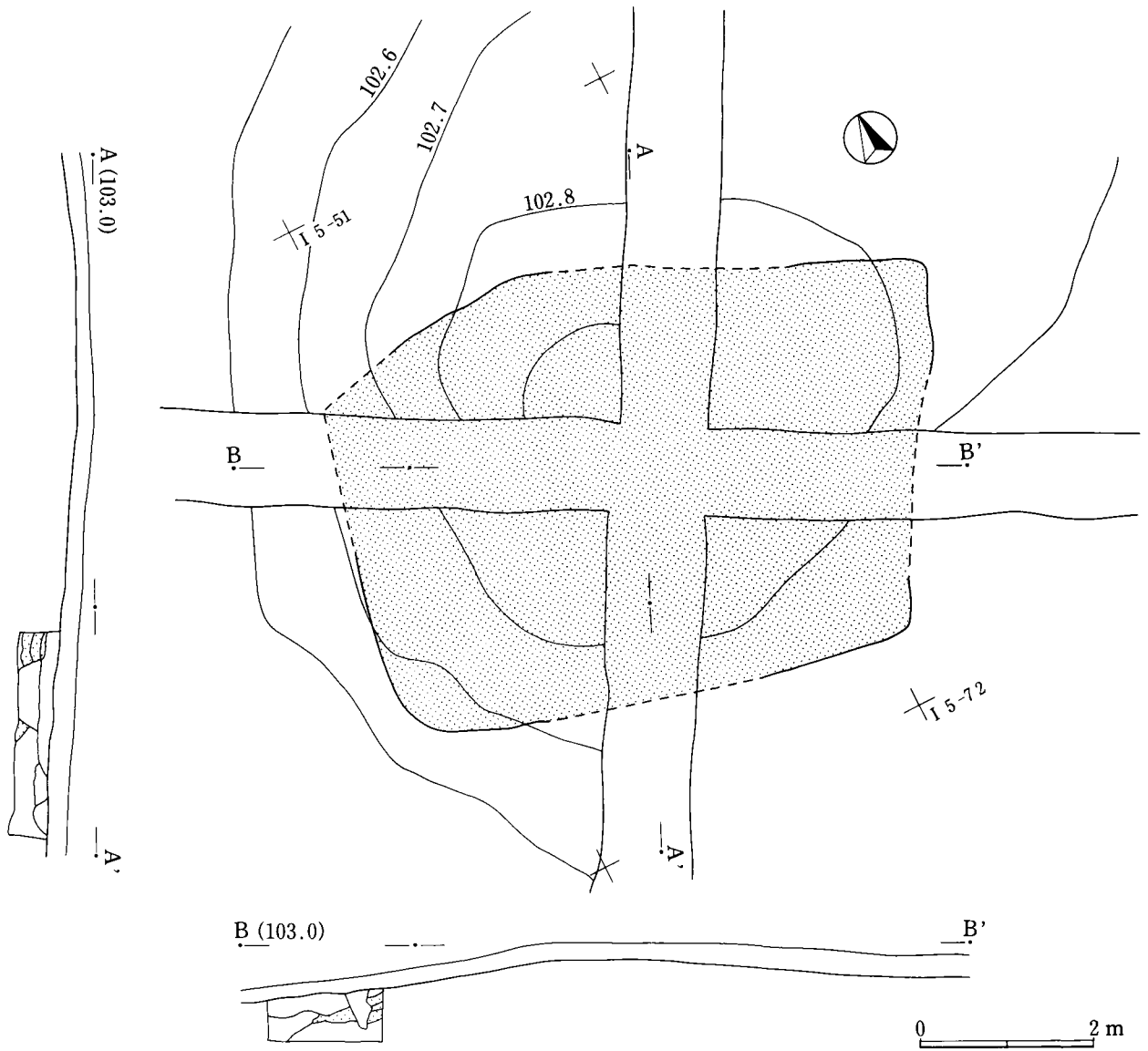
出土遺物：6は須恵器甕の胴部片で，内面は平滑となっており，転用硯として使用されている。7は高台付椀，8は足高高台高杯である。15～23は鉄釘である。24は頭部が円形に作られており，飾り釘の可能性が考えられる。25は鋸か。26は煙管の吸い口である。

(2) III区

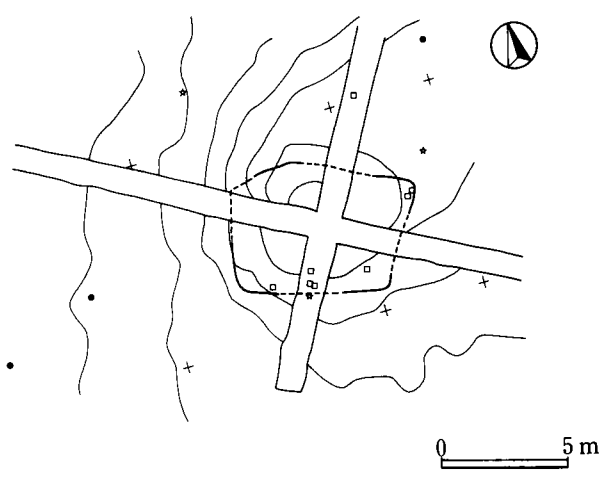
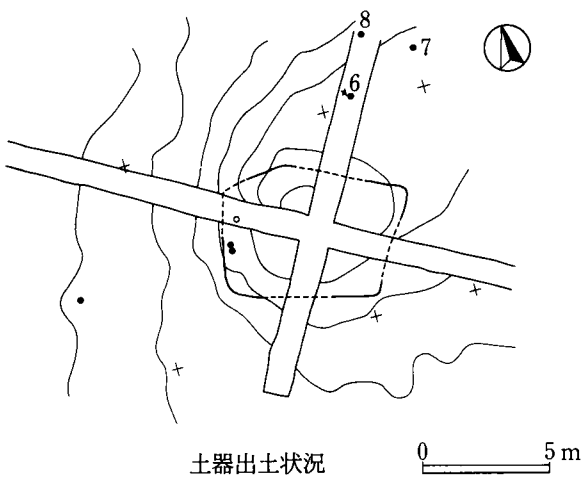
S B - 6 a (第168・170図 図版17・84・85・95)

位置：J 6 - 29～49，K 6 - 20・21・30・31・40・41

規模・形態：発掘調査前は顕著な地膨れは認められず，確認トレンチにおいても基壇とは明確にできなかった。表土層の除去後，10m四方の硬化した黒褐色土の盛上がり認められ，この段階に至り基壇の存在が予測された。その後，周囲に6本のサブトレンチを設定し，基壇の拡がり確定した。東西10.0m～10.1m，南北8.6m～8.9mを測る。土層の違いは認められないものの，硬化の度合いに違いが認められ，基壇外周に0.8m～1.3m幅で，中心付近と比べやや柔らかい硬化面が認められた。土層断面では，硬化面上か

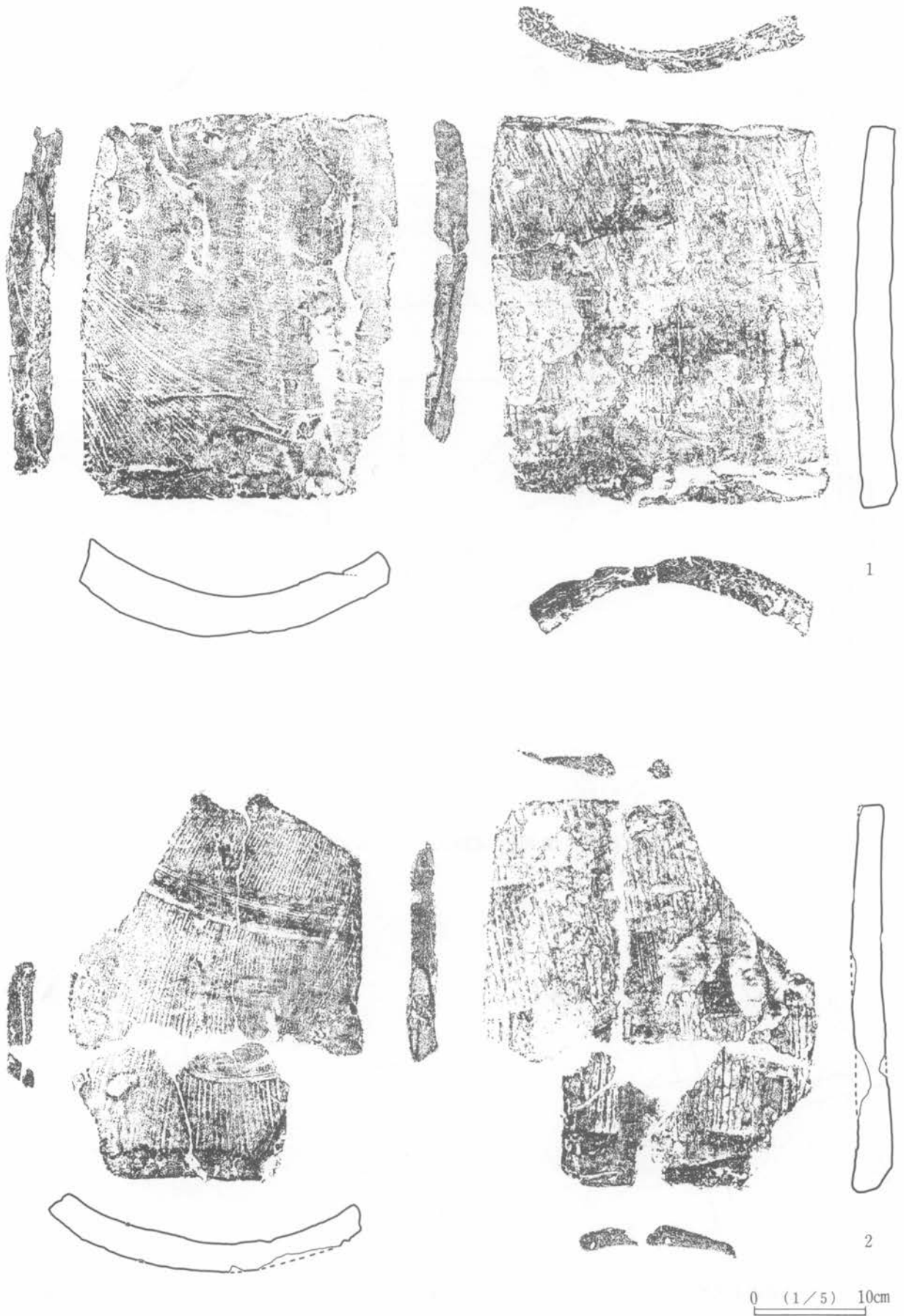


S B-4 遺構図 (断面図中網掛けは、ロームブロックを含む層)

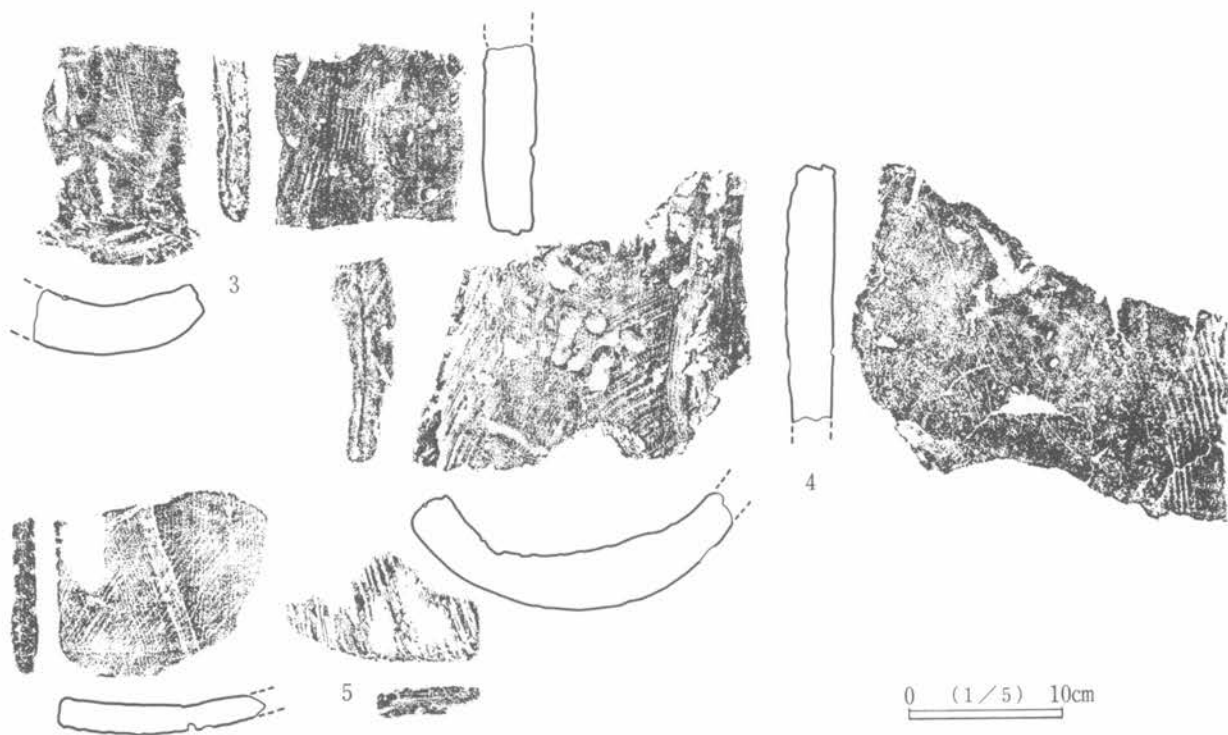


- 釘
- ◻ 平釘
- * 金具

第165図 S B-4 遺構図



第166图 I 5-14·15瓦出土集中地点出土瓦



第167図 II区グリッド出土瓦

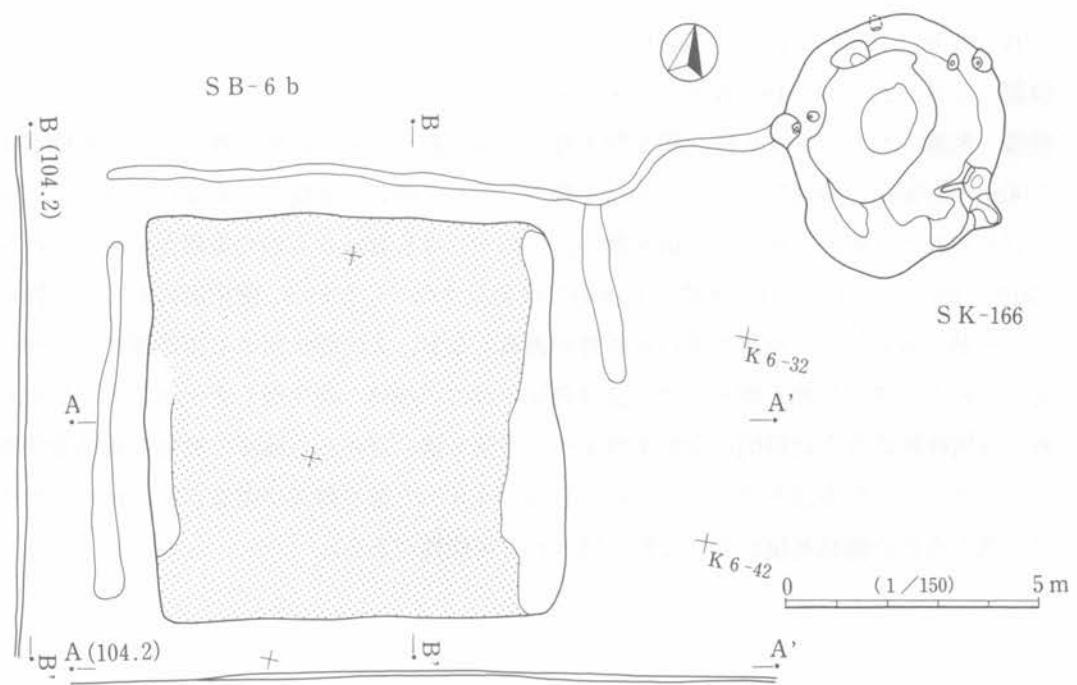
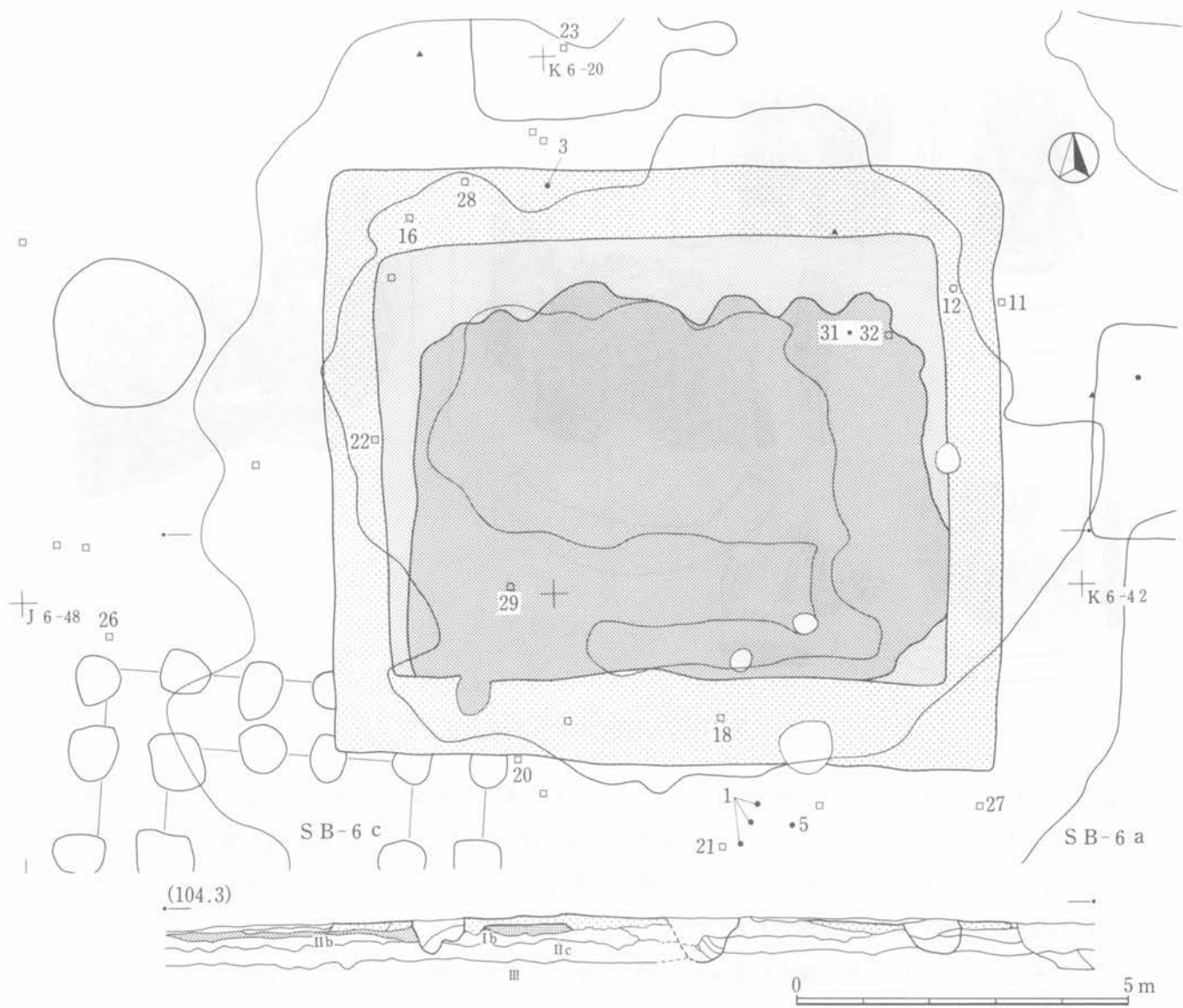
ら掘り込まれた3か所の掘り方が確認されており、いずれの掘り方も覆土下層は硬く締まっている。掘り方のプランは面的には検出されていないが、基壇硬化面の硬化度が変化する点と両端の掘り方が対応することから、これらの掘り方は坪地業の痕跡の可能性はある。このようなことから、SB-6aは坪地業による礎石建物の土間であると推測される。

しかしその一方で、掘り方の覆土が斜めに堆積していることや、他のトレンチでは捕捉されていないことから、後世の掘込みである可能性も否定できない。

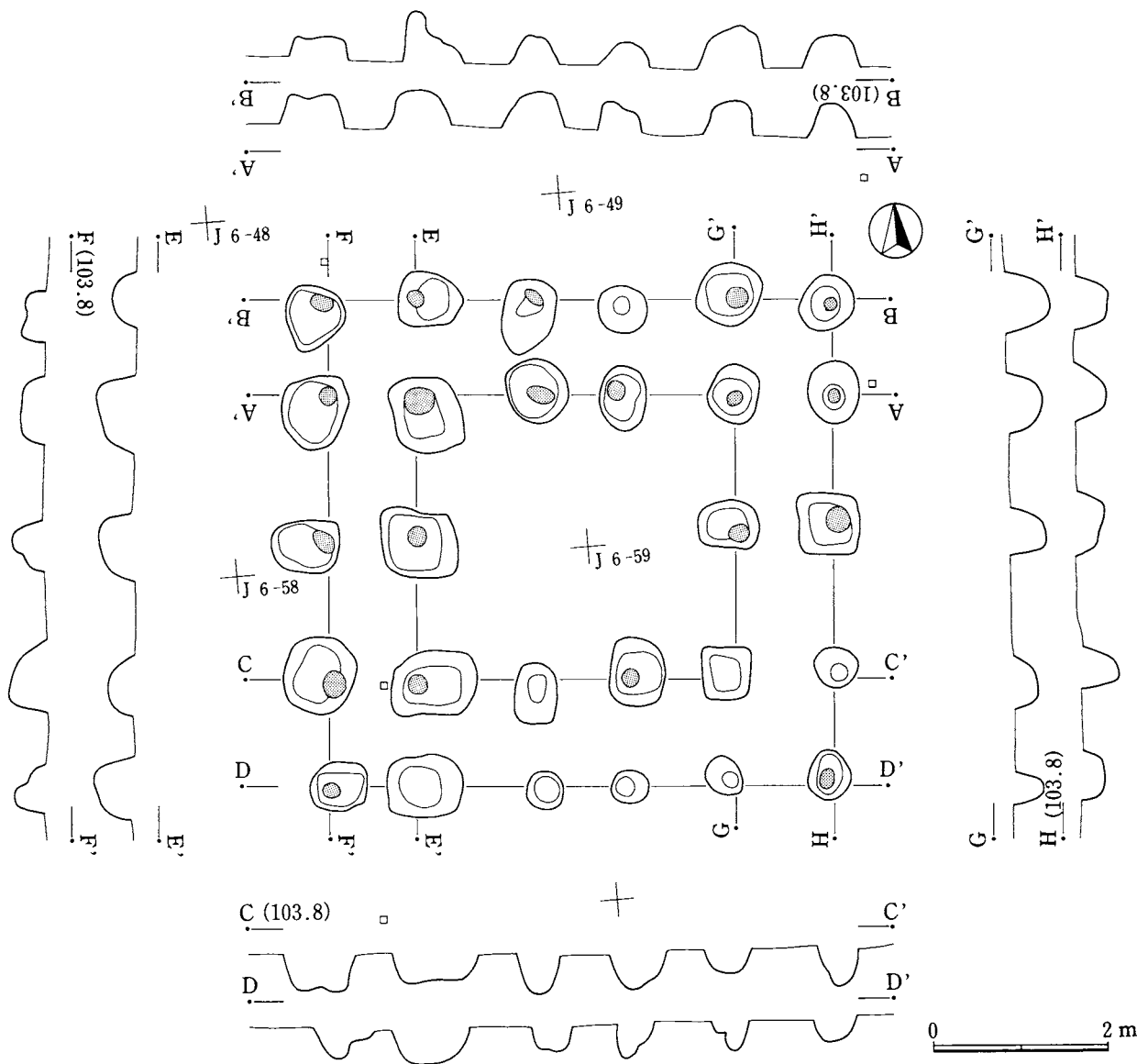
SB-6b (第168・170図 図版17・84・85・95)

位置：J 6-29・39・49, K 6-20・30・40・41

規模・形態：SB-6aの硬化層を除去後に位置を西にずらし、軸を異にした硬化面が検出された。東西7.90m～8.30m, 南北7.60m～7.90mを測る。これに伴い、北側から東側にかけてと、西側で溝状のシミが認められた。幅0.15m～0.55mを測る。このシミはSB-6bの北東隅からやや屈曲を有して、SK-160まで続く。SB-6bの南側と北西隅では発見されていないが、硬化面に沿って直線的に発見されており、SB-6bに伴う雨落ち溝の可能性はある。なお、この硬化面にも東西端にやや硬化度が低い範囲が認められた。礎石や礎石据えつけ痕跡は発見されていない。硬化層も表土層の土を利用したものと想定され、基壇建物の存在に疑問の余地を残すが、雨落ち溝の存在から極めて簡易な基壇建物跡の存在を想定したい。そして、間を置かずにその上からSB-6aへと造り替えが実施されたため、重複部分を中心に雨落ち溝を含めた簡易基壇が良好な形で残された可能性がある。



第168図 SB-6 a・SB-6 b遺構図

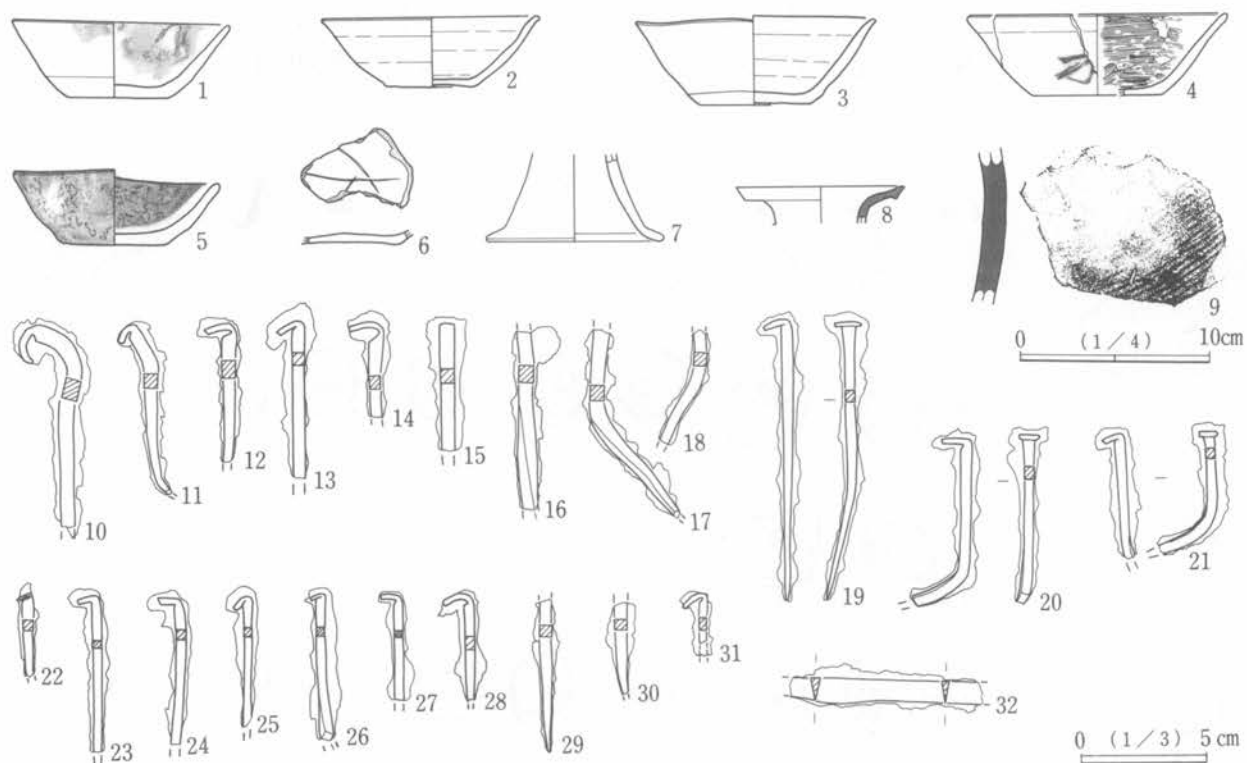


第169図 SB-6c 遺構図

SB-6c (第169・170図 図版17・84・85・95)

位置：J 6-48・49・58・59

規模・形態：身舎2間×3間の四面庇の掘立柱建物跡である。掘り方底面で確認した柱痕跡から復原される建物跡はほぼ柱筋を揃えている。柱掘り方の平面形態は円形，楕円形，隅丸方形，規模も径0.40mから0.90m×0.80mと一定しない。ただ，身舎の掘り方が形態と規模の面で比較的整っている。また，南庇の中央間付近の掘り方の規模が小さく，円形の傾向がある。復原される全体規模は桁行5.7m (17尺)，梁間5.5m (17尺) である。身舎の桁行が1.35m (4尺)，1.00m (3尺)，1.35m (4尺) で，中央間が狭い。身舎の梁間が1.60m (5尺)，1.60m (5尺) である。庇の桁行は1.00m (3尺)，1.35m，1.00m，1.35m，1.00m (3尺) である。庇の梁間は1.30m (4尺)，1.60m，1.60m，1.00m (3尺) である。南庇がやや長い。推測される基準尺は1尺=32cm~33.75cmである。



第170図 SB-6 出土遺物

SB-6の覆土と重複関係：SB-6 a, SB-6 bともに、薄い硬化層のみが土層断面により確認されており、SB-6 bの方が下位に認められた。SB-6 cはSB-6 bの下位より検出されたことから、SB-6 cが最も古く、次いでSB-6 b, そしてSB-6 aが最も新しいと考えられる。

出土遺物：1～4は土師器杯である。1は手持ちヘラ削り調整で、内面に油煙痕が見られる。2は底部に糸切痕が残されており、内面に輪積痕が見られる。3は回転ヘラ削り調整で、外面全体に煤が付着している。4は墨書土器で、外面に「万カ」とある。内面はヘラミガキで、黒色処理が施されている。5は灯明皿である。内面全体にタール状の油煙痕が付着している。6は土師器杯の底部で、内面に線刻が見られる。7は土師器高杯の脚部である。8は須恵器壺の頸部である。9は須恵器甕破片である。10～32は釘である。

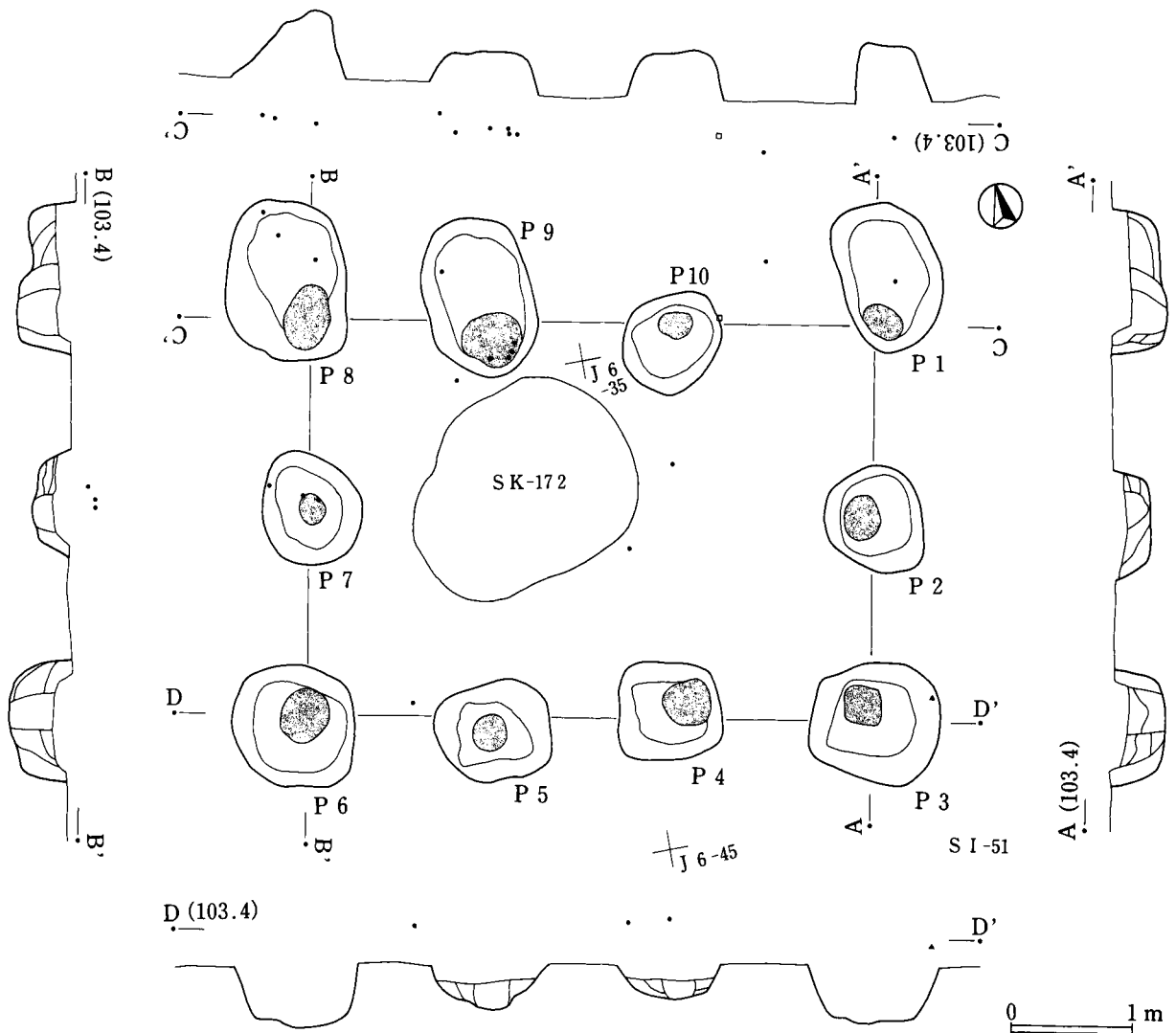
SI-51 (第171図 図版18)

位置：J 6-24・25・34・35

規模・形態：2間×3間の側柱の掘立柱建物跡である。掘り方は平面楕円形で長軸0.80m～1.30m, 短軸0.75m～1.00mでほぼ規模は一定している。覆土断面と掘り方底面で確認された柱痕跡から、桁行4.65m, 梁間3.30mの建物規模で、桁行の柱間は1.55m (5尺)の等間, 梁間は1.65m (5尺)の等間に復原される。

覆土：すべての掘り方から柱痕跡が確認され、抜取りや建替え痕跡はない。裏込め土はほぼ水平に2層～3層堆積しているものが多い。ロームブロックを多く含む暗褐色土と黄褐色土が多いが、中には5cm大の山砂ブロックが混入した土層もある。

重複関係：掘立柱建物跡の調査終了後、縄文の土坑SK-172が中央から発見された。



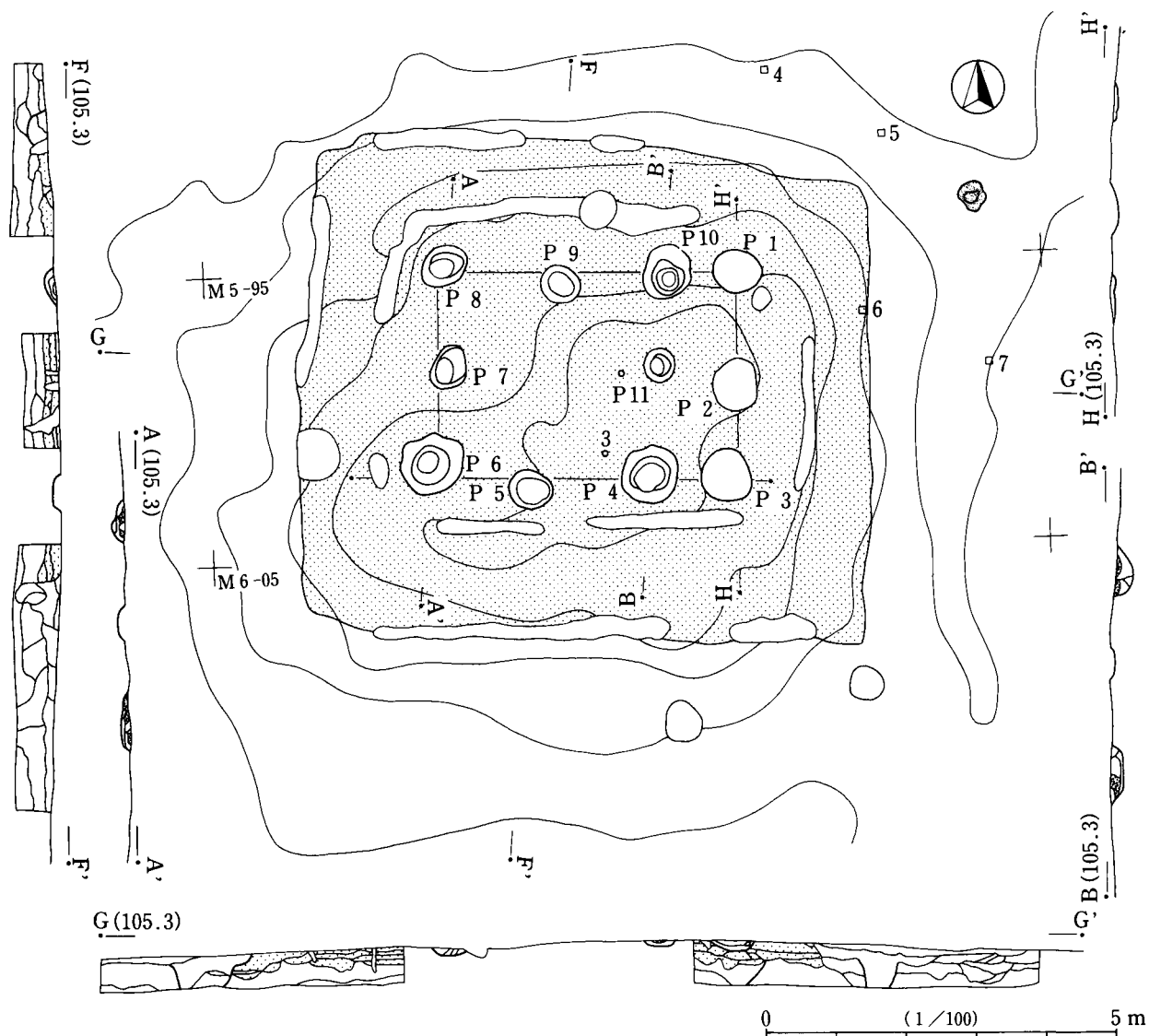
第171図 S I-51遺構図

(3)IV区

S B-5 a (第172・175図 図版18・85・95)

位置：M 5-85~87・95~97, M 6-05~07

規模・形態：発掘調査前には地膨れは確認されず、本調査での表土除去により、周囲より0.05m~0.20m高く、ロームブロックを含んだ褐色土の硬化面の拡がりが見られ、基壇建物跡の存在が確認された。さらに確認面の精査で礎石の据えつけ痕跡が、基壇の断割りにより基壇規模が確認された。先行する掘立柱建物跡のS B-5 cの掘り方直上から地業が確認された。S B-5 cに伴う整地面上にS B-5 aの積上げ基壇が造成されたと考えられる。基壇の平面形は東西7.90m~8.20m、南北6.40m~7.00mの長方形で、その中央で2間×3間の建物痕跡が確認された。礎石の据えつけ痕跡の掘り方は楕円形で、長軸0.45m~0.90m、短軸0.45m~0.80mを測る。中央で発見されたP 11は他よりも浅く、平面規模も小さい。据えつけ痕跡の覆土下層は黄白色砂混粘土を含み硬く締まっている。覆土上層では焼土粒と炭片を含む、締まりに欠けた層が堆積していた。礎石は抜き取られたか、破損したと推測される。据えつけ痕跡から推測される建物規模は桁行4.20m、梁間2.80mである。梁は等間1.40m(4尺)程度の等間と想定される。桁行は南面



第172図 SB-5 a 遺構図(断面の網掛けはロームブロックを含む層)

の中央間を広く、北面は西から東へと柱間が狭く想定される。

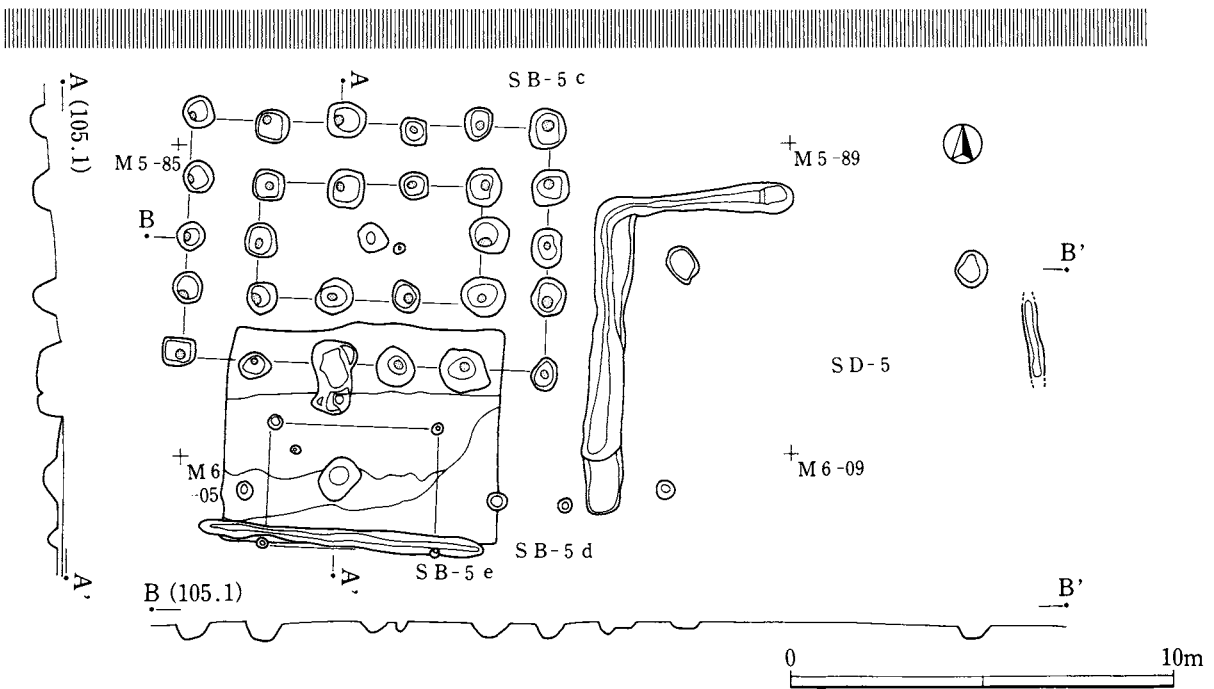
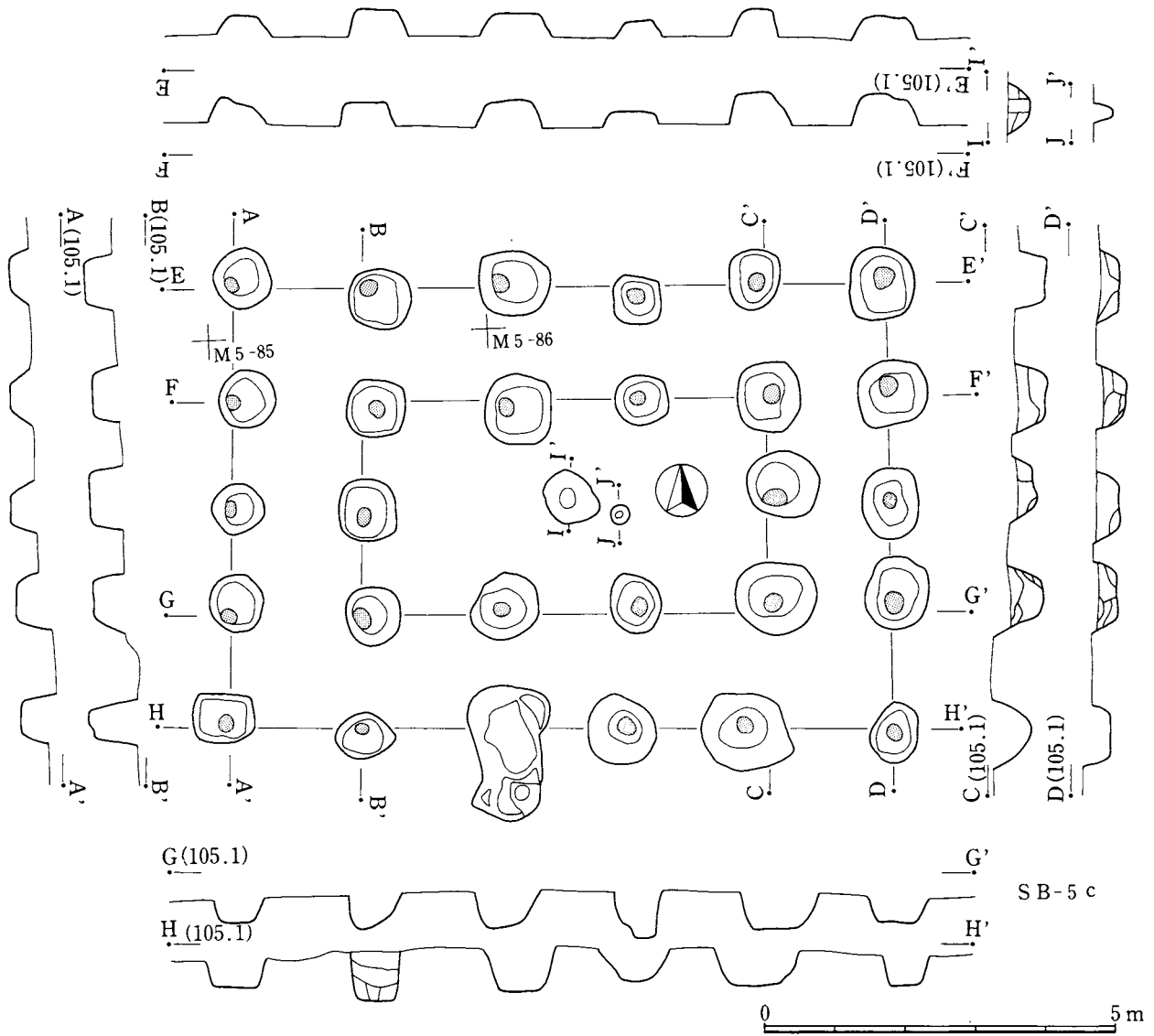
覆土：地業は明褐色土，明灰褐色土，褐色土，暗褐色土，暗黄褐色土に，ロームブロックを含む硬く締まった層がほぼ水平に堆積している。礎石の据えつけ痕跡から想定される基壇高は0.30m程度と低く，基壇化粧の痕跡も見られない。

重複関係：SB-5cの掘立柱建物跡に先行する。

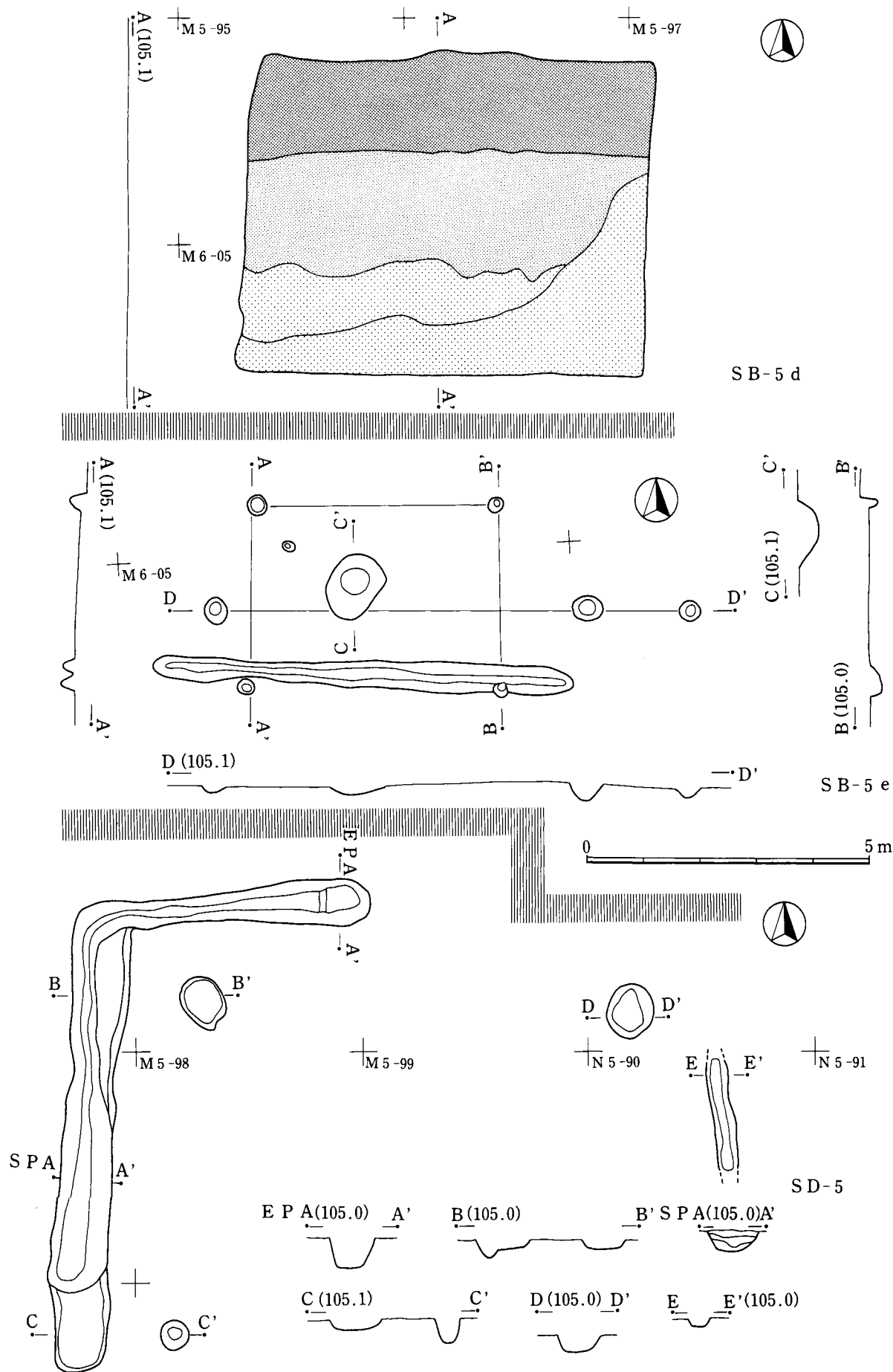
SB-5c (第173・175図 図版19・85・95)

位置：M5-75~77・85~87・95~97

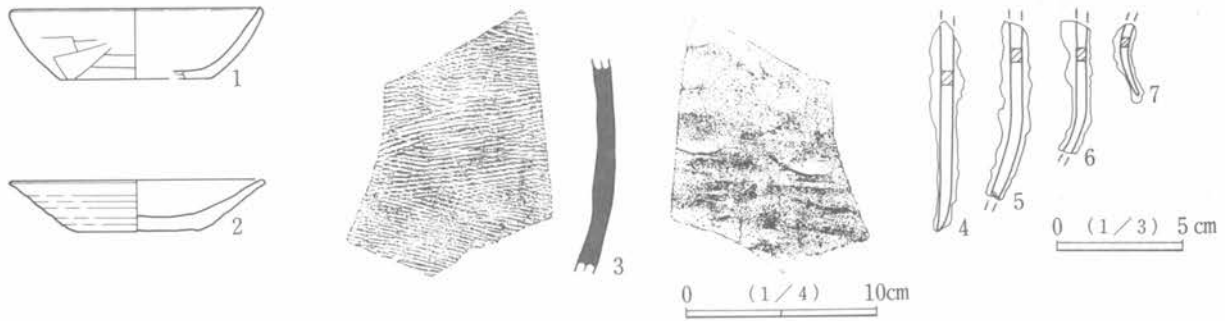
規模・形態：身舎2間×3間の四面庇の掘立柱建物跡である。柱掘り方は平面円形から隅丸方形に近いものがある。掘り方の平面規模は長軸0.65m~1.35m，短軸0.65m~1.05mで，南庇の中央の掘り方に二つ重なっているものがある。入り口に伴う掘り方と推測されるが，具体的な構造は不明である。掘り方底面で確認された柱痕跡から，桁行9.30m，梁間6.00mの建物規模で，身舎の桁の柱間が1.80m(6尺)，2.10m(7尺)，1.80m(6尺)，梁が1.50m(5尺)の等間に復原される。桁行方向の庇の柱間は1.80m(6



第173図 SB-5c・SB-5d遺構図



第174図 SB-5 d・SB-5 e・SD-5遺構図



第175図 SB-5 出土遺物

尺), 梁方向の庇の間は1.50m (5尺) に復原される。なお, 身舎中央に浅い掘り方のピットが二つ発見された。中央の掘り方の断面からは柱痕跡が認められた。

覆土: 覆土断面で柱痕跡が認められたものは少ないが, 明確な抜取り痕跡も認められなかった。裏込め土が良好に確認されたものは, ロームブロックと山砂を含む暗褐色土と黒褐色土がほぼ水平に堆積されている。

重複関係: SB-5 a の基壇建物跡に先行する。

SB-5 d (第173~175図 図版19・85・95)

位置: M5-95・96, M6-05・06

規模・形態: SB-5 a の地業掘削後, SB-5 c の掘立柱建物跡のプラン確認と同時に認められた硬化面である。断割りの結果も, SB-5 d に伴う地業層は確認されていない。また, 硬化面が北から南へと次第に硬度が落ちる特徴がある。この硬化面を除去後にSD-5 e のピット群と溝状遺構が発見された。これらはいずれもSD-5 c の桁行を揃え, 身舎幅をほぼ揃えた幅であることから, SB-5 d・e はSB-5 c に伴う遺構と想定される。SB-5 d は東西7.00m~7.20m, 南北5.40m~5.60mを測る。

覆土: ロームブロックを含む黒褐色土層と暗褐色土層, 暗黄灰褐色土層の上面を叩き締めている。おそらく, これはSB-5 c に伴う整地面と想定される。

SB-5 e (第174図, 図版19・85・95)

位置: M5-95・96, M6-05~07

規模・形態: SB-5 d の硬化面の除去後に, ピット9と溝1条が発見された。中央のピットは長軸1.15m短軸0.80m, 深さ0.15m, 他のピットは径0.30m~0.50m, 深さ0.10m~0.30mと小規模なものである。溝は幅0.40m, 長さ7.50m, 深さ0.20mである。これらのピット群は東西4.40m~4.60m, 南北3.20mの方形と, 長さ8.50mの柱列に復原出来る。これらはいずれもSB-5 c の主軸とほぼ揃えるものであり, 溝も同様である。なお方形の柱列の南面と溝状遺構はSB-5 d の土間状遺構の南縁とほぼ一致している。SB-5 c に伴う施設の可能性が高い。ただし, いずれも建物の下部構造として貧弱である点から, 仏堂前庭の儀式ないし結界に伴う柱跡と溝と想定される。

重複関係: 明確な断面の前後関係は不明であるが, 検出状況からSB-5 d に先行するSB-5 c 前庭遺構と推測される。

S B-5 出土遺物：1,2は土師器杯である。1は外面・底部ヘラ削りで、口縁部は横ナデが施される。2は回転ヘラ削りである。3は須恵器甕破片である。4～7は釘である。

S D-5 (第174図)

位置：IV区。M 5-87・88・97・98

規模・形態：S B-5の西側に隣接している。2条の溝状遺構と3基のピットから成る。西側の溝は、南端でほぼ直角に東へ曲がる。南北8.00m、東西5.20mで、幅は1.00mで、深さは0.40mほどである。東側の溝は遺存する長さが2.20m、幅が0.40mで、深さは0.20m程度である。この2条の溝の、東西の溝間の幅は約12m、ピット間の距離は7.50mである。S B-5cとほぼ主軸が同じであることから、区画溝等の関連した施設の可能性がある。

S I-25 (第176図 図版81-15)

位置：V区。Q 6-78

規模・形態：3間×3間の側柱建物跡である。柱掘り方は長軸0.40m～1.25m、短軸0.35m～1.00mの平面円形と楕円形である。多くの掘り方で柱痕跡が確認できなかった。柱掘り方から推測される柱筋から復原される建物規模は桁行5.40m、梁間3.90mである。桁の柱間は1.80mの等間、梁間は1.30mの等間と推測される。

覆土：焼土粒と灰黄色山砂粒、炭化物を含む暗褐色土や暗黄褐色などが主体的に裏込め土として堆積している。2つの掘り方で柱痕跡が確認され、明瞭な柱の抜取りは確認されていない。北に対して東にやや振れ、N-70°-Eの東西東である。

重複関係：S I-25bに後行する。

遺物：1はロクロ土師器高台付椀で、底部は回転ヘラ削りを施され、高台が貼り付けている。内面に僅かにヘラミガキの痕跡を残す。底径(8.2)cmである。2は鉄釘である。その他、鉄滓が1点3.6g出土した。

S I-25b (第176・177図 図版81-15)

位置：V区。Q 6-78

規模・形態：2間×3間の側柱建物跡である。柱掘り方は長軸0.50m～0.75m、短軸0.40m～0.55mで平面楕円形である。いずれも柱痕跡は確認できなかった。また、主軸をややずらしたS I-25の柱掘り方と重複し、痕跡を残さない柱掘り方の存在も推測される。柱掘り方から推測される柱筋から復原される建物規模は桁行4.20m、梁間3.40mである。桁の柱間は1.40mの等間、梁間は1.70mの等間と推測される。北に対して東に振れた、N-68°-Eの東西東である。

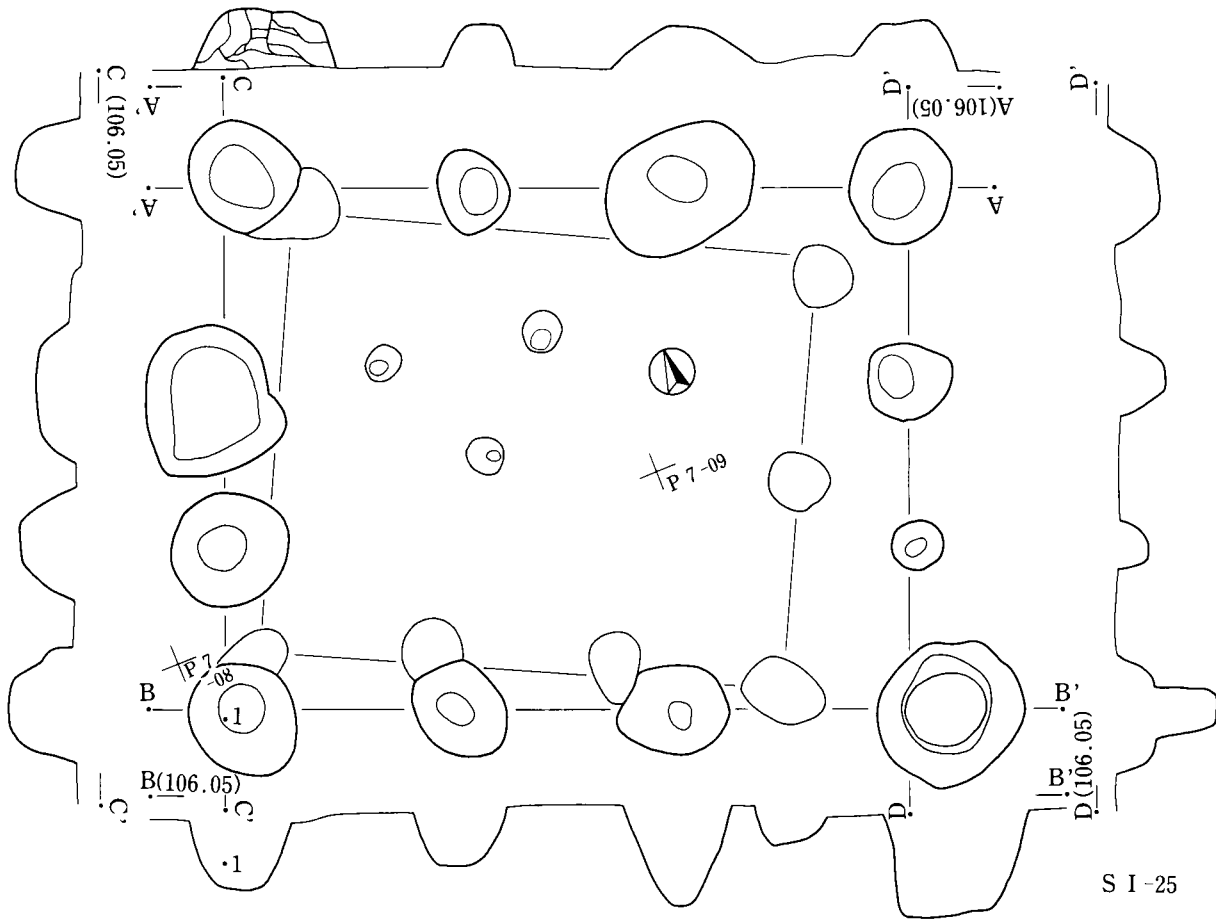
覆土：焼土粒、灰黄色山砂を含む暗褐色土と暗灰褐色土が主体的に堆積する。

重複関係：S I-25に先行する。

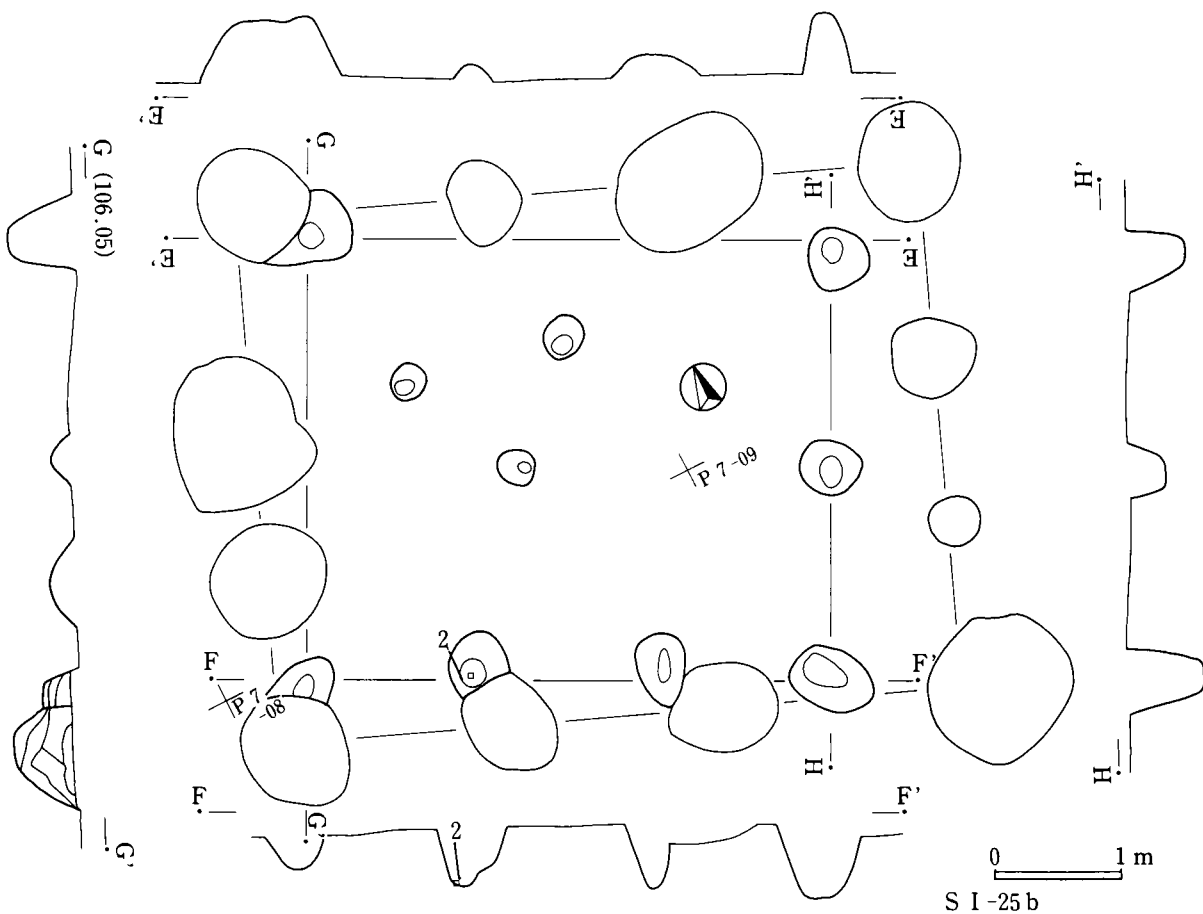
遺物：鉄釘が出土

S X-2 (第178～180図, 図版99)

位置：V区。P 5-55

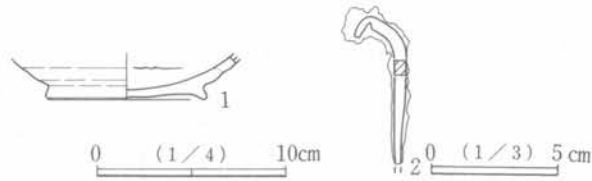


S I-25



S I-25 b

第176図 S I-25遺構図

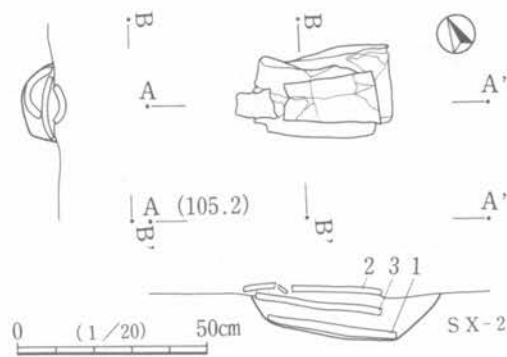


第177図 S I -25出土遺物

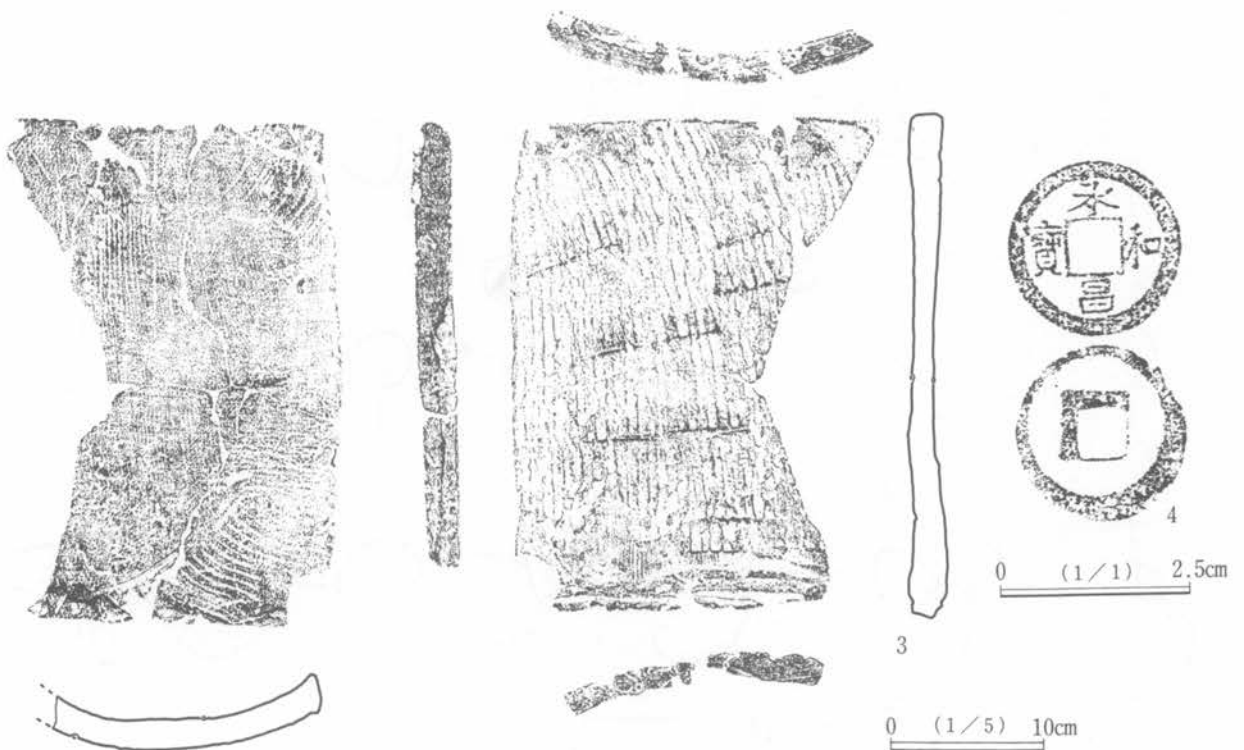
規模・形態：小型の土坑で、瓦が3枚埋納されていた。検出された状態での大きさは、長径0.52m，短径0.25m，深さ0.12mである。

構造：1が下に，中間に3，そして上には2がそれぞれ密着し，かつ1は底面に置かれたように出土している。図では，2が掘込みよりも外に露出しているが，土坑上部が削平されているものと見られる。

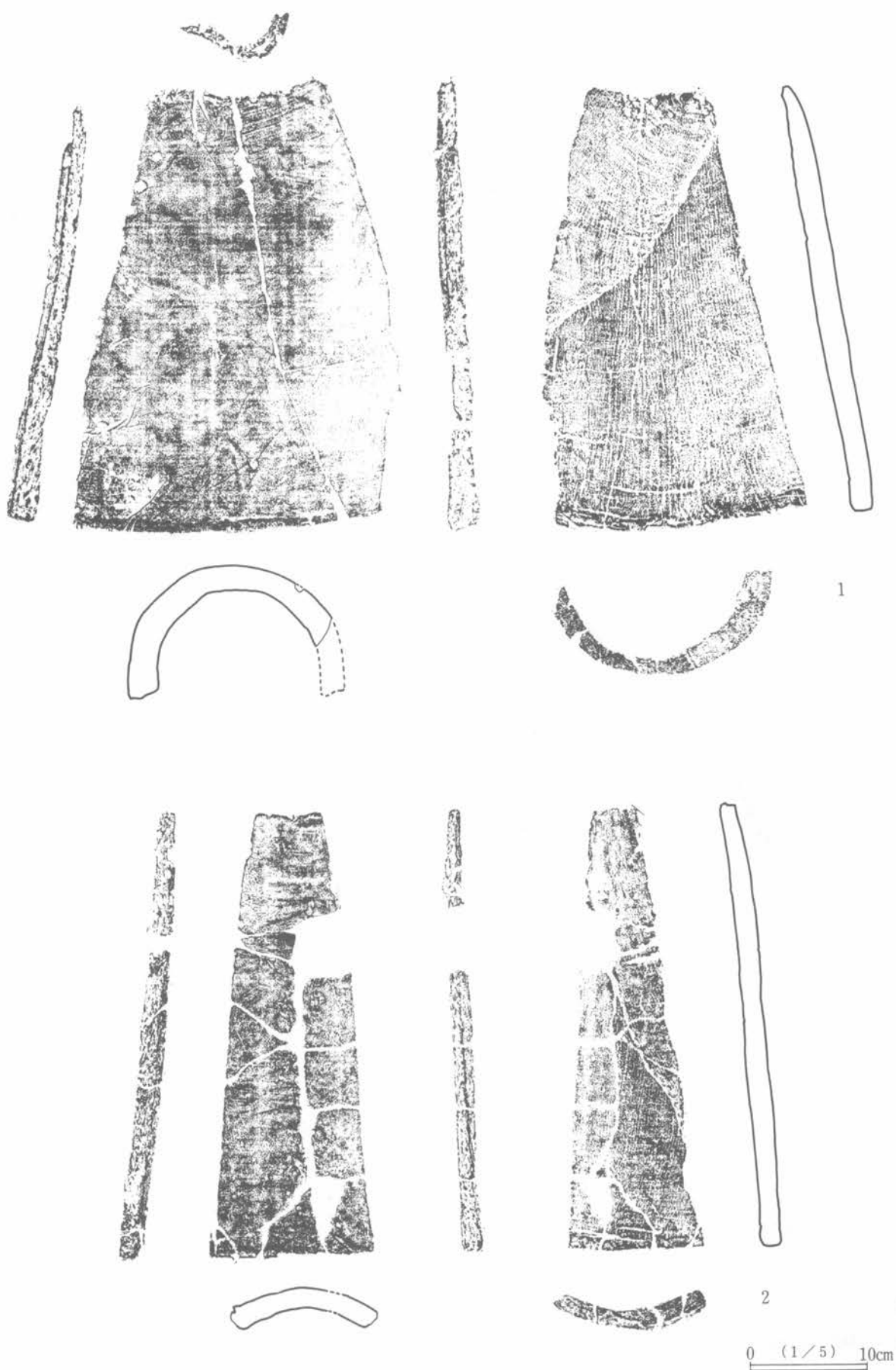
遺物：4は承和昌宝である。重なった瓦の間に挟まれて出土している。3は隅落としての平瓦，1は丸瓦，2は熨斗瓦である。



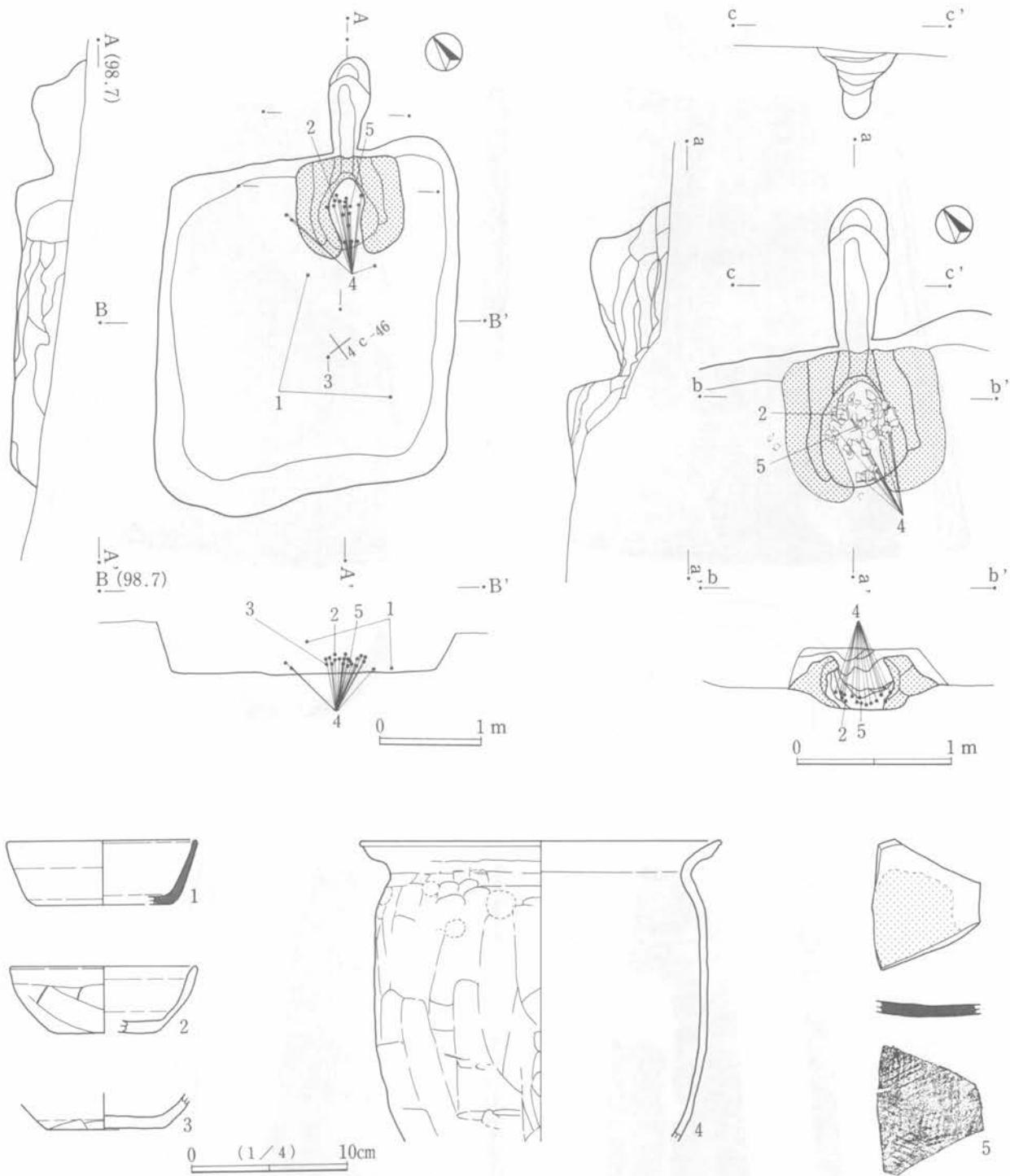
第178図 S X -2 遺物出土状況図



第179図 S X -2 出土瓦 (1)



第180图 SX-2出土瓦(2)



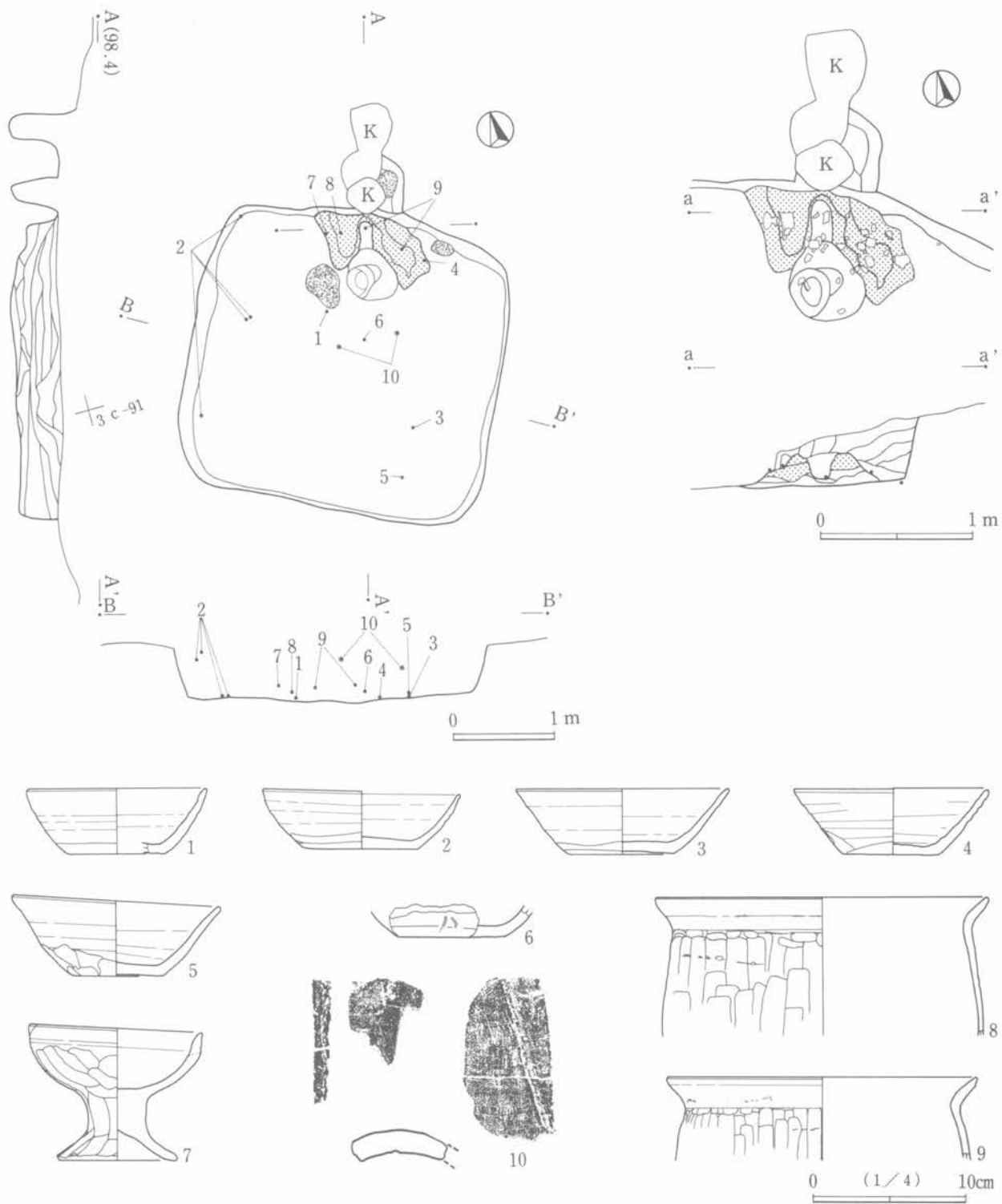
第181図 S I - 1 遺構図・出土遺物

2 竪穴住居跡

S I - 1 (第181図, 図版20・79)

位置: I区。4 C - 35・36・45・46 かなりの傾斜面で検出された。

規模・形態: 長軸3.2m~3.3m, 短軸2.8m~2.9mの長方形の掘り方である。北に対して東に大きく振れ, N-50°-Eの主軸を有する。



第182図 S I-2 遺構図・出土遺物

覆土：ソフトローム土を基調とする暗褐色土と暗黄褐色土であったため、遺構確認が困難であった。

構造：柱穴は確認されず、床面も特に硬化した部分は認められなかった。貼床もなかった。カマドは北東壁のやや東寄りに位置する。カマドの袖はソフトローム混じりの黄白色砂で作られている。燃烧部は竖穴床面を浅く掘り窪め、良く焼けた側壁は緩やかな曲線を有して立ち上がる。燃烧部内は焼土塊を含む赤褐

色土層（4層）の上から、多くの土器がつぶれた状態で出土し、その上に天井部が崩落したと思われる赤褐色土層（2層）とローム土（1層）が堆積していた。燃焼部奥の障壁はほぼ垂直に立ち上がり、その後煙道部が竪穴外に向かって伸びる。煙道部は掘抜きで、一旦水平面を有するが、奥に向かって徐々に深く掘り込まれる。天井部は崩落したものと推測される。また、燃焼部側壁の被熱痕跡は、障壁から燃焼部の側壁の一部まで認められる。

重複関係：確認面において、S I - 1 上で0.70m四方の床状硬化面と長軸0.70m、短軸0.40m、深さ0.05 m程の掘込みを有する被熱痕跡が検出された。その被熱痕跡を中心に土器片の集中も認められ、S I - 1 埋没後の住居跡の可能性はある。ただし、これに伴う竪穴状の掘り方は検出されなかった。なお、こうした遺構の存在の可能性は、ソフトロームを基調とした覆土の状況とカマド内を除く遺物出土量の寡少な点を考慮すると、人為的な埋戻しと建替えの可能性を示唆する。

遺物出土状況：竪穴覆土中や床面からの遺物の出土は少ない。まとまった出土のカマドの崩落天井下の遺物に限られる。

遺物：1は須恵器杯で、口径（12.0）cm、底径（8.6）cm、器高4.1cmに還元される。体部はほぼ直線的に外傾し底部は回転ヘラ削りを施す。淡灰色から淡黄褐色を呈し、胎土・焼成から在地産（上総産）と推測される。2は非ロクロ成形の土師器杯で、口縁部に横ナデを、外面体部及び底部に手持ちヘラ削りを施す。口径（11.8）cm、底径（6.6）cm、器高4.2cmに還元される。若干凸出気味の平底である。3はロクロ成形の土師器杯で、底径7.4cmである。底部から体部のごく下端部に回転ヘラ削りを施す。4は土師器甕で、口径23.0cmに還元される。口縁部が「く」の字状に屈曲し、口縁部内外面に横ナデを、胴部外面に縦方向のヘラ削りを施す。胴部内面は横方向のヘラナデで器面を整える。5は須恵器甕片の転用硯で、外面に斜格子叩き痕跡、内面に僅かな墨痕跡と磨滅痕跡が認められる。

S I - 2（第182図、図版20,79・84・99）

位置：I区。3C-81・82・91・92 平坦面近くに位置する。

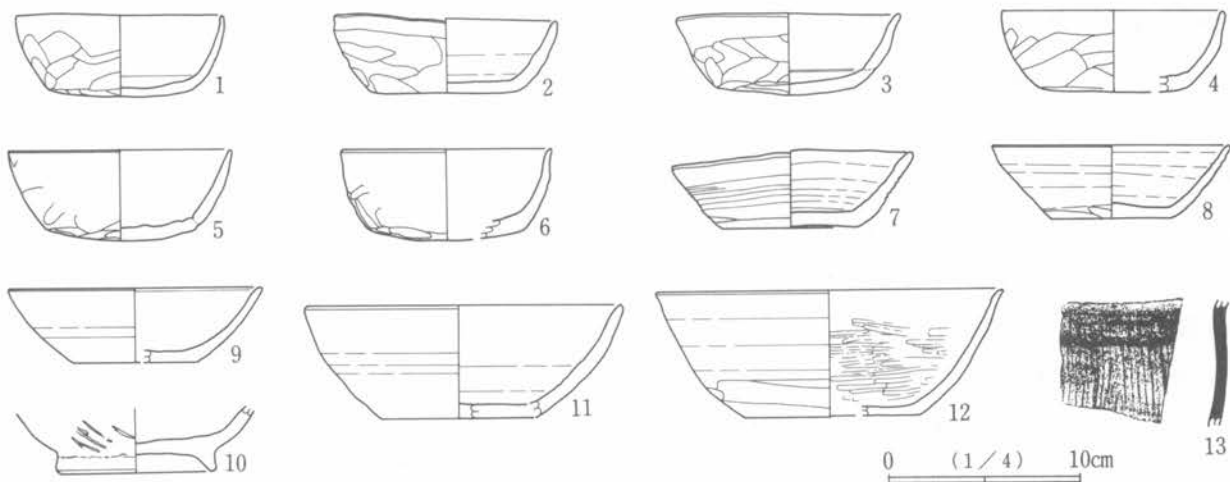
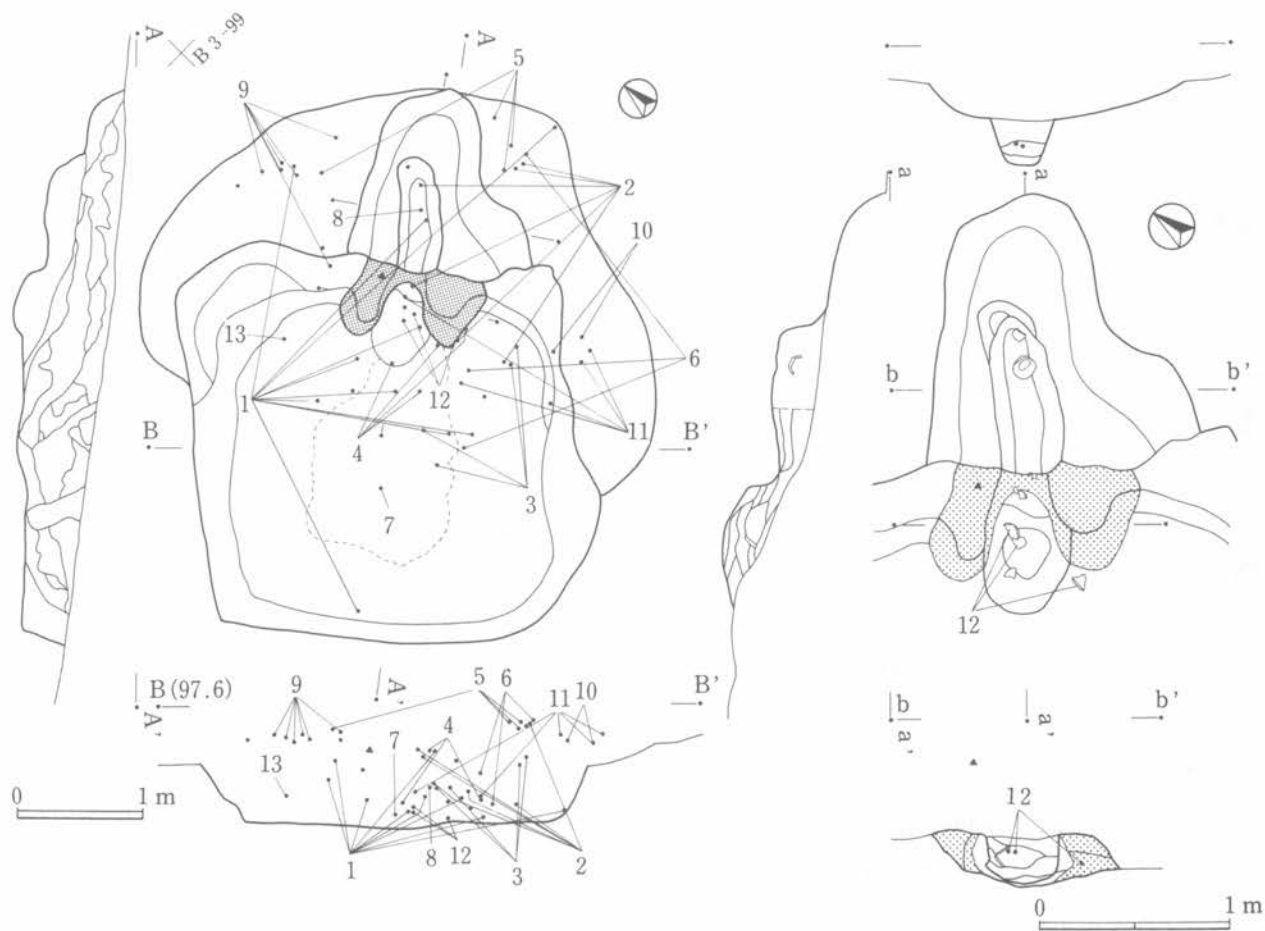
規模・形態：長軸2.90m～3.00m、短軸2.70m～2.90mで東西方向に若干長い方形の掘り方である。北に対して東にやや振れ、N-65°-Eの主軸を有する。

覆土：上層はローム粒を含む黒褐色土が、下層はソフトローム土を多く含む暗褐色土と暗黄褐色土が主体的に堆積する。

構造：柱穴は確認されず、床面も特に硬化部分は認められない。床上には炭と焼土が散っていた。カマドは北壁中央に位置する。カマドの袖の遺存状況は悪く、赤く焼け、強く酸化した黄白砂を多く含む基部が確認されたのみである。カマド構築材と思われる焼土ブロックがカマド周囲から散在して発見された。燃焼部は竪穴床面を浅く掘り窪めている。燃焼部奥の障壁はほぼ垂直に立ち上がり、煙道部は竪穴外へ向かって伸びる。ただし、煙道部は大きく攪乱を受けており、被熱痕跡を有する浅い掘り方の存在から、やや浅い掘り抜きの構造が推測されるにとどまる。

遺物出土状況：竪穴覆土中層から床面直上にかけて、また残されたカマド基部の直上から燃焼部にかけて、比較的まとまった遺物が出土した。

遺物：1から6はロクロ成形の土師器杯で、1から4の体部は直線的に立ち上がり、5は口縁部が外反する。底部から体部下端に1～3は回転ヘラ削り、4と5は手持ちヘラ削りを施す。5は内面にヘラミガキ



第183図 S I - 3 遺構図・出土遺物

と黒色処理を施す。6は墨書土器で、「万カ」と読める。

1は口径(11.6)cm・底径(6.3)cm・器高4.2cm, 2は口径12.7cm・底径7.1cm・器高3.9cm, 3は口径13.8cm・底径6.9cm・器高4.2cm, 4は口径(12.6)cm・底径5.7cm・器高4.2cm, 5は口径13.5cm, 底径5.8cm・器高5.2cm, 6は底径(7.2)cmである。

7は土師器高杯で, 口径11.1cm・底径7.7cm・器高8.7cmである。口縁部は横ナデ, 体部と脚部は縦方向

のヘラ削りを施す。杯部内面ほぼ一面に油煙痕跡が認められる。8と9は土師器甕で8は口径(21.6)cm, 9は口径(20.3)cmに復元される。10は平瓦である。

S I - 3 (第183図, 図版20・79)

位置: I区。3B-98・99, 4B-08・09 斜面部に位置する。

規模・形態: 竪穴は一辺2.9m~3.2mの方形の掘り方である。そして標高が高い北側から東側にかけて、カマド煙道部を含めた一回り大きく、やや浅い掘り方が認められた。北に対してやや大きく東に振れ、N-40°-Eである。

覆土: 上層はソフトローム土を含む黒褐色土と暗褐色土が、下層はソフトローム土を多く含む褐色土と暗黄褐色土が主体的に堆積する。また、全体に焼土粒と炭粒の混入が、また焼土粒を多く含むブロックが側壁付近で認められた。

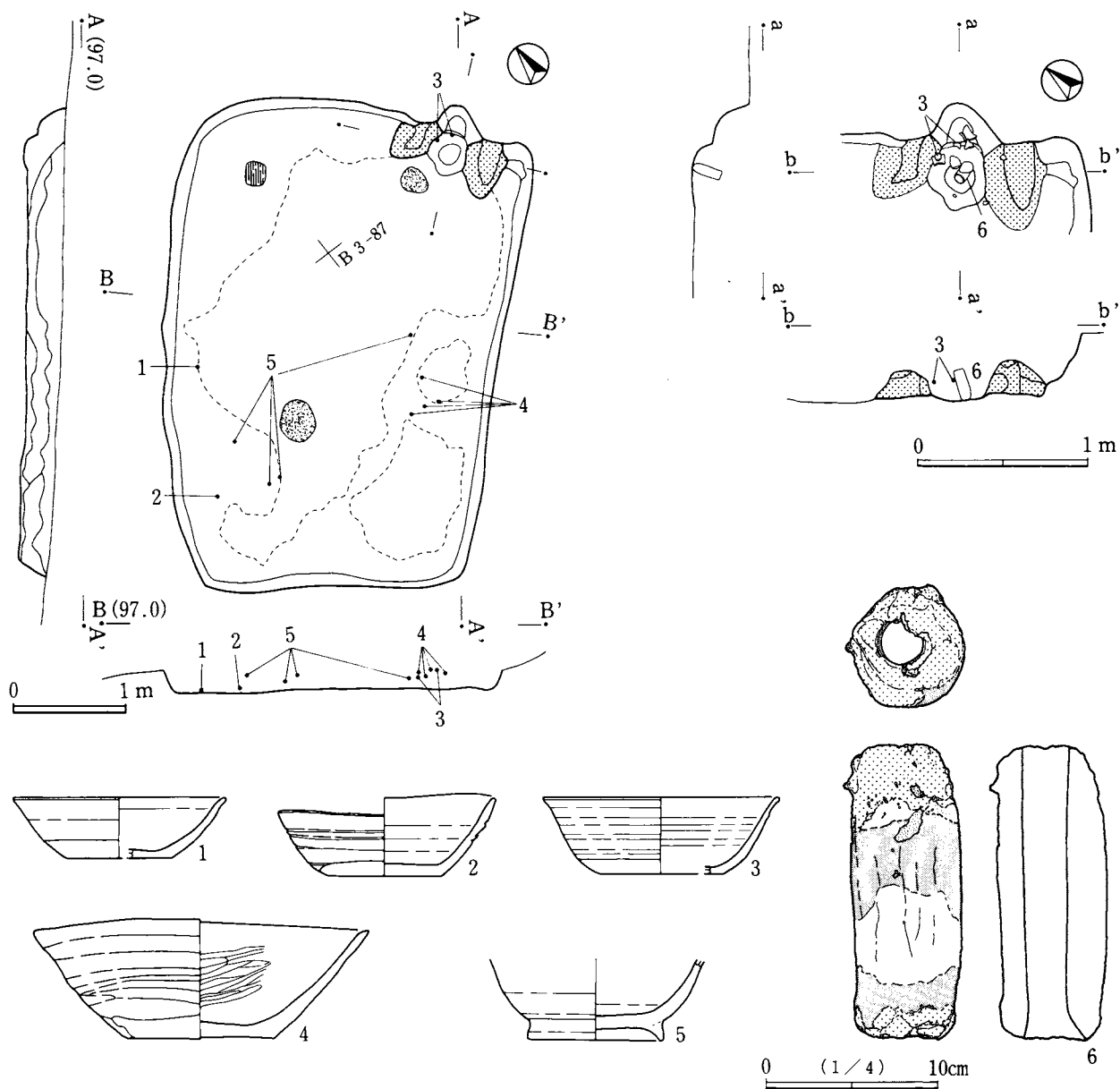
構造: 柱穴は確認されず、床面はカマド前面から床面中央にかけて顕著な硬化面が認められた。また、竪穴北西隅で、棚状の平らな掘り方が認められた。幅0.2m程で、遺物の出土も特に認められなかったので、積極的に棚状遺構とは断定し難い。カマドは北東壁の中心に位置する。カマドの袖はソフトローム土混じりの黄白色砂で作られている。燃焼部は竪穴床面を浅く掘り窪め、良く焼けた側壁がほぼ垂直に立ち上がる。燃焼部内は炭粒を含む5層と7層の上に、黄白色砂や焼土塊を含む2層~4層が堆積する。燃焼部内の被熱痕跡は側壁から障壁にかけて認められる。障壁の下部は30°程度に緩やかであるが、その上部はほぼ垂直に立ち上がっている。煙道は竪穴外へ伸び、掘り方底面はほぼ平らである。なお、煙道最奥部の側壁から立上がり付近にかけて被熱痕跡が認められる。煙道部の覆土上層には被熱酸化した黄白色砂が堆積しており、天井部の崩落土の一部と考えられる。

遺物出土状況: 竪穴北側から東側にかけての、一回り大きな掘り方付近から、カマド前面付近の覆土下層にかけて、多くの遺物が出土した。また、カマド燃焼部と天井部の天井崩落土層付近からも比較的まとまった遺物が出土した。特に煙道部の最奥部からは完形の土師器杯がほぼ正位の状態出土した。

遺物: 1~6は非ロクロ成形の土師器杯で、内面と口縁部に横ナデを、外面体部と底部に手持ちヘラ削りを施す。やや凸出気味の平底で、内面の体部と底部の境は明瞭である。1は口径10.8cm・底径7.5cm・器高4.3cm, 2は口径11.4cm・底径7.7cm・器高4.3cm, 3は口径11.5cm・底径7.3cm・器高4.2cm, 4は口径(11.7)cm・底径(4.8)cm・器高4.2cm, 5は口径(11.6)cm・底径7.8cm・器高4.6cm, 6は口径10.9cm・底径8.1cm・器高4.7cmである。

7~9はロクロ土師器杯で、7と9は体部下半から底部に、8は体部のごく下端から底部に回転ヘラ削りを施す。7は口径12.5cm・底径6.9cm・器高4.0cm, 8は口径12.4cm・底径6.2cm・器高3.3cm, 9は口径(13.2)cm・底径6.5cm・器高3.9cmである。10~12はロクロ土師器碗で、10は高台を有し、11と12が無高台である。内面にはヘラミガキと黒色処理を施す。10と11は体部下半から底部に回転ヘラ削りを施す。12の体部下半と底部にはヘラ状工具による荒い刻みが多数認められる。10は底径7.9cm, 11は口径(16.4)cm・底径8.0cm・器高5.9cm, 12は口径(18.2)cm・底径9.1cm・器高6.6cmである。13は須恵器甕の胴部破片である。

この他鉄滓1点44.7gが出土した。



第184図 S I-4 遺構図・出土遺物

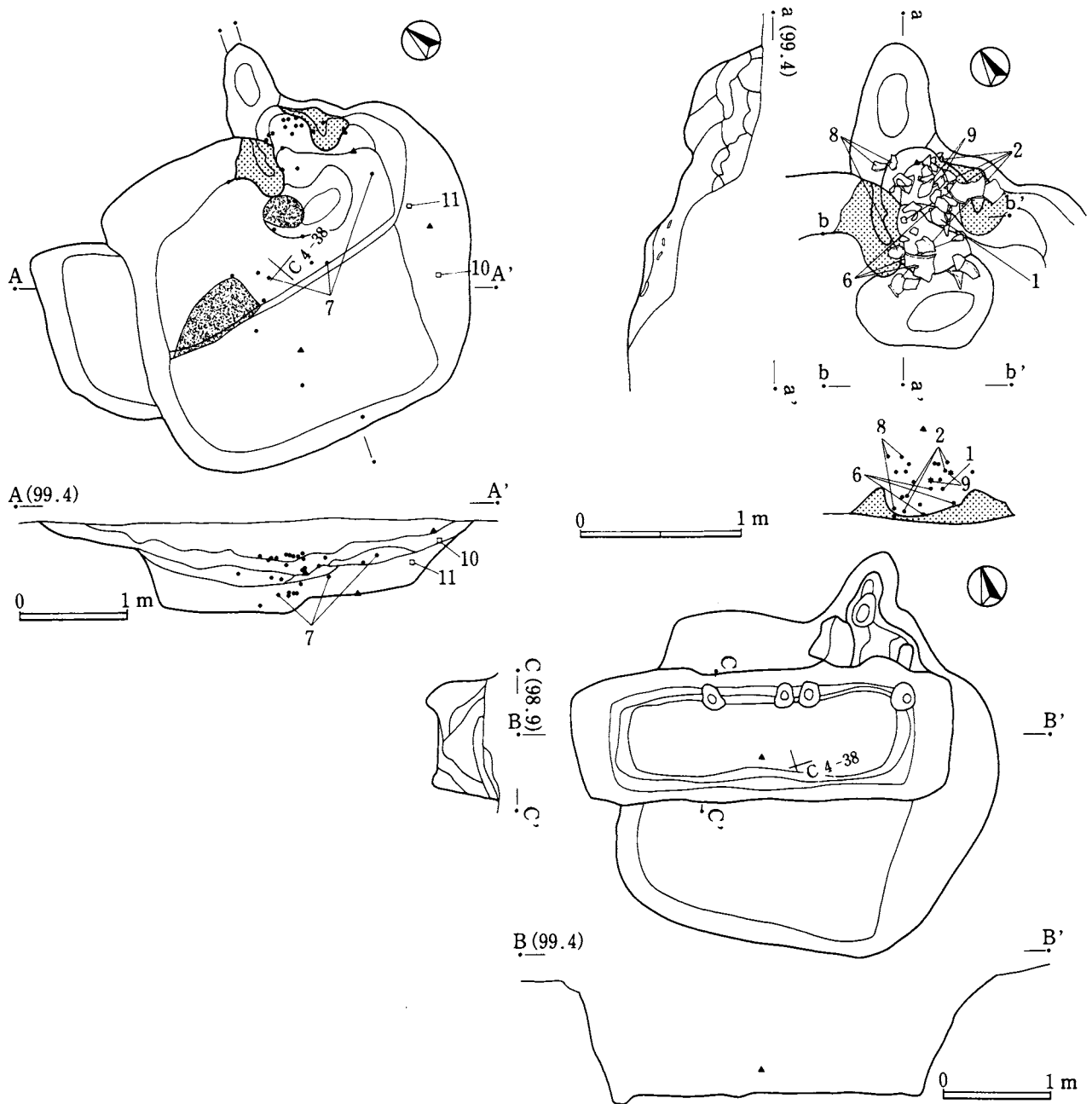
S I-4 (第184図 図版21・79・97)

位置：I区。3 B-76・77・86・87 斜面部に形成されている。

規模・形態：長軸長3.90m~4.30m，短軸長2.50m~3.00mの長方形の掘り方である。北に対して東に大きく振れ，N-45°-Eである。

覆土：ソフトローム土を含む黒褐色土と暗褐色土が主体的に堆積する。全体的に炭粒を含み，北西隅付近の覆土中からはブロック状に炭片も出土した。

構造：柱穴は確認されず，カマド前面から床面中央を中心に広い硬化面が認められる。またカマド前面と床面中央付近の床面に，径0.20m~0.30mほどの被熱痕跡が2か所認められた。被熱痕跡の厚さは0.01m~0.02m程で，特に掘込みは認められなかった。カマドは北東壁の北東隅付近に位置する。全体的な遺存状況は悪く，袖は下半のみの検出であったが，燃焼部中央に土製支脚が立った状態で出土した。カマドの袖は黄白色砂を主体として作られている。燃焼部は竪穴床面を浅く掘り窪め，燃焼部床面から側壁にかけ

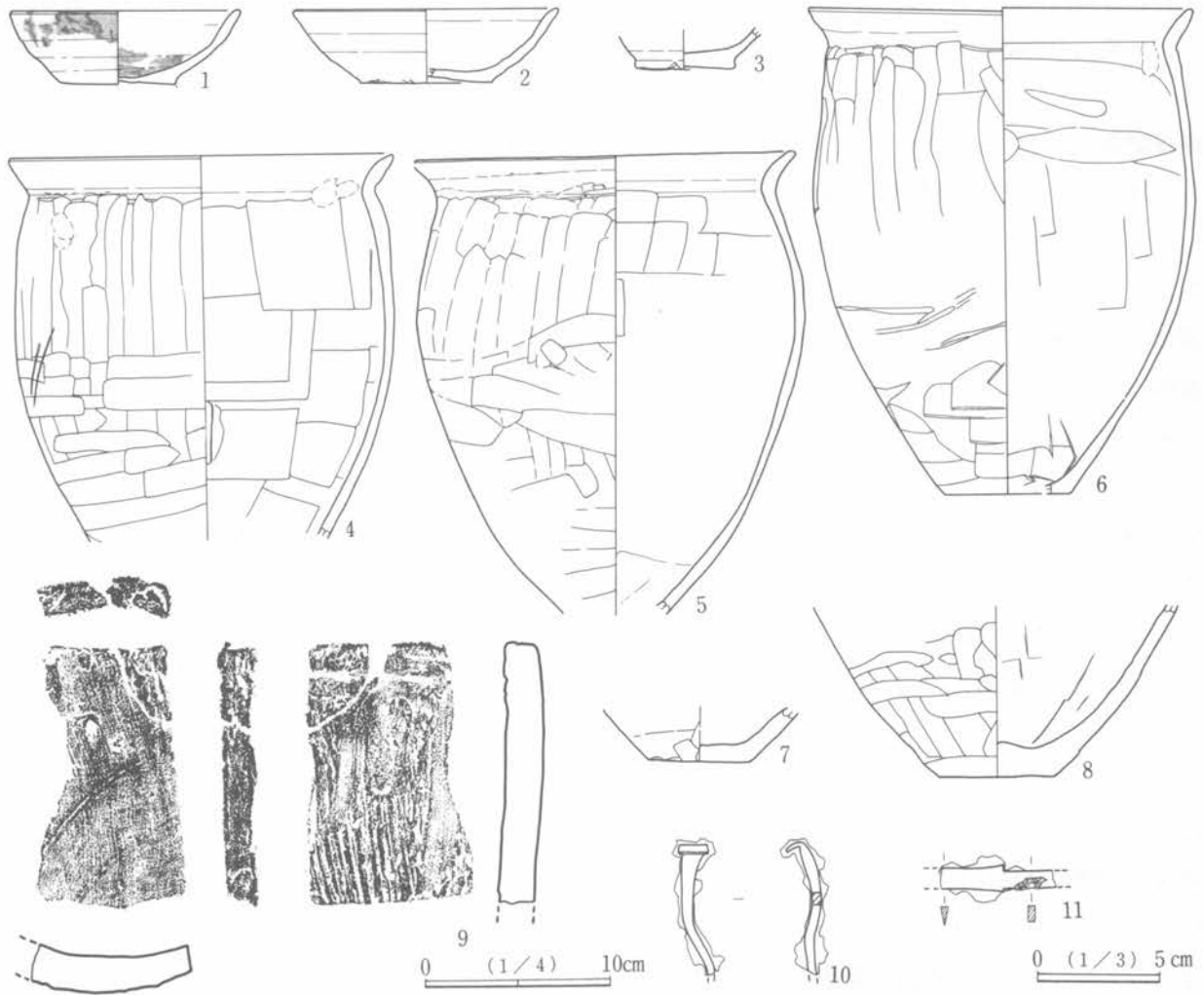


第185図 S I-5遺構図

て被熱痕跡が認められる。燃焼部から竪穴外へ掘り方が伸びており、この段を有するほぼ垂直な立ち上りが燃焼部障壁と煙道の役割を果たしたと推測される。

遺物出土状況：竪穴の南東壁付近の覆土中と、カマド燃焼部覆土上層から比較的まとまった土器片が出土した。その他は散在した出土状況である。

遺物：1～3はロクロ土師器杯で、体部下半から底部に回転ヘラ削りを施す。1は口径(12.6)cm・底径(6.2)cm・器高3.5cm, 2は口径12.8cm・底径6.7cm・器高4.7cm, 3は口径(14.0)cm・底径(7.4)cm・器高4.4cmである。4はロクロ土師器碗で、体部下半から底部に回転ヘラ削りを、内面にヘラミガキを施す。また内面に黒色処理の痕跡を残す。口径(19.4)cm・底径8.5cm・器高6.9cmである。5はロクロ土師器高台付碗で、



第186図 S I - 5 出土遺物

内面僅かなヘラミガキと黒色処理の痕跡を残す。底径7.9cmである。6は羽口で被熱変色している。長さ17.0cm，最大外径6.4cm，内径2.6cmである。

S I - 5 (第185・186図，図版21・79・96・99)

位置：I区。4C-27・28・37・38

規模・形態：一辺2.70m～3.30mの方形の掘り方である。東側壁が崩れにより拡がり，検出された掘り方の東西幅が長く検出された。また，先行する下層土坑の掘り方の影響により，西側壁にも浅い落込みを有する。竪穴の主軸方向は北に対して東にやや振れ，N-58°-Eである。

覆土：ソフトローム土を含む黒褐色土と暗褐色土が主体的にレンズ状に堆積する。全体的に焼土粒が含まれ，特に竪穴南側覆土中では部分的ながら，焼土ブロックの面的な分布が認められた。

構造：柱穴は確認されず，床面も特に硬化面も認められない。床面の北側がやや低く段状に検出されたが，先行する下層土坑に影響されたものと推測される。なお，先行土坑の上面はロームブロックにより貼床が認められ，その西側の1.00m×0.40m程の範囲では0.05m程の厚さの焼土層の堆積が認められた。カマドは北東壁の北東隅に位置する。カマドの遺存状況は悪く，袖は基部を残すのみである。袖はソフトローム

土を含む黄白色砂で作られている。カマド前面の竪穴床面に浅い掘窪みがあり、一部被熱痕跡がある。また、燃焼部の側壁から障壁にかけて被熱痕跡が認められた。燃焼部から竪穴外へ煙道部分の掘り方が伸びる。

重複関係：S I - 5 に先行して、長軸3.35m～3.54m、短軸1.15m～1.28mの平面長方形の土坑が重複する。ほぼ平らな底面の周囲には幅0.10m～0.20m、深さ0.01m～0.03mほどの溝を有する。また、径0.20m、深さ0.05m～0.10m程のピット状の落込みも重複して認められた。覆土はソフトローム土を含む暗褐色土が主体的に堆積する。また、焼土粒と炭片が多く認められた。

遺物出土状況：竪穴中央付近の覆土中層と、カマド上面から比較的まとまった遺物が出土した。

遺物：1～3はロクロ土師器杯で、1と2は底部に手持ちヘラ削りを施し、3の底部は回転糸切りっぱなし無調整である。ただし、1の手持ちヘラ削りも底部のごく周囲に限られる粗いもので、底部大半に回転糸切り痕を残すものである。なお1の口縁部から内面にかけて濃い油煙痕を残す。1は口径12.3cm・底径6.2cm・器高4.0cm、2は口径(14.0)cm・底径(7.1)cm・器高4.0cm、3は底径5.3cmである。4～8は土師器甕である。4は口径20.6cm、5は口径20.4cm、6は口径(20.7)cm・底径(6.8)cm・器高26.0cm、7は底径5.5cm、8は底径(6.2)cmである。

9は平瓦、10は鉄釘、11は刀子である。その他、鉄滓が6点66.1gが出土した。

S I - 6 (第187図、図版21・80)

位置：I区。4C-55・56・66 南斜面に位置している。

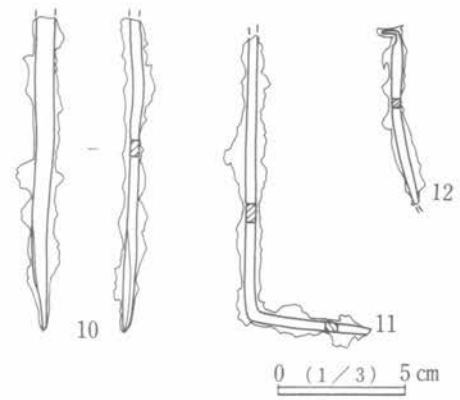
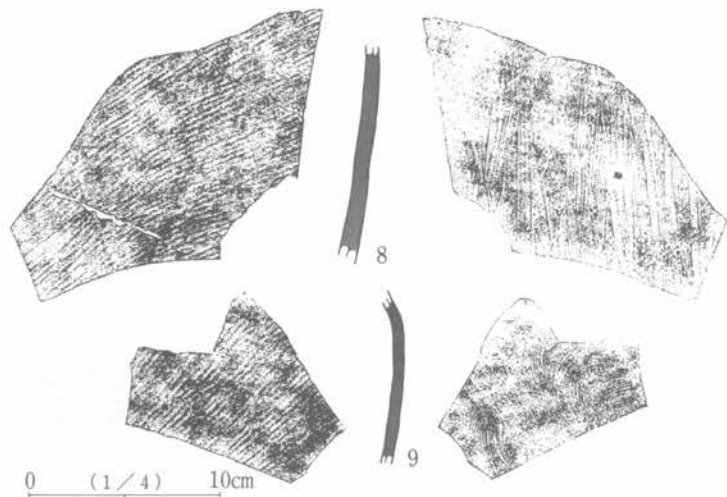
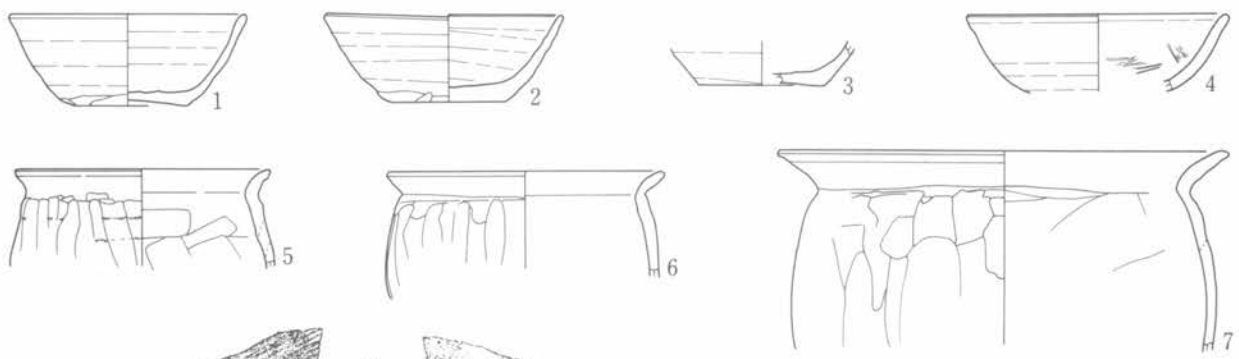
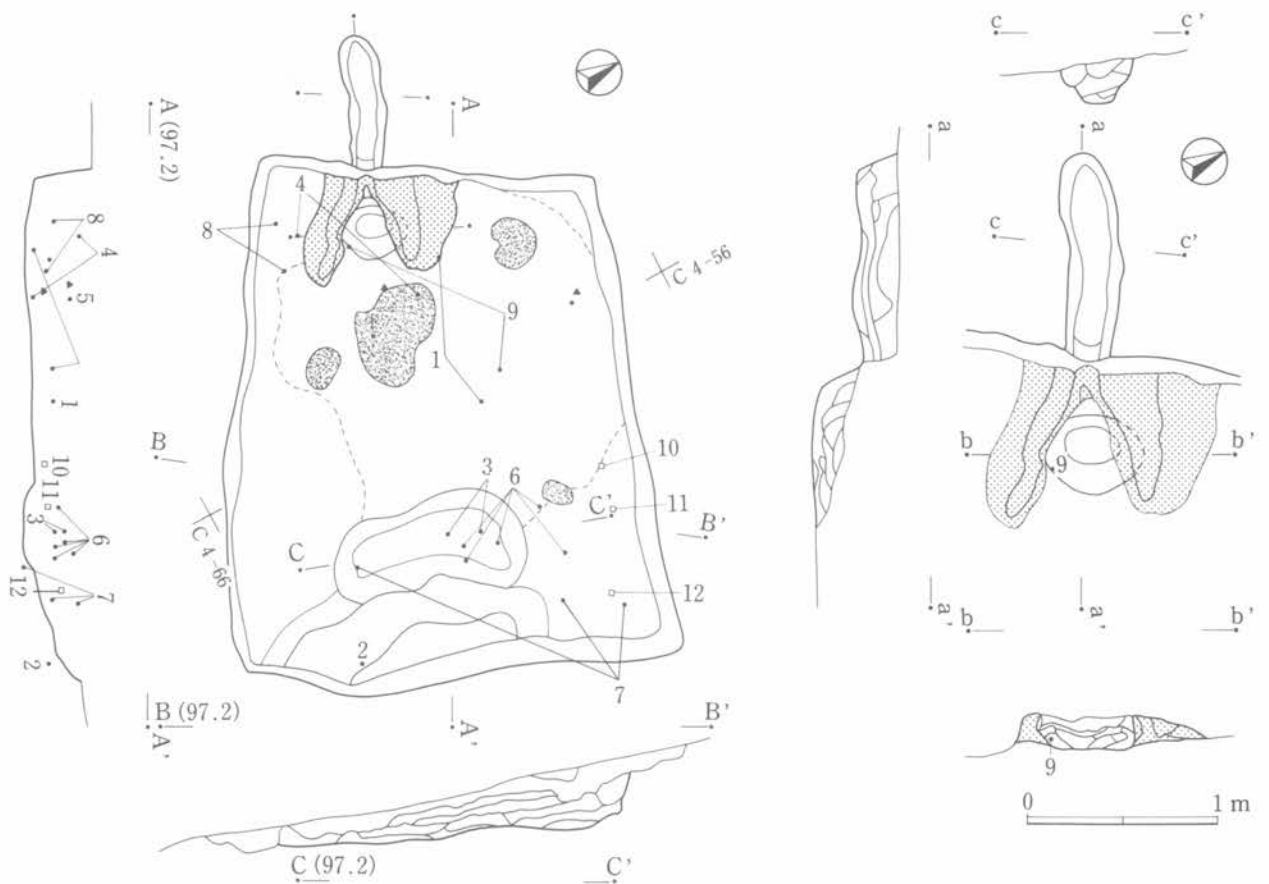
規模・形態：長軸長3.80m～4.10m、短軸長2.70m～3.50mの長方形の掘り方であるが、掘込みが深い北壁が東側へ広がり気味である。竪穴の主軸方向は北に対して西に大きく振れ、N-25°-Wで東西東に近い。

覆土：ソフトローム土を含む暗褐色土が主体的に堆積する。全体的に炭片と焼土粒を含む。なお、径0.5m～1.5mの山砂混じりの焼土ブロックが覆土中層付近で、竪穴の東西と中央で平面的に確認された。

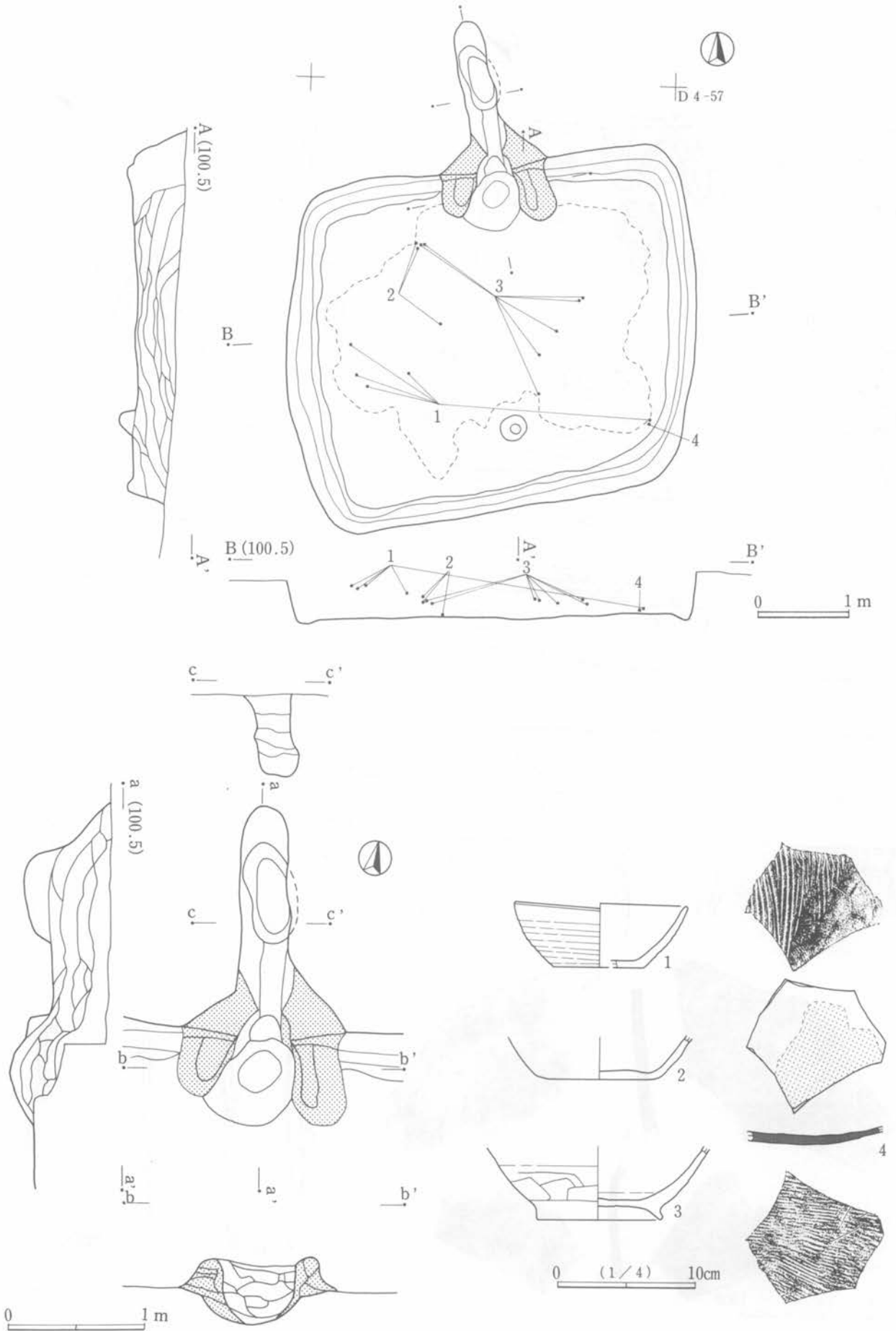
構造：柱穴は確認されなかった。床面は全体的に硬化し、東壁中央下に半円形の掘残しの高まりと、その西側に接して浅い溝状の窪みが検出された。東壁付近は木根の攪乱が激しく不明確であるが、掘り残しの高まりは平坦面を有し、床面よりも0.05m程高い。溝状の窪みもほぼ平坦で、床面よりも0.02m～0.10m程低い。また、カマドの前面と北東、溝の窪みの北側の床面の4か所で非常に良く焼けた面が検出された。ただし、掘込みは認められなかった。カマドは西壁のやや南に寄ったほぼ中央に位置する。袖は黄白色砂によって作られ、燃焼部は竪穴床面を浅く掘り窪めている。燃焼部内には黄白色砂を多く含む17層など崩落天井土が多く堆積する。側壁はほぼ垂直に立ち上がり、側壁から障壁にかけて良く焼けている。障壁もほぼ垂直に立ち上がり、竪穴外へ煙道部が伸びる。燃焼部の被熱痕跡は障壁から煙道部の入口付近まで続き、さらに煙道部の最奥部にも見られる。煙道部の底面はほぼ水平で、黄白色砂を多く含む天井崩落土層(20層と21層)が堆積する。

遺物出土状況：遺物はカマドの周辺と、竪穴の北東隅付近の覆土中層などからややまとまって出土した。

遺物：1～4はロクロ土師器杯で、1～3は体部下端のみに手持ちヘラ削りが加えられ、底部には回転糸切り離し痕が残る。4は内面にヘラミガキと黒色処理が施されている。1は口径(12.5)cm・底径5.9cm・器高4.7cm、2は口径12.4cm・底径6.0cm・器高4.6cm、3は底径(6.6)cm、4は口径(13.5)cmである。5～7は土師器甕で、5は口径(13.4)cm、6は口径14.3cm、7は口径(23.3)cmである。8と9は灰白色の須恵器



第187図 S I-6遺構図・出土遺物



第188図 S I-15遺構図・出土遺物

甕で外面に平行叩きが残る。10と12が鉄釘、11が鋸である。この他、鉄滓が9点80.2gが出土した。

S I - 15 (第188図, 図版22・80)

位置: I区。4D-58・68

規模・形態: 長軸4.10m~4.50m, 短軸3.60m~3.80mの長方形の掘り方である。竪穴の主軸方向は北に対してやや西に振れ, N-83°-Wである。

覆土: ロームブロックを含む暗褐色土が主体的に, レンズ状堆積している。覆土下層には炭粒と焼土粒が散る。

構造: 支柱穴は確認されなかった。南壁中央寄りに「出入口ピット」が発見された。径0.35m, 深さ0.15m程である。また, カマドの両側から一周する深さ0.01m~0.15mの周溝が発見された。床面はほぼ全面硬化面が認められた。カマドは北壁中央に位置する。袖は灰白色砂によって作られ, 燃焼部は竪穴床面をやや深く掘り窪めている。燃焼部内は灰白色砂や焼土塊を多く含む崩落天井土が堆積する。燃焼部の側壁と障壁はほぼ垂直に立ち上がり, 側壁から底面は良く焼けている。煙道部は竪穴外へ伸び, 煙道部入口には灰白色砂で作られた天井部の痕跡が残る。煙道部の底面は0.50m程平坦面が続き, その先の0.60m程の長さは0.20m程深く落ち込む。煙道部の掘り方自体も先に進む程深く掘り込まれていた。

遺物出土状況: 覆土中層付近で全体的に散漫な比較的少ない遺物出土量であった。

遺物: 1はロクロ土師器杯で, 底部と体部下端に回転ヘラ削りを施す。口径12.5cm・底径6.6cm・器高4.7cmである。2は非ロクロ成形の土師器杯で, 平底で外面体部と底部に手持ちヘラ削りを施す。底径(7.6)cmである。3はロクロ土師器高台杯碗で, 体部下端に手持ちヘラ削りを施す。内面にヘラミガキと黒色処理の痕跡を残す。底径9.2cmである。4は灰青色の須恵器甕胴部片で, 外面に平行叩きを, 内面に墨痕を残す。転用硯としての利用が認められる。

S I - 23 (第189・190図 図版22・81・96)

位置: I区。4D-65・66・75・76

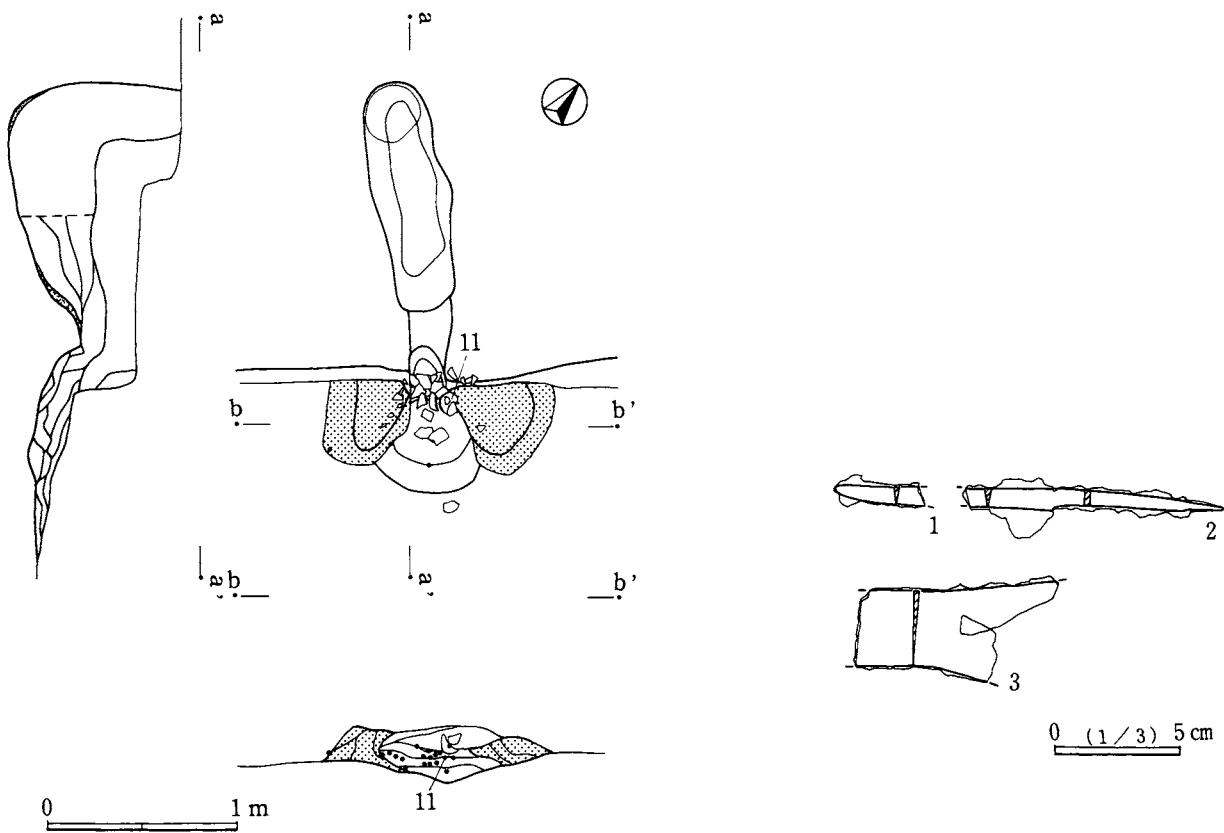
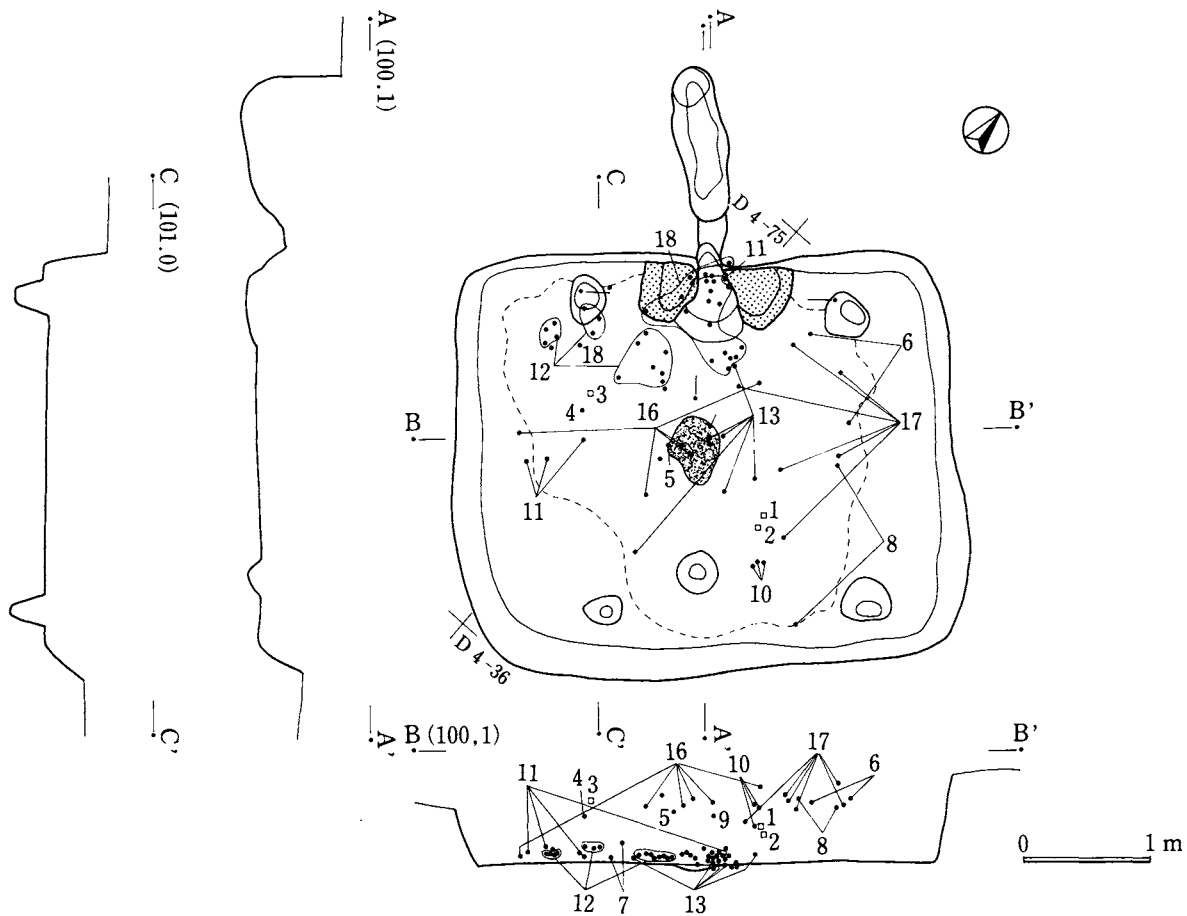
規模・形態: 長軸3.90m~4.10m, 短軸3.10~3.30mの長方形の掘り方である。竪穴の主軸方向は西にやや大きく振れN-48°-Wである。

覆土: ローム粒を多く含む褐色土と黄褐色土が主体的に堆積する。全体的に炭片を含む。

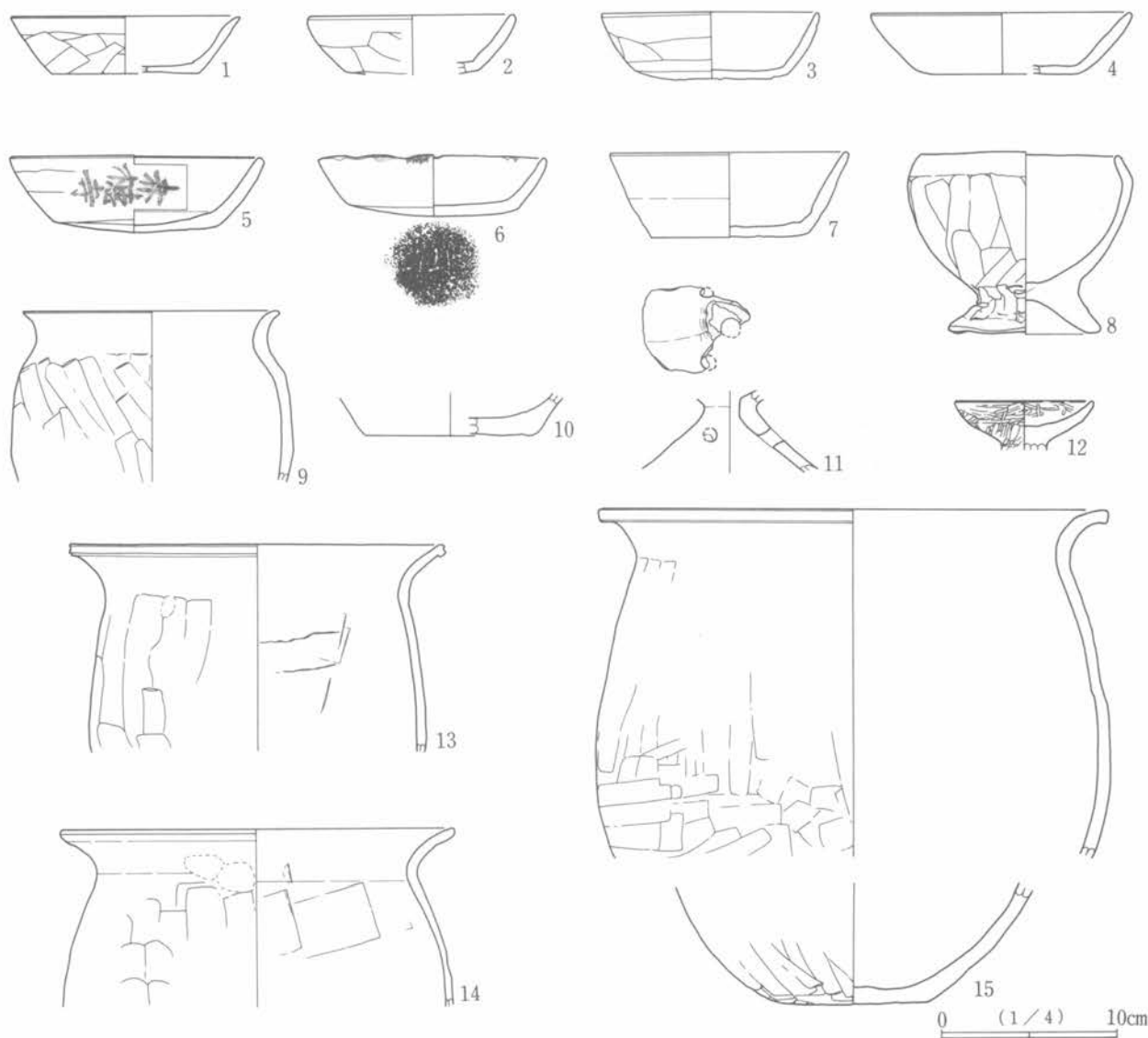
構造: 北西壁と南東壁近くで支柱穴が4か所検出された。深さは0.10m~0.35mである。南東壁中央下には出入口ピットが検出された。深さは0.08m程である。床面は支柱穴に囲まれた範囲から竪穴西隅の広い範囲で硬化面が認められた。床面中央では若干の落込みを有した被熱痕跡が検出された。カマドは北西壁中央に位置する。カマドの袖は黄白色砂によって作られている。燃焼部は竪穴床面を浅く掘り窪め, 天井崩落土の黄白色砂と焼土塊が厚く堆積している。側壁はよく焼け, 障壁はやや緩やかに立ち上がる。煙道部は竪穴外に伸び, カマドの後天井から煙道部天井の痕跡が比較的良く残る。煙道部の掘り方は次第に深く掘り込まれ, 掘り方底面は部分的に被熱痕跡が認められる。

遺物出土状況: カマド内から床面直上にかけて比較的まとまった遺物が出土した。

遺物: 1~6は非ロクロ成形の土師器杯で, 内面と口縁部に横ナデを, 外面体部と底部に手持ちヘラ削りを施す。やや凸出気味の平底で, 内面の体部と底部の境は明瞭である。1は口径(13.0)cm・底径(8.3)cm・



第189図 S I-23遺構図・出土遺物(1)



第190図 S I -23出土遺物 (2)

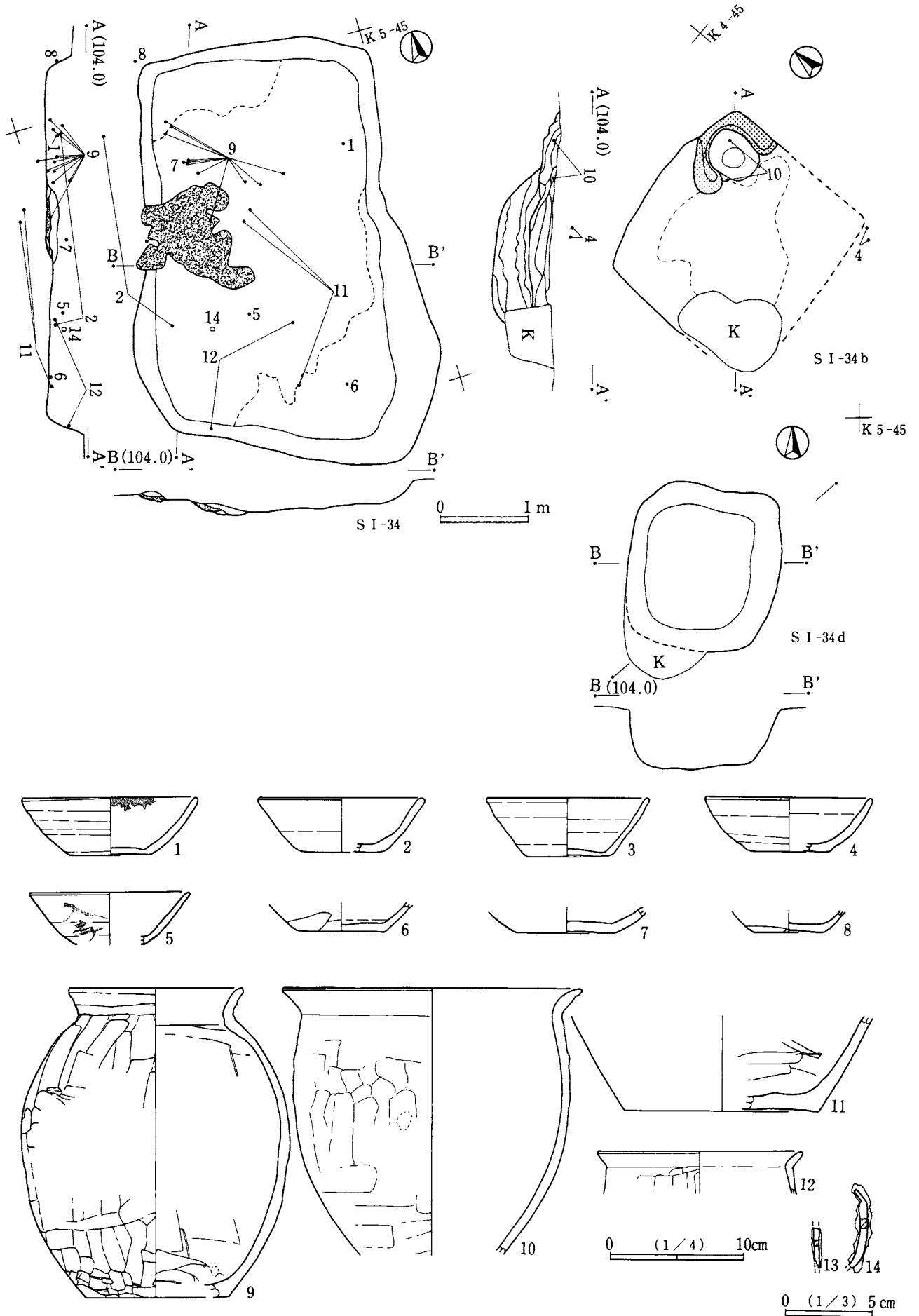
器高3.3cm, 2は口径(11.5)cm・底径(7.6)cm・器高3.4cm, 3は口径12.3cm・底径8.7cm・器高3.9cm, 4は口径(14.8)cm・底径(8.8)cm・器高3.5cm, 5は口径14.3cm・底径8.4cm・器高4.4cm, 6は口径12.9cm・底径9.6cm・器高3.5cmである。5は体部外面に墨書「赤穂寺」が, 6は底部外面に焼成後のヘラ描き「上」が認められる。また6は油煙痕跡を残す。7はロクロ土師器杯で, 底部は手持ちヘラ削りを施す。口径(13.5)cm・底径(9.0)cm・器高4.9cmである。8はロクロ成形の台付杯で, 口径11.3cm・底径8.4cm・器高10.3cmである。9~10・13~15は土師器甕で, 9は口径14.4cm, 10は底径(9.8)cm, 13は口径(20.8)cm, 14は口径(23.0)cm, 15は口径(28.6)cm・底径8.4cmである。II期

11と12は古墳時代の土器である。小刀, 刀子が出土している。

S I -34 (第191図 図版22・81・84・96)

位置: III区. K 5 -34・44・54

規模・形態: 長軸4.1m~4.6m, 短軸2.7m~3.5mの長方形の掘り方である。竪穴の主軸方向は北に対し



第191図 S I-34遺構図・出土遺物

てやや東に振れ、N-74°-Eである。

覆土：黄褐色土をブロック状に含む褐色土と暗褐色土が主体的に堆積する。全体的に焼土粒と炭化粒を含む。

構造：柱穴は確認されていない。北西隅と南東隅を除くほぼ全面で硬化面が認められた。西壁中央で被熱痕跡が検出された。袖の痕跡や山砂の検出は認められなかったが、カマドの燃焼部の可能性がある。

重複関係：S I-34 b に後行する。

遺物出土状況：被熱痕跡周辺を中心に若干の遺物の出土が認められた。

遺物：1と3～7はロクロ土師器杯で、1と8は体部下端と底部に回転ヘラ削りを、3と4は底部無調整で回転糸切り離し痕跡を残す。6と7は体部下端と底部に手持ちヘラ削りを施す。なお6の底部への手持ちヘラ削りを、その周囲のみで、底部中央には回転糸切り離し痕跡を残す。2は非ロクロ成形による土師器杯で、外面体部と底部に手持ちヘラ削りを施す。内面体部と底部を画する境は認められない。5は墨書土器で、体部外面に「入生」とある。1は口径(13.0)cm・底径5.9cm・器高4.3cm、2は口径(12.4)cm・底径(6.3)cm・器高4.1cm、3は口径(12.0)cm・底径(6.6)cm・器高4.4cm、4は口径(12.3)cm・底径(6.6)cm・器高4.0cm、5は口径(11.8)cm・底径(5.2)cm・器高(3.8)cm、6は底径6.8cm、7は底径(7.2)cm、8は底径5.3cmである。なお、1は口縁部に油煙痕跡を残す。9から12は土師器甕で、9は口径(12.9)cm・胴部最大径(20.0)cm・底径(10.8)cm・器高22.8cm、10は口径(22.4)cm・胴部最大径(20.9)cm、11は口径(15.2)cm、12は底径(14.6)cmである。13と14は鉄釘である。

S I-34 b (第191図, 図版, 81・84・96)

位置：III区。K 5-44

規模・形態：一辺2.20m～2.30mの方形の掘り方である。竪穴の主軸方向はほぼ南北方向に一致する。

覆土：ソフトローム土を含む暗褐色土が主体的に堆積する。床面直上には特に山砂が多く含まれている。

構造：柱穴は確認されていない。床のほぼ中央に硬化面が認められ、先行するS I-34 dの土坑の覆土上に貼床状のロームブロックの混入が認められた。北東隅にカマドが位置する。袖は白黄色砂によって作られている。燃焼部は竪穴床面を浅く掘り窪めている。竪穴の対角線方向の掘込みに段状の痕跡が認められ、障壁と煙道の痕跡と推測される。S I-34 dの土坑は長軸1.80m、短軸1.70m、深さ0.65mの方形の掘り方で、底面も平坦である。覆土はロームブロックを含む暗褐色土が主体的に堆積する。

重複関係：S I-34の竪穴住居跡に先行し、S I-34 d土坑に後行する。

遺物出土状況：カマド燃焼部内で比較的まとまった出土が認められたが、全体的には散漫で出土量は少ない。

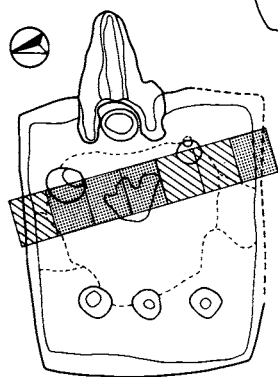
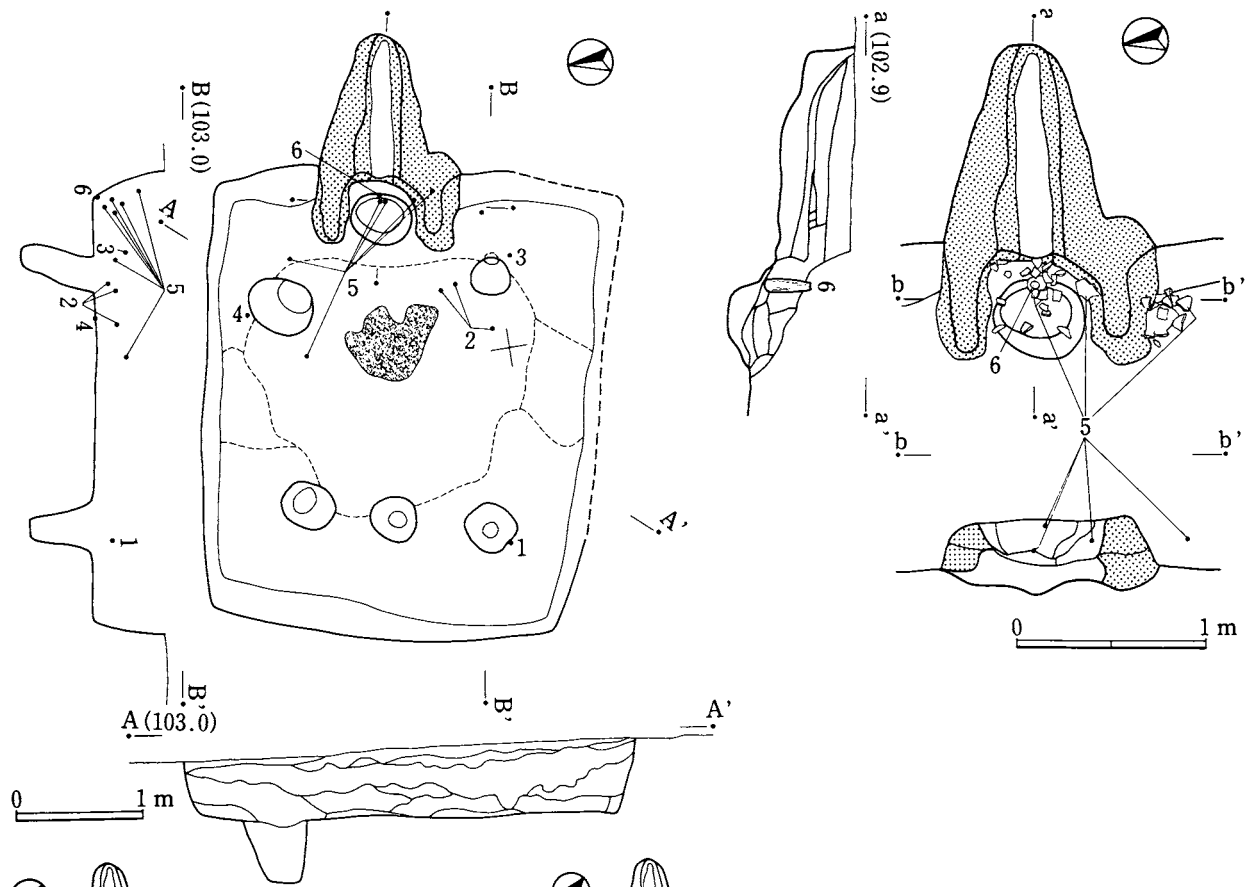
遺物：鉄釘が出土している。

S I-42 (第192図 図版23・82・84・89)

位置：II区。I 4-69・79, J 4-60・70

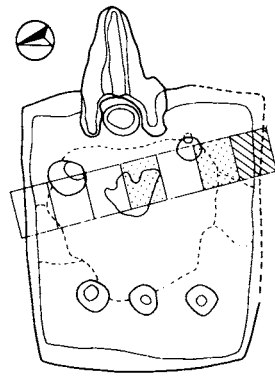
規模・形態：長軸3.40m～3.60m、短軸2.90m～3.20mの長方形の掘り方である。竪穴の主軸方向は北に対して西に大きく振り、N-10°-Eのほぼ東西東である。

覆土：新期テフラ土をやや多く含む暗褐色土が主体的に堆積する。覆土中下層では焼土粒と炭化粒を全体的に含み、特に覆土下層では多い。竪穴中央の床面直上では長さ0.20m～0.60m、径0.04m程の丸太状の



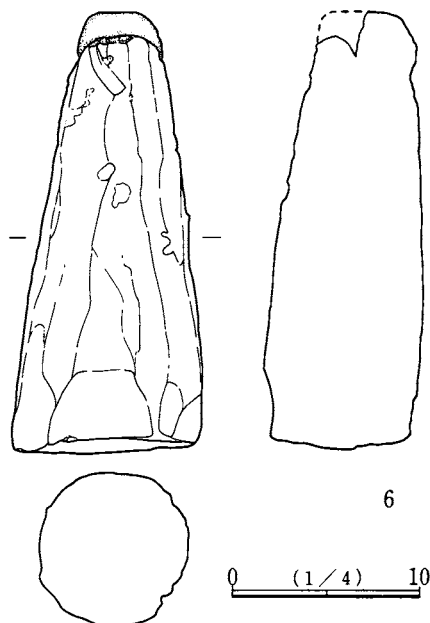
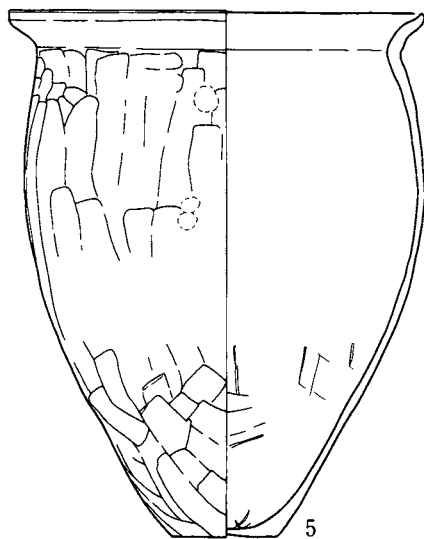
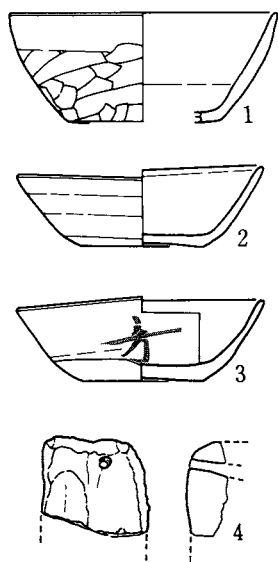
砂鉄 (重量)

重量別 (g)
 0 ~ 9
 10 ~ 24
 25 ~



鍛冶滓 (重量)

重量別 (g)
 0 ~
 1 ~



第192図 S I-42遺構図・出土遺物

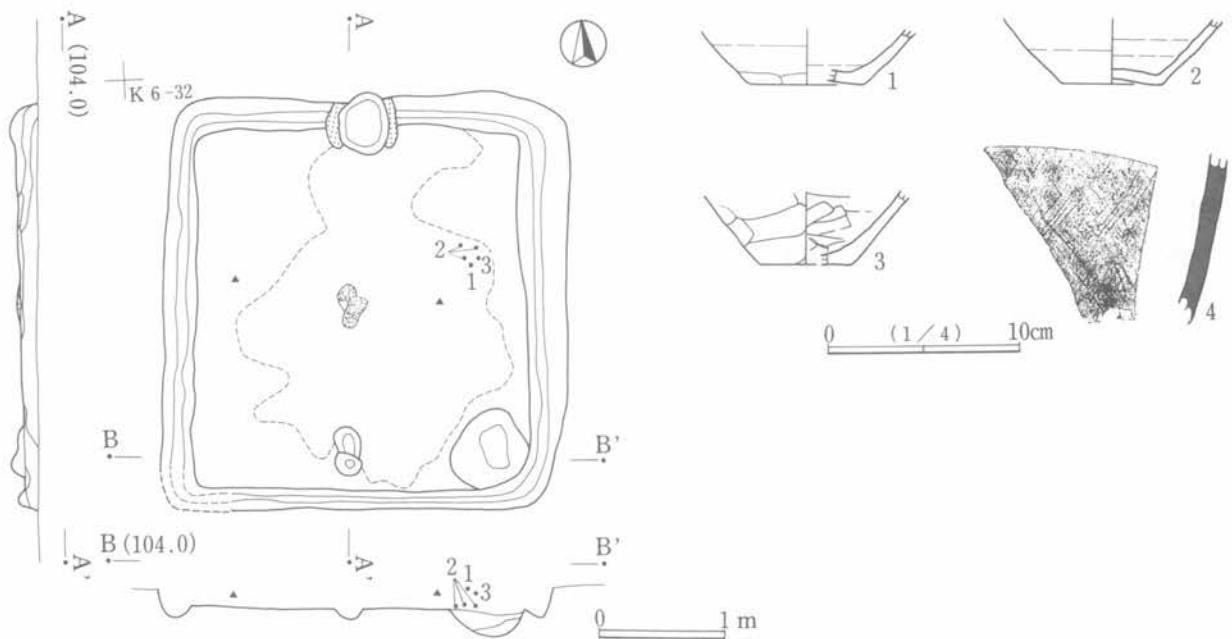
炭化材が4本程南北方向を向いて検出された。

構造：支柱穴4か所と出入口ピット1か所が検出された。支柱穴は竪穴のほぼ対角線上に位置し、深さ0.20m～0.50mである。東側の2本のP1とP2の掘り方は底面を東に傾けている。出入口ピットは西壁中央下に位置し、深さ0.46mである。支柱穴と出入口ピットはロームブロックを含む暗褐色土を主体的に堆積し、固く締まっている。柱痕跡は認められなかった。支柱穴に囲まれた床面中央は特に硬化し、礫と砂礫を含み灰白色を帯びている。また、北壁と南壁の中央下もやや硬く硬化し、黒色粘質土を含み固く締まっている。また、カマド全面に0.60m×0.80mの被熱範囲が検出された。掘込みは伴わないが、焼土の厚さが0.10m程あり、炭化粒と黄色砂粒が含まれる。被熱痕跡付近からわずかな鉄滓が発見され、鍛冶に伴う炉の可能性はある。

カマドの袖は黄白色砂によって作られている。燃焼部は竪穴床面を浅く掘り窪め、残存する側壁は緩やかに立ち上がる。燃焼部の中央奥には土製支脚が立った状態で出土し、その後ろでほぼ垂直に立ち上がる障壁が検出された。燃焼部内では崩落天井土と推測される焼土ブロック層(3層)が検出された。煙道部は竪穴外へ伸び、天井崩落土の被熱した黄白色砂等が堆積している。また、掘り方の下層には焼土粒を含む暗褐色土が0.10m程の厚さで堆積し(18層)、裏込め土の可能性はある。

遺物出土状況：カマド燃焼部内からカマド周辺にかけて比較的まとまりが認められる他は、全体的に覆土中層付近で散漫な出土状況である。

遺物：1は非ロクロ成形の土師器杯で、内面と口縁部に横ナデを、外面体部と底部に手持ちヘラ削りを施す。口径(13.8)cm・底径8.0cm・器高5.7cmである。2と3はロクロ土師器杯で、2は体部下端と底部に回転ヘラ削りを施す。3は墨書土器で、「立万」と読むことができる。2は口径12.8cm・底径6.3cm・器高4.1cm、3は口径12.6cm・底径6.2cm・器高4.3cmである。5は土師器甕で、口径21.7cm・胴部最大径21.2cm・底径5.4cmである。6は土製支脚で、ヘラで面取り状に成形されている。最大径10.0cm、高さ22.6cmである。4は砥石である。炉周辺のサンプル土を水洗して選別した結果、僅かではあるが鉄滓が発見された。



第193図 S I-43遺構図・出土遺物

S I - 43 (第193図, 図版23)

位置: III区。K 6 - 32

規模・形態: 一辺3.10m~3.20mの方形の掘り方である。竪穴の主軸方向は南北方向にほぼ一致する。

覆土: 新期テフラ土を含む暗褐色土が主体的に堆積する。全体的に焼土粒と炭化粒を含む。

構造: 支柱穴は確認されていない。南壁中央下に深さ0.10mの出入口口ピットが検出された。南東壁隅に径0.55m~0.60m, 深さ0.20m程の丸底のピットが検出された。黒色土を含む黒褐色土が下層に堆積していた。カマドから出入口ピットにかけての床で硬化面が認められた。床面中央で径0.25m~0.35mの被熱痕跡が認められた。深さ0.02m程の掘込みに黄白色砂で固く締まる土層が認められ, その上面で被熱痕跡が認められた。この被熱痕跡周囲の土を採取し, 水洗分類したが鉄滓等は発見できなかった。ただし, 鉄滓が付近から出土しており, 鍛冶に伴う炉の可能性もある。竪穴周囲からは深さ0.01m~0.07mの周溝が検出された。カマドは北壁中央に位置する。ただし, 残りは悪く, 基部のみの袖と, 竪穴床面を浅く掘り窪めた燃焼部が検出された。煙道部の痕跡は認められなかった。

遺物出土状況: 床面東側でややまとまった遺物が出土した他は, 全体的に散漫で少量の出土である。

遺物: 1と2がロクロ土師器杯で, 1は体部下端と底部に手持ちヘラ削りを, 2は底部無調整で回転糸切り離し痕跡を残す。1は底径(6.0)cm, 2は底径5.4cmである。3は土師器甕で底径(5.2)cmである。4は暗灰色の須恵器甕胴部片で, 外面に格子叩きを残す。この他, 鉄滓が2点41.3g出土した。

S I - 45 (第194図, 図版23・82・84)

位置: III区。J 4 - 70・71・80・81

規模・形態: 長軸4.40m~4.50m, 短軸3.70m~3.90mの長方形の掘り方である。竪穴の主軸方向は北に対して東に若干振れ, N-85°-Eである。

覆土: ソフトローム土を含む褐色土が主体的に堆積する。

構造: 支柱穴は竪穴の対角線上に4か所検出された。深さ0.50m~0.60mで, ロームブロックを含む暗褐色土が主体的に堆積する。明瞭な柱痕跡は認められなかった。南壁中央下には, 深さ0.35m程の出入口ピットが検出された。褐色土が主体的に堆積する。カマドから南壁にかけての床面中央で特に硬化面が認められた。また東壁と西壁に接した床面もやや硬い床面が認められた。カマドは北壁中央に位置する。袖は黄白色砂によって作られている。燃焼部は竪穴外へやや掘り込まれ, 竪穴床面よりも浅く掘り窪まっている。側壁はほぼ垂直に立ち上がり, 障壁は緩やかで, 不明確である。竪穴外へ伸びた煙道部の掘り方は幅広く, 黄白色砂と粘土ブロックが比較的多く堆積する。

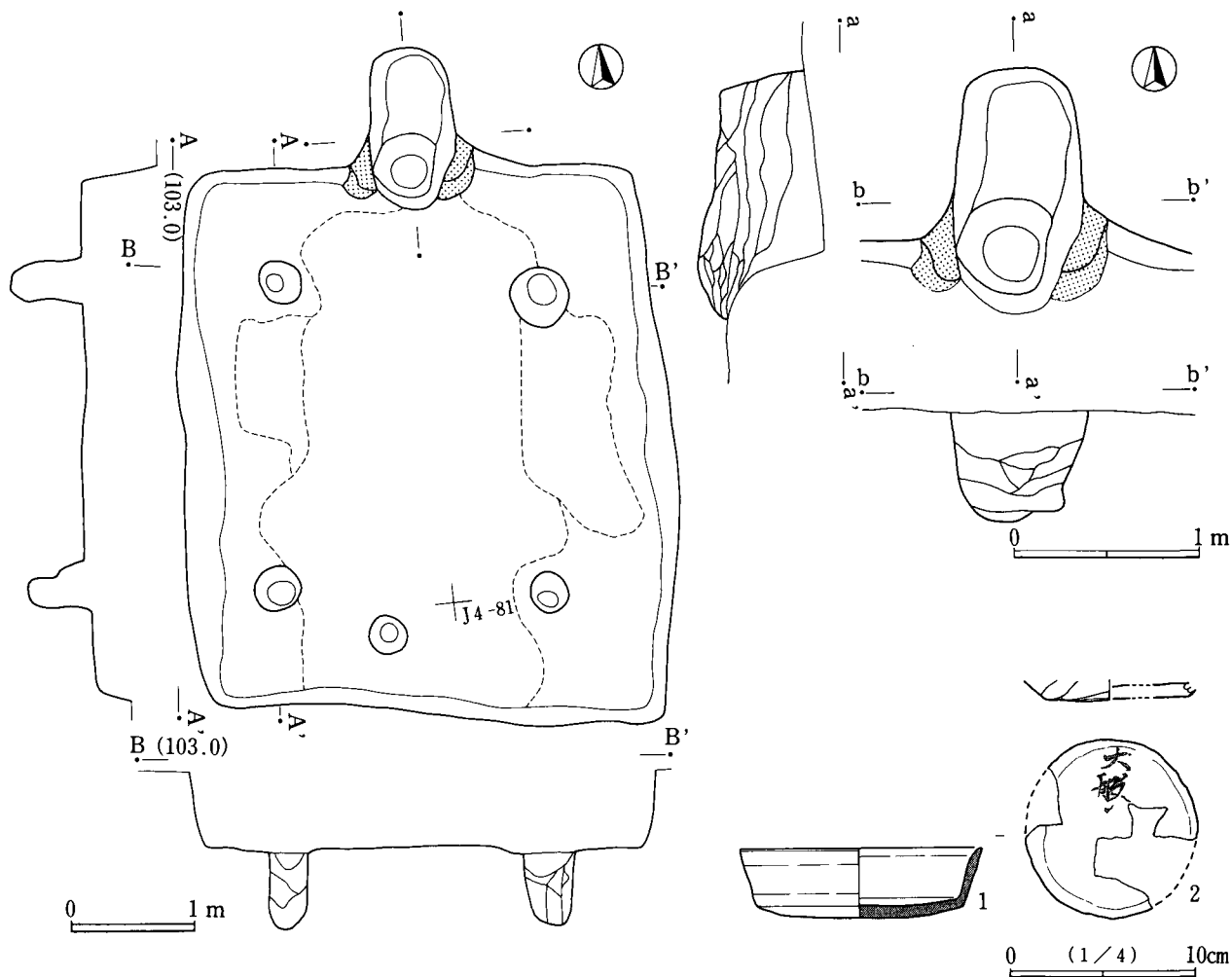
遺物出土状況: 全体的に散漫で, 微量である。

遺物: 1は須恵器杯で, 底部に回転ヘラ削りを施す。胎土に不純物を比較的含まず, 淡灰白色を呈す。器面に顕著に火襷が認められる。在地産(上総産)と推測される。口径(12.9)cm・底径(11.1)cm・器高3.6cmである。2はロクロ土師器で, 底径7.7cmである。墨書土器で, 「大般(若?)」と読むことができる。

S I - 46 (第195図, 図版24)

位置: III区。J 5 - 94・95, J 6 - 04・05

規模・形態: 長軸3.60m, 短軸2.70m~3.10mの長方形の掘り方である。竪穴の主軸方向は北に対してや

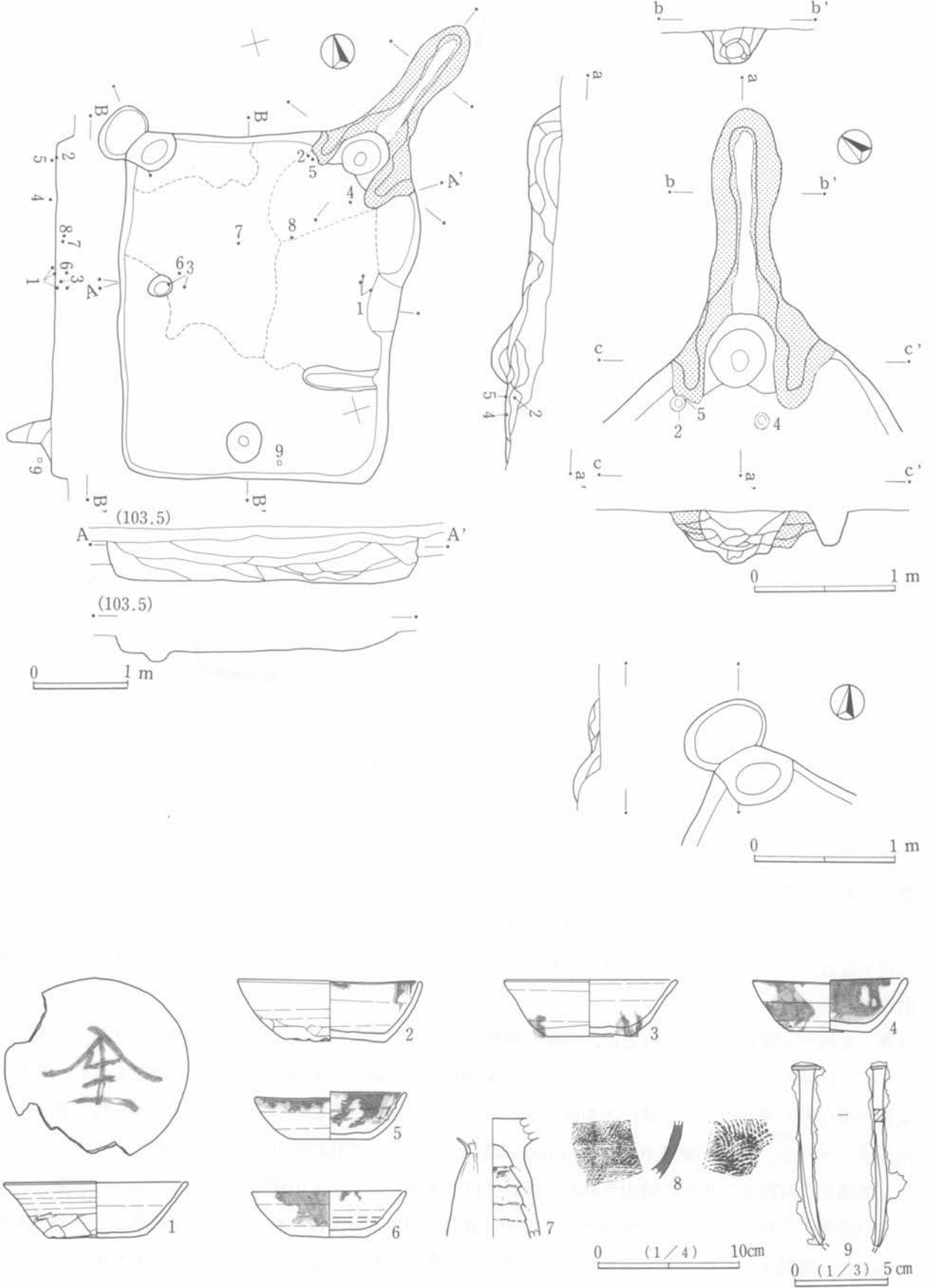


第194図 S I-45遺構図・出土遺物

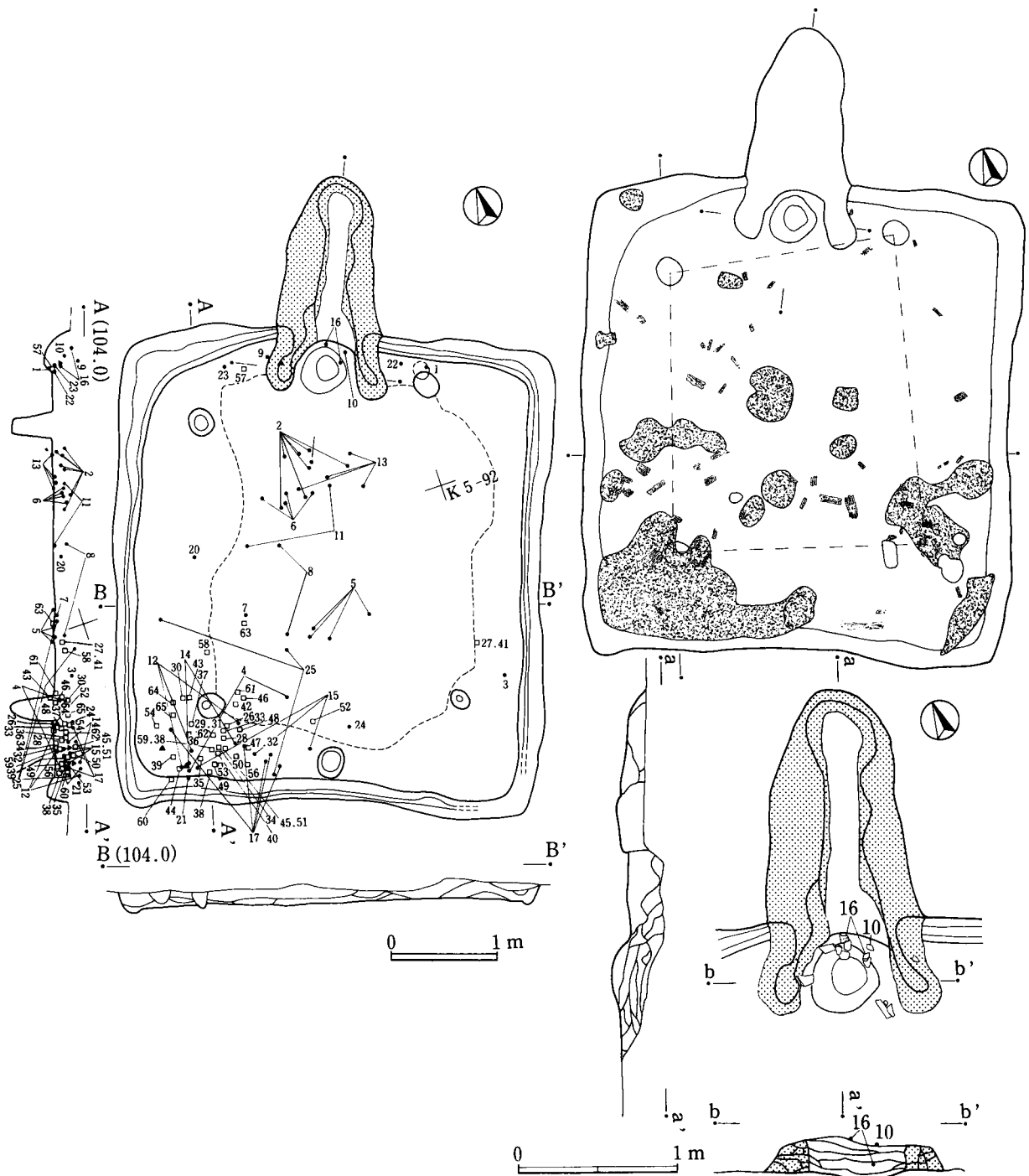
や東に振れ、 $N-72^{\circ}-E$ である。

覆土：黄色砂質土を含む暗褐色土が主体的に堆積する。覆土下層では焼土粒と炭化粒が含まれている。床面直上ではほぼ全面で長さ0.20m～0.70mの丸太状の炭化材が出土した。また、床面中央では焼土粒と炭化粒を含むブロックが平面的にも検出されている。また、黄白色砂ブロックも床面中央東側で平面的に検出されている。

構造：支柱穴は確認されなかったが、南壁と西壁中央の下に出入口ピットが2か所検出された。南壁付近のピットは深さ0.46mで、西壁付近のピットは深さ0.08mである。床面北側に硬化面が認められ、特に北東側の硬化面が著しい。この硬化面を区切るかのように、東壁付近に仕切り状の深さ0.04m程の溝が0.80m程検出された。また、東壁中央の0.45m程の範囲で、スロープ状に掘り残した壁が検出された。カマドは北東隅と北西隅の2か所で検出された。遺存状況と床面のあり方との関係から、北西隅～北東隅へのカマドの造替えが想定される。北東隅カマドの袖は黄白色砂によって作られている。燃焼部は竪穴外へも掘り込まれ、燃焼部からカマド全面もやや広く浅く掘り窪められている。カマド前面には0.80m程の黒色灰の拡がり認められた。燃焼部内には崩落天井土と想定される黄白色砂ブロック層(20層)が堆積する。障壁の立上がりは緩やかで、掘り方面に黄白色で山状に盛って作られている。煙道奥の天井部の遺存状況



第195図 S I-46遺構図・出土遺物



第196図 S I-48遺構図

は良好で、断面丸形の縁に黄白色砂が張付いた煙道と、黄白色砂を含み硬く締まった裏込め土の状況が検出された。一方、北西隅のカマドは、竪穴北西隅の床面を外して、燃烧部の浅い掘窪みが検出され、竪穴外へ煙道部に伴う掘り方が検出された。袖の痕跡は確認できなかった。床面の掘窪みと竪穴外の掘り方中からは黄白色砂の混入が認められ、竪穴外の掘り方付近を中心に焼土粒の混入が認められた。

遺物出土状況：北東隅カマド前面から竪穴北側の床面直上にかけて比較的まとまった遺物が出土したが、全体的には少量である。カマド前面からの土師器杯2は床面直上で正位で出土し、西袖に接した土師器杯1と6は合口の状態で出土した。

遺物：1～6はロクロ土師器杯で、2は体部下端と底部に手持ちヘラ削りを、3・4・6は体部下端と底

部に回転ヘラ削りを，5は底部に手持ちヘラ削りを施す。1は墨書土器で，内面に「入生」とある。2～6はいずれも口縁部に油煙痕跡を残す。1は口径12.8cm・底径6.9cm・器高3.9cm，2は口径12.9cm・底径7.1cm・器高4.4cm，3は口径12.2cm・底径6.0cm・器高4.0cm，4は口径10.8cm・底径5.8cm・器高3.8cm，5は口径10.7cm・底径6.0cm・器高3.3cm，6は口径(10.8)cm・底径5.4cm・器高3.2cmである。7は高杯脚部，8は灰白色の須恵器瓶類の胴部片で内面に同心円文の当て具痕跡を残す。9は鉄釘である。

S I - 48 (第196～198図，図版24)

位置：Ⅲ区。K 5 - 81・82・91・92

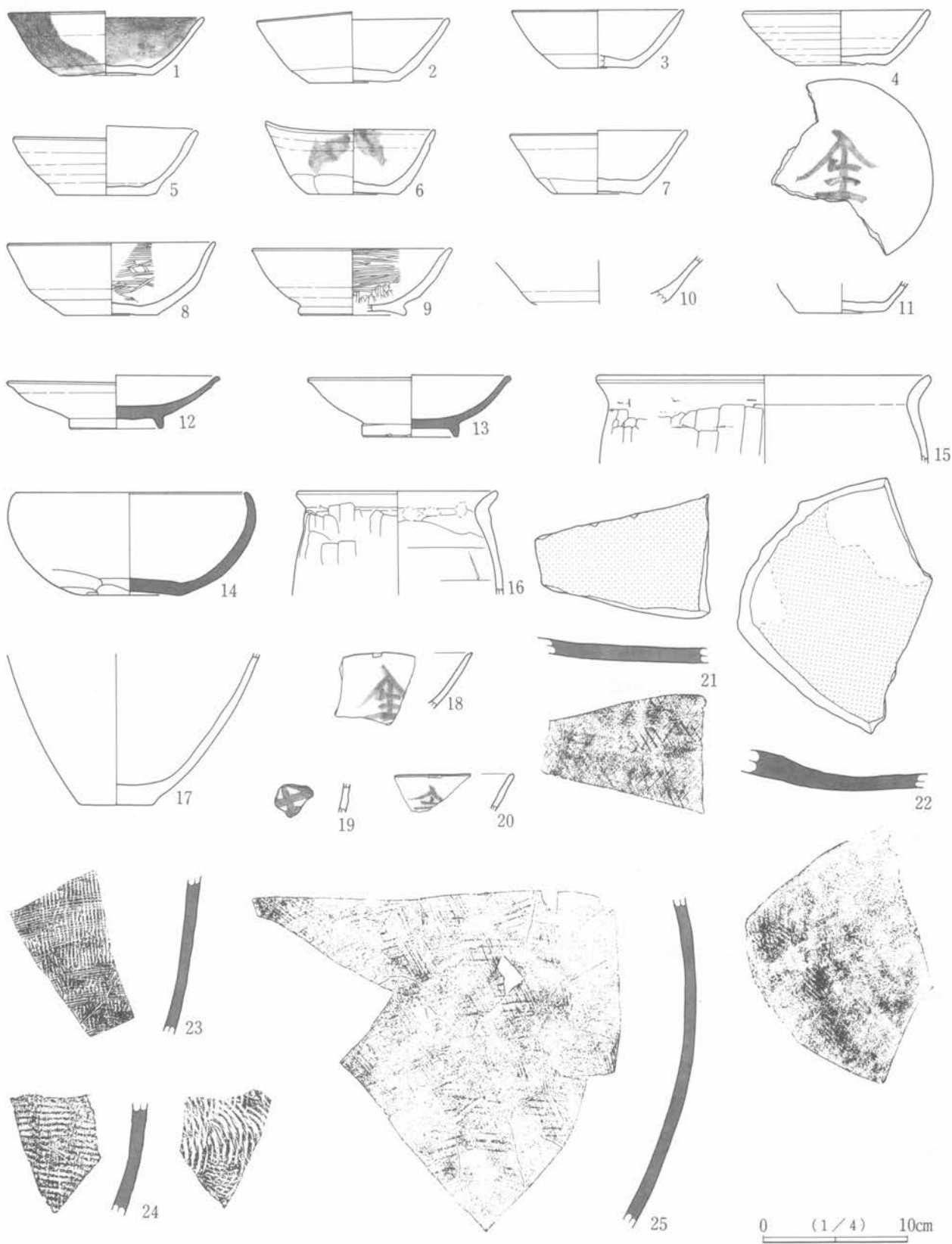
規模・形態：長軸4.30m～4.40m，短軸4.00mの長方形の掘り方である。竪穴の主軸方向は北に対してやや東に振れ，N-70°-Eである。

覆土：焼土と炭化粒を含む暗褐色土が堆積する。特に床面直上では焼土粒と炭化粒の混入が多い。平面的にも北西隅と北東隅を中心に多くの焼土ブロックが検出され，丸太状の炭化材も多く検出された。遺物の出土状況から見ても，消失家屋と考えられる。

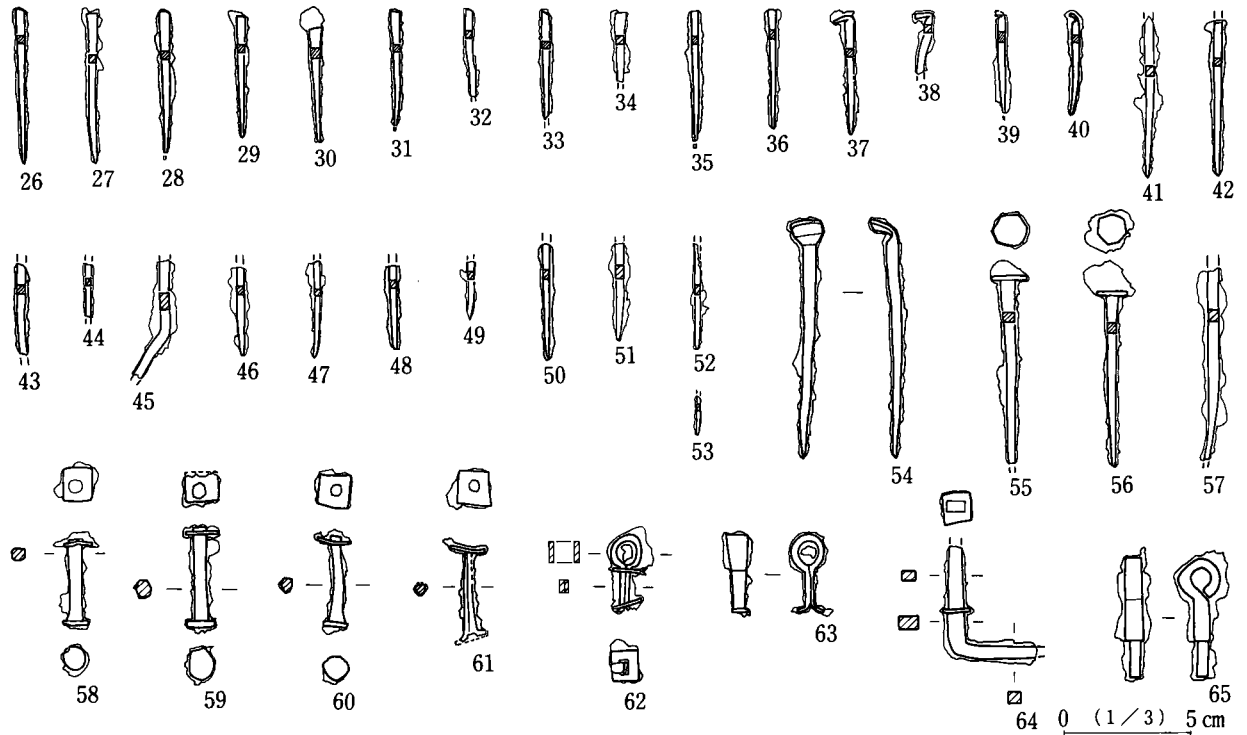
構造：竪穴の対角線上から支柱穴が4か所，南壁中央下に出入口ピットが1か所検出された。北東隅の支柱穴は北壁付近で検出され，底面が北側に寄る掘り方であった。支柱穴の深さは0.27m～0.43mである。出入口ピットは深さ0.30mである。床は支柱穴に囲まれた広い範囲が硬化しており，また被熱もほぼ全面で認められる。カマドは北壁中央に位置する。カマド前面には長さ0.80mにわたって，炭化粒と灰の拡がり認められた。カマドの袖は黄色砂によって作られている。燃焼部は竪穴床面を浅く掘り窪められ，側壁はほぼ垂直に立ち上がる。燃焼部内では特に前天井の崩落土の一部と想定される黄白色砂ブロックと焼土ブロックが平面的に顕著に認められた。煙道部は竪穴外へ伸びる。煙道部は幅0.60m～1.20mの幅広い掘り方に対し，煙道幅は0.20m程と平面的に想定される。ただし，一部攪乱され，煙道と裏込めとの関係は不明瞭である。

遺物出土状況：カマド前面から周辺と竪穴南西隅の床面直上付近で特に遺物のまとまりが認められた。

遺物：1～8と11はロクロ土師器杯で，1と2は体部下端と底部に回転ヘラ削りを，3は底部のみに回転ヘラ削りを，5は底部に手持ちヘラ削りを，6～8は体部下半と底部に手持ちヘラ削りを施す。11は底部無調整で，回転糸切り離し痕跡を残す。また1の底部内面にヘラ描き「×」とタール状の油煙痕跡が残り，8は内面にヘラミガキと黒色処理を施す。4は墨書土器で，底部に「入生」とある。1は口径13.4cm・底径6.4cm・器高4.5cm，2は口径13.1cm・底径6.3cm・器高5.0cm，3は口径(12.0)cm・底径(5.6)cm・器高4.0cm，4は口径(12.8)cm・底径(6.3)cm・器高3.8cm，5は口径12.8cm・底径7.0cm・器高4.7cm，6は口径11.8cm・底径6.2cm・器高5.0cm，7は口径12.1cm・底径6.2cm・器高4.4cm，8は口径(14.3)cm・底径6.4cm・器高4.9cmである。9はロクロ土師器高台付椀で，体部下端と底部に回転ヘラ削りを施し，断面三角形の高台を貼り付けている。内面はヘラミガキと黒色処理を施す。口径(13.6)cm・底径(7.2)cm・器高4.5cmである。10はロクロ土師器杯で，高杯の杯部の可能性がある。12と13は灰釉陶器皿で，12は口径14.4cm・底径6.5cm・器高3.6cm，13は口径13.8cm・底径6.6cm・器高4.2cmである。14は須恵器鉢で，口径(15.9)cm・底径7.0cm・器高6.9cmである。15～17は土師器甕で，15は口径(22.8)cm，16は口径(14.0)cm，17は底径5.2cmである。18～20は墨書土器である。18は「入生」とあり，19，20も断片ではあるが，「入生」と書かれていたものと考えられる。21と22は須恵器甕胴部片で，内面に墨痕を明瞭に残す転用碗である。21の外面には



第197図 S I-48出土遺物(1)



第198図 S I-48出土遺物(2)

斜格子叩きが、22の外面には平行叩きが僅かに残る。23～25は須恵器甕胴部片で、外面に平行叩きが、23と24の内面に同心円文状の当て具痕跡が残る。鉄釘28点、鋸1点、金具11点、鉄塊1点が出土。この他、鉄滓6点79.7gが出土した。

S I-49 (第199図, 図版24)

位置：Ⅲ区。K 5-42・43・52・53

規模・形態：一辺1.8m～2.0mの方形の掘り方である。竪穴の主軸方向は北に対してやや東に振れ、N-75°-Eである。

覆土：新期テフラ土を含む暗褐色土が主体的に堆積する。

構造：柱穴は確認されていない。床は中央の狭い範囲で硬化面が認められた。カマドは南東隅で検出された。袖の痕跡はなく、竪穴外へ掘り窪められた被熱痕跡を有す燃焼部が確認された。カマド前面には広く黄白色砂が床面上に認められ、燃焼部内にも多くの黄白色砂と焼土粒が堆積している。そして、燃焼部の南から南東にかけて掘込みが認められ、煙道部の痕跡と想定された。

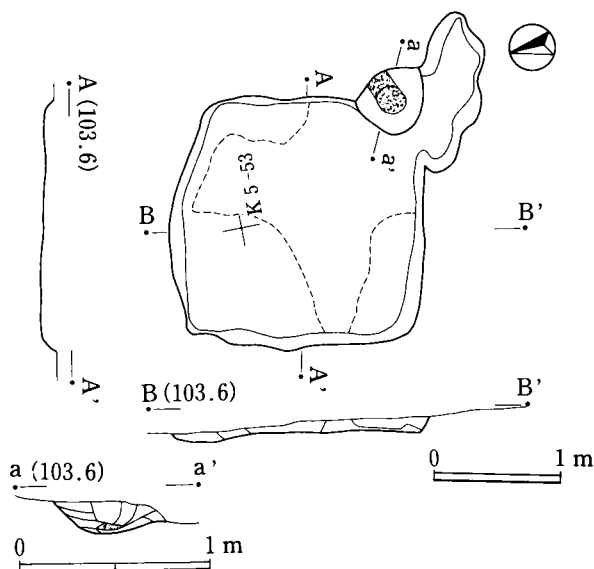
遺物出土状況：全体的に散漫な少量の出土である。

S I-50 (第200図, 図版25)

位置：Ⅲ区。J 6-35・36・45・46

規模・形態：長軸3.3m, 短軸2.9m～3.2mのほぼ方形の掘り方である。竪穴の主軸方向は南北方向にほぼ一致する。

覆土：ローム粒を含む暗褐色土が主体的に堆積する。



第199図 S I -49遺構図

構造： 竪穴の対角線上に支柱穴が4か所、南壁中央下に出入口ピットが検出された。支柱穴は深さ0.25m～0.35mで、暗褐色土が堆積する。柱痕跡は認められなかった。出入口ピットは深さ0.55mで、底面が南側に傾く掘り方であった。支柱穴に囲まれた床中央に特に硬化面が認められ、その周囲にやや硬化した面が認められた。東側の床面直上では炭化粒と焼土粒の拡がり認められた。カマドは北壁中央に位置する。カマド前面の床面では炭化粒と灰の拡がり、黄白色砂ブロックが認められた。カマドの袖は黄白色砂によって作られ、燃烧部は竪穴床面を浅く掘り窪めている。側壁はほぼ垂直に立ち上がり、良く焼けている。燃烧部上面で、前天井の崩落土と想定される焼土ブロックが平面的に確認された。障壁は緩やかに立ち上がり、煙道部は竪穴外へ伸びる。ただし、煙道部の残りは悪く、掘り方の底面付近の検出にとどまる。掘り方底面には粘土ブロックを多く硬く締まった層が部分的に認められ、裏込め土の可能性が想定される。煙道の最奥部の掘り方はやや深く、部分的に被熱痕跡が認められた。

遺物出土状況： カマド周辺で比較的まとまった出土が認められたが、その他は遺構確認面から覆土中層にかけて散漫な出土状況であった。

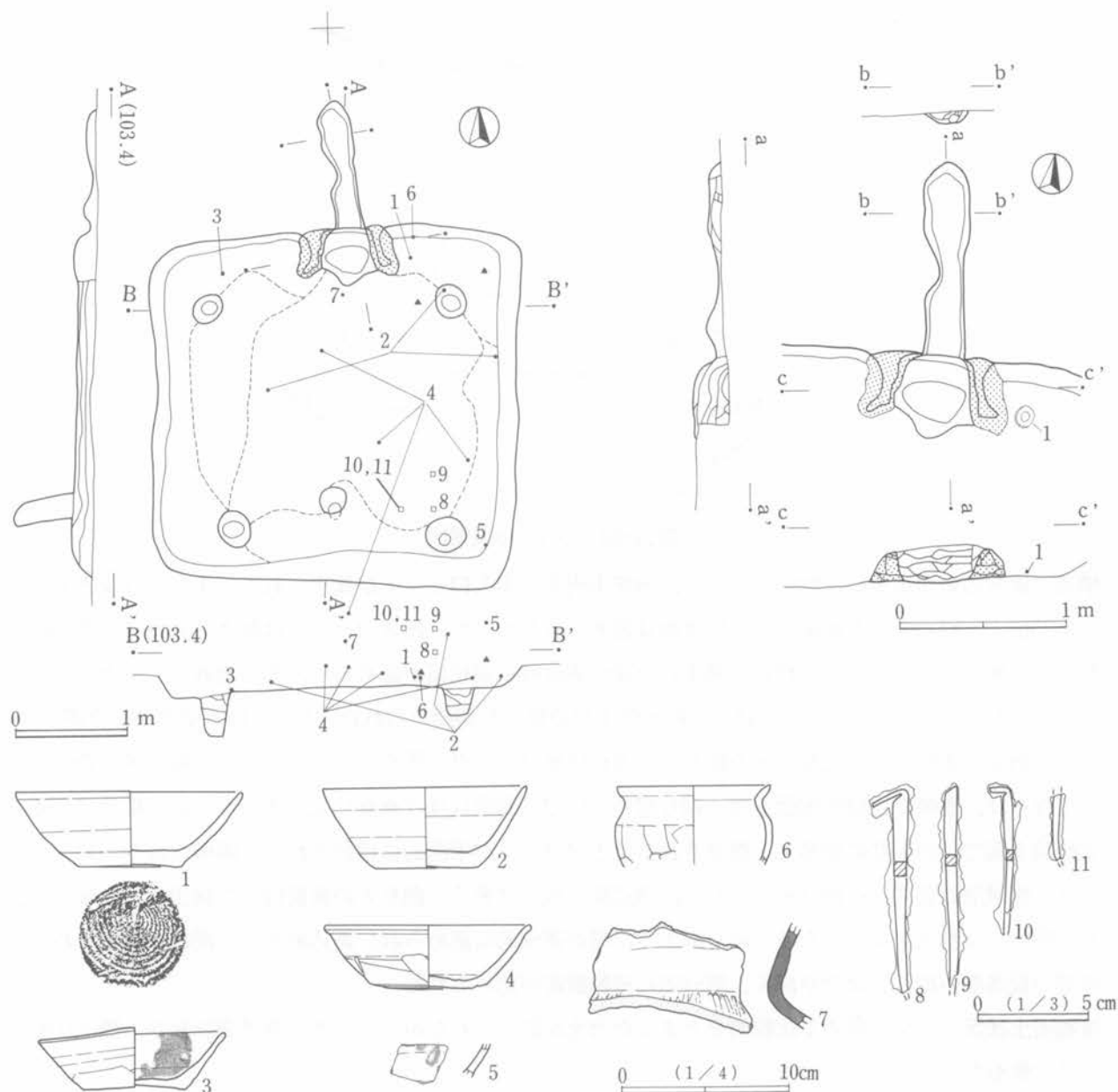
遺物： 1～4がロクロ土師器杯で、1は底部無調整で、回転糸切り離し痕跡を残す。2は底部に、3は体部下半と底部に手持ちヘラ削りを、4は体部下半と底部周囲に回転ヘラ削りを施す。3は内面に油煙痕跡を残す。1は口径13.4cm・底径6.2cm・器高4.4cm、2は口径(12.2)cm・底径6.1cm・器高4.7cm、3は口径10.9cm・底径6.0cm・器高3.6cm、4は口径(12.2)cm・底径(7.0)cm・器高3.7cmである。5は墨書土器である。6は土師器小型甕で、口径(9.2)cm・胴部最大径(9.4)cmである。7は黄褐色の須恵器甕頸部片で、胴部の平行叩きが僅かに確認できる。8～11は鉄釘である。その他、鉄滓2点10.0gが出土した。

S I -52 (第201図, 図版25)

位置： III区。K 5 -41・42・51・52

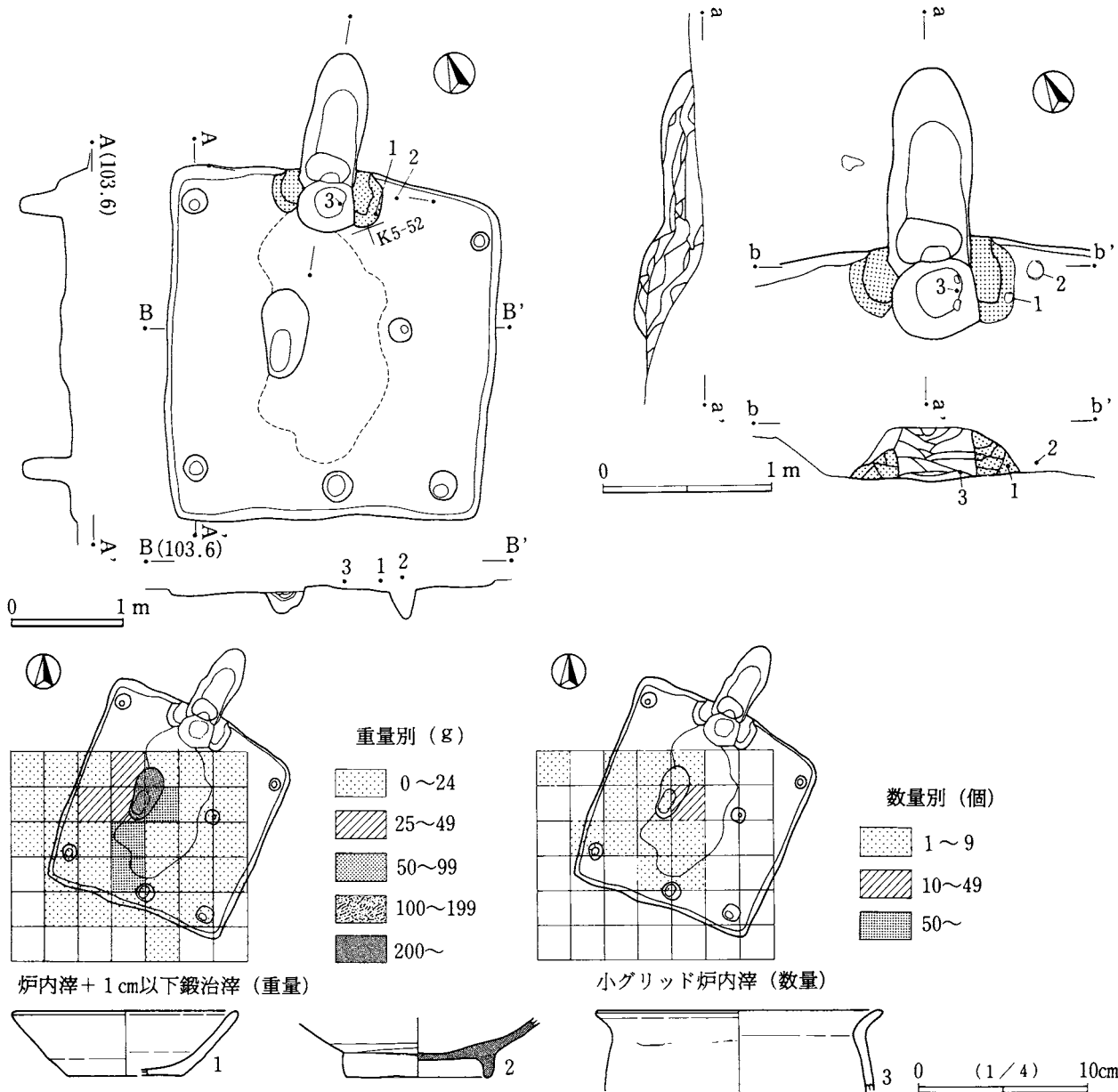
規模・形態： 一辺2.80m～3.10mの方形の掘り方である。竪穴の主軸方向は北に対して、やや東に振れ、N-67°-Eである。

覆土： 炭化粒を含む暗褐色土が堆積する。



第200図 S I -50遺構図・出土遺物

構造：竪穴の四隅付近に支柱穴が4か所，南壁中央下に出入口ピット1か所が検出された。支柱穴の深さは0.20m～0.35m，出入口ピットは深さ0.17mである。この他，床面中央東側で径0.20m，深さ0.20mのピットと，中央西側で0.75m×0.40m，深さ0.25mの土坑が検出された。西側の土坑は黄褐色土の裏込め土の上に被熱面が検出され，炉として使用された痕跡がある。この被熱面の中には炭化粒を多く含む焼土が0.04m程の厚さで堆積していた。この周辺から鉄滓が出土しており，鍛冶炉として使用された可能性もある。カマドから出入口ピットにかけての床面中央で特に硬化面が認められた。カマドは北壁中央に位置する。カマドの袖は黄白色砂によって作られている。燃烧部は竪穴床面を浅く掘り窪め，中には黄白色砂ブロックと焼土ブロックが厚く堆積する。側壁はほぼ垂直に立ち上がり，障壁は約70°の角度で立ち上がる。煙道部は竪穴外へ伸び，掘り方底面には裏込め土と想定される硬く締まった粘土を多く含む層が検出された。

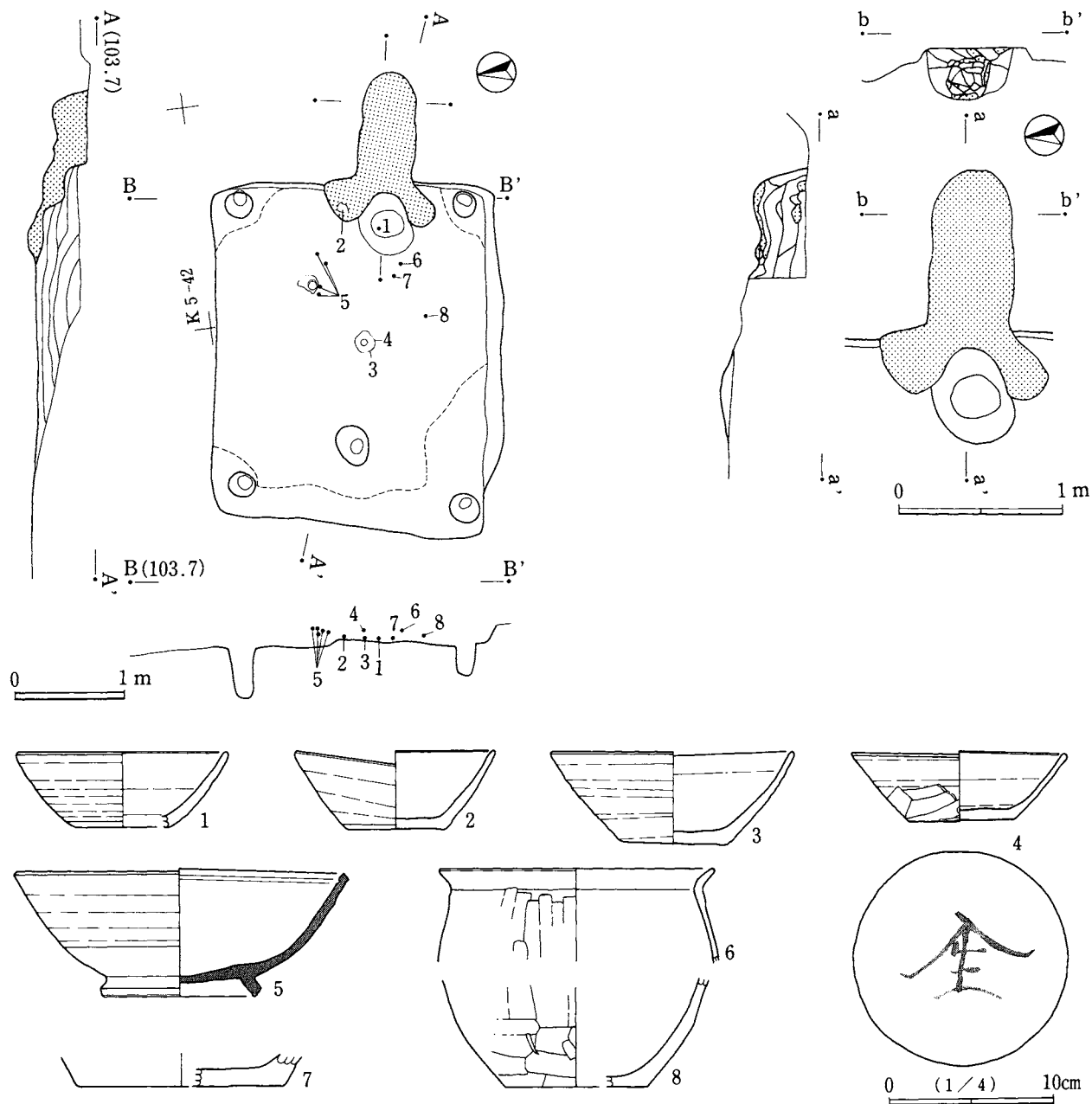


第201図 S I-52遺構図・出土遺物

第14表 S I-52鉄滓集計表

区	炉内滓	1 cm以下の鍛冶滓	合計
3	2.8	0.1	2.9
4		0.1	0.1
5	1.4	2.7	4.1
6	22.0	9.4	31.4
7	19.5	0.8	20.3
8		0.1	0.1
9		0.0	0.0
13		0.3	0.3
14		1.4	1.4
15	11.1	30.0	41.1
16	8.1	31.7	39.8
17	61.0	31.2	92.2
18		0.0	0.0
19		0.4	0.4
23		0.0	0.0
24	1.3	1.0	2.3
25	3.9	10.8	14.7
26	12.7	36.5	49.2

区	炉内滓	1 cm以下の鍛冶滓	合計
27	8.9		8.9
28		0.2	0.2
29		0.1	0.1
33		-	-
34		0.1	0.1
35		0.9	0.9
36	68.7	5.8	74.5
37	2.7	0.5	3.2
38		0.5	0.5
39		0.0	0.0
44		0.0	0.0
45		0.2	0.2
46		0.6	0.6
47		0.1	0.1
48		0.4	0.4
57		1.4	1.4
pit6		275.6	275.6
合計	224.1	442.7	666.8



第202図 S I-54遺構図・出土遺物

遺物出土状況：カマドの燃焼部内と周辺からややまとまった遺物が出土したが、この他は全体的に散漫で少量の出土である。

遺物出土状況：床面中央の鍛冶炉を中心に鉄滓が出土している。

遺物：1はロクロ土師器杯で、底部に手持ちヘラ削りを施す。口径(13.1)cm・底径(6.8)cm・器高3.7cmである。2は灰釉陶器で、底径8.4cmである。3は土師器甕で、口径(16.6)cmである。

S I-54 (第202図, 図版25)

位置：III区。K 5-41・42

規模・形態：長軸3.0m~3.2m, 短軸2.5mである。竪穴の主軸方向は北に対して大きく西に振れ, N-10°-Wで、ほぼ東西東である。

覆土：上層はロームブロックを含む暗褐色土と黒褐色土が、下層はロームブロックを含む褐色土が堆積する。床面直上では焼土粒と炭化粒の混入が多く認められ、平面的にも炭化材を含む焼土粒の拡がり床面中央で広く検出された。

構造：竪穴の対角線上に支柱穴が4か所、西壁中央付近に出入口ピットが検出された。支柱穴の深さは0.22m～0.45m、出入口ピットは深さ0.30mである。床のほぼ全面で硬化面が認められた。カマドは東壁中央に位置する。袖は黄白色砂によって作られている。燃烧部は竪穴床面を浅く掘り窪めている。煙道部は竪穴外へ伸びている。煙道部の遺存状況は良好で、煙道の断面に縁状に被熱痕跡を有して、黄白色砂が貼り付いた状態で検出された。煙道痕跡の左右は黄褐色土の裏込め土が、天井の痕跡には黄白色砂の混入が認められた。

遺物出土状況：カマド前面から床面中央付近に比較的まとまった遺物の出土が認められた。

遺物：1～4はロクロ土師器杯で、1～3は体部下半と底部に回転ヘラ削りを施す。1は口径(12.5)cm・底径(5.8)cm・器高4.5cm、2は口径(12.0)cm・底径5.8cm・器高4.7cm、3は口径14.7cm・底径6.3cm・器高5.6cm、4は口径12.8cm・底径6.4cm・器高4.2cmである。5は灰釉陶器椀で、口径19.7cm・底径9.2cm・器高7.8cmで、底部に墨書「入生」がある。7と8は土師器甕で、7は口径(16.6)cm、8の底径(8.8)cmである。

S I - 57 (第203図, 図版26)

位置：III区。J 6 - 19・29, K 6 - 10・20

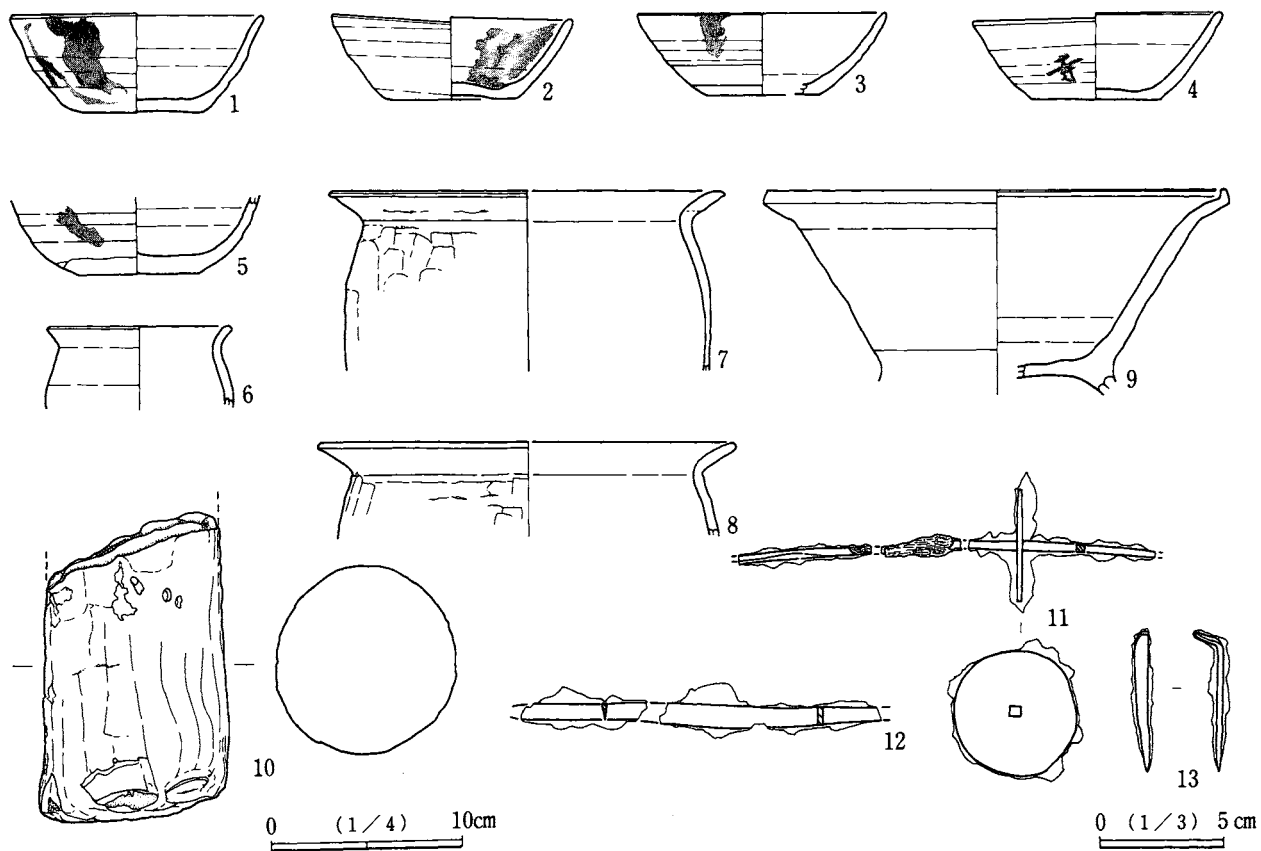
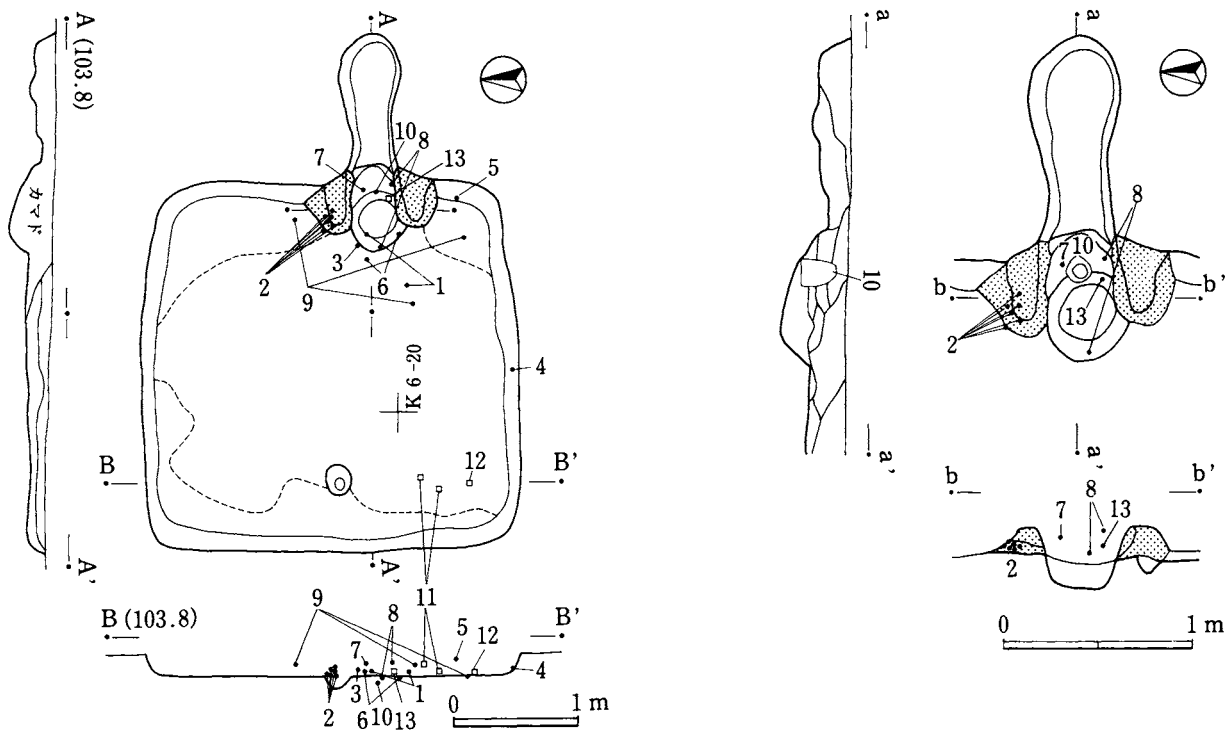
規模・形態：一辺2.70m～2.90mの方形の掘り方である。竪穴の主軸方向は南北方向にほぼ一致する。

覆土：新期テフラ土とソフトローム土を含む暗褐色土が堆積する。

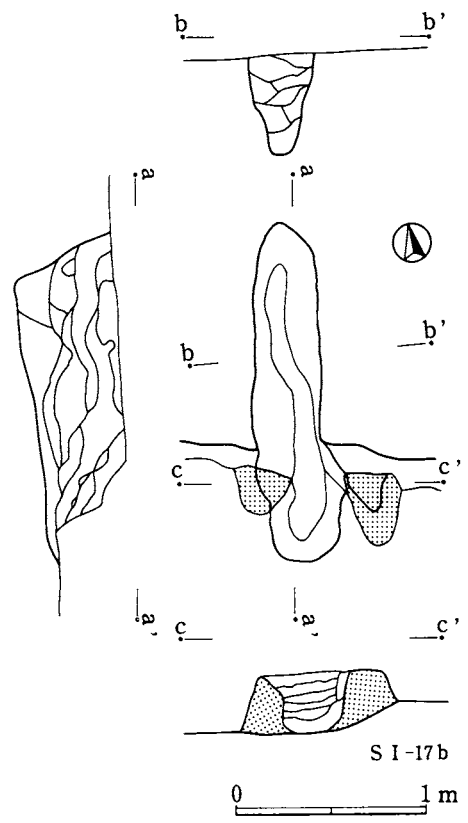
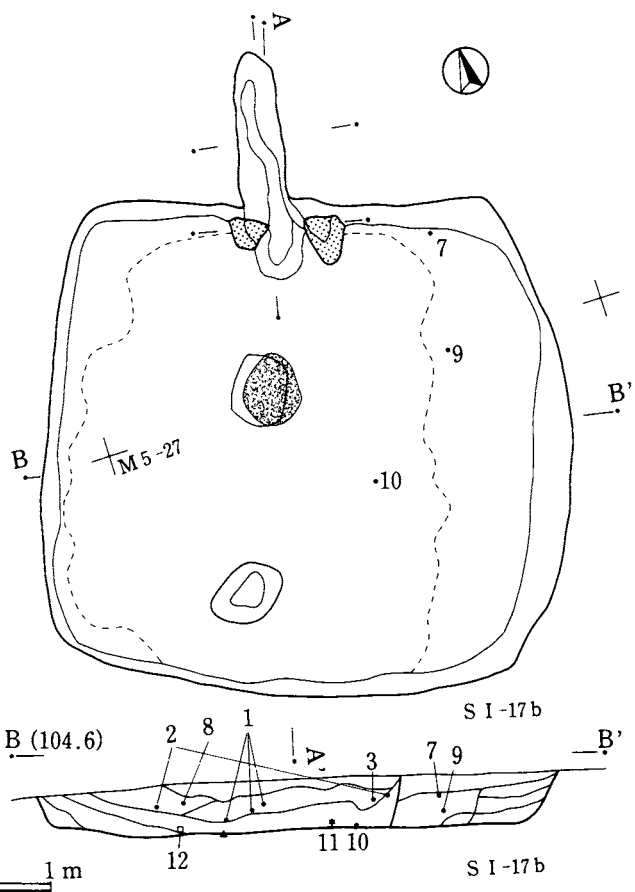
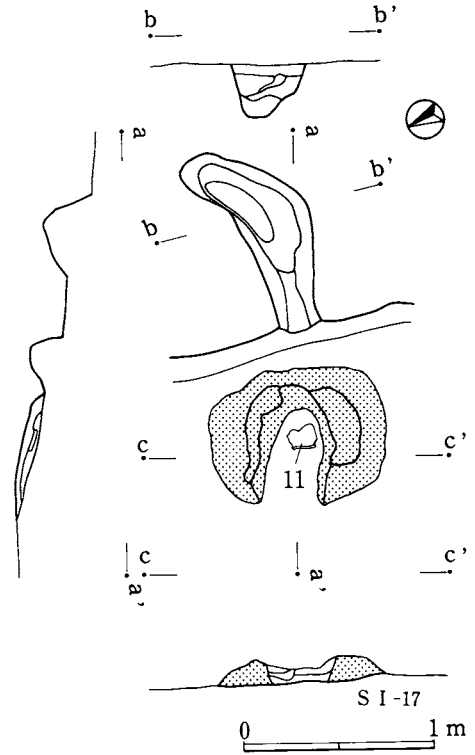
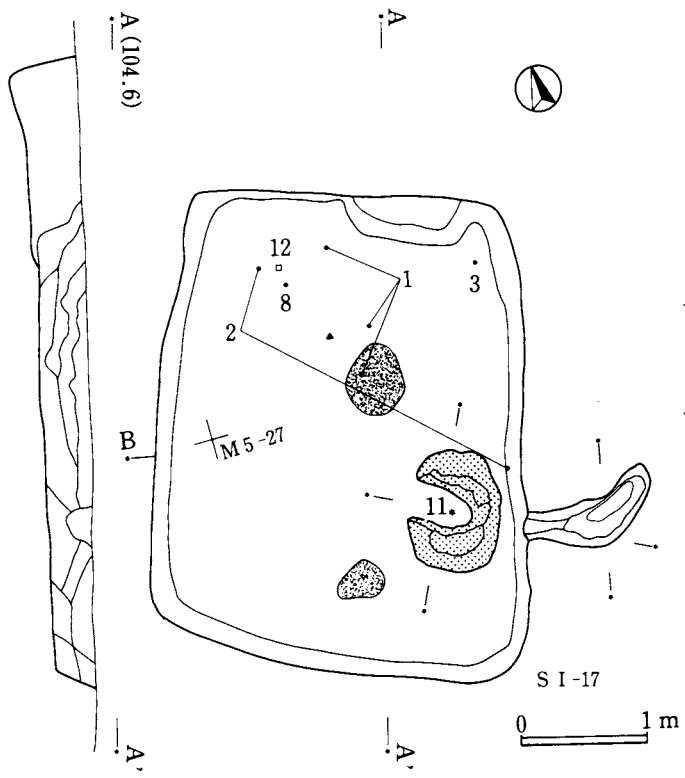
構造：支柱穴は確認されず、西壁中央下に深さ0.10mの出入口ピットが検出された。床の広い範囲で硬化面が認められた。カマドは東壁の中央やや南に位置する。袖は黄白色砂によって作られている。燃烧部は竪穴床面を浅く掘り窪まり、側壁と障壁はほぼ垂直に立ち上がっている。燃烧部には被熱痕跡が認められ、前面には炭化粒の拡がり認められた。また、障壁前面に土製支脚が立った状態で出土し、天井崩落土と想定される黄白色砂が厚く堆積していた。煙道部は竪穴外へ伸び、底面には焼土粒を含む褐色土がやや厚く堆積していた。裏込め土の可能性はある。

遺物出土状況：カマド燃烧部内から周辺にかけて、比較的遺物のまとまりが認められたほかは、全体的に散漫で遺物量は少ない。

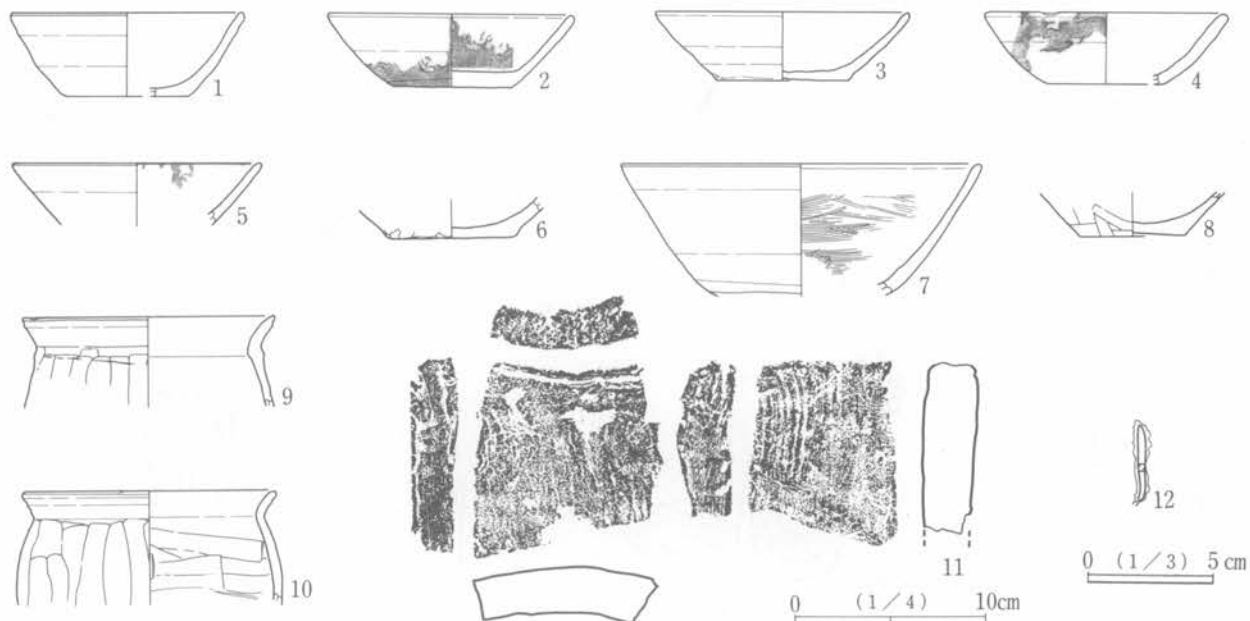
遺物：1～5はロクロ土師器杯で、1と2は底部無調整で回転糸切り離し痕跡を残す。3と5は体部下半と底部に回転ヘラ削りを、4は墨書土器で、体部外面に「寺」とある。1～3には油煙痕跡がある。また1は底部内面「万カ」と体部外面「力カ」に焼成後のヘラ描きある。1は口径(13.1)cm・底径6.9cm・器高5.1cm、2は口径12.6cm・底径7.0cm・器高5.1cm、3は口径(13.1)cm・底径(6.0)cm・器高4.2cm、4は口径13.0cm・底径6.7cm・器高4.5cm、5は底径(6.4)cmである。6～8は土師器甕で、6は口径(9.4)cm、7は口径(20.2)cm・胴部最大径(19.3)cm、8は口径(21.6)cmである。9は土師器高台付鉢で、口縁部に大きく外に開き折り返されている。体部内面には、口縁部付近を中心に、鉢底部付近にかけて一面に煤が濃く付着している。口径(24.0)cm・鉢底部径(12.2)cmである。9は土製支脚で、面取り状にヘラ削りが施され、ほぼ断面円形・円錐状に成形されている。最大径9.4cmである。11は刀子、12は紡錘車、13は鉄釘である。



第203図 S I-57遺構図・出土遺物



第204図 S I-17遺構図



第205図 S I-17出土遺物

S I-17 (S I-17b) (第204・205図, 図版26)

位置: IV区。M5-16・17・26・27

規模・形態: 長軸3.40m~3.70m, 短軸2.60m~3.00mの長方形の掘り方である。竪穴の主軸方向はやや東に振れ, N-70°-Eである。

覆土: ロームブロックを含む暗褐色土が主体的に堆積する。焼土粒と炭片を全体的に含む。

構造: 柱穴は確認されていない。床面も特に硬化面は認められない。カマドは東壁の中央よりやや南に位置する。なお, 北壁には先行するS I-17bに伴うカマド痕跡が残る。床面中央の北側と南側に焼土粒の拡がり認められた。北側の焼土粒は, S I-17bの床面精査の折りに検出された浅い落込みと一致する。性格不明であるが, 近接する床面から鉄滓が出土している。南側の焼土粒もS I-17の出入口ピットと一致する。カマドの袖は灰白色砂と粘土で作られている。燃焼部の側面はほぼ垂直に立ち上がり, 側壁から障壁にかけて良く焼けている。煙道部は竪穴外へ伸び, 0.30m程平坦面の先は, 0.15m程深く掘り込まれている。煙道最奥部には被熱痕跡が認められた。

重複関係: 先行するS I-17bの東側を埋めて, カマドを東側へ造り直し, 建て替えしている。

遺物出土状況: 覆土中層付近から散漫に遺物が出土した。

遺物: 鉄滓2点1.4gが出土した。鉄釘1点が出土している。

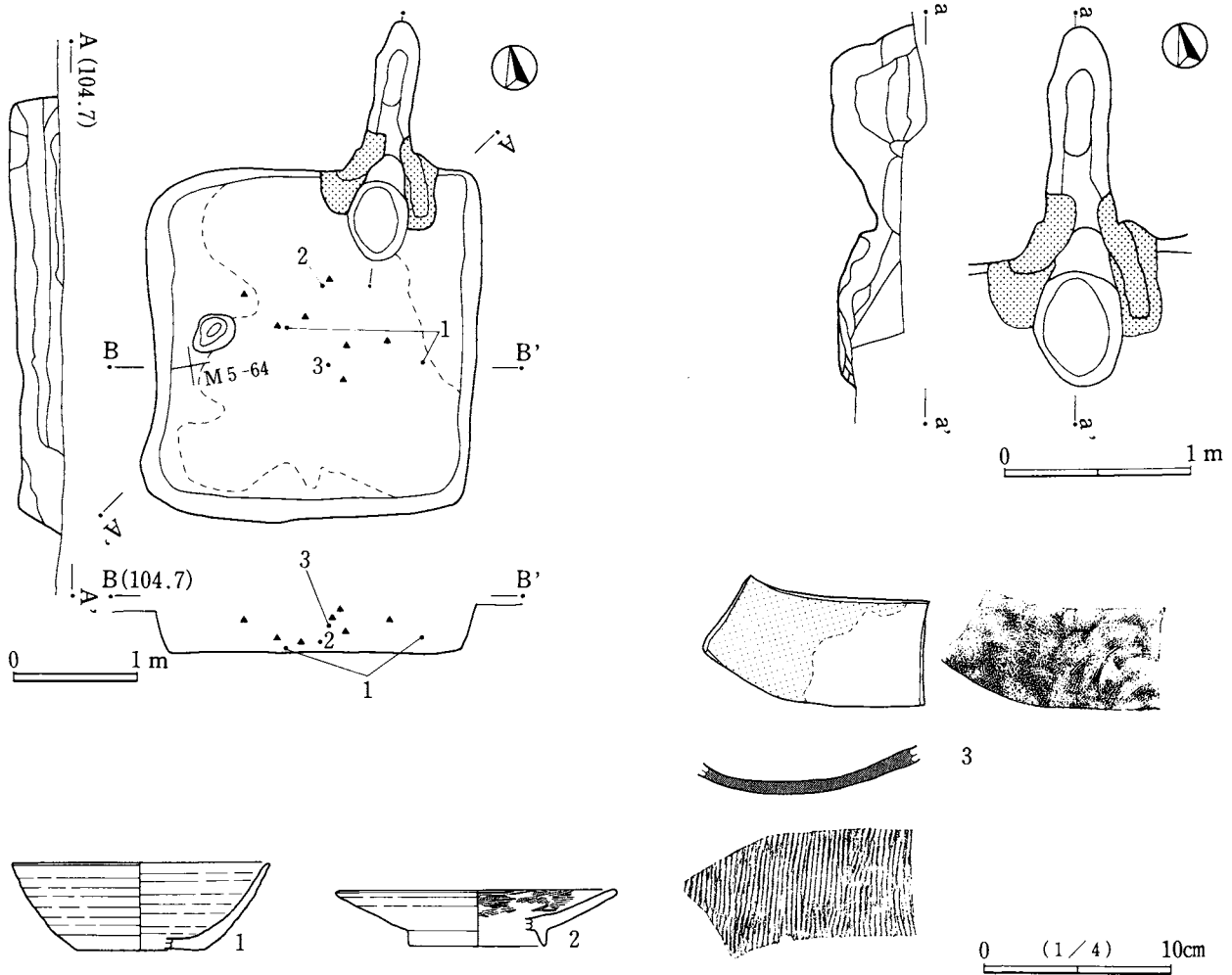
S I-17b (第204・205図, 図版26)

位置: IV区。M5-16・17・26・27

規模・形態: 一辺3.60m~4.10mの方形の掘り方である。

覆土: ロームブロックを含む暗褐色土が主体的に堆積する。

構造: 柱穴は確認されていない。床面のほぼ全面が硬化している。南壁の中央下に径0.40m~0.60m, 深



第206図 S I-33遺構図・出土遺物

さ0.15m程の出入口ピットがある。また、床面中央には0.55m×0.75m、深さ0.01m～0.04mの浅い落込みがある。カマドは北壁中央に位置する。カマドの袖は灰白色砂によって作られている。煙道部は竪穴外へ伸びる。掘り方は全体に平坦であるが、燃焼部から遠くなる程やや深さが増す。燃焼部から煙道部内には焼土粒と灰白色砂を多く含む赤褐色土と褐色土が厚く堆積する。

重複関係：S I-17に先行する。カマド内も含め、遺物の出土量は少ない

遺物：1～6はロクロ土師器杯で、1と3は底部に手持ちヘラ削り、2は体部下端と底部に回転ヘラ削りを施す。6は底部無調整で回転糸切り離し痕をそのまま残す。2・4・5は油煙痕跡を残し、特に2の油煙痕跡は内外面にタール状のものである。1は口径(11.9)cm・底径(6.2)cm・器高(4.5)cm、2は口径(12.8)cm・底径6.2cm・器高(3.9)cm、3は口径(13.2)cm・底径(6.9)cm・器高3.7cm、4は口径(12.4)cm・底径(6.0)cm・器高(3.9)cm、5は口径(12.8)cm、6は底径6.7cmである。7はロクロ土師器碗で、体部下端に手持ちヘラ削りを、内面と外面の一部にヘラミガキと黒色処理を施す。また、口縁部に油煙痕跡を残す。口径(18.8)cmである。8～10は土師器甕である。8は底径(5.4)cm、9は口径(13.0)cm、10は口径(12.8)cmである。11は平瓦、12は鉄釘である。

S I - 33 (第206図, 図版26)

位置: IV区。5 M - 54

規模・形態: 一辺2.60m~2.80mのほぼ方形の掘り方で, 竪穴の主軸方向は北に対してやや東に振れ, N - 80° - Eである。

覆土: 新期テフラを多く含む褐色土が主体的に堆積する。全体的に炭化粒を含む。

構造: 西壁中央下に出入口ピットがある。竪穴北東隅を除くほぼ全面の床で硬化面が認められた。特に床面中央では径0.60m程の範囲で白色粘土を含み硬く締まった面が認められた。カマドは北壁の大きく東に寄った位置にある。カマドの袖は白色粘土を含む白色砂によって作られている。燃烧部は竪穴床面を浅く掘り窪まり, 障壁はほぼ垂直に立ち上がる。煙道部は竪穴外へ伸び, 竪穴外へ向かって次第に深く掘り込まれる。煙道部の残りは良く, 白色粘土を含む白色砂で作られた天井部の痕跡が平面的かつ断面的に良好に検出された。

遺物出土状況: 全体的に散漫な出土状況である。

遺物: 1はロクロ土師器杯で, 体部下端と底部に回転ヘラ削りを施す。口径(13.6)cm・底径(6.8)cm・器高4.6cmである。2はロクロ土師器高台付杯で, 内面にヘラミガキと黒色処理を施す。口径(14.6)cm・底径(7.2)cm・器高2.9cmである。3は灰青色の須恵器胴部片で, 外面に平行叩きと内面に木目状の当て具の痕跡を残す。また, 内面には墨痕と磨滅痕跡を残す。この他, 鉄滓7点212.1gが出土した。

S I - 35 (第207図, 図版27)

位置: IV区。5 N - 10・11

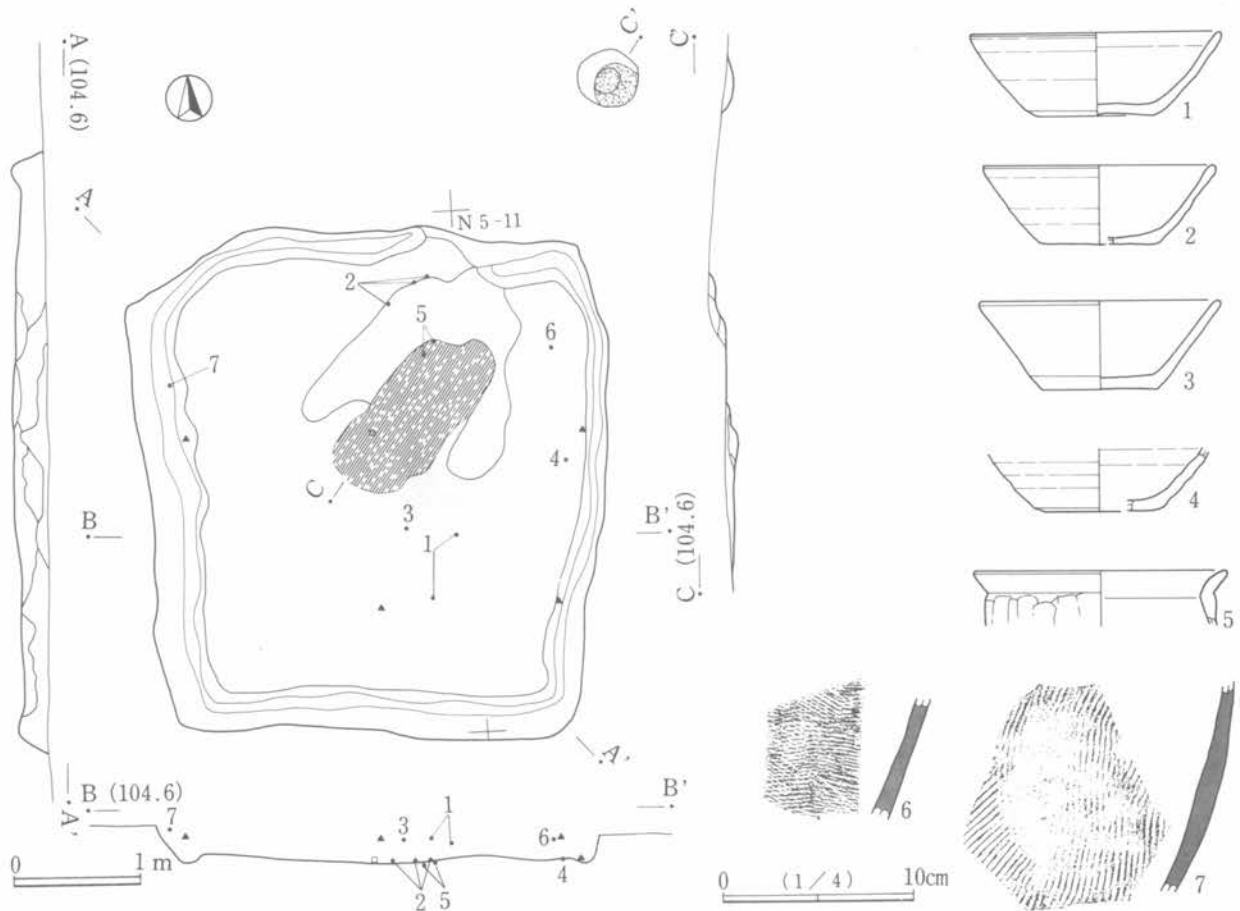
規模・形態: 長軸3.8m~3.9m, 短軸3.4m~3.7mのほぼ方形の掘り方である。竪穴の主軸方向は北に対して若干東に振れ, N - 86° - Eである。

覆土: 黄褐色土をブロック状に含む褐色土が主体的に堆積する。全体的に炭化粒を含み, 覆土下層では黄白色砂粒の混入が広い範囲で認められた。

構造: 柱穴は確認されなかった。黄褐色土による貼床状床面は全体的に硬く締まっている。北壁の一部を除き, 深さ0.01m~0.10mの周溝が発見された。やや深めの周溝が途切れており, この前面で確認された若干の落込みと炭化粒の分布からカマドに伴った周溝の途切れの可能性がある。被熱痕跡は不明瞭であるが, 周辺には焼土粒が散っており, また竪穴の覆土下層からは黄白色砂粒の混入が多かった点からもカマドの痕跡と考えられた。なお, 竪穴から0.60m程離れて, 被熱痕跡を有する落込みが発見されており, S I - 35のカマドの煙道部の掘り方の痕跡の可能性はある。

遺物出土状況: 床面直上付近の竪穴東側から若干の遺物が出土した。

遺物: 1~4はロクロ土師器杯で, 1と3は体部下端と底部に回転ヘラ削りを, 4は体部下端と底部に手持ちヘラ削りを施す。2は底部のみに削りの痕跡を残す。3は口縁部に油煙痕跡を僅かに残す。1は口径(13.0)cm・底径6.0cm・器高4.3cm, 2は口径(12.0)cm・底径(6.2)cm・器高4.2cm, 3は口径(12.4)cm・底径(6.0)cm・器高4.5cm, 4は底径(5.6)cmである。5は土師器甕で, 口径(13.0)cmである。6は灰青色の須恵器胴部片で, 外面に平行叩きを残す。7は灰白色の須恵器胴部片で, 外面に平行叩きを残す。この他, 鉄滓が4点45.3g, 板状鉄製品の小片が出土した。



第207図 S I-35遺構図・出土遺物

S I-37 (第208図, 図版27)

位置: IV区。N 5-21・22・31・32

規模・形態: 一辺2.5m~3.0mの隅丸方形の掘り方である。竪穴の主軸方向は北に対して東に振れ、N-56°-Eである。

覆土: 黄褐色土をブロック状に含む褐色土が主体的に堆積する。全体的に炭化粒が、覆土下層に焼土粒が含まれる。

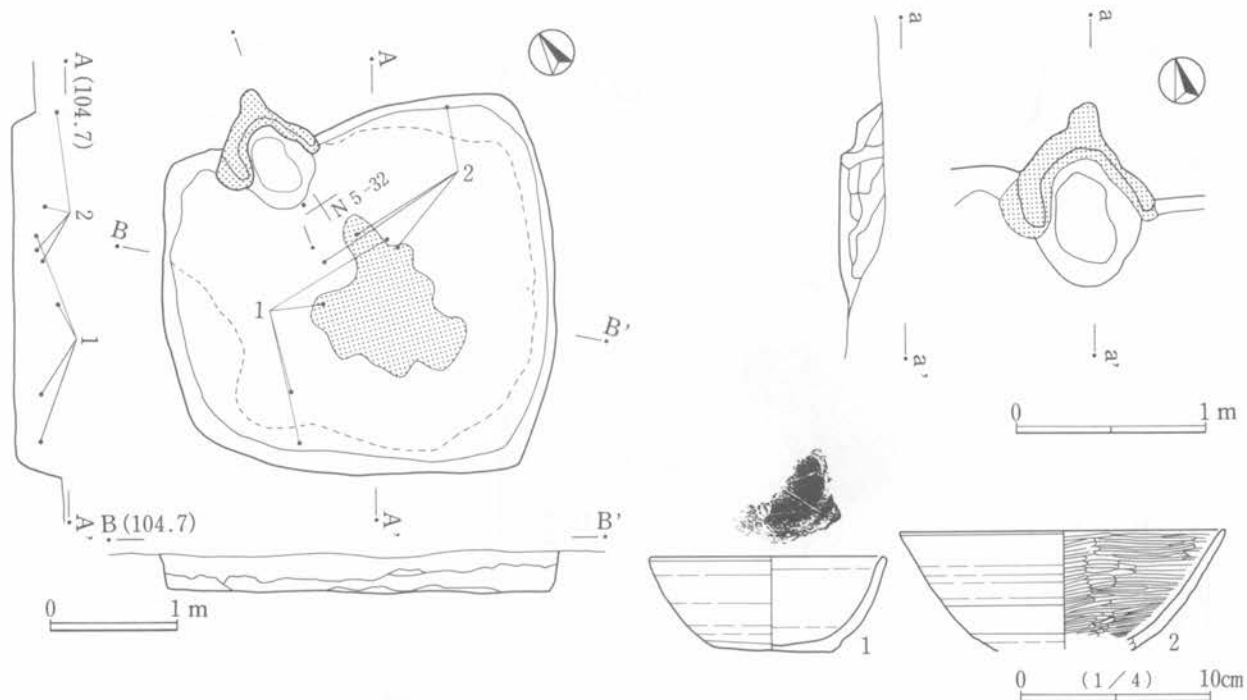
構造: 柱穴は確認されていない。床のほぼ全面が硬化している。また、床面中央には黄白色砂の拡がり認められた。カマドは北壁西寄りに位置する。袖は黄白色砂によって作られている。燃烧部を竪穴外にやや掘り込み、床面を浅く掘り窪めている。障壁はほぼ垂直に立ち上がり、煙道部の掘込みは僅かである。縦カマドの袖の残りが悪く、竪穴中央で認められた黄白色砂との関連が推測される。

遺物出土状況: 覆土中から竪穴中央と南側中央付近に比較的まとまりを有して出土した。

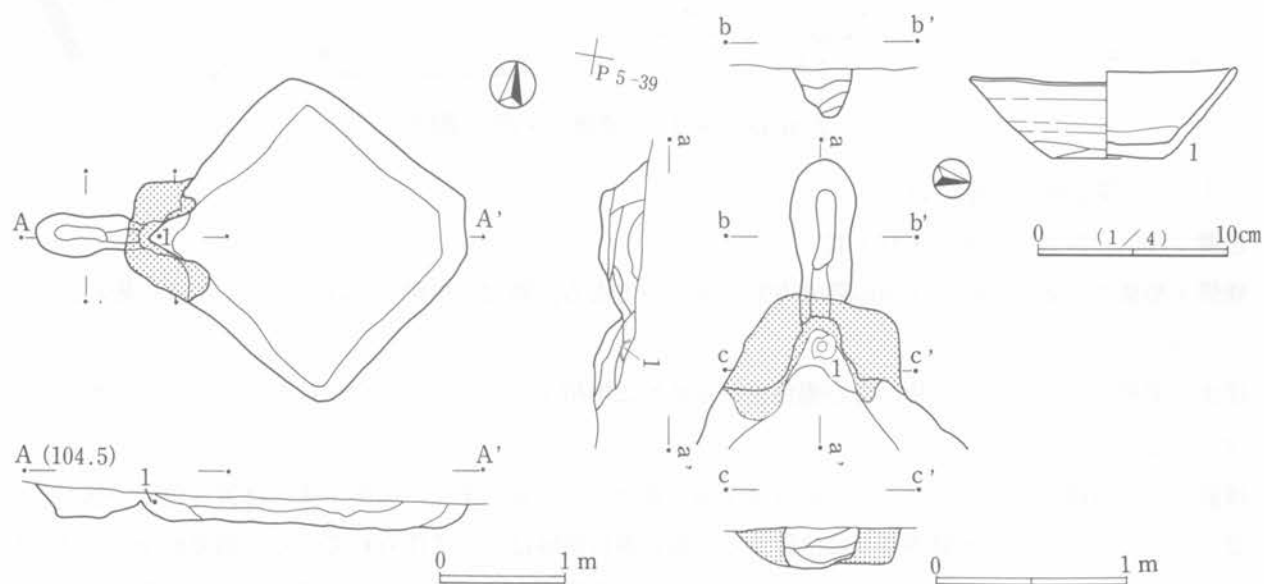
遺物: 1はロクロ土師器杯で、1は体部下端と底部に回転ヘラ削りを施す。底部内面に焼成後の×状のヘラ描きが認められる。口径(12.3)cm・底径(6.3)cm・器高4.9cmである。2はロクロ土師器碗で、内面にヘラミガキと黒色処理を施す。口径(17.2)cmである。

S I-16 (第209図, 図版27)

位置: V区。5 P-38



第208図 S I-37遺構図・出土遺物

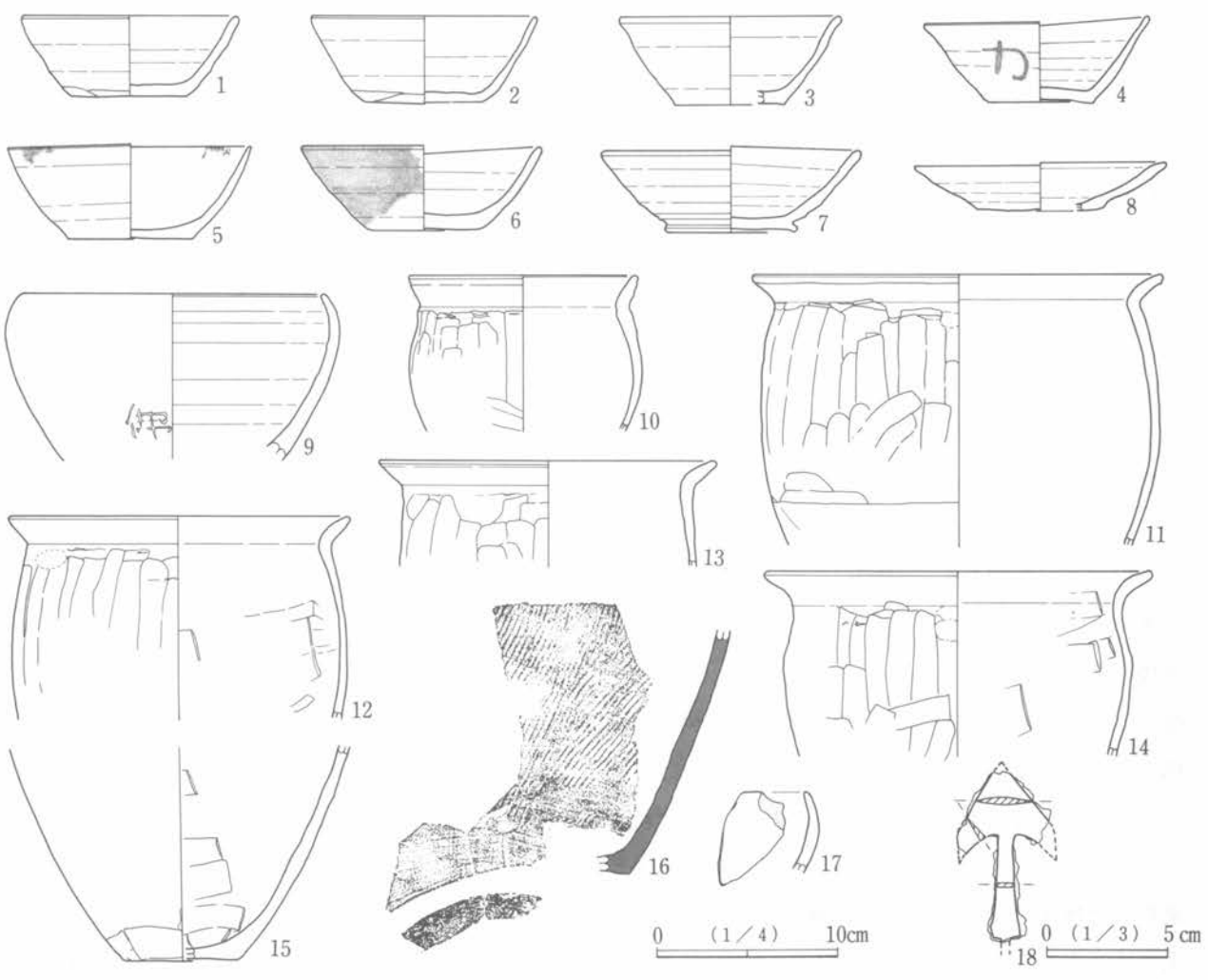
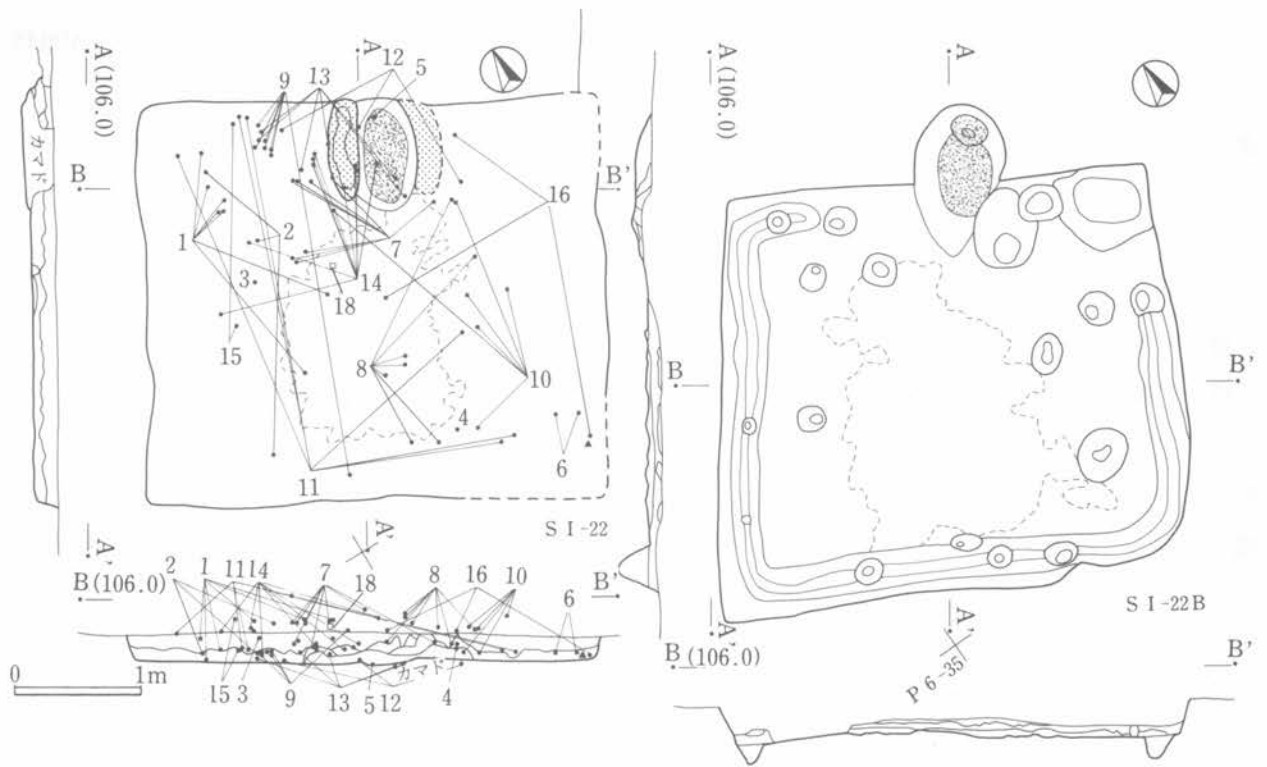


第209図 S I-16遺構図・出土遺物

規模・形態：一辺1.96m～2.04mの方形の掘り方である。竪穴の主軸方向は北に対して大きく西に振れ、N-33°-Wである。

覆土：ロームブロックを含む褐色土が主体的に堆積する。

構造：柱穴は確認されなかった。床面も特に硬化面は認められない。カマドは西隅に位置する。接する竪穴の壁面に黄白色砂混じりの粘土を充てんし、袖を作っている。燃烧部の底面には炭が集中して堆積し、その上に焼土と黄白色砂など天井崩落土が堆積している。側壁はほぼ垂直に立ち上がり、障壁に隣接する側壁部分を中心に赤く焼けている。障壁は30°～60°で緩やかに立ち上がる。煙道部は竪穴外へ伸び、0.10m



第210図 S I-22遺構図・出土遺物

程深く掘り込まれているが、底面には黄白色砂を含む粘土層があり、その上に炭片を含む黒褐色土が堆積していた。

遺物：1はロクロ土師器杯で、体部下端と底面に回転ヘラ削りを施す。内外面とも二次被熱を受け、土器表面が剝離し、煤を被る部分がある。口径13.7cm・底径5.8cm・器高4.7cmである。

S I - 22 (第210図, 図版28)

位置：V区。P 6 - 24・25・35

規模・形態：長軸3.60m, 短軸3.10mの長方形の掘り方である。竪穴の主軸は北に対して東に振れ、N - 60° - Eである。

覆土：上層は暗黄灰褐色土, 下層は暗褐色土が堆積し、全体的に焼土粒と炭化物粒, 黄白色山砂粒を含む。

構造：柱穴は確認されていない。床面中央に特に硬化面が認められた。硬化面上では焼土粒の集中範囲と、灰黄色山砂粒の集中範囲が平面的に確認された。カマドは北壁中央に位置する。カマドの遺存状況は悪く、灰黄色山砂粒を多く含む袖の基部と、竪穴床面を浅く掘り窪めた燃烧部が確認されるにとどまった。

重複関係：S I - 22 bの直上に建て替えられている。

遺物出土状況：カマドの北西隅付近を中心に、比較的多くの遺物が出土した。

遺物：1～7はロクロ土師器杯で、1は体部下端と底部に手持ちヘラ削り、2は体部下端と底部に回転ヘラ削りを、6は底部に手持ちヘラ削りを施す。3と6は底部無調整で回転糸切り離し痕跡を残す。また、5と6は油煙痕跡を残す。5は墨書土器で、体部外面に「カ」とある。1は口径11.8cm・底径(6.4)cm・器高4.4cm, 2は口径(12.2)cm・底径6.4cm・器高4.7cm, 3は口径(12.0)cm・底径(6.0)cm・器高4.8cm, 4は口径12.9cm・底径6.2cm・器高4.5cm, 5は口径13.4cm・底径6.9cm・器高5.1cm, 6は口径12.9cm・底径6.2cm・器高4.5cmである。7はロクロ土師器台付杯で、底部に断面三角形の台を貼り付けている。内面にはヘラミガキと黒色処理を施す。7は口径14.0cm・底径6.9cm・器高4.7cmである。8はロクロ土師器皿で、底部に手持ちヘラ削りを施す。口径13.7cm・底径7.0cm・器高2.6cmである。9と17は鉄鉢形のロクロ土師器で、9の体部中央に焼成後のヘラ描き「佛」が認められる。9は口径(16.6)cmである。9と17は形状と焼成から別個体の可能性がある。10～15は土師器甕で、10は口径12.4cm, 11は口径22.4cm, 12は口径18.4cm, 13は口径(18.3)cm, 14は口径(20.8)cm, 15は底径(6.0)cmである。16は灰色の須恵器甕で、外面に平行叩きが残る。18は鉄鏃である。

S I - 22 b (第210図, 図版28)

位置：V区。P 6 - 25

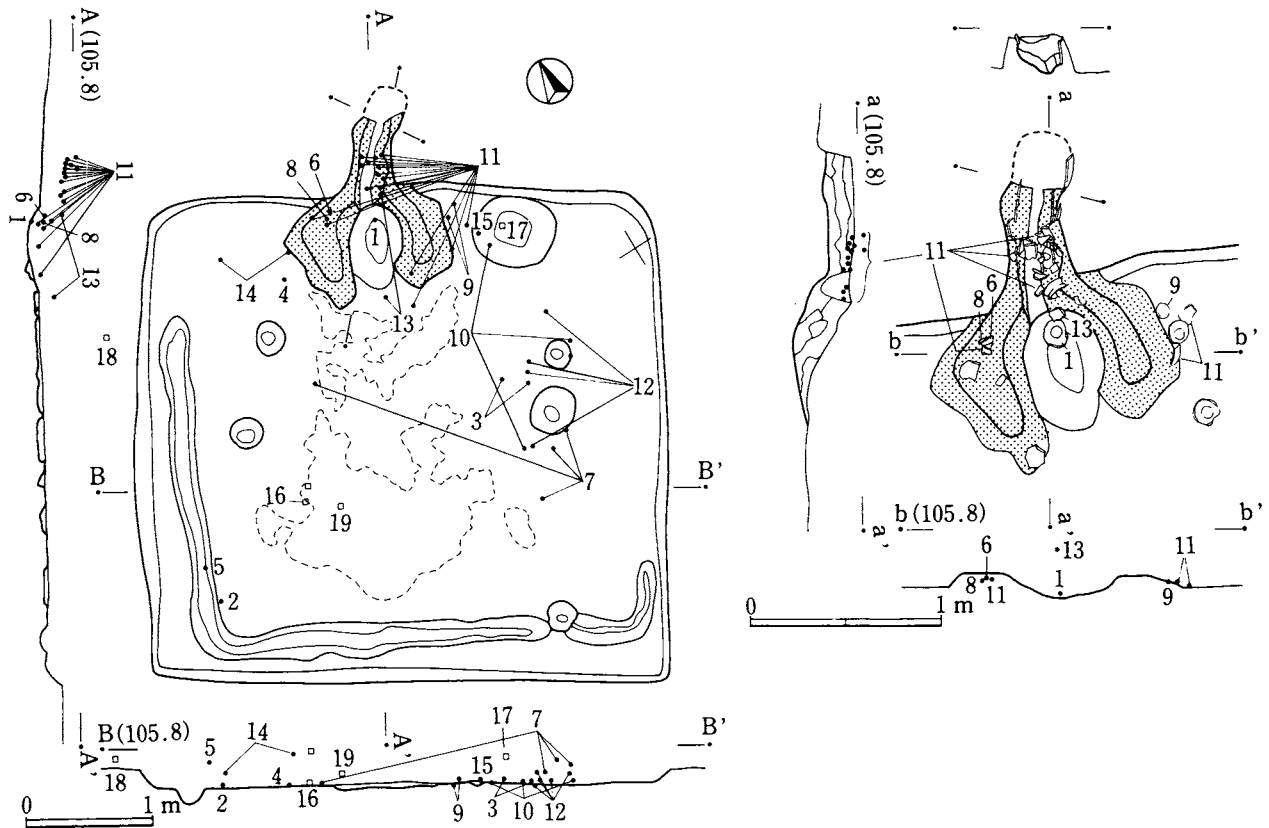
規模・形態：長軸3.30m～3.60m, 短軸 3.00m～3.30mのほぼ方形の掘り方である。

覆土：暗褐色土と灰褐色土, 暗黄褐色土が斑文状に混入しており、埋戻し土の可能性が高い。

構造：支柱穴は確認されなかったが、床面上で深さ0.25m～0.30mのピットが確認された。また、深さ0.10m程の周溝と北東隅に深さ0.15m程の皿状の土坑が検出された。床面中央に硬化面が認められた。カマドは北壁中央から竪穴外の一部にかけて、被熱痕跡を伴う掘り方として発見された。

遺物出土状況：遺物の出土量は極めて少ない。

遺物：S I - 22 d から鉄滓1点2.9gが出土した。



第211図 S I-24遺構図

S I-24 (第211・212図, 図版28)

位置: V区。P 6-26・27・36・37

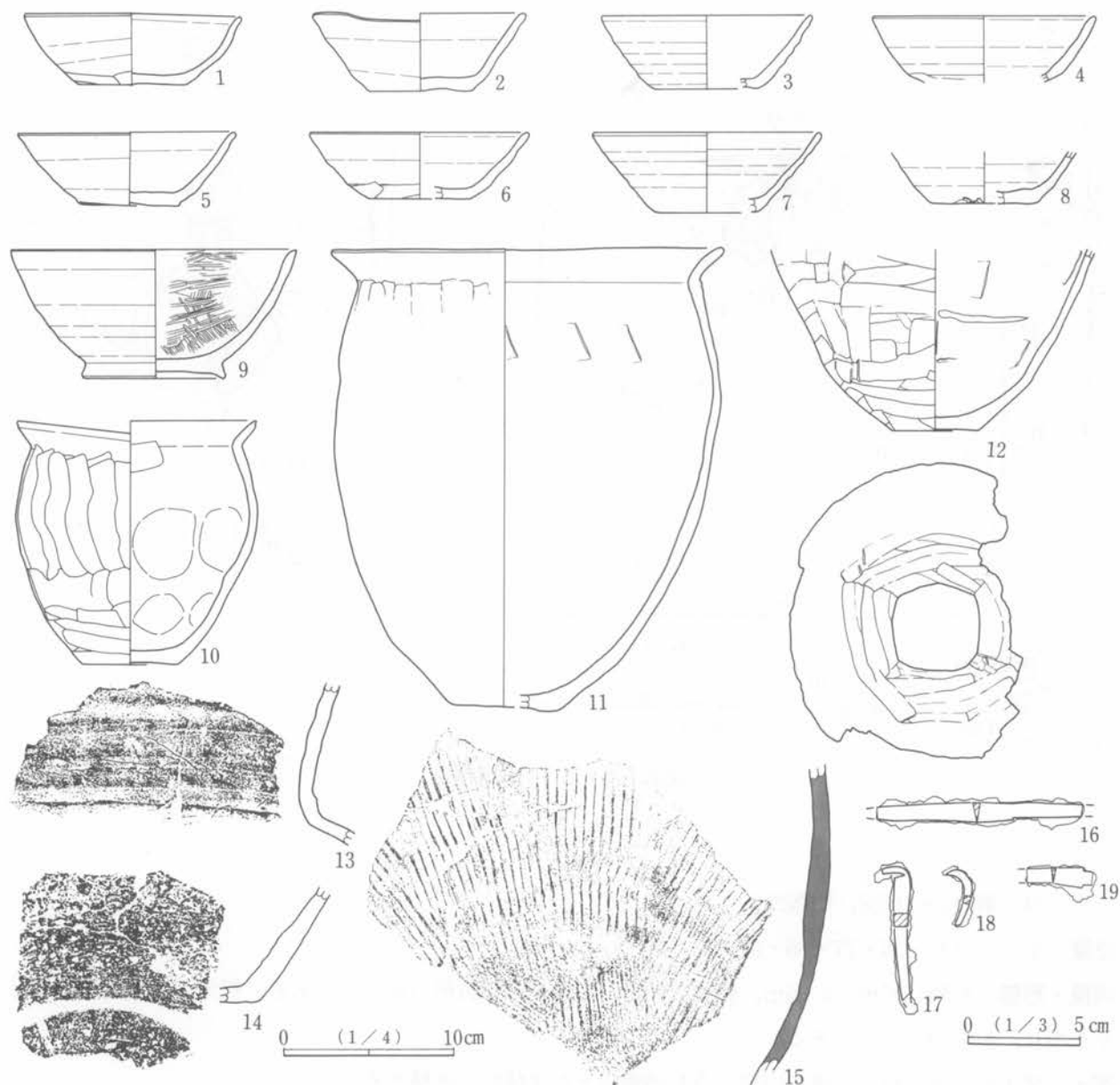
規模・形態: 長軸4.00m~4.20m, 短軸3.70m~3.90mの長方形の掘り方である。竪穴の主軸方向は東にやや振れ, N-60°-Eである。

覆土: 焼土粒と炭化粒, 灰黄色山砂を含む暗褐色土が主体的に堆積する。

構造: 竪穴の南側から深さ0.10m~0.20mの周溝が検出された。床面の中央からは硬化面が認められ, 中央より東西にやや寄って, 柱穴を含むピットが4か所発見された。深さは0.35m~0.50mである。また, 北壁東寄りに深さ0.15m程の方形の土坑が発見された。カマドは北壁中央に位置する。カマドの残りは悪い。カマドの袖は灰黄色山砂で作られている。燃烧部は竪穴床面を浅く掘り窪め, 障壁はやや緩やかに立ち上がる。煙道部は竪穴外へ伸びている。煙道部両側壁の0.25m~0.30m程の範囲に, 10cm程の須恵器甕片が壁面に貼り付けられた状態で検出された。

遺物出土状況: カマド周辺に比較的まとまった遺物の出土が見られる。

遺物: 1~8がロクロ土師器杯で, 1と3は体部下端と底部に回転ヘラ削りを施す。また4は体部下端に, 6は体部下端と底部に手持ちヘラ削りを施す。2と5と8は底部無調整で回転糸切り離し痕跡を残す。なお7には僅かな油煙痕跡を残す。1は口径12.6cm・底径6.3cm・器高4.3cm, 2は口径(12.4)cm・底径(6.2)cm・器高4.8cm, 3は口径(12.4)cm・底径(6.2)cm・器高4.3cm, 4は口径(13.0)cm, 5は口径12.6cm・底径5.8cm・器高4.5cm, 6は口径(12.7)cm・底径(6.0)cm・器高3.9cm, 7は口径(13.0)cm, 8は底径(6.2)cmで

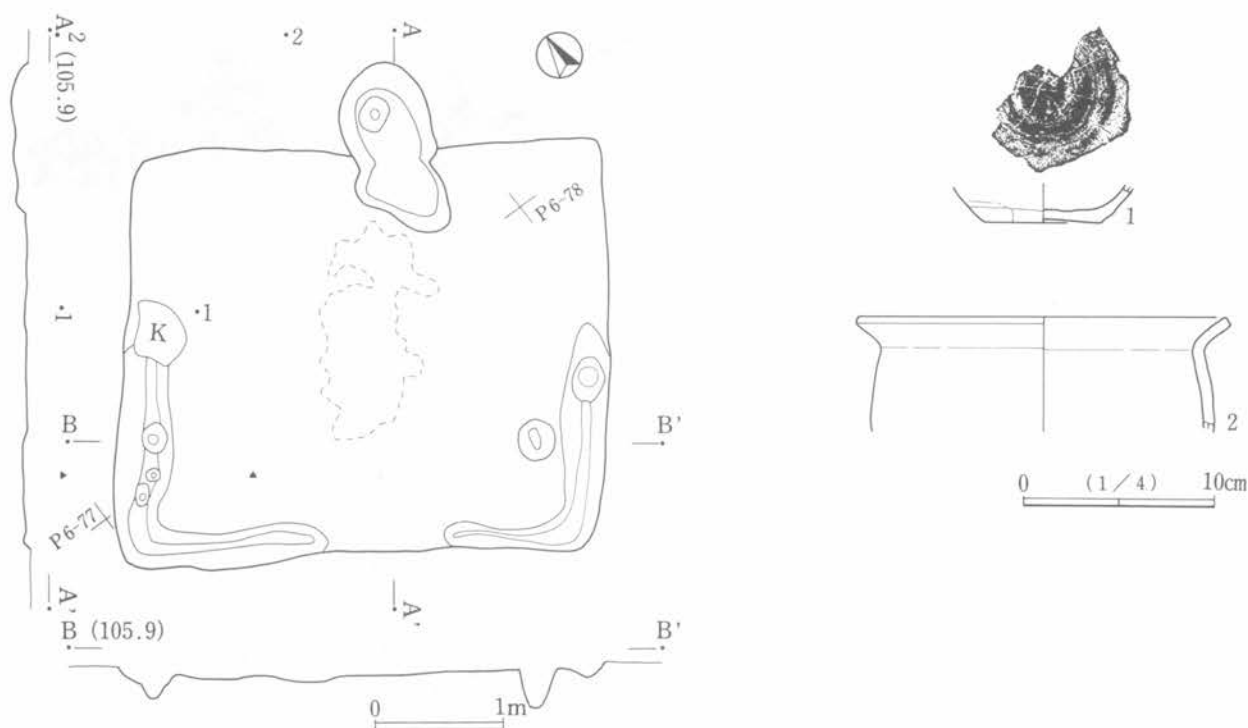


第212図 S I-24出土遺物

ある。9はロクロ土師器高台付椀で、底部は回転ヘラ削りされ、断面三角形の高台が貼り付けている。内面にはヘラミガキと黒色処理を施す。口径(16.6)cm・底径8.2cm・器高7.4cmである。10～12は土師器甕である。12は残存する胴部中位以下で横方向のヘラ削りが施され、特に底部付近で整然と四辺を意識した4単位のヘラ削りが施され、底部の形状が隅丸方形を呈す特徴的な製品である。10は口径(13.8)cm・胴部最大径14.1cm・底径7.6cm・器高14.1cm、11は口径23.0cm・胴部最大径22.9cm・底径6.5cm・器高26.9cm、12は底径5.1cmである。13～15は須恵器大甕で、13は頸部、14は底部付近、15は胴部の外面平行叩きの破片である。16と17は刀子、18と19は鉄釘で、この他鉄釘の小片2点が出土した。

S I-26 (第213図, 図版28)

位置: V区。P 6-67・68・77・78



第213図 S I-26遺構図・出土遺物

規模・形態：長軸3.70m～3.80m，短軸3.10m～3.30mの長方形の掘り方である。竪穴の主軸方向は北に対してやや東に振れ，N-53°-Eである。

構造：西隅と南隅の2か所で部分的に深さ0.01m～0.10mの周溝が検出された。南隅付近で深さ0.30m程のピットが1か所検出された。床面は中央の小範囲で硬化面が認められた。北東壁中央に深さ0.02m～0.10mの皿状の掘り方が検出された。竪穴状遺構に伴うものかは不明である。

遺物：1はロクロ土師器杯で，体部下端と底部に手持ちヘラ削りを施す。底部内面に焼成後のヘラ描きがある。底径(6.2)cmである。2は土師器甕で，口径(19.0)cmである。その他，鉄滓1点44.3gが出土した。

S I-28 (第214図，図版29)

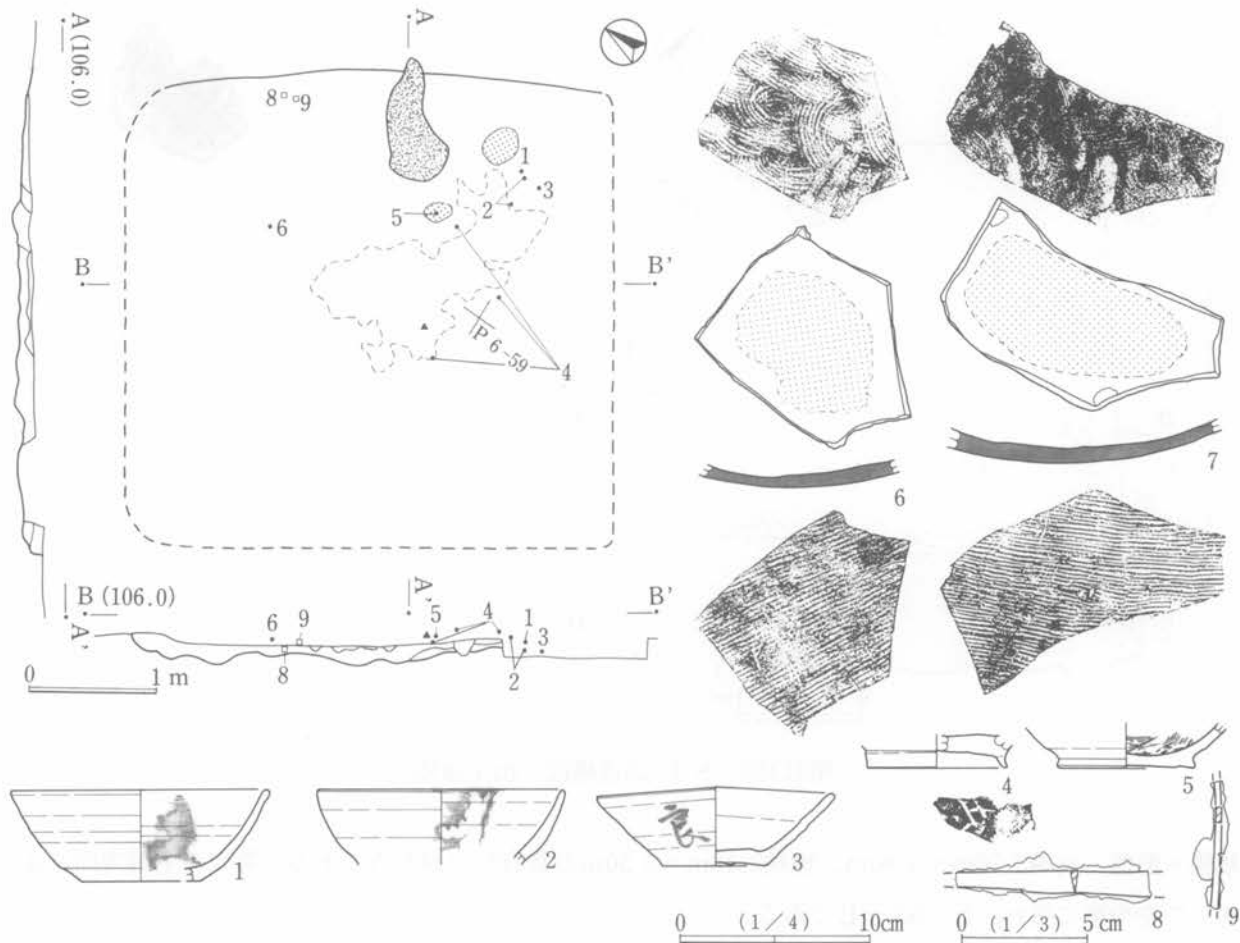
位置：V区。6 P-48・49・58・59

規模・形態：一辺3.70m～3.80mの方形の掘り方と想定される。検出された北東壁から推測される竪穴の主軸方向は東に大きく振れ，N-30°-Eである。

構造：柱穴は確認されなかった。床面の中央付近からカマド前面にかけて，硬化面が認められた。床面は貼床状に，灰黄色山砂ブロックを含む暗黄褐色土で作られている。カマドは燃烧部の被熱痕跡が僅かに検出された。なお，覆土に粘土ブロックが多く含まれることから，袖材として利用された可能性がある。ただし，袖の基部の痕跡は認められなかった。

遺物出土状況：カマド周辺から硬化面にかけて若干出土した。

遺物：1～3がロクロ土師器杯で，1は体部下端と底部に回転ヘラ削りを施す。1と2は内面に油煙痕跡を残す。1は口径(13.4)cm・底径(6.3)cm・器高4.7cm，2は口径(12.6)cm，3は口径12.3cm・底径5.5cm・器高4.1cmである。3は墨書土器で，体部外面に「良」とある。4と5はロクロ土師器高台杯碗で，4はハ



第214図 S I-28遺構図・出土遺物

の字状にやや高い高台が、5は低い断面三角形形状の高台を貼り付けている。4は底部外面に焼成前の竹管状のものによる線刻があり、5は内面にヘラミガキと黒色処理を施す。6と7は灰色の須恵器胴部片で、外面に平行叩きが、内面に墨痕跡と磨滅痕跡を僅かに残す。8は鉄釘、9は刀子である。この他、鉄滓1点0.6gが出土した。

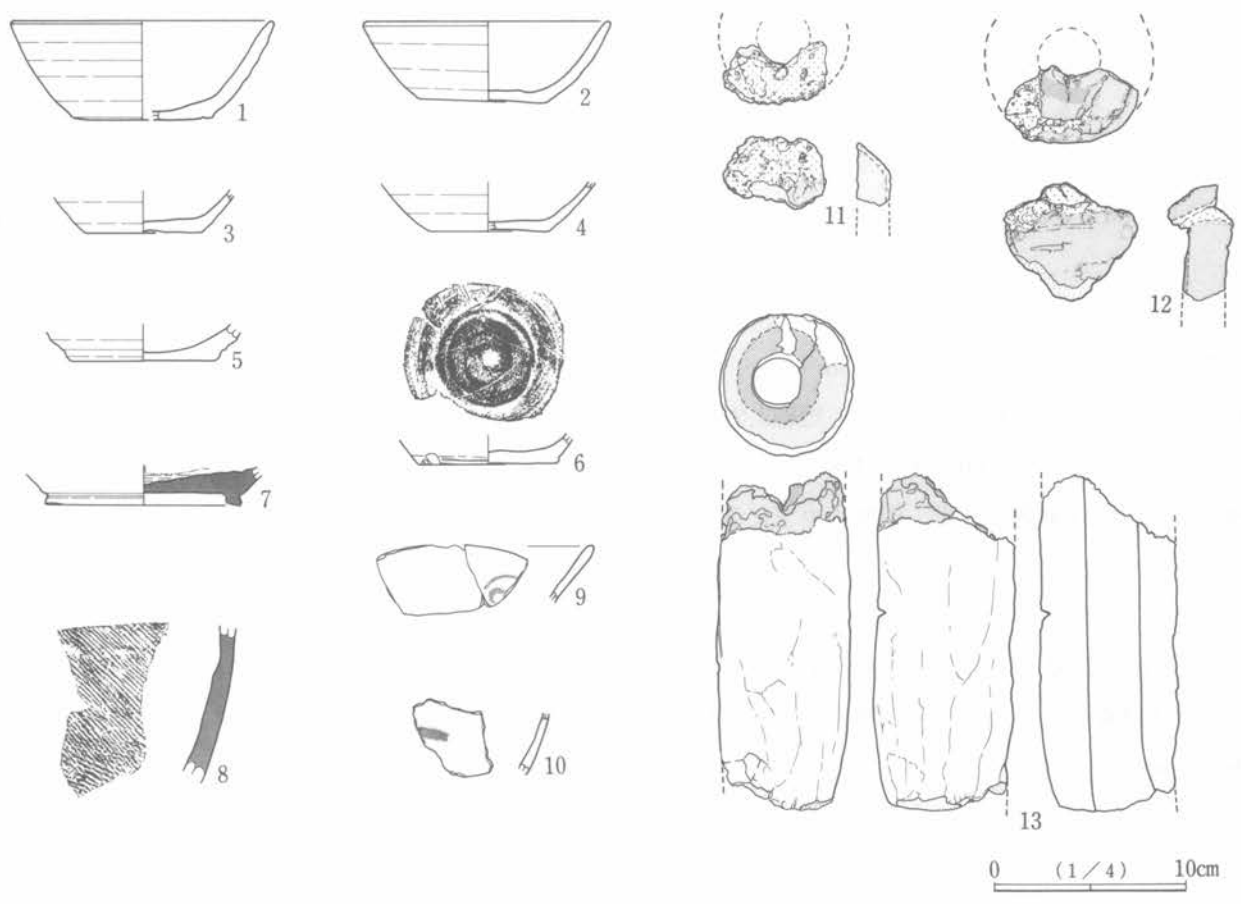
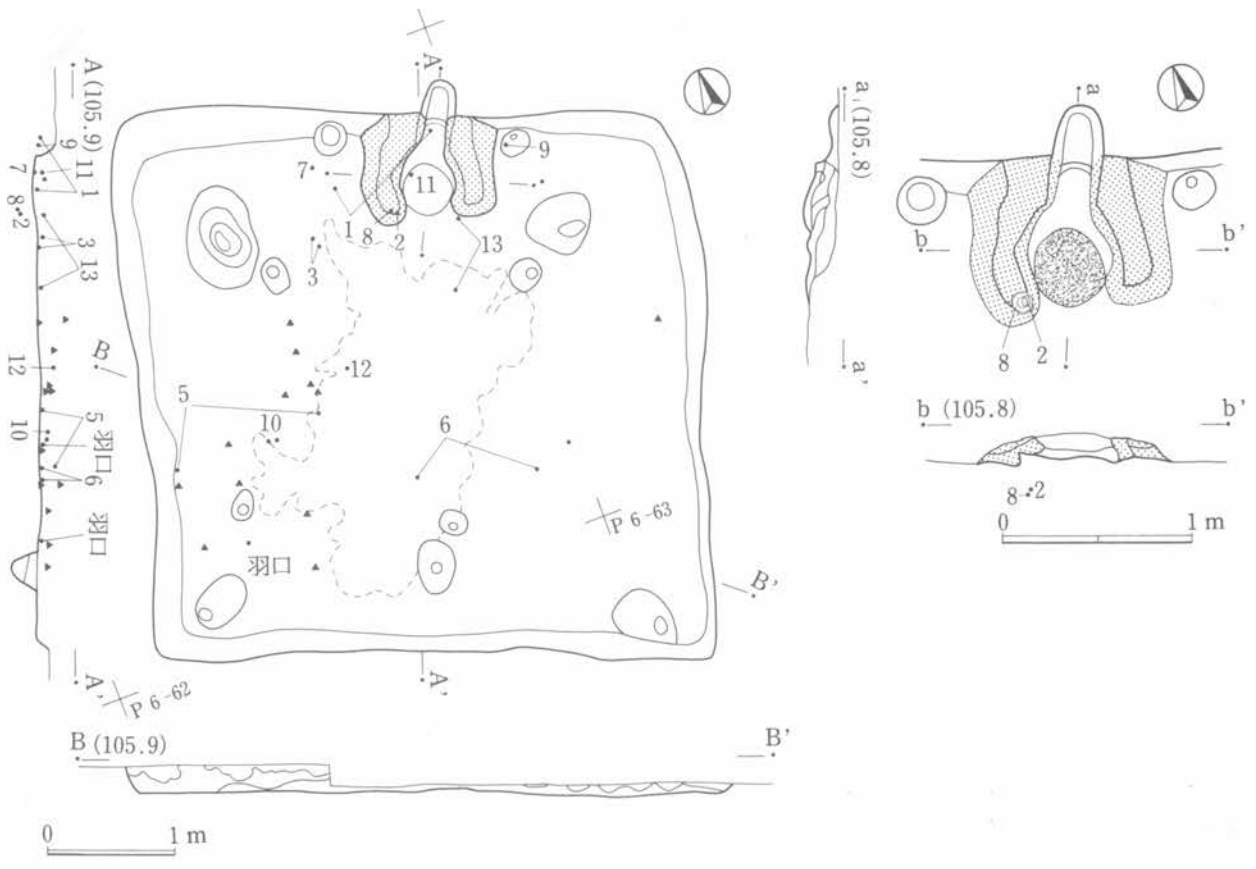
S I-31 (第215図, 図版29)

位置：V区。6 P-52・53・62・63

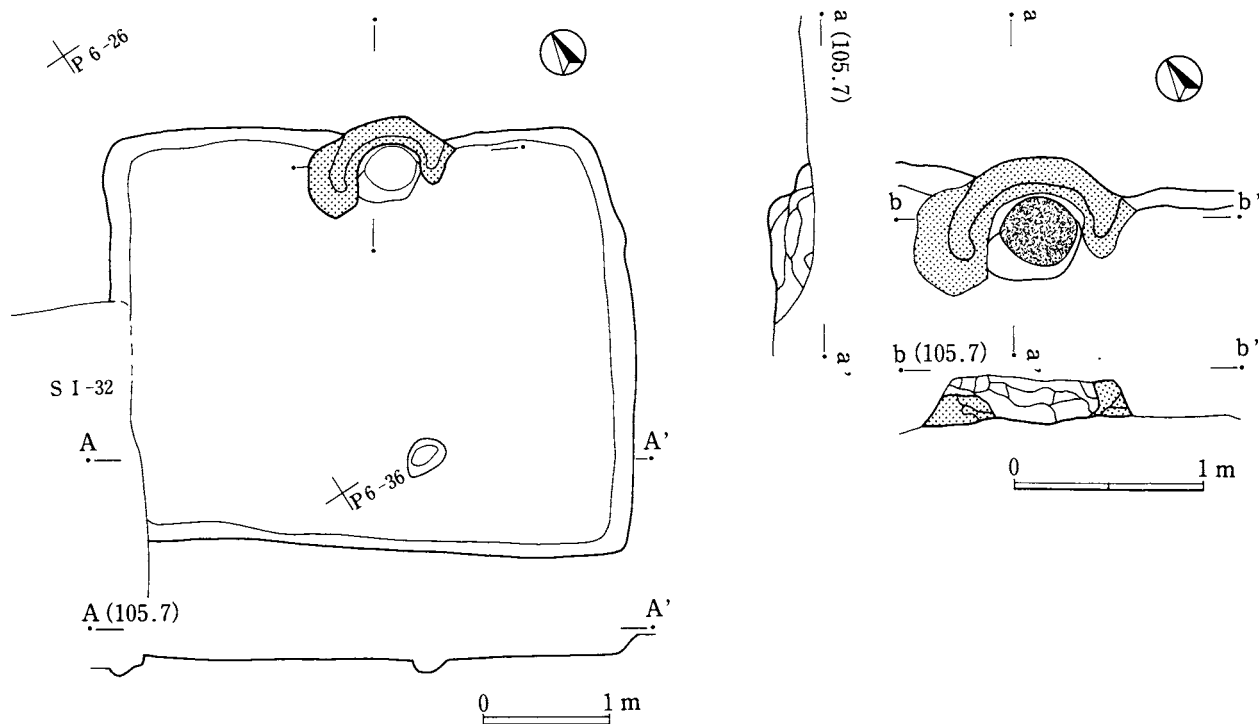
規模・形態：長軸4.40m～4.50m、短軸4.20m～4.30mのほぼ方形の掘り方である。竪穴の主軸方向は北に対してやや東に振れ、N-70°-Eである。

覆土：焼土ブロック、炭化粒、灰黄色山砂ブロックを多く含む暗褐色土が主体的に堆積する。特に覆土下層では竪穴の西側を中心に焼土ブロックの拡がりや炭化材が出土した。

構造：竪穴の四隅にやや寄った位置から支柱穴が検出された。深さは0.20m～0.50mである。北側支柱穴の2か所のやや中央寄りでは深さ0.30mと0.50mの小径の柱穴が、カマド両側の壁際では深さ0.15mと0.20mのピットが検出された。また、南壁中央下には深さ0.27mの出入口ピットと、その北側に深さ0.40mの小径のピットを伴って検出された。床面中央ではカマド前面から出入口ピットにかけて硬化面が認められる。カマドは北壁中央に位置し、袖は灰褐色山砂で作られている。燃焼部は竪穴床面を浅く掘り窪め、赤



第215図 S I -31遺構図・出土遺物



第216図 S I-32遺構図

く焼けている。側壁と障壁はほぼ垂直に立ち上がり、煙道部は竪穴外へ若干伸びる。

遺物出土状況：カマド周辺から焼土・炭化材が多く検出された竪穴西側の床面直上で比較的まとまった出土が認められた。

遺物：1～6はロクロ土師器杯で、1は底部に手持ちヘラ削りを、2と5は体部下端と底部に回転ヘラ削りを、3～5は底部無調整で、回転糸切り離し痕跡を残す。1は口径(13.6)cm・底径(7.2)cm・器高5.1cm, 2は口径12.7cm・底径6.1cm・器高4.2cm, 3は底径(6.2)cm, 4は底径(6.2)cm, 5は底径(7.6)cm, 6は底径(7.2)cmである。6の底部内面には焼成後のヘラ描き「万」がある。7は灰釉陶器である。8は暗灰青色の須恵器甕胴部片で、外面に平行叩きが施される。9と10は墨書土器である。11～13は羽口である。鉄滓14点386.3gが出土した。羽口破片17点が出土。うち10点が接合。そのうち3点の実測図あり。

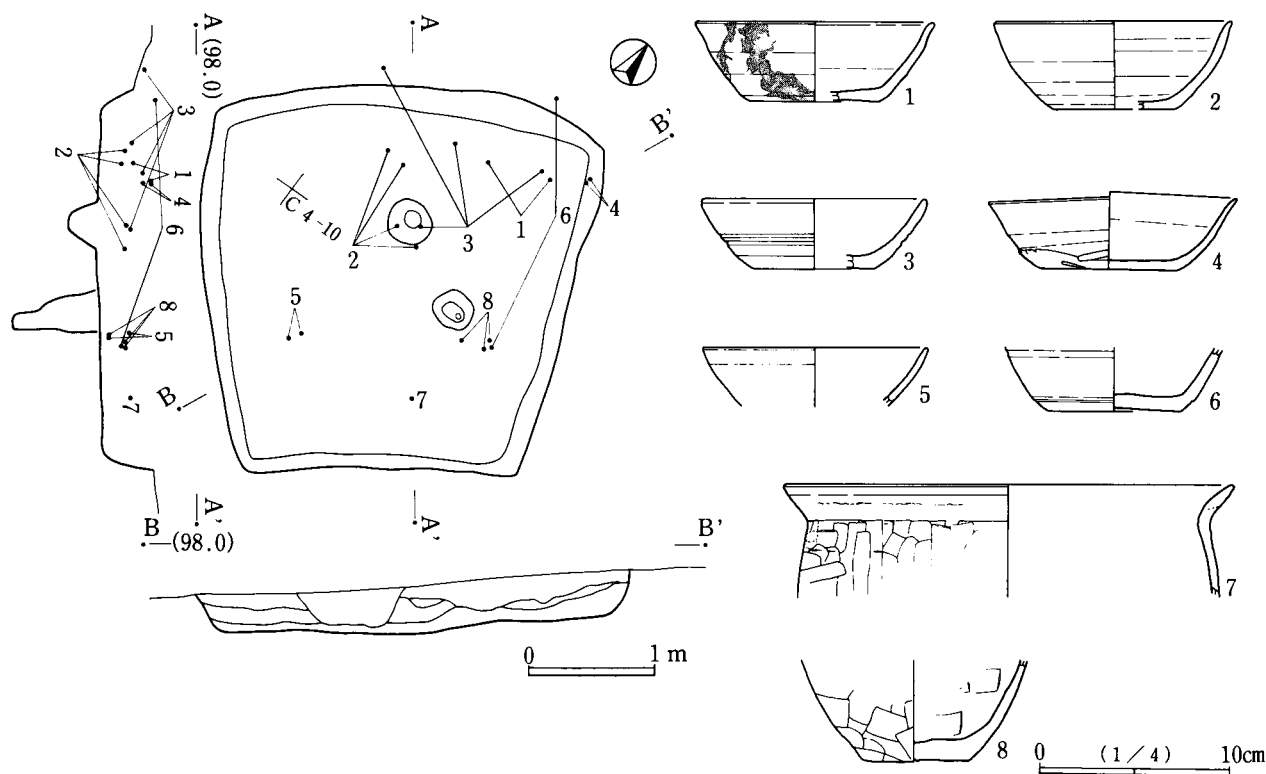
S I-32 (第216図, 図版29)

位置：V区。6 P-25・26・35・36

規模・形態：長軸3.90m～4.00m, 短軸3.20m～3.30mの長方形の掘り方である。竪穴の主軸方向は北に対して東に振れ、N-60°-Eである。

構造：支柱穴は確認されず、南壁中央下に深さ0.11mの出入口ピットのみ確認された。床の硬化面はカマドの前面から出入口ピットにかけての小範囲で確認された。カマドは北壁中央に位置する。遺存状況は全体的に悪く、特に東袖はほとんど痕跡を残さない程であった。カマドの袖は灰黄色山砂によって作られている。燃焼部は竪穴床面は浅く掘り窪まり、赤く焼けている。燃焼部前面には炭化物の集中が認められる。障壁はほぼ垂直に立ち上がり、竪穴外へ若干掘り込まれた煙道部の痕跡も検出された。

遺物：鉄滓5点40.9gが出土した。



第217図 S I-9 遺構図・出土遺物

3 竪穴状遺構

S I-9 (第217図, 図版30)

位置: I区。B 4-09・19, 4 C-00・10

規模・形態: 長軸2.70m~3.00m, 短軸2.30m~3.05mの方形に近い掘り方で, 竪穴の主軸方向は西にやや振れ, N-57°-Wである。

覆土: 上層は炭片を多く含む黒褐色土が, 下層はソフトロームを含む褐色土が主体的に堆積する。全体的に炭片と焼土粒を含む。

構造: 床面に特に硬化面はない。床面中央に径0.30m深さ0.70mと径0.35m深さ0.22mのピットが二つ検出された。

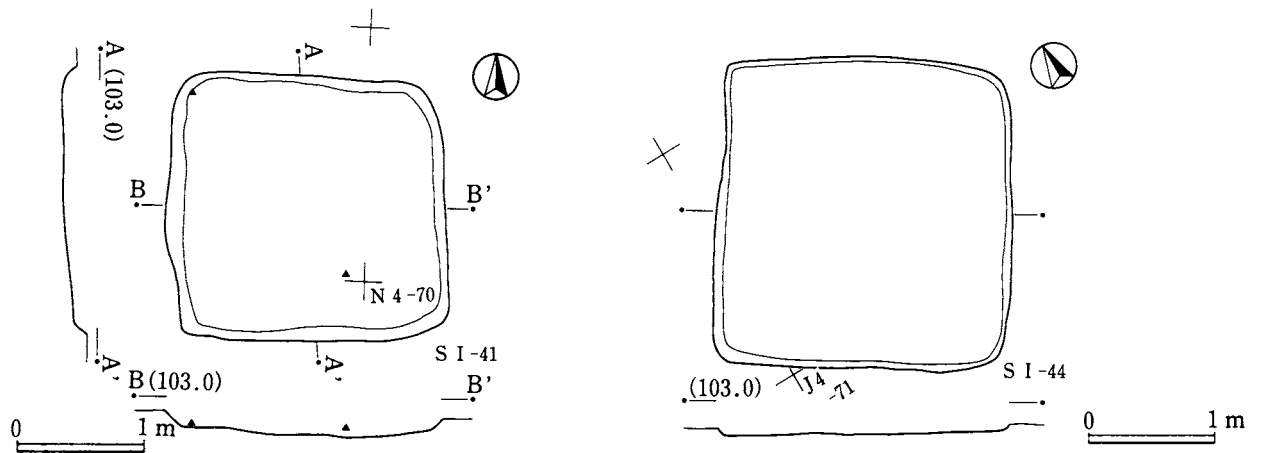
遺物出土状況: 覆土上層を中心に遺物が出土した。床面付近からの遺物量は少ない。

遺物: 1~6はロクロ土師器杯で, 1~4と6は体部下端と底部に回転ヘラ削りを施す。また1には油煙痕が残る。1は口径(12.4)cm・底径6.6cm・器高4.2cm, 2は口径(12.3)cm・底径(6.4)cm・器高4.6cm, 3は口径(11.6)cm・底径(6.4)cm・器高(3.6)cm, 4は口径13.0cm・底径7.6cm・器高4.0cm, 5は口径(11.6)cm, 6は底径(6.8)cmである。7と8は土師器甕で, 7は底径5.6cm, 8は口径(23.0)cmである。

S I-41 (第218図, 図版30)

位置: III区。I 4-69・79, J 4-60・70

規模・形態: 一辺2.00m~2.20mの方形の掘り方である。竪穴の主軸方向はほぼ南北方向と一致する。



第218図 S I-41・S I-44遺構図

構造：柱穴は確認されていない。床は特に硬化面は認められない。

遺物出土状況：全体的に散漫に少量出土した。

遺物：鉄滓2点20.1gが出土した。

S I-44 (第218図, 図版30)

位置：J 4-60・61・71

規模・形態：一辺2.35m~2.40mの方形の掘り方である。竪穴の主軸方向は北に対して東に振れ、N-57°-Eである。

構造：柱穴は確認されず、床では特に硬化面は認められなかった。

遺物出土状況：散漫で少量である。

S I-7 (第219図, 図版30)

位置：IV区。M 4-28・29

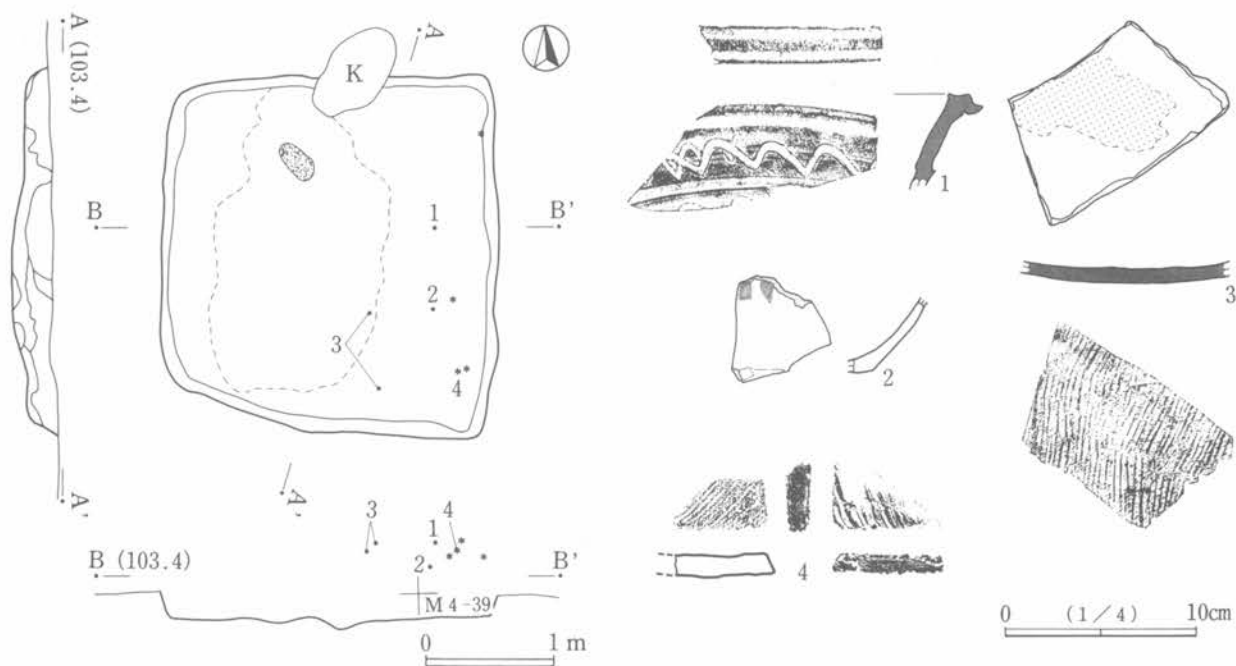
規模・形態：南北軸長2.40m~2.82m, 東西軸長2.40m~2.50mのほぼ方形の掘り方で、竪穴の主軸方向はほぼ南北方向と一致する。

覆土：ソフトローム土を含む暗褐色土と褐色土が主体的に堆積する。全体的に炭粒を含む。

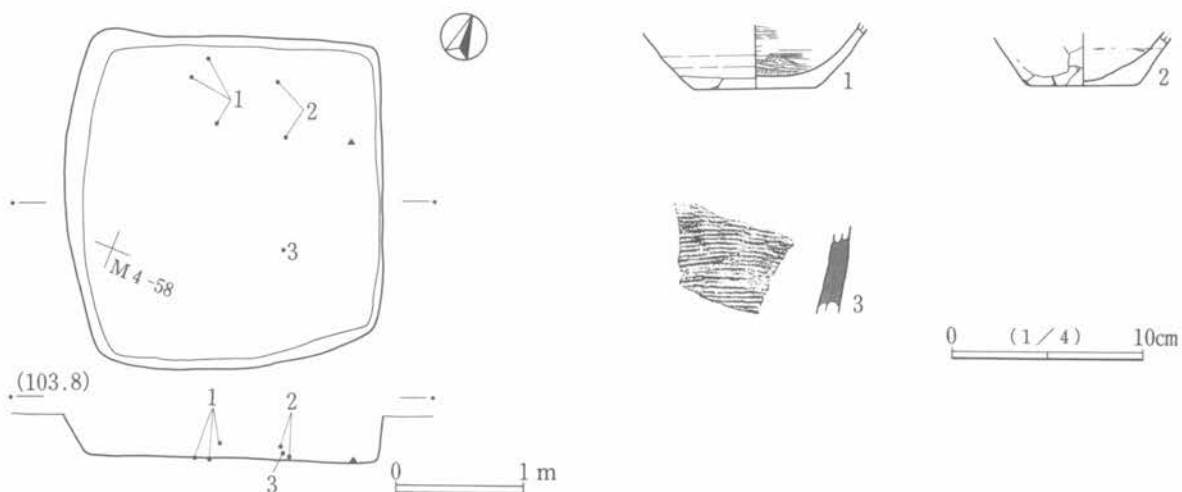
構造：柱穴は確認されていない。床面はやや凹凸を有するものの、広い範囲で硬化面が認められた。カマドの痕跡はなく、床面の北側中央の床面に径0.15m~0.35m程の被熱痕跡が認められた。ただし、これに伴う掘り方は認められなかった。

遺物出土状況：覆土上層からは全体的に多くの遺物が認められたが、床面近くでの遺物量は少ない。

遺物：1は灰色の須恵器甕の口縁部で、2段の波状沈線が認められる。2は灰色の須恵器甕の胴部破片で、外面に平行叩きが、内面に磨滅痕が認められ転用硯としての利用が窺える。3は墨書土器、4は平瓦である。詳細な時期は不明である。



第219図 S I-7 遺構図・出土遺物



第220図 S I-10遺構図・出土遺物

S I-10 (第220図, 図版31)

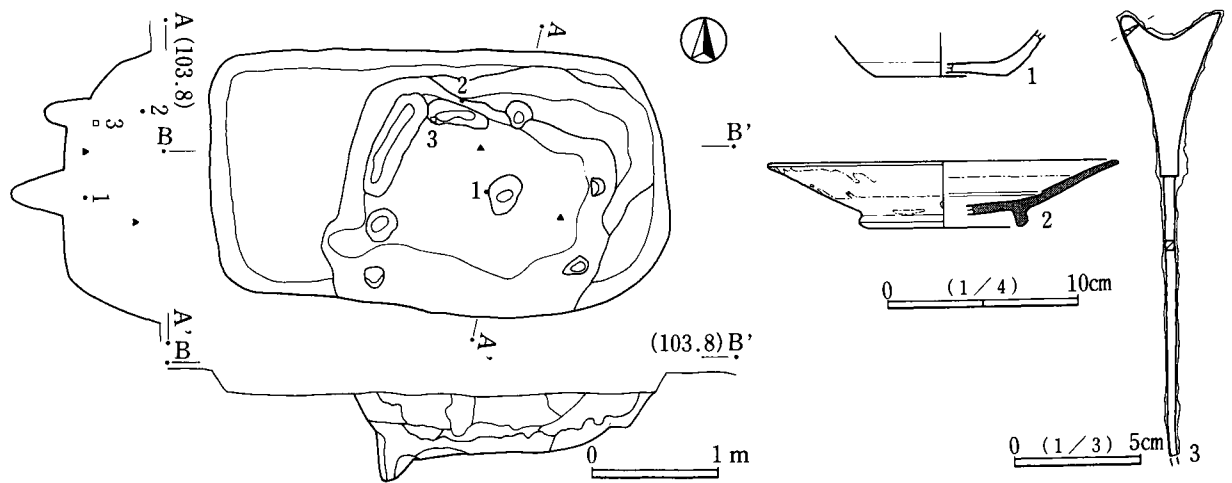
位置: IV区。M4-47・48・57・58

規模・形態: 一辺1.5m~1.75mのほぼ方形の掘り方である。竪穴の主軸方向は北に対してやや西に振れ、 $N-70^{\circ}-W$ である。

構造: 柱穴は確認されなかった。特に硬化面は認められなかった。

遺物出土状況: 床面直上を中心に遺物が出土した。

遺物: 1はロクロ土師器杯で、内面にヘラミガキと黒色処理を、体部下端と底部に回転ヘラ削りを施す。底径(6.4)cmである。2は土師器甕で、底径(6.4)cmである。3は灰白色の須恵器甕胴部片で、外面に細かい平行叩きを施す。この他、鉄滓が1点4.1g出土した。



第221図 SI-18遺構図・出土遺物

SI-18 (第221図, 図版31)

位置: IV区。M 4-69, N 4-60

規模・形態: 大きく2つの掘り方が認められる。長軸3.5m~3.6m, 短軸1.9m~2.0m, 深さ0.2mの長方形の掘り方と, 長軸2.0m~2.2m, 短軸1.9m~2.0mの長方形の掘り方がある。両竪穴は主軸方向を20°程異なる。

覆土: ロームブロックを含む褐色土が主体的に堆積する。全体的に炭片を含む。

構造: 底面に特に硬化面は認められない。深い掘り方の底面周囲にピットと周溝状の溝が部分的に確認された。また, 底面中央にも深さ0.4m程のピットが検出された。

遺物出土状況: 深い掘り方の覆土中を中心に若干の遺物が散在的に出土した。

遺物: 1は灰釉陶器皿で, 底部に貼付け高台を有す。口径(13.8)cm・底径(8.0)cm・器高3.4cmである。2はロクロ土師器杯で, 底部は無調整で, 回転糸切り離し痕跡を残す。底径(7.0)cmである。3は鉄鏃である。この他, 縄文土器と鉄滓2点52.4gが出土した。

SI-19 (第222図)

位置: IV区。N 4-70・80・81

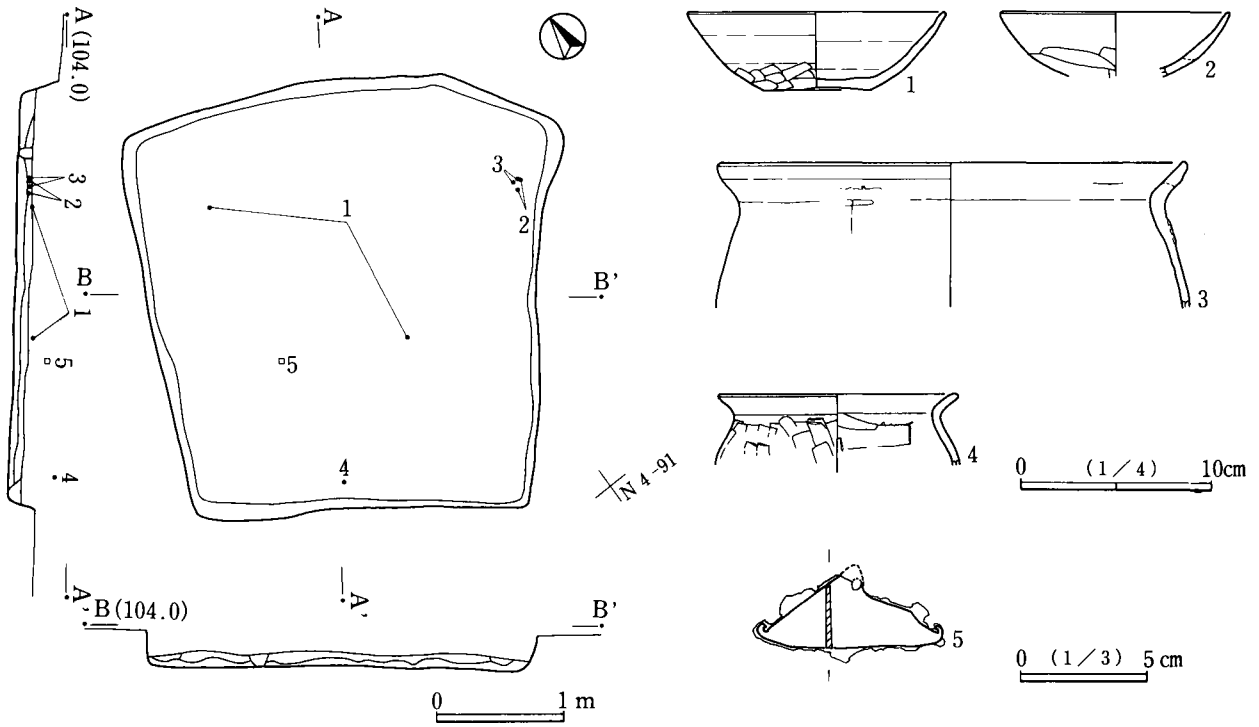
規模・形態: 一辺2.7m~3.5mのほぼ方形の掘り方である。竪穴の主軸方向は北に対してやや西に振れ, N-52°~62°-Wである。

覆土: ロームブロックを含む褐色土が主体的に堆積する。

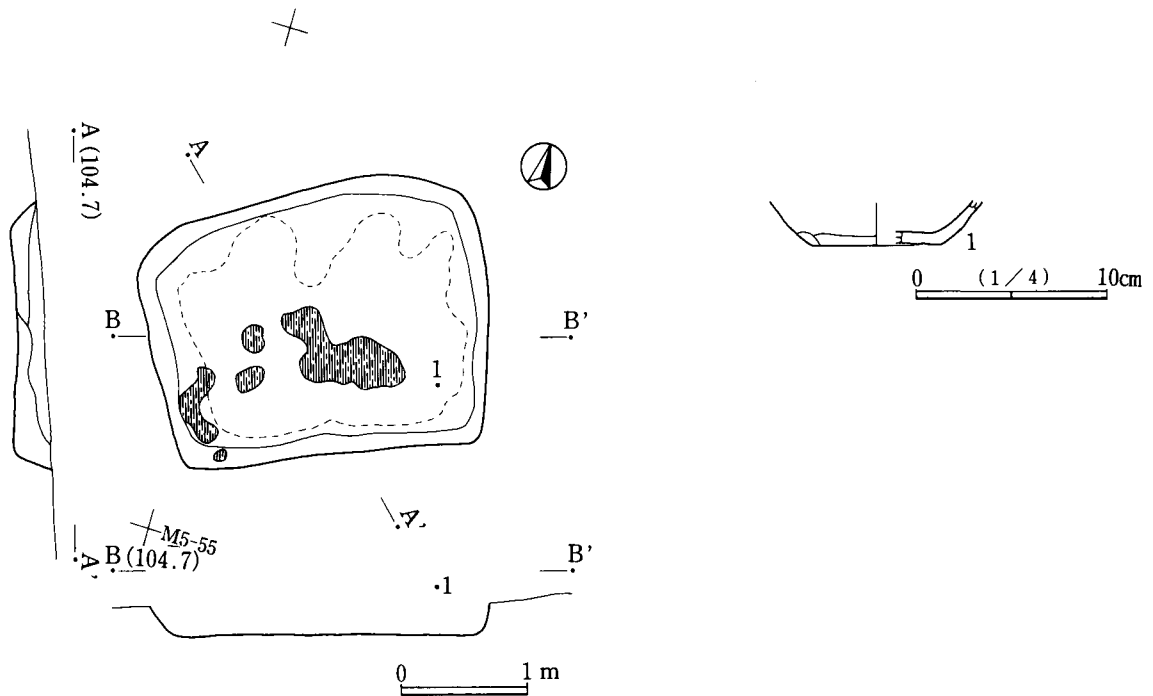
構造: 柱穴は認められない。床面は全体的に硬化している。全体的に焼土粒と炭粒を含む。

遺物出土状況: 遺物は全体的に少ないものの, 南東壁の北側付近の床面直上付近にややまとまった出土が認められた。

遺物: 1と2はロクロ土師器杯で, 体部下半と底部に手持ちヘラ削りを施す。1は口径13.4cm・底径5.4cm・器高4.1cm, 2は口径(11.8)cmである。3と4は土師器甕で, 3は口径(24.2)cm, 4は口径(12.3)cmである。5は火打鉄である。



第222図 S I -19遺構図・出土遺物

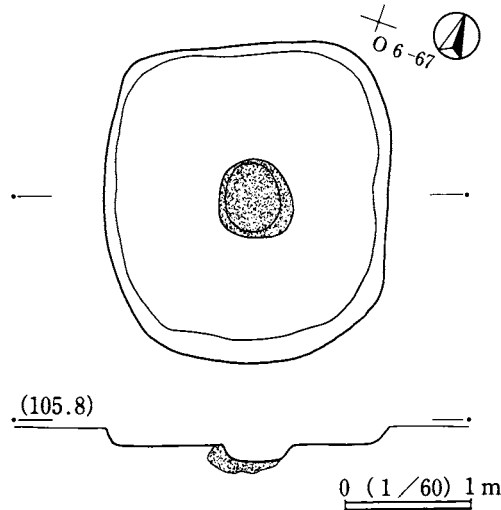


第223図 S I -36遺構図・出土遺物

S I -36 (第223図, 図版31)

位置: IV区。5 M-44・45

規模・形態: 長軸2.7m, 短軸1.9m~2.1mの長方形の掘り方である。竪穴の主軸方向は北に対してやや西に振れ, N-70°-Wである。



第224図 O6-66・67堅穴状遺構遺構図

覆土：黄褐色土を含む明褐色土が主体的に堆積する。全体的に炭化物が、堅穴中央付近の覆土下層で焼土粒が含まれる。

構造：柱穴は確認されていない。床面は広い範囲で硬化し、部分的に炭化粒の拡がり認められた。

遺物出土状況：覆土中から散漫に少量出土した。

遺物：1はロクロ土師器杯で、体部下端と底部に回転ヘラ削りを施す。底径(6.2)cmである。この他、底部無調整で回転糸切り離し痕跡を残す底部小片も出土した。

O6-66, 67堅穴状遺構 (第224図)

位置：IV区。O6-66, 67

規模・形態：長軸2.50m, 短軸2.30mの方形の掘込みで、深さは0.15mである。

構造：中央に直径約0.50m, 深さ約0.12mの掘込みがあり、底面は著しく焼けていた。

SI-30 (第225図, 図版31)

位置：V区。6P-55・56

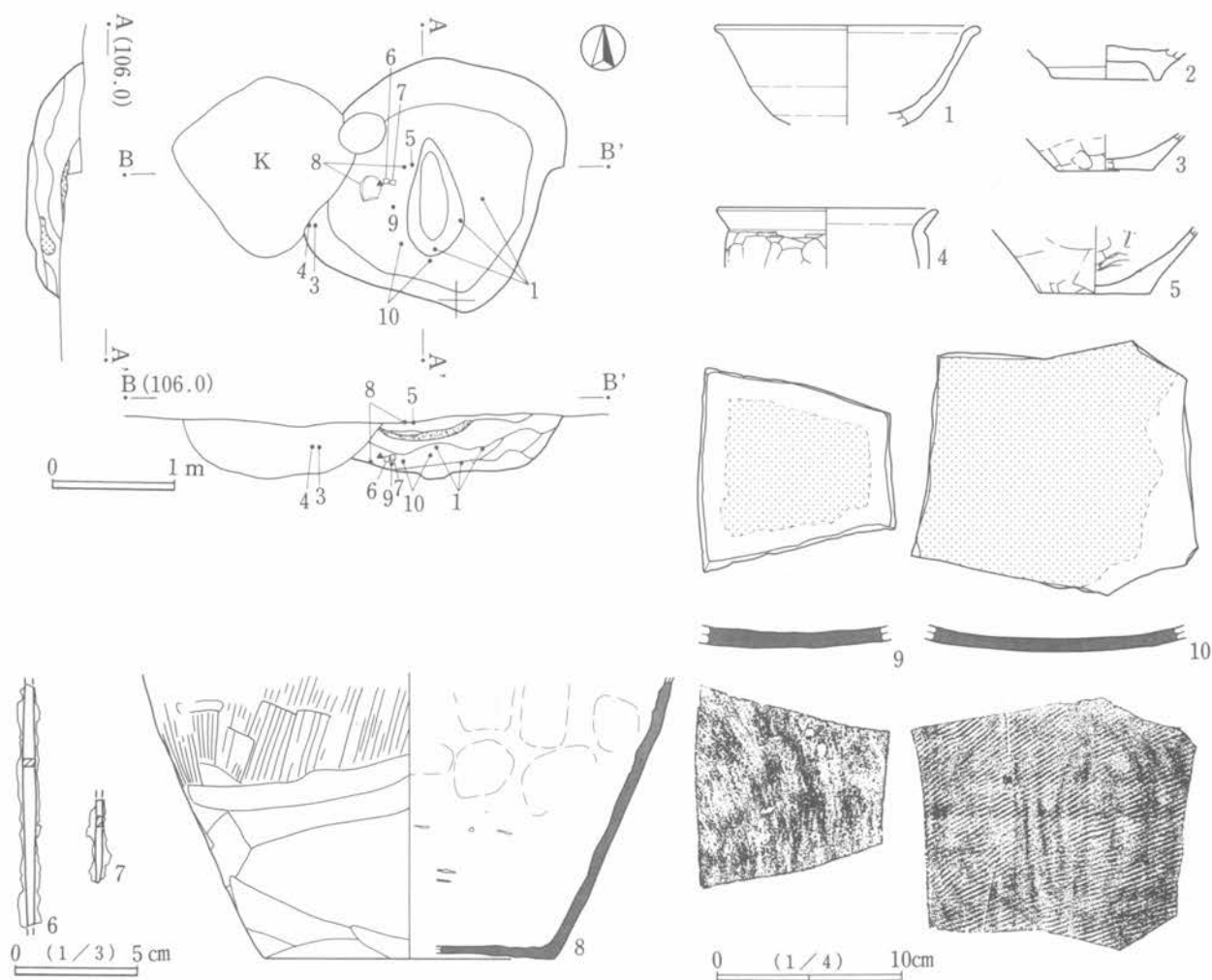
規模・形態：長軸1.9m~2.0m, 短軸1.7mの隅丸方形の掘り方である。堅穴の主軸方向は北に対してやや東に振れ、N-70°-Eである。

覆土：焼土粒, 炭化粒を含む暗褐色土が主体的に堆積する。覆土中層に焼土粒を中心としたブロックが薄く広く堆積する。また、灰白色山砂ブロックの堆積も認められた。

構造：床面はほぼ平坦であるが、特に硬化面は認められない。中央に浅い溝状の落込みが認められるが、柱穴等は認められなかった。

遺物出土状況：床面直上付近を中心とした僅かな遺物量である。

遺物：1がロクロ土師器杯で、口径(14.0)cmである。2はロクロ土師器高台付杯で、底部に高台を貼り付け、底径(5.3)cmである。3~5は土師器甕で、3は底径(5.2)cm, 4は口径(11.8)cm, 5は底径(6.0)cmである。6は褐色の須恵器甕で、外面中位に平行叩きが、下位に横ナデが施される。内面には煮炊きの痕跡



第225図 S I-30遺構図・出土遺物

が認められる。7と8は灰色の須恵器甕胴部片で、内面に墨痕と磨滅痕跡を明瞭に残す。鉄滓1点5.7gが出土した。棒状鉄製品2点出土。

4 鍛冶関連遺構・焼土遺構

S X-4 鉄滓集中地点 (第226図)

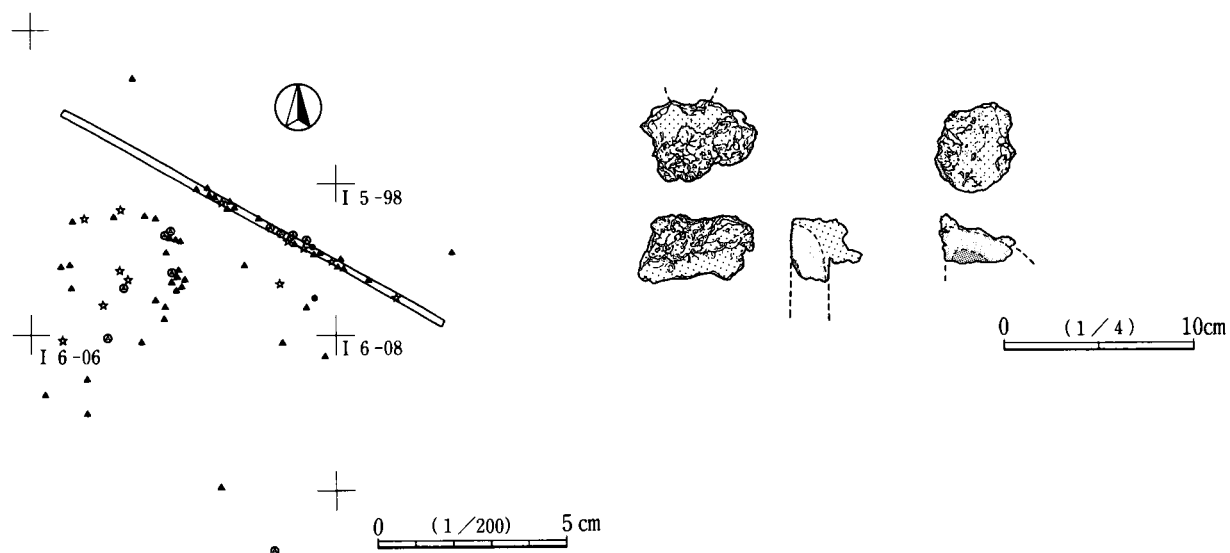
位置：II区。I 5-96・97, I 6-06・07

規模・形態：直径4.0m~6.0mほどの範囲に鉄滓が集中して出土している。トレンチにより断ち割り、調査を行ったが、掘込みなどの構造物は確認できなかった。

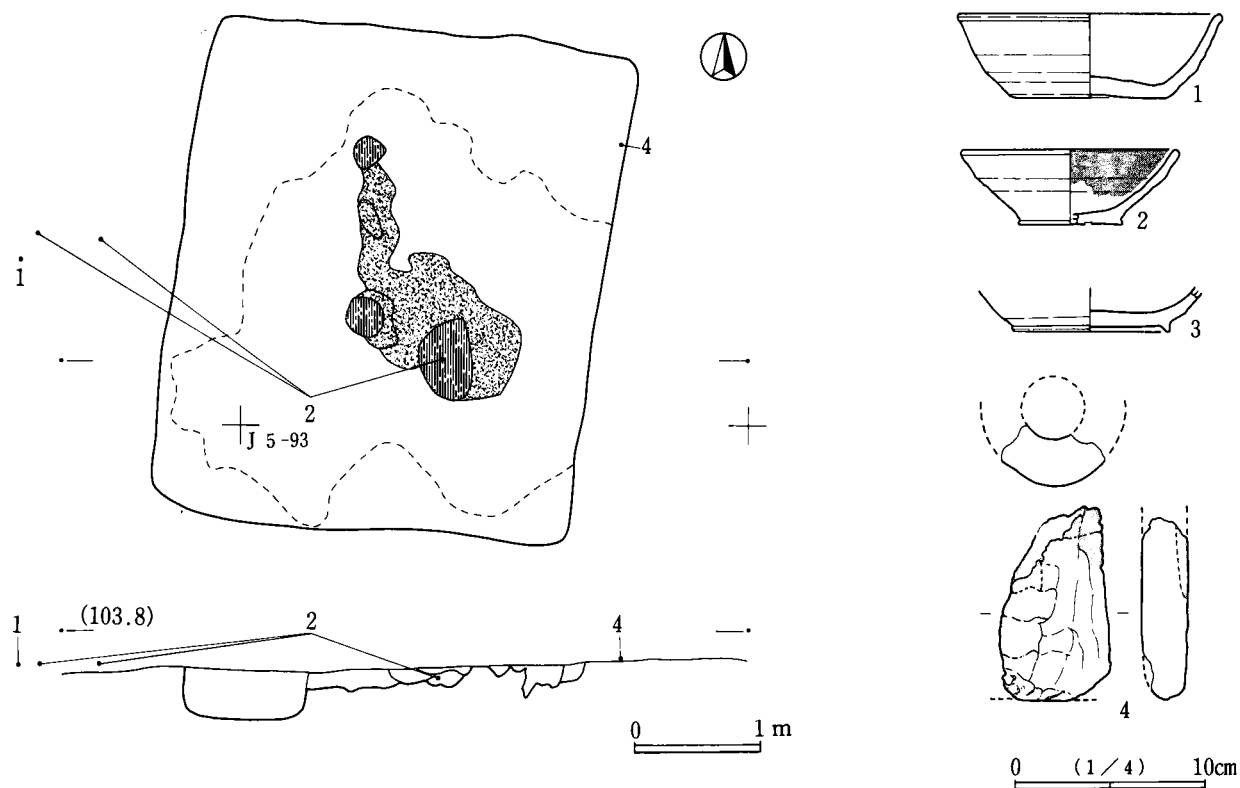
構造：炉内滓が主体で、鉄塊系に分類されるものが混入する。羽口破片が9点出土している。遺物の出土状況が散漫なことから、鍛冶炉を破壊した痕跡かあるいは鉄滓の廃棄場所であると考えられる。

S I-38 (第227図, 図版32)

位置：III区。J 5-82・83・92・93



第226図 SX-4 遺物出土状況・出土遺物

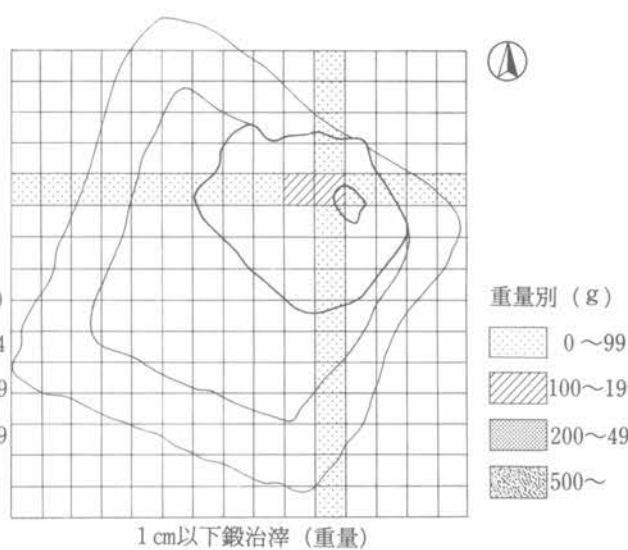
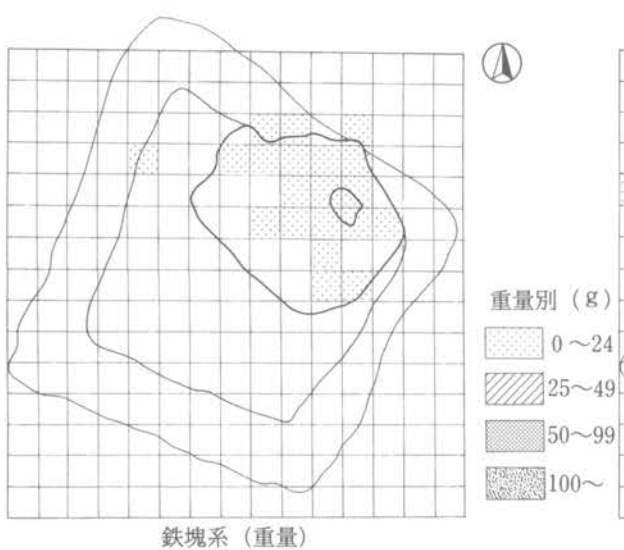
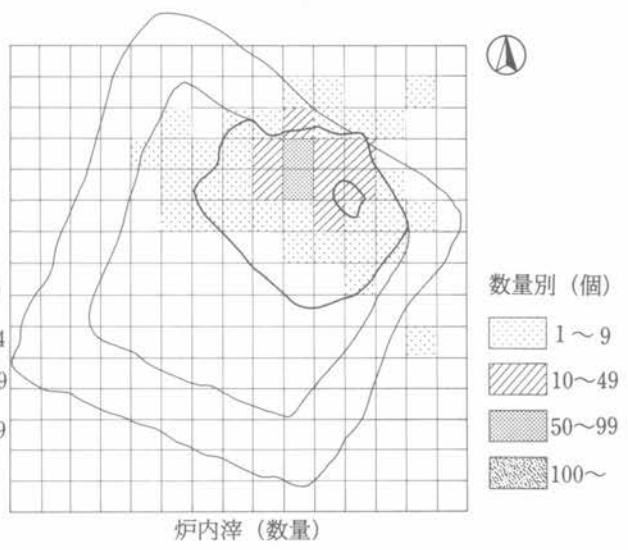
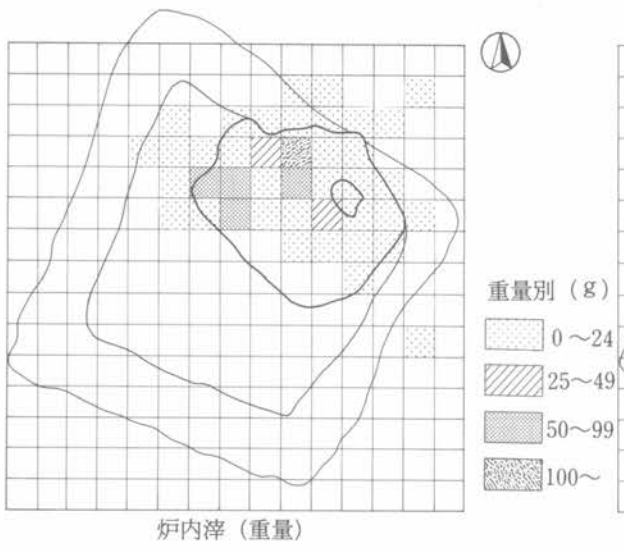
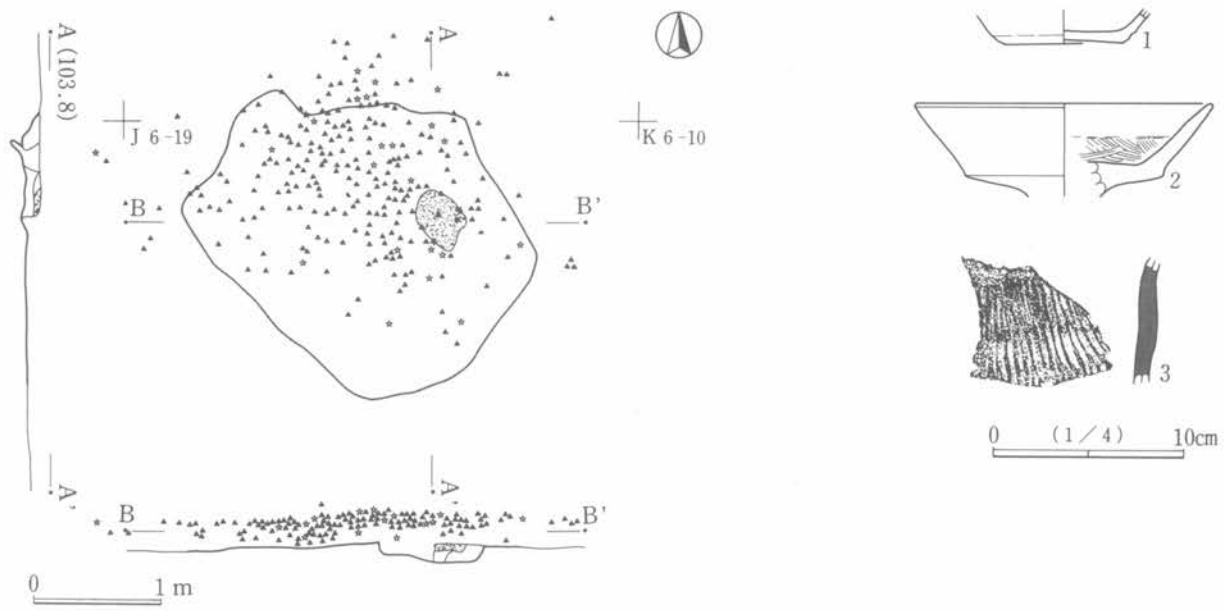


第227図 SI-38遺構図・出土遺物

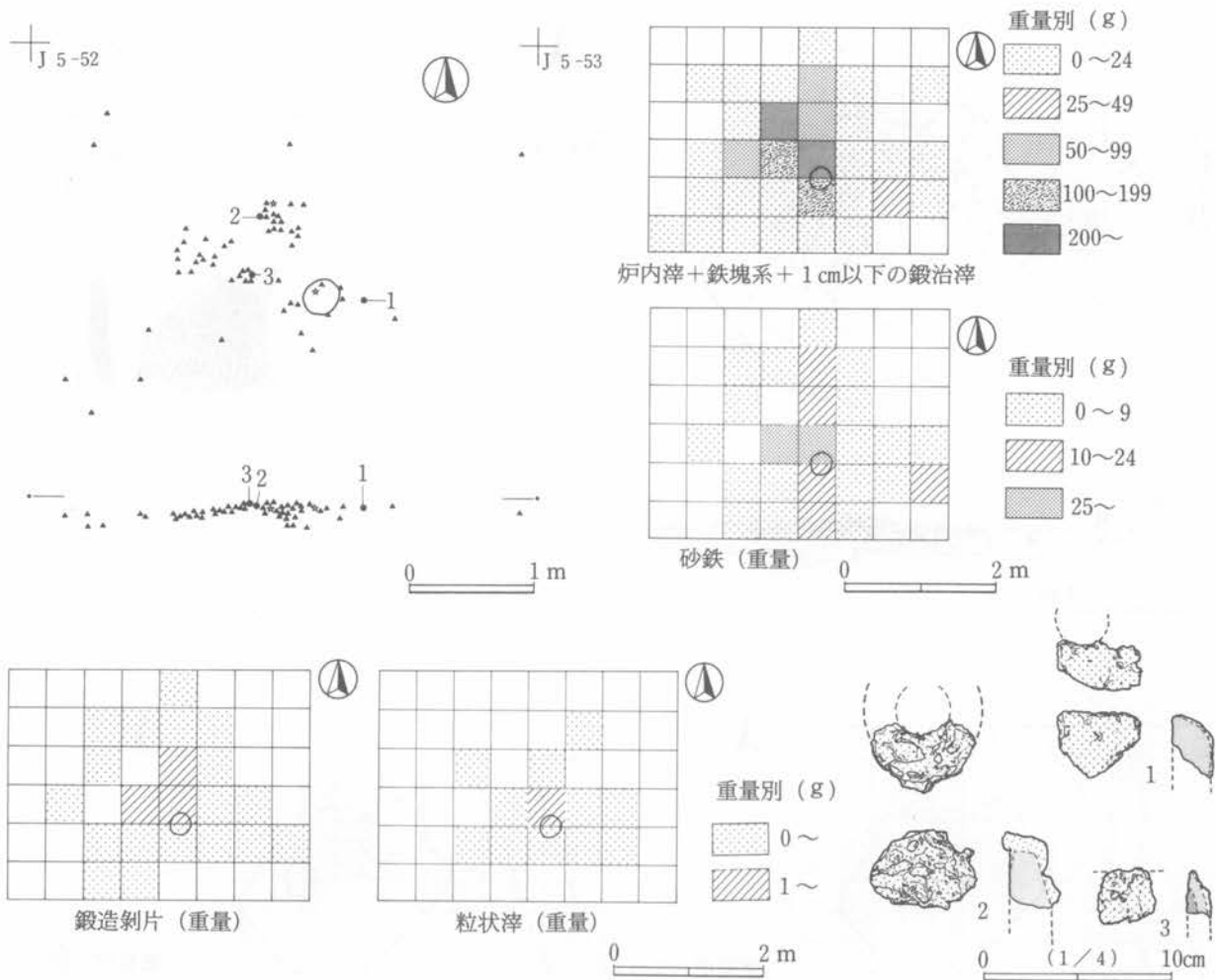
規模・形態：焼土粒と炭化物の拡がりを中心に床状硬化面が検出された。想定される掘込みは長軸3.9m、短軸3.3mで、主軸方向は南北方向にほぼ一致する。

構造：焼土ブロックと炭化物を含む黒色土ブロックを中心に焼土粒を含む褐色土ブロックが硬化面の中央から検出された。焼土ブロックなどに伴う掘込みは認められなかった。竪穴状遺構に伴う床面と想定される。

遺物出土状況：硬化面付近から若干の遺物が出土した。



第228図 S I-39遺構図・出土遺物



第229図 S I-40遺構図・出土遺物

第15表 S I-40鉄滓集計表

区	鉄塊系	炉内滓	鍛冶滓			合計
			1 cm 以上	1 cm 以下	1 cm 以上の合計	
4			8.8	1.5	8.8	10.3
11		19.7			19.7	19.7
12				0.1	0.0	0.1
13		4.3		0.2	4.3	4.5
14		49.8		7.3	49.8	57.1
15			1.7	2.7	1.7	4.4
17		2.7			2.7	2.7
22		11.4		4.3	11.4	15.7
23	24.1	210.2			234.3	234.3
24		15.2	3.6	35.0	18.8	53.7
25				0.1	0.0	0.1
31				1.3	0.0	1.3
32		97.9			97.9	97.9
33		113.2		47.6	113.2	160.8
34	202.6	116.0		52.9	318.6	371.5
35				0.8	0.0	0.8

区	鉄塊系	炉内滓	鍛冶滓			合計
			1 cm 以上	1 cm 以下	1 cm 以上の合計	
36				0.2	0.0	0.2
37				0.1	0.0	0.1
41		7.5			7.5	7.5
42				16.1	0.0	16.1
43		3.3	4.1	7.5	7.4	14.9
44		131.7		16.9	131.7	148.6
45		2.3		1.7	2.3	4.0
46				42.0	0.0	42.0
47				13.3	0.0	13.3
50		9.5			9.5	9.5
51		1.2			1.2	1.2
52				2.4	0.0	2.4
53				0.3	0.0	0.3
54				1.7	0.0	1.7
55				0.3	0.0	0.3
合計	226.7	795.9	18.2	255.9	1,040.8	1,296.7

遺物：1と2はロクロ土師器杯で、1は底部周囲に回転ヘラ削りを、2は底部無調整で回転糸切り離し痕跡を残す。両者ともタール状の油煙痕跡を内面に残す。1は口径(13.6)cm・底部7.9cm・器高4.3cm、2は口径(11.2)cm・底径(5.5)cm・器高3.9cmである。3はロクロ土師器高台付椀で、体部下端と底部に回転ヘラ削りを施し、小さな高台を貼り付けている。また、内面にヘラミガキの痕跡を僅かに残す。4は羽口で、内径(3.3)cmである。なお、サンプル土中からは、鉄滓は出土しなかった。焼土が直接鍛冶炉に伴うものではない。

S I - 39 (第228図, 図版32)

位置：Ⅲ区。J 6 - 19

規模・形態：径0.30m～0.50m程の焼土ブロックが集中する掘込みを中心に、鉄滓が出土する焼土粒と炭化物粒まじりの暗褐色土が面的に発見された。検出はできなかったものの、鉄滓の出土状況から床面の存在が想定された。そして、遺構検出面の断ち割り調査の結果、鉄滓出土分布範囲を取り囲むように、4.50m四方の焼土粒の拡がりがある下層で認められたことから、これを焼土遺構に伴う床面の範囲と想定した。

遺物：1はロクロ土師器杯で、底部無調整で回転糸切り離し痕跡を残す。底径(6.1)cmである。2は古墳時代の高杯の杯部である。3は黄褐色の須恵器甕胴部片で、外面に平行叩きを残す。その他、多くの鉄滓が集中して出土した。

S I - 40 (第229図, 図版32)

位置：Ⅲ区。5 J - 52

規模・形態：径0.25m～0.30m、深さ0.03mの落込みを中心に鉄滓が集中して発見された。

覆土：黒色砂質土が堆積する。

遺物：1～3は羽口である。やや多くの鉄滓が集中して出土した。

S I - 47 (第230図, 図版32)

位置：Ⅲ区。6 J - 37・47

規模・形態：ピットと周辺の硬化面を中心とした鉄滓出土遺構である。ピットは径0.60m～0.80m、深さ0.50mである。南側はほぼ垂直に、北側は段状に掘り込まれている。覆土は焼土粒を含む黒色土である。

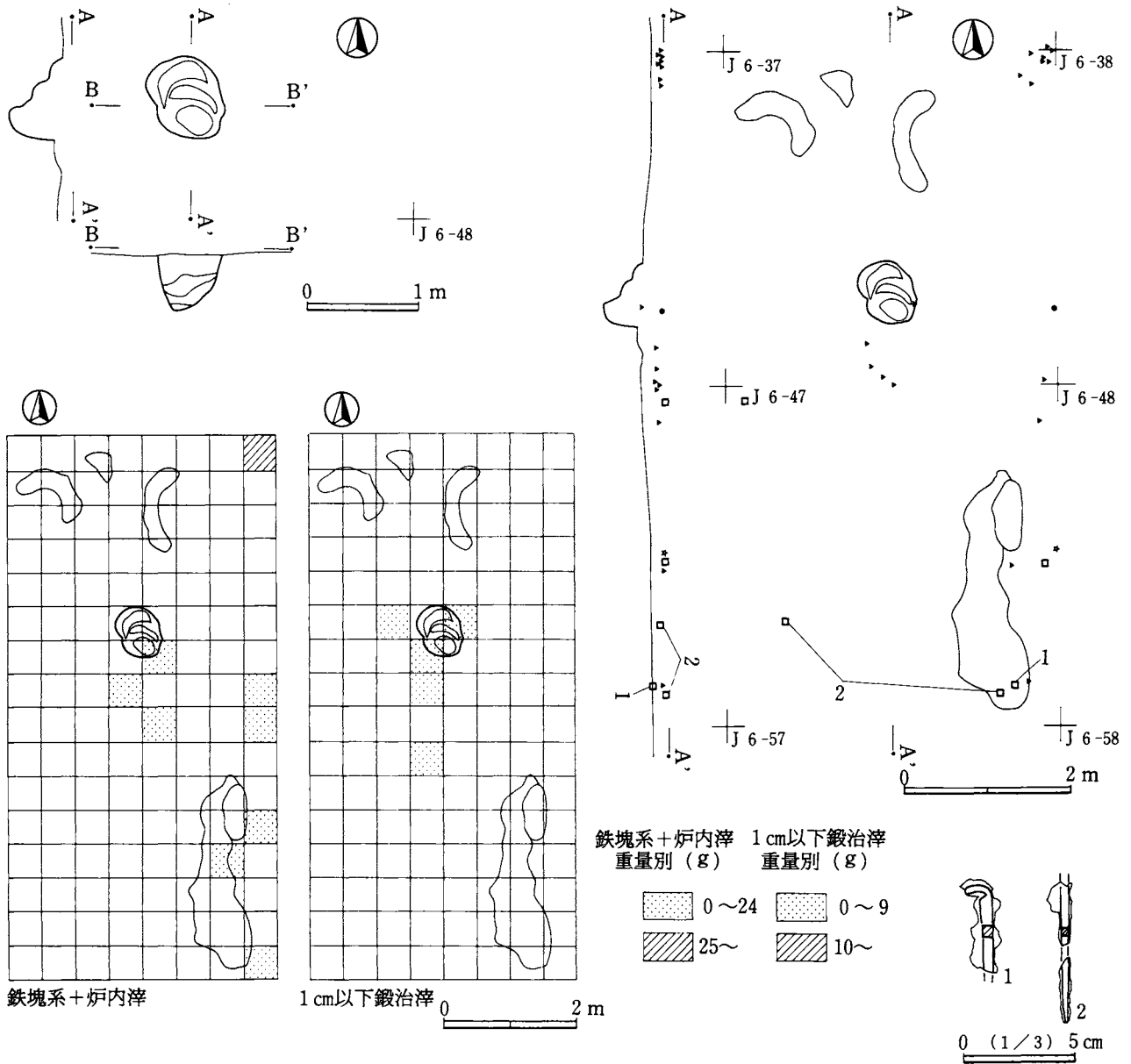
遺物：焼土遺構付近と、やや離れた地点の合わせた3か所からやや鉄滓が集中して発見された。鉄釘3点、板状鉄製品が出土している。

S I - 53 (第231図, 図版33)

位置：Ⅲ区。6 J - 07・08

規模・形態：径3.80mの範囲から被熱痕跡が4か所検出された。径0.25m～1.00mの大きさで、西側の比較的大きな被熱痕跡の2か所の断割り掘込みが認められた。残る2か所では掘込みは確認できなかった。

遺物：サンプル土を水洗し、選別したが、鉄滓の出土は認められなかった。鉄釘2点、鋸、鉄塊が出土した。



第230図 S I-47遺構図・出土遺物

III区焼土遺構 (第232図, 図版33)

SK-162

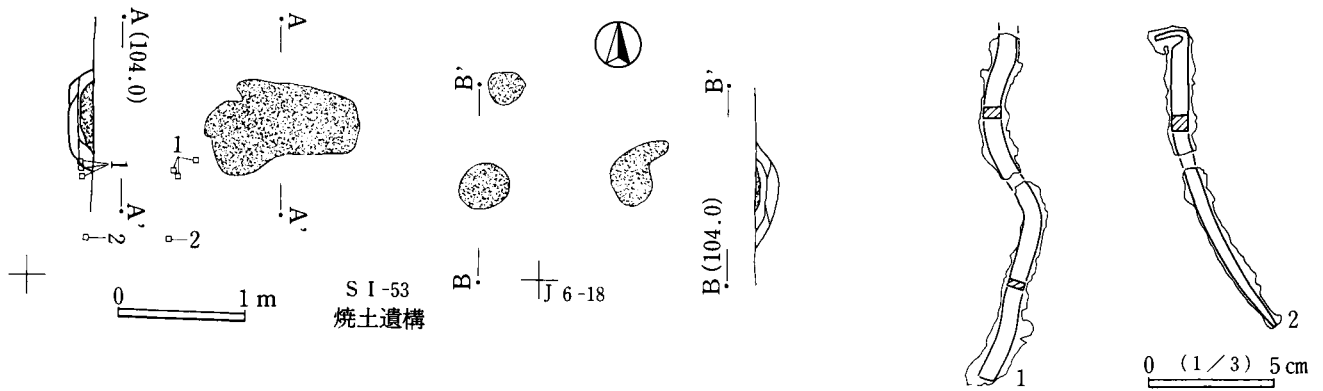
位置: III区。SK-162A, SK-162BはJ 5-58に, SK-162CはJ 5-68に位置する。

規模・形態: 4地点の焼土集中地点が検出されている。湾曲した楕円形のもの2基をそれぞれSK-162a, SK-162bと呼び, ほぼ円形の2基をあわせてSK-162Cとした。aは長径約0.75m, bは長径約0.63m, cはともに直径約0.35mである。

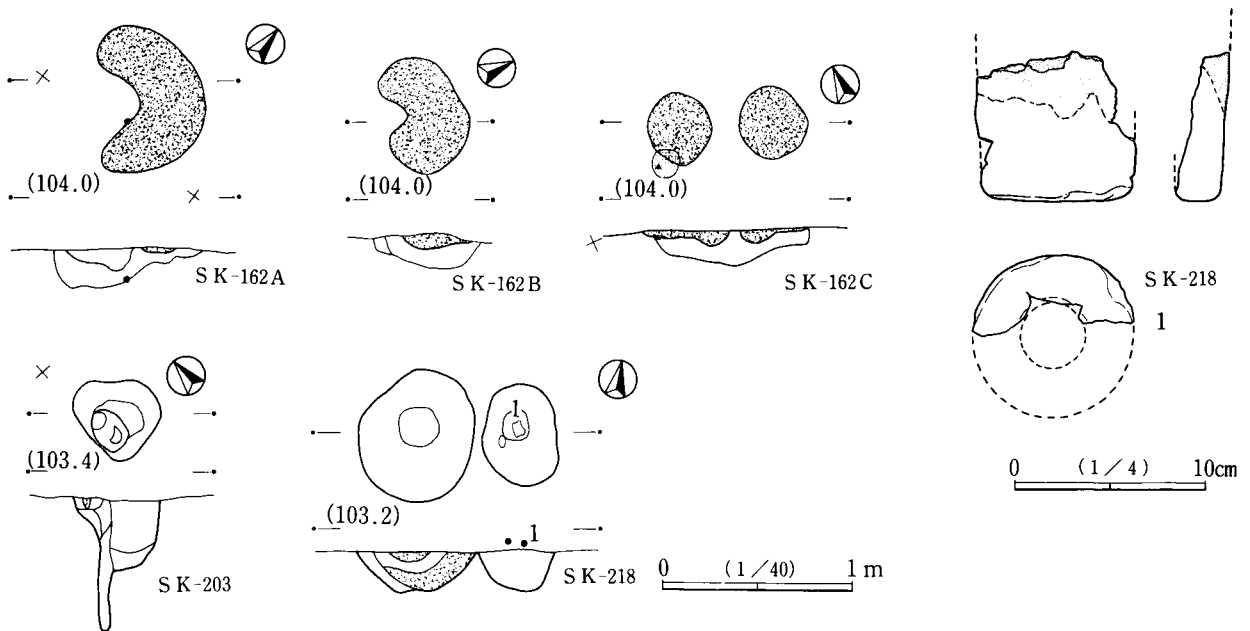
構造: いずれも深さ0.15mから0.20mの掘込みを有し, 覆土はおおよそ2層に分けられる。下層は焼土を含む軟らかい黒褐色土で, 上層には厚さ約0.10mほどの焼土層が見られる。遺物などは検出されなかった。

性格は不明だが, 鍛冶に関連する可能性がある。

SK-203



第231図 S I-53遺構図・出土遺物



第232図 III区焼土遺構遺構図・出土遺物

位置：III区。J 6-27

規模・形態：長径約0.40mの不整楕円形のピット状の掘込みである。底はおよそ2段になっており、中段は深さ約0.35m、下段は深さ約0.65mとなっている。

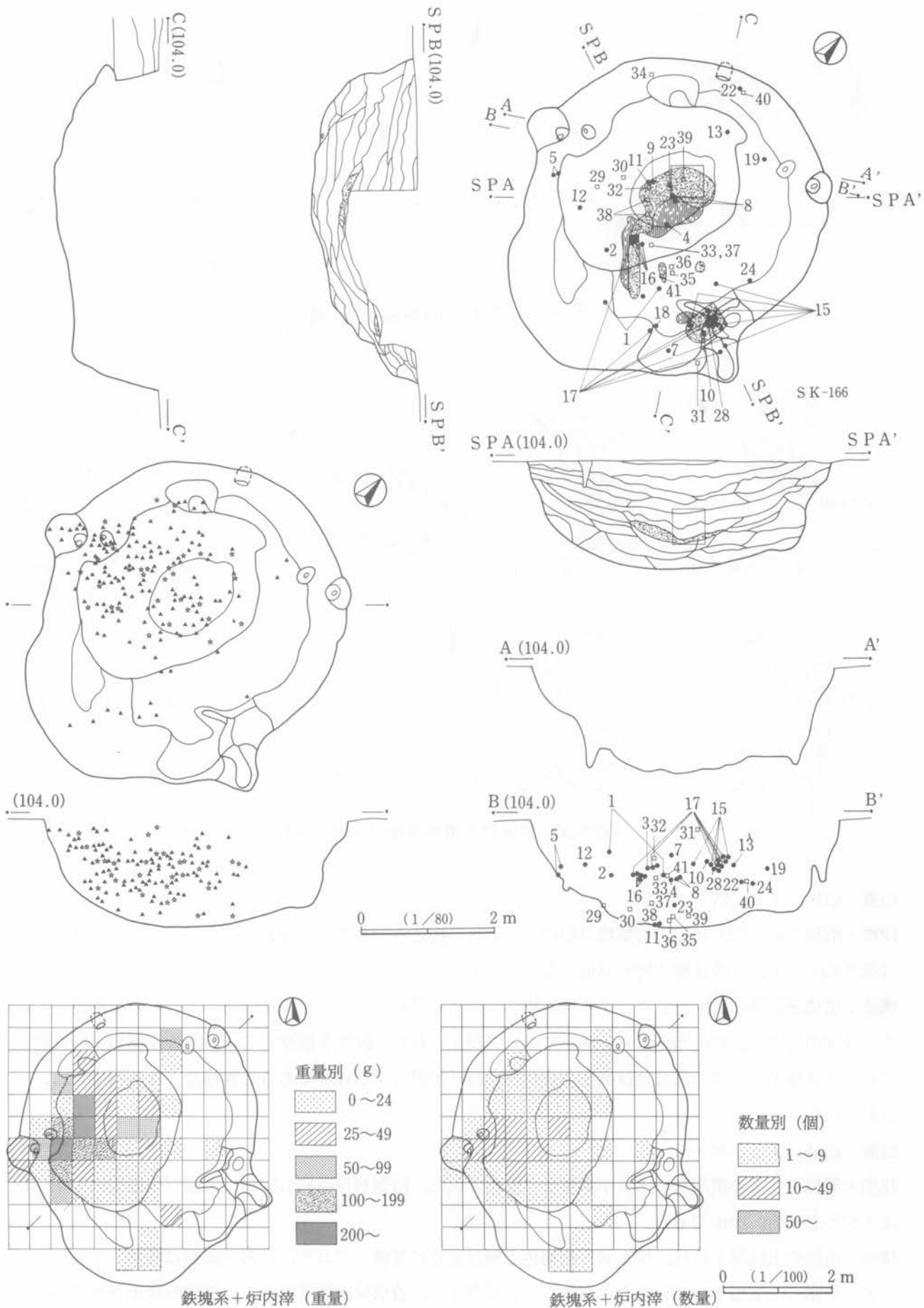
構造：遺構確認時には焼土ブロックや炭化物ブロックが径約0.60mの範囲に分布しているのが確認され、そのほぼ中心に長径約0.30mほどの焼土ブロックが見られた。断面を観察すると、図の左側の上層に焼土ブロックは集中し、他の部分には焼土や炭化物の粒子が混入する程度である。性格などは不明である。

SK-218

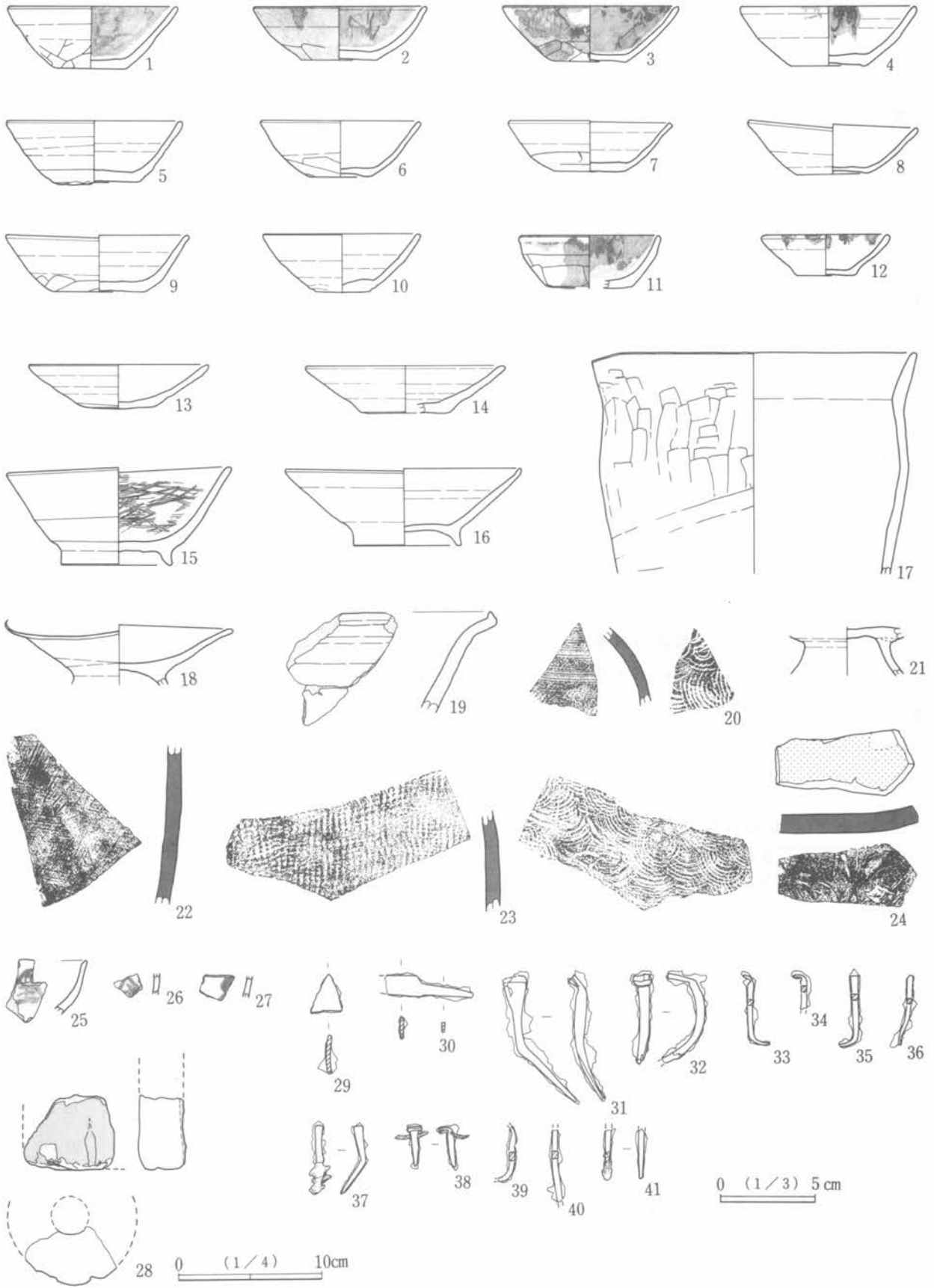
位置：III区。J 5-80・81

規模・形態：2基の楕円形の土坑が隣接して検出された。西側が長径約0.69m、東側が長径約0.52mで、深さがともに約0.20mである。

構造：西側の土坑覆土には、焼土層と暗褐色土層が交互に堆積しており、底面や側面は被熱して硬化している。東側の土坑覆土は、砂を含んだ軟らかい褐色土で、遺構検出面近くからは羽口が検出されている。



第233図 SK-166遺構図



第234図 SK-166出土遺物

これら様子から、鍛冶に関連する施設である可能性がある。

S K - 166 (第233・234図, 図版33)

位置：Ⅲ区。K 6 - 12, 22

規模・形態：長径約5.10m, 短径約4.20mの楕円形で、深さは約1.60mである。底面は皿状で、壁面はやや急に立ち上がる。ピット状の構造が7基見られ、大きく4か所に位置している。その中で西側のものと北東に位置するものが2基近接しており、北西に位置するピットのすぐ東側には、壁面に横方向のピットが確認されている。南側にはピットが見られず、大きく空いており、壁面の傾斜も比較的なだらかである。

構造：焼土層が中央付近と東側ピット付近の2か所で確認されている。中央付近に見られる焼土層は、底面より約0.40m上、遺構確認面から約1.10m下に位置し、厚さは0.15mほどである。赤橙色で、暗褐色土、灰を含んでいる。また、この周辺の土層からも炭化物や焼土粒などが検出されている。東側ピット付近のものは厚さ0.07mほどで、遺構確認面から約0.70m下に位置している。焼土層の下には炭化物層が10cmほど堆積し、この2枚の土層中から土器片が多く出土している。鉄滓が多く検出されており、炉内滓が多いことから、S K - 166は鍛冶に関連する遺構であると推測される。鉄滓の水平分布を見ると、焼土層付近よりもむしろ西側ピット周辺に集中する傾向にある。

遺構の掘込み自体は非常に深い。遺物分の垂直布図を見ると、土器片は焼土層より上部に集中しており、鉄滓も同様のレベルに集中する傾向が見られる。これらのことから底面より0.40mほどのレベルが最終的には作業面であったと推測される。しかし、その一方で鉄製品や鉄滓は、作業面より下にも比較的多く分布することから、検出された作業面より下位にも作業面が形成されていた可能性も考えられよう。

遺物：1～12は土師器杯である。1～3・6・7・9・10は、体部下端に手持ちヘラ削りが施され、5は回転ヘラ削りが施される。11は、上総型杯である。4・8・12は、底部外面、回転糸切り無調整である。

第16表 S K - 166鉄滓集計表

グリッド	区	鉄塊系		合計			
		重量	個数	重量	個数		
K 6 - 11	99			48.9	4	48.9	4
K 6 - 12	46			50.8	1	50.8	1
K 6 - 12	52			42.6	5	42.6	5
K 6 - 12	56			12.5	1	12.5	1
K 6 - 12	61	88.0	1	2.2	1	90.2	2
K 6 - 12	62	0.3	1	25.3	4	25.6	5
K 6 - 12	63	3.9	1	26.4	8	30.3	9
K 6 - 12	64	1.1	1	20.9	5	22.0	6
K 6 - 12	65	3.2	1	2.9	3	6.1	4
K 6 - 12	71			14.5	5	14.5	5
K 6 - 12	72			204.8	8	204.8	8
K 6 - 12	73	17.0	1	29.2	4	46.2	5
K 6 - 12	74			11.6	3	11.6	3
K 6 - 12	75			27.4	6	27.4	6
K 6 - 12	76	15.2	1	4.1	1	19.3	2
K 6 - 12	80	10.0	1	3.9	3	13.9	4
K 6 - 12	81			190.3	15	190.3	15
K 6 - 12	82	10.1	3	297.7	14	307.8	17
K 6 - 12	83	27.5	3	14.3	2	41.8	5
K 6 - 12	84	10.3	2	40.1	8	50.4	10
K 6 - 12	85	4.7	2	50.9	3	55.6	5
K 6 - 12	90			54.9	13	54.9	13
K 6 - 12	91	11.5	2	190.4	17	201.9	19

グリッド	区	鉄塊系		炉内滓		合計	
		重量	個数	重量	個数	重量	個数
K 6 - 12	92			178.2	17	178.2	17
K 6 - 12	93	2.8	1	98.9	14	101.7	15
K 6 - 12	94	2.9	1	3.1	3	6.0	4
K 6 - 12	95			46.2	5	46.2	5
K 6 - 12	96	5.9	1	5.1	1	11.0	2
K 6 - 12	98			19.4	1	19.4	1
K 5 - 21	09			32.3	2	32.3	2
K 5 - 22	00			5.7	2	5.7	2
K 5 - 22	01	3.7	2	123.3	6	127.0	8
K 5 - 22	02	3.6	1	31.5	9	35.1	10
K 5 - 22	03	1.5	1	3.8	2	5.3	3
K 5 - 22	04	6.7	1	8.5	4	15.2	5
K 5 - 22	05			7.0	2	7.0	2
K 5 - 22	11			98.6	2	98.6	2
K 5 - 22	12	5.4	1	4.8	2	10.2	3
K 5 - 22	13			5.9	2	5.9	2
K 5 - 22	14			8.8	1	8.8	1
K 5 - 22	15			1.8	1	1.8	1
K 5 - 22	26			25.2	3	25.2	3
K 5 - 22	35			2.9	2	2.9	2
K 5 - 22	44			22.8	1	22.8	1
K 5 - 22	45			8.2	1	8.2	1
合計		235.3	29	2,108.6	217	2,343.9	246

13・14はロクロ土師器皿である。1～4・11・12は内面に油煙が付着している。

15は黒色処理の施された高台付椀であり、16・18は、足高高台杯である。19は金属器模倣の台付き椀の口縁部であり、21は台部の可能性がある。17は土師器甕である。20・22～24は、須恵器甕の胴部片で、24の内面は平滑となっており、転用硯として使用されている。25～27は墨書土器である。28は鞆羽口である。29～41は銑製品で、29・30は用途不明品である。31～41は鉄釘である。

S I - 12 (第235・236・237・239図, 図版34)

位置：V区。O 6 - 69・79, P 6 - 60・70

規模・形態：長軸3.70m～4.50m, 短軸3.00m～3.80mの不整形の掘り方で、竪穴の主軸方向は北に対して西に大きく振れ、N - 37°～50° - Wである。

覆土：黄褐色土をブロック状に含む暗黄褐色土が主体的に堆積し、多くの鉄滓が含まれ、炭粒と焼土粒が散る。

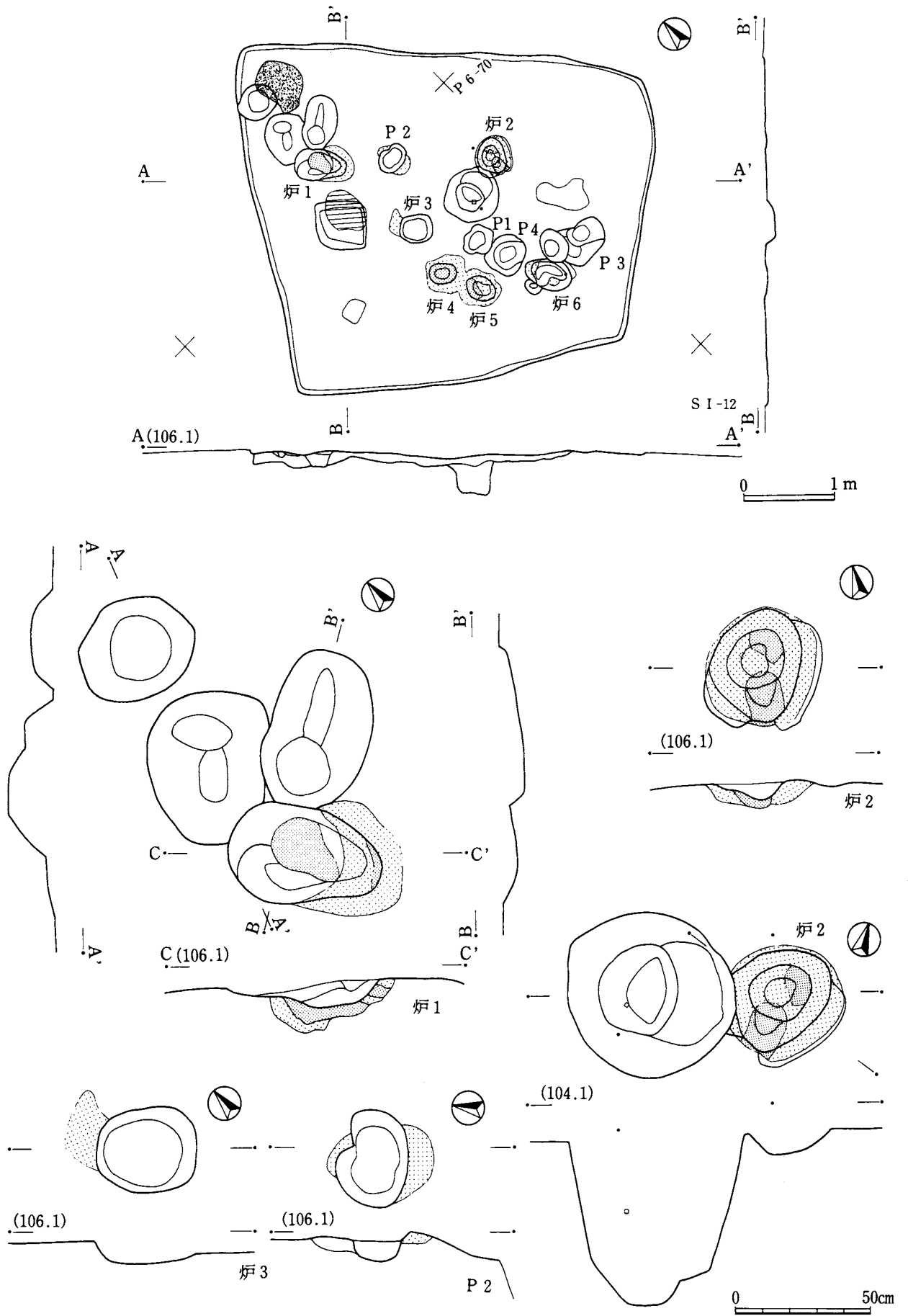
構造：床面には特に硬化面は認められず、鍛冶炉6基とピット9基が発見された。この他北隅付近には径0.40m～0.60mの焼土ブロックが、西北壁の中央付近に径0.35m～0.50mの黄白色砂ブロックが発見された。この黄白色砂ブロックの下からは、深さ0.06m～0.10mの浅い方形の掘込みが検出された。

鍛冶炉：鍛冶炉1は北西壁寄りに位置する。長軸0.55m短軸0.35m深さ0.07mの平面長楕円形の掘り方である。底面は平らで、内面の約1/2が青味がかかった黒(灰)褐色に還元し、南東側周縁は暗赤褐色に酸化している。鍛冶炉2は竪穴中央やや東側に位置する。径0.40m～0.45m深さ0.08mの平面楕円形の掘り方で、底面中央がやや深く落ち込む。内面中央付近が暗青灰褐色に還元し、周縁部は広く暗赤褐色に酸化している。鍛冶炉3は竪穴のほぼ中央に位置する。径0.30m～0.37m深さ0.04m程の平面楕円形の掘り方で、掘り方の北西側に接した床面が、赤褐色に酸化している。人為的に破壊されたためか、明瞭な痕跡を残さない。鍛冶炉4は竪穴の中央よりやや西側に位置する。径0.20m～0.30m深さ0.06mの平面楕円形で丸底の掘り方である。内面全面は暗青灰褐色に還元し、掘り方に接した床面は暗赤褐色に酸化している。鍛冶炉5は鍛冶炉4に接しており、径0.25m～0.35m深さ0.07mの平面楕円形で丸底の掘り方である。内面1/3は暗青灰褐色に還元し、残る内面から接した床面が赤褐色に還元している。また、断面断割りの結果、内面に黄白色粘土の貼付けが認められた。鍛冶炉6は竪穴の南隅付近に位置する。長軸0.50m, 短軸0.30m, 深さ0.10mの平面長楕円形の掘り方で、V字状の掘込みである。周縁部が僅かに暗青灰褐色に還元し、暗赤褐色に酸化している。

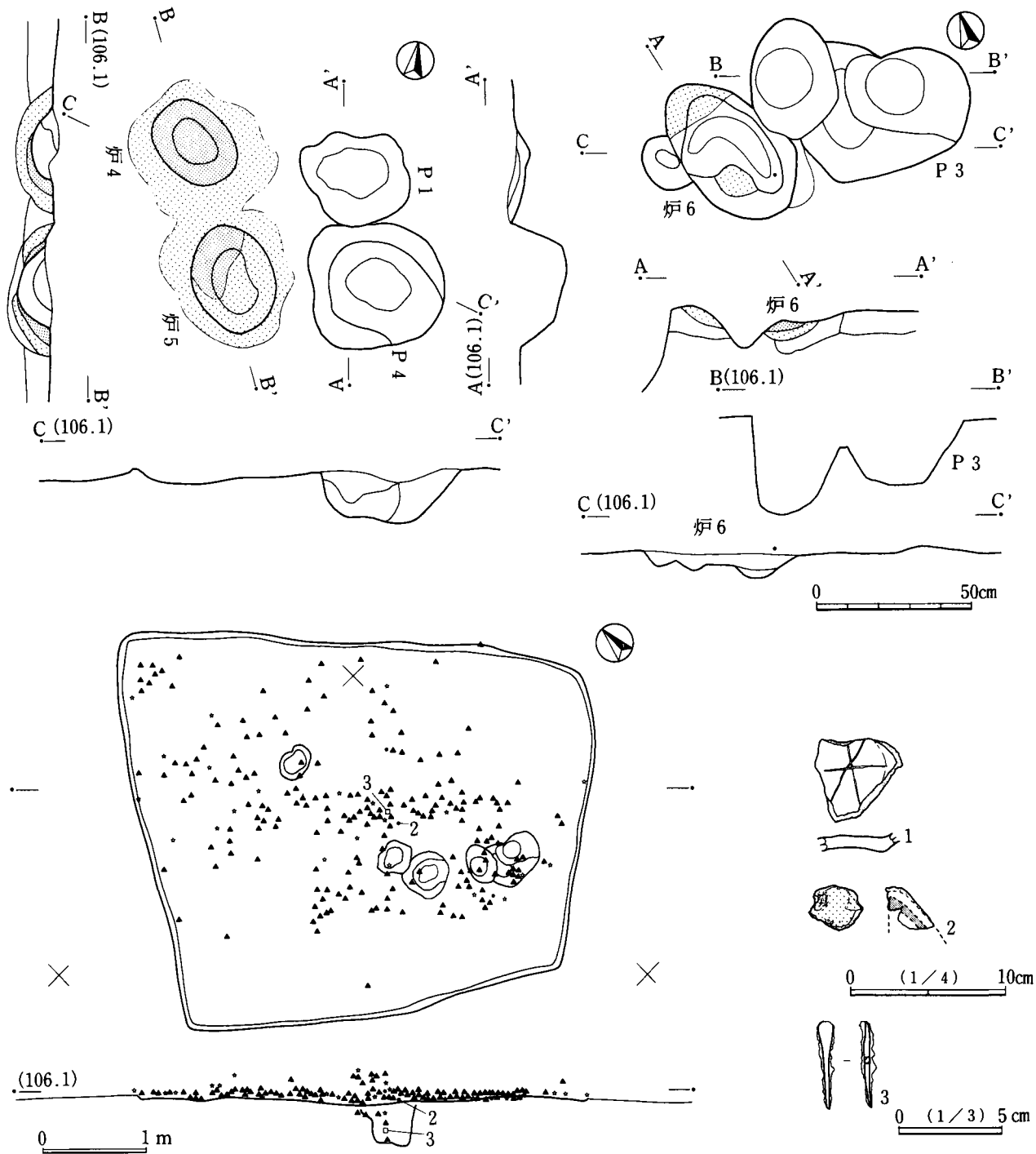
ピット：ピット1は炉5の東に位置し、径0.31m～0.37m深さ0.07mのやや丸味を有した平面楕円形の掘り方である。覆土に黄白色粘土がブロック状に含まれる。ピット2は炉1の南東に位置する。径0.25m～0.35m深さ0.07m程の楕円形の掘り方である。接する床面の一部が暗赤褐色に酸化している。覆土中には鉄滓が集中して発見された。ピット4は炉5の東に位置する。径0.45m深さ0.30m程の掘り方で、覆土上層に黄白色粘土が含まれる。

遺物出土状況：床面直上から覆土中にかけて多くの鉄滓が出土した。

遺物：1が線刻土器、2が羽口片である。この他、羽口は小片が5点出土した。3が鉄釘である。製品はこの1点のみの出土である。



第235图 S I -12遺構図 (1)



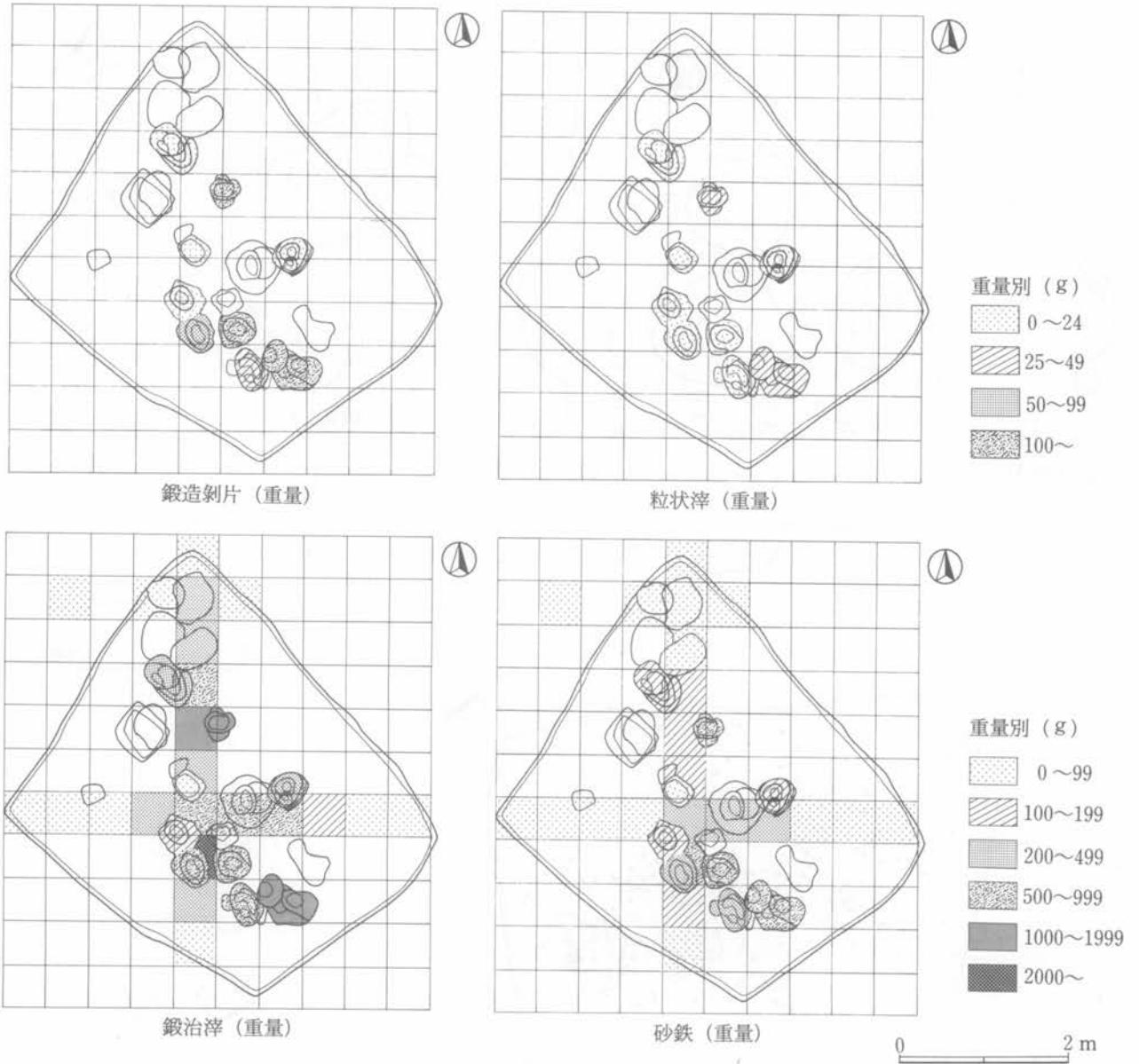
第236図 S I-12遺構図(2)・出土遺物

S I-13 (第238・239図, 図版34)

位置: V区。P 6-50・60・61

規模・形態: 長軸6.15m, 短軸2.00m, 深さ0.30m~0.55mの平面長楕円形の土坑である。北西と南西に段状の掘り方を伴う。南西側約2.00m離れて位置するS I-12とほぼ主軸方向を揃え、ほぼ並立している。

覆土: ロームブロックを含む暗褐色土が主体的に堆積する。炭粒と焼土粒が全体的に含まれている。



第237図 S I-12鉄滓重量分布図

第17表-1 S I-12鉄滓集計表

1 cm以上の遺物

出土位置	鉄塊系遺物 (メタル度あり)		炉内滓 (メタル度なし)				不明		小計		合計	
	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数
炉1	19.7	2	85.2	7	156.6	42			241.8	49	261.5	51
炉2					64.8	22			64.8	22	64.8	22
炉3					1.4	1			1.4	1	1.4	1
炉4			17.6	2	72.4	19	31	4	121	25	121	25
炉5	15.7	5	10.1	2	132.7	56			142.8	58	158.5	63
炉6	4.7	1	422.1	12	233.4	88			655.5	100	660.2	101
pit2	12.1	2	277.2	38	395	78			672.2	116	684.3	118
pit3	37.9	2	264	39	562	121			826	160	863.9	162
pit4	19.6	4	67.7	6	163.6	39			231.3	45	250.9	49
pit5	46.3	8	144.4	25	226.9	75			371.3	100	417.6	108
pit6	6.7	1	39.3	3	73.5	24			112.8	27	119.5	28
pit7	10.7	1	246.4	31	486.6	139			733	170	743.7	171
pit8	5.3	1	138	16	157.3	22			295.3	38	300.6	39
焼土	7.2	1	5.4	1	4.6	4			10	5	17.2	6

第17表-2 S I-12鉄滓集計表

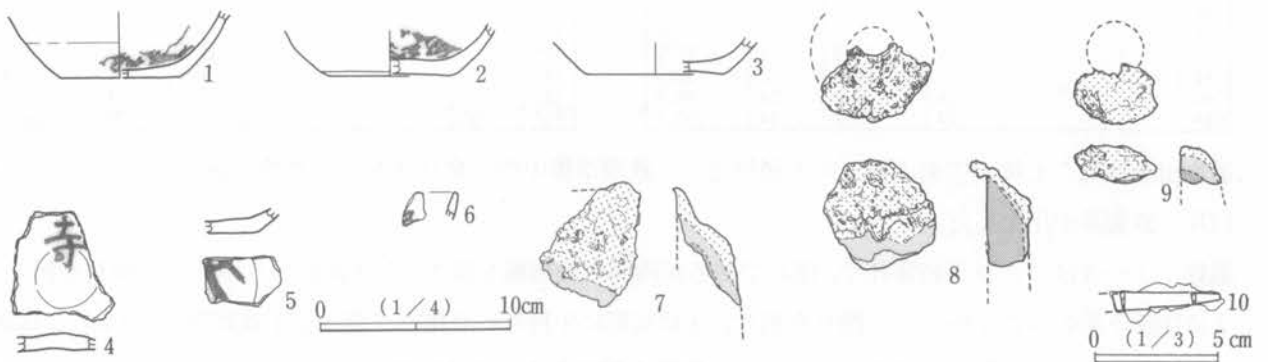
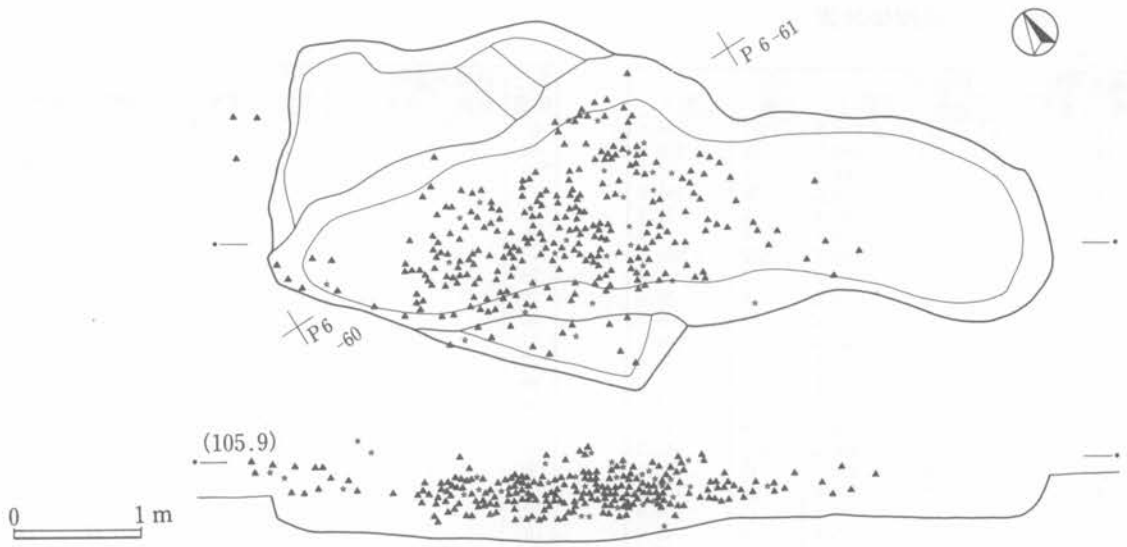
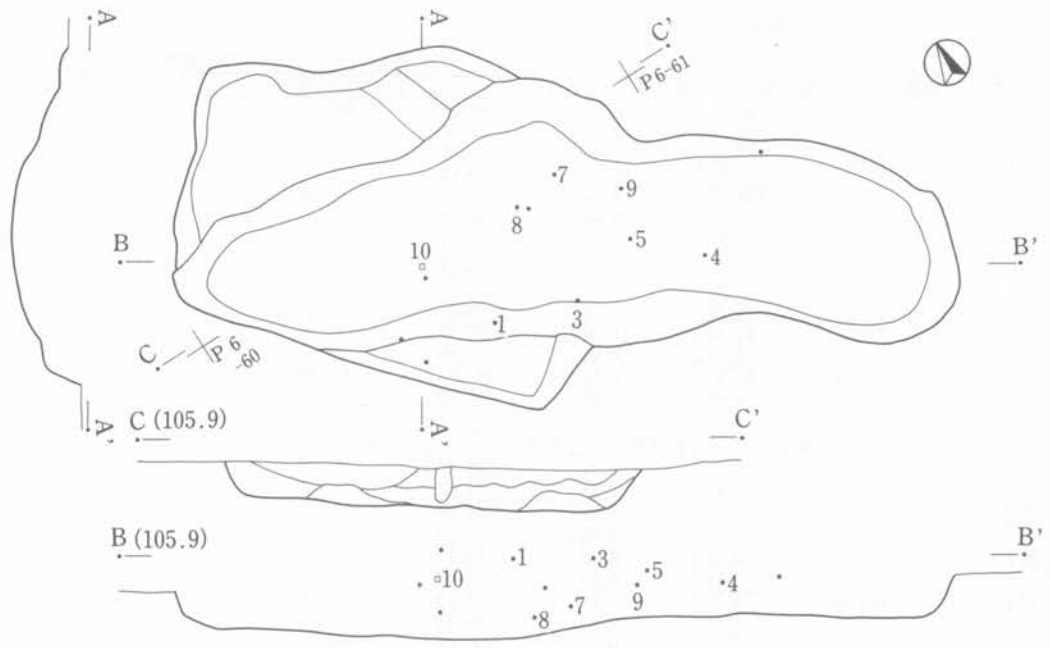
1cm以下の遺物					上段は重量(g)、()内は個数、下段は%		合計重量(g)
	砂鉄	鍛造剝片	粒状滓	残滓	1cm以上の滓		
Pit 2	654.14 37.17	178.25 10.13	28.93 1.64	898.68 51.06	684.30 (118)		1760.00 100.00
Pit 3	685.85 30.57	161.43 7.20	31.55 1.41	1364.68 60.83	863.90 (162)		2243.51 100.00
Pit 4	727.17 46.34	198.20 12.63	10.74 0.68	633.04 40.34	250.90 (49)		1569.15 100.00
Pit 5	195.92 21.83	57.37 6.39	6.41 0.71	637.73 71.06	417.60 (108)		897.43 100.00
Pit 6	69.84 26.99	13.91 5.38	1.97 0.76	173.05 66.87	119.50 (28)		258.77 100.00
Pit 7	309.07 17.55	92.29 5.24	11.38 0.65	1348.29 76.56	743.70 (171)		1761.03 100.00
Pit 8	165.06 24.25	59.35 8.72	8.41 1.24	447.75 65.79	300.60 (39)		680.57 100.00
	砂鉄	鍛造剝片	粒状滓	残滓	1cm以上の滓		合計重量(g)
炉1	123.51 23.52	20.35 3.87	7.27 1.38	374.08 71.22	261.50 (51)		525.21 100.00
炉2	108.25 33.99	16.68 5.24	4.56 1.43	188.98 59.34	64.80 (22)		318.47 100.00
炉3	52.53 72.88	4.40 6.10	0.38 0.53	14.77 20.49	1.40 (1)		72.08 100.00
炉4	114.20 37.70	6.02 1.99	3.64 1.20	179.03 59.11	121.00 (25)		302.89 100.00
炉5	275.64 28.07	55.06 5.61	10.22 1.04	641.00 65.28	158.50 (63)		981.92 100.00
炉6	201.28 26.59	32.17 4.25	14.91 1.97	508.59 67.19	660.20 (101)		756.95 100.00

第17表-3 S I-12鉄滓集計表

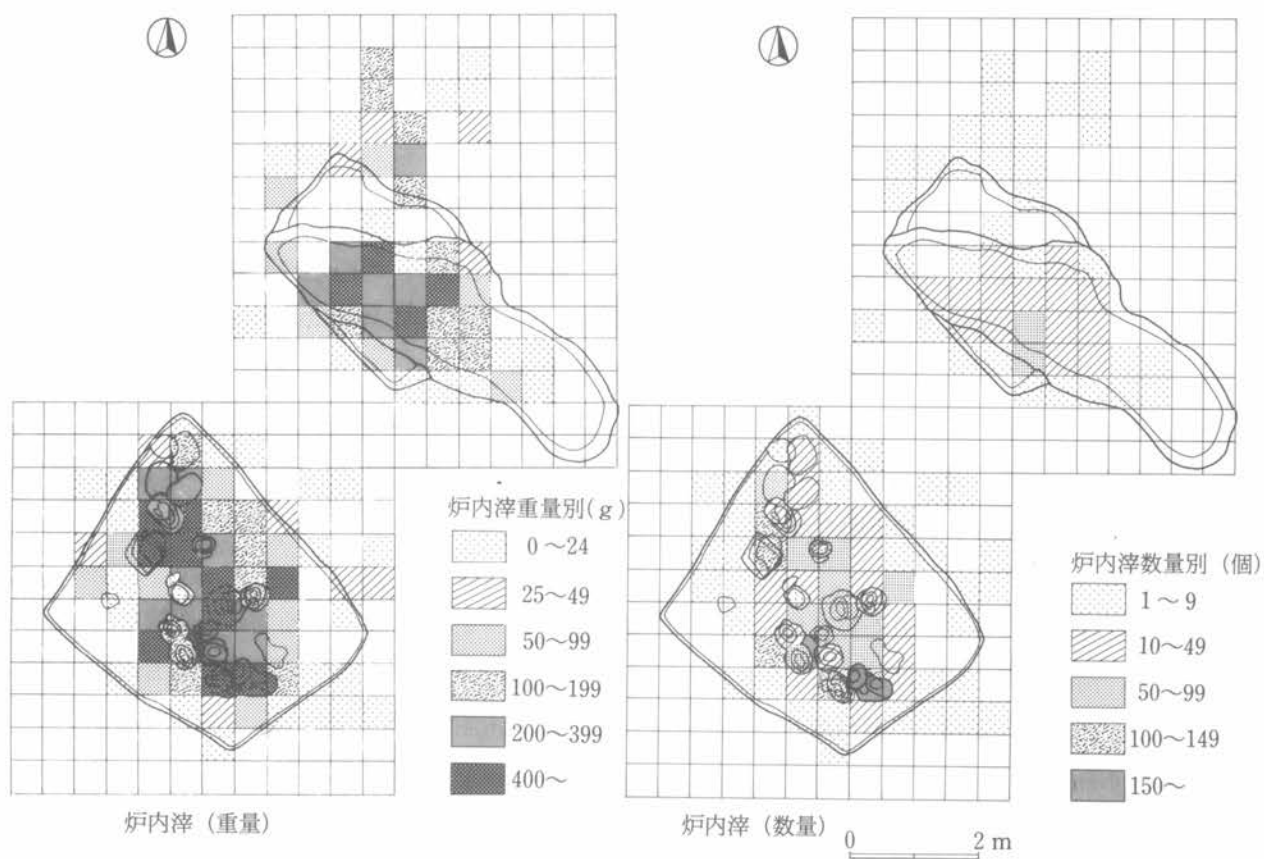
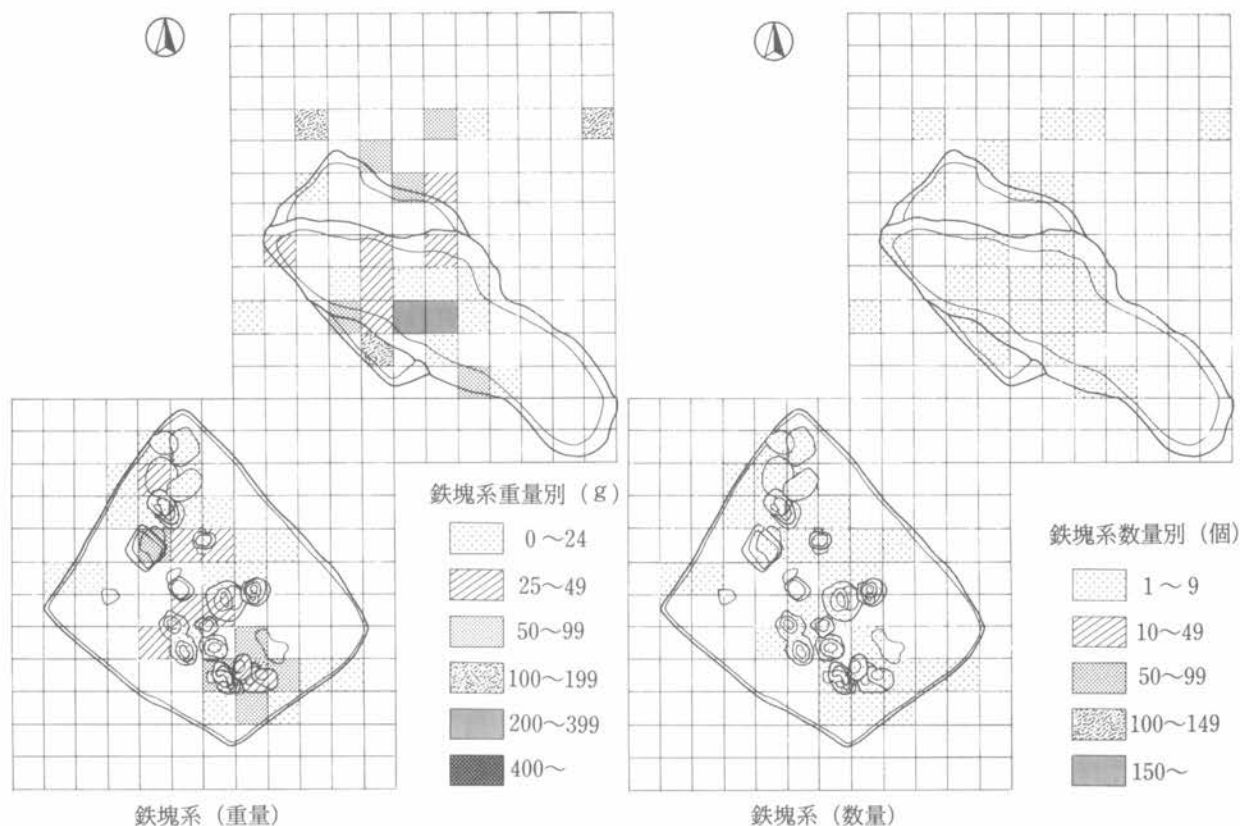
区画内サンプル													
出土位置	鉄塊系遺物		炉内滓		合計		出土位置	鉄塊系遺物		炉内滓		合計	
	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)		個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)
6	43	284.9	1284	6,690.9	1327	6,975.8	67	2	6.8	75	845.0	77	851.8
11	28	367.2	1318	7,880.9	1346	8,248.0	68	1	1.6	27	163.0	28	164.6
17	1	3.1	1	47.0	2	50.1	69			63	634.9	63	634.9
18	2	21.5	36	139.5	38	161.0	71			8	38.5	8	38.5
19			3	21.4	3	21.4	72			1	30.3	1	30.3
20			1	5.4	1	5.4	76			2	12.3	2	12.3
21	33	473.8	544	3,430.7	577	3,904.5	77			36	233.9	36	233.9
27			1	1.7	1	1.7	78	3	47.7	67	374.0	70	421.7
28	1	7.4	7	23.6	8	31.0	79	1	25.0	75	631.7	76	656.7
29	2	27.5	62	352.4	64	379.9	80			77	338.8	77	338.8
30	1	4.7	44	243.3	45	248.0	81			14	63.3	14	63.3
31			9	50.6	9	50.6	73			1	5.3	1	5.3
34			1	1.8	1	1.8	89	4	30.9	126	518.2	130	549.1
35			1	2.0	1	2.0	90	3	22.2	188	891.6	191	913.8
40	1	1.7	8	15.9	9	17.6	91			53	291.7	53	291.7
41	3	16.7	108	526.5	111	543.2	92	2	84.9	85	374.6	87	459.5
42	3	8.8	46	495.7	49	504.5	93			19	68.9	19	68.9
43	1	51.0	19	122.8	20	173.8	100			1	6.8	1	6.8
44			15	109.9	15	109.9	101			2	55.5	2	55.5
45			4	45.0	4	45.0	102			42	143.8	42	143.8
51			7	27.9	7	27.9	103	5		111	740.6	116	740.6
52			5	84.9	5	84.9	104	3		137	897.1	140	897.1
53	3	55.7	108	502.4	111	558.1	105	2		47	186.8	49	186.8
54	3	32.9	97	636.8	100	669.7	106	1		4	10.4	5	10.4
55	2	27.4	69	278.6	71	306.0	107	3		5	11.3	8	11.3
56	1	3.9	25	122.3	26	126.1	114			1	2.2	1	2.2
57	1	19.8	9	98.6	10	118.4	115	1		9	29.7	10	29.7
58			1	4.0	1	4.0	116	2		16	69.4	18	69.4
60			1	12.9	1	12.9	117	1		2	11.5	3	11.5
62	1	3.8	1	12.9	1	3.8	118			1	1.2	1	1.2
63	1	4.7	1	92.9	2	97.6	119			1	17.2	1	17.2
64			7	22.5	7	22.5	120			1	1.4	1	1.4
65			24	86.6	24	86.6	127			1	7.3	1	7.3
66			44	332.1	44	332.1	合計	165	1,635.4	5,208	30,217.5	5,373	31,852.9

遺物出土状況：土坑の中央の覆土中上層付近から鉄滓が集中的に発見された。鉄滓に混じり、土器片や羽口片、鉄製品が出土した。

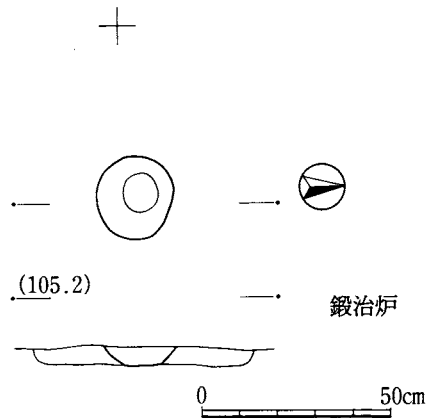
遺物：1～3はロクロ土師器杯で、僅かであるが内面に油煙痕を残す。1は底部のみ回転ヘラ削りを施し、2は体部下端のみに手持ちヘラ削りを施し、3は底部に手持ちヘラ削りを施す。1は底径(6.2)cm、2は底径6.2cm、3は底径(7.2)cmである。4～6は墨書土器である。4は底部内面に「寺」とある。7～9は羽



第238図 S I-13遺構図・出土遺物



第239図 S I-12・S I-13鉄滓重量分布図



第240図 S I-56遺構図

口片で、この他、7点の小片が出土した。10は刀子で、この他鉄釘が4点出土している。

S I-56 (第240図, 図版35)

位置：IV区。M5-97に所在し、SB-5と重複する。

規模・形態：径0.20m、深さ0.06mのピットが検出された。鉄滓を含む黒色土が堆積していた。赤色変化は認められなかったが、底面を中心に立上がり部分も被熱による痕跡が認められた。

遺物：検出面とともに、炉中からも鉄滓がまとまって発見された。

5 井戸・火葬墓・方形周溝状遺構・溝

SD-1 (第241図)

南北より東へ振れた、S-30-Eに伸びる。検出された長さは約4.20m、幅約0.38m~0.40m、深さ0.08m~0.10mほどである。北東端住居跡を横切ったところで止まっており、南西端は消滅している。時期、性格は不明だが、平安時代の住居跡によって切られていることから、平安時代以前のものであると考えられる。

SD-2 (第151図)

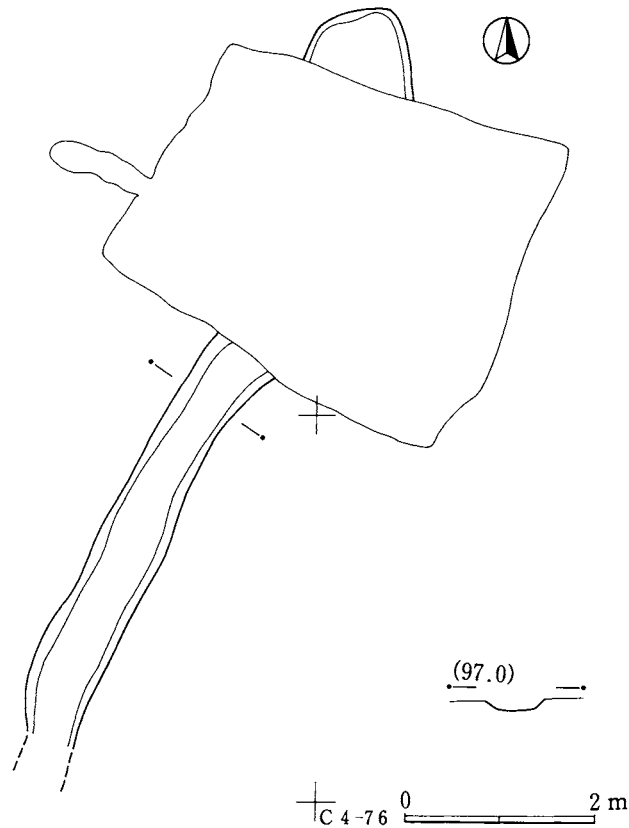
II区の西端に位置する溝状遺構で、トレンチによる確認調査により検出された。トレンチ内の部分的な調査のため、規模や性格などは不明だが、南北方向に延びているものと考えられる。幅は約4.00mである。

SD-3 (第242図)

ほぼ南北に伸びる。検出された長さは約35mで、幅が約1.7m~0.6mである。断面は不明瞭な段を持つ逆台形状で、南側が深く、中ほどで浅くなり、北側で再び深くなる。段状の部分はD-D'で顕著に観察されているが、土層断面の観察から、何度かの掘直しがあったことが推測され、段状部分の成因となっているものと考えられる。

SC-1 (第243図)

長径2.90m~3.10m、短径2.60mの方形に巡った溝状遺構で、方形の主軸はほぼ南北を示している。北側辺の西よりの部分、南辺の両端が途切れている。溝は幅約0.25m~0.30m、深さ約0.07mである。奈良



第241図 SD-1 遺構図

平安時代の方形周溝状遺構であると考えられる。

SK-41 (第243図, 図版35)

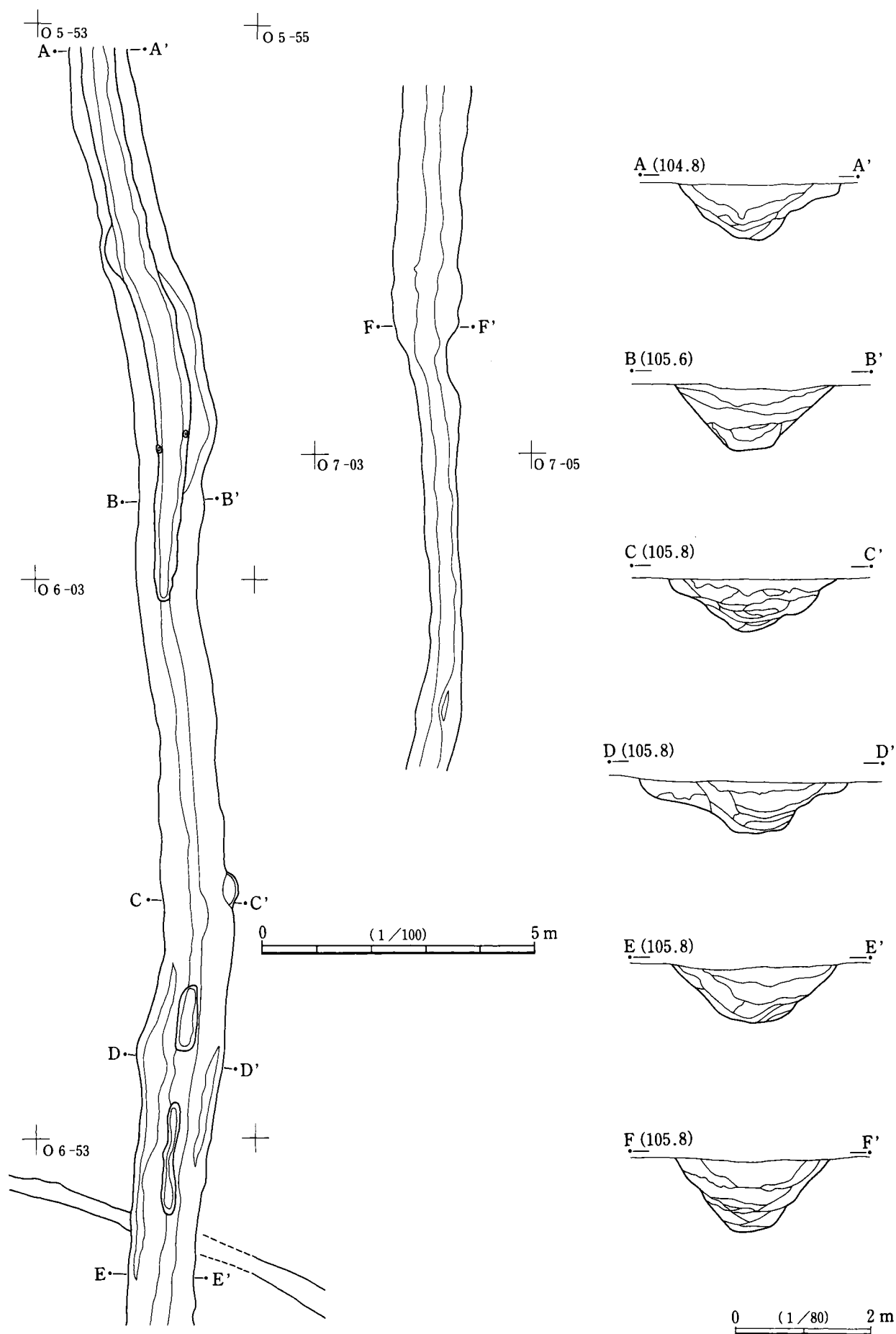
IV区端から検出された、長径約2.40m、深さ約0.10mの不整楕円形の堀方である。浅いピットが5基検出されている。遺物は縄文時代早期の稻荷台式土器、奈良・平安時代の土師器甕破片がまとめて検出されている。形状や規模から縄文時代早期の住居の可能性もあるが、縄文土器が遺構外に分布を広げるのに対し、土師器の分布が遺構中央に集中し、接合関係にあることから、奈良平安時代の土坑である可能性が高い。

SZ-1 (第244図, 図版35, 85)

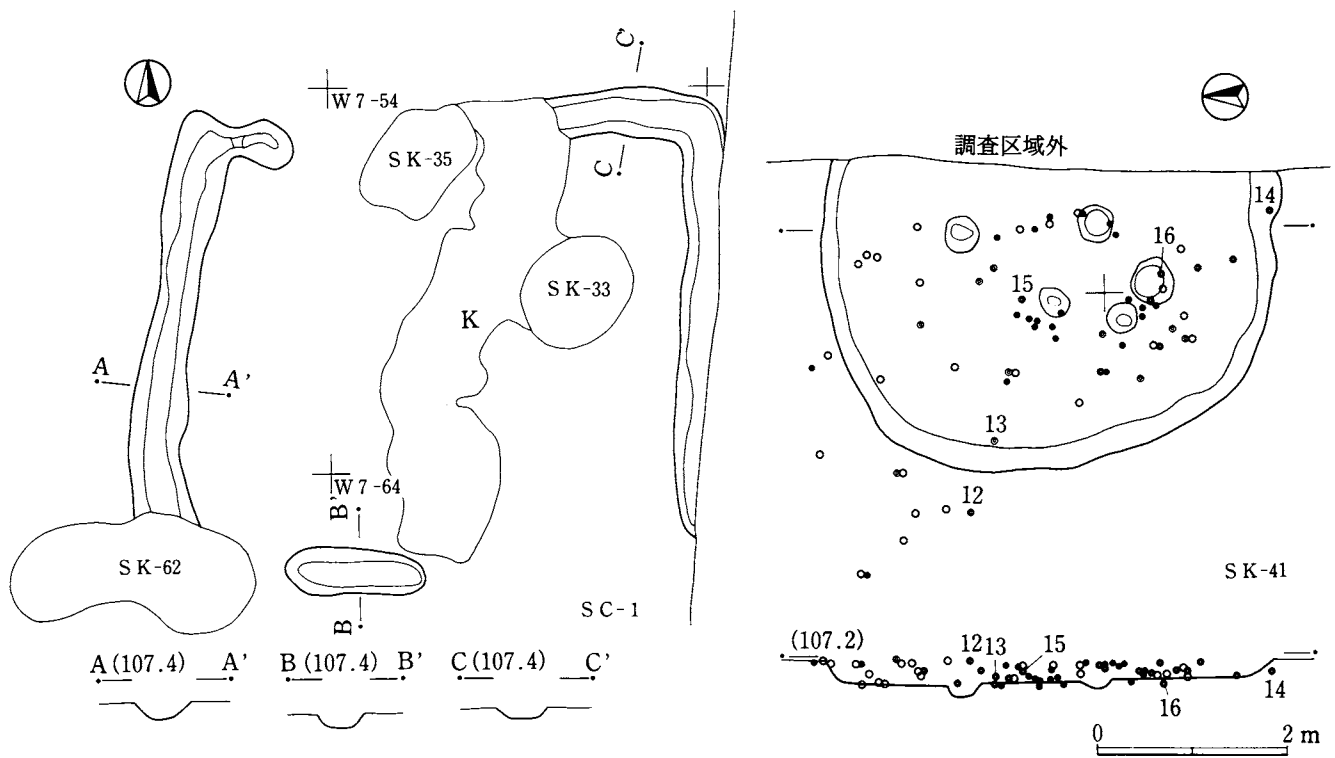
位置：VI区。U7-24

規模・形態：不整楕円形のプランの土坑で、長径が約0.30m、短径が約0.27m、深さは確認面から0.21mであったが、実際は最低0.30m以上はあったものと考えられる。断面は箱形である。

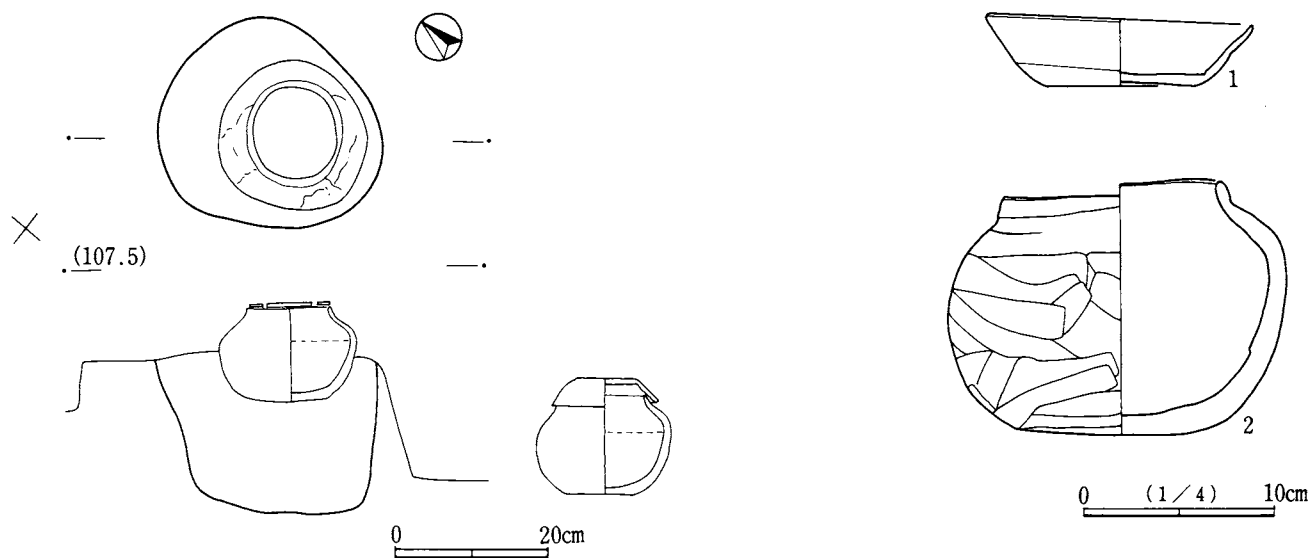
遺物：1・2は、土坑底面から浮いた状態で検出された。1は杯である。2は壺で、外面には手持ちヘラ削りが施されており、骨蔵器であると考えられる。壺に杯を被せた状態で検出されており、火葬墓であると推測される。



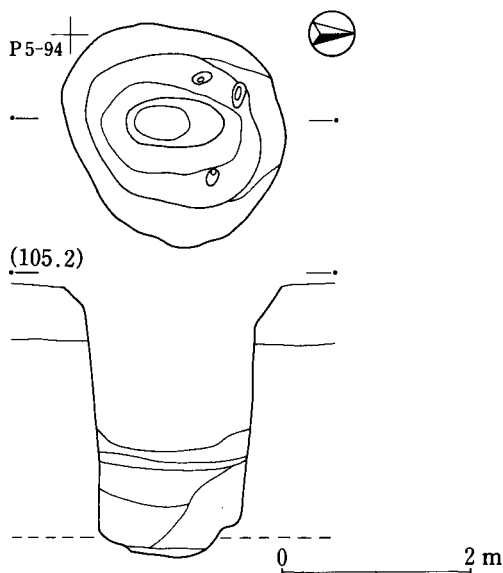
第242図 SD-3遺構図



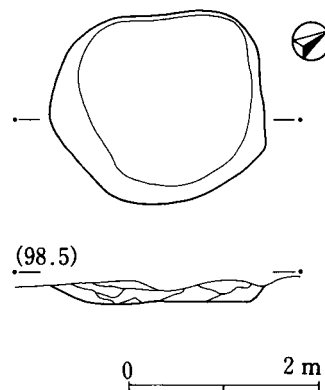
第243図 SC-1・SK-41遺構図



第244図 SZ-1遺構図・出土遺物



第245図 SE-1 遺構図



第246図 SC-2 遺構図

SE-1 (第245図, 図版35)

南北にやや長い楕円形のプランで、筒状の掘込みである。長径2.40m、短径2.20m、深さ2.80mで、底面の中央は若干窪んでいる。底面に3つの小穴が確認される。覆土の様子から、自然堆積であると考えられる。このような形態であることから、井戸であると推測される。

6 土坑・炭窯

I区

SC-2 (第246図)

位置：3C-92, 4C-02

規模・形態：長径2.20m、短径2.00m、深さ約0.20mの浅い掘込みである。

遺物：土師器杯、甕の小破片が出土している。

III区

SK-146 炭窯 (第247図)

位置：L5-85・95

規模・形態：平面ほぼ円形で径1.30m~1.50mを測る。深さは0.10m~0.15mで、底面はほぼ平坦である。

覆土：炭片を多く含む暗褐色土を主体とする。全体に炭片を含み、しまっている。

SK-147 炭窯 (第247図)

位置：L5-71

規模・形態：平面ほぼ方形で一辺0.90mを測る。深さは0.07mで、断面皿状を呈し、立上がりの壁部分に被熱による赤色変化が明瞭に認められる。

覆土：径1cm程の炭化物を多量に含む黒色土を主体とする。

S K-148 炭窯 (第247図, 図版35)

位置: L 6-52・53

規模・形態: 平面楕円形で径1.90mを測る。深さは0.20mで、底面はほぼ平坦である。

覆土: 上層は炭片を多く含む暗褐色土を主体とし、下層は黄褐色土ブロックを多く含む暗褐色土を主体とする。

遺物: 赤化した完形礫・破碎礫7点が出土した。

S K-150 炭窯 (第247図, 図版35)

位置: J 6-04・05

規模・形態: 平面楕円形で径1.80m~1.90mを測る。深さ0.10m~0.15mで、底面はやや凹凸を有す。

覆土: 上層は炭化物を含む暗褐色土で、下層は暗黄褐色土である。上層には僅かに焼土粒が含まれる。

遺物: 土師器杯・甕の小片が出土した。

S K-152 炭窯 (第247図, 図版35)

位置: K 6-89・99, L 6-80・90

規模・形態: 平面楕円形で径1.60m~1.70mを測る。深さ0.12m~0.15mである。底面はほぼ平坦である。

径0.26m~0.50mの平面楕円形で、深さ0.58mのピットが北側立上がり部分で検出された。

覆土: 炭化物を多量に含む黒色土を主体とする。

S K-159 土坑 (第247図, 図版35)

位置: K 6-35

規模・形態: 平面は長軸1.60m, 短軸1.16mの不整形で、深さ0.15m~0.20mである。底面は丸底状を呈す。北西隅部分は一辺0.60mにわたって一段深く掘り込まれる。

覆土: 黒褐色土と暗褐色土、褐色土がレンズ状に堆積する。

S K-160 炭窯 (第247図, 図版35)

位置: L 6-15・16

規模・形態: 平面方形で一辺1.60mを測る。深さ0.15mで、底面は平坦である。北西隅にピット状の攪乱を受ける。

覆土: 炭化物を多量に含む黒色土を主体とする。しまりが弱い。

S K-161 ピット (第247図, 図版35)

位置: L 6-25

規模・形態: 平面ほぼ円形で径0.55m~0.60m, 深さ0.20mを測る。

覆土: 上層は炭化物を多量に含む黒色土で、隣接するS K-160に類似する。

S K-168 土坑 (第247図, 図版36)

位置: J 6-28・38

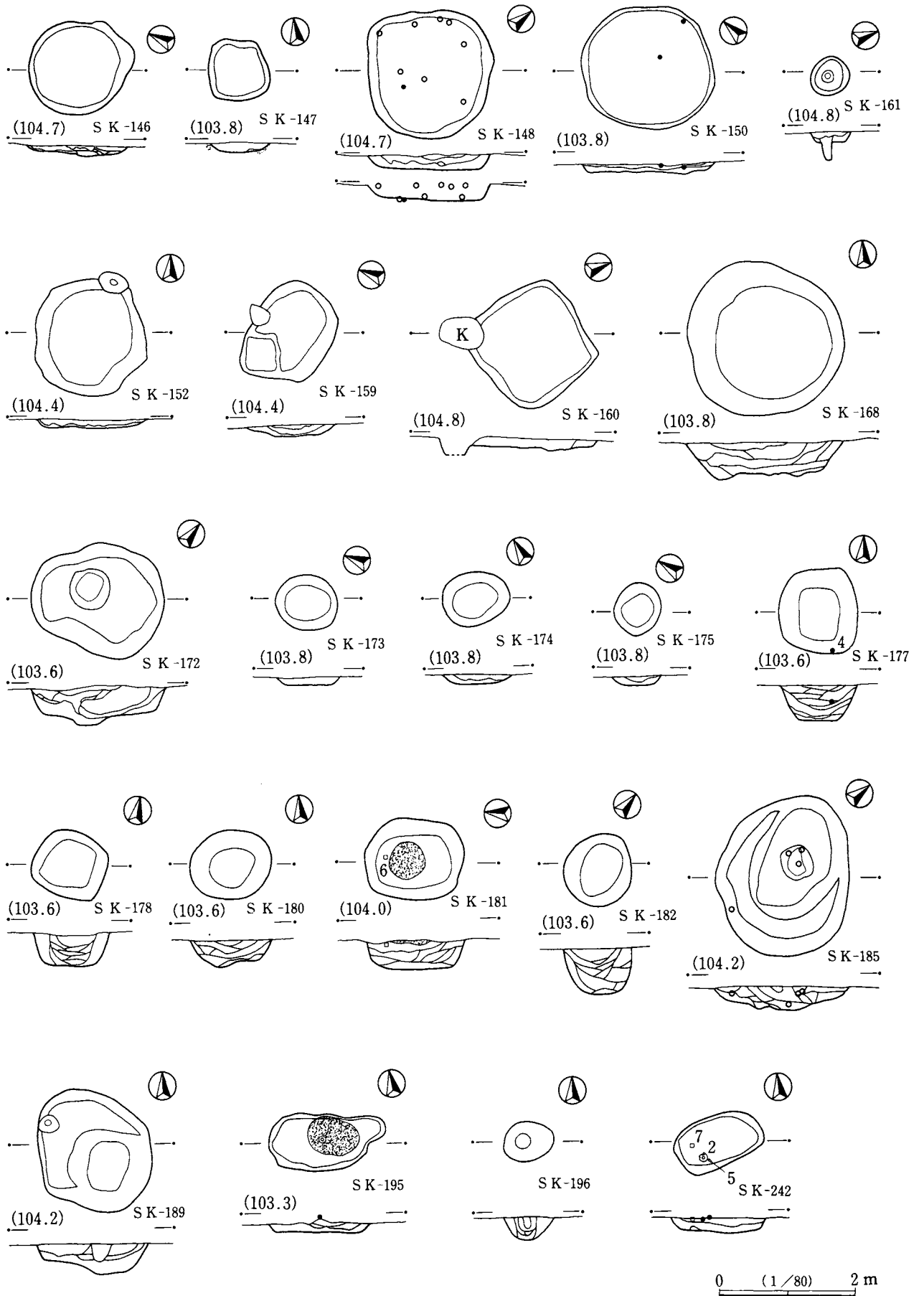
規模・形態: 平面円形で径2.20mを測る。深さ0.44m~0.55mで、底面はやや凹凸を有す。

覆土: 暗褐色土と褐色土がレンズ状傾向に堆積する。

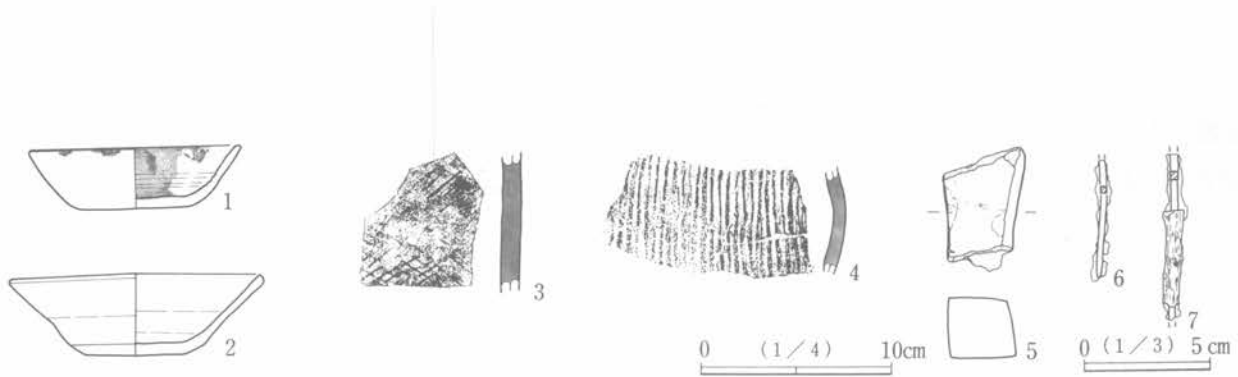
遺物: 土師器杯と須恵器甕(第248図3)の小片, そして赤化した破碎礫1点が出土した。

S K-172 土坑 (第247・248図, 図版36)

位置: J 6-34・35



第247図 III区奈良・平安時代土坑遺構図



第248図 III区奈良・平安時代土坑出土遺物

規模・形態：長軸1.95m，短軸1.10m～1.50mの平面長楕円形で，深さ0.38m～0.48mである。底面中央に径0.58m，深さ0.04m程の浅い落込みを有す。

覆土：上層は焼土粒・焼土ブロックを多量に含む暗褐色土を主体とし，下層は黒色砂質土を含む暗褐色土を主体とする。サンプル土中からは炭化物は若干認められたが鉄滓や多量の砂鉄などは検出されなかった。

遺物：油煙が付着した土師器杯（第248図1）と甕の小片，そして赤化した完形礫・破碎礫3点，礫石斧1点（第112図8）が出土した。

SK-173 炭窯（第247図）

位置：J 5-76

規模・形態：平面楕円形で径0.80m～0.90mを測る。深さ0.10m～0.12mで，底面はほぼ平坦である。

覆土：炭化物を多量に含む黒褐色土を主体とし，ほぼ一様である。

SK-174 炭窯（第247図，図版36）

位置：J 5-77・87

規模・形態：平面楕円形で径0.80m～1.00mを測る。深さ0.15mで，やや丸底状である。

覆土：炭化物を多量に含む黒褐色土を主体とする。

遺物：土師器杯の小片が出土した。

SK-175 炭窯（第247図，図版36）

位置：J 5-87

規模・形態：平面楕円形で径0.65m～0.75mを測る。深さ0.15mで，やや丸底状である。

覆土：炭化物を含む暗褐色土を主体とし，特に上層で炭化物は多量である。

SK-177 土坑（第247図，図版36）

位置：J 5-86・87

規模・形態：平面ほぼ方形で，一辺1.20mを測る。深さ0.50mで，断面箱形で，底面はほぼ平坦である。

覆土：暗褐色土と黄褐色土，黒色土がレンズ状に堆積する。下層ではロームブロックを含み，しまりが強い。

遺物：須恵器甕（第248図4）が出土した。

SK-178 土坑（第247図，図版36）

位置：J 5-88・98

規模・形態：平面隅丸方形で，一辺0.95m～1.05mを測る。深さ0.45mで，断面箱形で，底面はほぼ平坦である。

覆土：暗褐色土と黒褐色土，黄褐色土がレンズ状傾向に堆積する。

SK-180 土坑（第247図，図版36）

位置：J 5-86

規模・形態：平面楕円形で径1.00m～1.20mを測る。深さ0.30m～0.40mで、やや凹凸を有した丸底である。

覆土：暗褐色土と褐色土、黒褐色土、黄褐色土がレンズ状傾向に堆積する。

SK-181 土坑（第247図，図版36）

位置：K 5-63

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.50m，短軸1.15mを測る。深さ0.45mで、底面はほぼ平坦である。

覆土：ロームブロックを多く含む暗褐色土を主体に堆積する。ただし上層では焼土や灰白色土，炭化物を含む土層がまとまって認められる。

遺物：須恵器甕の小片と釘（第248図36）が出土した。

SK-182 土坑（第247図，図版36）

位置：J 5-77・78

規模・形態：平面楕円形で径1.00m～1.10mを測る。深さ0.65mで、底面はほぼ平坦である。

覆土：暗褐色土と黒褐色土，褐色土，黄褐色土がレンズ状に堆積する。ただし上層で砂質土が，下層でロームブロックが多く含まれる。

SK-185 炭窯（第247図，図版37）

位置：K 5-79

規模・形態：平面楕円形で径1.80m～2.40mを測る。深さ0.37mで、底面はやや凹凸を有した丸底である。

覆土：下層は被熱された暗褐色土が堆積し，上層は炭片を含む焼土層が主体的に堆積する。

遺物：赤化した破碎礫8点，礫石斧1点（第112図9）が出土した。

SK-189 土坑（第247図，図版37）

位置：K 6-88

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.28m，短軸0.70mを測る。深さ0.30mで、やや凹凸を有した丸底である。

覆土：暗褐色土と黒色土，褐色土がレンズ状傾向に堆積する。

SK-195 土師器焼成土坑（第247図，図版37）

位置：J 5-15・25

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.76m，短軸0.82mを測る。深さ0.10m～0.14mで、底面はほぼ平坦である。

覆土：上層で焼土層と炭化物と焼土粒を多く含む黒色土層が堆積する。底面付近は炭化物を含む褐色土が堆積する。

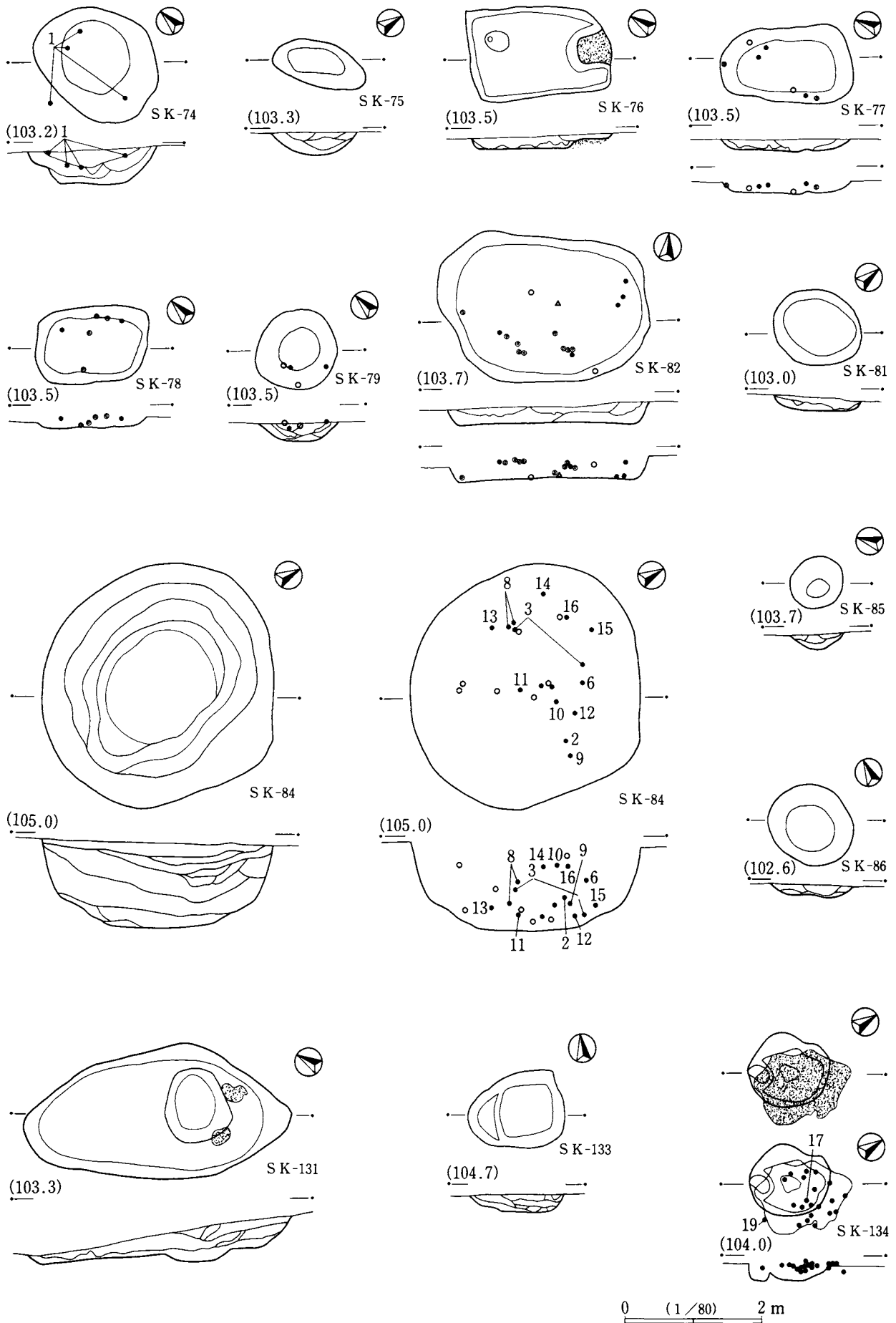
遺物：土師器杯片が出土している。

SK-196 柱穴（第247図，図版37）

位置：J 5-15・25

規模・形態：平面楕円形で径0.60m～0.75mを測る。深さ0.35mで、やや丸底状である。

覆土：山砂を含む褐色土を主体に堆積し，全体にしまりが弱い。柱穴の埋土層があり，柱が抜き取られた柱穴である。



第249图 IV区奈良・平安時代土坑遺構図(1)

S K-242 土坑 (第247図, 図版37)

位置: J 6-07

規模・形態: 平面隅丸方形で, 長軸1.28m, 短軸0.75mを測る。断面箱形で, 底面はほぼ平坦である。

覆土: 褐色土と暗褐色土が堆積する。上層では焼土粒と炭化物が認められる。

遺物: 土師器杯と砥石, 釘 (第248図7) が出土した。

(3)IV区

S K-74 炭窯 (第249図, 図版37, 85)

位置: M 4-17・18

規模・形態: 平面楕円形で, 径1.50m~1.90mを測る。深さ0.50mで, 底面はほぼ平坦である。

覆土: 炭片を含む褐色土が主体である。特に上層で炭化物が多量である。

遺物: 土師器脚付き火舎 (第251図1), 破碎礫1点が出土した。

S K-75 炭窯 (第249図)

位置: M 4-27・28

規模・形態: 平面長楕円形で長軸1.40m, 短軸0.62mを測る。深さは0.32mで, 丸底である。

覆土: 炭片を含む褐色土が主体である。掘り方付近より, 覆土の中心付近から多量の炭片が堆積する。

S K-76 炭窯 (第249図, 図版37)

位置: M 4-28・29・38・39

規模・形態: 平面ほぼ方形で長軸2.10m, 短軸1.30mを測る。深さ0.15mで, 底面はほぼ平坦である。南東辺の掘り方が一部浅く, その浅い段で被熱痕跡が認められる。また, 北東部分で, 径0.30m~0.35m, 深さ0.45mのピットが掘り込まれる。

覆土: 炭辺を多量に含む暗褐色土を主体とする。

S K-77 炭窯 (第249図)

位置: N 4-21

規模・形態: 平面長楕円形で長軸1.96m, 短軸1.10mを測る。深さ0.15mで, 底面はほぼ平坦である。

覆土: 焼土ブロックを含む暗褐色土と, 炭片を多く含む黒褐色土が主体的に堆積する。

遺物: 土師器杯と須恵器甕の小片, 赤化した破碎礫2点が出土した。

S K-78 土坑 (第249図, 図版38)

位置: N 4-10・20

規模・形態: 平面隅丸方形で長軸1.60m, 短軸1.10mを測る。深さ0.10mで, 底面はほぼ平坦である。

遺物: 土師器杯の小片が出土した。

S K-79 炭窯 (第249図, 図版38)

位置: N 4-10

規模・形態: 平面楕円形で径1.12m~1.24mを測る。深さ0.28mで, 底面はほぼ平坦である。

覆土: 炭片や焼土粒, ロームブロックを含む暗褐色土等がレンズ状に堆積する。

遺物: 赤化した完形礫・破碎礫2点が出土した。

S K-81 炭窯 (第249図)

位置：N 4 - 01

規模・形態：平面楕円形で径1.10m～1.30mを測る。深さ0.20mで、底面はほぼ平坦である。

覆土：炭片と焼土を含む暗褐色土が主体的に堆積する。

S K - 82 炭窯（第249図）

位置：N 4 - 41

規模・形態：平面隅丸方形で長軸3.16m，短軸2.10mを測る。深さ0.30mで底面はほぼ平坦である。

覆土：炭片と焼土を含む褐色土が主体的に堆積する。

遺物：土師器杯の小片と赤化した破碎礫2点が出土した。

S K - 84 土坑（第249図，図版38，85）

位置：N 5 - 70

規模・形態：平面楕円形で径3.50m～3.60mを測る。深さ1.22mで、やや丸底状を呈する。

覆土：炭片と焼土を含む黒褐色土と暗褐色土，褐色土がレンズ状堆積する。南側立上がり部分で炭片が集中する土層がある。また，下層から南側壁付近にかけての広い土層範囲で黄白砂の混入が認められる。

遺物：高台付鉢，墨書土器（第251図9），転用硯，釘（第251図21），鉄滓6点56.3g，赤化した完形礫・破碎礫49点

S K - 85 炭窯（第249図，図版38）

位置：M 4 - 38・48

規模・形態：平面楕円形で径0.75m～0.85mを測る。深さ0.20mで、丸底である。

覆土：炭片を含む暗褐色土が主体的に堆積する。

S K - 86 炭窯（第249図，図版38）

位置：N 4 - 02・03

規模・形態：平面楕円形で径1.15m～1.30mを測る。深さ0.12m～0.15mで、底面中央がやや浅い。

覆土：炭片と焼土を含む黒褐色土と暗褐色土が主体的に堆積する。

S K - 131 炭窯（第249図，図版38）

位置：M 5 - 41・51

規模・形態：平面長楕円形で長軸3.90m，短軸1.90m，深さ0.45mを測る。底面に平面楕円形の径0.90m～1.10m，深さ0.20mの掘り方を有す。その浅い掘り方に接する南側底面で被熱痕跡が認められる。

覆土：炭片を多量に含む黒色土が主体的に堆積する。また，南側底面から立上がり付近にかけて焼土を含む暗褐色土が堆積する。

遺物：土師器甕の小片が出土した。

S K - 133 炭窯（第249図）

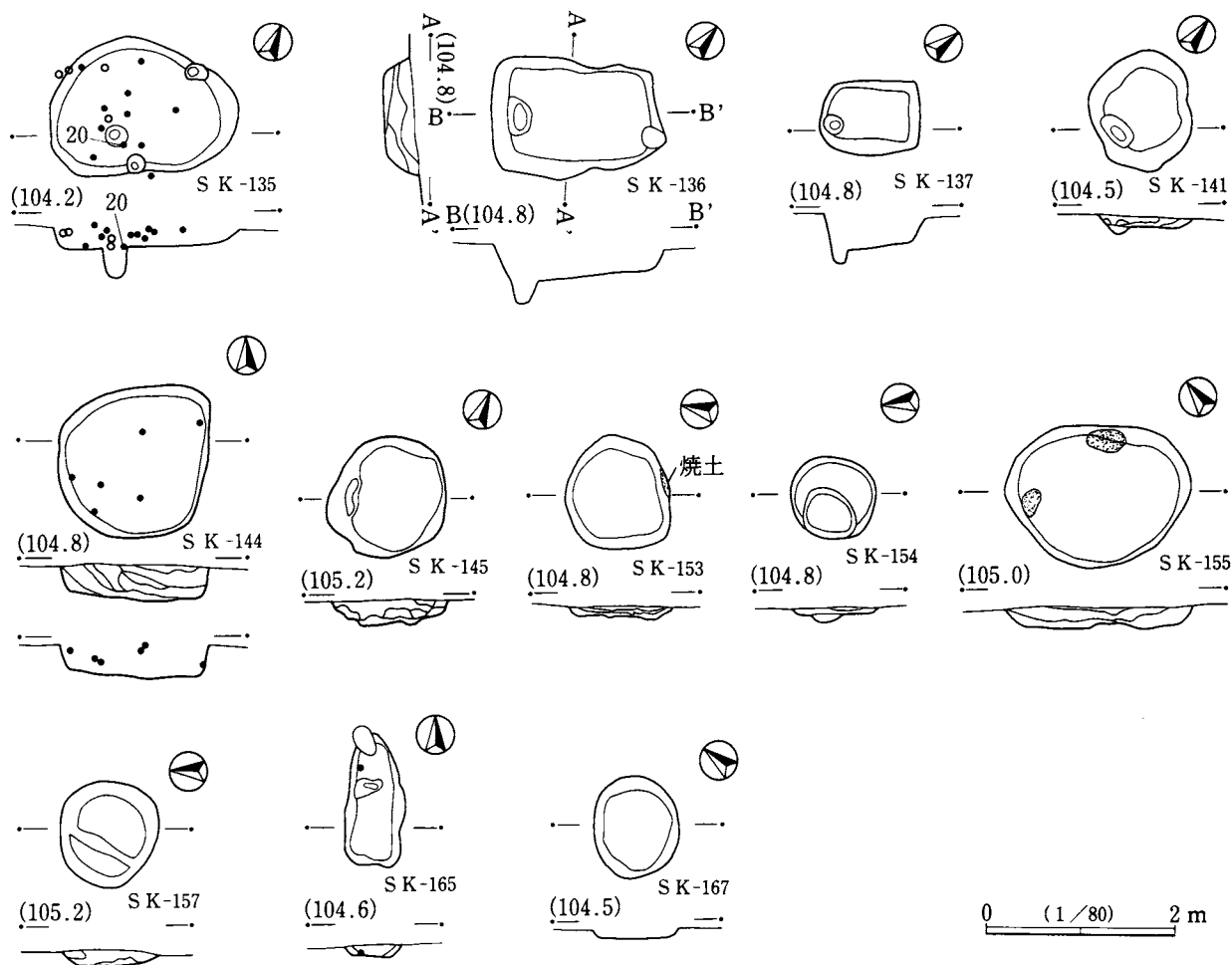
位置：M 5 - 46

規模・形態：平面不整形で長軸1.40m，短軸1.10mを測る。深さ0.25mで、底面はほぼ平坦で、西側にやや浅い段を有す。

覆土：炭化物を含む黒褐色土，暗褐色土，黒色土がほぼ互層に堆積する。

S K - 134 炭窯（第249図，図版38）

位置：N 4 - 91・92



第250図 IV区奈良・平安時代土坑遺構図(2)

規模・形態：平面楕円形で径1.05m～1.20mを測る。深さ0.20mで、底面はやや凹凸を有する。

覆土：炭と焼土，黄白色砂を含む黒褐色土と暗褐色土が主体的に堆積する。

重複関係：縄文時代の土坑SK-142を切る。

遺物：土師器杯・甕と須恵器甕の小片（第251図16）と赤化した破碎礫1点が出土した。

SK-135 炭窯（第250図，図版38）

位置：N4-91

規模・形態：平面楕円形で径1.50m～2.10mを測る。深さ0.22mで、底面はほぼ平坦である。底面には深さ0.30m～0.45m程のピットが認められる。

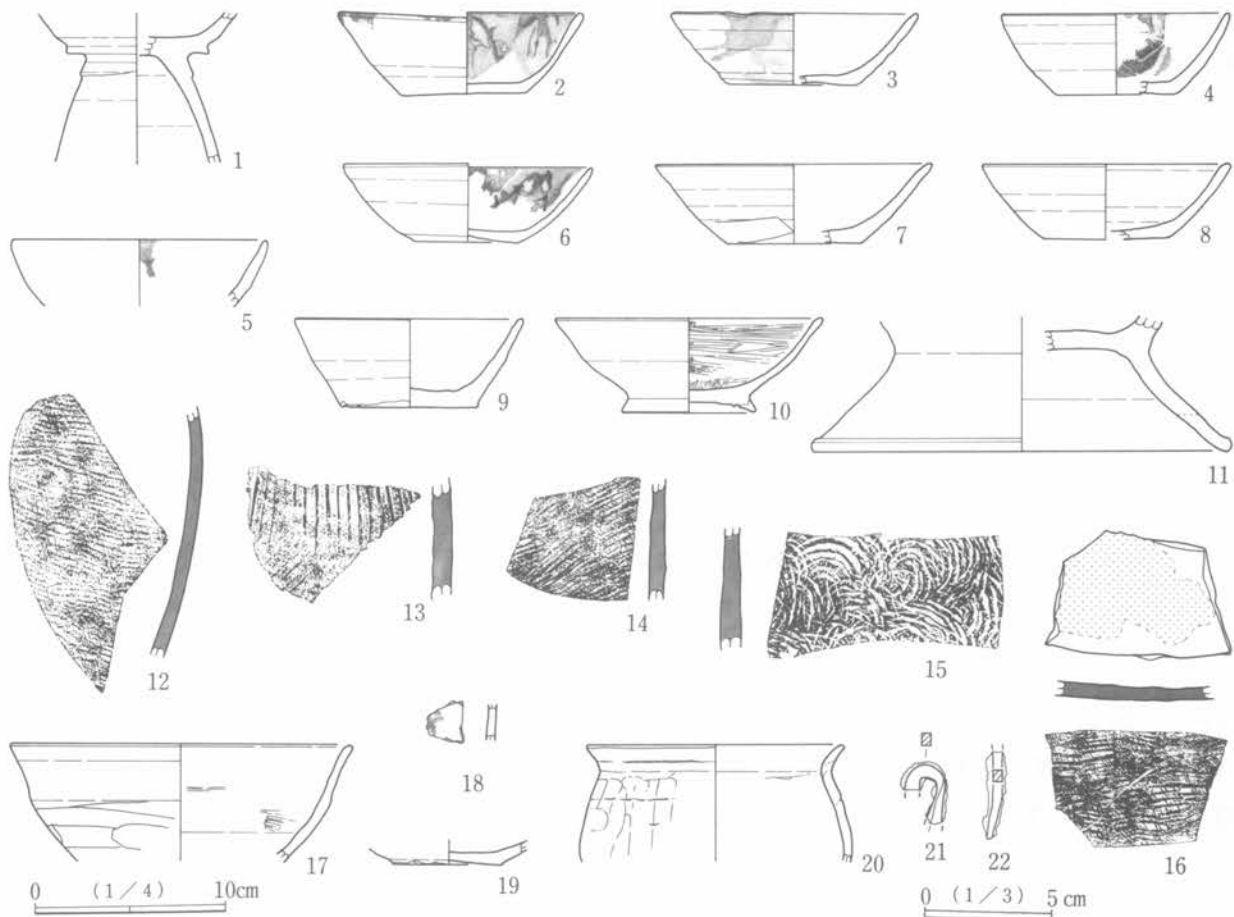
遺物：土師器杯・甕の小片（第251図20）と赤化した完形礫4点が出土した。

SK-136 炭窯（第250図，図版38）

位置：N5-79

規模・形態：平面方形で長軸1.80m，短軸1.30mを測る。深さ0.40mで、底面はほぼ平坦である。西壁に接して，径0.25m～0.40m，深さ0.25mのピットが認められる。

覆土：炭片を含む暗褐色土と，ロームブロックを多く含む暗褐色土がレンズ状堆積する。底面付近には炭片が多く認められる。



第251図 IV区奈良・平安時代土坑出土遺物

S K-137 炭窯 (第250図, 図版38)

位置: N 5-79

規模・形態: 平面方形で長軸1.10m, 短軸0.80mを測る。深さ0.40mで, 底面はほぼ平坦である。西南隅に径0.20m, 深さ0.20mのピットが認められる。

S K-141 炭窯 (第250図, 図版38)

位置: N 5-33・43

規模・形態: 平面楕円形で径1.10m~1.30mを測る。深さ0.20mで, 底面はやや凹凸を有す。南壁に接して径0.25m~0.40m, 深さ0.20mのピットが認められる。

覆土: 底面から立上がり付近にかけて, 炭片と焼土を含む暗褐色土と褐色土, 黒褐色土が堆積する。

S K-144 炭窯 (第250図)

位置: N 5-53・54・63・64

規模・形態: 平面楕円形で径1.60m~1.80mを測る。深さ0.40mで, 底面はほぼ平坦である。

覆土: 底面から西側立上がり付近にかけて, 炭片を含む褐色土と暗褐色土, 黒褐色土が堆積する。

遺物: 土師器杯の小片が出土した。

S K-145 炭窯 (第250図, 図版39)

位置: M 6-57

規模・形態：平面楕円形で径1.20m～1.30mを測る。深さ0.25m～0.30mで、底面はやや凹凸を有す。

覆土：炭片を多量に含む黒褐色土が、上層を中心に主体的に堆積する。

S K-153 炭窯 (第250図, 図版39)

位置：N 6-83

規模・形態：平面楕円形で径1.10m～1.20mを測る。深さ0.10m～0.14mで、底面はやや凹凸を有す。南壁に一部被熱痕跡が認められる。

覆土：炭片を含む暗褐色土、明褐色土が主体的に堆積する。

S K-154 炭窯 (第250図, 図版39)

位置：M 6-84・94

規模・形態：平面楕円形で径0.84m～0.90mを測る。深さ0.05mで、西側にやや深い落ち込みが認められる。

覆土：炭片を多量に含む暗褐色土が主体的に堆積する。

S K-155 炭窯 (第250図, 図版39)

位置：M 5-90

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.98m、短軸1.48mを測る。深さ0.14m～0.25mで、底面はやや凹凸を有す。西側と北側の立上がり付近で、部分的に被熱痕跡が認められる。

覆土：炭片を多量に含む黒褐色土が、上層を中心に主体的に堆積する。

S K-157 炭窯 (第250図)

位置：L 6-58・68

規模・形態：平面楕円形で径1.05m～1.10mを測る。深さ0.15mで、西側にやや浅い段を有す。

覆土：炭片を含む黒褐色土を主体的に堆積する。

S K-165 炭窯 (第250図)

位置：O 6-61

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.36m、短軸0.65mを測る。深さ0.30m～0.44mで、底面はやや凹凸を有す。

覆土：炭片を多量に含む黒色土が主体的に堆積する。

S K-167 炭窯 (第250図, 図版39)

位置：M 6-91

規模・形態：平面楕円形で径0.90m～1.05mを測る。深さ0.10mで、底面はほぼ平坦である。

(4) V区

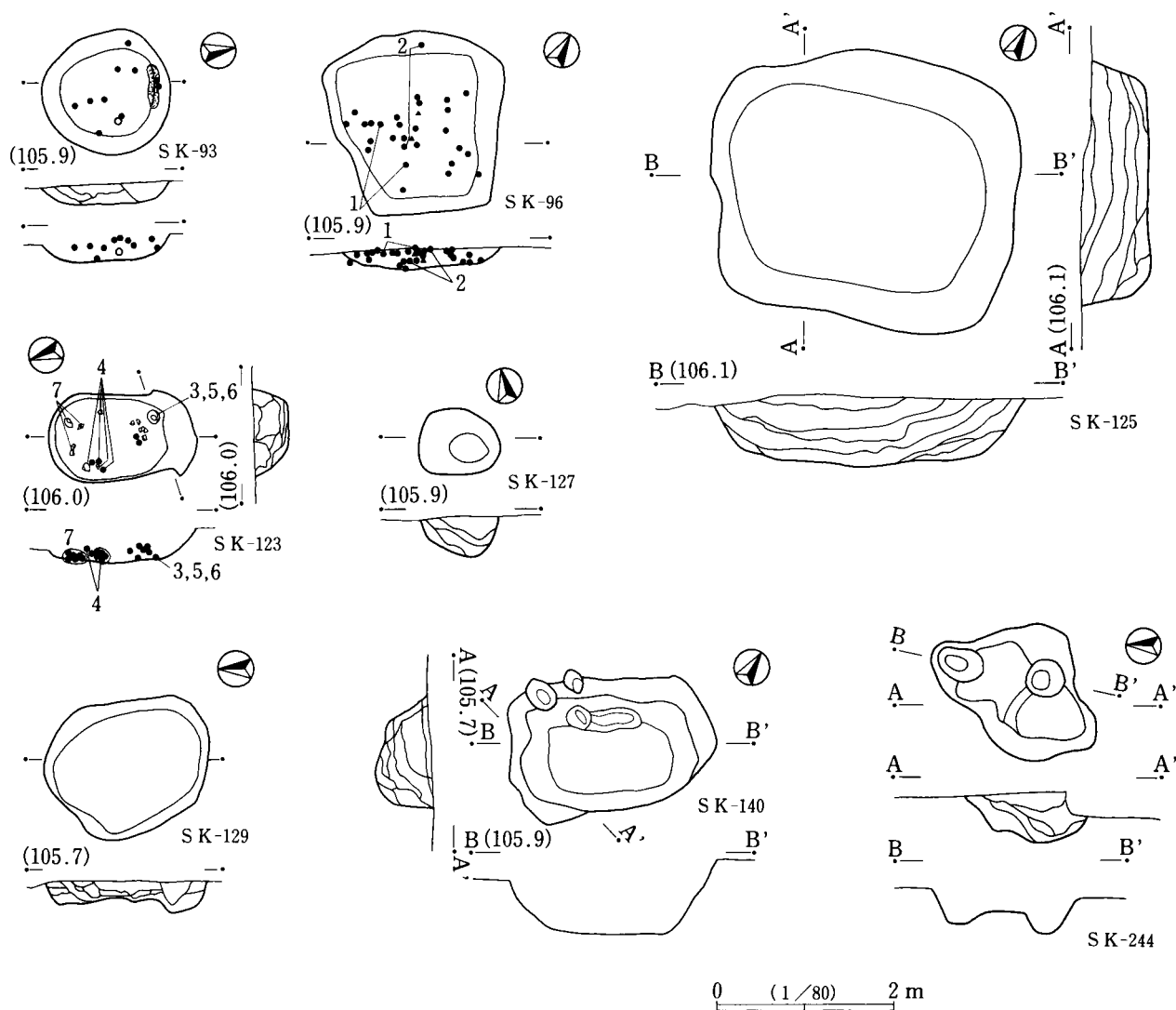
S K-93 炭窯 (第252図)

位置：O 6-95・96, O 7-05・06

規模・形態：平面楕円形で径1.38m～1.46mを測る。深さ0.23mで、底面はほぼ平坦である。北側の底面からの立上がり付近の一部で被熱痕跡が認められる。

覆土：炭片を含む黒褐色土・暗褐色土を主体的に堆積する。

遺物：土師器杯・甕の小片と、赤化した完形礫・破損礫3点が出土した。



第252図 V区奈良・平安時代土坑遺構図

SK-96 炭窯 (第252図)

位置：O 7-07・16・17

規模・形態：平面不整形で長軸2.10m，短軸1.30m～2.00mを測る。深さ0.25mで，底面はほぼ平坦である。

覆土：炭片を含む黒褐色土が堆積する。土坑の周囲にも炭片と焼土粒の拡がりが見られる。

遺物：土師器杯・甕と須恵器甕の小片と香炉蓋 (第253図1)，鉄滓2点264.7g，赤化した破損礫1点が出土した。

SK-123 土坑 (第252図，図版39，85，86)

位置：P 6-54・55

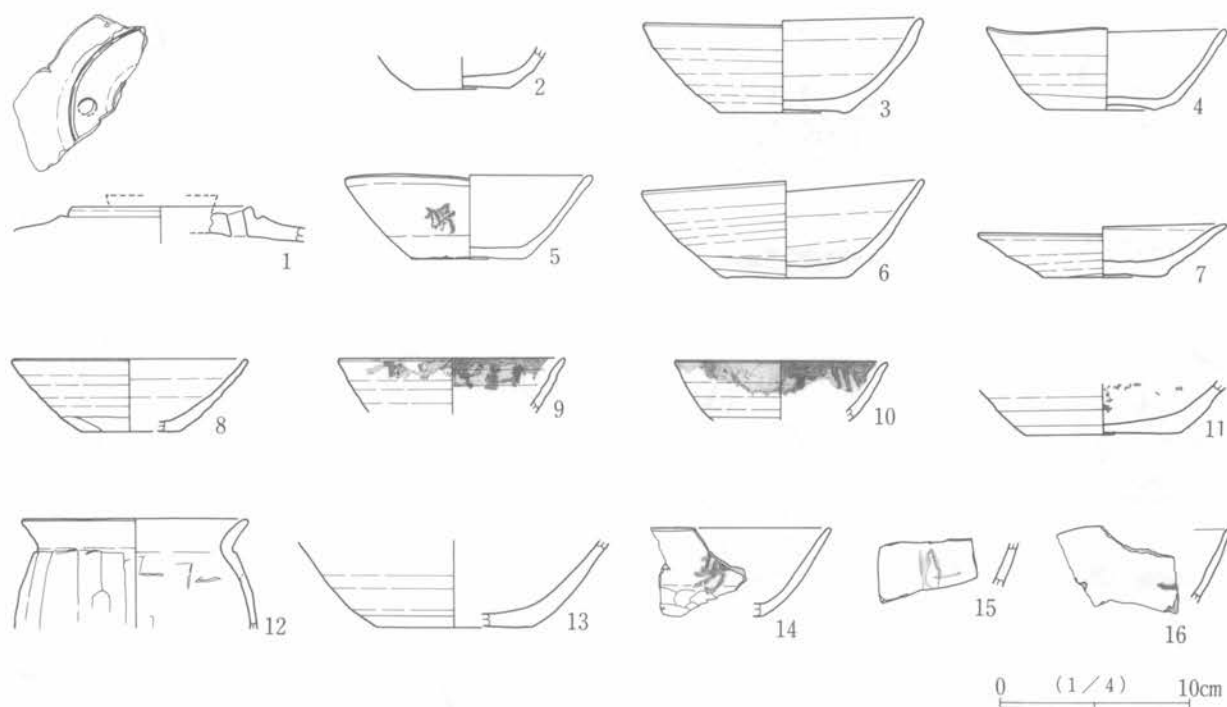
規模・形態：平面長楕円形で長軸1.60m，短軸1.00mを測る。深さ0.40mで，底面はほぼ平坦である。

覆土：比較的混入物が微量の暗褐色土と暗灰褐色土がレンズ状に堆積する。

遺物：土師器杯の小片と墨書土器 (第253図5) が出土した。

SK-125 土坑 (第252図，図版39)

位置：P 6-93・94



第253図 V区奈良・平安時代土坑出土遺物

規模・形態：平面隅丸方形で長軸3.80m，短軸3.00mを測る。深さ0.87mで，底面はほぼ平坦である。

覆土：直径2mm～15mmの炭化粒を少量混入した暗灰黄褐色土がレンズ状に堆積する。

遺物：油煙が付着した土師器杯・甕の小片と墨書土器（第253図7），赤化した完形礫1点が出土した。7は「加万」と読める。

SK-127 土坑（第252図）

位置：P 6-72・82

規模・形態：平面楕円形で径0.70m～0.90mで，丸底である。

覆土：焼土粒を少量含む灰褐色土と暗褐色土が主体的に堆積する。

遺物：土師器杯・甕の小片が出土した。

SK-129 炭窯（第252図，図版39）

位置：P 6-22・23・32・33

規模・形態：平面長楕円形で長軸1.90m，短軸1.50mを測る。深さ0.20m～0.36mで，底面は凹凸を有す。

覆土：炭を含む黒褐色土と暗褐色土がほぼ主体的に堆積する。

遺物：赤化した破損礫1点が出土した。

SK-140 炭窯（第252図，図版39）

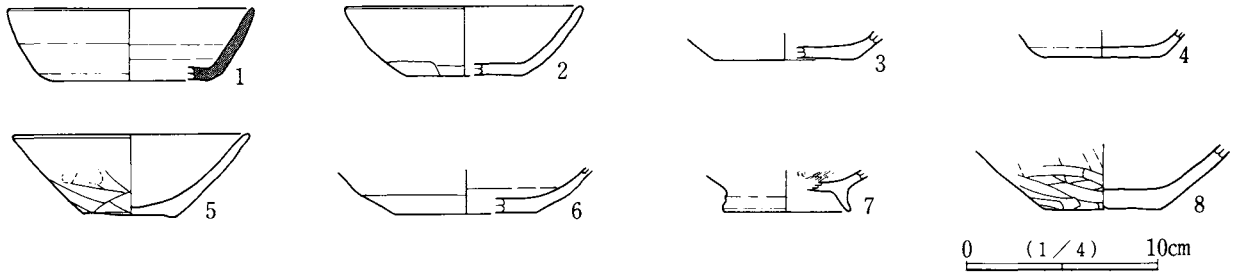
位置：P 6-53

規模・形態：平面隅丸方形で長軸2.40m，短軸1.50mを測る。深さ0.85mで，底面はほぼ平坦である。西北壁に浅いピット状の掘込みを有す。

覆土：炭片や焼土粒，ロームブロックが混入する褐色土，暗褐色土等がほぼレンズ状に堆積する。

遺物：土師器杯の小片と墨書土器（第253図16）が出土した。

SK-244（第252図）



第254図 I区グリッド出土奈良・平安時代出土遺物

位置：V区

規模・形態：不整形の長軸2.00m，短軸1.40mである。底面に2か所のピット状掘込みが見られる。

覆土：暗褐色土が堆積している。

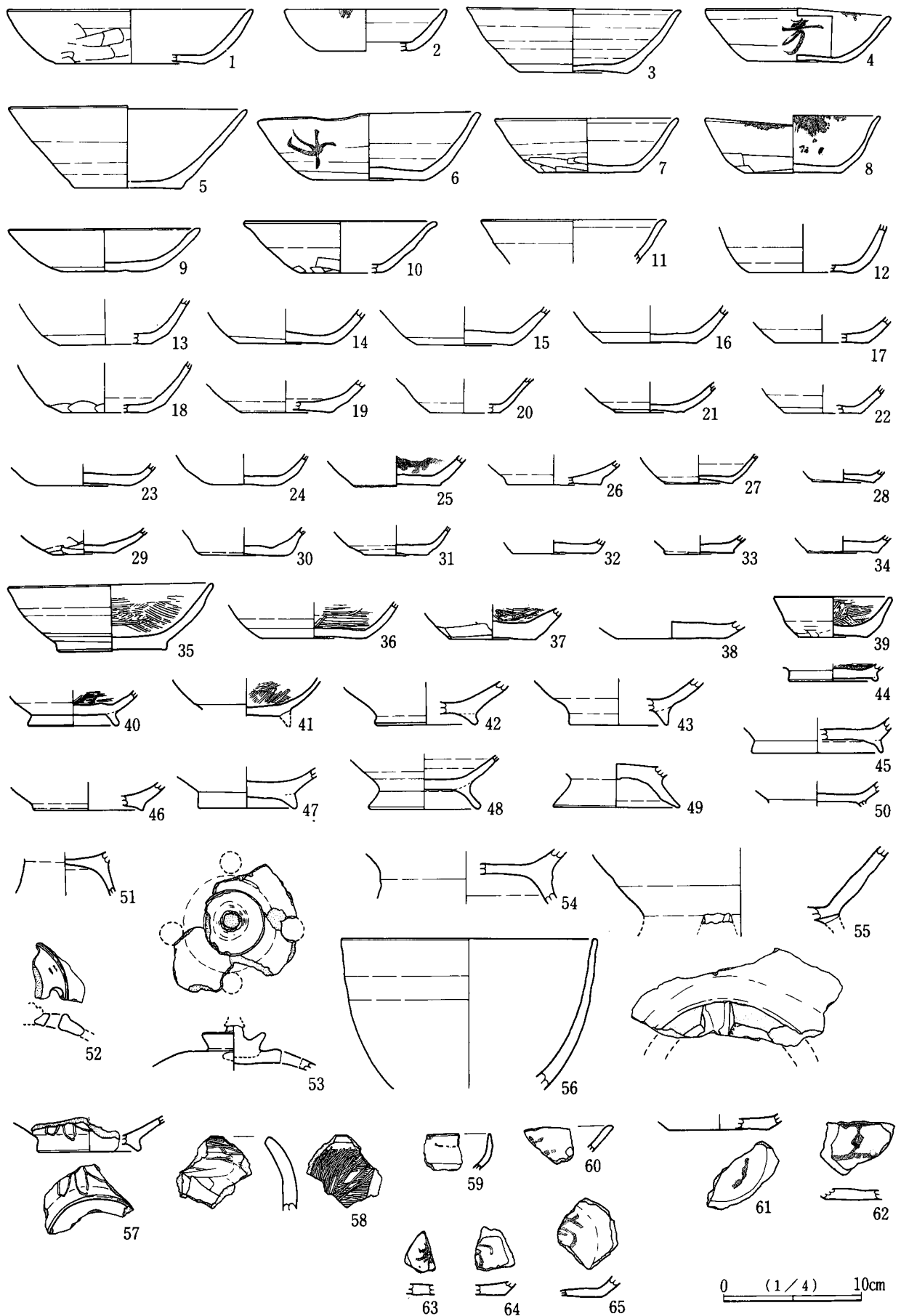
7 グリッド出土遺物

I区（第254図 図版86）

第254図1は須恵器の杯である。口径12.8cm，底径8.0cm，深さ3.8cmに復元される。全体として箱形を呈し，色調は灰白色を示し，焼成は普通である。2はロクロ成形の土師器の杯である。口径12.2cm，底径6.0cm，器高3.6cmに復元される。体部下端に手持ちヘラ削りが施され，やや内彎しながら立ち上がる。胎土に砂粒や雲母が認められ，明橙色を示し，焼成は普通である。3・4はロクロ成形の土師器の杯である。いずれも体部下端と底部に回転ヘラ削りが認められる。5は土師器の杯で，口径12.2cm，底径4.8cm，器高4.4cmに復元される。底部から口縁部にかけて体部が直線的に開くように立ち上がる。底径に比して口径の大きさが目立つ。体部の下部に手持ちヘラ削りが施されている。焼成は比較的良く，黄褐色を呈する。6は土師器の杯の底部で底径7.4cmに復元される。体部下端から底部に回転ヘラ削りが施される。7は高台付杯の高台部である。復元底径は6.4cm，高台の高さは1.4cmである。杯部の内面は黒色処理が施される。8は甕の底部で，底径6.1cmを測る。外面はヘラ削りが認められ，内面はヘラナデが行われている。

II区（第255・256図）

第255図1は，非ロクロ成形の土師器の杯である。体部外面は全体に手持ちヘラ削りが施されている。胎土に砂粒が認められ，焼成は普通で，色調は黄褐色を示す。2も外面に手持ちヘラ削りが行われる土師器の杯である。口唇部に油煙の付着が認められるので，灯明皿として使用されていた可能性が大きい。3はロクロ成形の土師器の杯である。底部は回転糸切りで切り離し，その上に回転ヘラ削りを施し，さらに部分的に手持ちヘラ削りを加えている。また，体部下端の調整は回転ヘラ削りである。胎土は密な状態で焼成も良い。色調は黄褐色である。4はロクロ成形の土師器の杯で，口縁部の一部を欠くものの保存状態は良い。口径は13.2cm，底径は7.3cm，器高は3.8cmである。底部から体部下端にかけての調整は回転ヘラ削りである。口唇部の1か所に油煙の付着が残り，外面に墨書が認められる。墨書は正位に「立万」と書かれている。胎土はやや粗く，焼成は普通である。5は体部が直線的に外傾しながら開く土師器の杯である。口径は17.0cmと大きく，底径7.7cm，器高6.0cmを測る。6は土師器の杯で4分の3が遺存する。口径16.0cmに対し，底径も8.2cmあり，また，器厚が5mm～9mmと厚く作られている。底部から体部下端にかけての



第255図 II区グリッド出土奈良・平安時代出土遺物(1)

調整は回転ヘラ削りである。胎土はやや粗く、焼成は普通である。体部外面に墨書が存在している。7は焼成良好な土師器の杯である。口径13.1cm、底径7.3cm、器高4.0cmを測る。底部と体部下端には手持ちヘラ削りが施されている。8は口縁部の6か所以上に油煙の付着痕跡が認められる土師器の杯である。灯明具として用いられていたと見ることが可能である。口径12.5cm、底径6.8cm、器高4.8cmで、底部から体部下端にかけて回転ヘラ削りが施されている。9は4分の1が遺存する土師器の皿である。口径13.7cm、器高3.0cmに復元され、底径は6.2cmを測る。底部から体部下端は回転ヘラ削りが行われている。10は口径13.9cm、底径6.0cm、器高3.6cmに復元される土師器の杯である。体部下端には手持ちヘラ削りが認められる。11はロクロ成形の土師器の杯で、口径13.2cmに復元される。

12～34は土師器の杯の体部下半から底部である。保存状態の良好な個体はわずかであるが、14は底部全体が遺存し、底径6.8cmを測る。また、13～17の体部下端は回転ヘラ削りによって調整されている。25は底径6.2cmで、底部は回転糸切り無調整である。この内面に油煙の付着が認められることから、灯明皿として使用されていたものと考えられる。27・28・31は体部が内彎気味に立ち上がると見られ、また、底部は回転糸切り無調整で終わっている。

35は土師器の椀である。体部の4分の1と口縁部の一部が遺存し、口径14.6cm、底径7.6cm、器高4.7cmに復元可能である。底部下端から底部が外方に張り出すように作られ、体部は内彎しながら立ち上がる。内面は全体にヘラミガキが行われ、黒色処理で仕上げられている。36も内面に丁寧なヘラミガキを施し、黒色処理を行っている土師器の杯である。底径は7.6cmに復元される。底部と体部下端は回転ヘラ削りである。37・38の内面も黒色処理が施されている。39は復元口径8.4cm、底径5.0cm、器高2.9cmという小型の土師器の杯である。底部は回転糸切り無調整で、内面は全体に雑なヘラミガキが施される。内外面とも暗褐色から黒色に近い色調を示している。

40～51は、高台付杯である。いずれも高台部を残す杯部の下部のみで詳細は不明である。48・49・51は、高台の高さが1cm以上を測るものである。

52・53は香炉の蓋である。53は4か所に円孔が開けられ、中央部に円形のつまみが付けられている。ただつまみの上部は欠損しており、全体の形状は不明である。

54・55は高台付杯の可能性を残すものの、脚付香炉の一部と考えられる。54は脚部の接合部で、55の脚部には透かし孔が存在する。

56は鉢になるだろう。体部全体の8分の1の遺存する破片から復元すると、口径は18.5cmになる。59も口縁部が内彎する形態の鉢と考えられるが、全体の器形は不明である。

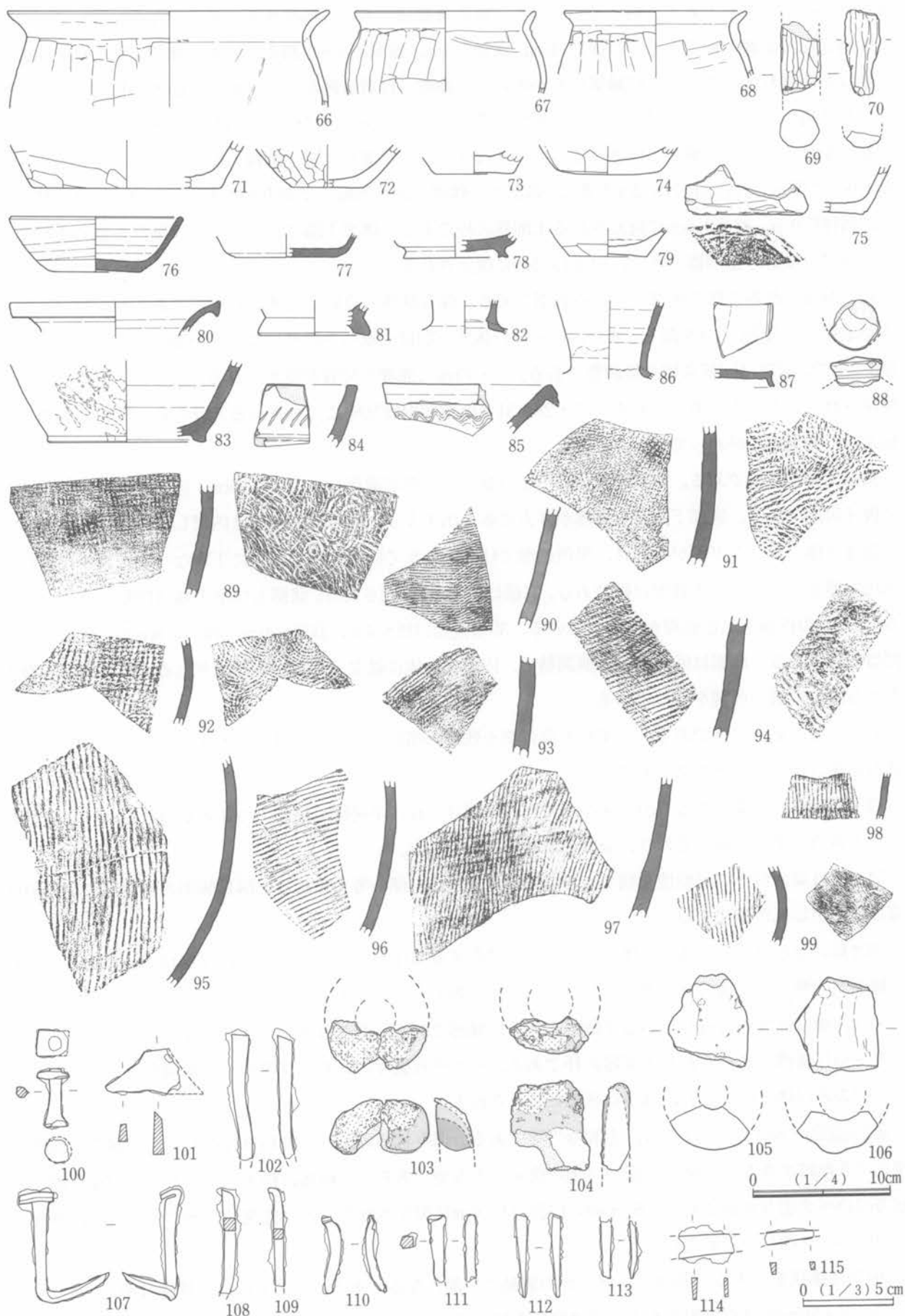
60は内面に油煙が付着している土師器の杯の口縁部である。油煙はタール状に残存する。

61～63は墨書の認められる土師器の杯である。それぞれ破片のため、文字の一部が遺存するにとどまるが、60のみが体部に記され、ほかは底部に認められる。

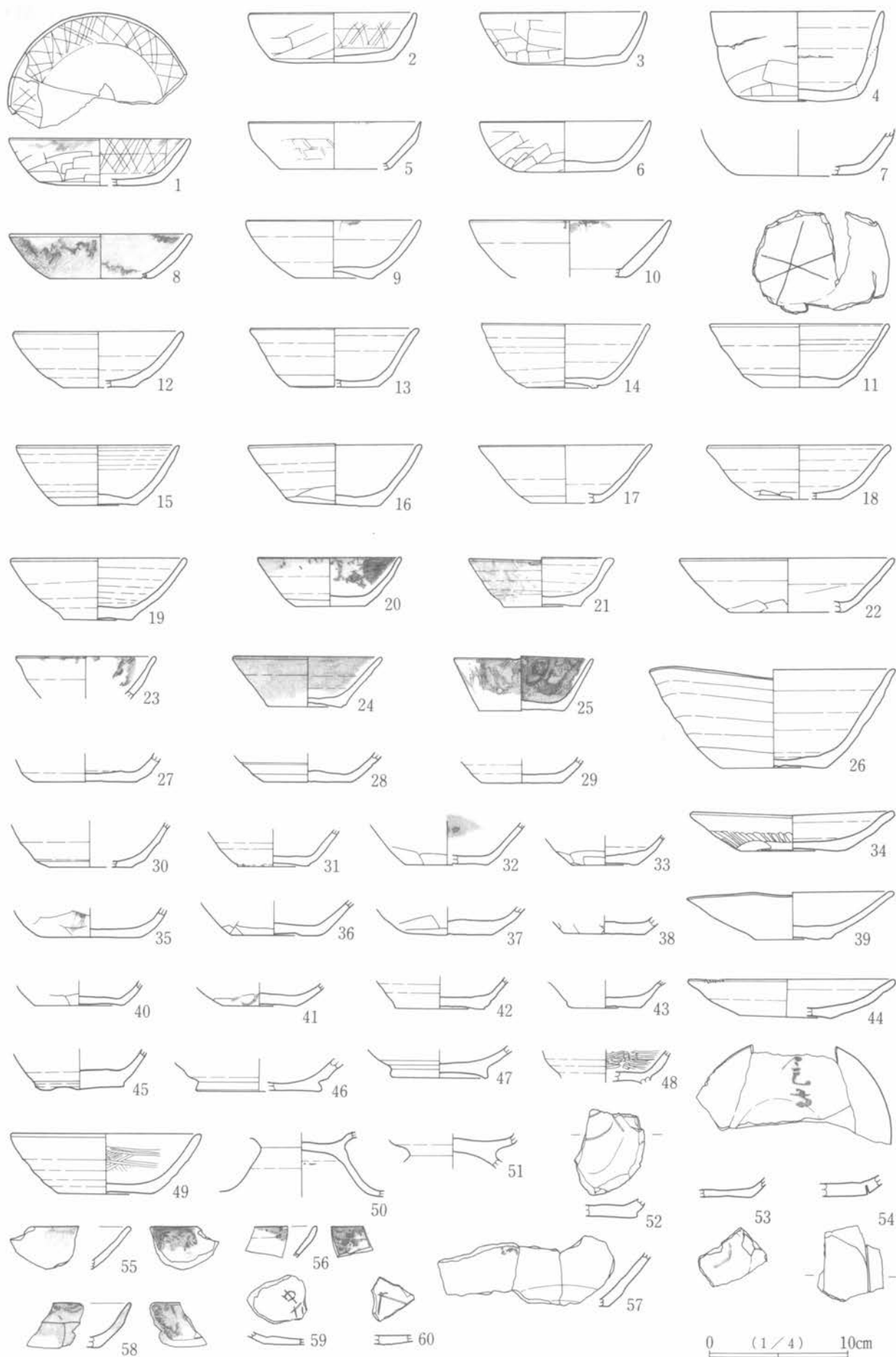
第256図66～68・71～75・79は、土師器の甕である。保存状態の良好な資料は存在せず、口縁部や底部が復元できたにすぎない。66は口径23.1cmに復元できる甕である。口縁部は横ナデが行われ、胴部外面には縦方向のヘラ削りが施される。67・68の口径は13.0cmに復元される。71は底径13.7cmに復元され、外面に斜方向のヘラ削りが認められる。

69・70は棒状を呈する土製品で、何らかの製品の一部になると考えられるものの、性格は明らかでない。

76～78・80～99は須恵器である。76は完形を保って出土した杯で、口径12.3cm、底径6.6cm、器高3.9cm



第256図 II区グリッド出土奈良・平安時代出土遺物(2)



第257図 Ⅲ区グリッド出土奈良・平安時代出土遺物(1)

になる。体部下端から底部にかけては回転ヘラ削りが施されている。78は高台付杯の高台部になり、80・82・86は壺の一部になる。87は蓋の一部で、88は蓋のつまみである。89～99は甕の胴部破片である。

103～106は羽口であるが、保存状態は不良である。103・104が炉側部分で、105・106が鞆側の一部になる。

100～102・107～115は鉄製品である。金具や釘、刀子が認められるものの、一部を除くと保存状態は不良である。100は両頭を呈する金具である。この製品の具体的な用途については明らかでない。

III区 (第257・258・259図)

第257図1～7は非ロクロ成形の土師器杯である。1は全体の2分の1が遺存し、口径12.9cm、底径8.8cm、器高3.4cmで、体部内面に斜格子状暗文が施される。また、口縁部に煤の付着が認められる。2・3・6は形態的には共通するが、2にのみ体部内面に斜格子状暗文が観察される。4は鉢状の形態を示し、口径12.8cm、底径8.8cm、器高6.5cmになる。体部外面の調整が雑で、一部に輪積痕跡をとどめている。体部下半はヘラ削り調整である。6は体部下端に丸みが残し、外面は手持ちヘラ削りで調整されている。

8～51はロクロ使用の土師器である。8～10は体部が内彎気味になり、いずれも口縁部に油煙の付着が認められる。11は体部下端から底部にかけて回転ヘラ削りが施され、内面にヘラによる線刻が3本記されている。13も同様な調整が行われ、復元値で口径12.0cm、底径6.4cm、器高4.1cmになる。19は底部糸切り無調整で、体部下端もそのままである。20は復元口径10.2cmのやや小型の杯で、体部下端から底部にかけて回転ヘラ削りが行われている。また、内面に油煙の付着が認められる。25も口径9.9cmと小型で、内面のほぼ全面にタール状に油煙が付着する。この底部は回転糸切り無調整である。26は口径と器高で他を凌いでいる。全体の3分の1が遺存し、復元値で口径17.7cm、底径7.6cm、器高7.2cmになる。

34・39・44は皿である。34は口径14.8cm、底径7.6cm、器高2.8cmになり、体部下位から底部にかけて、小刻みな手持ちヘラ削りが施されている。39は一部が欠損するのみで保存状態は良い。口径は14.8cm、底径3.5cm、器高4.5cmを測る。この底部は回転糸切り無調整で、体部にも調整を施した様子は認められない。44は体部の途中で内側にやや折れ曲がって、口径14.8cm、底径6.6cm、器高6.6cmに復元される。体部の中位から底部は手持ちヘラ削りによって調整されている。体部の外面に墨書の存在が確認できる。記されていたのは二文字か三文字と見られるが、判読は難しい状態である。

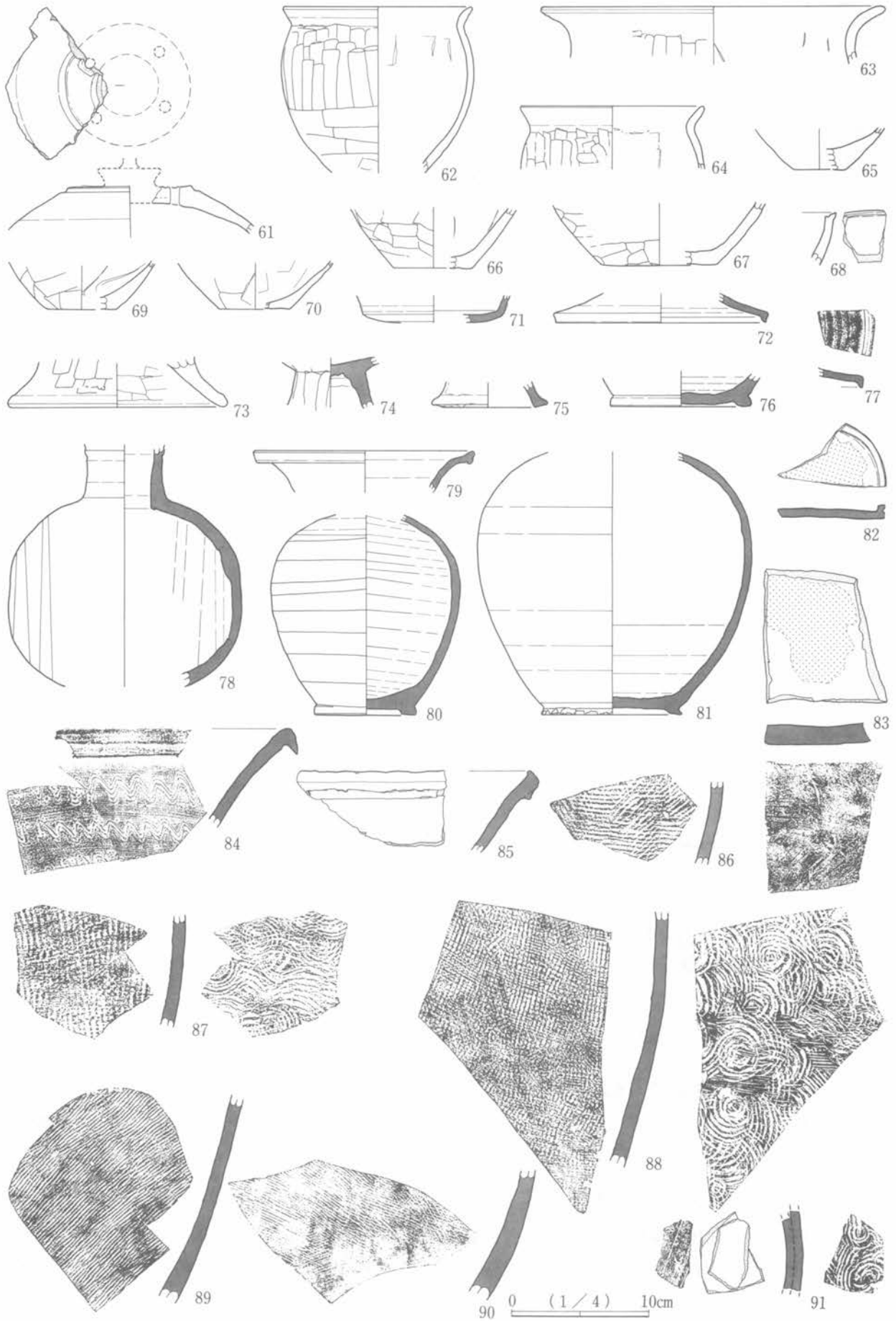
40～43・45～48は杯の底部である。47と48に高台が付くほかは平底である。

49は内黒の無高台の杯である。内面はヘラミガキが施されて、吸炭による黒色処理が加えられている。口径12.8cm、底径6.8cm、器高4.2cmに復元される。50は足高高台の杯になると考えられるが、杯部、脚部とも欠損する。51も高台の状況が明確でないが、高台の付く杯になると思われる。

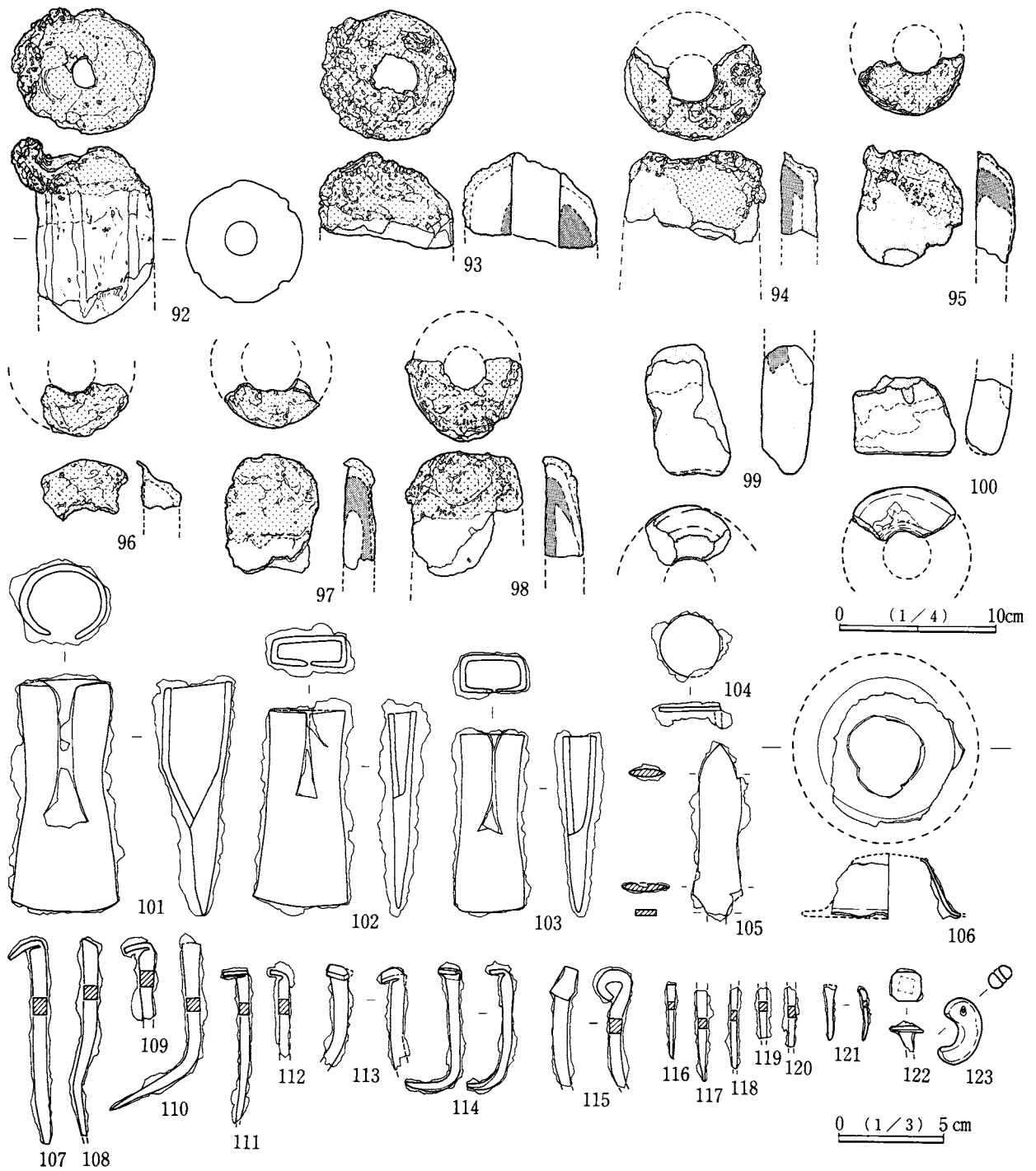
52～60は線刻、墨書の痕跡、油煙の付着が認められる杯の破片資料である。

61は土師器の香炉蓋である。天井部の4か所に孔が穿たれ、中央部につまみが付くと考えられるが、欠損部が多く、詳細は明らかでない。

62～67は土師器の甕である。保存状態の良好な資料は少なく、それぞれ部分的な遺存にとどまる。62は現存器高12.2cmの小型の甕である。外面調整はヘラ削りで、胴部上半部で縦方向、その後胴部下半で横方向に施している。内面はヘラナデであるが、器面の剝落が目立っている。63は口縁部の開き方から判断すると甕になる可能性もある。



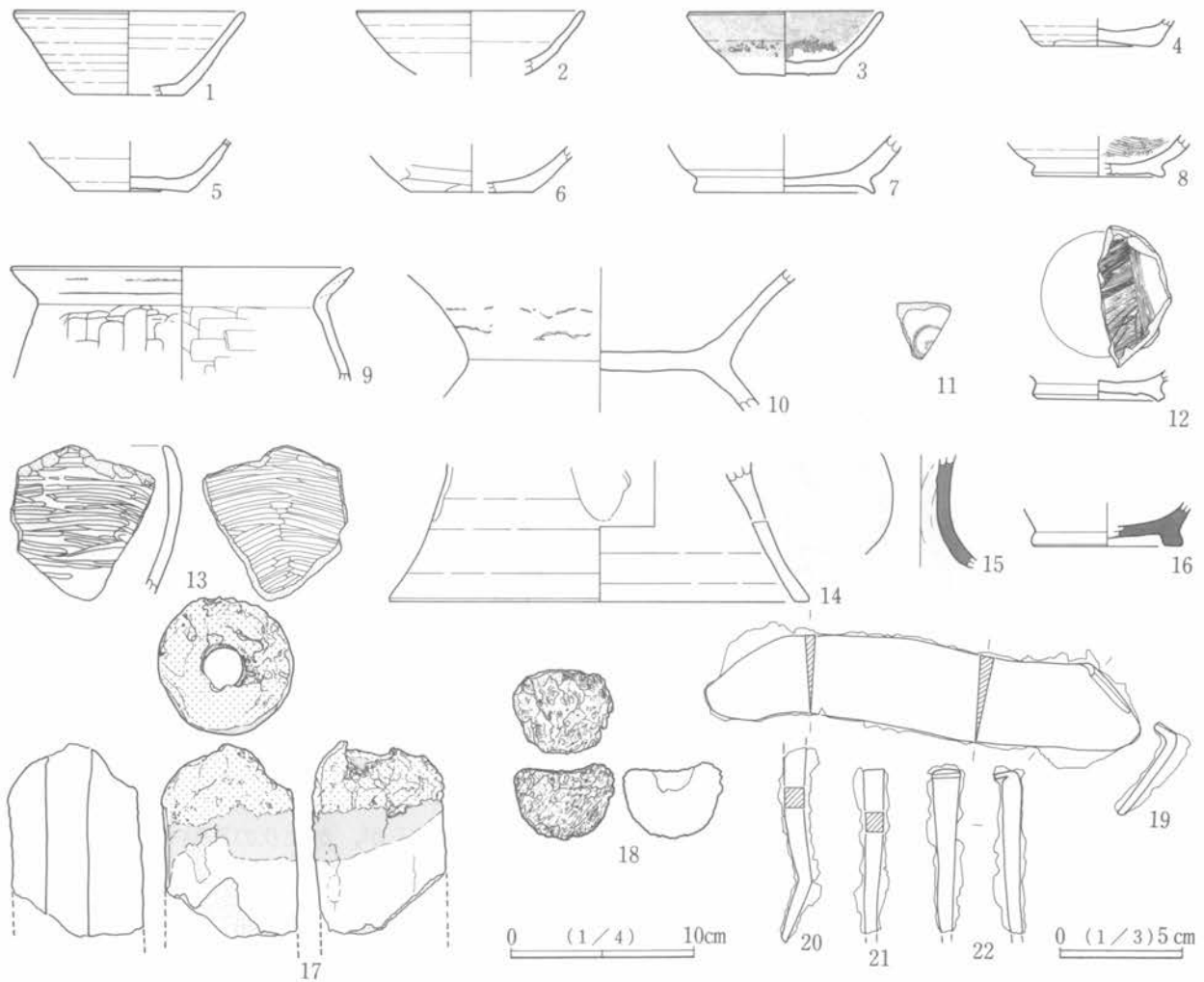
第258図 III区グリッド出土奈良・平安時代出土遺物(2)



第259図 III区グリッド出土奈良・平安時代出土遺物(3)

71・72・74～91は須恵器である。71は杯、72・77は杯蓋であるが、遺存状態が不良なため詳細は明らかでない。74・75は高杯の脚部の一部である。76・78～81は壺類で、時期差が認められる。82・83は墨痕跡が確認できる須恵器破片で、転用硯として使用されていたものと見られる。84～91は甕の一部になる。

第259図92～100は土製の羽口である。ここに呈示した点数は9点と多いものの、保存状態は不良で、全体を知り得る資料は存在しない。しかし、いずれも製鉄に伴うものと考えられ、製銅関係の資料は含まれていないと見られる。92～98は炉側の先端部で高熱を受けて、表面がガラス化したり鉄滓が付着した状況が認められる。99・100は鞆側の一部になるだろう。



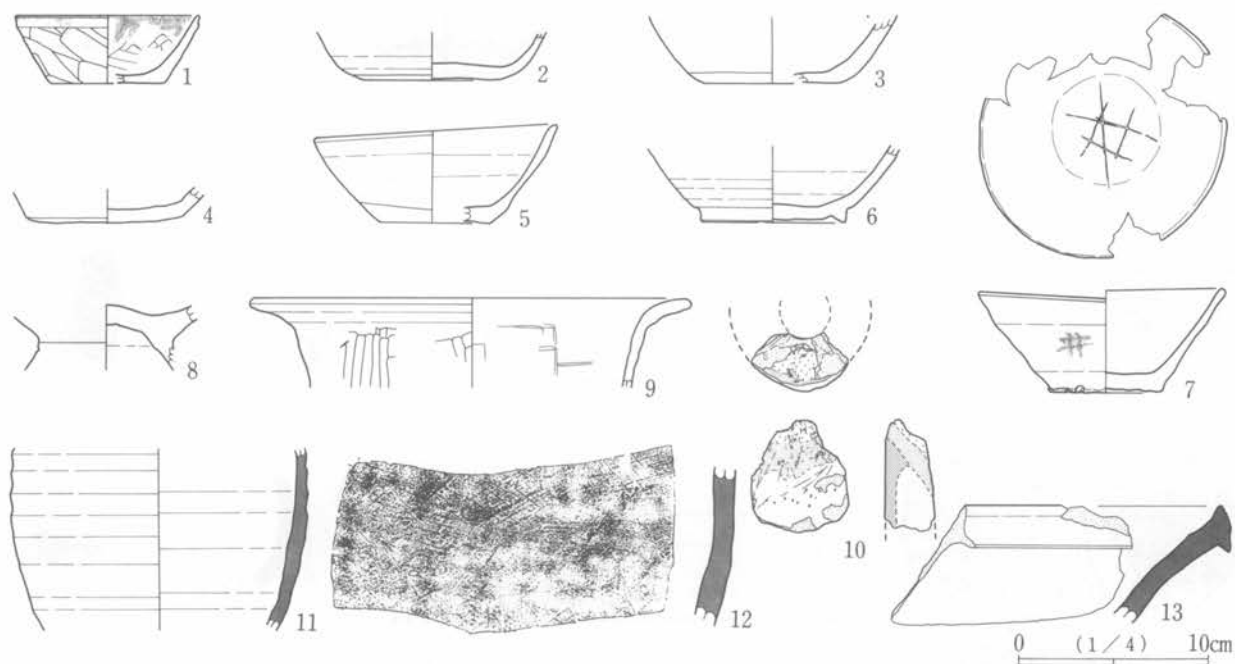
第260図 IV区グリッド出土奈良・平安時代出土遺物

101～122は鉄製品である。101～103は手斧である。101は長さ10.8cmで、刃部の幅は5.0cmになる。袋部の断面形は楕円形を呈し、基部の内径は3.5cm×3.0cmを測る。102は長さ10.2cm、刃部の幅4.5cmで、袋部は長方形に作られている。103の斧も完存している。長さは8.3cm、刃先の幅は3.2cmである。107は釘でほぼ完存している。頭部は板状に折り曲げられ長方形に作られ、長さは9.4cmになる。中位の断面形は長方形である。

123は石製の勾玉である。

IV区 (第260図)

第260図1～14は土師器である。1～8はロクロ使用土師器で、保存状態は不良である。1の口径は12.4cm底径は6.0cm、器高4.5cmに復元される。3は内外面に煤の付着が観察できる杯である。4～11はすべて杯の底部である。4の調整は体部の最下端が手持ちヘラ削りで、底部が回転ヘラ削りである。7・8・12は低い高台を付ける杯の底部である。8と12の内面には丁寧なヘラミガキが施されている。おそらく黒色処理で仕上げられていたものであろう。9は口径18.4cmに復元される甕である。胴部外面には縦方向にヘラ削りが施され、内面には横ナデが認められる。10・14は台付鉢と見られるが、香炉の可能性も否定はできない。14の脚部には透かし孔が存在する。13は内外面に丁寧なヘラミガキが施されている鉢である。



第261図 V区グリッド出土奈良・平安時代出土遺物

15は須恵器の高杯の脚柱部である。16は壺の底部になろう。

17は甕の羽口である。炉側の一部が残存するのみで全体は不明であるが、かなりの高熱を受けた状態をとどめている。18は椀型滓である。

19は鎌でほぼ完存している。刃側の全長17.7cm、中央部の幅3.5cm、背厚0.5cmである。20～22は釘であるが、いずれも欠損品である。20は頭部を失い、途中で折れ曲がった状態になっている。残存長は7.8cmである。

V区（第261図）

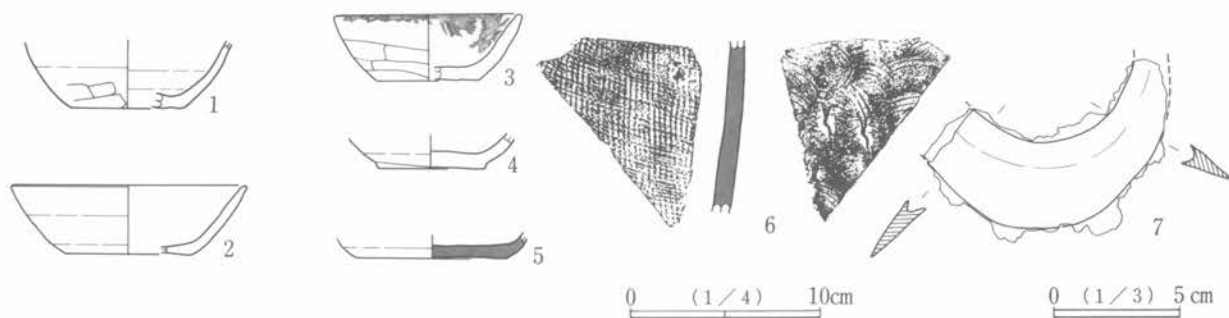
第261図1～9は土師器である。1は非ロクロ成形で作られた、口径9.4cm、底径5.9cm、器高3.6cmの小型の杯である。口縁部に油煙の付着が認められることから、灯明具として用いられていたものと推測される。2・3・5は、体部の下端と底部が、回転ヘラ削りによって調整されている。5は口径12.5cm、底径5.8cm、器高5.2cmである。6は低い高台をもつ杯で、底径は7.6cmである。7は底部から体部が直線的に外傾して口縁部に至る形態の杯である。底部は回転糸切り無調整で、体部の下端にも調整の痕跡は認められない。口径12.8cm、底径5.8cm、器高5.4cmである。この杯には焼成後に記された線刻と墨書が確認できる。内面の底部には線刻で「井」と刻み、さらにその上に一本の線を重ねている。また、外面の体部には「井」と正位に記された墨書が存在する。8は高台付杯か高台付鉢になるだろう。9は甕の口縁部である。

10は羽口の炉側の一部である。

11は須恵器の壺の胴部、12は甕の胴部破片である。13は甕の口縁部の一部である。

遺跡一括奈良・平安時代遺物（第262図）

帰属する遺構が明確にならない遺物が数点存在するので、以下に簡単に紹介しておきたい。



第262図 遺跡一括奈良・平安時代出土遺物

第262図1～4は、土師器の杯である。1は体部下端に手持ちヘラ削りが施されている。2は復元口径12.2cm、底径6.7cm、器高3.7cmになる。3は非ロクロ成形で作られた杯である。体部外面はヘラ削りで調整され、内面はヘラナデが行われる。また、口縁部の内面と外面にタール状になった油煙が付着している。4の底部は回転糸切り無調整で終わっている。5は須恵器の杯の底部である。6は須恵器の大型甕の胴部の一部になる。

7は鉄製品で、鋤先の一部である。

注

- 1 山内 清男 1979 『日本先史土器の縄紋』先史考古学会
- 2 小林 謙一 1992 「千葉県大原内貝塚出土土器の研究－東関東地方縄文前期末～中期初頭の土器様相」『民考論集』1
- 3 小林 謙一 1989 「千葉県八日市場市八辺貝塚出土土器について－東関東地方縄文時代中期初頭段階の土器様相」『史学』58-2

第3章 ま と め

第1節 旧石器時代

旧石器時代の遺物は1点、遺構覆土内から出土しているのみである。小型の珪質頁岩製のナイフ形石器である。当該地域では、下総台地と比較すると旧石器時代の遺構、遺物の調査例は決して多くはない。そういった意味では、貴重な資料が提供されたものといえよう。

第2節 縄文時代

1. 縄文時代草創期

縄文時代草創期に属する有舌尖頭器が4点、木葉形尖頭器が1点出土している。いずれも遺構覆土中の出土ではあるが、当該期の調査例がまだ少ないこの地域に、良好な資料が加えられたと思われる。

2. 縄文時代早期～中期

縄文時代の資料は、奈良・平安時代のものと同様に、この遺跡を特徴付ける豊富な内容となっている。特に縄文時代早期撚糸文、沈線文、縄文時代前期末葉～中期初頭の土器、礫群、土坑がまとめて検出されている。特に撚糸文後葉の無文土器、沈線文土器前葉の土器、縄文時代前期末葉～中期初頭の土器が、数量こそ多くはないが良好な資料が出土している。これらは房総半島内の資料のみならず、三浦半島の資料との関係が注目される。

また土器とともに、礫群、土坑が検出されているが、礫群は集石土坑を含む土坑を伴い、量的に豊富である。また、石器製作跡と考えられる黒曜石集中地点が検出されており、数多く出土している石鏃の製作の過程を示す資料として注目される。その他に、加曽利E式期の住居跡、土坑が検出されており、伴出している曾利式土器との関連が注目される。このように多くの特徴的な遺構、遺物が検出されている中で、ここでは礫群と石器製作跡について簡単にまとめることにする。

(1) 礫群・集石土坑の礫について

礫群・集石土坑内の礫について、完形礫、破損礫それぞれについて、赤化、非赤化の状況を分析した結果、集石土坑と土坑を伴わない礫群との間に、次のような違いが見られた。①土坑外の礫は10種類以上の石材を使用しているのに対し、土坑内では5種類程度に限定される。②土坑を伴わないブロックの中には、集石土坑と比較して、玉髓、泥岩、頁岩、チャートといった石材の比率が多いものがある。③土坑外の礫は、完形、破損、赤化の組み合わせが様々であるのに対し、集石土坑内の礫は、一様に完形で表面が赤化しているもの、あるいは破損礫で、表面剖面とも赤化しているものがほとんどである。

①から、集石土坑内の礫がある一定の目的で用いられているのに対し、集石土坑外の礫には幾つかの異なった用途があった可能性を指摘できる。特に集石土坑内の礫には、限定された石材が使用されており、石材の選択が行われていたものと考えられる。また、その一方で、玉髓、泥岩、頁岩、チャートといった石器製作に用いるような石材が集石土坑外から比較的多く出土しているということは、黒曜石のみならず、これらの石材を用いた石器製作が行われていた可能性があるといえよう。このことは、III区、IV区から出土した石器に、わずかではあるが、これらの石材を用いたものが含まれていることから、推測できる。

③については本文でも述べたように、土坑外で加熱した礫を土坑内に運び込んだものと考えられる。これはたき火などで焼いた礫を土坑内に持ち込み、食材を加熱するという石焼き料理の工程を想起させ、集石土坑の性格を推測する手がかりとなろう。

(2) 石器製作跡について

IV区、VI区を中心として、検出されている。特にIVaブロックからは、石鏃、三角形素材剥片、剥片、碎片、石核といった、製作過程が復元できる資料がまとまって検出されている。相対的に、碎片+三角形素材剥片、三角形素材剥片+二次加工のある剥片+石核、石核のみといった、3種類の組み合わせが見られ、それぞれ分布する地点が異なっている。これらは、石器製作時の原位置を止めているとは考えにくく、むしろ残骸を廃棄した痕跡であると推測され、石器製作の各段階を累積的に反映しているものと考えられる。これらの石鏃を含む石鏃製作跡は、様々な時期の土器と重複もしくは近接して検出されていることから、時期の認定は困難である。土器や遺構がここに分布する縄文時代早期に属するものと考えるのが妥当だが、石鏃の形態が基部に深い抉りを持つタイプが多いことや、周辺に当該期の土坑や住居跡が存在することからも加曽利E式期に属する可能性も否定できない。

第3節 弥生時代・古墳時代

弥生時代、古墳時代に属する遺物・遺構は少なく、弥生時代の遺物は、弥生時代後期の土器片が少量出土しているのみである。1つのグリッドから集中して出土しており、遺構が存在した可能性がある。古墳時代の遺構は、古墳時代前期の竪穴住居跡が1軒検出されているのみである。ある程度の面積を有する丘陵上から、このように少数の遺構・遺物が検出されるという状況が特徴的である。周辺の当該期の集落との関連が注目される。

第4節 奈良・平安時代

1. 遺構の年代と変遷

①段階設定

竪穴住居から出土した土器・陶器は、供膳形態の様相から大きく4群に分類でき、従来の編年観からその年代は以下のように推定できる。

- | | |
|---------------------------------|----------|
| 1期—上総型土師器杯+上総系須恵器杯 | — 8世紀後半 |
| 2期—ロクロ土師器杯・皿（回転ヘラ削り調整） | — 9世紀前半 |
| 3期—ロクロ土師器杯・皿（回転ヘラ削り調整+回転糸切り無調整） | — 9世紀後半 |
| 4期—ロクロ土師器杯・皿（手持ちヘラ削り調整）+黒色土器碗 | — 10世紀前半 |

②遺構の変遷

以上の段階に沿って、主要な遺構の変遷を見てみよう。

1期—竪穴住居4軒、S I-1・3・23・45が該当する。位置的には丘陵先端部のI区とIII区に位置する。1期・8世紀後半は、古墳時代前期以来、山林となっていたと考えられる久野遺跡の丘陵に再び人間の活動が確認できるようになる。この時期は、I区からIII区までの範囲が遺跡の中心部分となっている。

I区とIII区の間位置するII区には4棟の基壇建物が存在しているが、その建築年代は、出土瓦からある程度推定できる。基壇建物S B-2周辺から出土した平瓦は、桶巻き作りで平行叩き目の施されたも

ので、一部に隅欠きが認められ、木更津市大寺廃寺の出土瓦との関連が想定できる。瓦の年代は8世紀代と推定でき、II区の基壇建物、特にSB-2など主要な建物は、隣接する竪穴住居同様、8世紀後半には建立されていたと考えられよう。つまり、1期にはII区の基壇建物を中心に、その東西に竪穴住居が伴うという景観を復元することができる。

一方、II区に隣接する竪穴住居からは墨書土器「赤穂寺」「大般若?」が確認でき、SB-2の基壇上からは、仏具である香炉蓋、多数の鉄釘などがまとまって出土している。これらの出土遺物から、II区の基壇建物は仏堂と見ることができ、周辺の竪穴住居は仏堂に伴い、僧侶が起居する坊的な性格を想定することが可能であろう。そして、その仏堂と坊は、「赤穂寺」と称されていたと推定できる。

また、II区は、中心仏堂SB-2の南側に基壇建物2棟(SB-3・4)、西側に基壇建物1棟(SB-1)が配置されており、全体で小規模な伽藍と見ることができ、II区の東端で確認されている南北方向の溝(幅5m)は、中心伽藍を区画する機能をもっていた可能性が考えられる。

2期-竪穴住居7軒、SI-9・38・2・4・42・33・36が該当する。1期同様、I区からIII区の範囲を中心とするが、IV区にも竪穴住居が作られている。III区のSB-6及びIV区のSB-5といった仏堂と思われる基壇建物や四面庇建物も、北側の竪穴住居とともに、この段階までには成立していた可能性が考えられる。ここにおいても、建物と竪穴住居は仏堂と坊のセットで捉えることができ、丘陵の奥にまで寺院としての範囲が拡大している。

なお、丘陵の東端部のVI区では、土師器骨蔵器を納めた火葬墓を検出している。蔵骨器の蓋に転用されたロクロ土師器杯は2期に該当し、調査区東端部分は、この段階から一部墓域となっていた判断できる。

3期-竪穴住居12軒、SI-37・31・10・18・36・5・15・46・48・57・17・35が該当する。I・III・IV区に加え、東側のV区にも竪穴住居が拡大している。遺跡の全域に遺構が展開し、最も整備される段階である。ただし、III区に位置するSB-6は、北側に隣接して9世紀末期頃の土師器杯が出土するSI-57が位置しており、9世紀後半の中で廃絶した可能性が高い。

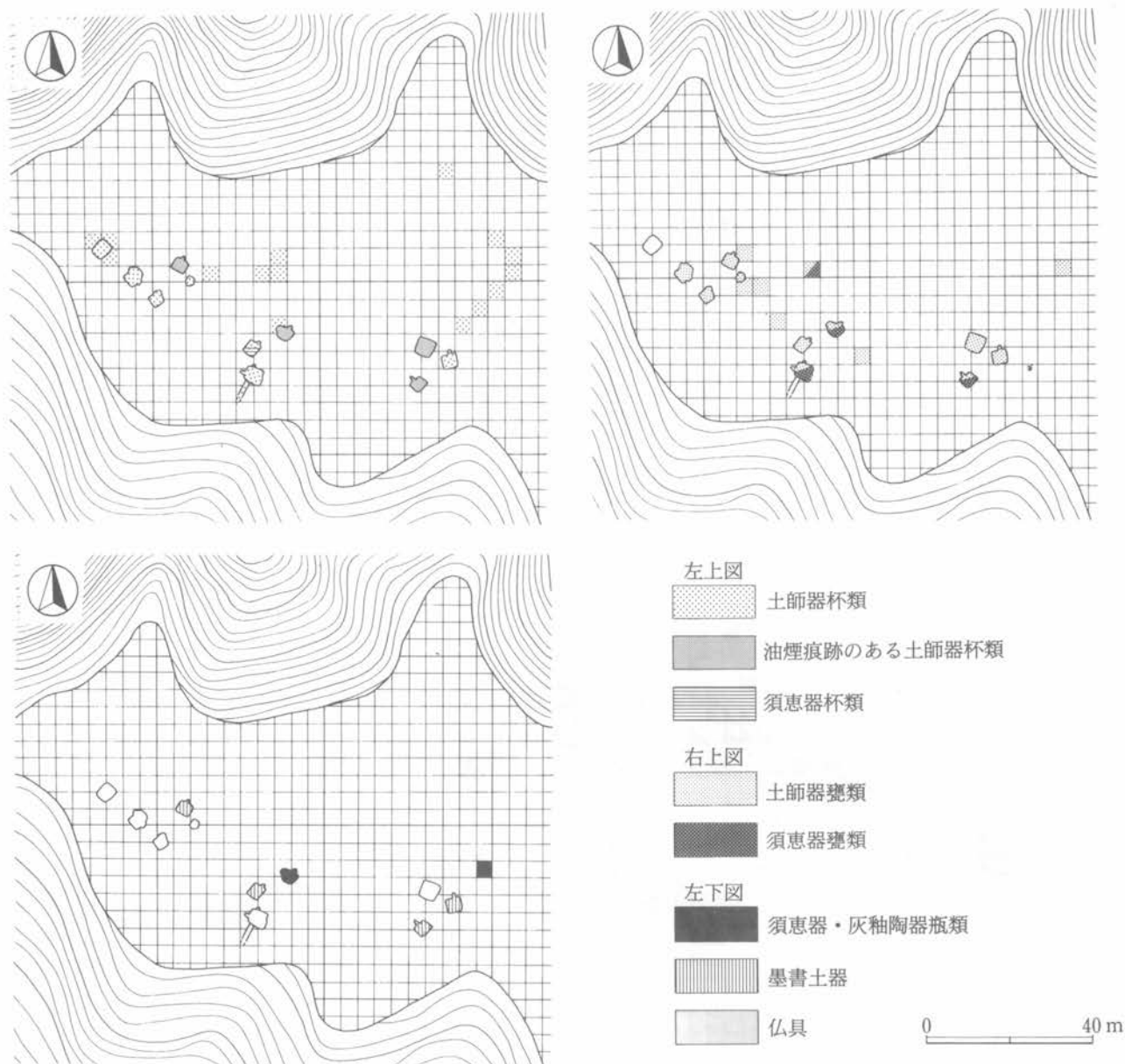
新たに遺構が展開するV区は、IV区との間に規模の大きな区画溝・SD-3が存在している。3期のV区に存在するSI-31からは複数の羽口が出土し、SI-12・13は鍛冶工房的な性格が認められる。また、V区にはSK-104など炭窯と思われる土坑が集中している。このことから、V区の性格は、I~IV区が仏堂と坊で構成される仏地・僧地とは対照的に、修理院のような工房的な性格を想定でき、ここに区画溝SD-3の意味を認めることができよう。

4期-竪穴住居14軒、SI-16・22・24・26・28・19・30・25・6・34・43・50・52・54が該当する。竪穴住居は各段階を通じて最も多いが、I区では竪穴住居が消滅しIII区とV区を中心に分布する。II区の基壇建物(仏堂)の中心となるSB-2の基壇上からは、多数の瓦、鉄釘や香炉蓋とともに4期の土師器杯が出土しており、II区の仏堂は10世紀前半まで存続していたと推定できる。また、III区のSK-166は、この段階の鍛冶工房的な様相が認められ、II区の仏堂の修理等に関与した可能性も考えられる。

そして、10世紀後半には、これらの仏堂や竪穴住居は一斉に消滅し、久野遺跡の丘陵上からは寺院の姿は消え、再び山林となっていったと考えられる。

2. 墨書土器

各段階に該当する代表的な墨書土器は、以下のとおりである。



第263図 I区奈良・平安時代器種別土器分布図

1期-「赤穂寺」「大般若?」

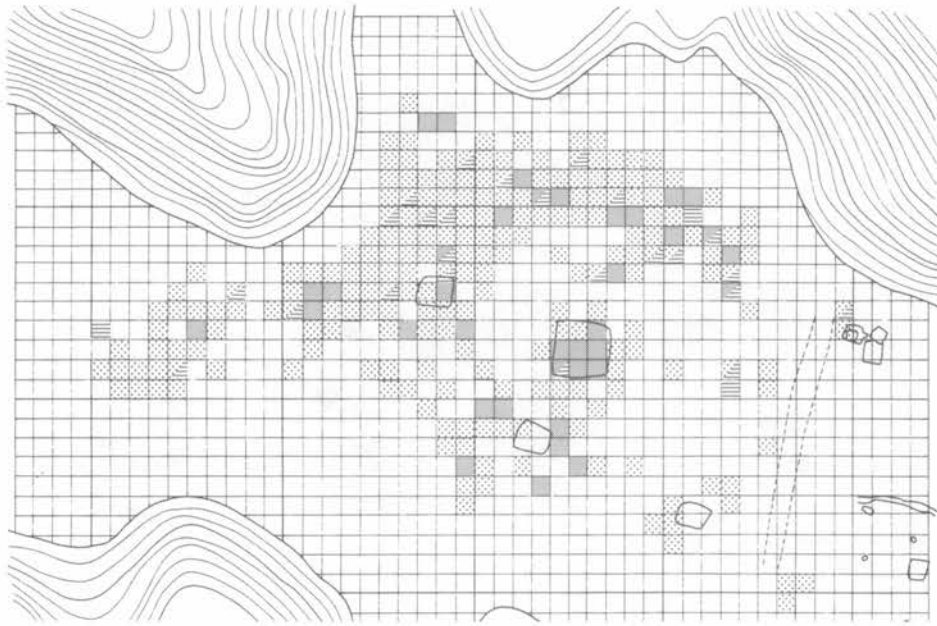
2期-「立万」




3期-「入生」「加万」「寺」「佛」

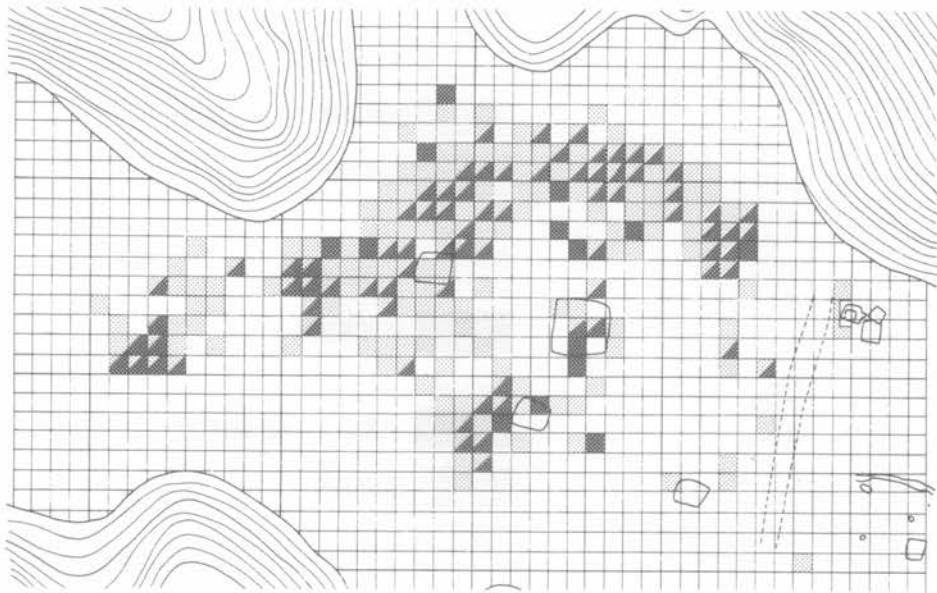
4期-「入生」「良」



1期では、この寺院の名称と思われる「赤穂寺」とともに、「大般若?」の墨書土器が出土している。この「赤穂寺」と「大般若?」はI区とIII区、特にII区の基壇建物群（中心伽藍）に隣接した部分で出土しており、II区の伽藍に直接関連すると考えられる。

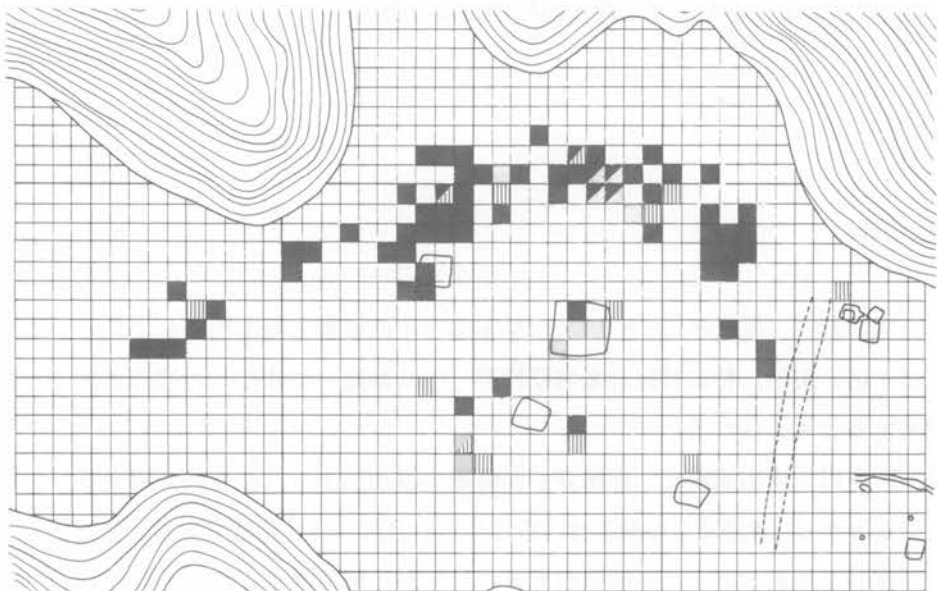
「赤穂寺」については、佐原市多田一夜山遺跡で「赤穂寺」の墨書土器が出土し、ともに「阿光寺」の墨書土器が出土している。このことから「赤穂寺」の読みは「あこうじ」であったと判断できる。この「赤穂・阿光・あこう」は、寺の所在した地名であった可能性が考えられるが、現段階では特定できない。た






-  土師器杯類
-  油煙痕跡のある土師器杯類
-  須恵器杯類



-  須恵器叩き甕(煮沸)
-  土師器甕類・甑



-  仏具
-  墨書・線刻土器
-  須恵器瓶・壺, 灰釉器, 緑釉陶器

0 40m

第264図 II区奈良・平安時代器種別土器分布図

だし、佐原市と木更津市で共通した寺名が確認できるため、地名以外に特定の信仰上の意味も想定する必要があるだろう。

「大般若？」は、代表的な護国經典である「大般若経」やその法会・「大般若会」との関連性を想定でき、1期の中心仏堂・S B-2では大般若経の転読が行われていたとも推定できる。

2期以降は、一字もしくは二字の墨書が中心となる。「寺」の墨書土器や瓦鉢に刻された「佛」は、寺院や仏教信仰との関連が認められるものであるが、その他の墨書土器については、意味を特定することができない。分布傾向では、II・III区に2期の「立万」、V区に3期の「加万」及び4期の「良」、III区に3～4期の「入生」が出土している。特に3～4期の「入生」はIII区に集中し、III区の竪穴住居群との間に明確な対応関係が認められる。

3. 仏具・土器・陶器の出土状況

I区

丘陵西側で、南端部に沿って竪穴住居跡・竪穴状遺構群が検出されている。西隣のII区との間には、南北両側から谷が入り込んでいる。土師器甕など大半の遺物は各遺構を中心に出土しているが、土師器杯類は遺構群の北側にも分布の広がりが見られる。

II区

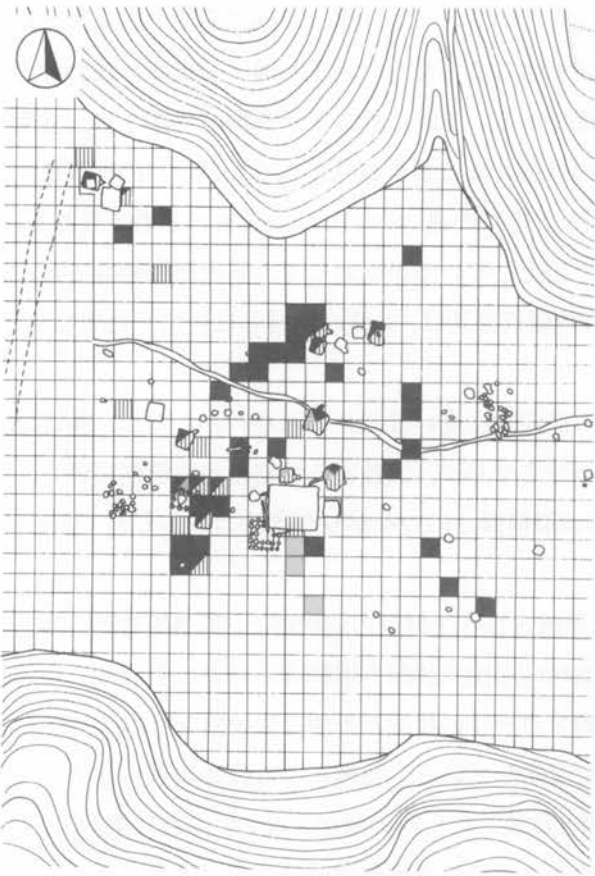
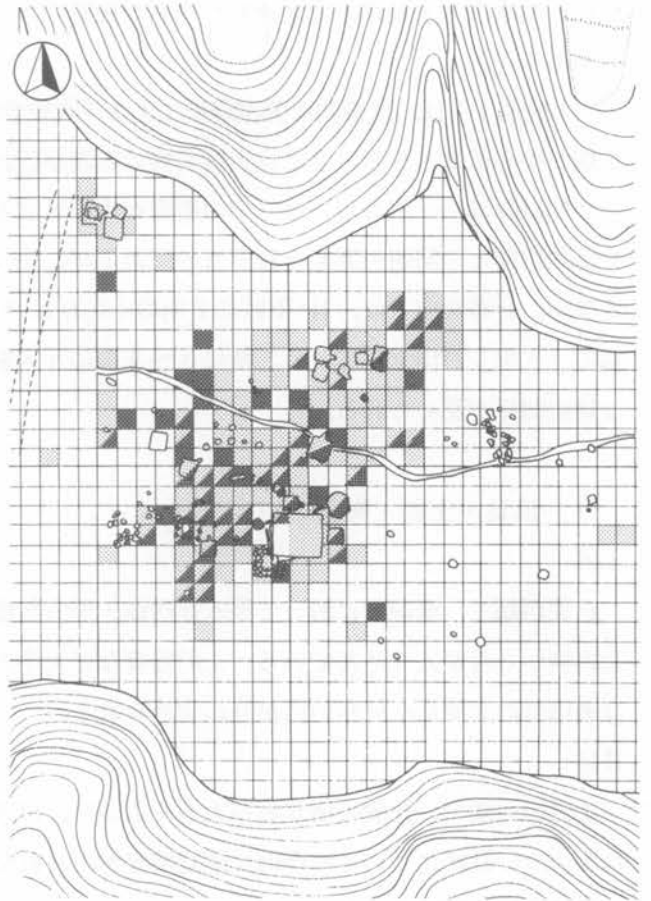
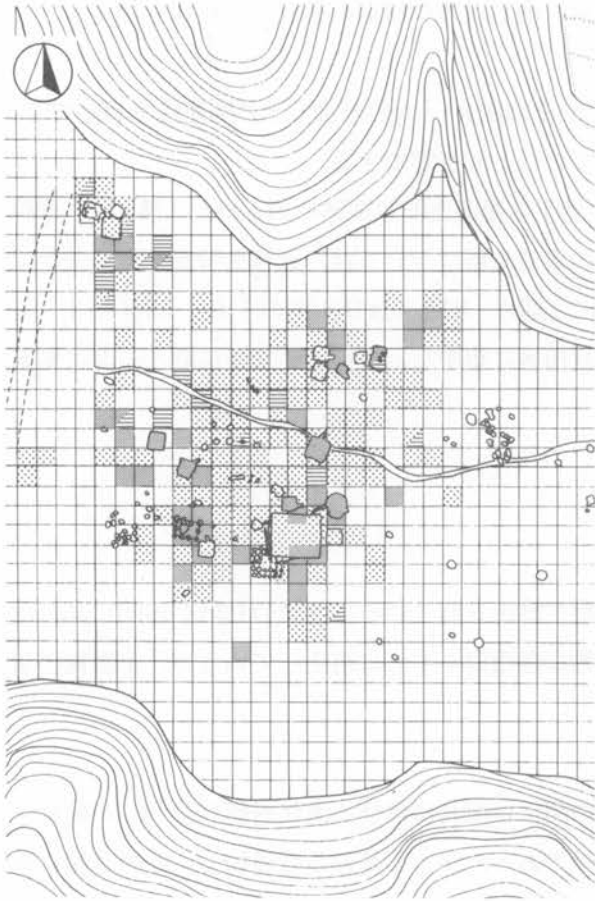
I区の西隣で、丘陵の南北幅が大きく広がり、III区との間には南北にのびる溝状遺構(SD-4)が確認されている。II区については今回は確認調査が行われたただけであったが、4基の基壇建物と、その北側に竪穴状遺構群が確認された。









遺物の出土状況は、基壇建物跡群の北側で特に多く出土している。この一帯は、確認調査の表土掘削程度にもかかわらず、面的に多くの土器が出土している。量もさることながら、土師器・須恵器杯類の他、土師器・須恵器甕、灰釉陶器、墨書土器など、器種も多様である。それに対して、基壇建物跡では、北側に比べて詳細な調査を行っているにもかかわらず、遺物の分布にまとまりが見られるものの、出土量は決して多いとはいえない。これは寺院の伽藍と、その周辺部との性格の違いを示しているものと考えられる。基壇建物跡群の北側では、日常雑器や仏具が面的に多量に出土しているのに対して、基壇建物跡群では、各建物跡ごとに点的に分布する傾向にある。これら基壇建物跡群周辺は、北側の区域とは性格的に異なり、伽藍域として区別されていたと考えられる。

また、基壇建物跡周辺と、北側の地点との器種別分布の決定的な違いは認められない。ただし、基壇建物跡では特色ある器種別土器分布傾向がある点と考えあわせるならば、個性ある性格の各基壇建物跡と、基壇建物跡群が自立して存在している地区ではなく、北側の遺構群とのつながりが推測しうるものである。

III区

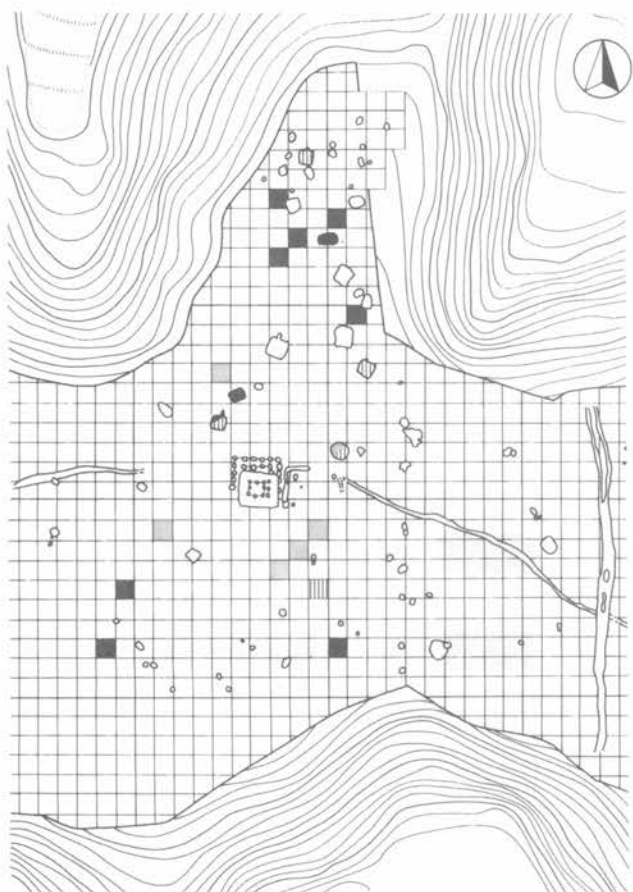
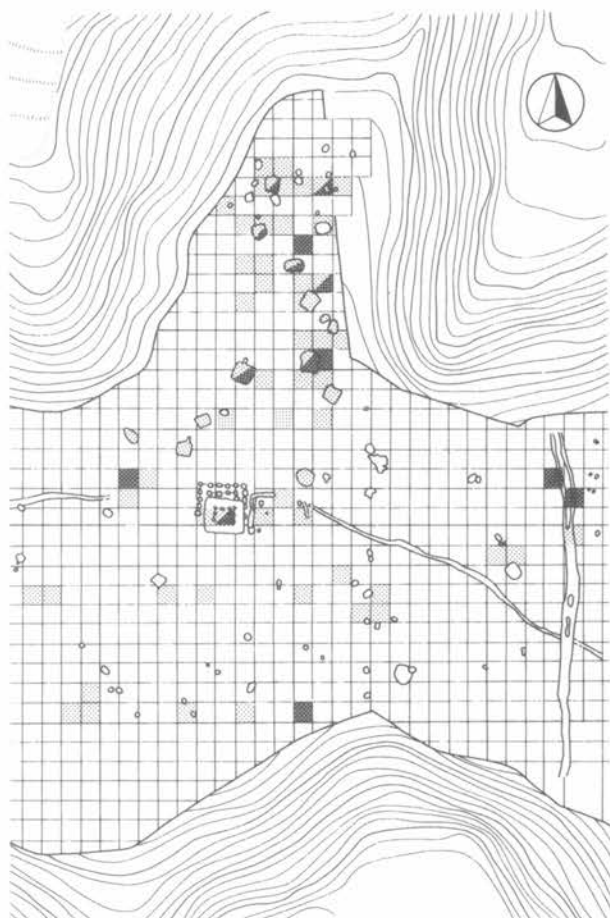
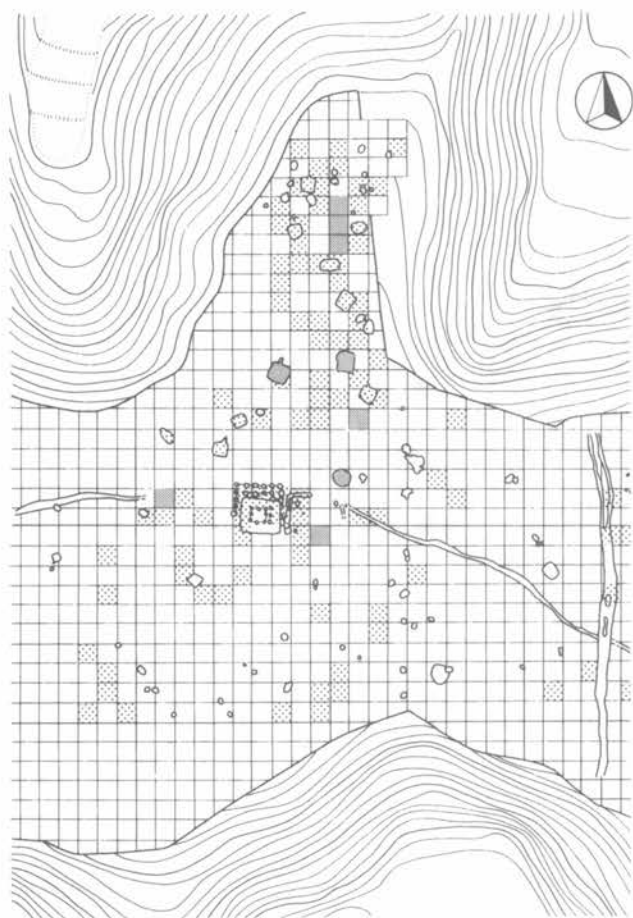
II区の東側に位置しており、遺構は、II区との境の溝状遺構SD-4付近の遺構群と、基壇建物跡S B-6の北側から西側にかけての遺構群が発見されている。遺物分布出土状況も遺構群の分布と重なる。これら二つの遺構群は性格上異なる可能性があるが、溝状遺構SD-4の状況が不明な現段階では、明らかにはしがたい。S B-6周辺の遺構群では、各器種が面的に分布している。器種による分布の違いは認められないものの、S B-6の周囲は、S B-6北側から西側と比較して土器の量が少ない。これは第275,276図の土器出土分布で、傾向が認められる。S B-6の北側から西側の遺構群周辺では、面的に土器が出土











-  土師器杯類
-  油煙痕跡のある土師器杯類
-  須恵器坏類
-  土師器甕類, 甑
-  須恵器叩き甕 (煮沸)
-  須恵器・灰釉陶器瓶・壺類
-  墨書・線刻土器, 転用硯
-  仏具

0 40m

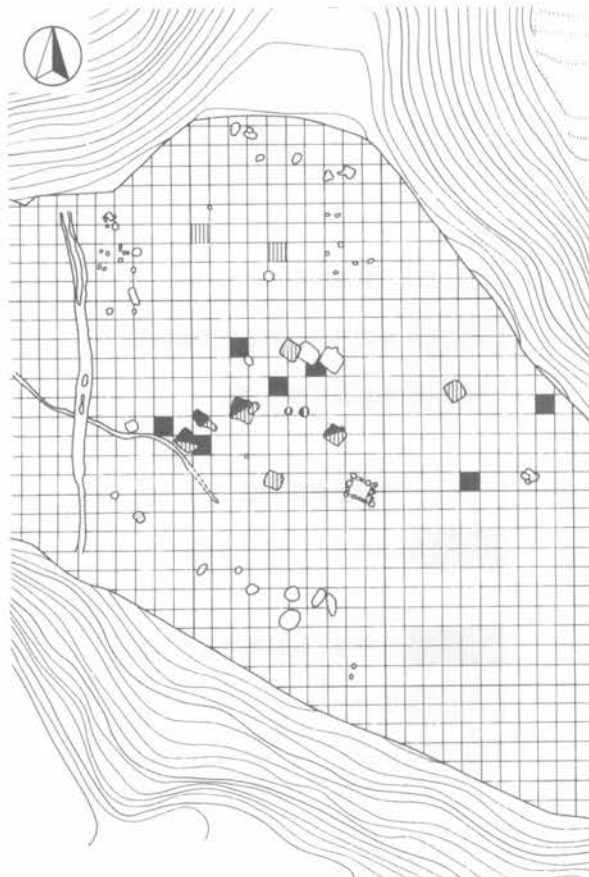
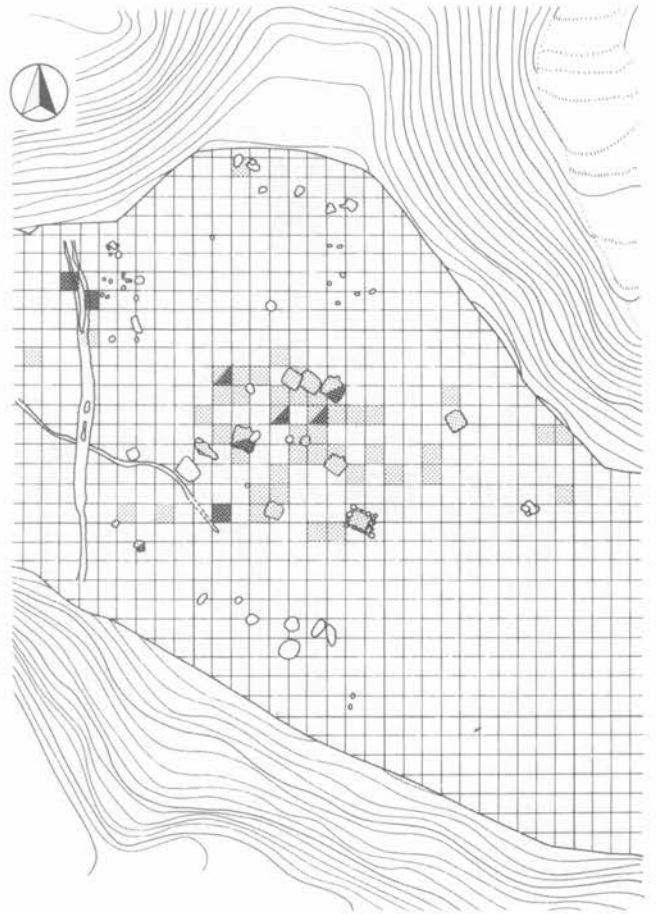
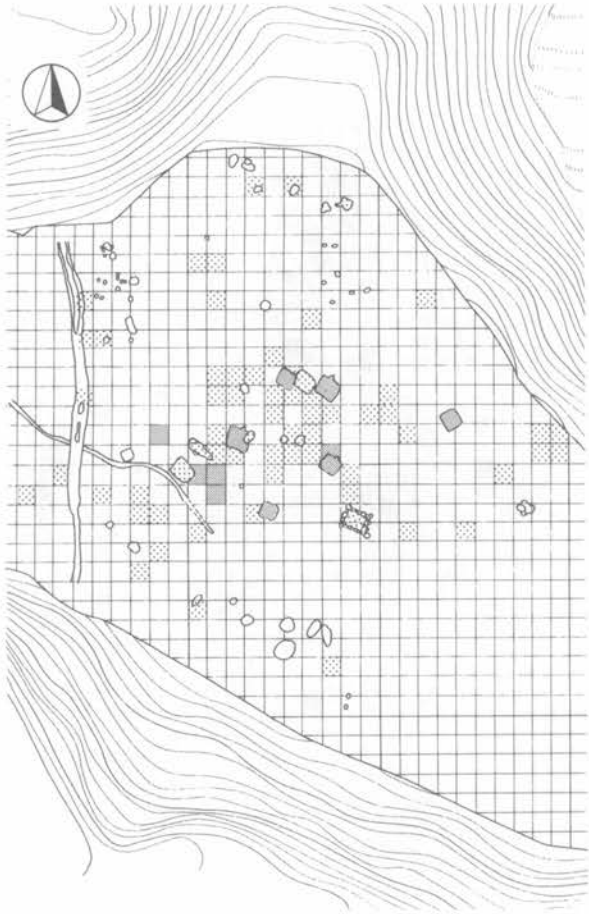
第265図 III区奈良・平安時代器種別土器分布図











-  土師器杯類
-  油煙痕跡のある土師器杯類
-  須恵器杯類
-  土師器甕類・甌
-  須恵器叩き甕（煮沸）
-  須恵器・灰釉陶器甕・壺類
-  墨書土器
-  仏具

0 40m

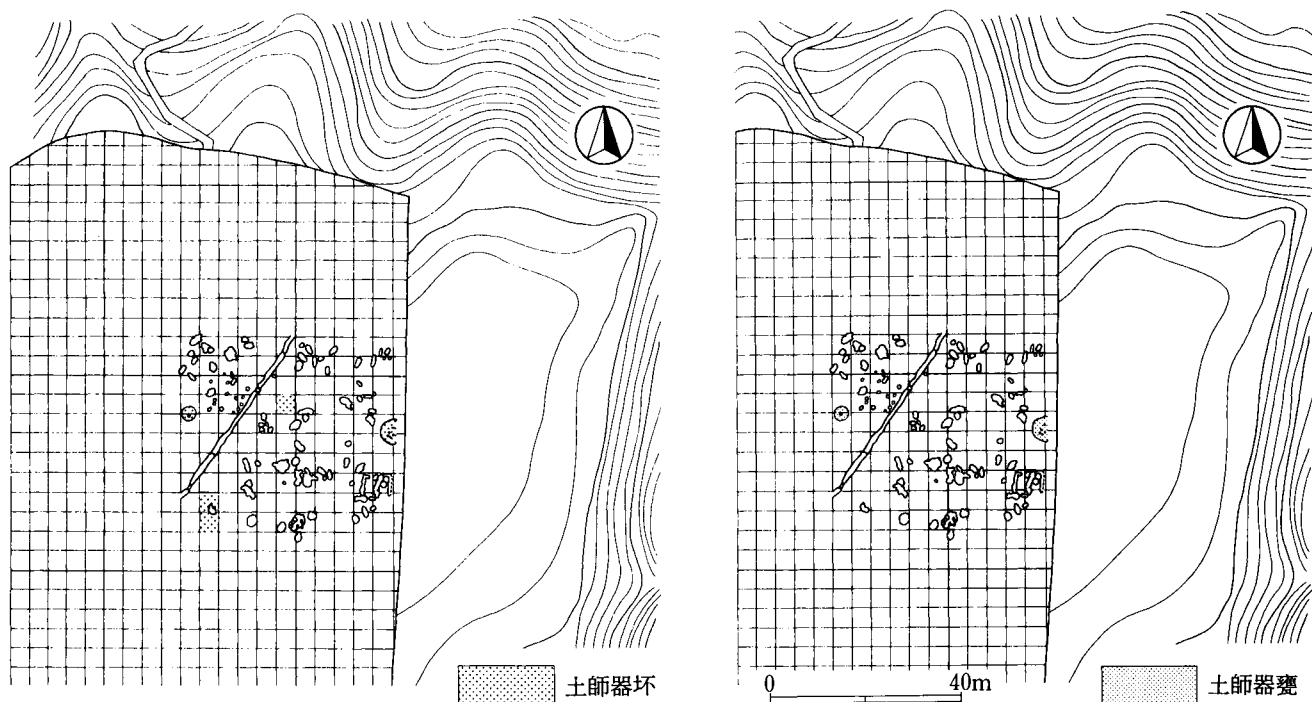
第266図 IV区奈良・平安時代器種別土器分布図



-  土師器杯類
-  油煙痕跡のある土師器杯類
-  須恵器杯類
-  土師器甕類
-  須恵器叩き甕 (煮沸)
-  須恵器・灰釉陶器瓶・壺類
-  墨書土器
-  仏具

0 40m

第267図 V区奈良・平安時代器種別土器分布図



第268図 VI区奈良・平安時代器種別土器分布図

しているのと比較すると、SB-6周辺の土器の少なさは明瞭である。そのような状況の中で、SB-6の南面中央付近で油煙付き土師器杯片がまとまって出土している点からすると、II区の基壇建物群と北側遺構群の違い同様に、SB-6周辺は、その北側から西側の遺構群周辺と区別されていた可能性がある。

IV区

他の地区とやや異なり、土器の分布に広がりがある。ただし量的には、北側に飛び出した丘陵先端の東側の遺構群付近にややまとまりが見られる。特に煮沸具の土師器・須恵器甕類はその傾向がある。それに対し、SB-5周辺は出土量が少ないものの、SB-5を中心とした土師器杯類の分布の広がりが認められる。

V区

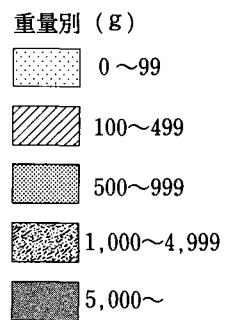
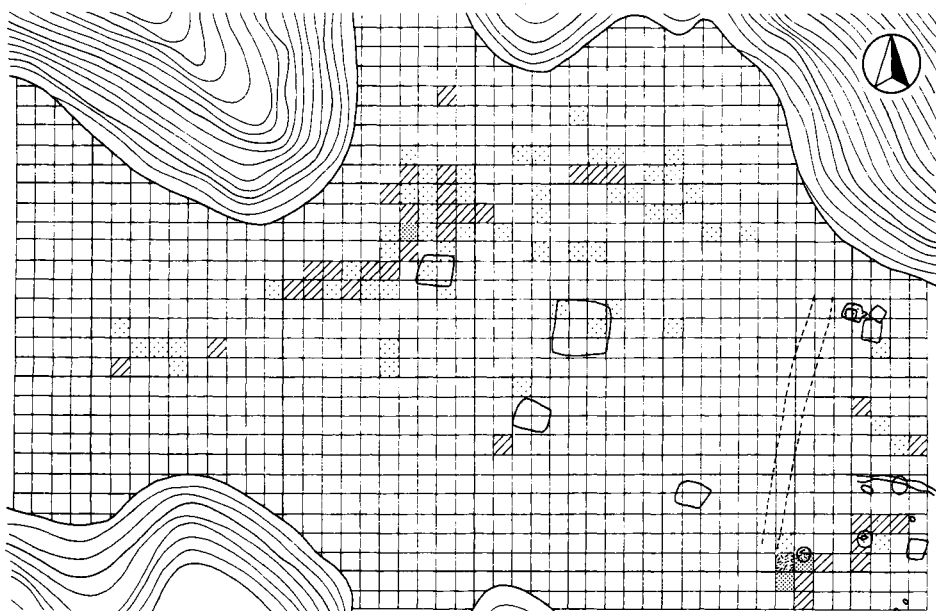
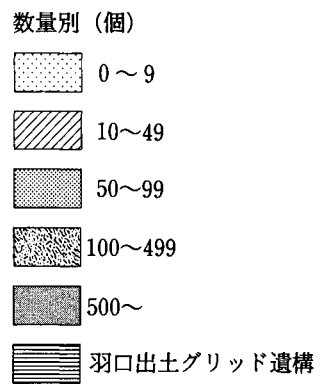
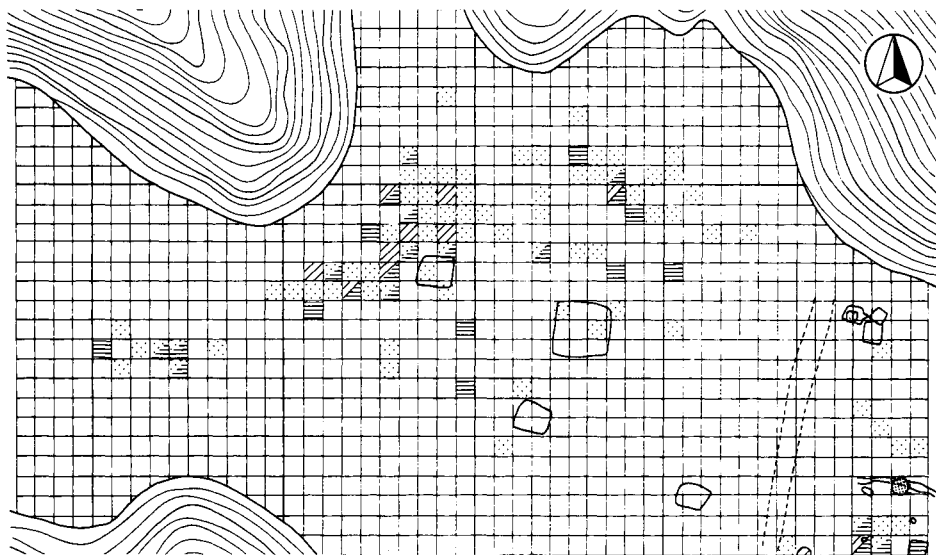
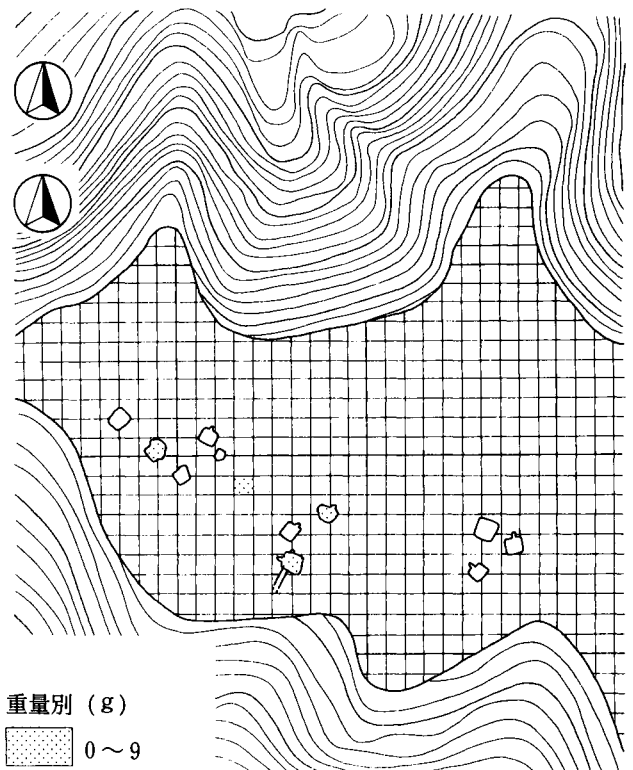
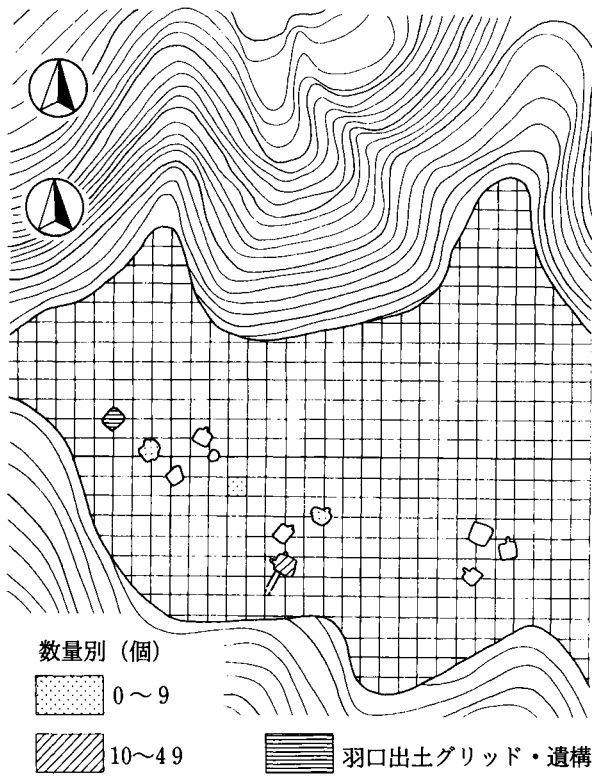
丘陵中心部の遺構群を中心に土器の出土の広がりが認められる。

VI区

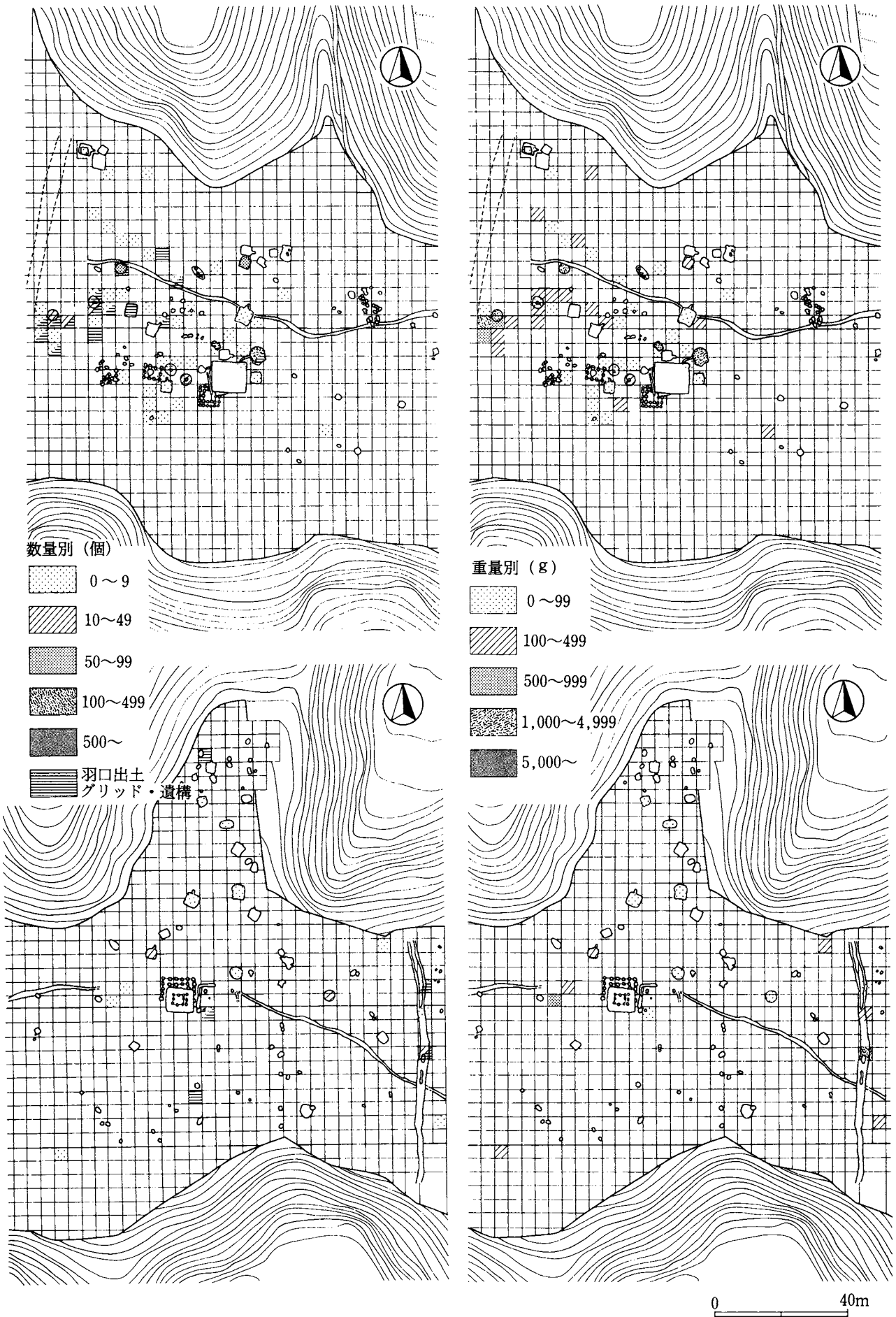
歴史時代の土器の出土は少量で、当該期の遺構の分布にほぼ一致する。これはVI区がきわめて限定的に利用されているためであると考えられる。蔵骨器の出土に見られるように、VI区は墓地として利用されていたものと考えられる。しかし、当該期の痕跡がきわめて少ないことから、VI区の本調査範囲内に限定して墓地が営まれていたと考えるよりも、居住域が発見されなかった丘陵東側（V区、VI区）のあり方を示す可能性もある。

4. 製鉄遺物の出土状況

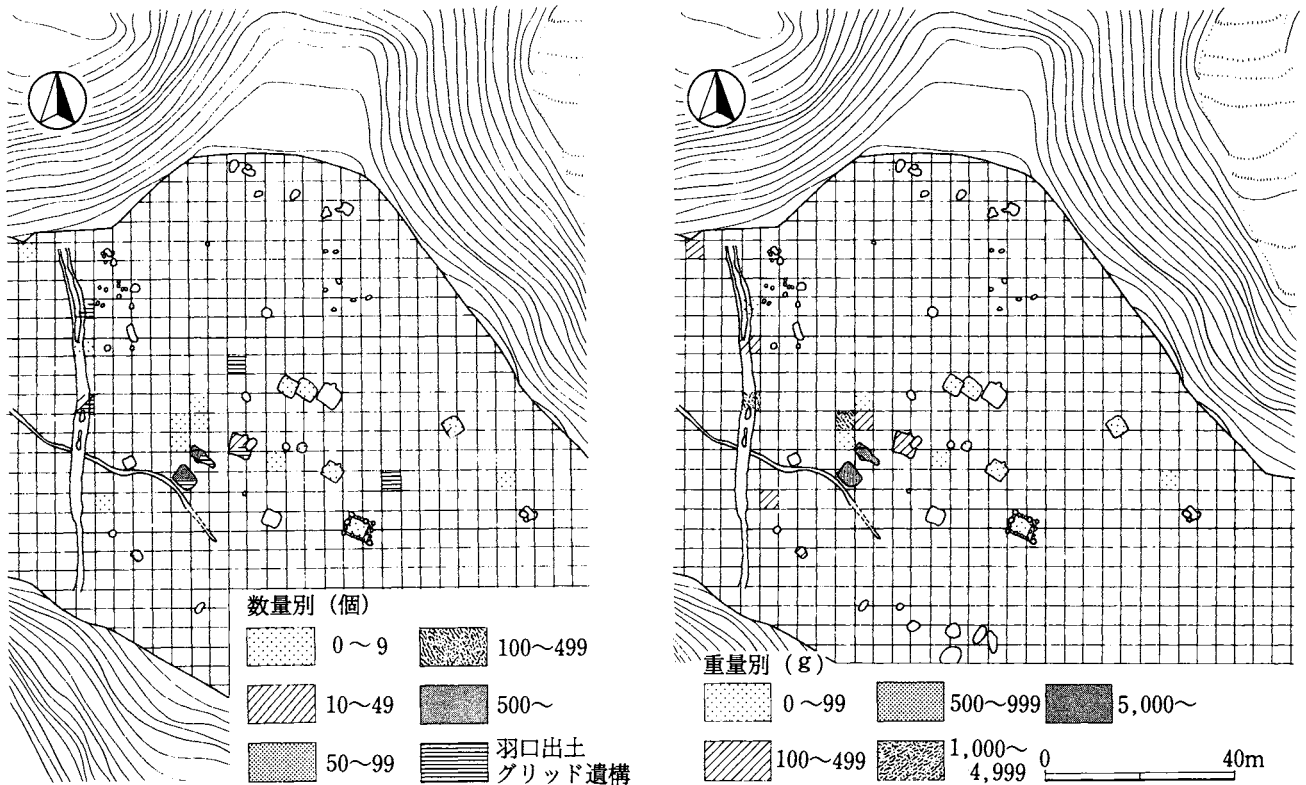
久野遺跡からは57,514.51gの鉄滓が出土した。そのうち52.1%の29,990.11gが、V区のSI-12とその周辺の遺構および、周辺のグリッドから出土した。この他、II区のSB-3北西周辺から7,283.5g(12.7%)、III区のSX-4周辺から6,062.0g(10.5%)が出土している。これら二つの地点はいずれも確認調査のみ



第269図 I・II区鉄滓重量分布図
— 314 —



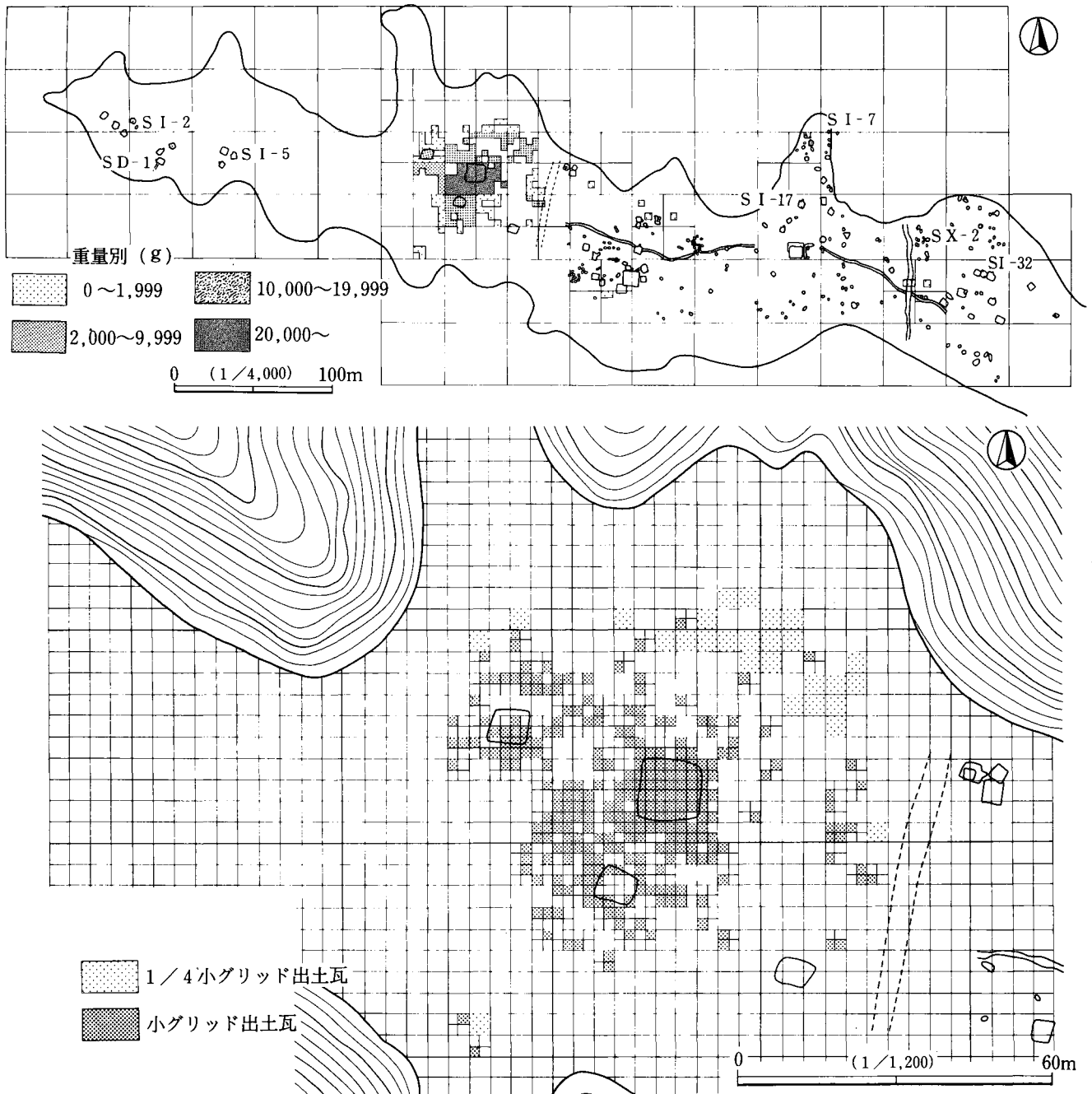
第270図 III・IV区鉄滓重量分布図



第271図 V区鉄滓重量分布図

の範囲であり、出土した鉄滓は、ごく一部であると推測され、これらの地点にもS I-12のような一定期間継続して営まれた製鉄遺構の存在が想定される。その一方で、これらの地点以外にも鉄滓や羽口などの製鉄遺物、鍛冶関連遺構の存在も複数認められることから、短期間の小規模な鍛冶が、複数の場で行われたと推測される。

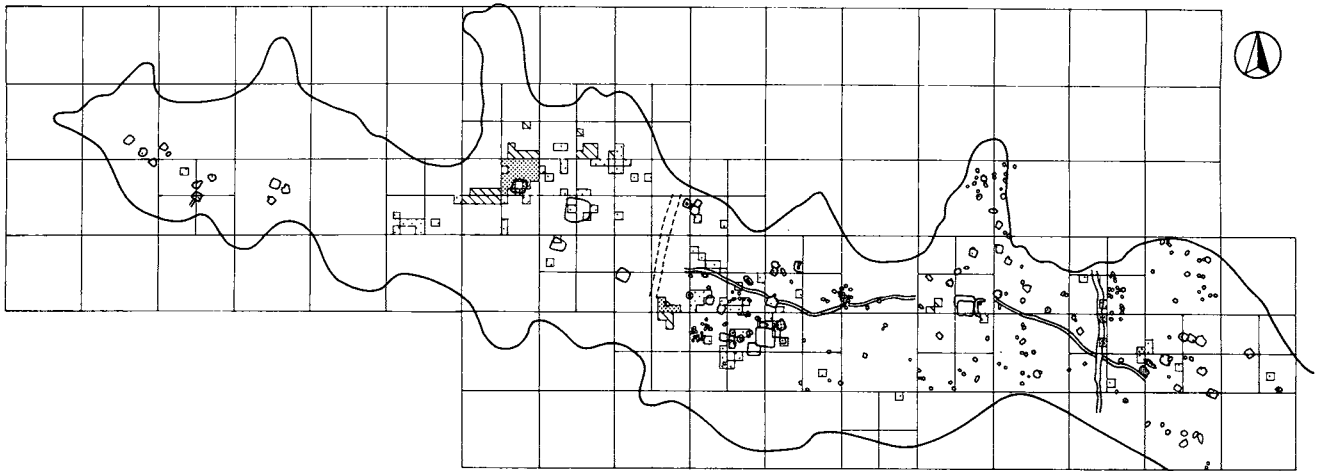
残された製品の大半は、釘などの建築部材が大半である。特にSB-2出土鉄製品は、その出土状況から仏堂に伴う釘類と、内陣周辺の荘厳具に用いられた金具類、鎮壇具を示す良好なセットと考えられる。この他の基壇建物跡のいくつかから出土している釘類などの鉄製品も、同様に利用された製品の一部分と考えられる。このように基壇建物は多くの鉄製品が利用されていたと考えられることから、基壇建物跡に接して多くの出土が認められる鉄滓の存在は、仏堂の造営や改修・補修、仏具の補修等に直接関連した製鉄遺構の存在を示す可能性がある。一方で、基壇建物跡から離れた居住域付近で発見される鉄滓の存在は、仏堂に限定されない小規模な製鉄の存在も示す可能性がある。1軒からの出土数は少ないが、多くの竪穴状遺構から出土した鋤先や小さな釘の破片の存在は、竪穴住居の生活での鉄製品の普及を示すもので、仏堂付近に限定されない鉄滓の出土との関連を窺わせるものである。なおI区から1基、III区から10基、IV区から24基、V区から4基の小規模な伏せ釜形式の炭窯が発見された。奈良・平安時代よりも新しい遺物は出土せず、それぞれ各区の竪穴住居跡や竪穴状遺構の周辺を取り囲むように分布している点から、奈良・平安時代の製鉄に関連する炭窯の可能性はある。製鉄の存在が広範囲に認められるものの、鉄滓の出土量が比較的少量である点からするなら、このような小規模な炭生産でも対応できたのではないだろうか。



第272図 瓦重量分布図

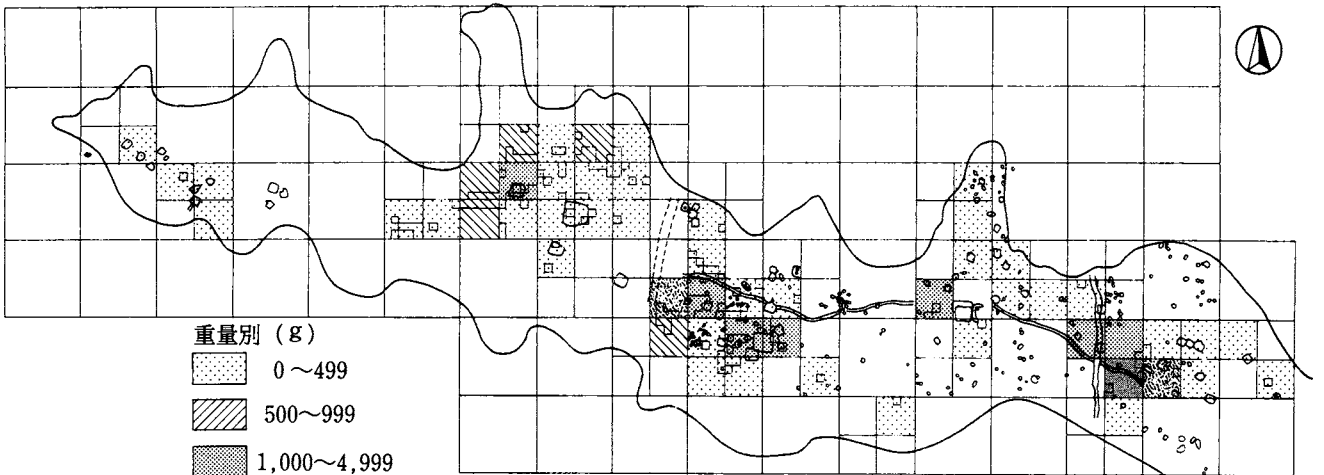
5. 瓦の出土状況

久野遺跡からは689,661gの瓦が出土した。そのうち611,229g (88.6%)の瓦がSB-2に伴って出土した。この他、周辺のSB-3やSB-1からも少量の瓦が出土しているが、いずれも瓦1枚、2枚程度の少量で、主要な屋根覆き材として利用された量は出土しなかった。大半の瓦がSB-2の基壇中央に密集して出土している。そして、瓦の平面分布もSB-2を中心に広がっている点から、これは屋根倒壊後の散逸と捉えられる。また、他の基壇建物跡での積極的な二次利用の痕跡も認められない。これらSB-2周辺の出土量を合わせたII区全体の瓦出土量は、680,850g (98.7%)になる。残りの8,811g (1.3%)は1区からV区の竪穴住居跡やグリッドから小片の状態出土した。竈構築材や砥石などの二次利用の痕跡を明瞭に残している例は見られない。ただしSX-2は例外で、焼成の良い平瓦、熨斗瓦、丸瓦がセ



第273図 瓦出土グリッド図

0 (1/4,000) 100m



- 重量別 (g)
- 0～499
 - 500～999
 - 1,000～4,999
 - 5,000～9,999
 - 10,000～

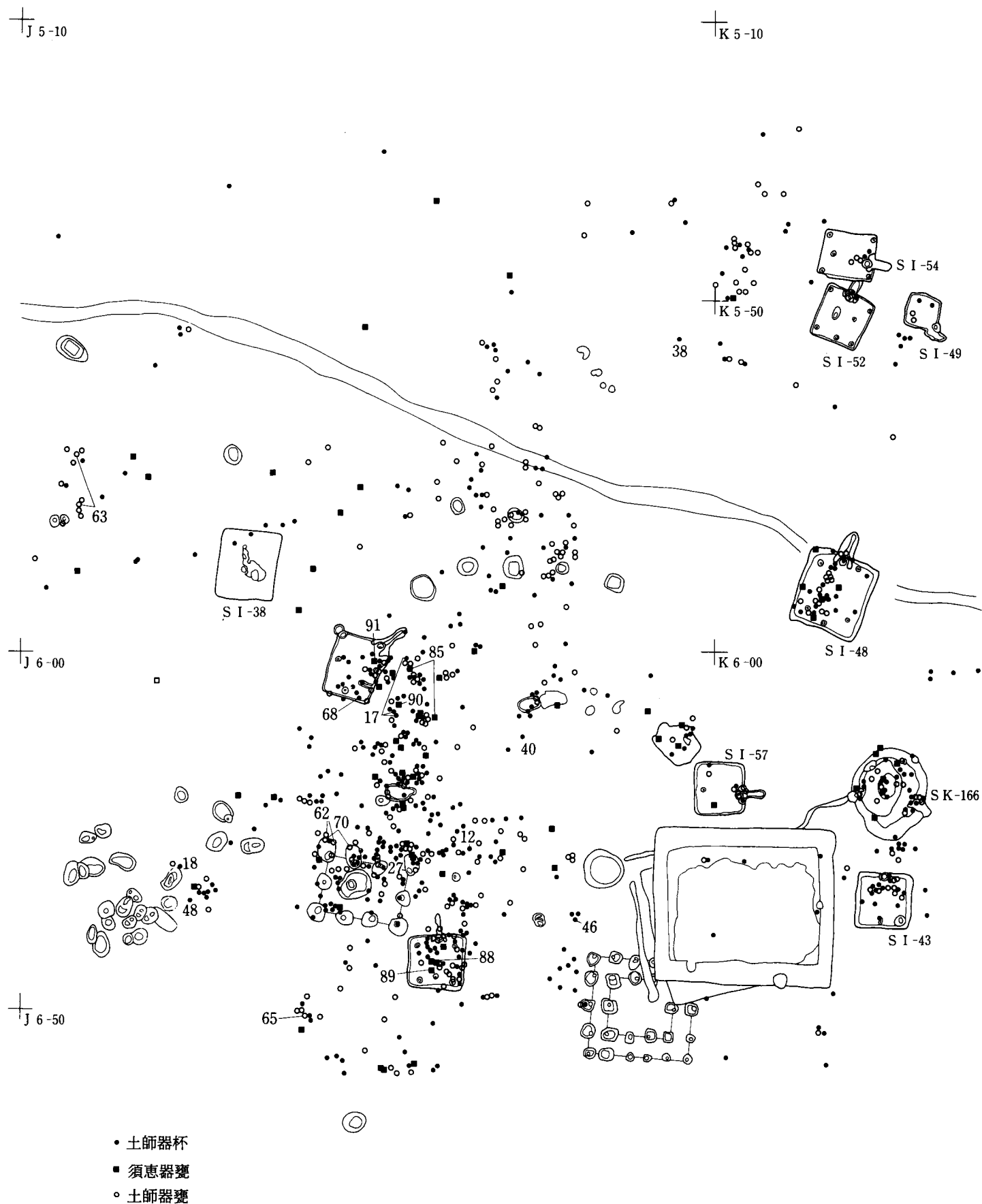
第274図 鉄滓重量分布図

0 (1/4,000) 100m

第18表 瓦集計表

	丸瓦	平瓦	不明	計 (%)
グリッド	8,963	31,525	13,582	54,070 (7.84)
SB-2	167,715	424,045	19,469	611,229 (88.63)
その他の遺構	6,428	17,919	15	24,362 (3.53)
計	183,106	473,489	33,066	689,661 (100)

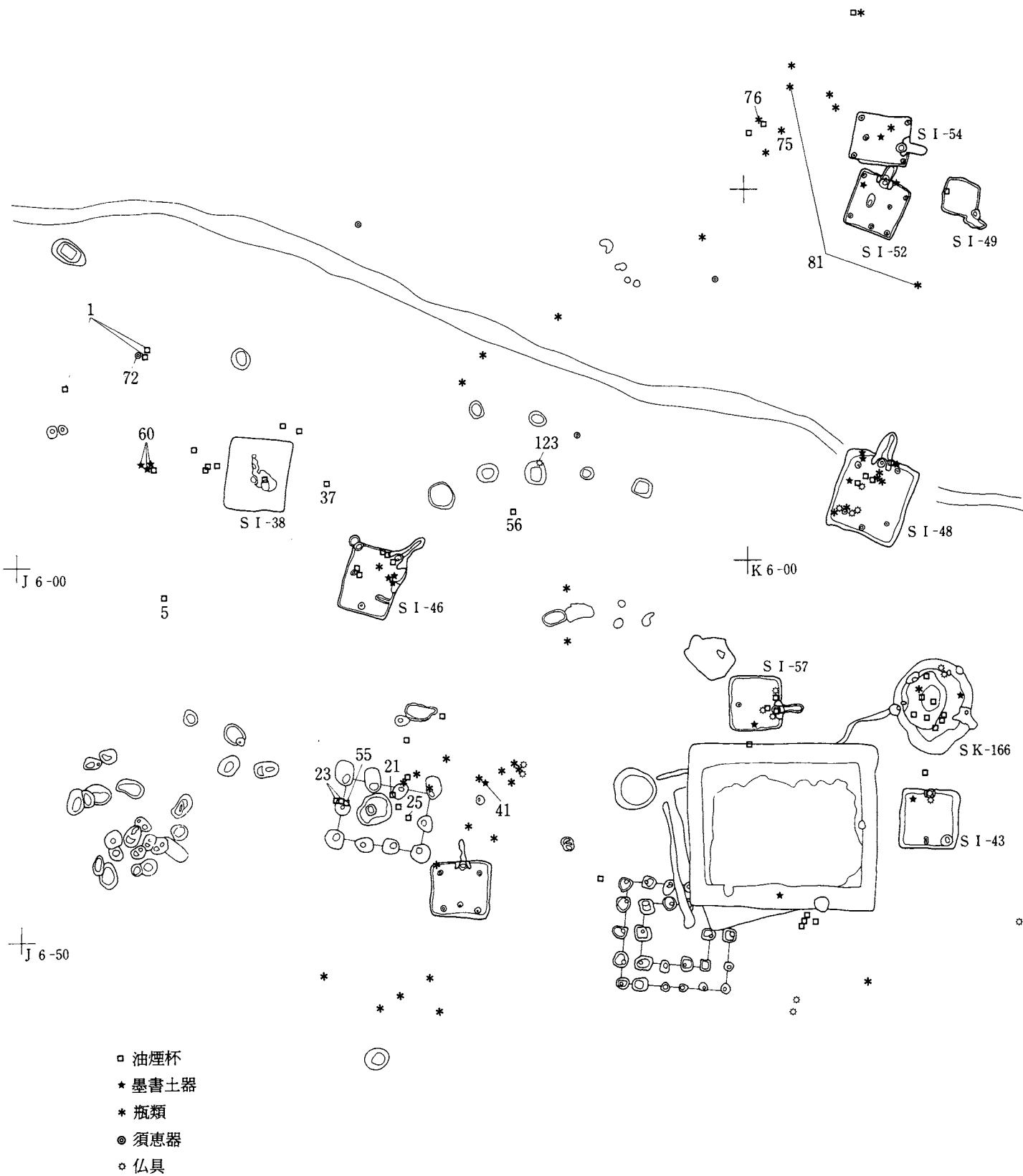
	丸瓦	平瓦	不明	計 (%)
I区				
SI-2, SI-5, SD-1	485	664		1,149 (0.17)
II区				
SB-2	167,715	424,045	19,469	611,229 (88.64)
SB-3	508	8,640		9,148 (1.33)
SB-1	2,195	5,413		7,608 (1.10)
SB-4		245		245 (0.04)
G4～I5	8,430	30,621	13,569	52,620 (7.63)
III区				
J4～K5	330	160	13	503 (0.07)
IV区				
SI-7, SI-17, SD-3		1,145		1,145 (0.17)
M4, O6-4	203	549		752 (0.11)
V区				
SI-32, SX-2	3,240	1,753	15	5,008 (0.73)
O6-1,2		195		195 (0.03)
計	183,106	473,430	33,066	689,602 (100)



第275図 III区器種別土器分布図(1) (1/600)

J 5 10

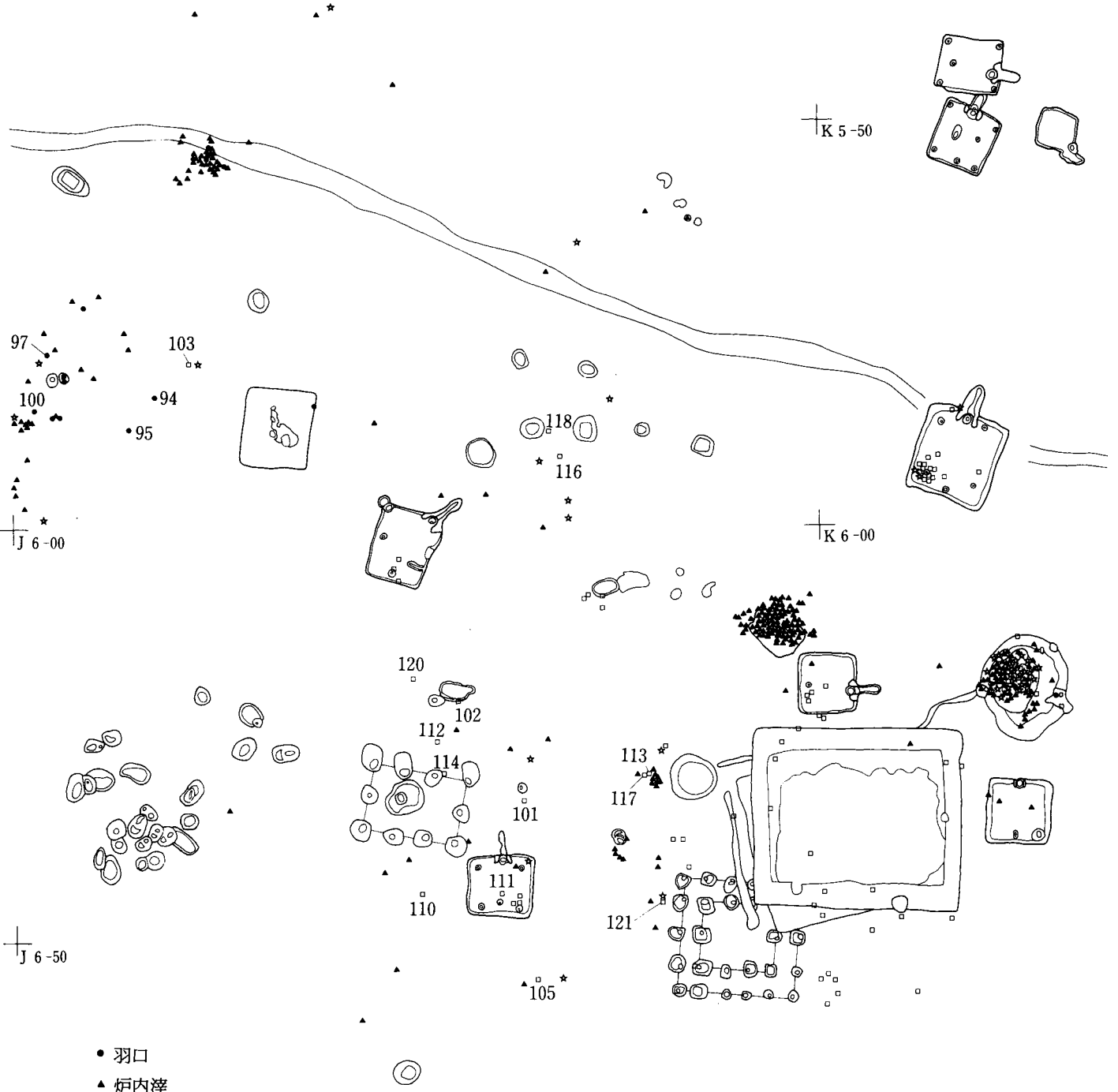
K 5-10



第276図 III区器種別土器分布図(2) (1/600)

J 5-10

K 5-10



- 羽口
- ▲ 炉内滓
- ★ 鉄塊
- 鉄製品

鉄滓・羽口・鉄製品

第277図 III区鉄滓・羽口・鉄製品分布図 (1/600)

ットで検出されている。このような瓦のあり方は極めて特異であるといえる。SX-2出土瓦をSB-2出土瓦と比較すると、成形・焼成が最も良い製品であるといえるが、遺跡全体の瓦のあり方からすれば、SB-2所用瓦と同一品と捉えられるものであろう。

6. 遺跡の性格

遺構・遺物の状況を総合すると、1期・8世紀後半、丘陵西端部には小規模な伽藍を中心とした寺院が成立、9世紀代の2～3期に寺院範囲は東側に拡大している。丘陵東側のV区には工房的な場所が、さらにその東VI区には、寺院の僧侶のものと思われる墓域が成立し、9世紀中頃から後半にかけて最も整備されている。そして、10世紀前半には寺院全体が消滅に向かっている。

久野遺跡の寺院の特色は、小規模ながら整った伽藍が、それまで山林であった部分に、8世紀後半に突然成立する点にある。この特色は、山林寺院としての性格が推定できる。袖ヶ浦市東郷台遺跡、遠寺原遺跡、市原市萩ノ原遺跡と共通するものである。

東郷台遺跡と萩ノ原遺跡で使用された瓦は、市原市二日市場廃寺のものであり、さらに萩ノ原遺跡では複数の基壇建物が9世紀中頃以降に整備され、10世紀前半には消滅している。

一方、久野遺跡は、II区の伽藍部分で使用された瓦には、木更津市大寺廃寺と共通した隅欠き瓦が含まれており、年代的な消長傾向も萩ノ原遺跡と共通している。

東郷台遺跡と萩ノ原遺跡は、二日市場廃寺の山寺としての性格が推定されており、以上の状況から判断すると、久野遺跡についても大寺廃寺などの山寺・山林寺院としての性格を推定できよう。

写真図版



遺跡航空写真（昭和42年撮影、約 1/10,000）



1～3. 遺跡調査前（Ⅱ区基壇状高まり）



4. R 8-10土層断面
5



6. I・Ⅱ区全景（東から）



1. V区全景 (南から)



2



3

2・3. S I - 55全景・炉検出状況

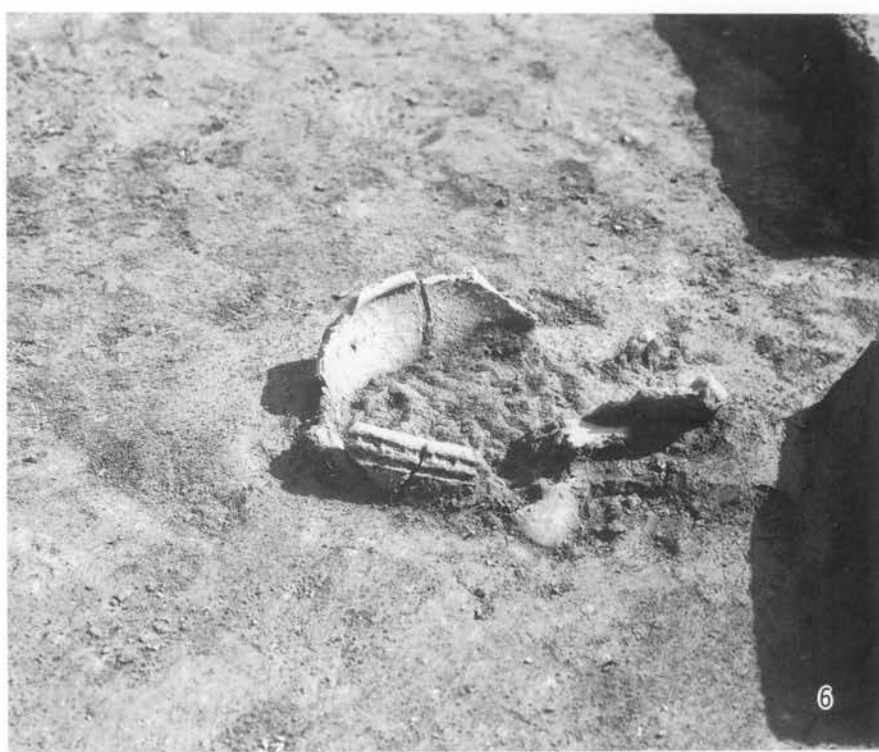


4



5

4～6. S I - 55埋甕検出状況



6



1



2

1. SK-183
2. SK-186



3

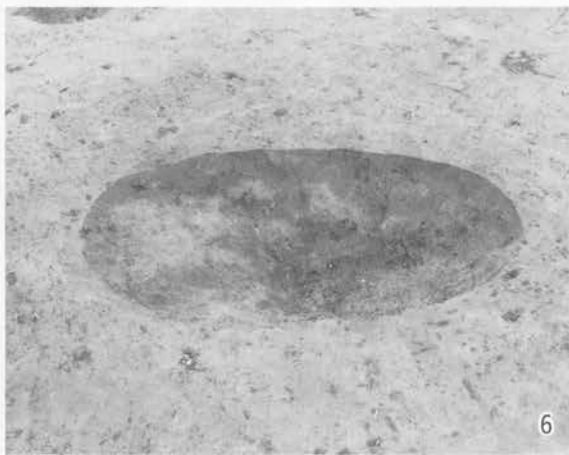


4

3 · 4. SK-190



5



6

5 · 6. SK-191



7



8

7. SK-193
8. SK-199



9

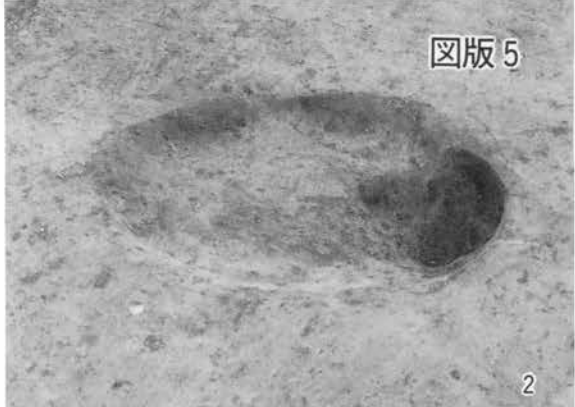


10

9. SK-200
10. SK-206

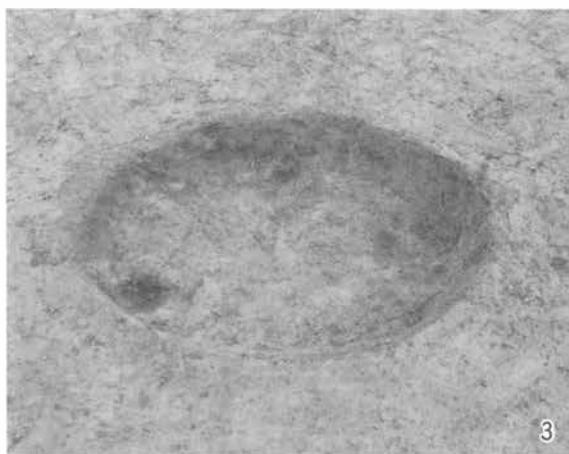
1. SK-210

2. SK-211

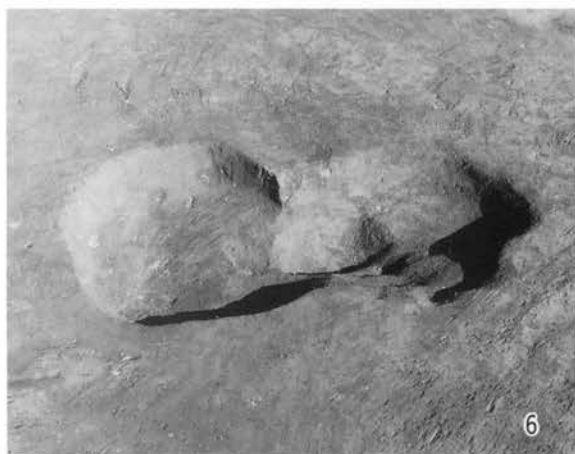


3. SK-212

4. SK-213



5・6. SK-216



7. SK-217

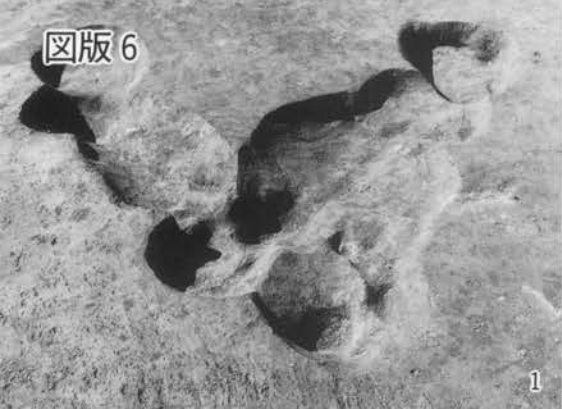
8. SK-219



9. SK-220・231

10. SK-221・222・223





1



2

- 1. SK-224・225
- 2. SK-226・227・228



3



4

- 3. SK-232
- 4. SK-233

Ⅳ区縄文時代土坑 (1)



5



6

- 5. SK-87
- 6. SK-88



7



8

- 7. SK-90
- 8. SK-142



9



10

- 9・10. SK-143



1・2. SK-156

1

2



3. SK-158

4. SK-163

3

4



5. SK-164

6. SK-170

5

6

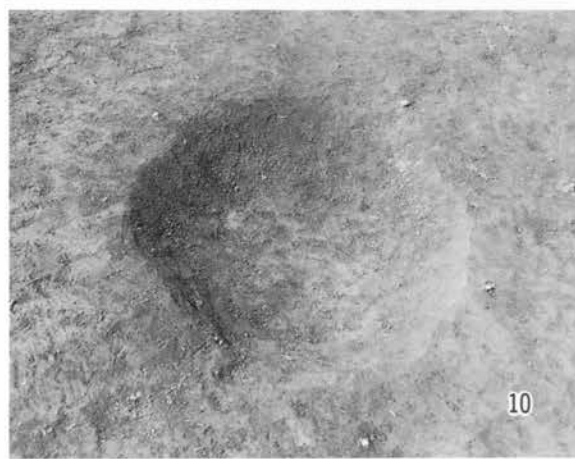


7・8. SK-241

7

8

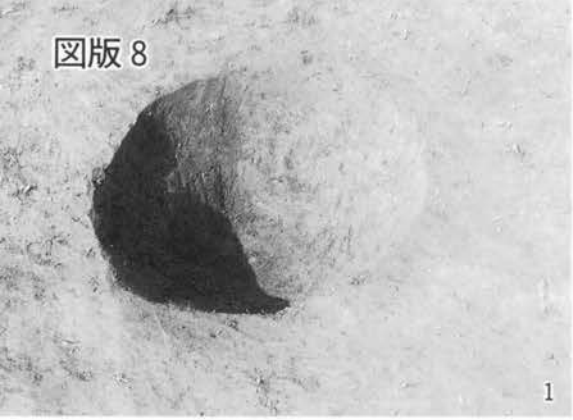
V区縄文時代土坑



9・10. SK-91

9

10

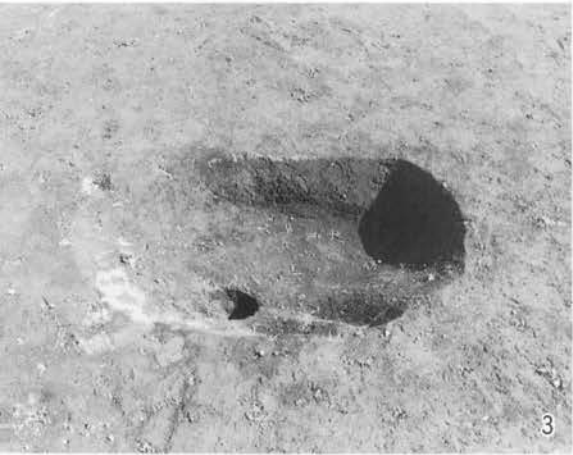


1



2

- 1. SK-89
- 2. SK-110



3



4

- 3. SK-111
- 4. S I-21



5



6

VI区縄文時代土坑 (1)

- 5. SK-1
- 6. SK-2

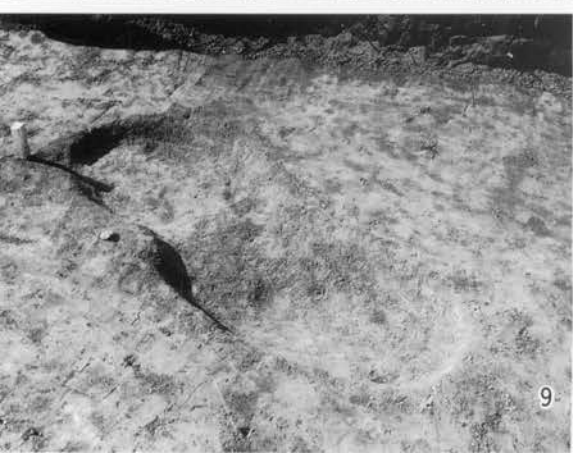


7



8

- 7・8. SK-3



9



10

- 9. SK-6
- 10. SK-7

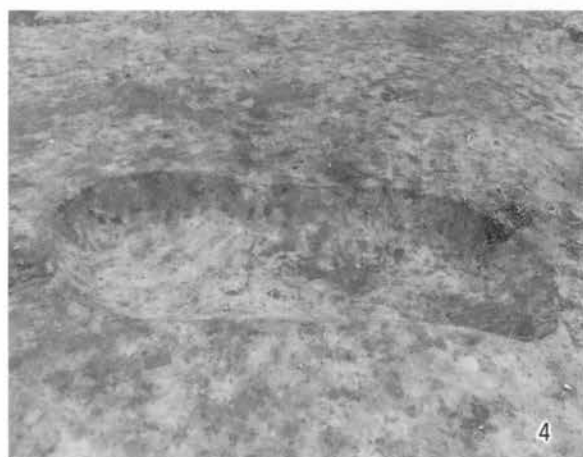
1. SK-9・10

2. SK-13



3. SK-15・16

4. SK-19



5. SK-21

6. SK-22



7. SK-25

8. SK-29



9. SK-9

10. SK-10





1. SK-38
2. SK-39



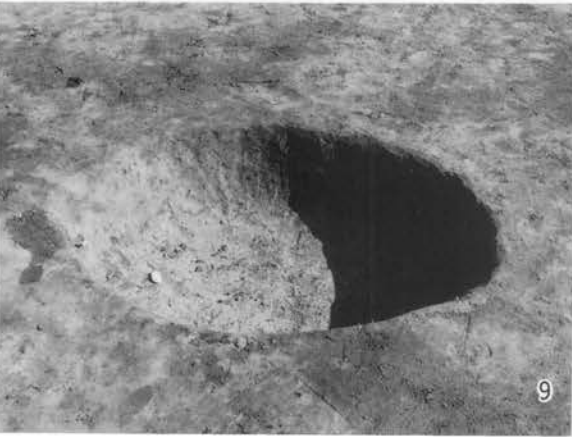
3. SK-49
4. SK-50



5. SK-52
6. SK-53



7. SK-57
8. SK-59



9. SK-63
10. SK-80



1. Icブロック



2. Iaブロック



3. III区縄文時代土坑群 (J 6-22周辺)



4. IVbブロック (西から)



2. IVbブロック

1. IVcブロック



4. IVdブロック

3. IVeブロック



6. IVeブロック

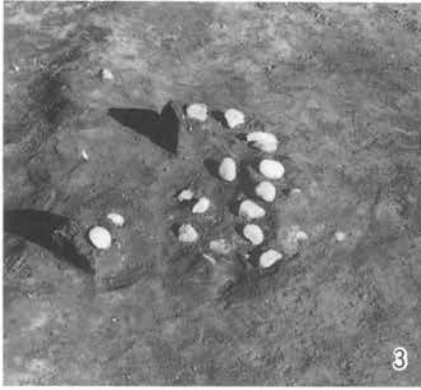
5. IVfブロック



1・2. Vfブロック



2

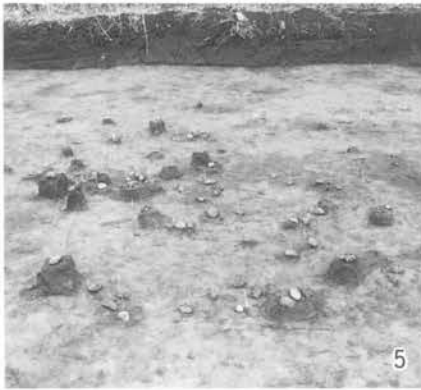


3・4. U7グリッド礫群検出状況



4

VI区礫群



5・6. W7グリッド礫群検出状況



6



1

1. S I-14



2

2. II区全景



3

3. I 4-14·15瓦出土集中地点



4

4. SB-1·2

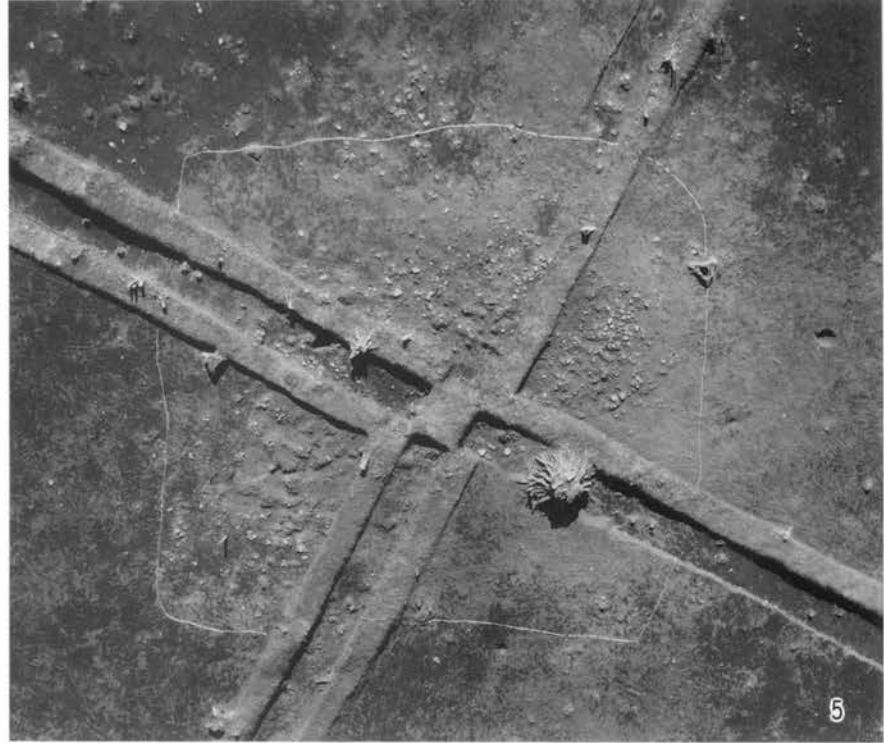


5

5. II区全景



1·2. SB-1



3~7. SB-2





1



2



3

1~3. SB-3



4



5

4·5. SB-4



6

6. IV区全景

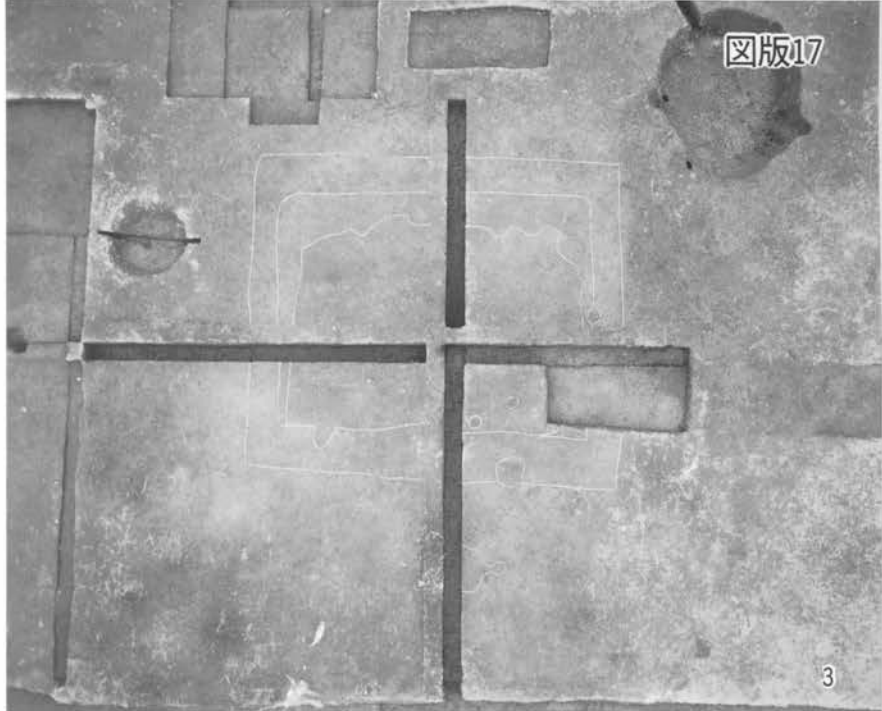


7

7. IV区遺物出土状況



1~3. SB-6 a



4·5. SB-6 b



6. SB-6 c





1

1. S I - 51 全景



2

2. S I - 51
P 6



3

3. S I - 51
P 7



4

4. S B - 5 a 全景



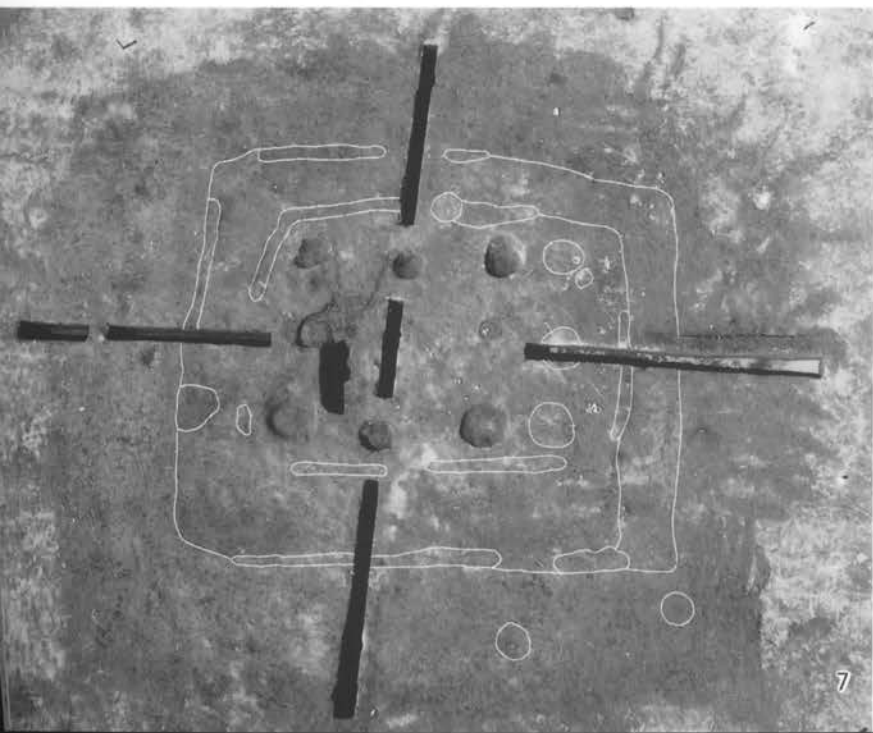
5

5. S B - 5 a
東西東トレンチ



6

6. S B - 5 a
南北南トレンチ



7

7. S B - 5 a



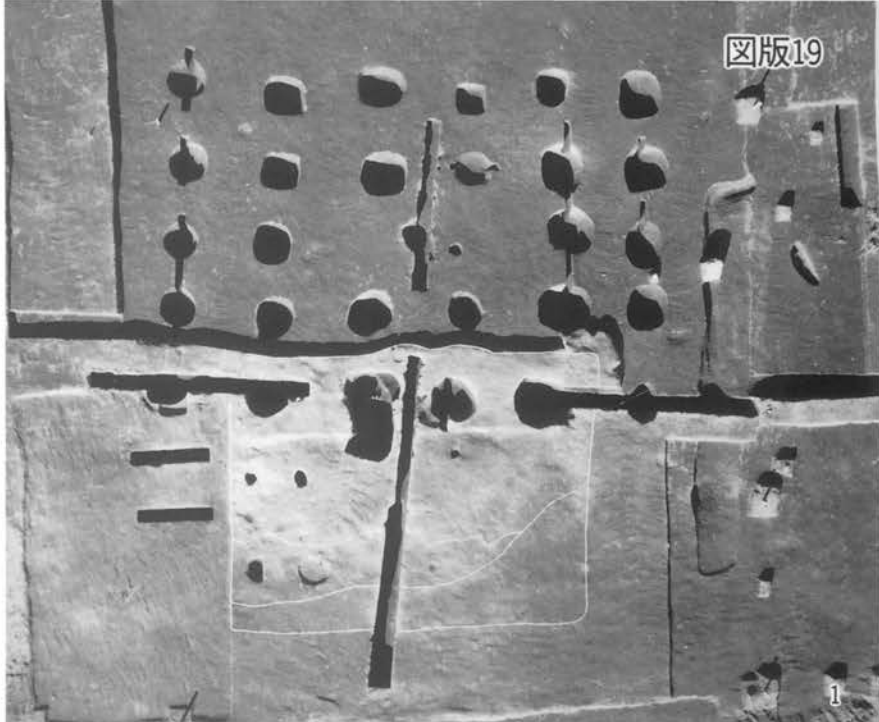
8

8. S B - 5 a
P 4



9

9. S B - 5 a
P 8



1. SB-5 c、SB-5 d



2. SI-21



3. SX-2

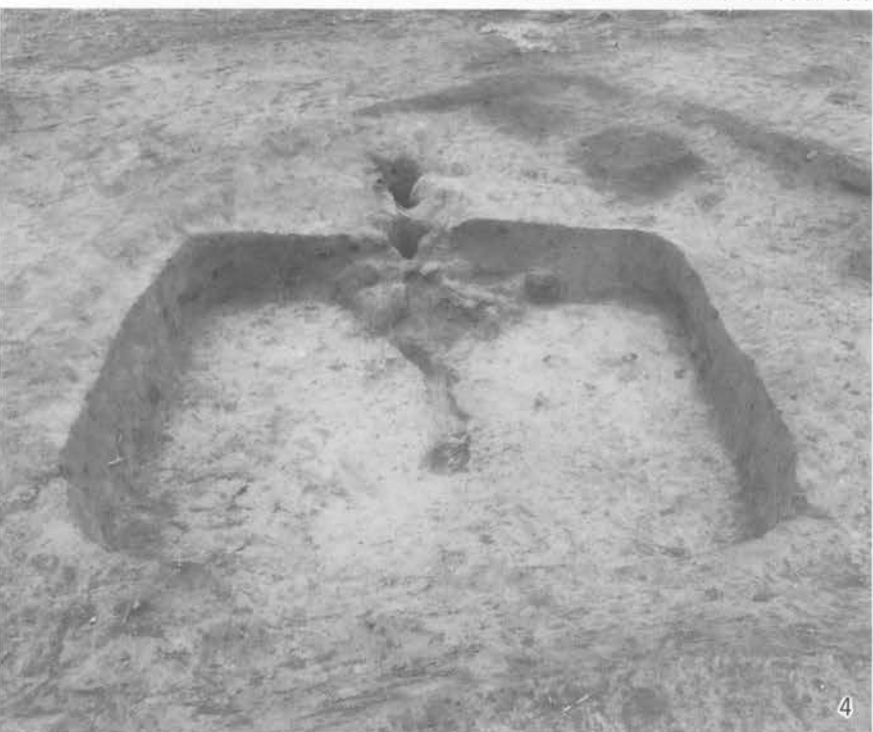


4. SD-3



1~3. SI-1

I区奈良・平安時代住居跡 (1)



4・5. SI-2



6~8. SI-3



1・2. SI-4



I区奈良・平安時代住居跡 (2)



3~5. SI-5



6・7. SI-6





1

I区奈良・平安時代住居跡 (3)



2



3

1~3.
S I-15



4

III区奈良・平安時代住居跡 (1)



5



6

4~6.
S I-23



7



8



9

7~9.
S I-34



1



2

1~3. S I-42



3

Ⅲ区奈良・平安時代住居跡 (2)



4

4. S I-43



5



6

5~7. S I-45



7



1

Ⅲ区奈良・平安時代住居跡 (3)



2



3

1~3. S I-46



4



5



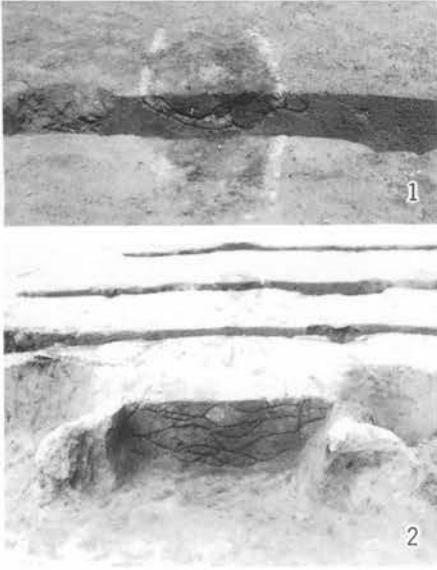
6

4~6. S I-48



7

7. S I-49



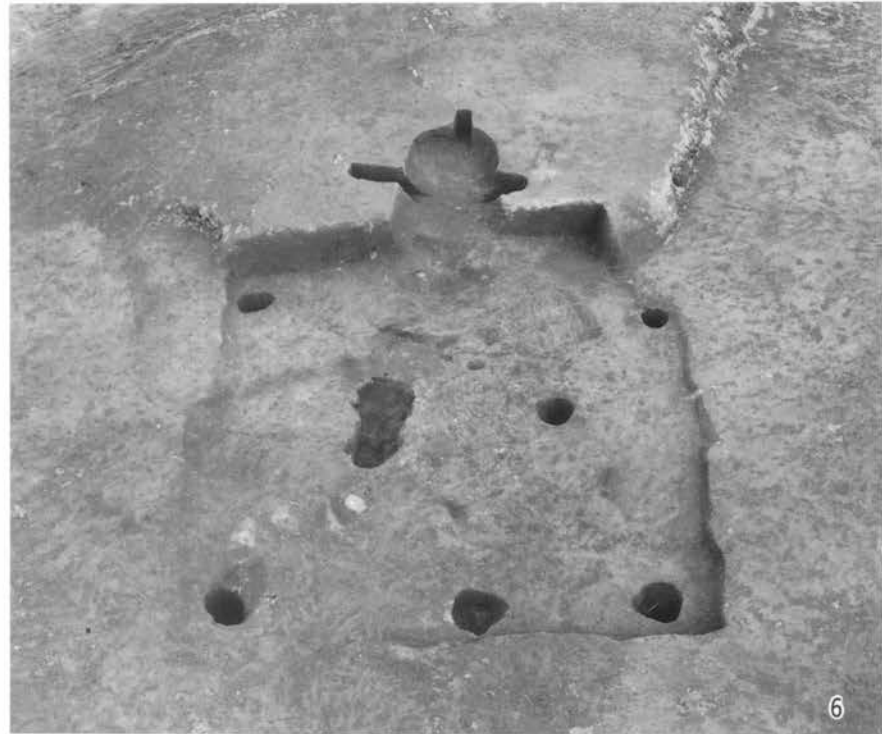
1~3. S I-50



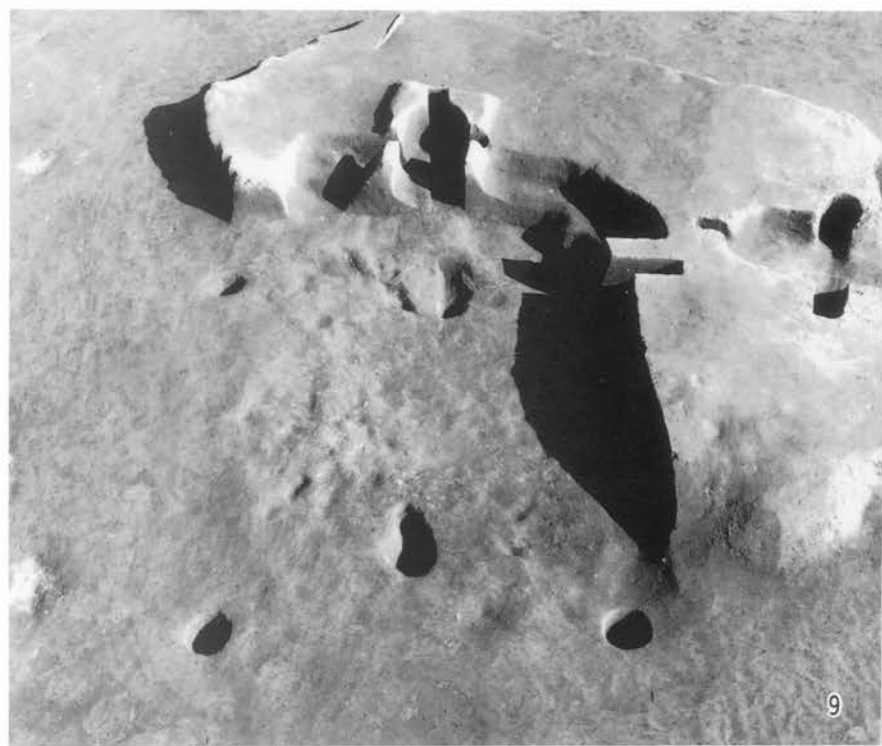
III区奈良・平安時代住居跡 (4)



4~6. S I-52



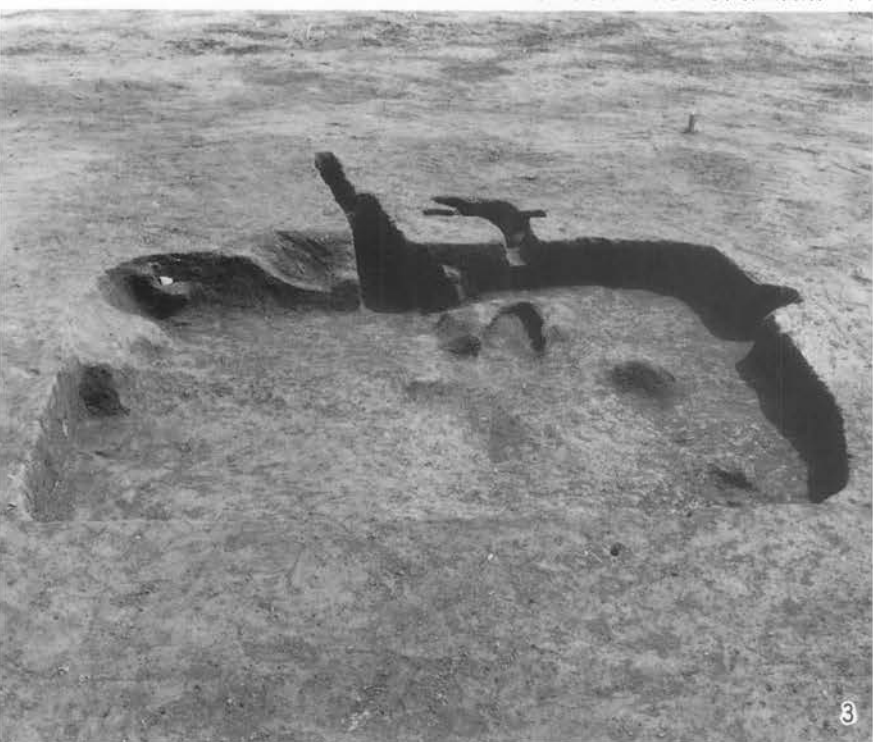
7~9. S I-54





1

III区奈良・平安時代住居跡 (5)



3

IV区奈良・平安時代住居跡 (1)



6



2

1・2. S I-57



4



5

3~5. S I-17



7

6・7. S I-33



1



2



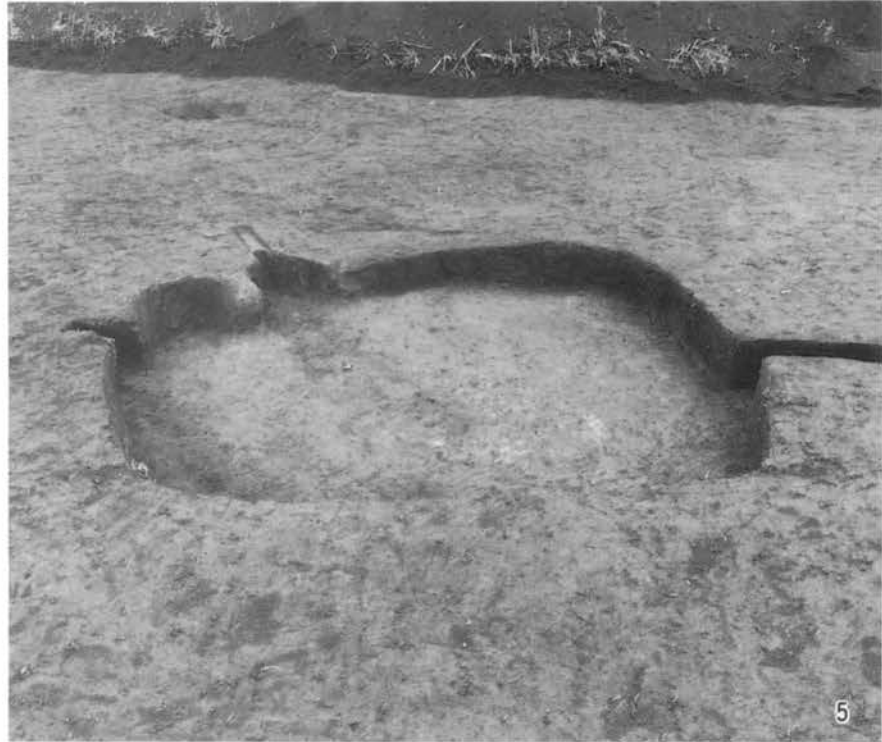
3

1~3. S I-35

IV区奈良・平安時代住居跡 (2)

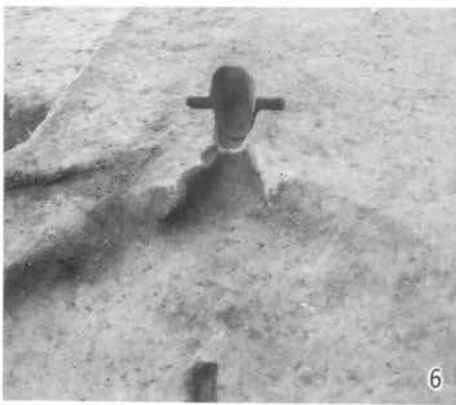


4



5

4・5. S I-37



6



7

6・7. S I-16



1

V区奈良・平安時代住居跡 (2)



3



2

1・2. S I-22



4



5

3~5. S I-24



6

6. S I-26

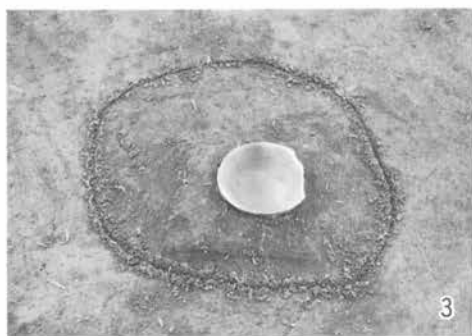


1. S I - 28

V区奈良・平安時代住居跡 (3)



2



3

2 ~ 4. S I - 31



4



5

5 • 6. S I - 32

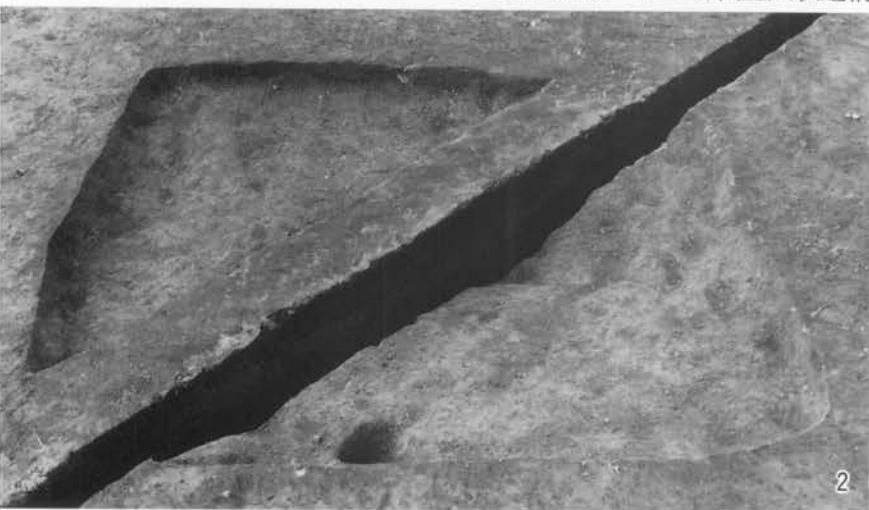


6



1. S I - 9

I・III区奈良・平安時代竪穴状遺構



2. S I - 41



3. S I - 44

IV区奈良・平安時代竪穴状遺構



4. S I - 7



1. S I - 10

1

IV区奈良・平安時代竪穴状遺構



2. S I - 18

2



3. S I - 36

3

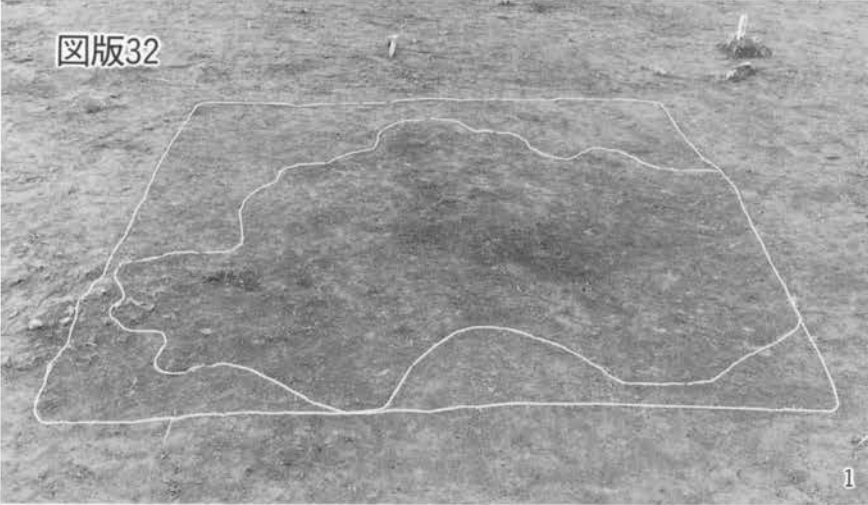


4

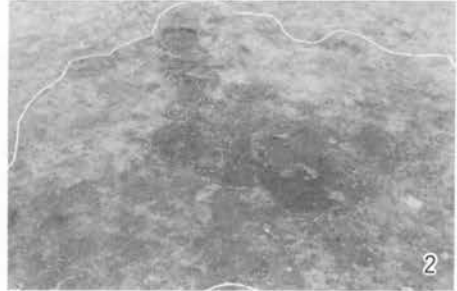
4・5. S I - 30



5

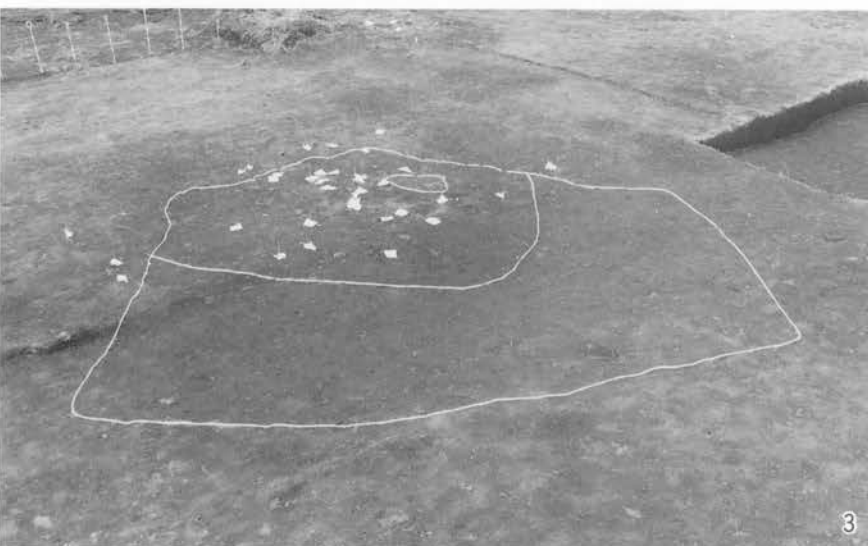


1

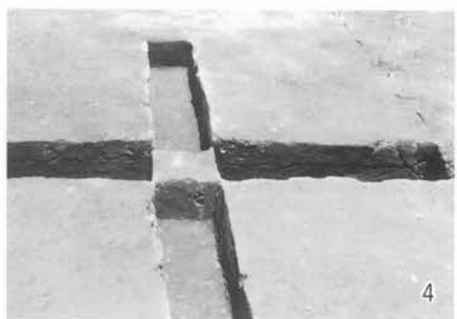


2

1・2. S I-38



3



4

3・4. S I-39

Ⅲ区奈良・平安時代鍛冶関連遺構 (1)



5

5. S I-40



6



7



8

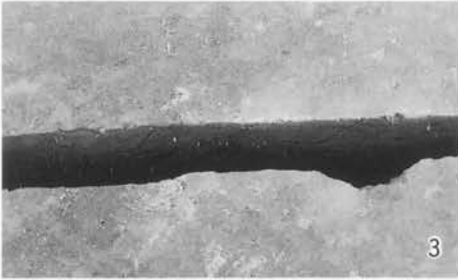
6~8.
S I-47



1・2. S I-53



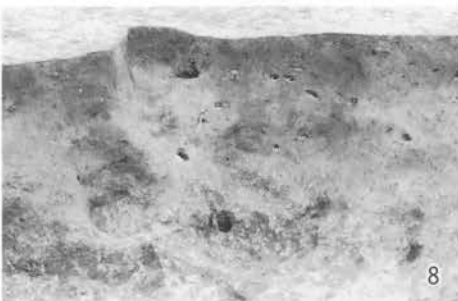
III区奈良・平安時代鍛冶関連遺構 (2)



3~5.
SK-162



6・7. SK-166



8・9. SK-166





1

V区奈良・平安時代鍛冶関連遺構



2

2. S I-12
炉1



3

3. S I-12
炉2

1. S I-12 全景



4



5



6

4~6.
S I-12



7

7. S I-13

V・VI区奈良・平安時代遺構

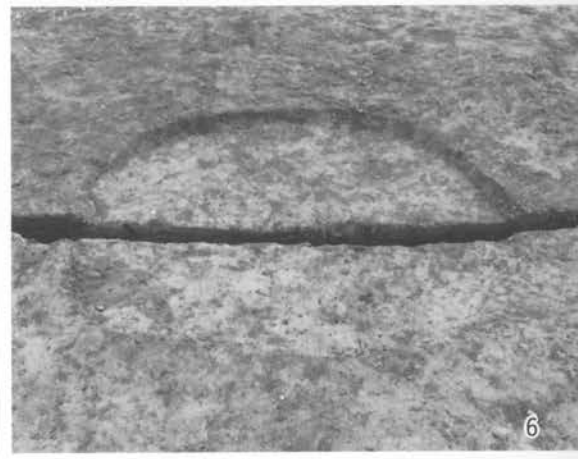


1. SI-56 2. SZ-1

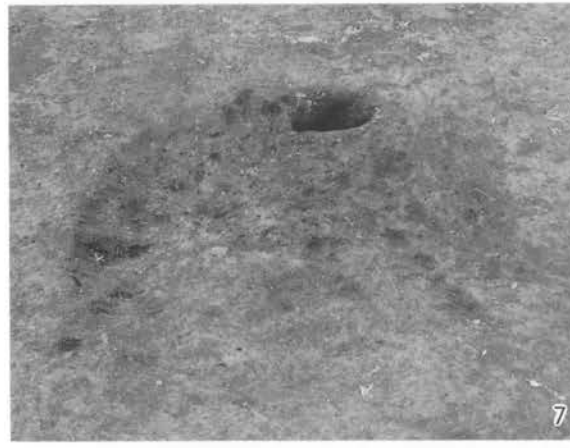


3. SK-41 4. SE-1

III区奈良・平安時代土坑 (1)



5. SK-148 6. SK-150



7. SK-152 8. SK-159



9. SK-160 10. SK-161



1

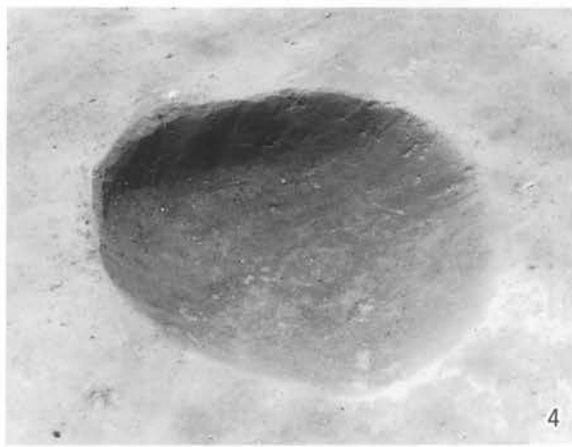


2

1. SK-168 2. SK-171

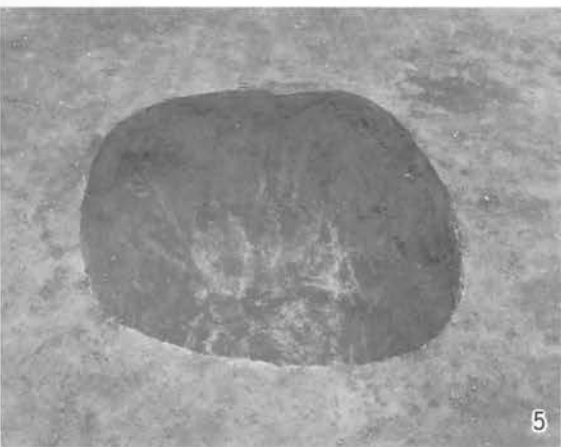


3



4

3. SK-174 4. SK-175

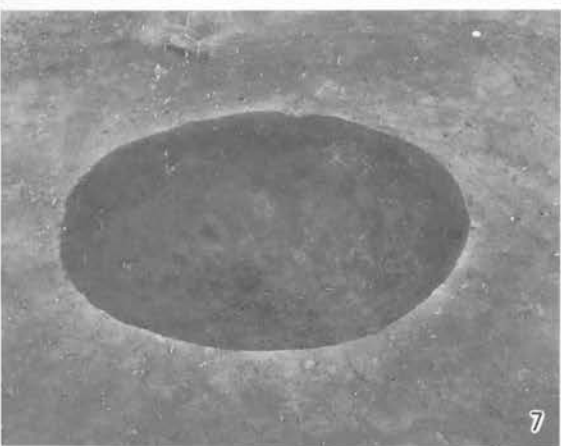


5



6

5. SK-177 6. SK-178



7



8

7. SK-180 8. SK-181



9



10

9・10. SK-182

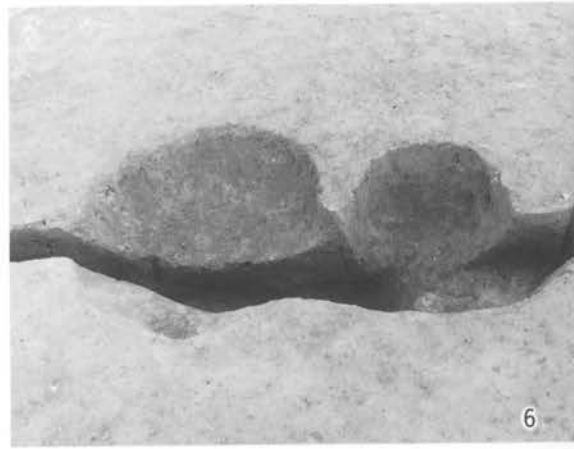
III区奈良・平安時代土坑 (3)



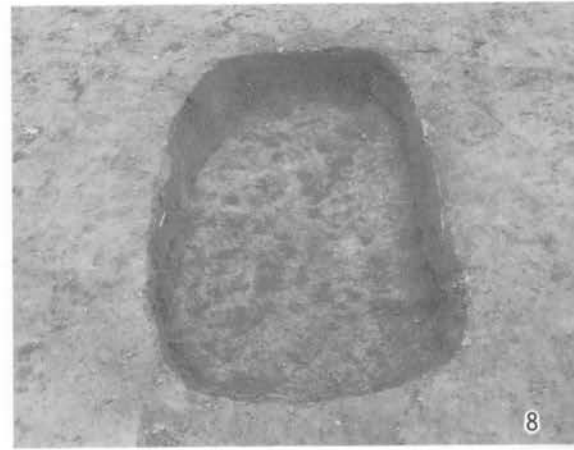
1. SK-185 2. SK-189



3. SK-195 4. SK-196



5. SK-203 6. SK-218

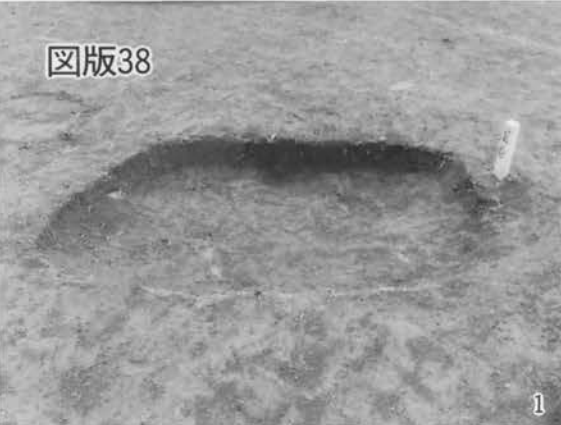


7・8. SK-242

IV区奈良・平安時代土坑 (1)



9. SK-74 10. SK-76



1



2

1. SK-78 2. SK-79



3



4

3. SK-84 4. SK-85



5

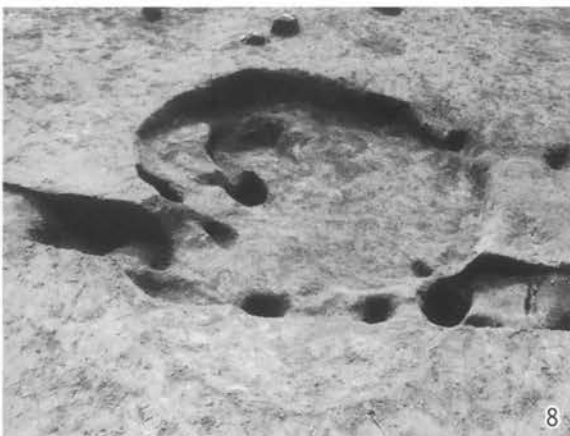


6

5. SK-86 6. SK-131



7



8

7. SK-134 8. SK-135

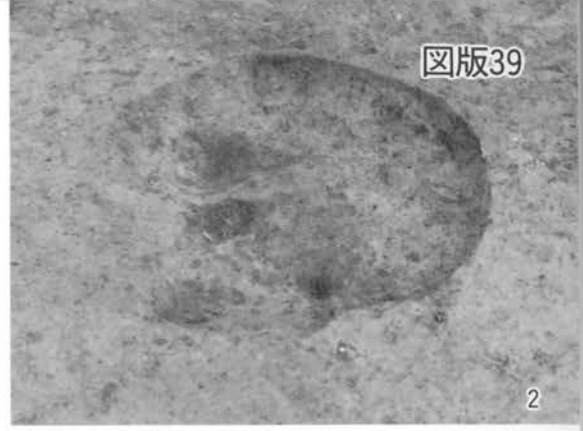


9



10

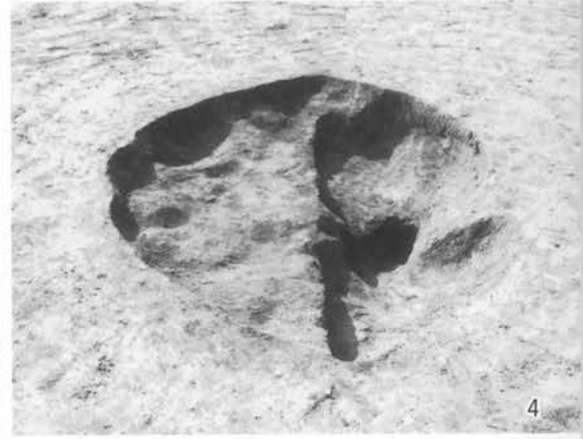
9. SK-136, 137
10. SK-141



1. SK-145 2. SK-153

1

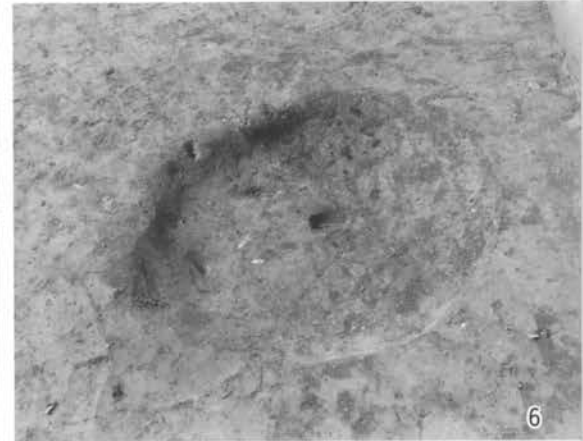
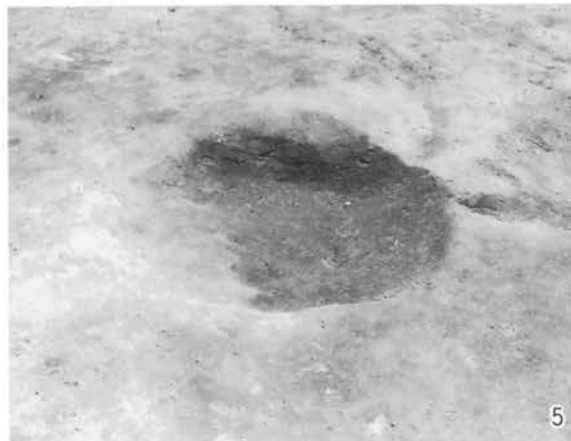
2



3. SK-154 4. SK-155

3

4



5. SK-156 6. SK-167

5

6

V区奈良・平安時代土坑 (1)



7. SK-123 8. SK-125

7

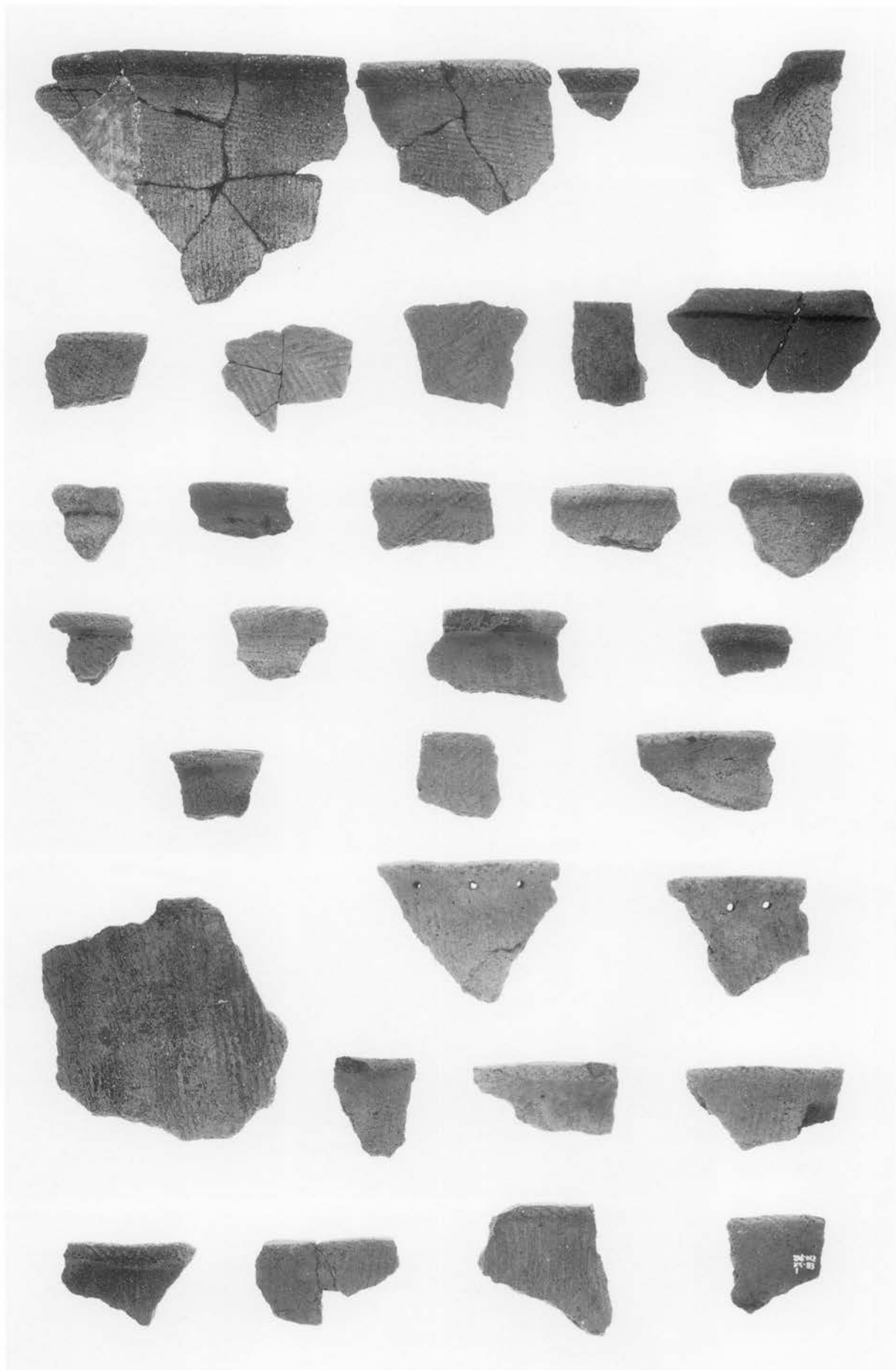
8



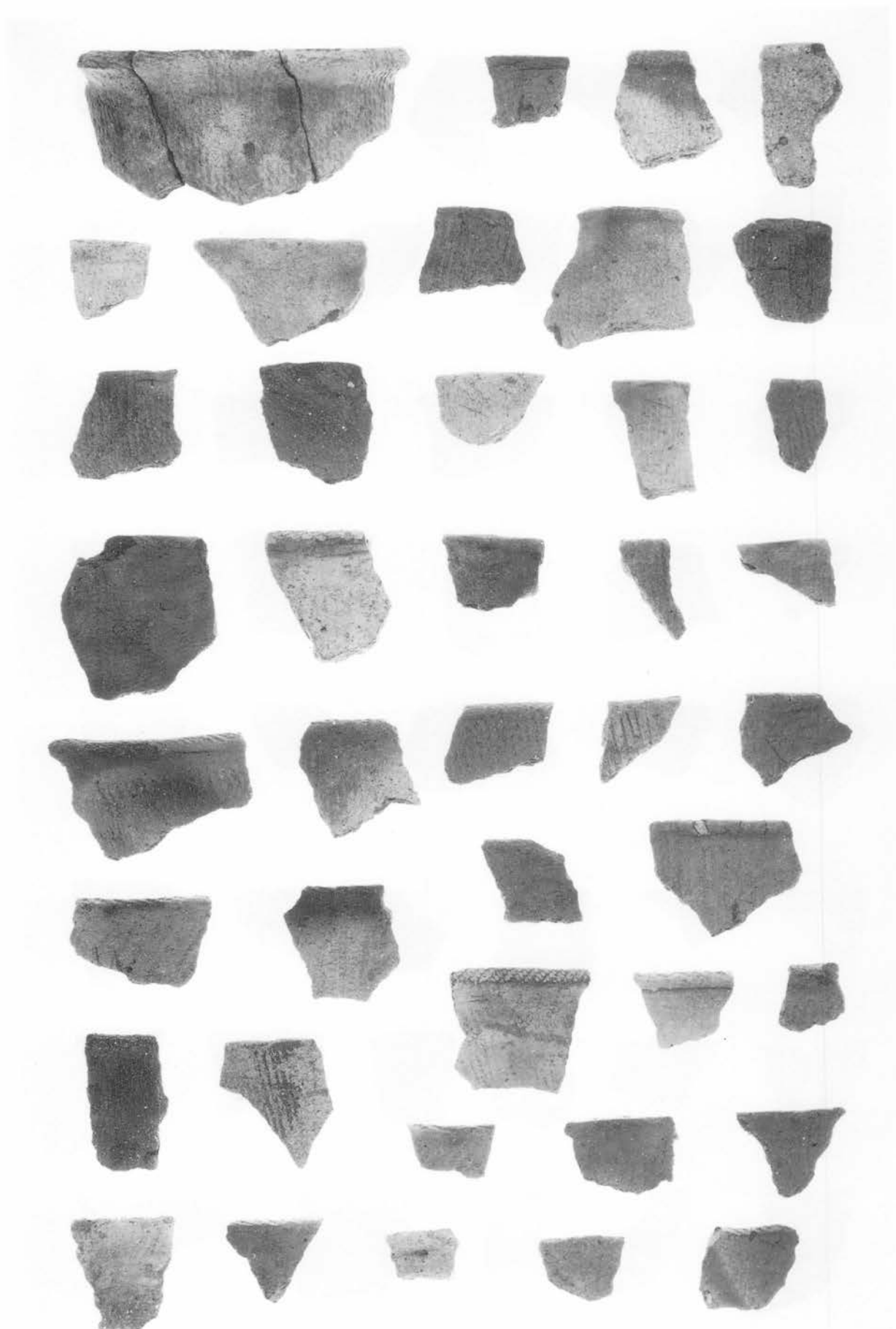
9. SK-129 10. SK-140

9

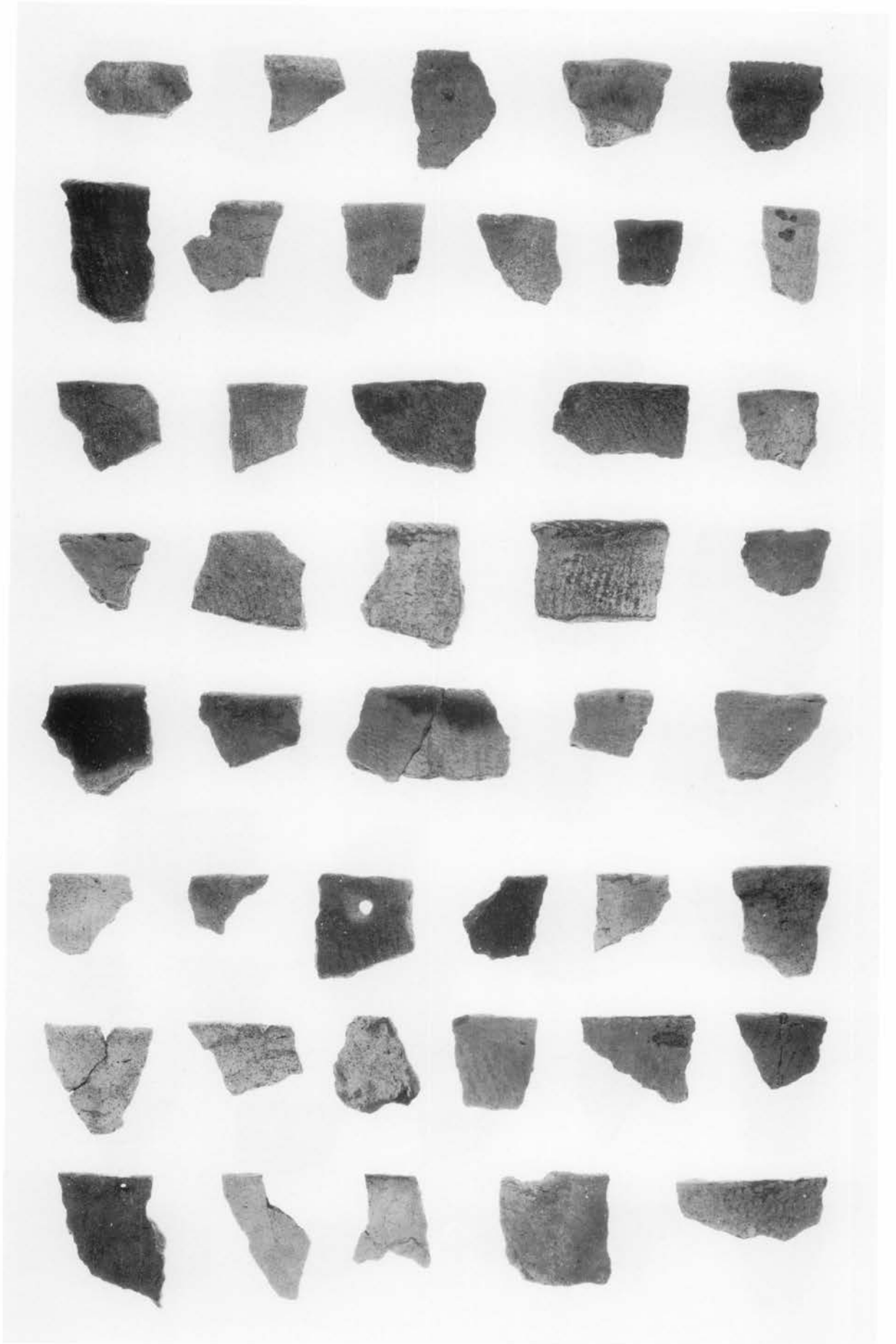
10



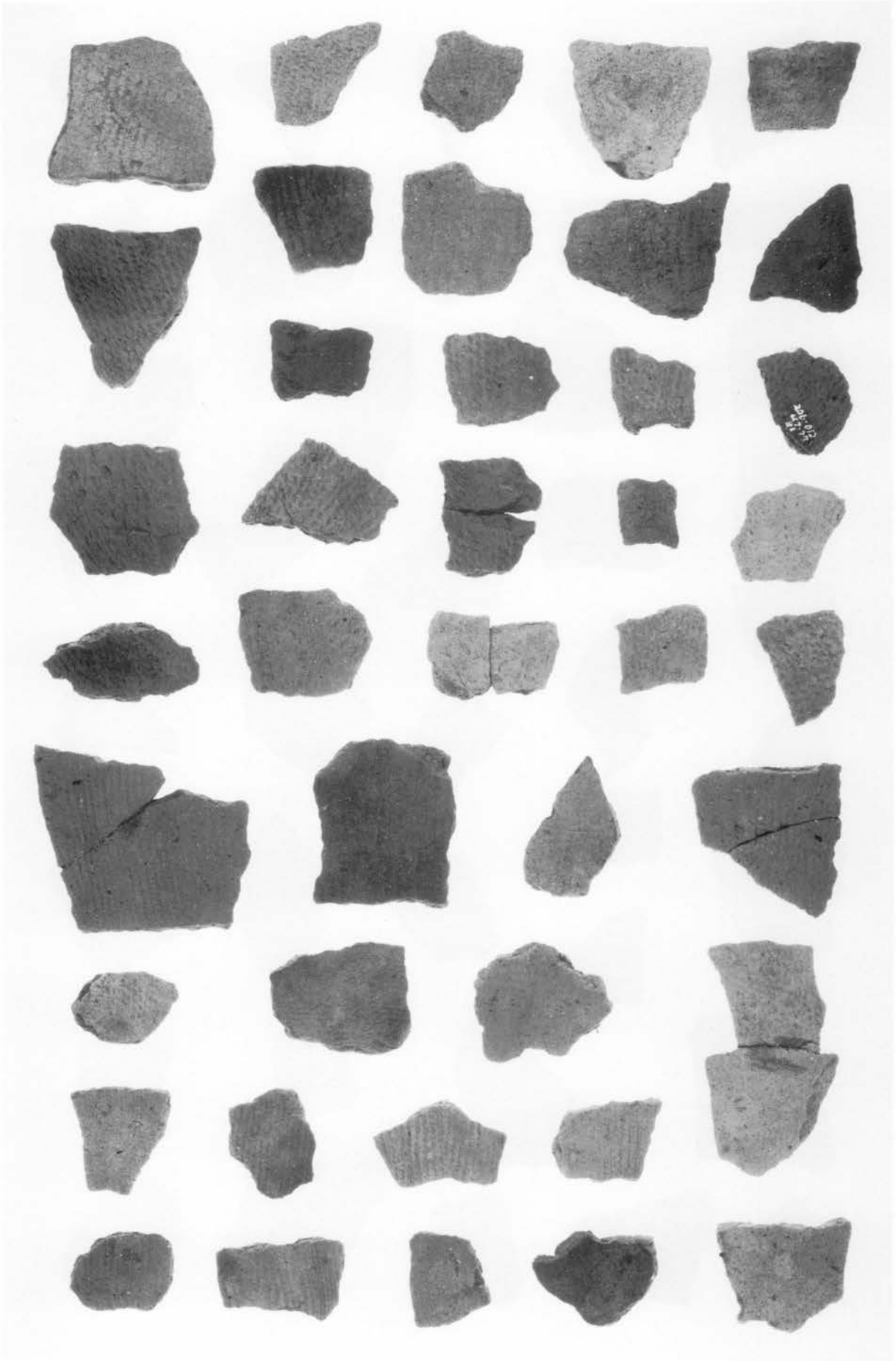
縄文土器 (1)



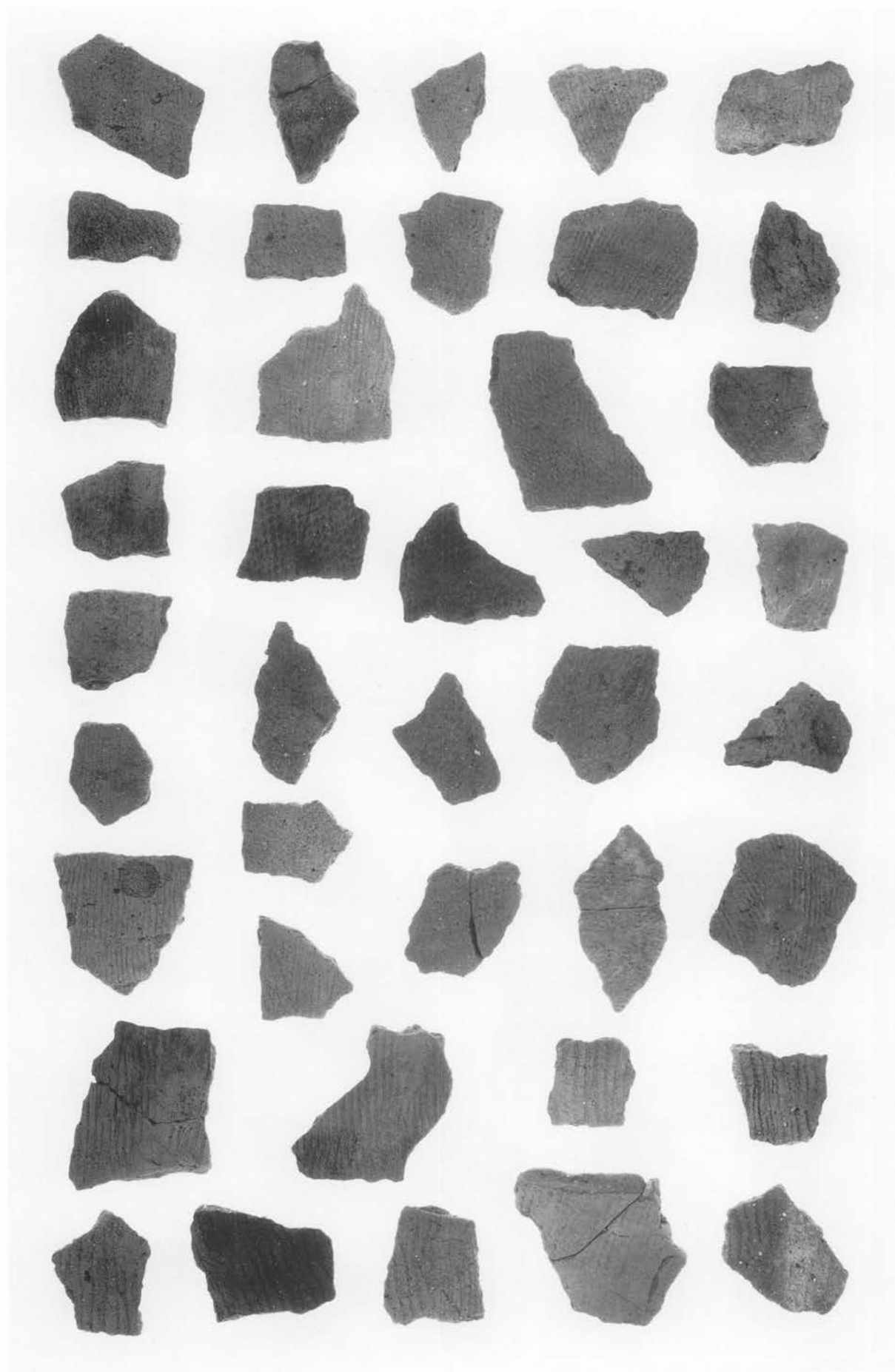
繩文土器 (2)



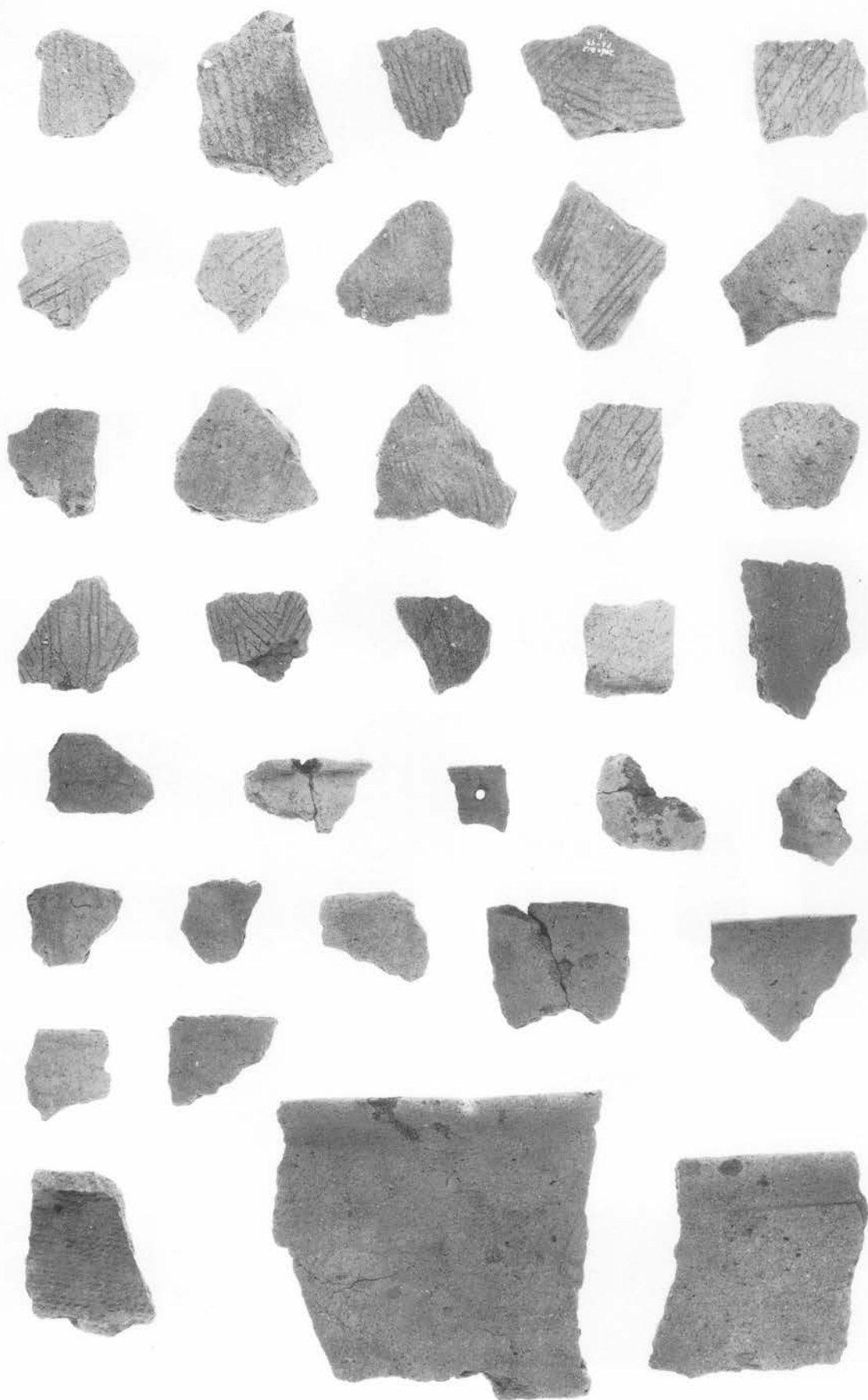
縄文土器 (3)



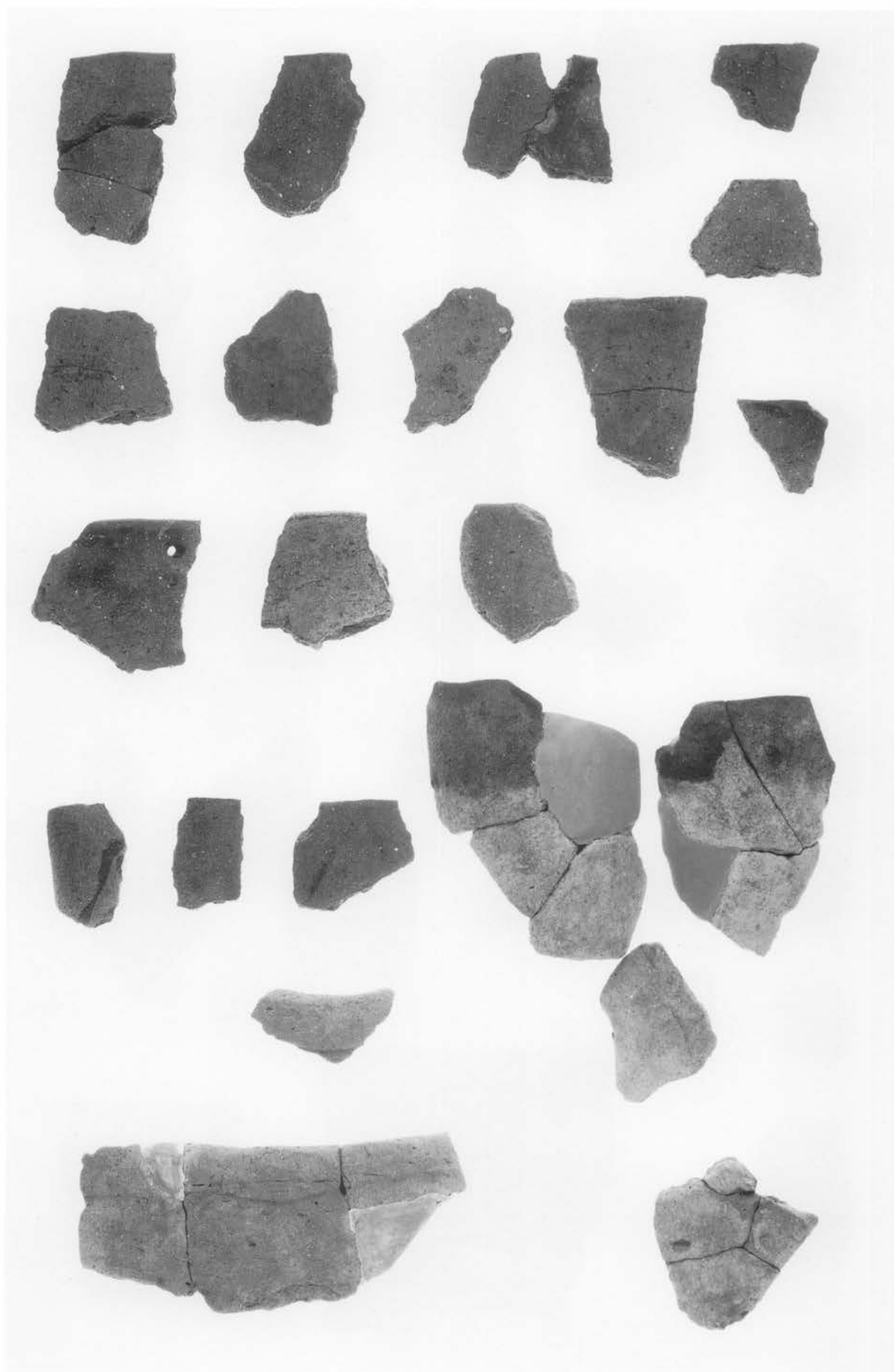
繩文土器 (4)



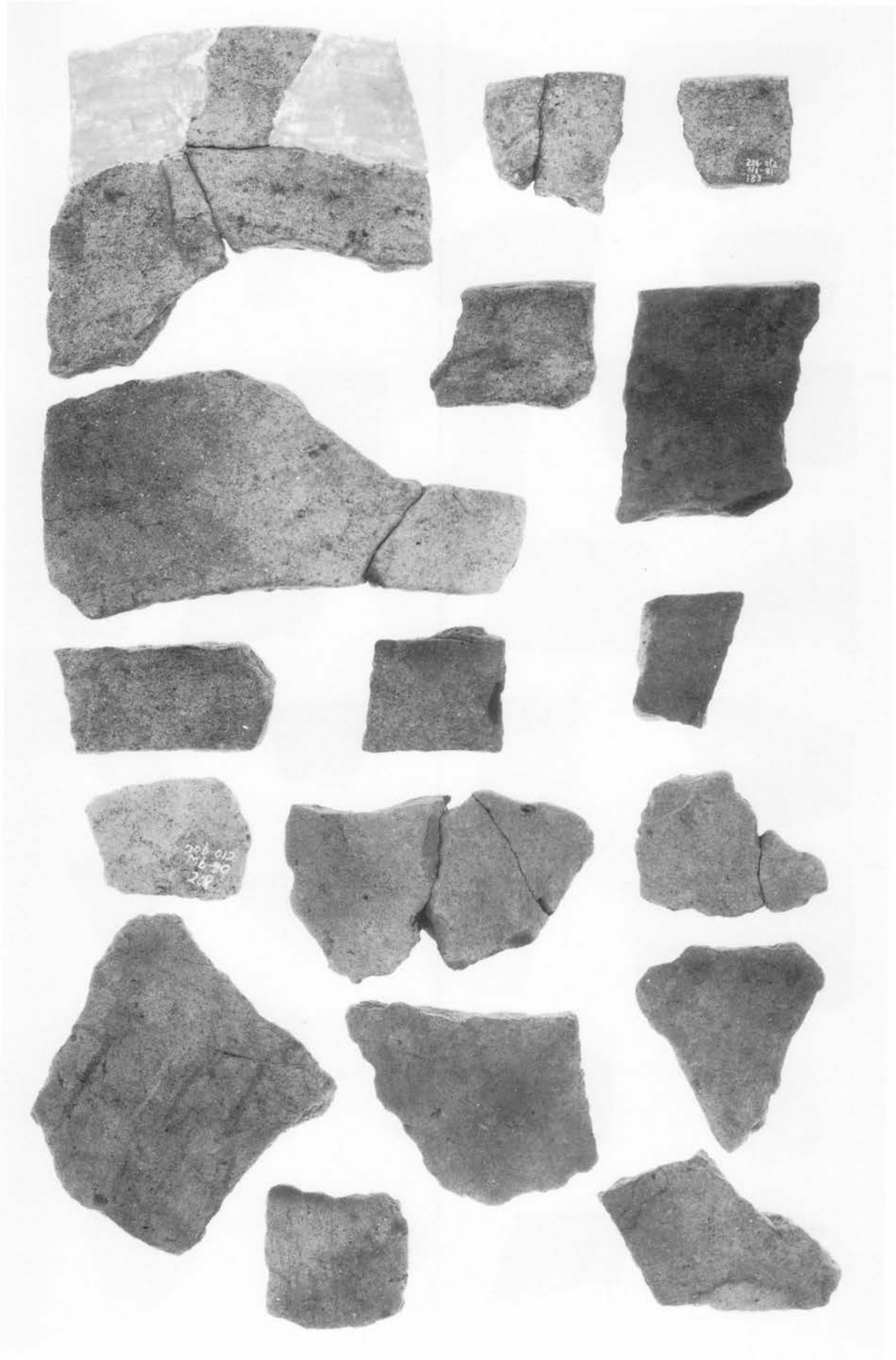
繩文土器 (5)



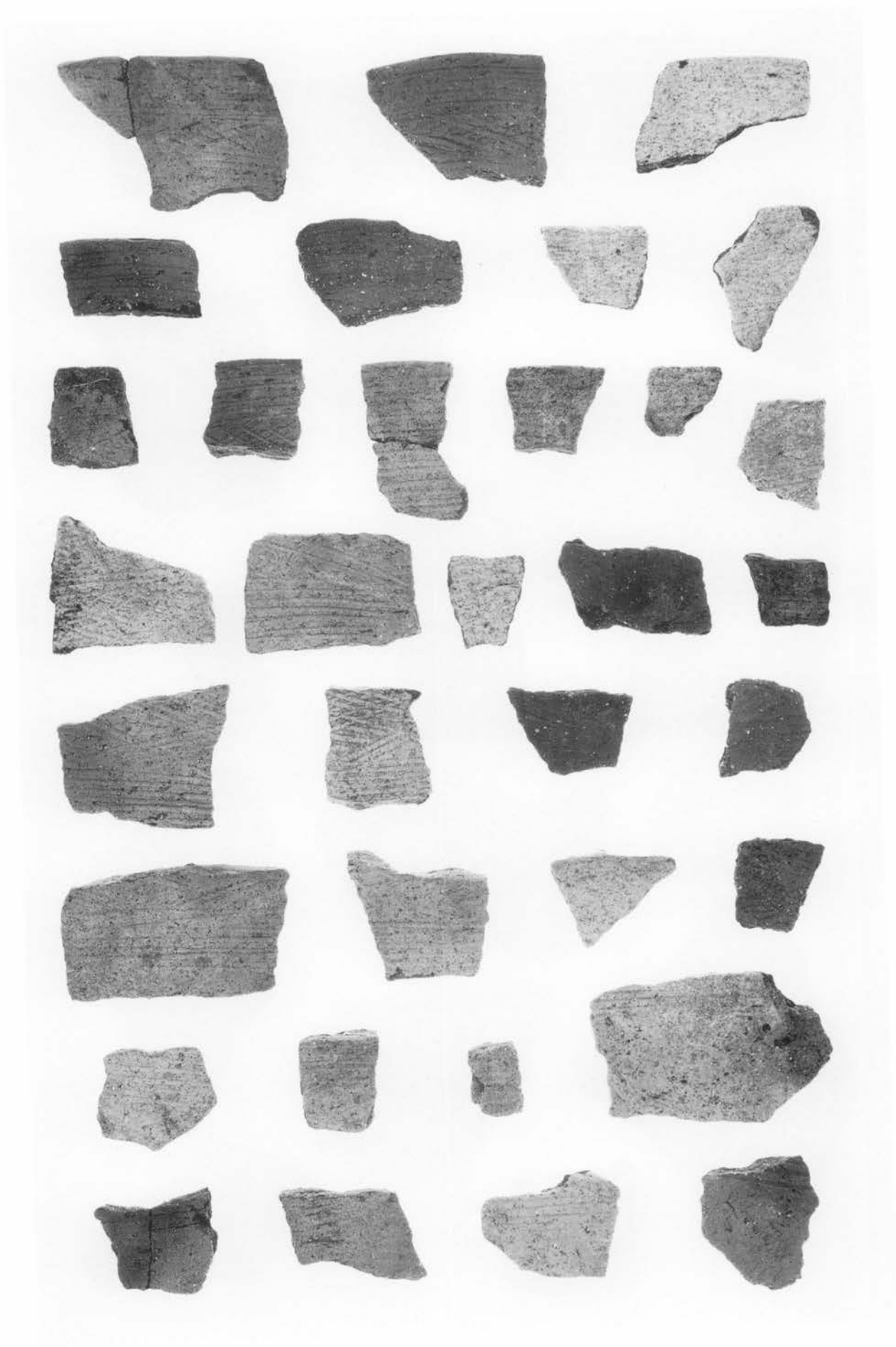
繩文土器 (6)



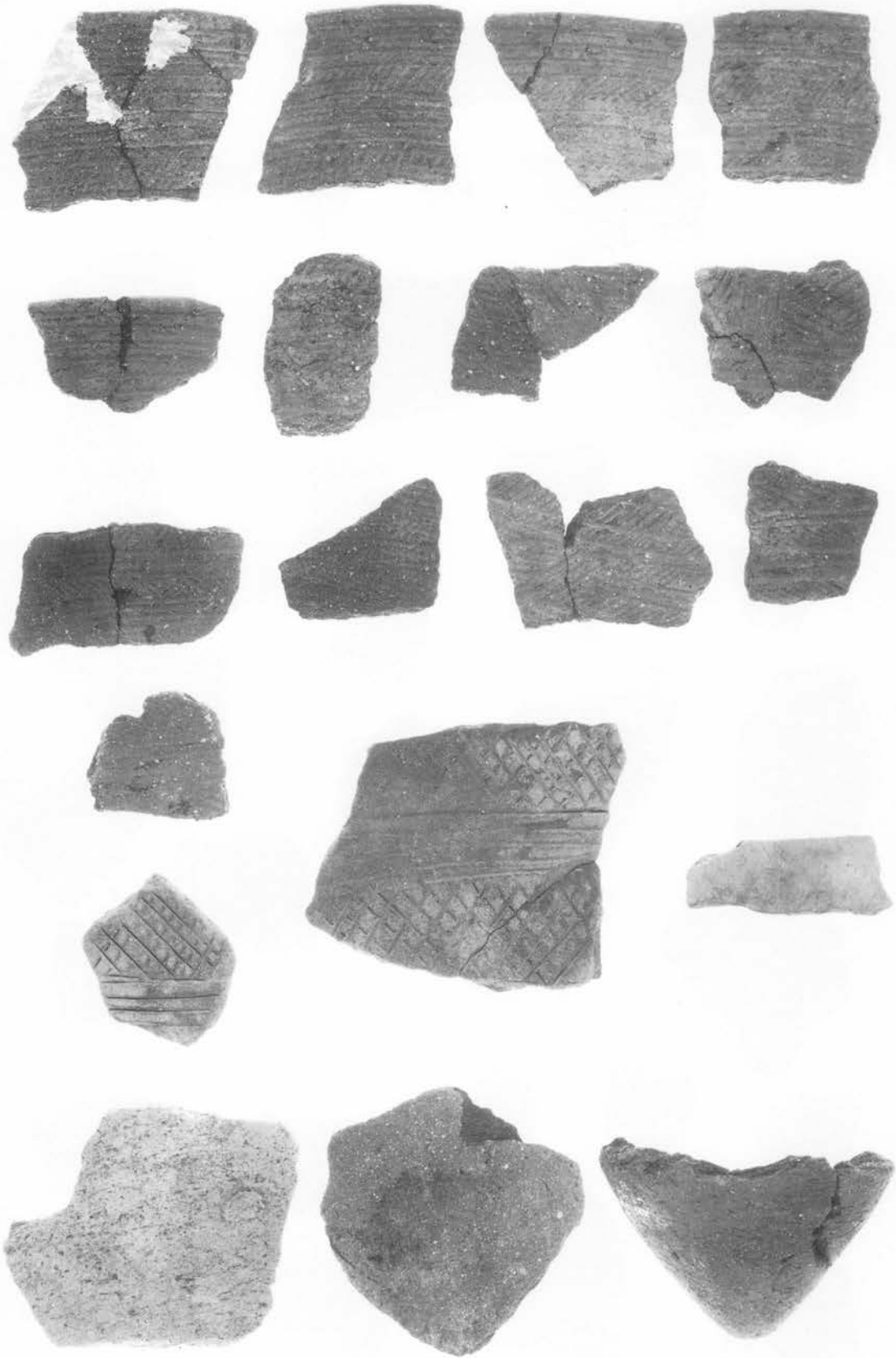
縄文土器 (7)



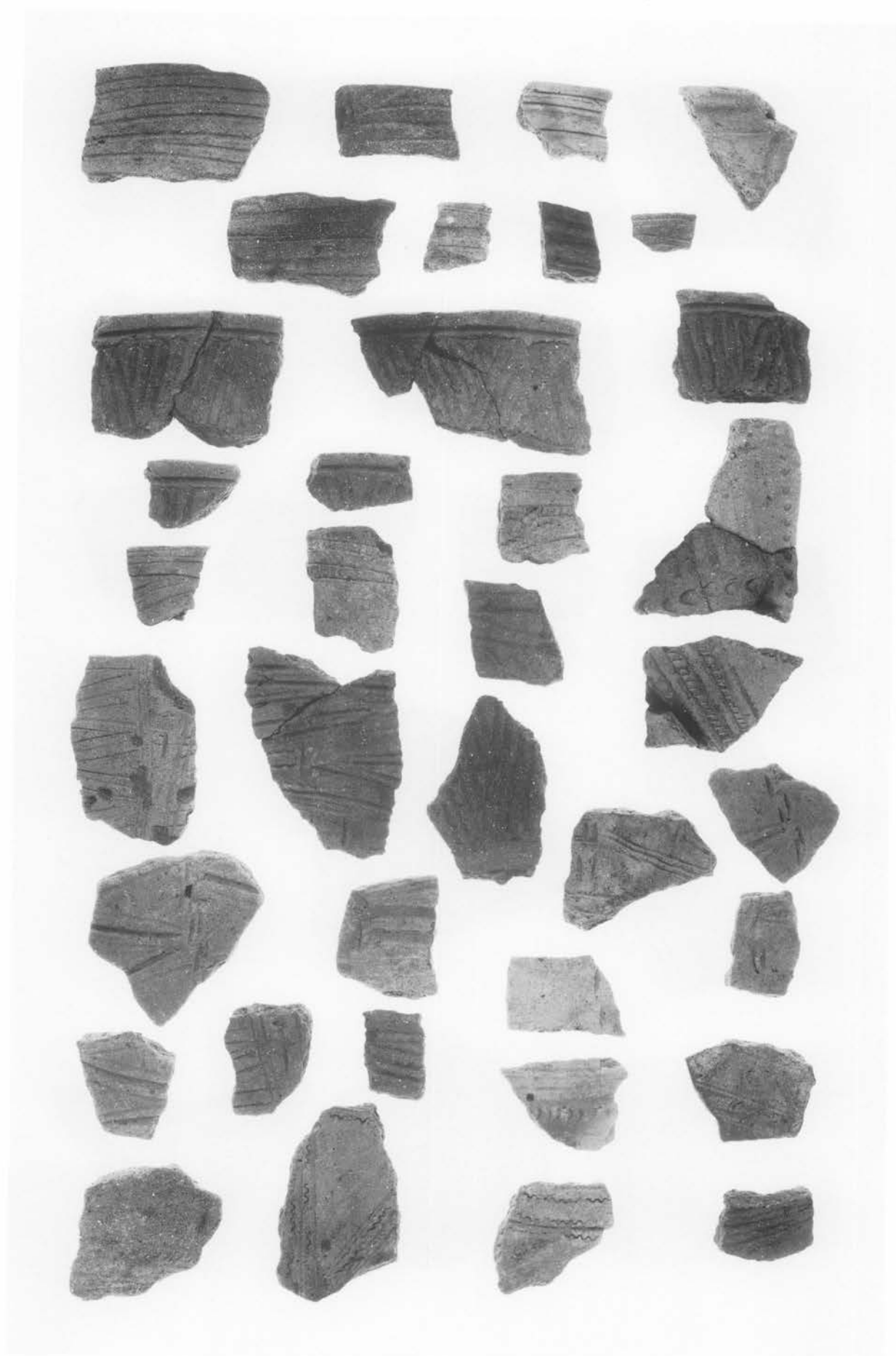
縄文土器 (8)



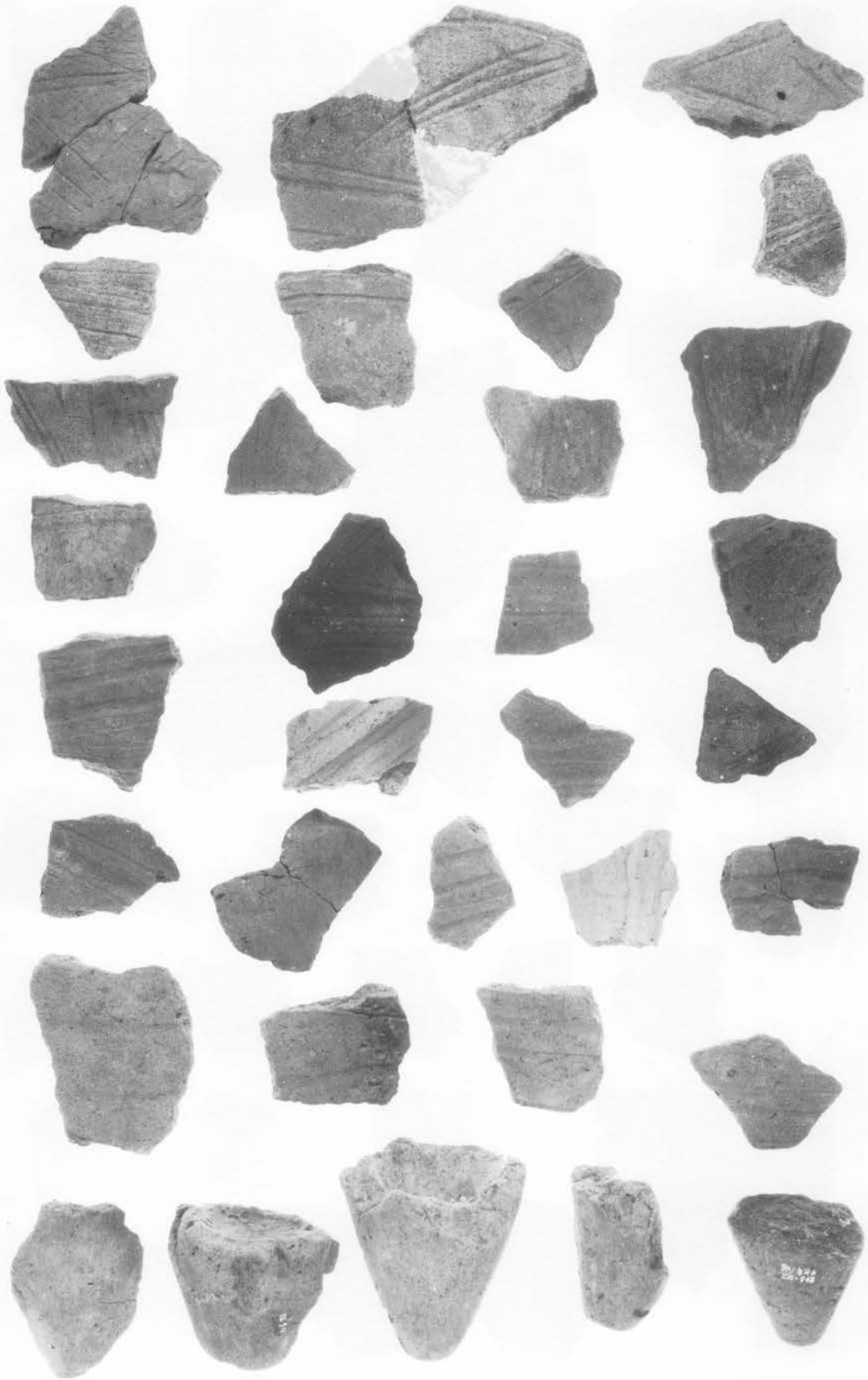
縄文土器 (9)



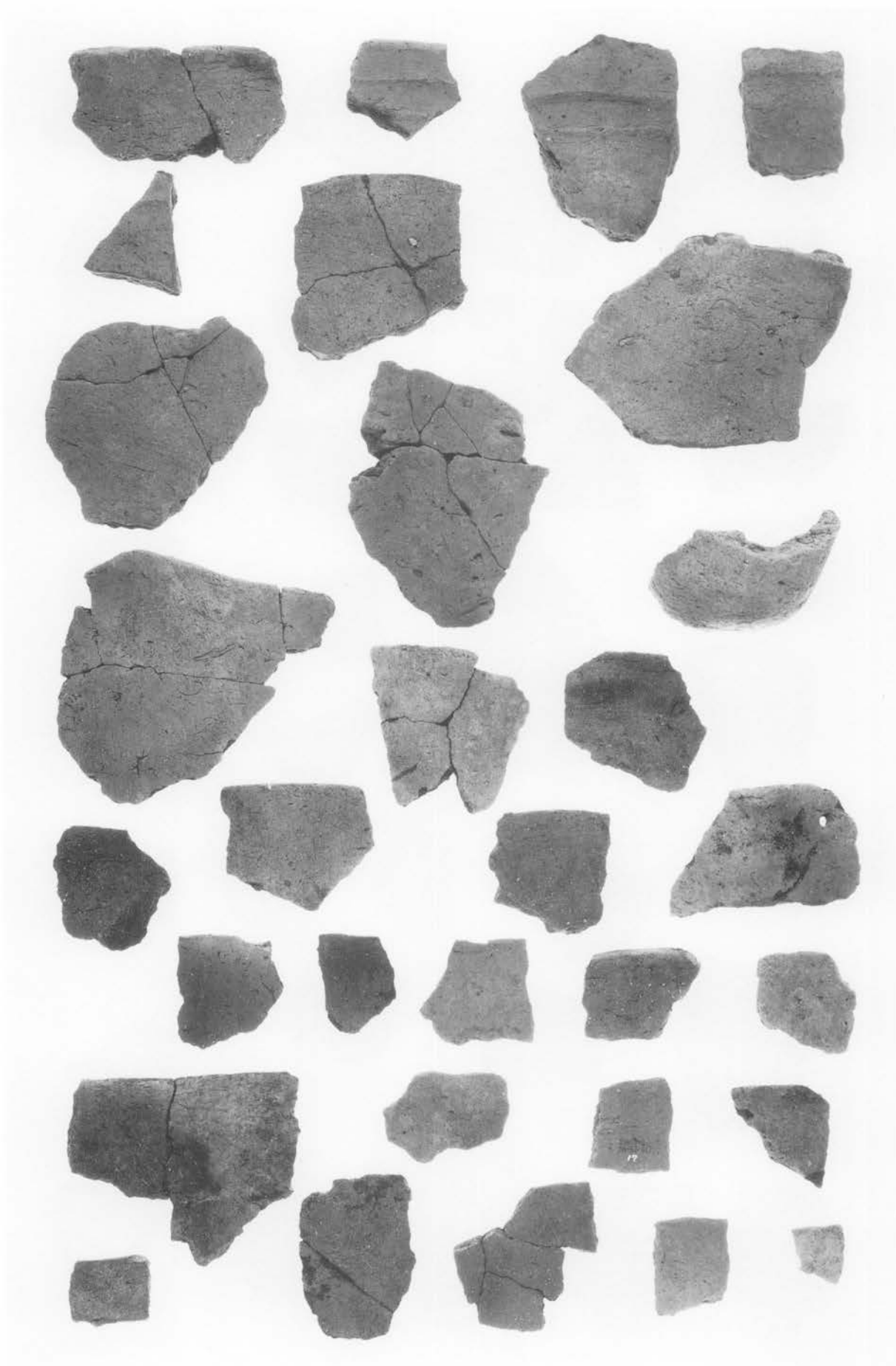
縄文土器 (10)



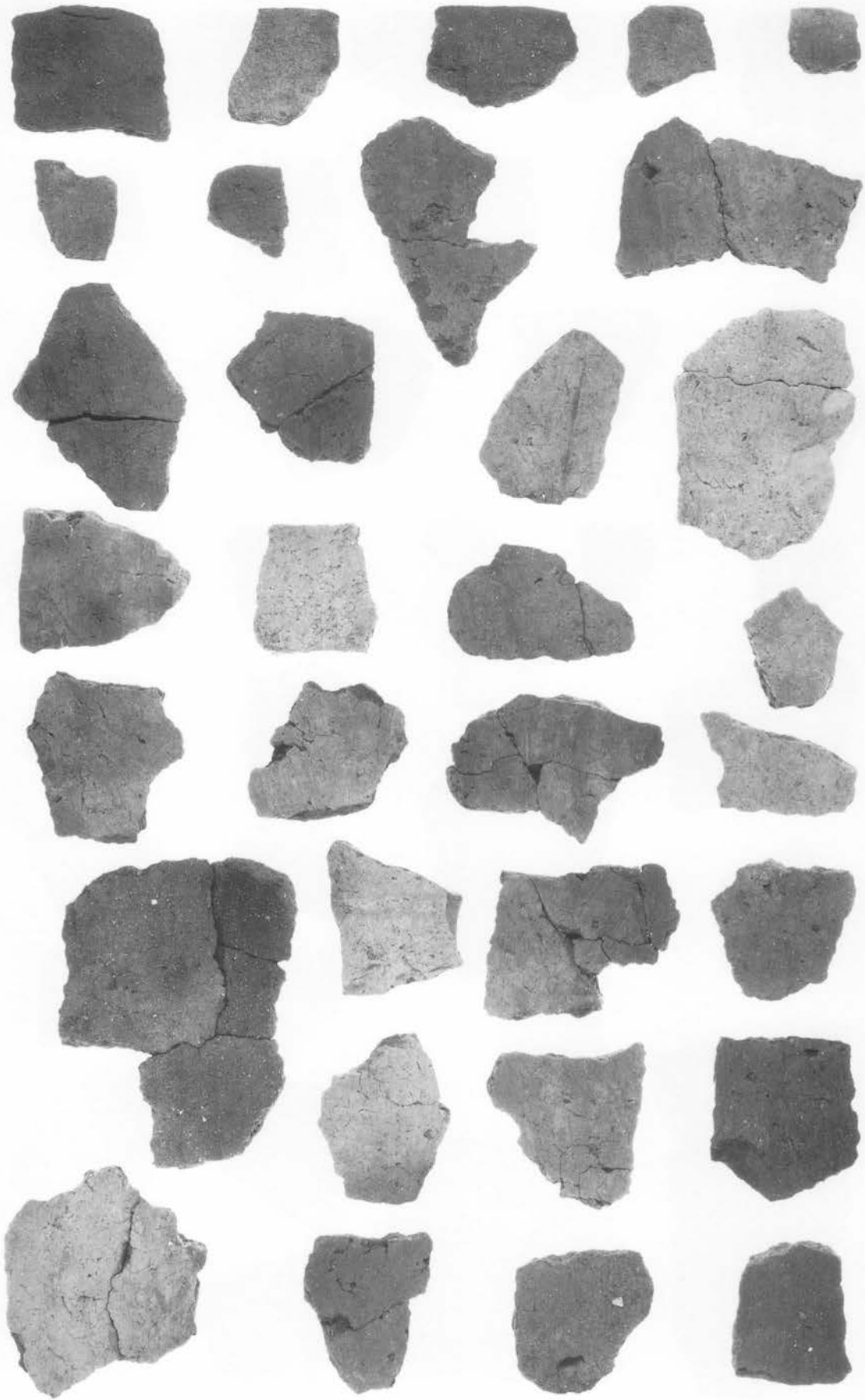
繩文土器 (11)



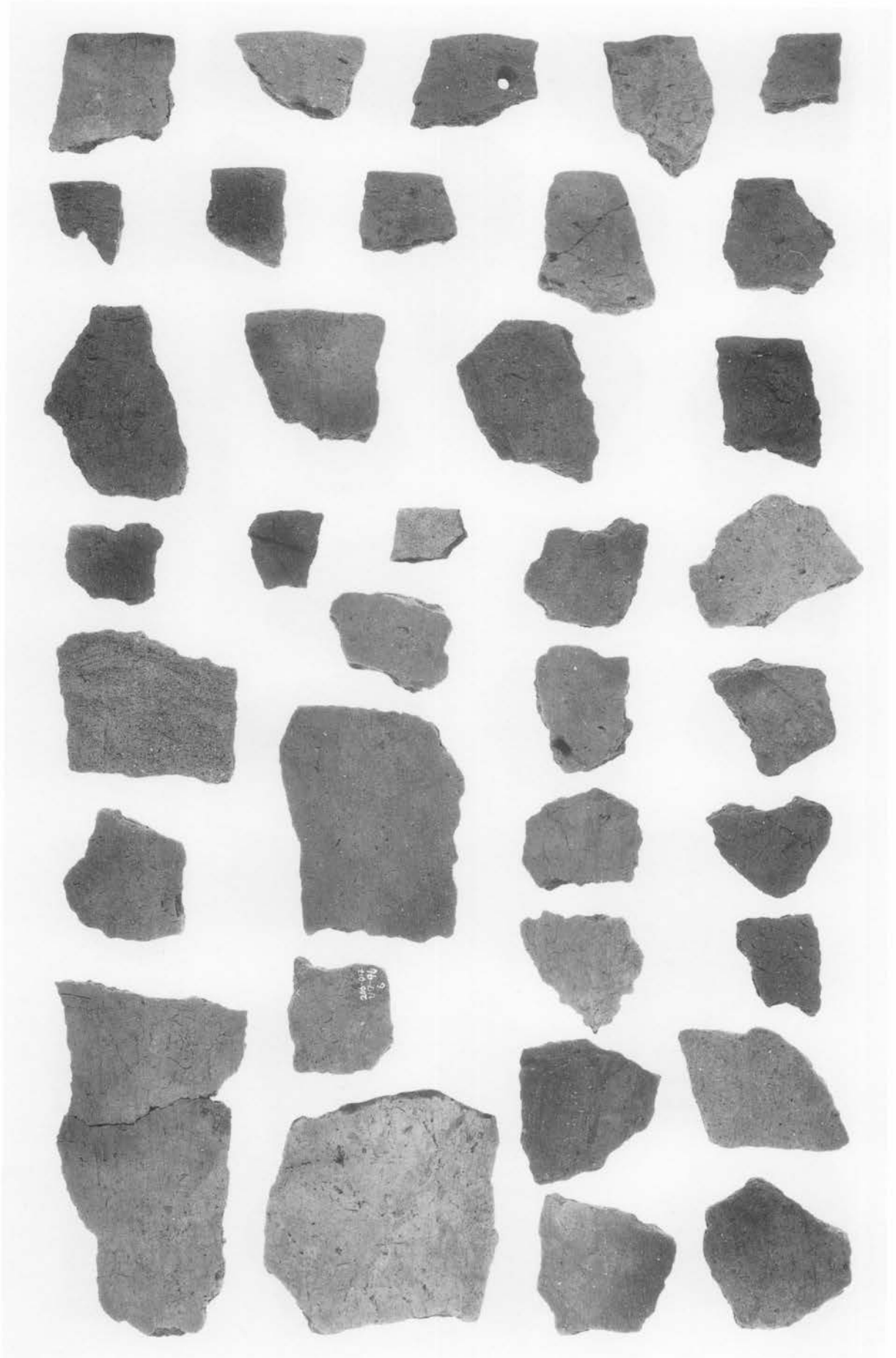
繩文土器 (12)



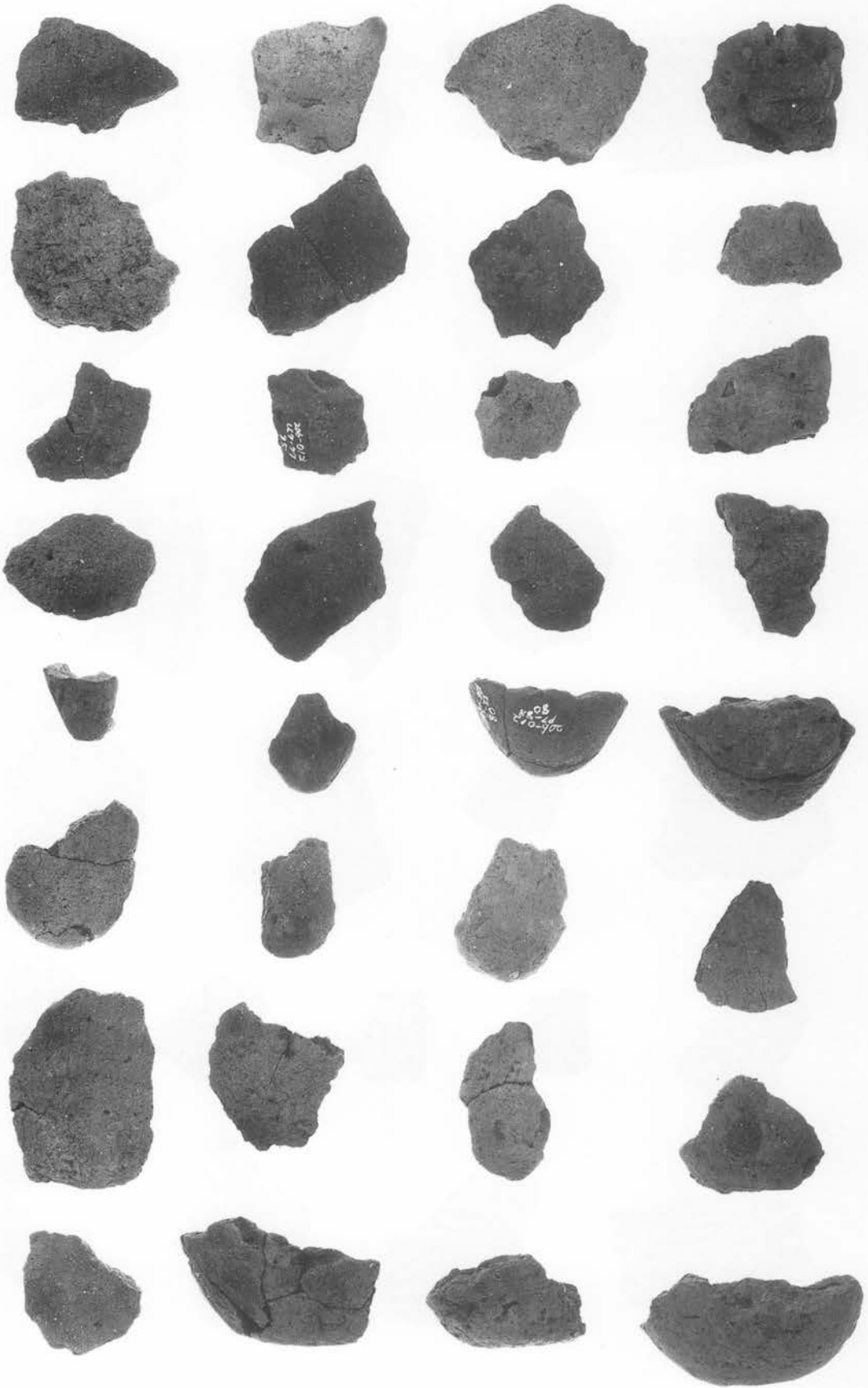
繩文土器 (13)



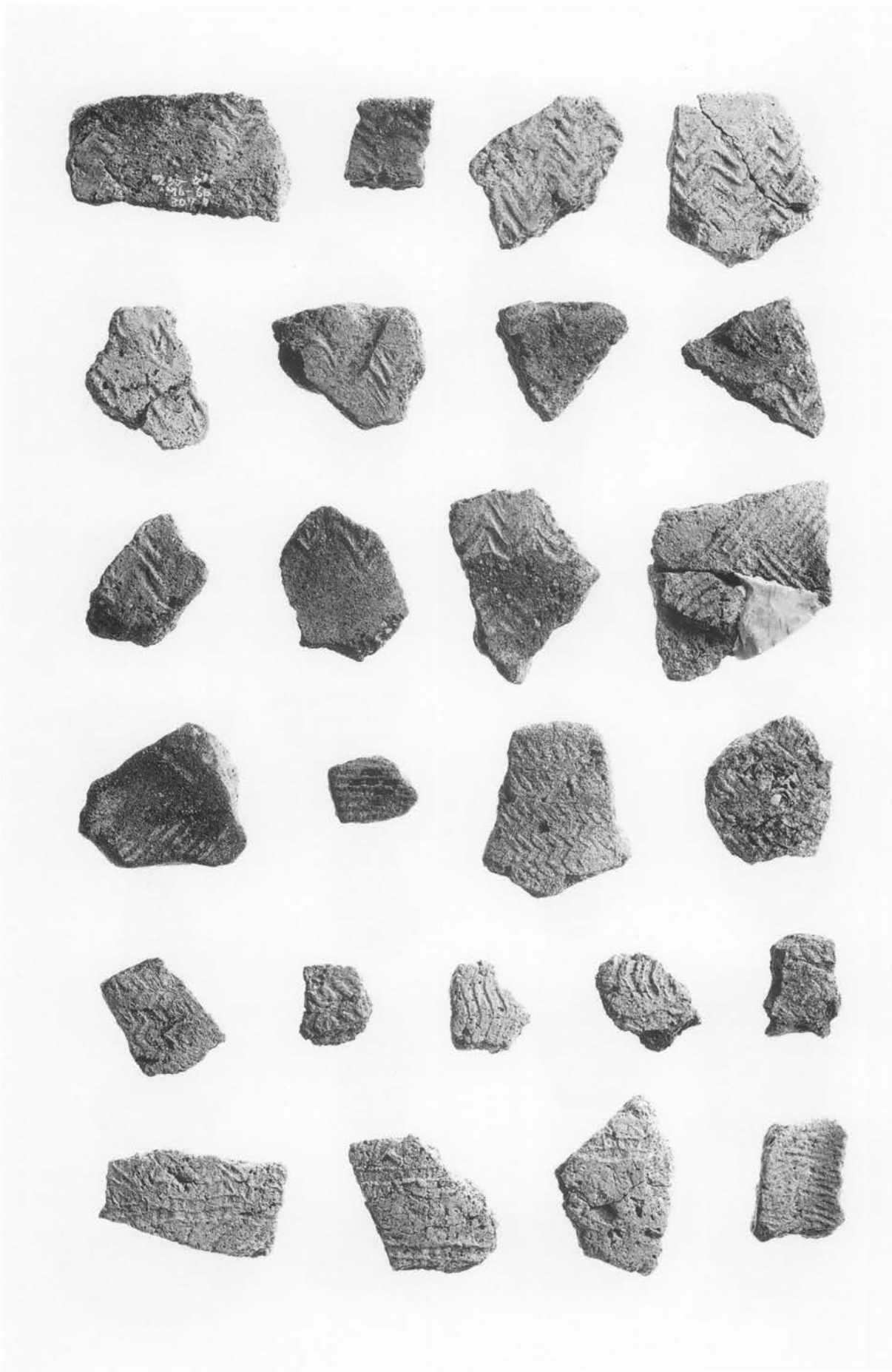
繩文土器 (14)



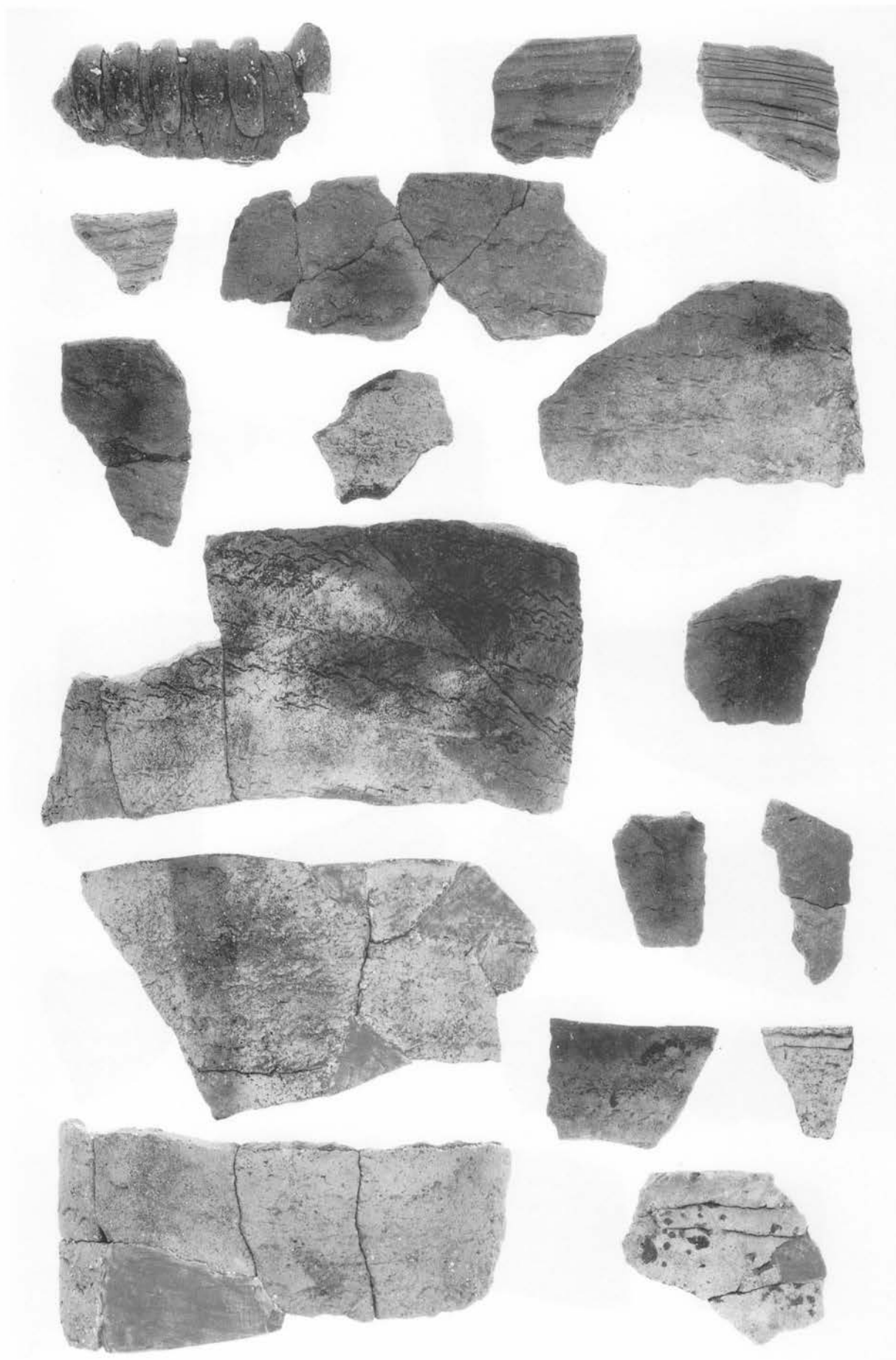
縄文土器 (15)



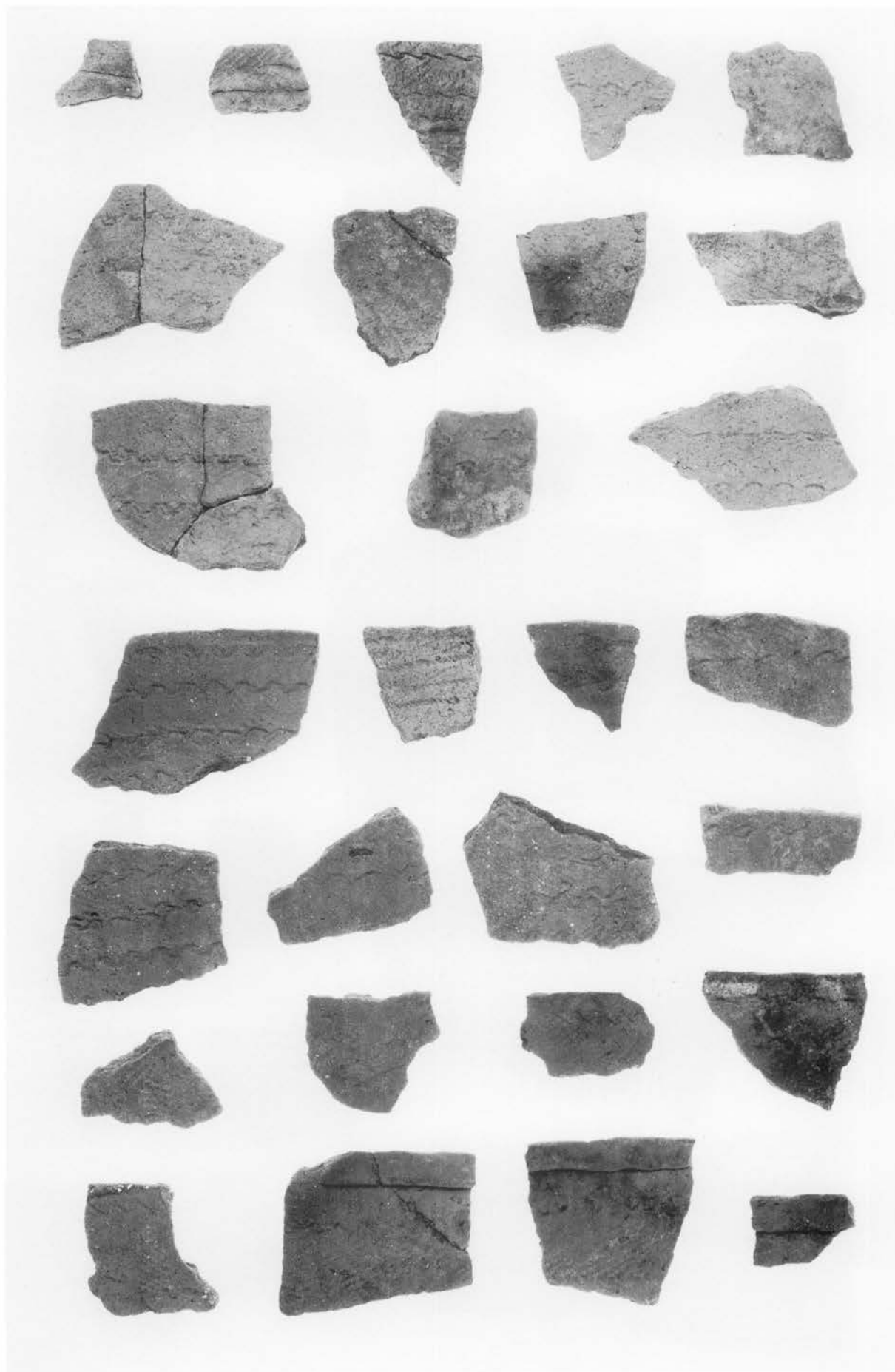
縄文土器 (16)



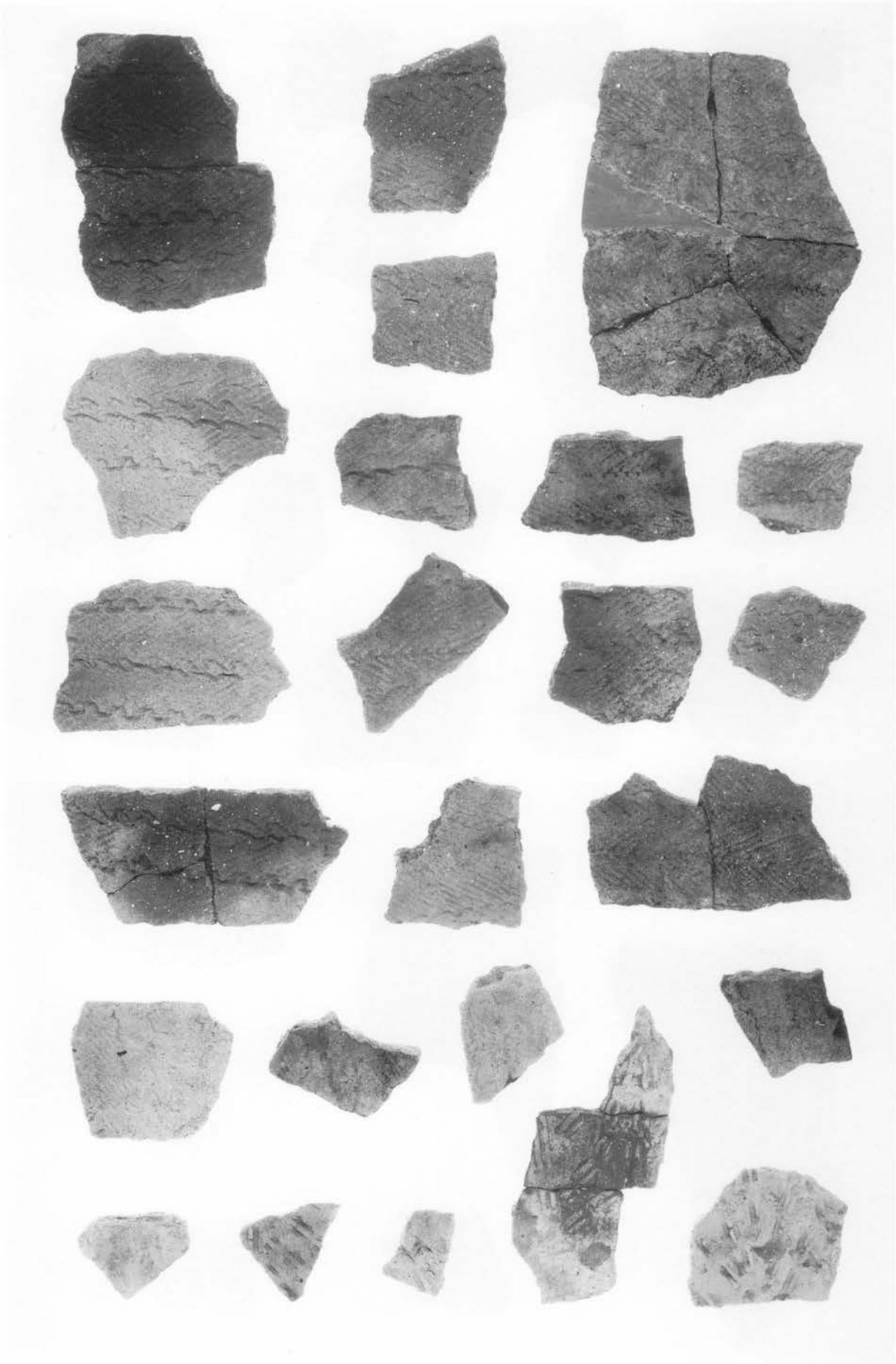
繩文土器 (17)



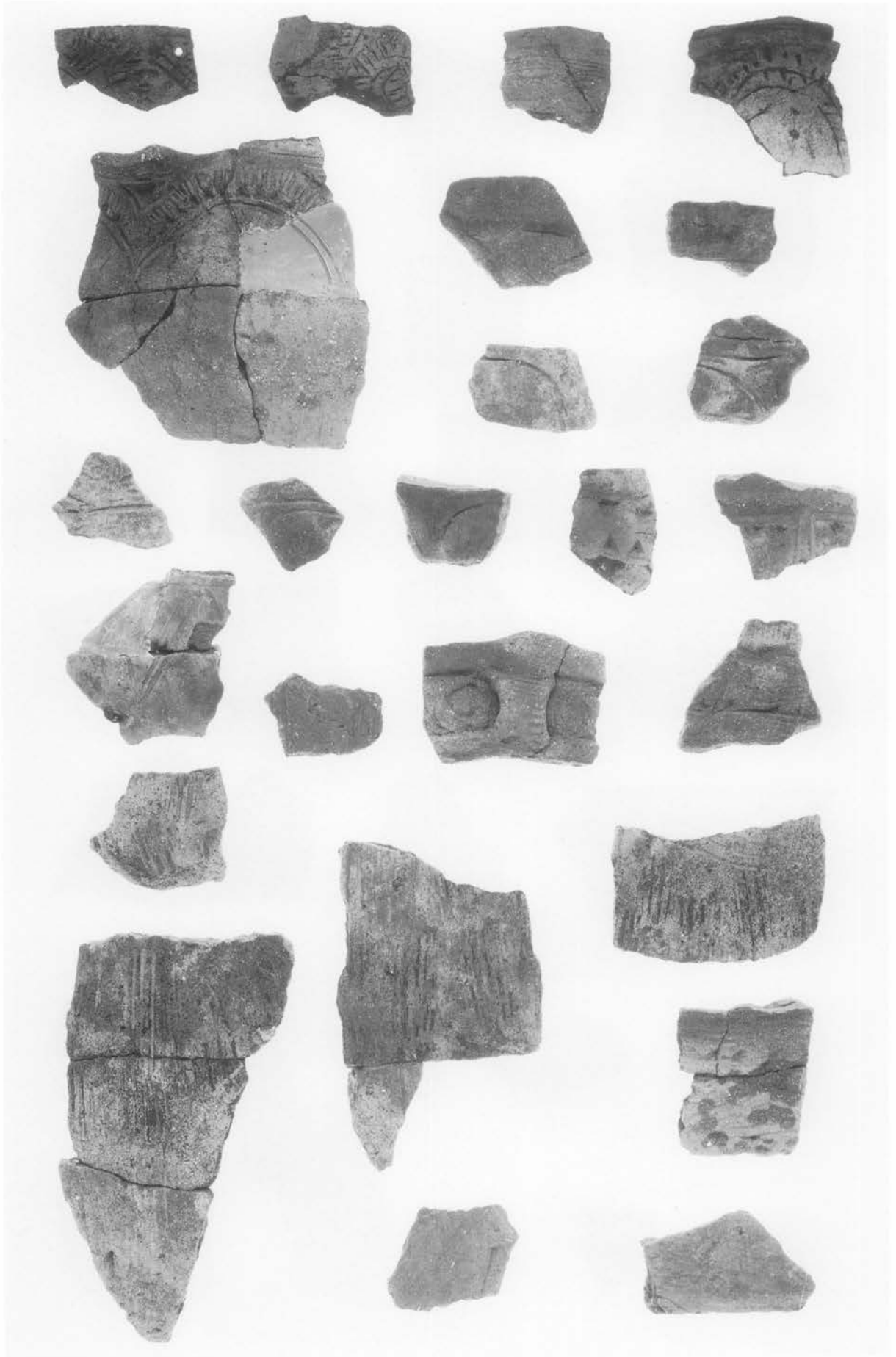
繩文土器 (18)



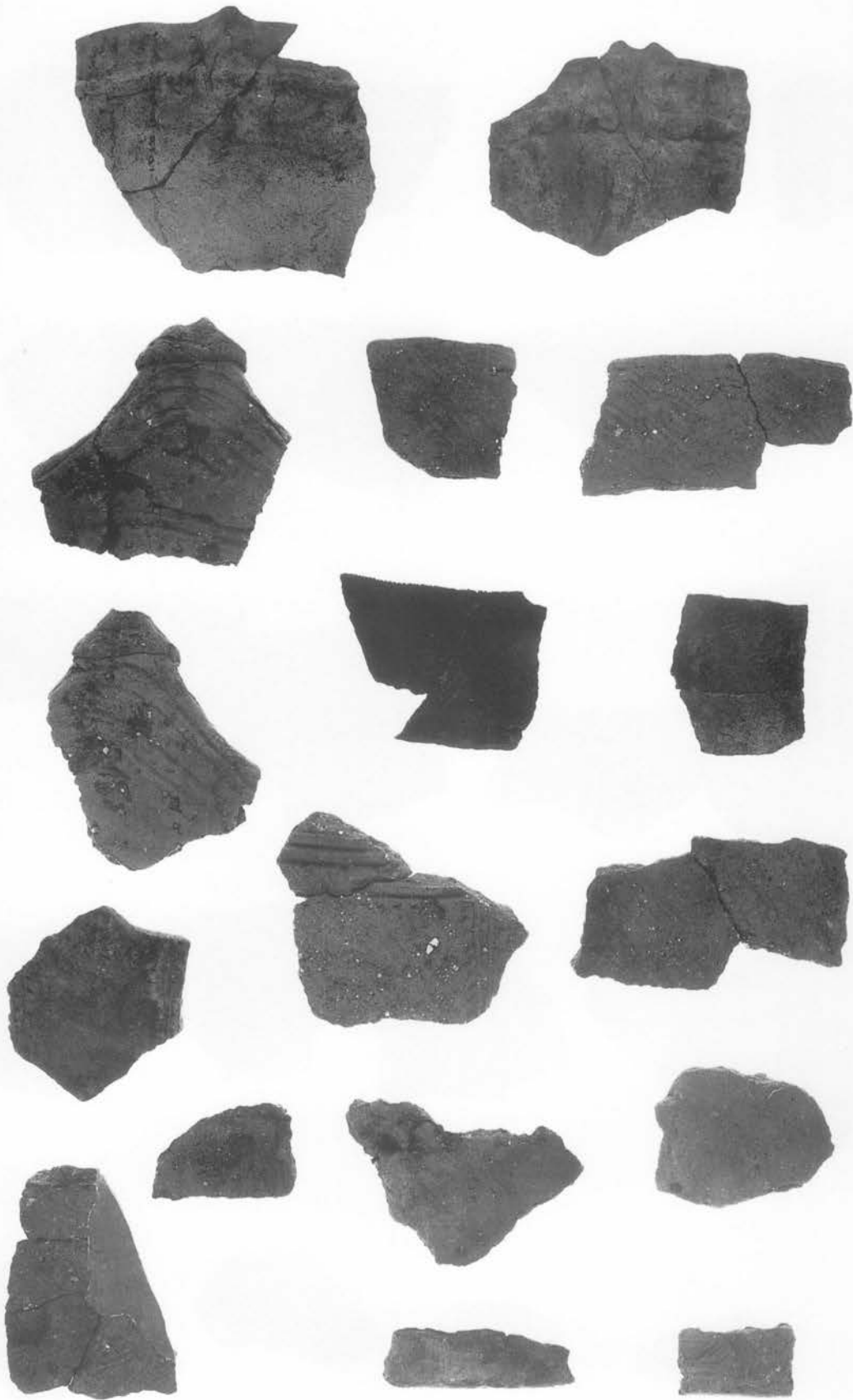
縄文土器 (19)



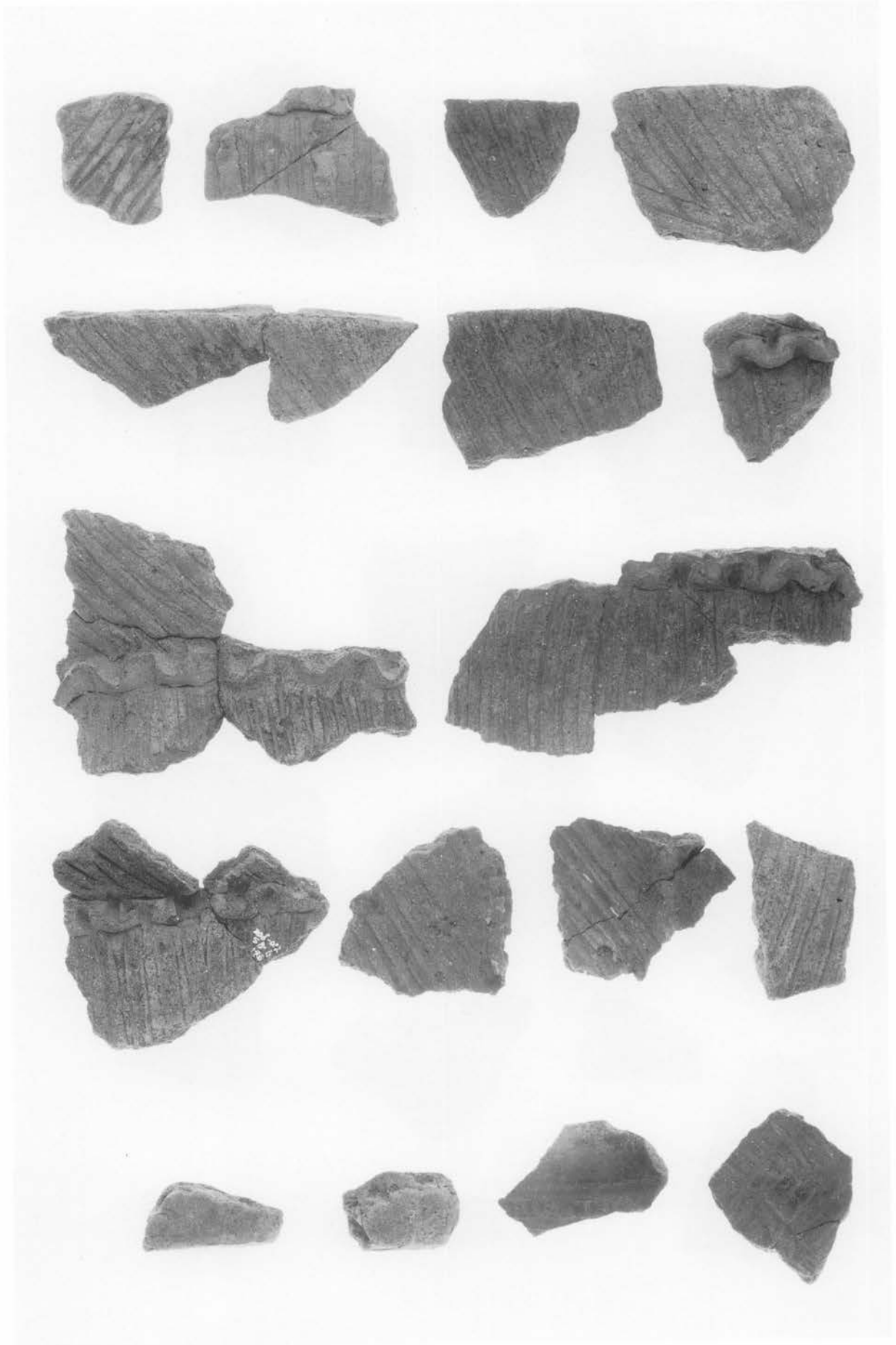
繩文土器 (20)



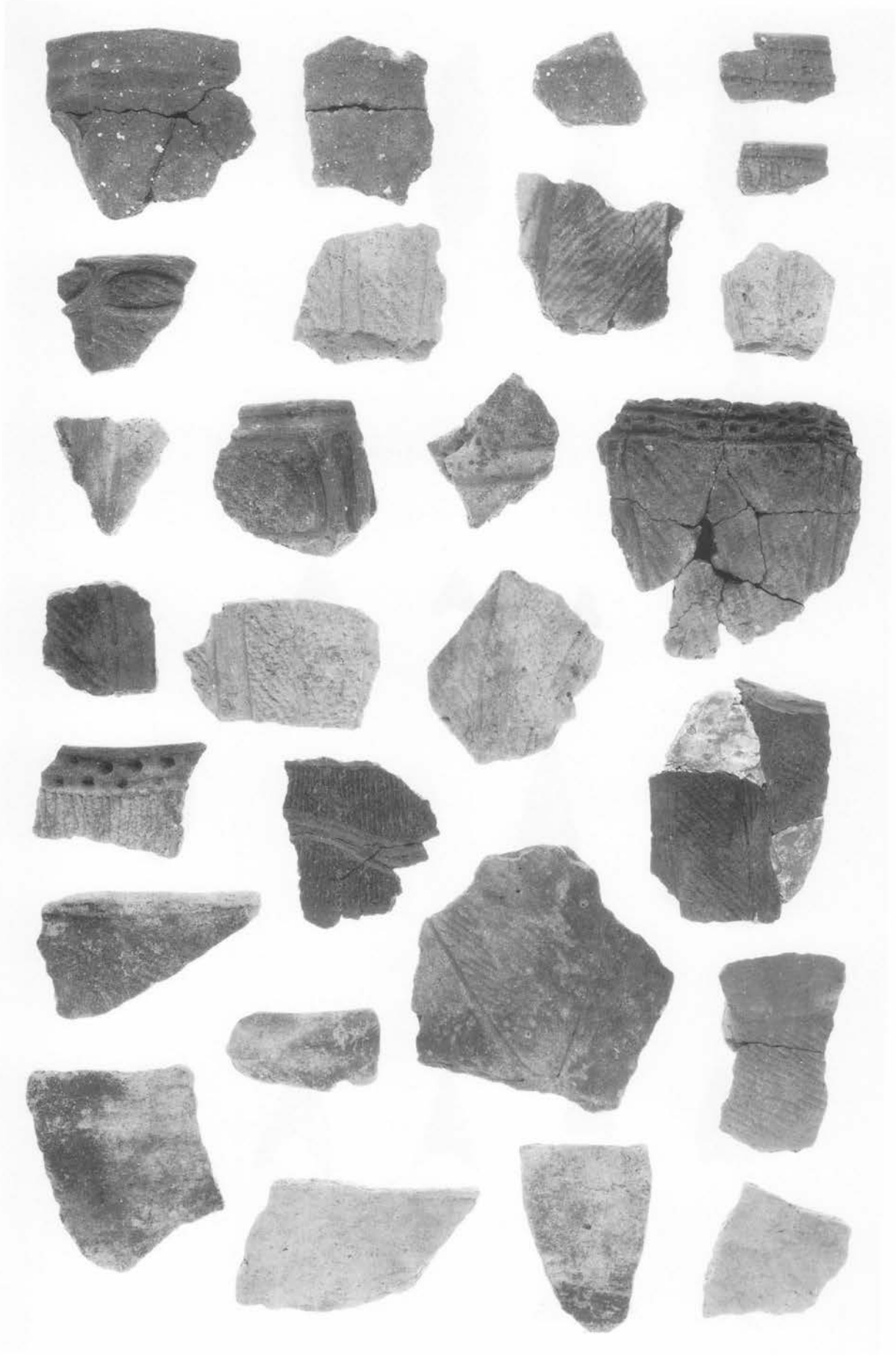
縄文土器 (21)



縄文土器 (22)



縄文土器 (23)



繩文土器 (24)



旧石器時代、縄文時代草創期

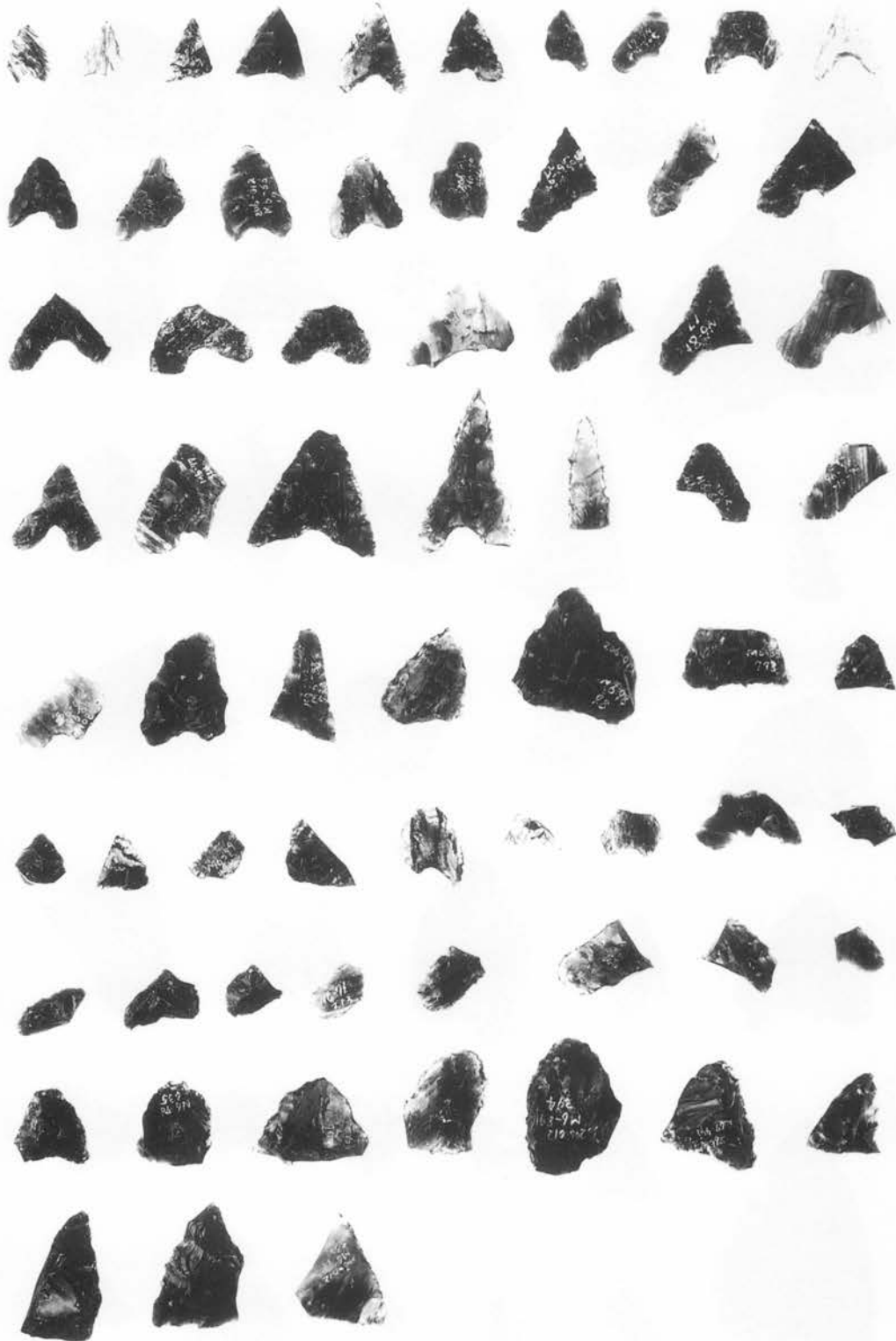


I区、II区、III区

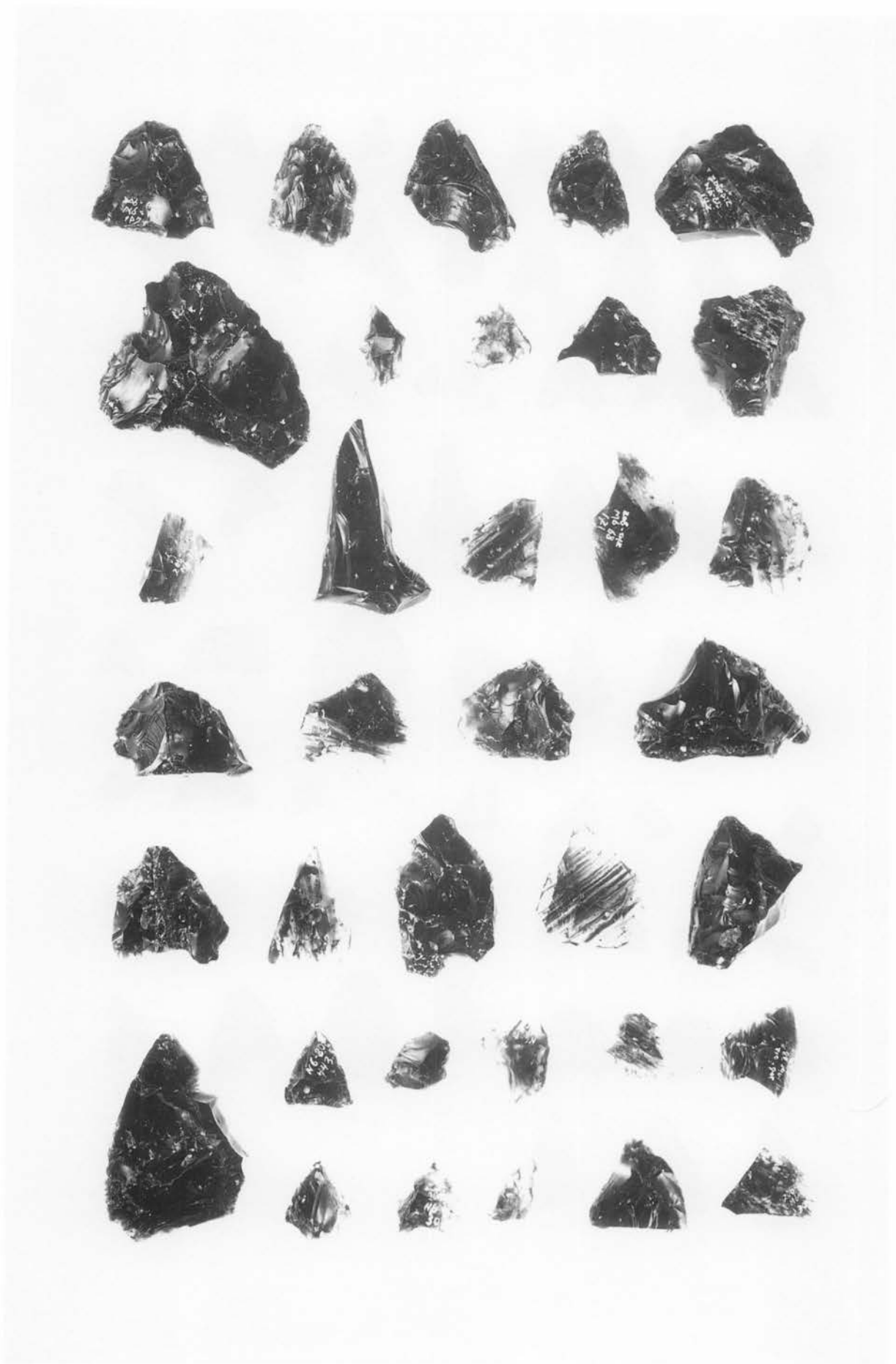


IVb・IVd・IVeブロック、単独出土

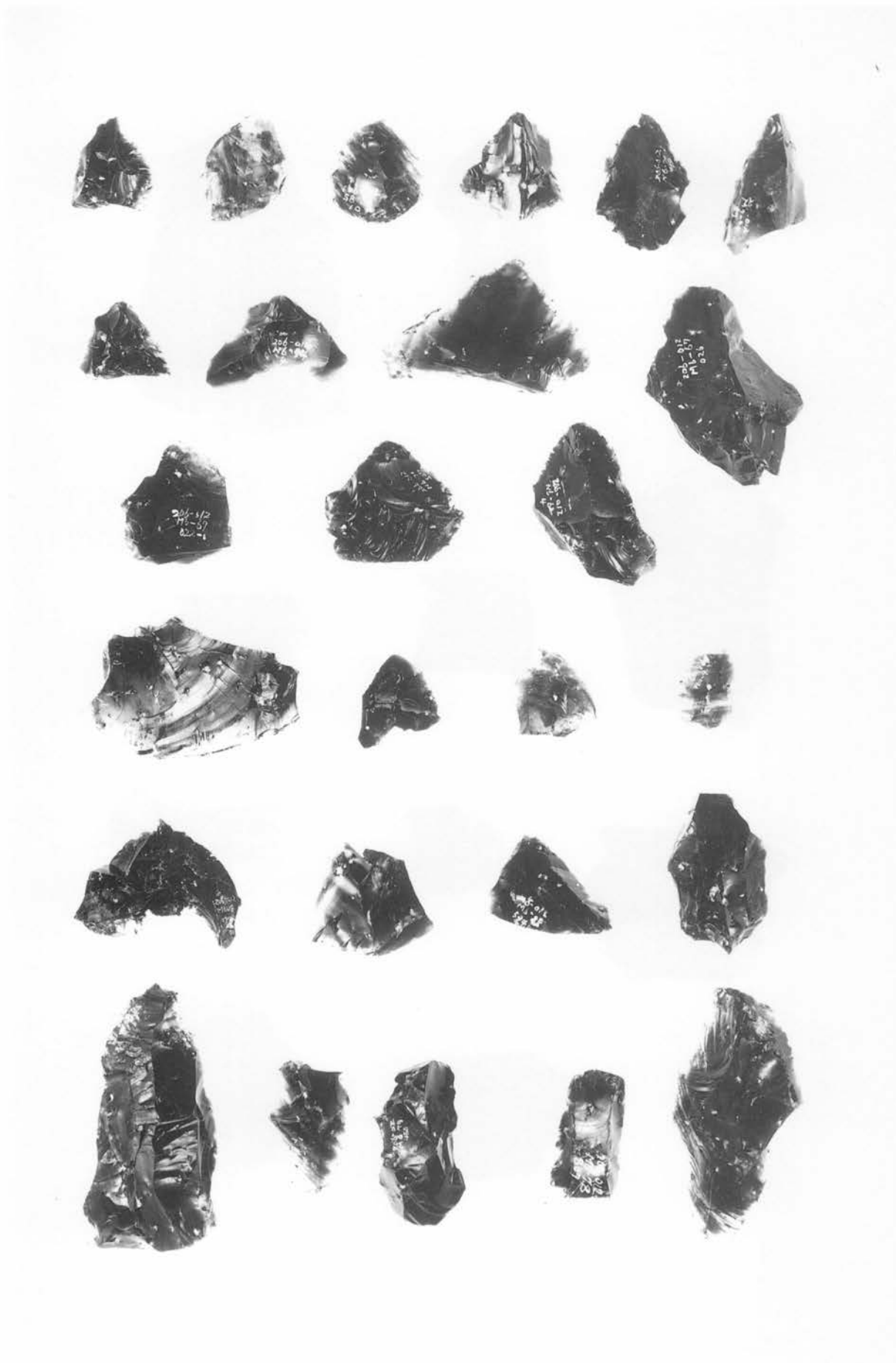
旧石器時代・縄文時代石器(1)



縄文時代石器 (2)、IV a ブロック



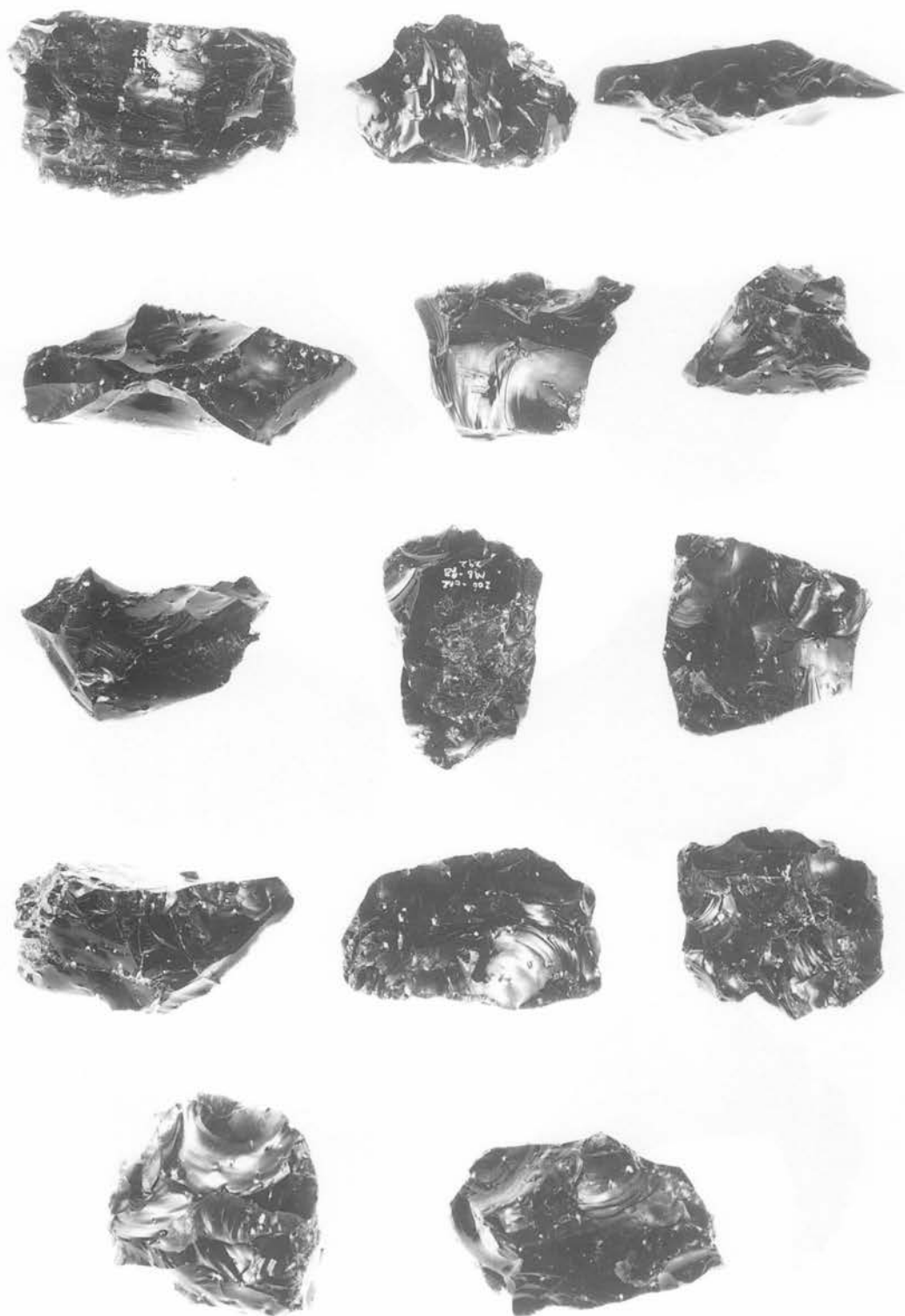
縄文時代石器 (3)、Ⅳ a ブロック



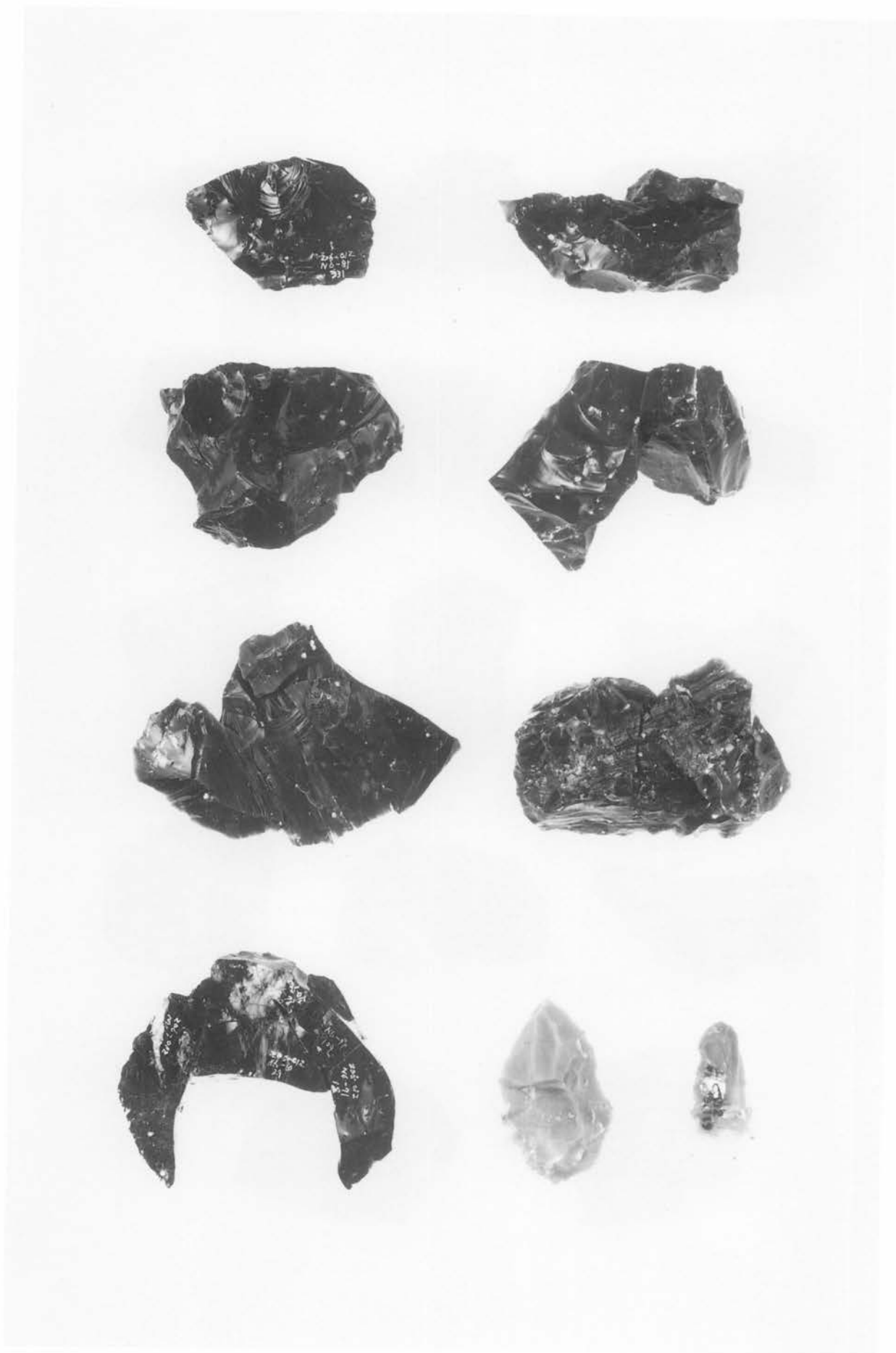
縄文時代石器 (4)、IV a ブロック



縄文時代石器 (5)、Ⅳaブロック



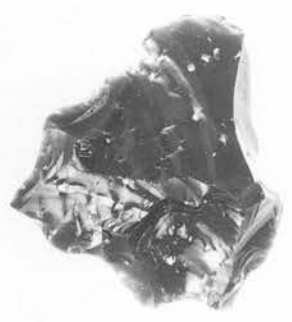
縄文時代石器 (6)、Ⅳ a ブロック



縄文時代石器 (7)、Ⅳaブロック



VI区



V区

V区

縄文時代石器 (8)



I・II・III区



IV区



IV区

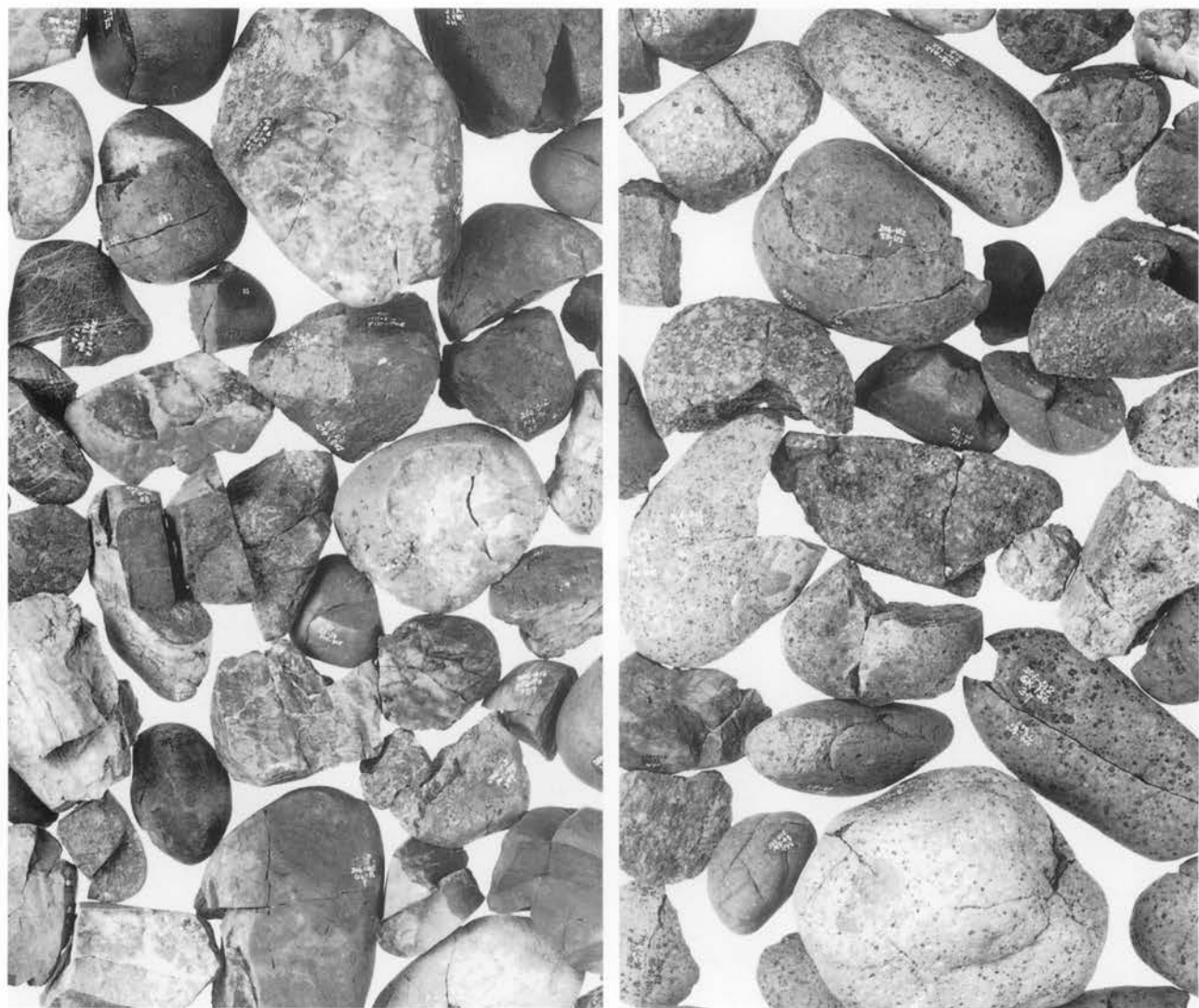


IV区

縄文時代石器 (10)



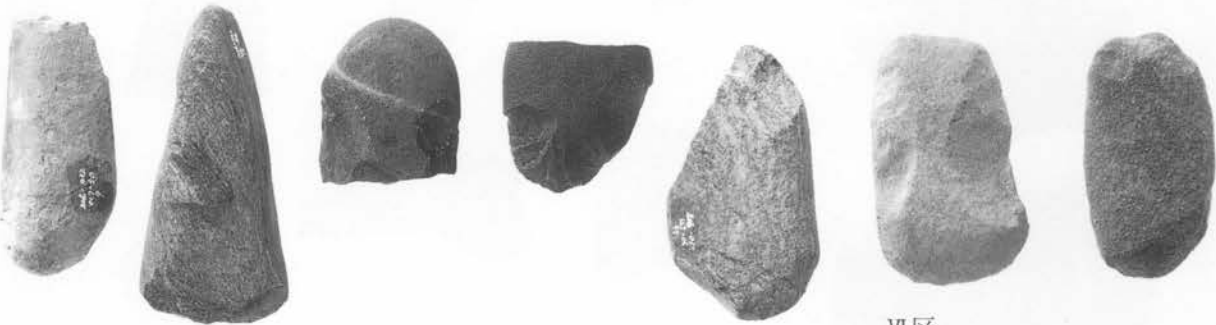
IV区



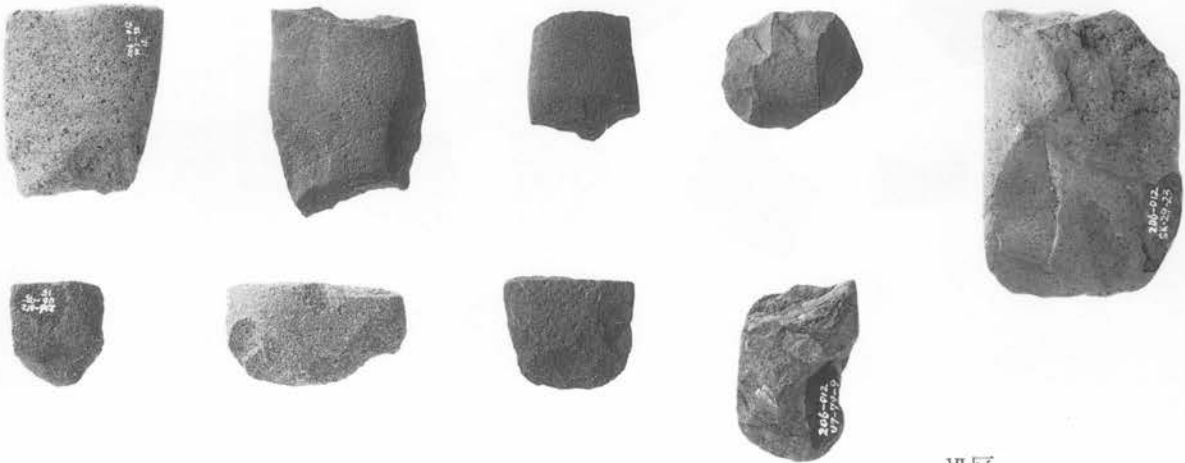
縄文時代石器 (11)、礫



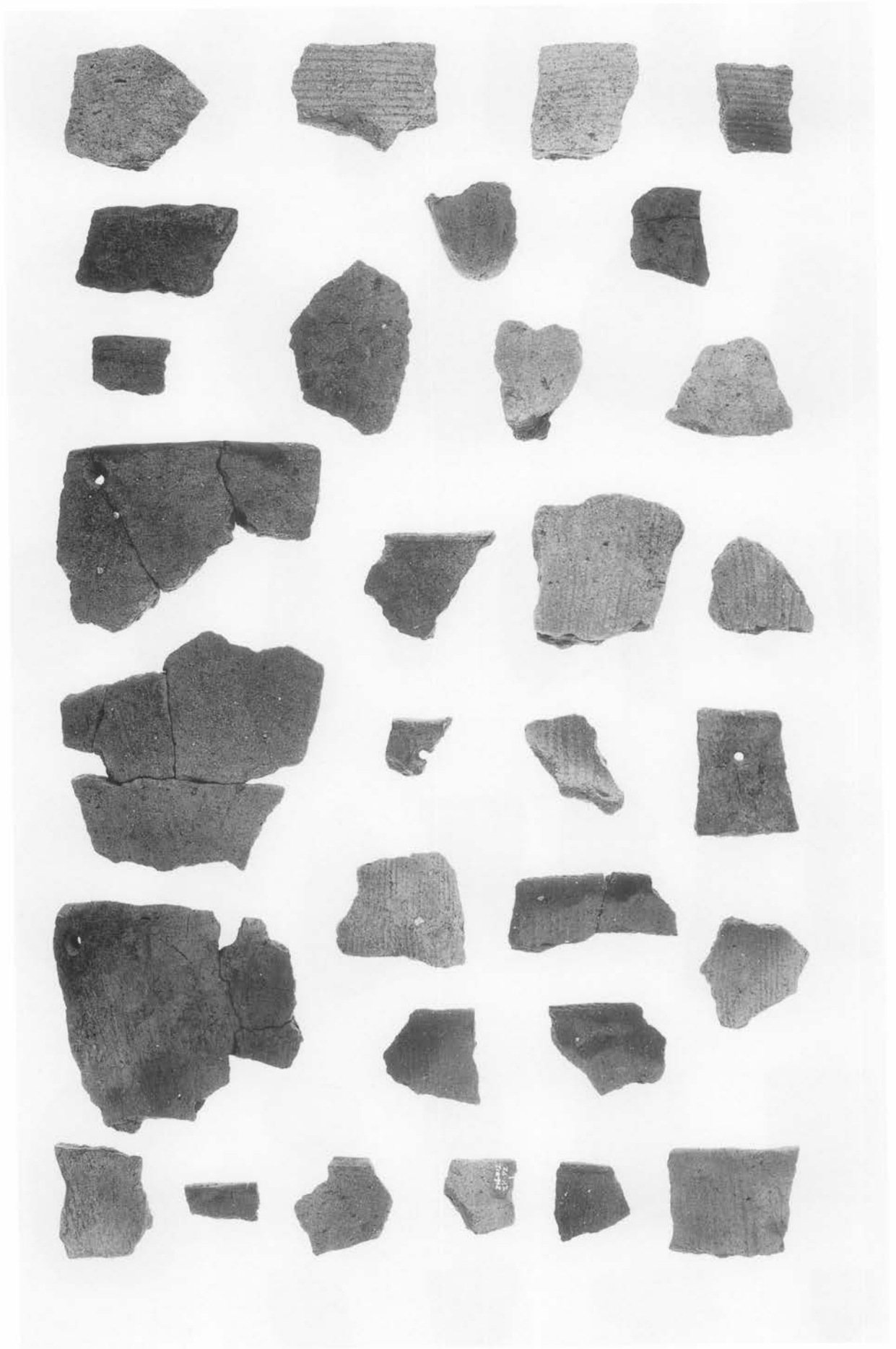
V区



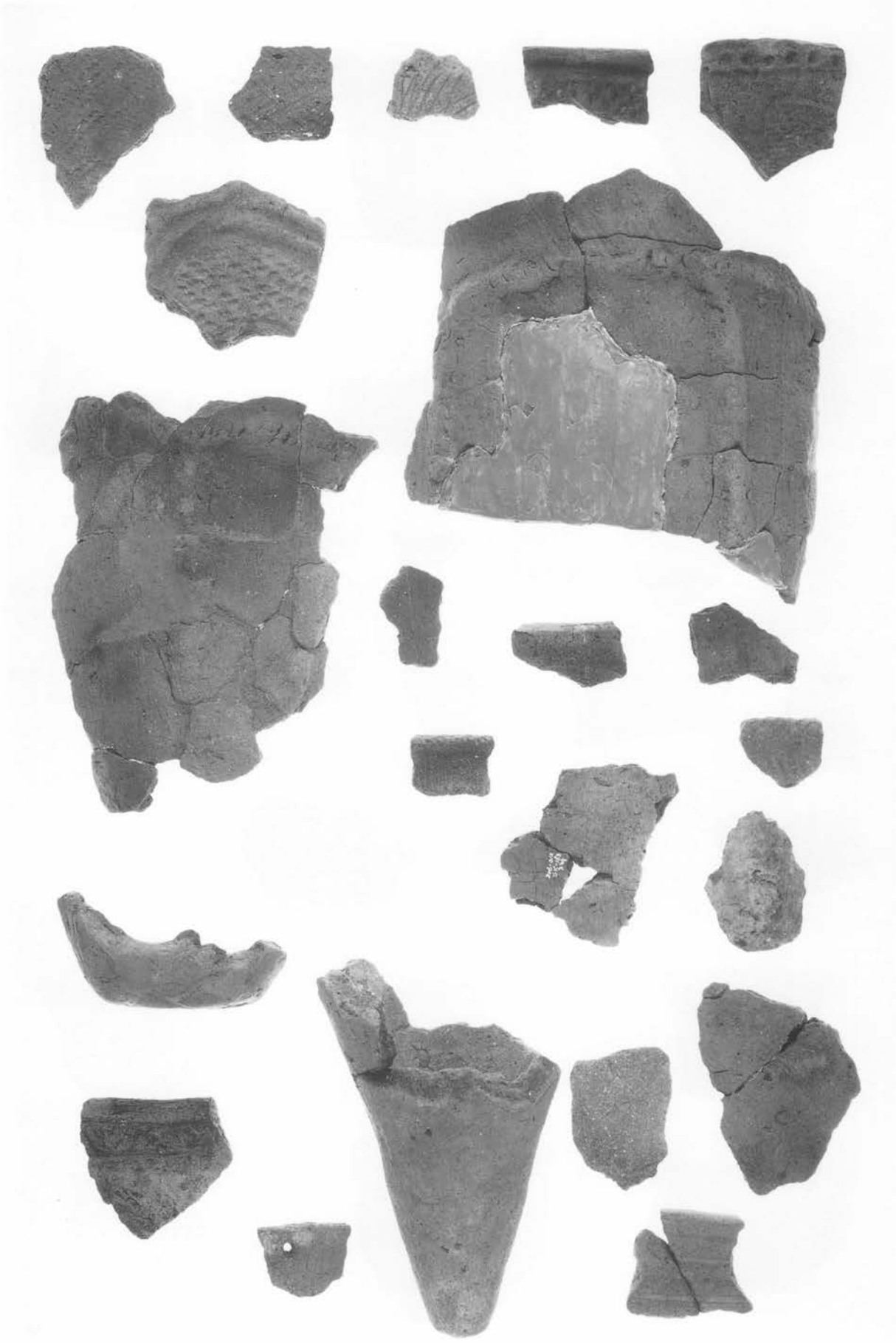
VI区



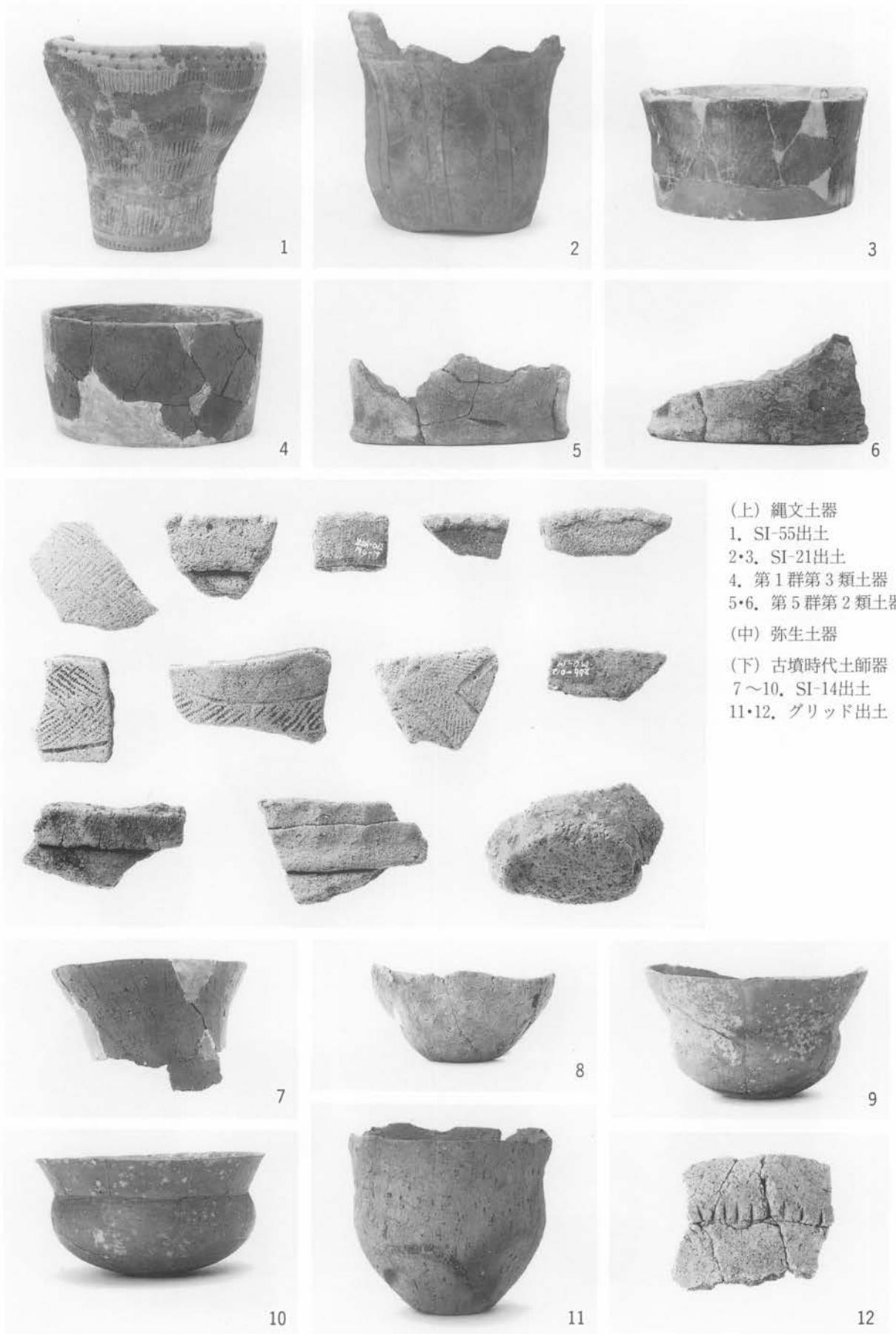
VI区



縄文時代遺構出土土器 (1)



縄文時代遺構出土土器 (2)



(上) 縄文土器
1. SI-55出土
2・3. SI-21出土
4. 第1群第3類土器
5・6. 第5群第2類土器
(中) 弥生土器
(下) 古墳時代土師器
7～10. SI-14出土
11・12. グリッド出土

縄文土器，弥生土器，古墳時代土師器



SI-1-1



SI-3-1



SI-4-5



SI-1-4



SI-3-3



SI-5-1



SI-2-1



SI-3-4



SI-5-1



SI-2-2



SI-3-7



SI-5-4



SI-2-4



SI-3-8



SI-2-5



SI-3-11



SI-2-7



SI-3-12



SI-5-5



SI-2-8



SI-4-1



SI-3-2

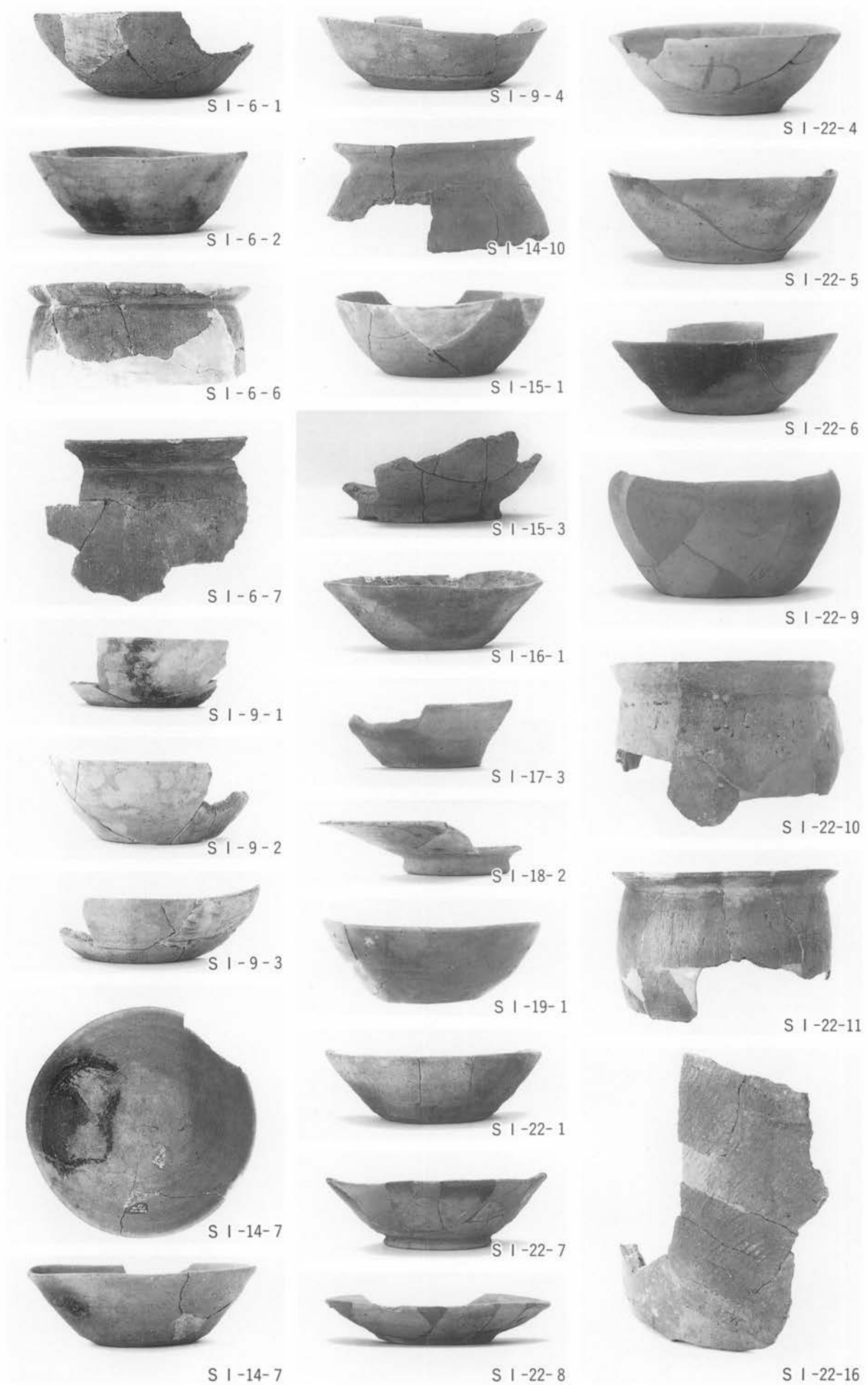


SI-4-2



SI-5-6

SI-1, SI-5出土土器



SI-6, SI-9, SI-14~SI-18, SI-22出土土器



S I-23-3



S I-24-3



S I-28-5



S I-23-5



S I-24-5



S I-30-8



S I-23-6



S I-24-7



S I-23-7



S I-24-10



S I-31-2



S I-23-8



S I-31-7



S I-24-11



S I-33-1



S I-23-9



S I-34-1



S I-24-12



S I-34-1



S I-23-15



S I-24-12



S I-34-10



S I-24-1



S I-25-1

S I-23~S I-25, S I-28, S I-30~S I-34出土土器



S I -34- 2



S I -34-12



S I -35- 1



S I -35- 3



S I -35- 2



S I -37- 2



S I -38- 1



S I -38- 1



S I -42- 2



S I -38- 2



S I -38- 2



S I -42- 1



S I -42- 3



S I -42- 5



S I -45- 1



S I -45- 1



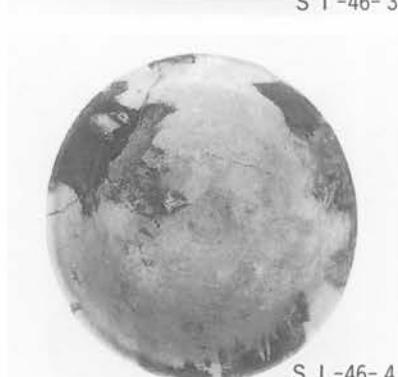
S I -46- 1



S I -46- 2



S I -46- 3



S I -46- 4



S I -46- 4



S I -46- 5



S I -46- 5



S I -46- 6



S I -48- 2

S I -34, S I -35, S I -37, S I -38, S I -42, S I -45, S I -46, S I -48出土土器



S I -48- 1



S I -48- 1



S I -48- 4



S I -48- 5



S I -48- 6



S I -48- 7



S I -48- 7



S I -48- 9



S I -48- 12



S I -48- 13



S I -48- 14



S I -48- 15



S I -48- 16



S I -50- 1



S I -50- 3



S I -50- 4



S I -52- 2



S I -54- 3



S I -54- 2



S I -54- 3



S I -54- 4



S I -54- 5



S I -57- 1



S I -57- 2



S I -57- 4



S I -57- 6



S I -57- 7



S I -57- 9

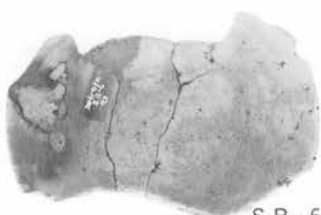


S I -57- 9

S I -48, S I -50, S I -52, S I -54, S I -57出土土器



SB-1-1



SB-6-1



SK-84-2



SB-2-1



SB-6-1



SK-84-2



SB-2-1



SB-6-5



SK-84-3



SB-2-2



SB-6-7



SK-84-8



SB-2-5



SB-6-8



SK-84-9



SB-3-3



SZ-1-1



SK-84-10



SB-3-4



SZ-1-2



SK-84-11



SB-4-7



SK-74-1



SK-123-3



SB-5-2



SB-6-3



SK-84-6



SK-123-4

SB-1~SB-6, SZ-1, SK-74, SK-84, SK-123出土土器



SK-123, SK-166, SK-172, SK-242, グリッド出土土器 (1)



G 4-10



G 4-86



J 6-19



I 5-1



H 3-83



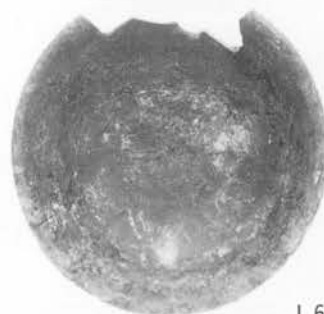
K 6-20



F 4-49



J 5-1



J 6-21



H 3-55



J 5-1



J 6-21



H 3-55



J 4-3



K 6-24



H 3-56



J 4-4



J 6-25



G 4-67



J 6-9



G 3-76



J 6-16



J 6-25



K 5-2



J 6-18



J 6-29

グリッド出土土器 (2)



J 4-34



J 6-39



J 4-44



J 6-50



J 6-62



K 5-78



J 4-80



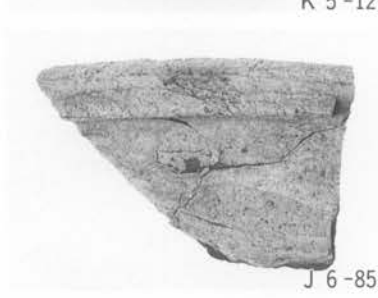
K 5-74



K 5-75



K 5-12



J 6-85



M 5-10



M 5-10



M 6



P 6-1



M 5-3



M 5-3



M 6-13



N 6-15



Q 6-5



O 7-6



P-5



Q 6-10



SB-2-13



H 4-53



K 6-20



SB-2-14



H 4-53



SB-2
H 4



G 5-52



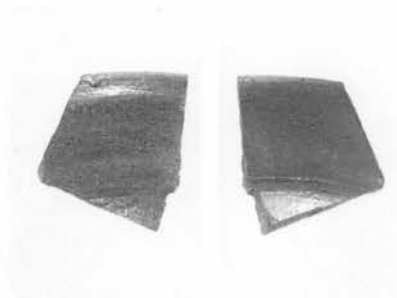
H 5-57



SK-96-1



SB-2-16



K 5-06



G 5-81



SI-42-6



H 3-82



I 4-82



J 5-123



SK-242-5



SI-57-10

グリッド出土遺物(4)



112

114



117



115



118

116



119



121



120



122



123



126



124



125



128



129



127



130



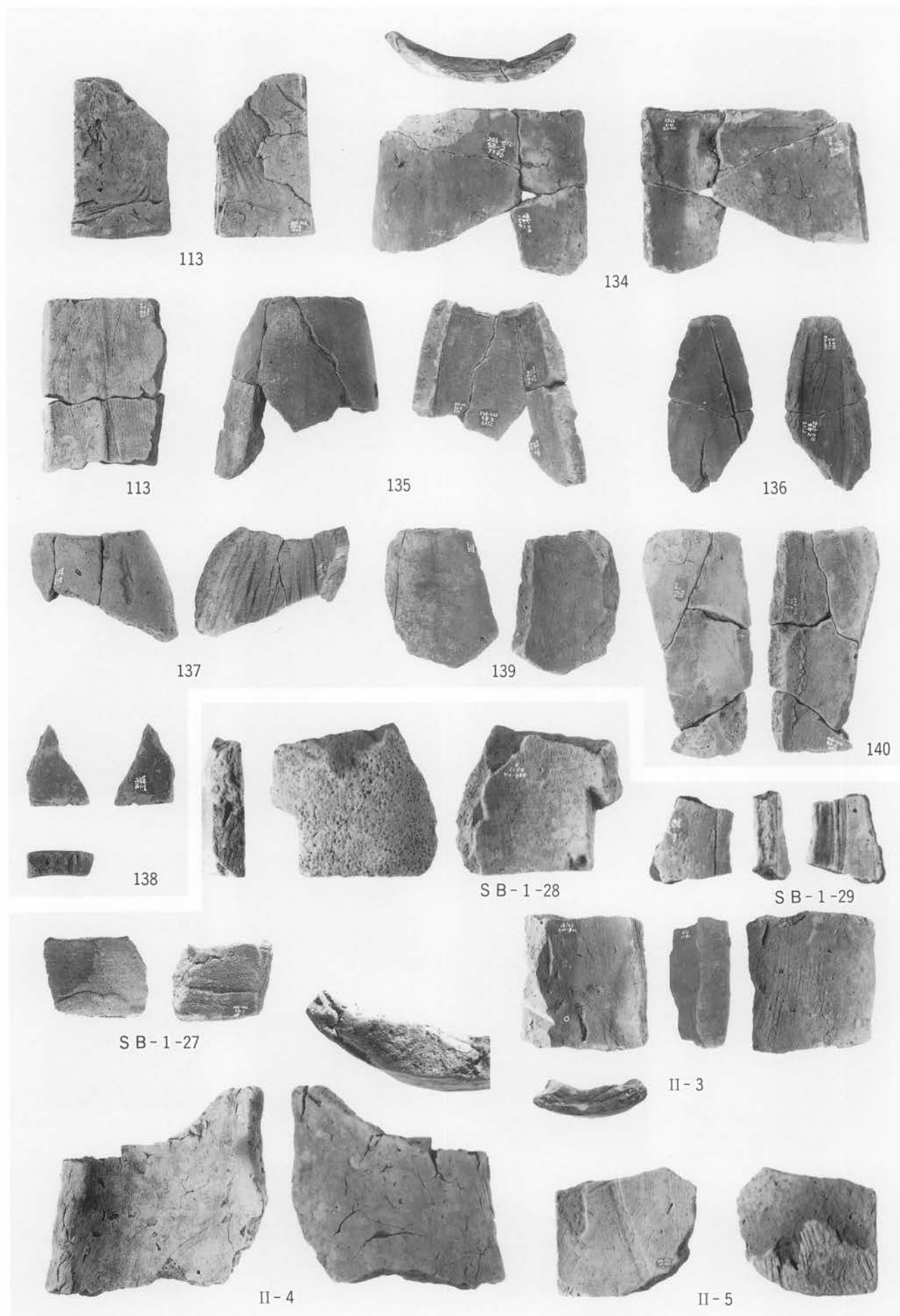
131



132



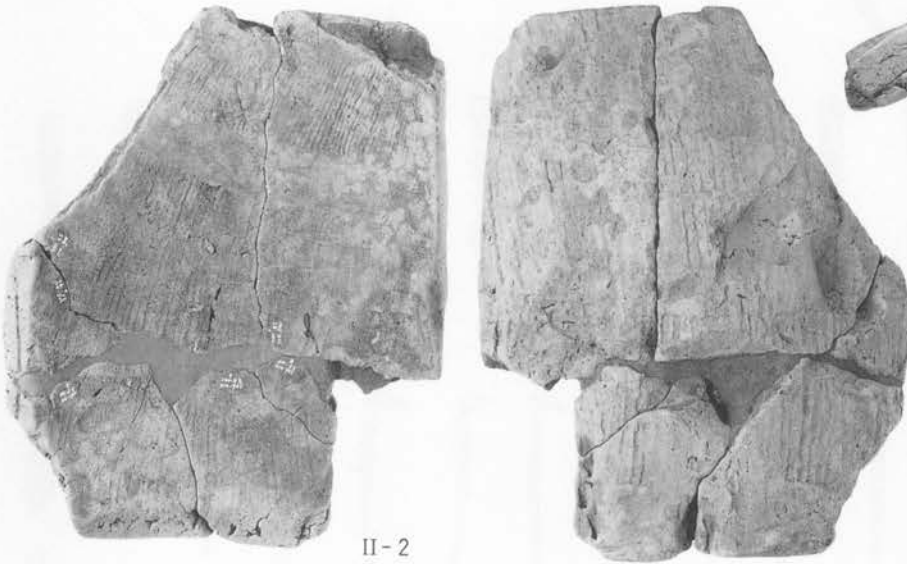
SB-2 出土瓦 (2)



上：SB-2 出土瓦 (3)，下：SB-1，II 区出土瓦 (1)



II-1



II-2



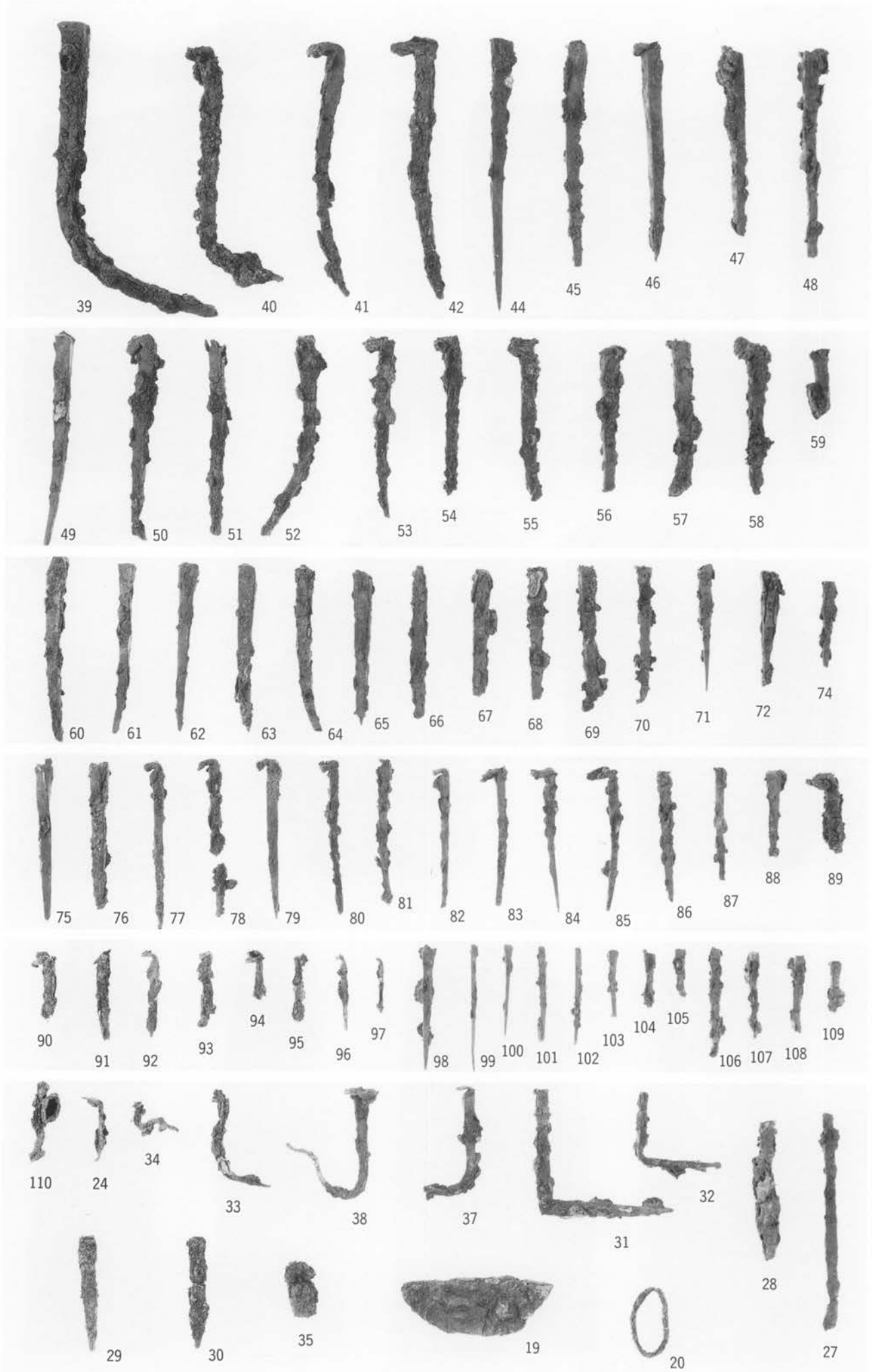
SX-2-3



SX-2-4



II区出土瓦 (2)、SX-2出土瓦



鉄製品(1):SB-2



S B-2-22



S B-2-36



27

S B-2-25



S B-2-26



S B-2-23



S B-2-21



S X-2



12



14



13



17



15



16



18



19



22



20



21



23



26

S B-3

S B-4



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



21



20



22



23



24



25



26



27



28



29



30

S B-6



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41

S K-166



S B-4-24



4



5



6



7

S B-5



S B-6 32



31



21



22

IV区



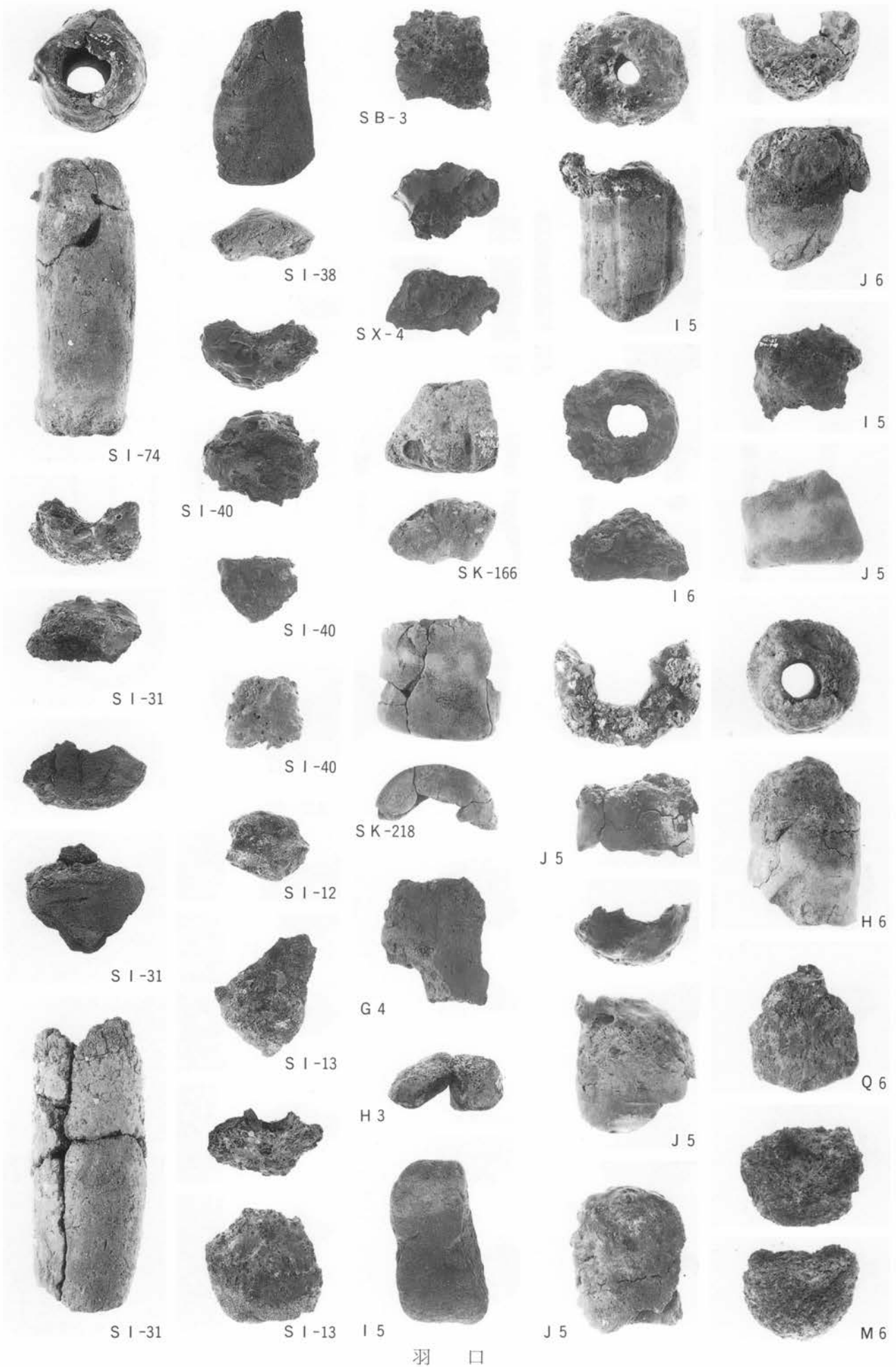
III区 6

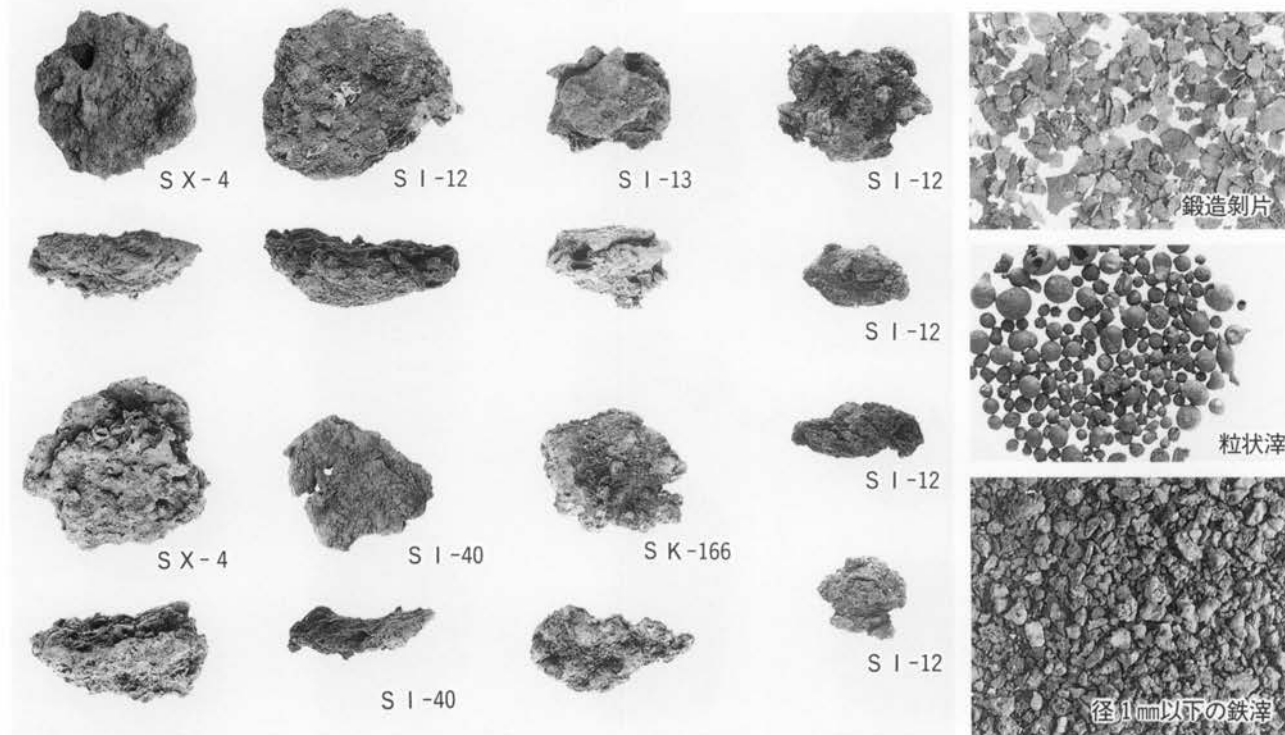
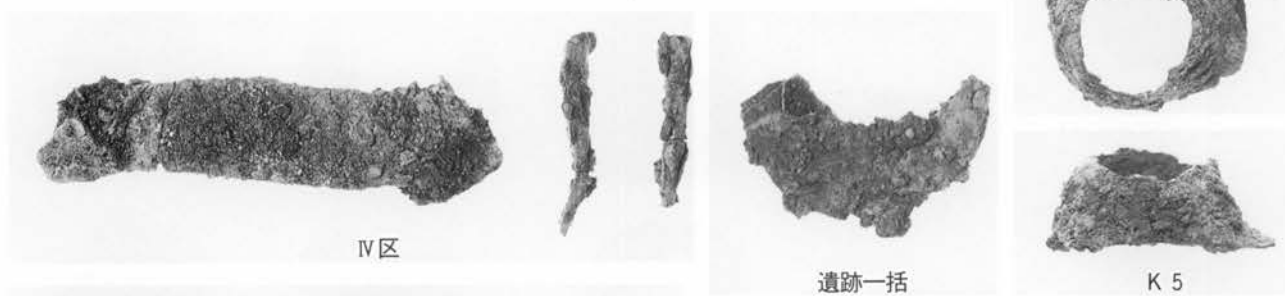


7

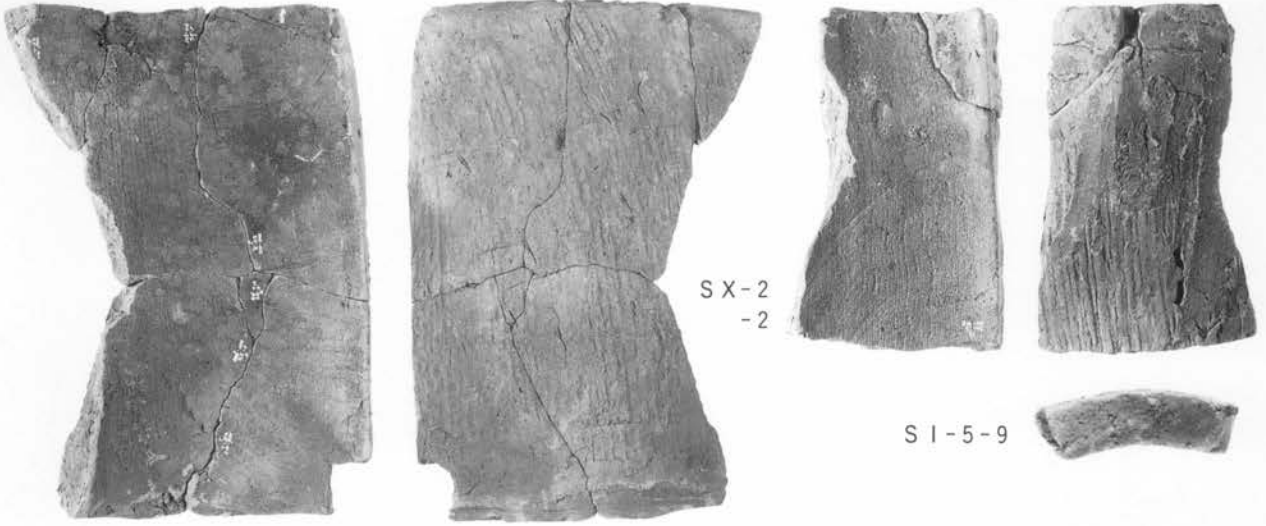


鉄製品(3)





鉄製品(上), 鉄滓(下)



SX-2
-2

SI-5-9

SX-2-2



SI-2-10

SI-17-11



SB-5 礎石



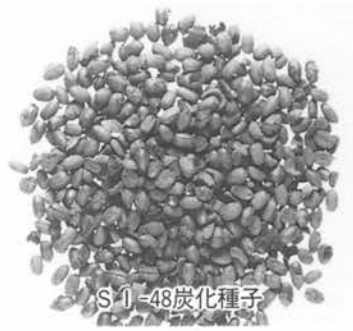
SI-54炭化材



SI-54炭化米



SK-129炭化材



SI-48炭化種子



SB-2 石材



SK-170炭化材



SZ-1 人骨片

瓦・その他の遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	やながわだむまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ2							
書名	矢那川ダム埋蔵文化財調査報告書2							
副書名	木更津市久野遺跡							
巻次	2							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第364集							
編著者名	小林清隆 新田浩三 糸原清 吉野健一							
編集機関	財団法人千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2				Tel 043-422-8811			
発行年月日	西暦 1999年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くの 久野	ちばけんきさらづし 千葉県木更津市 しもごおりまぐさくちあざ 下郡 錯綜地字 にしくのがほら 西久野ヶ原2,502	206	012	35度 00分 40秒	140度 00分 40秒	19941001～ 19951031	86,100㎡	矢那川ダム建設 に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
久野	集落	旧石器時代 縄文時代	竪穴住居跡 土坑 礫群	1基 145基 20地点	ナイフ形石器 縄文土器（早期燃糸文土器・沈線 文土器・押型文土器・前期末葉～中 期初頭土器・中期加曽利E式土 器）・石器	縄文時代早期、 前期末葉～中期 初頭の土器が礫 群に伴い、まと まった出土をして いる。加曽利 E式期の埋甕を 伴った住居跡が 検出されている。 石鏃製作跡が検 出されている。		
	集落跡 寺院跡 生産遺 跡 墓跡	弥生時代 古墳時代 奈良・平安 時代	竪穴住居跡 基壇建物跡 掘立柱建物跡 竪穴住居跡 竪穴状遺構 鍛冶関連遺構 井戸 土坑 火葬墓 方形周溝状遺構 溝	1軒 6基 4軒 32軒 10基 8基 1基 57基 1基 1基 1条	弥生土器 土師器・須恵器 土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉 陶器・墨書土器・瓦（平瓦・丸瓦・ 熨斗瓦）・鉄製品・羽口・鉄滓・「承 和昌寶」 キセル・鉄製品	瓦葺建物跡1棟 を中心とする複 数の基壇建物跡 で構成された伽 藍と、それに隣 接する竪穴住居 跡が検出されて いる。		
	散布地	近 世						

千葉県文化財センター調査報告第366集

矢那川ダム埋蔵文化財調査報告 2

－木更津市久野遺跡－

平成11年3月31日発行

編	集	財団法人	千葉県文化財センター
発	行	千葉県	県土木部
			千葉市中央区市場町1-1
		財団法人	千葉県文化財センター
			四街道市鹿渡809番地2
印	刷	株式会社	みつわ
			千葉市美浜区新港213-5
